

AC Gunsho ruiju
145
G855
1939
v.12

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和五年一月出版

羣書類從

第拾貳輯

東京

續群書類從完成會



AC
145
G855
1939
v. 12

群書類從第拾貳輯目次

和歌部歌合

卷第百八十

在民部卿行平家歌合

寛平御時后宮歌合

亭子院歌合

陽成院歌合

亭子院有心無心歌合

卷第百八十一

天德四年内裡歌合

堀川中納言兼通家歌合

一條大納言爲光家歌合

大納言齊信家歌合

賀陽院水閣歌合

源大納言師房家歌合

弘徽殿女御十番歌合

祐子内親王家歌合永承五年六月五日.....四一

皇后宮春秋歌合天喜四年四月晦日.....四四

備中守定綱朝臣家歌合治曆三年三月十五日式部丞基綱合之云々.....四五

祿子内親王家歌合治曆三年九月九日庚申.....四七

祿子内親王家歌合治曆四年五月五日.....四八

呂保殿歌合治曆四年十二月廿二日庚申.....五〇

卷第百八十二

氣多宮歌合延久四年三月十九日國司通宗朝臣於社頭合之.....五二

攝津守有綱家歌合承保二年八月廿日拾國合之七番.....五三

内裏歌合承曆二年四月廿八日.....五四

若狹守通宗朝臣女子達歌合應德三年三月十九日於七條亭.....五九

高陽院七番歌合寛治八年.....六一

東塔東谷歌合永長二年.....六七

山家五番歌合天仁三年四月晦日歌人不分左右當座探得之.....七〇

散位源廣綱朝臣歌合長治元年五月日.....七三

六條宰相家歌合永久四年六月四日於南六條泉亭行之.....七五

卷第百八十三

內大臣家歌合元永元年十月……………七九

內大臣殿歌合元永二年七月……………九一

關白內大臣家歌合保安二年九月十日兼日被下題……………九六

卷第百八十四

永緣奈良房歌合大治三年二月五日……………一〇六

西宮歌合大治三年八月廿九日於廣田社頭講之……………一一四

南宮歌合大治三年九月廿一日於門妙社合之……………一一八

住吉歌合大治三年九月廿八日參社頭合之……………一二〇

中宮亮顯輔家歌合長承三年九月十三日……………一二二

右衛門督家歌合久安五年六月廿八日於中御門亭合之……………一二九

太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合永曆元年七月……………一三六

卷第百八十五

中宮亮重家朝臣家歌合永萬二年……………一四二

太皇太后宮亮平經盛朝臣家歌合仁安二年八月……………一五九

卷第百八十六

左衛門督實國卿家歌合嘉應二年五月廿九日講之……………一七一

住吉社歌合嘉應二年十月九日……………一八一

建春門院北面歌合嘉應二年十月十六日……………一九九

卷第百八十七

廣田社歌合承安二年十月十七日……………二〇七

三井寺新羅社歌合承安三年八月十五夜……………二二五

右大臣家歌合安元元年十月十日……………二三三

卷第百八十八

別雷社歌合治承二年三月十五日……………二三九

廿二番歌合治承二年八月……………二五七

右大臣家歌合治承三年十月十八日……………二六二

卷第百八十九

若宮社歌合建久二年三月三日……………二七〇

民部卿家歌合建久六年正月廿日……………二八三

卷第百九十

御室撰歌合正治二年二月五日當座……………三〇五

仙洞十人歌合正治二年九月十二日……………三一五

卷第百九十一

老若五十首歌合建仁元年二月……………三二三

新宮撰歌合建仁元年三月廿九日作者隱名褒貶……………三四七

卷第百九十二

影供歌合建仁元年八月三日……………三五四

撰歌合建仁元年八月十五夜……………三六六

影供歌合建仁二年五月廿六日……………三七三

水無瀨釣殿當座六首歌合建仁二年六月……………三七八

卷第百九十三

水無瀨殿戀十五首歌合建仁二年九月十三夜……………三七九

水無瀨櫻宮十五番歌合建仁二年九月廿九日……………三九二

八幡若宮撰歌合建仁三年七月十五日……………三九五

卷第百九十四

北野宮歌合元久元年十一月十一日當座……………三九九

卿相待臣歌合建永元年七月廿五日……………四〇一

鴨御祖社歌合建永二年三月七日……………四〇六

賀茂別雷社歌合……………四〇八

歌合建曆三年八月十二日……………四一一

歌合建曆三年九月十三夜……………四一二

仙洞歌合建曆三年閏九月十九日……………四一四

卷第百九十五

禁裡歌合建保二年七月二日當座……………四一八

歌合建保二年八月十六日……………四二〇

月卿雲客妬歌合建保二年九月盡日……………四三二

四十五番歌合建保三年六月二日……………四三六

月卿雲客妬歌合建保三年六月十一日當座……………四四四

卷第百九十六

百番歌合建保四年閏六月九日……………四四六

歌合建保四年八月廿二日當座……………四六二

歌合建保四年八月廿四日當座……………四六七

卷第百九十七

歌合建保五年四月廿日……………四七三

右大將家歌合建保五年八月十五夜……………四七五

右大臣家歌合建保五年九月……………四七七

四十番歌合建保五年十月十九日……………四八二

歌合建保五年十一月四日……………四八八

歌合建保七年二月十一日當座卒爾……………四九七

歌合建保七年二月十二日當座……………五〇〇

卷第百九十八

石清水若宮歌合寬喜四年三月廿五日.....五〇四

光明峯寺攝政家歌合貞永元年七月.....五一二

歌合貞永元年八月十五夜.....五二八

卷第百九十九

遠嶋御歌合嘉禎二年七月.....五三四

河合社歌合寬元元年十一月十七日.....五四八

卷第二百

院御歌合後嵯峨院歌合
寶治二年.....五五四

卷第二百一

影供歌合建長三年九月十三夜.....五七八

卷第二百二

十五夜歌合文永二年八月.....六一一

龜山殿五首御歌合文永二年九月十三夜.....六二三

卷第二百三

攝政家月十首歌合建治元年九月十三日.....六三八

正應二年卅番歌合.....六五三

卷第二百四

十五夜歌合永仁五年八月十五日.....六六〇

歌合永仁五年當座.....六六四

新名所繪歌合正安三年.....六六八

歌合正安四年六月十一日當座.....六七九

仙洞五十番歌合乾元二年四月廿九日.....六八〇

歌合乾元二年五月四日.....六八八

群書類從第拾貳輯目次終

群書類從卷第百八十

檢校保己一集

和歌部三十五歌合一

在民部卿家歌合

行本

左には山のかたを洲濱につくり

右にはあれたるやとのかたをすはまにつくりて

ありける

一番郭公

左勝

夏ふかき山里なれと郭公聲はしけくもきこえさりけり

右

あれにける宿のゝすゑは高けれと山時鳥まれに鳴なり

二番

左

誰とかはとはにかたらふ郭公まつ我きくにいはてわたるは

右勝

おほつかな音羽の山の時鳥さすかにいはぬことなたのためそ

三番

左

なくたひとおとろかるらむ郭公とふ一聲にありときゝつゝ

右勝

しらねともこたへやはする時鳥もさつひとゝふ聲をあはれと

四番

左勝

新助 住里はしのふの山のほとゝきすこのした聲そしるへなりける

右

月夜にはをくらの山の郭公聲もかくれぬ物にそ有ける

五番

左持

ほのかなる聲をすてゝば郭公鳴つるかたをまつそとむる

右

さよ更てふるの都のほとゝきすかへる雲ゐの聲をさかせよ

六番

左勝

玉露 更る夜におきてまたねは時鳥はつかなる音もいかてきかまし

右

同 ほとゝきす雲ゐの聲をきく人は心もそらになりそしにける

七番

左勝

またせつる程は久しきほとゝきすあかて別れむのちの戀しさ

右

小夜ふけて誰かつつけつる郭公まつにたかはぬ聲のきこゆる

八番

左

ほかにまた待人あれはやほとゝきす心のとかに聲のきこえぬ

右

ふた聲ときかてやゝまん時鳥あかつきちかくなりもしぬらん

九番

左勝

あけぬまにはこねの山の郭公ふた聲とたに鳴わたるらむ

〔右勝〕

十番

左勝

我宿に聲^はおし^もみそほとゝきすかよふ千里のみちはてしそは

右

ほとゝきす今宵とまりてかた岡のあしたの原に歸りやはせぬ

十一番あはぬ戀

左

世中の常のことゝやおもふ覽なみたもことにわきていつるは

〔戀イ〕
右勝

あふことそおしからすしていのちを^もあはぬに我^{そへ}よかつすな

十二番

左勝

あひかたみめより涙はなかるれと戀をはけたぬ物にさりける

右

夢にたに見ぬ人こひにもゆる身の煙は空にみちやしぬらん

寛平御時后宮歌合

春歌二十番

左

紀友則

花のかを風のたよりにたくへてそ驚さそふしるへにはやる

右

源當純

谷かせにとくる氷のひまことにうちいつる波や春の初花

左

素性

散と見てあるへきものを梅花うたて匂ひの袖にとまれる

右

藤原興風

聲たえずなけや鶯一とせに二たひとたにくへき春かは

左

梅のはなしるきかならてうつろはゝ雪降やまぬ春とこそ見め

右

春の日に霞わけつゝとふ鴈の見えみえすみ雲かくれ行

左

素性

花の木も今はほりうへし春立はうつろふ色に人ならひけり

右

春の野に若菜つまむとこし我を散かふ花に道はまとひぬ

左

鶯はむへもなくらん花さくら咲とみしまにうつろひにけり

右

興風

はる霞たなひく野邊のわか菜なり見てし哉人もつむやと

左

浅みとり野邊の霞はつゝめともこほれて匂ふはな櫻かな

右

春たゝは花をみむてふ心こそ野邊の霞とともにたちぬれ

左

みよし野の山に咲たるさくら花雪かとのみそあやまたれける

右

年のうちはみな春なからはてなゝむ花を見てたに心やるへく

左

春かすみあみにはりこめ花ちらはうつろひぬへし鶯とめよ

右

春雨の色はこくしもみえなくに野邊のみとりをいかてそむ覽

左

はるなれと花もにほはぬ山里は物うかる音にうくひすそ鳴

右

咲花は千種なからにあたなれと誰かは春をうらみはてたる

左

水のうへにあやをりみたる春雨や山のみとりをなへてそむ覽

右

色ふかくみる野邊たにも常ならは春は行ともかたみならまし

左

駒なへてめも春の野にましりなむ若菜摘つる人は有やと

右

鶯の谷よりいつる聲なくは春くることを誰かつけまし

左

春なから年はくれなん散花をおしと鳴なる鶯のこゑ

右

大衆をおほふはかりの袖もかな春咲花を風にまかせし

左

霞立春の山邊にさくら花あかす散とやうくひすの鳴

右

あまの原春はことにも見ゆる哉雲のたてるも色こかりけり

左

まきもくのひはらの霞たちかへりみれ共花のおとろかれつゝ

右

白妙の浪路わけてや春はくる風吹からにはなも咲けり

左

かすみたつ春の山邊は遠けれと吹來る風は花の香そする

右

散はなのまててふことをきかませは春降雪とふらせさらし

左

かゝる時あらしと思へは一とせをすへては春に散をなすよしも哉

右

まててふにとまらぬ物としりなからしゐてそおしき春の別を

左

梅花香をはとゝめて色をのみ年ふる人の袖にそむらむ

右

あかすして過行春の人ならはとくかへりこといはまし物を

左

梅かゝを袖に移してとゝめては春はすくともかたみならまし

右

行春の跡たにありと見ましかは野へのまに／＼とめまし物を

左

春霞色の千くさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

興風

右

日くるれはかつちる花をあたらしみ春の形見に摘そいれつる

左

常盤なる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

右

くる春にあはむことこそかたからめ過行方にをくれすも哉

夏歌二十番

左

蟬のこゑ聞はかなしな夏衣うすくや人のならむと思へは

右

にほひつゝ散にし花をおもほゆる夏はみとりの葉のみ茂りて

左

空蟬の侘しきものを夏草の露にかゝれる身にこそ有けれ

右

夏の夜の月は程なく明なからあしたの間をそかこちよせける

左

宵の間ははかなくみゆる夏虫にまとひまされる戀もする哉

右

夏の夜はふすかとすれは郭公鳴一こゑにあくるしのゝめ

左

かりそめのみや頼まれぬ夏の目をなと空蟬のなきくらしつる

右

はかもなき夏のくさ葉になく露を命とたのむ虫のはかなさ

左

古郷をおもひやれとも郭公(こそその如くになれそ鳴なる)

右

夏の夜の霜やをけるとみるまでに荒たる宿を照す月かけ

左

夏の風我袂にしつゝまれはおもはむ人のつとにしてまし

右

なつ草のしけき思ひは蚊遣火の下にのみこそもえ渡りけれ

左

草しけみ下葉かれ行夏の日もわくとしわけは袖やひちなん

右

五月雨に物思ひをれはほとゝきす夜ふかく鳴ていつち行覽

左

なつの夜の露なとゝめそ蓮葉のまことの玉と成しはてすは

右

夏山にこひしき人や入にけむ聲ふりたてゝ鳴郭公

左

吹風の我宿にくる夏の夜は月の影こそすゝしかりけれ

右

ゆふされは螢よりけにもゆるとも光みえねは人そつれなき

左

夏の目を暮し侘ぬる(蟬の)まにわかなきそふる聲はきこゆや

右

恨つゝとゝむる人のなければや山時鳥うかれてゝなく

左

なつの夜は水やまされる天河なかるゝ月のかけもとゝめぬ

右

去年の夏鳴ふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

〔歌關〕

左

右

夏虫にあらぬ我身のつれもなき人をおもひにもゆる比かな

左

夏の夜のまつはもそよと吹風はいつれか雨の聲にかはれる

右

夜やくらき道やまとへる郭公我宿をしもすきかてにする

左

いつの間に花かれにけむ長くたにありせは夏の影とみましを

右

幾千たひ鳴かへるらむ足引の山ほとゝきす聲はわすれて

左

夏の日を天雲しはしかくさなむぬるほともなく明る夜にせん

右

郭公なきつる夏の山邊にはくつていたさぬ人やすむらむ

左

なつの日のくるゝもしらす鳴蟬をとひもしてしか何事かうき

右

あやめ草いくらの五月あひくらむ來る年毎にわかく見ゆらむ

左

をしなへて五月のそらを見渡せは草葉も水もみとり成けり

右

くるゝかとみれば明ぬる夏の夜をあかすとや鳴山郭公

左

夏の月ひかりおします照時はなかるゝ水にかけろふそたつ

右

琴の音にひゝきかよへる松風はしらへても鳴蟬の聲かな

左

夏草も夜の間は露にいこふらむ常にこかるゝ我そかなしき

右

なかもつゝ人まつおりによふこ鳥いつかたへとか立歸りなく

秋歌二十番

左

あき風に初鴈かねそ響なるたか玉章をかけて來つらむ

右

浦ちかくたつ秋霧はもしほやく煙とのみそ見え渡りける

左

我のみや哀とおもはむきりくす鳴夕かけのやまとなてしこ

右

秋の野の草はいとゝはみえなくにをく白露の玉とつらなる

左

おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲きく時そ秋はかなしき

右

わかために來る秋にしもあらなくに虫の音聞は先そかなしき

左

日くらしに秋の野山をわけくれは心にもあらぬ錦をそきる

右

秋といへは天雲までもえにしを空さへしるくなとか見ゆ覽

左

あきの野の草のたもとか花薄ほに出てまねく袖とみゆらん

在原棟梁

右

山の井みちいは水なきことそみえわたる秋の紅葉のちりてかくせは

左

小野美材

女郎花匂へる野邊に宿りせばあやなくあたの名をやたちなん

右

秋風にさそはれ來つる鴈かねの雲ゐはるかにけふそ聞ゆる

左

白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける

右

いつのまに秋穂たるらむ草と見し程いくか共へたゝらなくに

左

鴈のねは風にきほひてわたれとも我待人のことつてそなき

右

大空をとりかへすとも見えなくにほしかとみゆる秋の草哉

左

在原棟梁

秋風にほころひぬらむ藤はかまつゝりさせてふきりゝす鳴

右

秋の夜のあめときこえて降つるは風に散つる紅葉なりけり

左

ちらねともかねてそおしき紅葉はゝ今は限りの色とみつれば

右

白波に秋の木のはのうかへるはあまのなかせる舟かとそ見る

左

秋のよのあまてる月の光にはをく白露を玉とこそ見れ

右

あきのゝにをける露をはひとりぬる我涙とも思ひしれかし

左

鴈金は風をさむみやはたをりめくたまく音のきりゝとする

右

大江千里

うへし時花まちとをにありし菊うつろふ秋にあはんとやみし

左

白露の染いたす萩の下紅葉衣にうつすあきは來にけり

右

風寒み啼秋虫のなみたこそ草に色とる露とをくらめ

左

はなすゝきそよともすれは秋風の吹かとそきく衣なき身は

右

音にきく花見にくれは秋野の〔道まよふまで霧そ立ぬる音方〕

左

鴈かねにおとろく秋のよを寒み虫のをりたす衣をそきる

右

秋風はたかたむけとか紅葉はをぬさにきりつゝ吹ちらすらん

左

唐ころもほせと袂の露けきは我身の秋になれはなりけり

右

秋の露色のことゝをけはこそ山も紅葉も千くさ成らめ

左

あき風に聲をほにあげて行舟はあまの戸わたる鴈にきりける

右

藤原菅根朝臣

紅葉はの散こむ時は袖にうけむ土におちなはきすもこそつけ

左

秋のせみさむき聲にそきこゆる木のはの衣を風やぬきつる

右 あきの夜の月の影こそ木の間より〔下句欠〕

左 秋の月草むらわかすてらせはややとせる露を玉とみすらん

右 なをさりに秋のみやまに入ぬれは錦のいろの衣をこそきれ

左 あき山に戀する鹿の聲たてゝ鳴そしぬへき君かこぬよは

右 藤原興風

契りけむ心そつらき七夕の年にひとたひあふは逢かは

躬恒

年ことにあふとはすれと七夕のぬるよの敷そすくなかりける

冬歌二十番

左 かきくもりあられふりしけ白玉をしける庭とも人の見るかに

右 天河ふゆは空までこほるらし石間に瀧つ音たにもせず

左 友則

篠のはにをく霜よりもひとりぬる我衣手そさえまさりける

右

流れ行水こほりぬる冬さへや猶うき草の跡はさためぬ

左

雪ふりて年のくれゆく時にこそ終にもみちぬ松も見えけれ

右

我宿は雪ふる野邊に道もなしいつこはかとか人のとめこむ

左 神無月しくれふるらしきほ山の正木のかつら色まさりゆく

右 冬くれは梅に雪こそ降かゝれいつれのえをか花とはおらむ

左 ほりてをきし池は鏡とこほれとも影にもみえぬ年そ經にける

右 降雪のつもれる峯は白雲のたちもさはかすをるかそみる

左 忠岑

みよしのゝ山のしら雪ふみ分て入にしひとのをとつれもせぬ

右

吹風は色も見えねと冬くれはひとりぬるよの身にそしみける

左 霜かれの枝となわひそ白雪を花にやとひてみれともあかす

右

嵐ふく山下里にふる雪はとくむめの花咲かとそ見る

左

雪のみそ枝にふりしき花もはもいにけむ方もみえずも有哉

右

白雪の八重ふりしける歸る山かへるゝも老にけるかな

左

草も木も枯行冬の宿なれは雪ならすしてとふ人そなき

是則

右

ふゆさむみものもにかくるます鏡とくも我なむ老まとふへく

左

ちらねともかれてそおしき紅葉は、今は限りの色と見つれば

右

白雲のおりゐる宿とみえつるは降くる雪のとけぬ成けり

左

霜のうへに跡ふみつくる濱千鳥行衛もなしと鳴のみそふる

右

なみた川みなくはかりの淵はあれと氷とけねはかけも宿らぬ

左

浦ちかくふり來る雪は白波の末の松山こすかとそ見る

右

〔歌關〕

左

〔歌關〕

右

ひかりまつ枝にかゝれる雪をこそ冬の花とはいふへかりけれ

左

乙女子かひかけのうへに降雪は花のまかふにいつれたかへり

右

かきくらし散花とのみふる雪は冬のみやこの雲のちるか

左

足引の山のかけはし冬くれはこほりの上をよきそかねつる

右

ふゆくれば雪ふりつもる高きみね立白雲に見えまかふ哉

左

雪のうちのみ山から社おいはくれかしらの白く成をまつみよ

右

松の上にかゝれる雪は餘所にして時まとはせる花とこそみれ

左

月夜には花とそ見ゆる竹のうへに降しく雪を誰かはらはむ

右

しら雪を分てわかるゝかたみには袖に涙のこぼるなりけり

左

白露そ霜となりける冬のよはあまの河（さへ水こほりけり）

右

冬の海に降いる雪やそこにゐて春たつ浪の花ときくらん

左

ふゝみあへす消なむ雪を冬の日の花と見ればや鳥のとふらん

右

〔歌關〕

戀歌二十番

左

紀友則

河の瀬になひくたま藻のみかくれて人にしられぬ戀もする哉

右

一たひも戀しと思ふにくるしきは心そちゝにくたくへらなる

左

かけてればちゝの黄金も数しりぬなと我戀のあふはかりなき

右

君こふる涙の床にみちぬれば身をつくしとそ我はなりぬる

興 風

左

白玉のきえて涙と成ぬれは戀しきかけを袖にこそ見れ

右

人を見ておもふ事たに有ものを空にこふるそはかなかりける

左

くれなゐの色にはいてしかくれぬの下に通ひて戀はしぬとも

右

契りけむ心そつらき織女の年に一たひあふはあふかは

左

つれもなき人をこふとて山ひこの答ふるまでも歎きつる哉

右

我戀は深山かくれの草なれやしけさまされと知人のなき

左

おもひにはあふ空さへやもえわたる朝たつ雲を煙とはして

右

明ぬとて歸る道にはこきたれて雨もなみたもふりそほちつゝ

左

おもひ侘けふりは空に立ぬれとわりなくもなき戀のしるしか

右

人をおもふ心のおきは身をそやく煙たつとは見えぬものから

左

あかすして君を戀つる涙にそうきみしつみゝやせわたりける

右

鹿嶋なるつくまの神のつくゝと我身ひとつに戀をつみつる

左

わりなくも寐ても覺ても戀しき心をいつちやはわすれん

右

戀侘てうちぬる中に行かよふ夢のたゝちはうつゝなるらむ

左

わひぬれはしるて忘れんと思へとも夢てふ物そ人たのめなる

右

いとはれて今は限りとしりにしを更にむかしの戀しかるらん

左

しぬる命いきもやすると心みに玉のを計あはむといはなむ

右

あかすして別れしよひのなみた川よとみもなくもたきつ心か

左

思ひつゝひるはかくてもなくさめつ夜こそ涙つきすなかるゝ

右

限りなく深きおもひを忍ふれば身を殺すにをとらさりけり

左

ひとりぬる身の衣てはうみなれやみるに涙そまなくよせけれ

右

年をへてもゆてふふしの山よりもあはぬ思ひは我そまされる

左

つれなきを今は戀しとおもへとも心よはくもおつるなみたか

右

侘わたる我身のうらとなれゝはや戀しき事のしき波にたつ

左

ひとりぬる我手枕を晝はほし夜はぬらして幾代へぬらん

右

ほのに見し人に思ひをつけそめて心からこそしたにこかるれ

敏行朝臣

興 風

興 風

小野美材

敏行朝臣

菅野のたゝおむ

左

佳吉のきしによる波夜さへや夢のかよひ路人めよくらむ

右

夕附夜おほろに人を見てしより天雲はれぬ心地こそすれ

左

あさかけに我身はなりぬ白雲のたえてきこえぬ人をこふとて

右

近けれと人めくをもるころは雲井はるけき身とやなりなん

左

戀しきに侘てたましぬまとひなは空しきからの名にや残らむ

右

あかすして今朝のかへりち思ほえす心を一つをきてこしかは

左

人しれすしたに流るゝ涙川せきとゝめなむかけは見ゆると

右

もえもあばぬこなたかなたの思ひ哉涙の河の中にゆけはか

以下闕

貫之

亭子院歌合

延喜十三年三月十三日

左のとうには女六の宮かたのみこ。御せうとなかつかさの四のみや大さう。五宮中納言藤原定方朝臣。左衛門督なかみつ(有定イ)の朝臣。讀人藤原興風。凡河内躬恒。方人むねゆき。よしかせとなむ。右とう女七宮かたのみこ。御せうとのかむつけの八宮せいわのさたかす。中納言源のほる。右兵衛督清貫朝臣。歌讀是則。貫之。かたひとかねみの大君。きよみちのあそむ。みかとの御装束ひはた色のおほむそに。そら色の御はかま。をとこ女。右はあか色にさくらかさね。左はあをいろにやなきかさね。左は歌讀かすさしのわらは。れいのあか色に。うすゝりのれうのうへのはかま。右はあないろのれうのうへのはかま。方々のみこは。あかい。あを。あを。みなたてまつりたり。かくて左のそうは。みのときはかりにたてまつる。かたのみやたち。みなさうそくめてたうして。すはまたてまつる。まうちきみよりかけり。樂はわうしきてうにて。いせのうみといふ歌をあそふ。右のすはまは。むまのときはかりにたてまつる。おほきなるわらはよたり。みつらゆひて。絲鞋はきてかけり。樂はそうてうにて。たけかはといふ歌を。いとしのひやかにあそひて。方宮たちもてはやしてまいりたまふ。左のそうは。さくらのえたにつけて。中務のみこもたまへり。右のはやまふきにつけて。かむつけのみこもたまへり。うたはしたのはこにちひさくて。おなしこといれたり。かむたちめば。はしのひたりみきりに。みなわかれてさふらひたまふ。女藏人四人つゝさふらはせたまふ。方のかんしは。女みな一尺五寸ばかりまきあけて。歌よまむとするに。うへ

のよま(おほい)せたまふ。この歌をたれか見きゝはやして。こ
とはらむとする。たゝふさやさふらふとおほせ給。さふらは
すともうせは。さう／＼しからせたまふ。右ばかりとも。
かちの御歌ふたつを。くちにて出かたれは。みきひとつまけ
にたり。されとうたはもちともにそしける。うたかはす。三
のうたは山につけたり。うくひすの歌は花につけたり。ほと
ときすの歌は卯花につけたり。よるのはうふねしてかゝり
にいらてもたせたり。左方の宮にみきのかゝりたてまつれ
給ひける。しろかねのつほのおほきなるふたつに。ちむあは
せ。たき物をいれたり。かたの人々にみなさうそく給ひけり。

題者 二月 三月 四月なり

一番初春甘首

左持

伊勢

右

是則

青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそみる

左持

躬恒

さかさらむ物とはなしに櫻花おもかけにのみまたき見ゆらん

右

興

風或本貫之

山櫻さきぬるときはつねよりも峯のしら雲たちまさりけり
左はらむふたつあり右は山さくらまた有とてちに
なす

左持

躬恒

きつゝのみ鳴うくひすのふる里は散にし梅の花にそありける

右

是則

三千歳になるといふ桃は今年より花さく春になりそしにける
年といふことをよといへりとして右まく

左持

伊勢

ほともなく散なむ物を櫻花こゝらひさしくまたせつる哉

右

是則

いそのかみふるのやしろの櫻花こそみし春の色やのこれる
こそをのみにてことしの心なしとてまく

左持

興

風うちの御とあ
る本もあり

たのまれね花の心と思へはやちらぬさきよりうくひすの鳴

右

貫之

春かすみたちしかくせは櫻はな人しれすこそ散ぬへらなれ
うちの御歌なりとて左かつ

左

上御製

はる風のふかぬよにたにあらませは心のとかに花は見てまし

右

貫之

散ぬとてありとたのまむ櫻花春はすきぬと我にきかすな
これもかれもなをありとてちぎさたむ

左

躬恒

或本云内御歌縁勝也右歌ナラマリケリトテマケス

我こゝろ春の山邊にあくかれてなか／＼し日をけへも暮しつ

右持

貫之

櫻ちるこのした風はさむからて空にしられぬ雪そふりける

左歌はなか／＼しといふ事にくしくらしとめてか
たすへたるやうにてつふやけりとてまくるなり

左持

躬恒

花櫻いかてかひとのおりてみぬ後にそまさる色もいてこめ

花の色をうつしとゝめよかゝみ山春のくれなんのちもみるへくイより後のかけやみゆると

うたゝれの夢にや有らん櫻花はかなくみてそやみぬへらなる

めに見えて風はふけとも青柳のなひくかたにそ花は散ける

左持

興 風

右

興 風

ふりはへて花みにくれは小倉山いとゝかすみの立かくすらん

あし引の山ふきの花散にけりゐてのかはつは今や鳴らん

右

躬 恒

左

興 風

いもやすくねられさりけり春のよは花の散のみ夢にみえつゝ

散て行かたをたにみむ春霞花のあたりにたちもやらなん

左

躬 恒

右持或本左持

興 風

ふる里にかすみとひわけ行鴈はたひの空にや春をすくさむ

澤水にかはつなくなり山吹のうつろふ影やそこに見ゆらん

右

躬 恒

左持

興 風

ちる花をぬきしとめねは青柳の糸はよるともかひなかりける

あかすして過行かたを呼子鳥よひかへしつゝきてもつけなむ

右

躬 恒

右

興 風

季春廿首

左持

興 風

見てかへる心あかねはさくら花さけるあたりに宿やからまし

武藏野にいろやかよへる藤の花若むらさきにそめて見ゆらん

右

頼 基或反則

右

兼覽王

しのゝめにおきてみつれはさくら花また夜こめても散にける哉

風ふけはおもほゆるかな佳の江のきしの藤なみ今やさくらん

右

躬 恒

左持

興 風

するゝはなをみけむとあ□へいふにやとのたま

かけてのみ見つゝそしのお紫にいとほ染しふちの花そも

右

是 則

左持

興 風

はすれはさたかたのおそんのほるのあそむのよと

みなそこにしつめるふちの影みれば春の深くもなりける哉

左持

躬 恒

右

元 方貴之とも

こすかたにとおほゆれとそうしければ御こきよに

吹風におしみもあへす散ときはやへ山ふきの色もかひなし

右

是 則

右

元 方貴之とも

うつゝをはさらにもいはし櫻花ゆめにも散とみえはうからん

おしめともたちもとまらて行春をならしの山のせきもとめ南

左^ち

みなそこに春やくるらんみよし野のよしの河に蛙なくなり

右

貫之

さくらはな散ぬる風のなこりにはみつなき空に波そたちける

左持

或本オムウタマケムヤハトデカチナム

躬恒

けふのみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花の影かは

右

花みつゝ惜むかひなくけふ暮てほかの春とやあすはなり南
これもかれもおかしとてちとなむ

夏廿首

左勝

源元方躬恒とも

けふよりは夏の衣になりぬれときる人さへはかはらさりけり

右

かたをかあしたのはらをうちくれば山郭公けふそなくなる

左持

あちきなしとてまくる一本キルヒトサヘハトデマク

山里にしる人も哉ほとゝきすなきぬときかはつけもくるかに

右

夏きぬと人もつけこぬ我やとに山ほとゝきすはやもなかなむ

左

躬恒

われにして人にかはつけむ郭公おもふもしろく我やとになけ

右勝

ほとゝきす聲のみするは吹風のをとほの山になけく成けり

左

興風

夏池によるへさためぬうき草は水よりほかにすむ方そなき

右勝

山みやまをいてゝまつはつ聲は郭公夜ふかくまたむまつこゝはなけ

左持

紫にあふみつなれやかきつはたそこの色さへたかはさるらん

右

さよ更ていつくなるらむ郭公ねさめの宿はかす人もなし

左勝

いつれをかそれともわかむ卯花のさけるかきねをてらす月影

右

この夏もかはらさりけり初聲はなこしのをかに鳴ほとゝきす

左

夏の夜のまたもねなくに明ぬれは昨日けふとも思ひまといぬ

右

卯花のさけるかきねは白雲のおりゐるとこそあやまたれけれ

左

さく花の散つゝうかふ水のおもにいかてうき草ねさしそめけむ

右

待人は常ならなくにほとゝきす思ひのほかになかはうからん

左

たまくしけふたかみ山の郭公今そ明くれ鳴わたるなる

右

郭公のちのさ月もありとてや長くうつきをすくしはてつる

左

〔歌謡〕

右

夏なれはふかくさ山のほとゝきす鳴聲しけく成まさるなり

戀廿首

左勝

躬 恒

身をもかつ思ひも能戀ふイといへはもゆるなかにもいれる心は

右

或本躬 恒

なみた河いかなる水かななるらむなと我戀をけつよしもなき

左勝

躬 恒

誰ゆへにおもひみたるゝ心にはしらぬそ人のつらき成ける

右

はつかしのもりのはつかに見し物なと夏草のしけき思戀するそ

左持

躬 恒

人のうへとおもひし物を我戀になして君かたゝにやみなむぬる

右

貫 之

あしまよふ難波の浦にこく船のつなてなからもこひわたる哉

左

躬 恒

うつゝにも夢にも人によるしあへは□新許うれしきはなし

右

玉もかるあまとはなしによと共に我ころもてのかはく時なききみこふる

左

伊 勢

あふ事の君にたえにし我身よりいくらの涙なかれてぬらむ

右勝

是はおくにありあはせぬ歌

行かへり千鳥なくなり濱ゆふに心へたてゝおもふものかは

左

逢すしていけらん事のかたければ妹は我身をありとやは思ふ

右

逢ことのかたのしるへか泪かは戀しと思へまつさきにたつ

左

人こふとはかなきしにを我やせん身のあらは社後もあひみめ

右

夕されは山のはにいつる月草のうへしこゝろは君はそめてき

左

露はかりたのめをかなむ言葉にしはしもとまる命ありやと

右

春雨のよにふる空もおもほえす雲井なからに人こふる身は

左

貫 之

身に戀の餘りにしかは忍ふれと人のしるらんことそわひしきりなき

右

君こふる我身ひさしくなりぬればとしに涙もふりぬへらなり之敵

左

逢みてもつゝむ思ひの侘しきは人まにのみをねはなかれける

右

夏草にあらぬものから人こふる思ひしけくも成にけるかな

左

かくて左方にうへの御よわたりとて右方のみにう上

題

たちかへり千鳥鳴なる濱ゆふのこゝろへたてゝおもふ物かは

初

春

廿

首

季

春

廿

首

戀

廿

首

貫 之

御

製

兼

覽

王

伊

勢

貫

之

之

之

之

讀人

躬

恒

興

風

是

則

友

則

友

則

友

則

陽成院歌合 延喜十三年九月九日

惜秋意

左勝

年毎にとまらぬ秋としりなからおしむ心のこりすも有哉

右

おしといひてうみへもさそへ飛渡る何れか秋のわたり成らん

左勝

あたなりと人やみるらん年毎にとまらぬ秋をおしむ心を

右

よそ人も秋はおしきを浅茅生のむへも聲々鹿やなくらむ

左

長月はこしひよりこそおしまるれ今はかきりの秋とおもへは

右勝

とふ人もなき物ゆへにあちきなくいはんまもなくおしき秋哉

左

神なひの杜によをへて鳴鹿はすき行秋をおしめとめなん

右かつ

こゑたてゝ鳴鹿はかりおしめとも過ゆく秋はとまらさりけり

左ち

時雨つゝ草はもなへてもみつともときはの山に秋はとまれり

右

おしめとも秋はとまらすたつた山紅葉をぬさと空にたむけん

左

秋毎に咲すはあらねと女郎花ちりゆく事はおしくそ有ける

右かつ

めにみえて別るゝ秋を惜めはや大空のみそなかめらる蘭

左ち

おしと思ふ心そふかきあまの河なかれて秋のとまる成らん

右

いつくへか秋はゆくらんつの國のなからへ行ときかは頼まむ

左

我宿のきくの花しも紅葉ねは過行秋もあらしとそおもふ

右ち

はかなくて過る秋とはしりなからおしむ心のなをあかぬかな

左

いつこにか秋はいくらん跡をたにとめてゆきを尋見てまし

右かつ

おほ方の秋はおしめとかひもなしなの長月をとゝめてしかな

左かつ

したひてもとめまほしきを今はと秋の行覽かたそしられぬ

右

紅葉のにしきと見ゆる秋なればたつをおしとや鹿の鳴らん

左かつ

惜めともとまらぬ秋としりなからまとふ心はいかにせよとか

右

龍田河わたりし秋にあらぬかなかれて紅葉つねにみるへく

左

草村の心しとゝもにそわたるくれはしぬへき秋のおしきに

右

こりすまにあひもみる哉女郎花とまらすかへる秋としるらし

左
我こゝろ慰めかねつ身をすてゝおしむを秋のしゐてすくれは

右

紅葉はのほかなき風にちらされは秋はすく共しられさらまし

左

とゝむれと今はかきりと行秋のわりなくおしくおもほゆる哉

右

あふ坂の關の紅葉し心あらはくれて行とも秋をとめなん

左
かつ

秋すくとねをも鳴哉ふかくさのかけとたのめる虫ならなくに

右

いつかたに心をやらんあかすして過行秋をおしみとゝめて

左

まてといひてとまらぬ秋としりなから空行月のおしくも有哉

右

みやまなる紅葉の錦色にいてゝおしむに秋のたゝはうからん

左

暮ぬへき秋をおしめは小倉山みねのもみちも色つきにけり

右

おしめとも秋はとまらぬ女郎花野へにをくれて枯ぬはかりを

左

紅葉のなかるゝ川をゝしなへてせきそとゝむる秋のおしさに

右

ちらすなる心のまゝにをのかしゝわかるゝ秋をおしみつる哉

左

大空の心をまとふめに見えてわかるゝ秋をおしむ我身は

右

とゝむれとゝまらぬ秋をおしむとて心にはかるなをやたちなん

左

身にそへてもたらぬ秋をおしむとてくれむ事社佗しかりけれ

右

紅葉つゝ時雨ふりいてゝ行秋を峯の朝きりたちもとめなん

左

今はとて過行秋のかたみには風のをくれに紅葉をや見む

右

秋なからとしはくれないむ紅葉をぬさとちらせる山のみねより

左

おしめ共とまらぬ秋はときは山紅葉はてぬと見てもゆるさし

右

年毎にとまらぬ秋とおもひなはてもろき人もおしまさまし

左
本ノマ、
殿

秋といへは今いくたひも残らぬをおしむ心もともにつきつゝ

右

おしむにもとまらぬ秋の立ゐては恨をのみやおもひ出にせむ

亭子院有心無心歌合

殿上人とも心ある心なきえりいてんといふことある比。七月七日にかうしんのこのうしむとおもはる。人々たなはたあひのゝちおもふらんことをたひにて。ひのうちによみつあはせける。

左

年ことにこりすや有らん織女のおひて戀しき別れのみする

右

思ひやる心の空にしらるれはたなはたつめのわかれかなしき

左

あかすしてわかれにしかは天河戀しきせのみおもほゆる哉

右

棚機の我にあふよのしのゝめの見えぬはかりそ霧はふらまし

左

逢事をまつとなけきし時よりも織女つめは今や侘らん

右

なかし世につくすともなく織女の戀は空にやつもりたるらん

左

あひ見てもあはてもななく織女のいつか心ののとけかるらむ

右

あはすして思ひしよりもたなはたのあかす別れて後そ侘しき

左

逢みてそいと戀しき棚機のなくさむはかりあらぬ世なれは

右

年ことにあかぬ別れはたなはたのあらぬ人さへ歎くへら也

左

あふ計嬉しき事はなけれともわかれて後そ侘しかりける

右

稀に逢て何わかるらん彦星の後にわひしとしらすや有らん

左

別れての後や侘しき織女のおふこはるけきことを思へは

右

わかれては戀しき物を彦星の昨日けふこそ思ひやらるれ

左

あひ見むと思ひしよりも別れての後そ侘しき戀まさりける

右

あかてゆく彦星なれは年をへてわすれさりける嬉しけもなし

左

天河わたりて後そたなはたのふかし心も思ひしるらん

右

逢夜なき織女なれは今とはてかへりて後にまとはれし哉

左

あかなくに別れにしかは七夕のかはきし袖は今やぬるらん

右

織女の思ひせむ空もおもほえし別れて後の心まとひに

左

棚機のおかてわかれし戀をこそ空にみちぬといふへかりけれ

右

とことばにおもほゆる哉彦星のこりすわかれて戀渡るらん

左

年毎にひとせをわたる天河かゝるにかけを見つゝ別れし

右

あか月のおきうかりしを天河戀渡るへき物をおもは

左

天河年をわたりてたなはたのあかぬ戀する比にも有哉

右

年ことにあかぬわかれの織女は命なかくも世にへぬるかな

右有心無心歌合推長曆延喜十六年也

群書類從卷第百八十一

和歌部三十六歌合二

內裡歌合

御記天德四年三月卅日己巳。此日有女房歌合事者。去年秋八月。殿上侍臣鬪詩合一時。典侍命婦等相語云。男已鬪文章。女宜合和歌。及今年二月。定左右方人。就中以更衣藤原脩子。同等爲左右頭。各令排讀。蓋此爲惜風騷之道徒以廢絕也。後代之不知意者。恐成下好浮華專內寵之謗。仍具記之。其儀。暫撤却清涼後涼兩殿中渡殿北蔀。設公卿座於同渡殿之內。鋪左右方人座於後涼殿緣東。左在南。右在北。女房又相分候清涼殿西庇簾中。第五間立倚子。便用女房侍倚。此間上簾。申剋就倚子。良久右方入自北方。獻和歌洲濱。沉押物花足淺香下綾覆。綺地敷。更衣之童女四人昇之進御前渡殿。暫左方算刺洲濱。北小庭算刺小舍人圓座之前云々。經侍所。自南方。獻和歌洲濱。紫檀押物花足蘇方下机。繡葦手。花

文綾覆。綺地敷。更衣之童女六人昇出如右。算刺洲濱又置南小庭之小舍人圓座前。始童女口机下後改置云々。仰令召殿上公卿。即左大臣大納言源朝臣高明。右大將藤原朝臣師尹。參議雅信朝臣。朝成朝臣參來候座。次各方人侍臣着座。于時日已昏。供燈兼立篝火於南北小庭。令召可讀歌人。左方左兵衛督延光朝臣。右方右中將博雅朝臣。進就洲濱下讀其和歌。左作金山吹花枝。其葉近少將伊涉右近少將助信等取脂燭照之。殿上舍人着。小庭座刺篝。左大臣評定。于時各方賜饌於公卿及方人。讀歌之中。左詠鶯歌二首。而右誤讀柳歌。仰依失次爲負。惣廿首讀合已畢。左勝員九。比讀歌終。令召樂所人。相分南北小庭。遞奏歌曲。大臣彈箏。大納言源朝臣彈琵琶。此間盃酒頻巡。絃歌無斷。大臣起座獻酒。及遲明。賜大臣以下祿有差。

大臣夏裝束一襲。大納言白合御衣一重。參議白單重御衣。自餘足緒。退出。此曉霜降。近臣云。累霜氣寒。人恠時序乖違云々。四月三日未刻之。飛香舍以合洲濱。給中宮還來。西剋左洲濱。給昌子內親王。

殿上日記

天德四年三月卅日。女房有歌合之事。此事始自今月上旬。先被書分左右人。以更衣爲左右頭。相分典侍掌侍命婦藏人等。爲三人矣。同月十九日。相分侍臣。點定方人。藏人尹朝臣於御前。當日早旦。藏人所雜色以下參上。書分云々。當日早旦。藏人所雜色以下參上。供奉御裝束。其儀。西廂皆懸新御簾。納仁壽殿第五間也。立御倚子。御倚子。南方立御几帳。立置物机。立御座間。南四間垂御簾。爲左方女房座矣。北二間同垂御簾。爲右方座焉。御前渡殿南北各敷綠端疊三枚。爲公卿座也。後涼殿東小簀子敷。從渡殿南北相分。敷長疊爲左右侍臣座也。南北小庭各敷疊三枚。爲樂所召人座也。此等鋪設。申二剋出御召左右歌。於是右方侍臣等令持洲濱二机。一置歌。應召參上從御路殿西邊。獻御前。先童女一人

執地敷。淺縹浮文。出進鋪御座乾角高欄下。還却

之後。同童女四人。其裝束着。昇洲濱。立地敷。

洲濱之爲舩沉入金筋。淺香下机入銀筋。其覆花紋綾青末濃。加柳折枝之繡文。机四角以金銀作柳枝四莖。便爲覆臺也。有足結總。但無帶。洲濱之中神妙爲竭。人取鳥獸水樹巖石。皆其所用。無不金銀沉香等類。所獻歌以色紙書小字。詠花樹歌令結其樹枝。題好斤又令持其鳥鶯。至于春初暮春首夏戀望之間。或在人手。或載漁舟。惣二十首。隨宜。

次小舍人藤原實正執金銀花柳枝。下居玉砌傍。員指。次小舍人二人。藤原實明。三善興色柳襲。昇員指洲濱。置實正前。頃之左方從殿上侍方參上。童女一人先執地敷。紫地。鋪御座坤角。如右方。次童四人昇洲濱。立地敷。洲濱之樣大舩同右。紫檀机。蘇芳下机。同色村濃覆。有葦手并藤花柳繡文。有帶。無總。其中銀霍含欸冬一枝。黃金作八重花。青銀作數片葉。每葉各書一首。次又童女執員指洲濱。參入。此洲濱野水舩也。無机。有花紋綾。小舍人藤原宣例樣之形敷物。其內置金銀藤題也。

賴紀延方等。皆着赤。於砌下取傳。置員指座前。次殿上公卿依召參入。在大臣大納言源朝臣右大朝臣等也。將藤原朝臣雅信朝臣朝成北南而也。左右方頭辨備衝重。各給公卿并男女方人。殿上五位取傳給之。於是召出左方延光朝臣。右方博雅朝臣。令講各方獻歌。延光朝臣手執花枝。口詠艷藻。博雅朝臣披講之間

誤_二失次第_一。方人遺恨尤在_レ斯。言詩不_レ言乎。白評定之
間。鐘漏頻移。挂之缺尙可_レ磨焉。其今日之謂歟。勝負之次。坏酌互勸。今日之事左
方多_レ慰。又御厨子所供_二御菓子干物等_一。陪膳_{任重}
朝臣。依_レ例。又召_二樂所人々於砌下_一。左右相分侍
席。勝方先吹_二笙笛_一。初奏_二調子_一。先_レ是。殊降_二綸命_一。書_二分御遊之歌曲_一。
左右之召_二左則大臣彈_レ箏。朝成朝臣吹_レ笙。方人侍
人也。右則大臣彈_レ箏。朝成朝臣吹_レ笙。方人侍
臣樂所召人陪_二砌下_一。實利朝臣_一富。門各奏_二所能等_一。右則大納
言源朝臣彈_二琵琶_一。雅信朝臣拍子。侍臣并召人
藤原清通。占部方座等。同侍_二右庭_一。絃歌如_レ左。唱
絃管箏忽_二曲調_一。侍臣等密語曰。每_二万機之暇_一
景_二忽命_一仙欄之御遊。然歡樂之至未_レ如_二今夜_一
者也。快醉難興難_レ禁。左大臣賜_二夏御衣一襲_一。
青色御衣。蘇芳御下襲。阿古。大納言已下侍臣召人等
給_レ祿有_レ差。大納言白細長一襲。參議單重細長一領。四位
五位不_レ論殿上地下。一挿腰以_二白絹_一。六位小
令人皆挿_二赤絹_一。東方漸明。尊儀入御。大臣以下歌舞退
出之。

內裏歌合天德四年三月卅日

題

霞 鶯 柳 櫻 欵冬 藤
暮春 首夏 卯花 郭公 夏草 戀

歌人

左

朝忠卿

坂上望城

大中臣能宣

少貳命婦

壬生忠見

源順

本院侍從

講師

左

延光朝臣

判者

左大臣

念人

左

中將更衣

宰相更衣

藤典侍

少貳命婦

右衛門命婦

右近命婦

兵衛命婦

兵衛藏人

兵庫藏人

右

平兼盛

藤原元眞

中務

藤原博古

清原元輔

右

博雅朝臣

右

辨更衣

按察更衣

橘宰相

少納言命婦

右衛門命婦

美濃命婦

越後命婦

備前藏人

美作藏人

參河藏人

靱負藏人

侍從藏人

源爲明

源重信

源重光

源延光

源伊尹

源保光

藤忠君

平時經

源伊涉

藤爲光

藤守仁

藤濟時

平珍材

藤重輔

源時仲

童

左

平保遠

源時明

藤道隆

藤爲時

藤景舒

藤惟賢

兵部藏人

木工藏人

宮内藏人

源盛明

藤博古

藤賴忠

藤文範

清原元輔

藤國光

藤兼家

藤助信

藤清遠

大江齊光

藤安親

秦清主

藤永保

藤稚材

藤忠光

右

藤元明

實正

藤朝光

藤保名

義理

能正

藤信賴

一番 霞

延正

左勝

くら橋の山のかひより春霞としをつみてや立わたるらむ

右

ふる里ははるめきにけりみよしのゝみかきの原を霞こめたり

左右歌讀合。勅ニ小臣一曰。可レ定ニ奏勝劣ニ者。遂巡奏云。小

臣纔雖レ備ニ二十一字。全難レ辨ニ勝劣之義。伏請ニ天裁。勅

云。若不レ定ニ勝劣ニ者。已失ニ今日興。兼結ニ後代爵。猶

速可ニ定申一者。遇ニ天氣之不レ許。表ニ空慮之拙。而已。左

歌くらはし山に年をつむといへる事よろし。又はしに

わたるなといふもさもありなん。歌のふるまひもさて

ありなん。右歌なとかふるさにしも春めかしけん。霞

こめたらんもおそろしけにや。此間只在ニ勅定。小臣屢

候ニ天氣。遂無ニ左右仰。因以レ左爲レ勝。

二番

左勝

こほりたにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬ鶯の聲

右

わか宿に驚いたく鳴なるは庭もはたらに花やちるらん

左歌心はへいとおかし。右歌よしなき花ちらすもこと

なる興なく。ことはもよろしからす。以レ左爲レ勝。

三番

左勝

我宿の梅か枝になくうくひすは風のたよりに香をやとめこし

右

朝 忠
兼 盛

さほひめのいとそめかくる青柳をふきなみたりそ春の山かせ
鶯をいたすへきに柳をよみてまし。

白妙の雪ふりやまぬ梅か枝にいまそうくひすはるとなくなる
たかへてよみたれと。本歌をめしいたしてかうせらる。

右講師博雅朝臣誤讀ニ柳歌。左方論云。須レ讀ニ申鶯歌。而

誤讀ニ申柳歌。於レ今者不レ可ニ讀申ニ歌者。以ニ左方論申
旨ニ奏聞。仰云。可レ據ニ定申ニ者。小臣奏云。左方之所レ申

非ニ無謂。如レ此之事只隨ニ時之議。但依ニ人之誤。何留ニ
其歌。依令ニ讀申。其時博雅朝臣頗變ニ色。速不レ讀レ之。纔

雖ニ讀揚。其音振被下爲ニ左人ニ笑。又歌の詞にうくひす春
となくことそらことなり。仍遂爲レ負。

四番 柳

左

望 城

あら玉のとしをへつゝも青柳の糸はいつれの春かたゆへき

右勝

兼 盛

さほ姫のいとそめかくる青柳をふきなみたりそ春の山かせ

欲レ讀ニ右歌ニ之間。左方人申云。件柳歌違ニ濫次第。讀申

先畢。而重欲レ讀レ之。似レ忘ニ首尾ニ者。小臣答云。鶯歌之

時。隨ニ左申ニ已有ニ裁許。重不レ可レ申者。左歌あらたまの

としをへんあをやきよしなし。右歌させることなけれ

と難はみえす。仍以レ右爲レ勝。

五番 櫻

左勝

朝 忠

あたなりとつねはしりにき櫻花おしむ程たにのとけからなん

右

元 輔

よとゝもにちらすもあらなむ櫻花あかぬ心はいつかたゆへき

左の歌さてもありなむ。させる難はなし。ことはいと
よからぬとも。くせなく聞ゆ。右歌はすゑあはぬこゝち
そする。又歌からもをとれり。以レ左爲レ勝。

左持

能 宣

櫻花風にしちらぬものならは思ふことなき春にそあらまし

右

兼 盛

櫻花色見る程によをしへは年のゆくへをしらてやみなむ
左右ともによくつかまつりたり。仍爲レ持。

七番

左勝

少貳命婦

あし曳の山かくれなる櫻花ちりのこれりと風にしらすな

右

中 務

年ことにきつゝわか見る櫻花霞もいまはたちなかくしそ

左の歌いとおかしくて。さてもありなむ。右歌はいつこ

にきつゝみるそ頗荒涼也。いまはといふことはよしな

きことなり。仍以レ左爲レ勝。

八番 歎冬

左勝

順

春ふかみ井手の川なみ立かへり見てこそゆかめ山吹の花

右

兼 盛

ひとへつゝ八重山吹は開けなむ程へてにほふ花とたのまん

左歌いとおかし。さる事なりときこゆ。右歌八重やまふ

きのひとへつゝひらけんは。ひとへなるやまふきにそ

あらめ。心はあるに似たれとも。八重さかすは本意なく

やあらん。又上の句のはて下の句のはてとおなし文字

あり。されは左かちぬ。

九番 藤

左 朝 忠

紫ににほふ藤浪うちはへて松にそ千代の色はかゝれる

右勝 兼 盛

われ行てゐる見るはかり住吉の岸の藤浪おりなつくしそ

左歌水なくて藤浪といふことは。ふるきうたにおりお

りあり。されとも尋ぬる人なければとゝまれるなるへ

し。歌合にはいかゝあらん。ことによせぬはあるまし。

いはれなし。猶水池岸なとそよすへかりける。歌からは

きよけなり。右歌おなし浪あるに岸によせたればたよ

りあり。かくそふるきにもある。藤なみをしなへていふ

ことにもあらず。御氣色もさやうにそみゆる。小臣問

源大納言云。尤艶也。暫持に擬之間。右方人申云。左歌

藤波水によらずはいかゝと愁申。事理可然。仍以右爲

十番 暮春

左勝 朝 忠

花たにもちらて別るゝ春ならはいとかくけふは惜まさらまし

右 博 古

行春のとまりししるき物ならはわれも舟出をゝくれさらまし

左歌首尾相叶。ふるまひもありておかし。右歌詞なくみ

たるやうなり。歌からもをとれり。仍以左爲勝。

十一番 首夏

左持 能 宣

なく聲はまたきかねとも蟬の羽のうすき衣をたちそきてける

右 中 務

なつ衣たち出るけふは花櫻かたみの色をぬきやかふらん

左の歌は夏の初とおほゆれと。右の歌はたち出るけふ

はとあれは。としとそおほゆる。又ぬきかふともあめれ

は。左の歌よりはとくそ聞ゆる。されと歌のしなおなし

ほとなれは持にそ定申。

十二番 卯花 左 忠 見

道遠み人もかよはぬおく山に咲る卯花たれかおらまし

右勝 兼 盛

あらしのみ寒き深山の卯花はきえぬ雪かとあやまたれつゝ

左歌山の卯花をしもおもひ出けんそいかゝ。右歌おな

し山なれとおかしさまされり。仍以右爲勝。

十三番 郭公 左持 望 城

ほのかにそ鳴わたるなる時鳥みやまを出る夜半の初聲

右 兼 盛

深山出て夜半にやきつる郭公曉かけてこそゑの聞ゆる

左右ともに興ありていとおかし。仍爲持。

十四番 左持 忠 見

さよふけてねさめさりせは時鳥人つてにこそ聞へかりけれ

右 元 眞

人ならはまでといふへきをほとゝきす二聲とたにきかて過ぬる

左歌きかむとおもはてねさめしけんそあやしき。されと歌からおかし。右歌人なりとも今一聲きかんとて

さてとはいかゝいはんとする。しはしまてなといふへきころか。ことたらぬ心地とする。いづれもおなしほとこの歌なれは持にそ定申へきなり。

十五番 夏草

左勝

忠 見

夏草の中を露けみかきわけてかる人なしにしける野へ哉

右

兼 盛

夏ふかく成そしにける大あらしのもりの下草なへて人かる

右歌なへて人かるなとわろし。左にをとりたり。仍以左爲勝。

十六番 戀

左勝

朝 忠

人傳にしらせてしかなかくれぬのみこもりにのみ戀や渡らん

右

中 務

むは玉のよるの夢たにまさしくは我思ふことを人に見せはや

左歌いとおかし。つよきことなれと。さてもありなむ。

右歌むは玉とかけり。よるといふことはぬはたまとそ

いふかし。歌はおなしやうなれと。かきあやまちたるな

めれは。そのよし奏すれば。あやまちあらむにはいかて

かとおほせらる。仍以左爲勝。

十七番

左勝

能 宣

戀しさを何につけてかなくさめむ夢たに見えすぬる夜なれば

右

中 務

君こふと心やそらにあまのはらかひなくてふる月日成けり

左歌頗有情。仍爲勝。

十八番

左持

本院侍從

人しれすあふをまつまに戀しなは何にかへたる命とかいはむ

右

中 務

ことならは雲の月となりなむ戀しき影や空に見ゆると

左右ともにさてもありなむ。右歌の上下の句のかみに。

おなし文字をあめる。にくさけにそさふらふへきと奏

すれば左右の仰なし。左の人申。左はさるもしさふらは

すと申めれと。させる難にはあらぬにそ。仍爲勝。

十九番

左勝

朝 忠

あふことのたえてしなくは中々に人をも身をも恨みさらまし

右

元 眞

君こふと且はきえつゝふる物をかくてもいける身とやみる覽

左右歌いとおかし。されと左の歌は詞きよけなりとて

以左爲勝。

二十番

左

忠 見

戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそおもひそめしか

右勝

兼 盛

忍ふれと色に出にけり我戀は物や思ふとひとのとふまで

小臣奏云。左右歌俱以優也。不能力申勝劣。勅云。各

尤可數美。但猶可定申者。小臣讓大納言源朝臣。納

言敬屈不奏。此間相互詠揚。各似請我方之勝。小臣頻

候天氣。未給勅判。令密詠右方歌。源朝臣密語云。

天氣若在右歟。右歌甚好矣。因之遂以右爲勝。

三月一日。歌のたいをさためて。かた／＼にたまふ。おなし月の十八日。をのことも左右にわかせ給ふ。その日になりて。せいりやう殿のにしおもてのみすひとまあけさせ給ひて。こうりやう殿のわた殿に。おましを女房方によそはせ給ふ。おましより南にはひたりの人さふらふ。北には右の人さふらふ。左も右もわつらふことありてのほらす。左の方はないしのすけ。あかいろに櫻かさねのからきぬ。うすものすり裳。命婦くらんとは赤色にさくらかさね。むらさきのすそこのもみなきたり。たき物はくろはうをたく。右はあを色にあをきもはおなしむらさきのすそこなり。たきものは侍従をたく。かくて日のけしきはれて見ゆるほとに。うたともおそしとめす。左のはおそければ。まつ右のをたてまつる。すはまはちんをやまにつくりて。かゝみを水にして。ちんのふねうけたり。銀のかはかめふたつ。かふのうらに。しきしにうたはかきていれたり。花足にはちんをつくりて。こかねのすちやれり。せんかうのあしゆひのくみ。すそこのふさし

たり。あをくちはうす物のおほひに。やなきとりのかたをぬひたり。たいには柳の枝をつくれり。あさはなたのうちしきしたり。うなひ四人。あを色に柳かさねにて。きたのかたよりかきたつ。おなしかたの殿上人そひて出たつ。かすさしのすはまは北のきはにをく。かすさしはうへのわらは。左の歌たそかれときにたてまつる。そのすはまはちんの山。かかみを水にして。すにもしろかねのつるふたつたてゝ。こかねの山吹に。銀の葉に歌はかきて。つるにくはせたり。花足はしたんをつくりて。しろかねのすちやりて。したつくゑはすはうにして。かねのすちやれり。あしゆひのくみおほひは。ふちのすそこ。あし手をぬひものにしたり。おほひのたいは。しろかねを竹のかたにつくりて。うちしきにはえひそめ。うなひ六人。あか色にさくらかさねきて。みなみの方より御前にかきたつ。かすさしのすはまみなみのきはにをく。宣旨に。左大臣。大納言源朝臣。右の大將ふち原の朝臣。まさのふの朝臣。まさひらの朝臣まいれり。

御前にあたれるわた殿に。ゐわかれてさふらふ。左みきのかたの殿上人。こうりやう殿のかたにさふらふ。おはします間のみすはあけたり。あけぬ間。御几帳たてわたして女房さふらふ。かゝるほとにひくれぬ。きたみなみの庭にはかゝりともす。おほせことにて左右のうたよむへき人をめす。左のふみつの朝臣。右ひろまさの朝臣。すはまのもとによりてうたとりてよむ。おほせことにて左大臣して歌のかちまけのわさせせたまふ。かすおほく左まさるまゝに。くにてりの朝臣いはんかたなしとおもへり。又左のおとゝをうらめしとみやる。歌とも見はてゝ。樂所のをのこともめす。左右とりわかれて。おのくにはにさふらふ。左のとうのかちは。おこらかしとおもひてさうのふえふく。左の大臣さうのことひく。つそのかみをさむひは。大せんのしんなかき琴。いよのせうもりときわこん。左衛門志富門ふる。すりの大夫しけのふの朝臣。左京權大夫さねとし。とのもりのかみ橘のよりたたなとは。うたうたひにさふらふ。右には源大

納言ひは。右近中將ひろまさの朝臣わこん。うたのかみしけひらの朝臣さうのこと。のりたゝの朝臣さうのふえ。右近少將きよとを。たかみつ。きんまさは歌うたふ。かちかたそうてうをふきて。あなたうとうたふ。つきに右さくら人うたふ。左うたへは右はやみぬ。かたみにそあそふ。左あしかきうたふ。右やましろのこまのわたりうたふ心あるへし。かくあそふほとに夜あけぬ。あけほのになみゐたるに。なかきかあさかほを。左大臣□みなる人のわらふをきゝもいれて。ことひきゐたるかほいとわりなし。右の人かはらけとらすとてめすに。くにてりの朝臣なつきなんとてかくれぬ。左のうたよむ人に。とうのかういをんなそうそくひとくたりとらす。又かむたちめにはうへよりたまふ。左大臣にはなつのさうそく一くたり。大納言にはしろきあやのほそなかひとかさね。さいさうにはひとへかさねのほそなか。殿上樂所の人々にはこしさし。左には春のうくひすのさえつりといふあそひ。くれぬる春をおしむにより。右にはやなき

のはなのうらみといふかくをそふす。かすの
つもるをとおもふなるへし。

殿上日記並注取分方人之由依無其名就他日記書入

三月二日、左右方人のかきわけを。ないしのす

けしてかた／＼のとうのさうしにたまへり。

これ二月廿九日に。うへのみつからかき出さ
せたまへるなり。みかの日たいをたまふ。これ
はないしのすけの御前にてかき出せるなり。

かすみー

うくひすニ

やなきー

さくら三

やまふきー

ふちー

春の暮ー

初の夏ー

ほととぎすニ

うの花ー

なつ草ー

こひ五

かくてみそかの日のひつしの時。清涼殿のに
しおもてのみすひとまあけさせ給ひて。後涼
殿のわたとのにあたりて。にしむきにいしのお
ましよそひておはします。わたとのをわけ
て。みなみのつほに前栽うへさせたまひて。南
には左藤の花。北には右やまふきの花うゑさ
せ給へり。かた／＼の藏人命婦は。おましのき
たみなみに。みすのうちに左右とさふらふ。
装束はれいのあかくあをし。かくみなとゝの
ひて。まつ右のすはまたてまつるとて。わらは
うちしきとりておまへにしきていりぬ。又わ

らは四人すはまかきてまいる。装束はあを色
にやなきかさね。たけのほとかみのなかさ。よ
くとゝのひてかたほならず。すはまのおほひ。
あをきすそにてぬひものしたり。うちしき
はあさきはなた。すはまのさまは。うへのに
はちんにこかねのすちやれり。したのにはせ
むかうにしろかねのすちやれり。歌はしろか
ねこかねをつくり花にして。歌にしたかひつ
つえたにつけたり。こひの歌は鶴舟にして。
かゝり火にいれたり。花の歌は舟につみたり。
うくひすのは鶯くひたり。さま／＼につけて
したり。日のうちかたふきて。ものゝいろみ
ゆるほとにて。いとめてたし。かゝるほとに。
左いとをそくまいるとて。主殿頭平のこれつ
ねをめして。をそしとめさせ給ふ。猶をそけれ
は。藏人平のよしきをめしてせめさせ給ふ。
たゝいままいらすとそうす。かゝるほとに。い
といたうくれぬ。又藏人藤原しけすけをめし
て。をそきよしおほせ給ふ。ものゝさまも見え
ぬ程に。すはまたてまつるわらはうちしきと
りてまいる。かへりて又四人すはまかきてま

いる。装束あかいろに櫻かさねなるへし。され
と見えねはかひなし。かすさしのすはま又わ
らはもたり。すへて六人わらはあり。おほき
さとのほらすといふ。よしきわらはの中に
ましりてさはく。おほきにてかたはにもあら
しとおもひたるなるへし。右のかすさしのす
はまは。方の殿上わらはとりて。つほせさい
にたてゝさふらふ。左のすはまおさゝしく
見えす。くらくてすなはちおほとなふらまい
る。左源少將とれり。うちしきは左兵衛佐とれ
り。右藏人少將おほとなふらとれり。うちし
きは後少將とれり。わたとのゝ左右にうたの
かむたちめつけり。左おとゝ。實頼。右大將師尹。
藤宰相朝成。源大納言高明。源宰相雅信。うへ人
は後涼殿のすのこに。きたみなみにつきなみ
ゐたり。かたゝの男女房にあるししたり。
かくて左のかうし右兵衛の督源のふ光より
て。すはまのおほひをすこしひきあけて。山
ふきの花のえたの一尺はかりある。こかねし
てつくれるをとりて。さゝけてよひとよゐた
り。はなひらに歌はかきたるなるへし。ともか

くもせてさゝけてよみときゐたり。かうろさ
さけたるにいたり。右の講師源中將ひろまさ。
すはまのおほひは藏人少將すけのふもたり。
後少將たかみつよりてとる。かくて歌ともあ
はするに。いかゝありけん。右まけにけり。あ
はせはてゝ。御あそひつかふまつる。めし人
は左右のつほ前裁にさふらふ。左は左おとゝ
さうのこと。勘ヶ由長官さうのふえ。圖書頭を
さむひは。大膳進ななき琴。伊豫掾もりとき和
琴。左衛門志富門笛。修理大夫しけのふ朝臣。
右京大夫さねとし。主殿頭これつね。たちはな
のよりたゝなとはうたうたひにそさふらふ。
右は源大納言ひは。右近中將ひろまさの朝臣
わこん。うたのかみしけひらさうのこと。權左
中辨よりたゝの朝臣さうのふえ。治部卿。大藏
卿もりあきらの朝臣。右近衛少將きよとを。た
かみつ。備前掾きんまさなとは。うたうたひに
さふらふ。これかなかに。左のうたひたしは右
京大夫さねとし。地下の人にてその座にさふ
らふ。右のうたひたしは治部卿。わた殿にさふ
らふ。みな笏拍子とれり。まつかちかた雙調ふ

きて。あなたうとあそふ。つきに右おなし調子ふきて。さくら人あそふ。つき／＼これよりはしめて。たかひに左右ひまなくあそひあかしたまふ。つとめて。うへよりかつけものたまふ。左のおとゝには御そひとくたり。源大納言にはしろきうちきひとかさね。宰相たちひとへのはそなかをたまふ。こと人々にはみなこしさをたまふ。二日といふ日。きさいの宮には。すはまとも御らんせさせにたてまつれたまふ。かきてまいる人々。藏人ためみつまさき二人まゐる。御覽して。かつけものたまふ。さて右のすはまはとゝめさせ給ひて。左のはかへしまいらせ給へり。すはまのありさまは。うへはしろかねのすちやれり。したにはすはうに白らふのすちやれり。おほひすはうのすそこ。うちしきはこきゑひそめのきなりけり。これはわかみやにたてまつらせ給ひてけり。かくてあはする日は。三月のつこもりの日なれは。すはまとりいつる日は四月朔日。つとめてになりて。左は夏のかさみにていたり。右はおなし冬のなからにてとりいる。その左のすはまのおほひに。あし手を縫ものに

したる歌。

千代にちよくはへたり共みゆる哉松のかけなる鶴の齡は立歸りなけや鶯あすよりはほとゝきすてふ聲を聞えむ君か代は天の羽衣まれにきてなつ共つきぬいはほならん藤の花色ふかけれや陰みれは池の水さへこむらさきなる名残をば夏にかけつゝ百とせの春のみなとに咲る藤なみ

天徳四年三月卅日歌合左右假名日記

歌合の又のつとめて左かちぬときゝて大貳好古の宰相右兵衛督朝臣におこせり

しら浪の立よるかたのかた人はかつによりて心ゆくらむかへし

朝忠宰相

もろともに心をよする白浪のそこのかひある心地こそすれこれを見てないしのすけ

常盤にもたちまさりにし白浪は君か方よりかひとこそみれ歌合あすとして宰相のかういにつかはす

上

言のはをくらふの山のおほつかな深き心の何れまされる御返し

道しれるくらふの山にあらぬ身は深さをよそに聞はかり也又辨の更衣につかはす

吹風によるへきたためぬ白浪はいつれのかたに心よせまし御返し

定めなき心なりとも白浪のよりてはいかゝあるとこそみめ右天徳歌合以信州大英寺空同和尚所持本校合之件本十市遠忠眞蹟也

堀川中納言家歌合

天延三年二月十四日

電通

よかはにのほりたまひて。せほう(讃法)おこなひたまふとて
おはするに。なぬかの日のつとめてよりあめのふるに。いと
つれ／＼なるに。これかれあつまりて。さま／＼なることを
いひしろふに。きゝ給ふて。こと御かたわにて歌をやあは
せぬとのたまはすれば。いとみてからしこもありけりとて
あはす。

左頭勘解由判官通家

右頭前阿波守忠信

左勝

いはのうへの松

岩の上の松のちとせをうちかそへ年をおひつゝ君にまかせむ

右

いはまよりおひたる松の枝しけみ一葉に千代をかそへたる君

左

題朝

雲間よりほのかにみゆるあしたつといとゝ春けき聲聞ゆなり

右

天の原雲間をかけるあしたつのはひを君にゆつる春哉

左持

霞

霞たつあしたの原をけふみれば駒ばなすへく野はなりにけり

右

霞たち山のふもとともめいれは春のにしきそことに見えける

左

山さくら

山へにはちりや残ると櫻花さとのにあかてたつね來にけり

右

峯ことに咲ちる時はさくら花やまさむからぬ春の白雪

左

かゝみ山

かゝみ山はこねの山にいりてこそなへての人影もうつさめ

右

ちりつもる名のみなるらし鏡山やまとなるまで曇らさりけり

左

つりふね

いつかたに浪よせつらむ嶋かくれほのかにみゆるあまの釣舟

右

釣舟にのりてよをのみふる人のいをたにねてゐあかしかぬ覽

左

ふかきやま

あし曳のふかきみ山の花の色は見るにつけてそ里は戀しき

右

あし引の山のかひよりたちぬれは残りの雪そふかく見えける

左

青柳

枝よはみみたれやすなる青柳の糸のたよりに風なよりこそ

右

谷河のふきあけにたてるたか柳えたのいとまもみえぬ春哉

左

うくひす

風さむみ谷にこもれる鶯のうちとけてなく聲の聞えぬ

右

春といへと山かくれなる鶯ばまほにそ聲も聞えさりける

左

あひてあはぬ戀

逢見しをやかてよくやと思ひしに夢路をとらぬうつゝ也けり

右

思ひやる心たゝちにかよへ共ねし夜の夢にをとりぬるかな

一條大納言家歌合

天延三年三月十日

爲光

左 紅梅

よしちか君

こむ春をかくのみ見つゝ梅花つゐにあかてややまむとすらん
少將源つねかた

左持 夏衣

たちてゆく春をおしめと夏衣きたれはこれもめつらしき哉

左 歸鷹

參河權守恒成

いくをかとしふるさとゝ定むらんくる春ことに歸る鷹かね
右かつ

左勝 山吹

みな人もけふや衣をかへつらんひとへに夏のきぬと思へは

左勝 柳

なかきよ

はなちらす春の山風あらくとも柳の糸はみたれさらなむ
右

右

山吹の花の句にあひてこそ井手のあるしとならまほしけれ

青柳の糸はさかしくみゆれとも吹來る風に亂るへらなり
右

左

浪のよるかけさへ花と見ゆる哉さかりにさけるゐての山吹

左 歎冬

すけあきら

春風はのとけかるへしやへよりもかさねてにほへ山吹の花
右

右

いつかたの梢咲らむ藤波の春と夏とのきしをへたてゝ

左 若草

前中宮のしうはふ

おほあらきのもりの草葉も二はにけふそ始めて駒も放てる
右勝

左勝 卯花

春過しかきねなれとも卯花のさかりにきてはとまりぬるかな

左 殘鶯

なかとふ

下草はしけりにけりなむかしみしいもか家路の跡もなきまで
右

右

うの花の盛になれはよそに見ししつの垣根も過うかりけり

右

左持 葵

をしこめていのりかけつる葵草しめのほかなる人もたのまむ

大納言家歌合

長元二年四月七日

實信

一番 夏衣

加賀

右

頼實

二番 山吹

左勝

頼家

右

親範

三番 藤

左

五節君

右

義清

四番 卯花

左勝

頼家

右

頼家

五番 葵

左持

頼家

右

頼實

けふみれはかけて歸らぬ人そなきあふひそ神のしるしなり梟
六番 早苗

左 重 成

程もなくしけきうへ田の早苗哉ましるくさはのとりあへぬ迄

右勝 親 範

うちかへす程もへなくに小山田の早苗はけふそ色にとりける

七番 郭公

左持 重 成

雲よりなく一聲は子規きけともやすきそらのなきかな

右 經 衡

またきかてまちつるよりも子規おほつかなきはよはの一聲

八番 龜鳥

左 重 成

ひまもなく叩くひなに蜚のとの驚きならあけぬ夜はなし

右 親 範

夏の夜のあけぬかきりは月影にたゞひなの音のみとする

九番 竹

左 五 節 君

あたなりし花をもこひしくれ竹のかはらぬ色をわか友とせん

右勝 宰 相 君

吳竹のふしのしけくもみゆる哉かそへもやらぬちよやしる覽

十番 遣水

左勝 侍 從 乳 母

せきたるいはまの水の濁らぬにのとかに月の影をこそみれ

右 少 辨

せきいては鏡とそ見る朝ことにのとかにすめる水の流を

賀陽院水閣歌合

長元八年五月十六日。於賀陽院水閣。有和歌
合卅講。聽聞之餘。有此興矣。去四日。令資業
獻和歌題。月五月雨池水昌蒲單麥。次被書。分左右
方人。以藏人頭左中辨經輔朝臣。爲左方頭。
以右近衛中將俊家朝臣。爲右方頭。方人之中
依無藏人頭。推而爲上首也。左方人書分并
和歌題。召左少辨經長。賜之。方人丹波守濟政朝
良賴朝臣。左馬頭良經朝臣。美作守定經朝臣。左近權少將行
經朝臣。中宮大進義通朝臣。右近少將經季朝臣。前甲斐守範
國。左少辨經長。右近少將良貞。少納言經成。左兵衛佐信長。
丹後守憲房。左兵衛權佐資任。刑部少輔經平。散位實綱。藏人
式部大丞橘季通。右衛門權尉。右方人書分等。召藏人
藤原俊經。藤原貞章。右方人書分等。召藏人
右衛門佐良宗。賜之。方人近江守實經朝臣。木工頭舉
宮亮行任朝臣。右近衛少將資房朝臣。右中辨資通朝臣。內藏
頭師經朝臣。中宮亮爲善朝臣。侍從通基朝臣。藏人大學頭國
成。右衛門佐良宗。右近衛權少將資綱。少納言經家。右衛門佐
經季。參河權守經信。信濃權守定季。藏人式部少丞橘義清。右
衛門權少尉藤原家。經輔朝臣進下申賢郎可爲方人。
之由。此間右方申云。依簡次第。可被定仰。
歟者。理非相分。許不未明。去九日遣藏人藤
原貞章於里。被仰下藤原通房可爲左方人。

之由。又自余小舍人相分可賜左右之。左源高房。平。經章。藤原範定。右源行家。藤原兼宗。源賴綱。可從勅定之狀奏達了者。仍左方人相率向彼曹局。是爲賀方之面目也。同十五日講演畢後。諸卿或以退出。交談之次。事及明日之興。各非無芳意。以左藤宰相中將。左兵衛督爲左方念人。以左源宰相中將。右兵衛督爲右方念人。更漏漸闌。議定既了。三位中將當日追爲左方念人。文殿并水閣南廊爲左右宿所。當日早旦。東廂水閣。鋪高麗端疊爲公卿座。北上面。簀子鋪東階北間鋪紫端疊爲左方座。南上面。同階南間敷紫端疊爲右方座。北上面。僧侶座如例。諸卿參入。內大臣。春宮大夫。中宮權大夫。權大納言。宮內卿。左衛門督。右衛門督。侍從中納言。權中納言。大藏卿。左藤宰相中將。右宰相中將。左源宰相中將。左兵衛督。左大辨。右大辨。右兵衛督。三位中將等也。雖講經畢。僧侶未退。蓋爲見象外之佳遊也。西剋左方參。着直衣二藍指貫紅染掃褂。先文殿南釣臺下撫二船二隻。家督依爲方人。一本家便備之高欄有蝶鈿。以色色絹爲上張。以緋

絹爲窓。解纜之頃。方念人宰相中將。左兵衛督。三位中將。渡寢殿東階。歷東對北階。來臨。事出意外。喜歎不足。文臺員刺洲濱等同在舟中。藏人所雜色左兵衛尉藤原經行。源賴實。同齊賴等。鼓棹盪舟。自後池北。歷寢殿東高階下潺湲。參進。伶人依方誠在舟矣。先吹調子。次奏陵王破。雖云仙舟。何以加之。絲竹鏗鏘。池水湛然。遂不知方外也。人間也。亦不知崑岡歟。蓬瀛歟。縱觀之者目不暫捨矣。或衣色照耀於簾中。或香氣酷烈於檻外。斯乃優悠好耳目之娛也。棹影穿波着南洲。階下異草雜樹。奇巖怪石。千名万形。不可觀縷而記之。念人上卿先下。次方人等着座。雜色源賴實執地敷。三重杜若色浮線綾。以象眼爲裏。重其上縫三韋手。其裏以銀鑲文。列階下。藏人右衛門尉藤原俊經傳取鋪東長押上。次藏人式部大丞橘季通。藤原貞章等同昇文臺洲濱。銀洲濱立沈石。以鏡爲水。以珊瑚。立文臺。以銀作之。鑲扇十枚。書和歌。入銀透宮。置其上。以象眼爲紙。依各題目畫圖。以銀爲骨。彫鏤居玉。次賴實昇員刺洲濱。松樹柅石潺湲之類皆以銀作之。以二藍象眼爲地敷。小舍人平

經章着ニ藍指貫赤色細長傳取置ニ簀子敷。次右方參入着

座。着ニ直衣昌蒲指貫蘇芳染擣衣。或又各任ノ意。藏人式部少丞橘義清。右

衛門尉藤原宗任。昇ニ文臺洲濱立ニ東長押上。

洲濱上立ニ沈石。作ニ銀釧麥一裁櫃内。銀蝶各書ニ和歌十首。以ニ三重昌蒲色象眼爲ニ地敷之。次義清家

任昇ニ員刺洲濱置ニ簀子敷。以ニ鏡爲ノ水。以ニ藍象

地敷。判者中三位依ノ召參進。左方員刺小舍人

平經章。右方員刺義清着座。召ニ經長資通朝臣

等令講ノ歌。

一番 月

夏の夜もすゝしかりけり月影は庭白妙の霜と見えつゝ

宿からそ月の光もまさりけるよのくもりなくすめはなりけり

右は一番の歌よみたり。はしにくけにおもひたれと。こ

とかきりありて。左おかしきおもひありとて。かつにな

二番 五月雨

五月雨にみつのみまきのまこも草茹ほす暇あらしと思ふ

ときおりふしにしたかふとてかつ。

五月雨の空を眺むるのとけさはちよわかねたる心地こそすれ

三番 池水

左 資 業

ちよをへてすむへき水をせきれつゝ池の心にまかせたる哉

せきいるゝわろしとてまく。

としをへてすむへき君か宿なれば池の水さへ濁らさりけり

四番 菖蒲 輔 親

あやめ草尋ねてそひくまこもかる淀のわたりの深き沼まで

昔よりつきせぬ物はあやめ草深きよとのにひけはなりけり

五番 瞿麥 四條中納言

とこなつのにほへる庭は唐國にをれる錦もしかしと思ふ

庭の面に唐の錦をしくイる物はなをとこなつの花にそ有ける

なをとこなつとあるわるしとてまく。

六番 郭公 茂忠朝臣

なかぬよもなくよも更に時鳥まつとてやすきやはねらるゝ

いますこしよしとてかつ。

よもすからまちつる物を時鳥またともなてすきぬなる哉

七番 螢火 良頼朝臣

さは水に空なる星のうつるかとみゆるはよはの螢なりけり

右 衛 門

ないたゝる五月の闇もなかりけり澤の螢のまかふひかりに
八番 照射

左勝 公 資

五月やみ天つ星たにいてぬよは照射のみこそ山に見えけれ
右 衛 門

五月闇ほくしにかくる燈火のうしろめたくやししかばみる覽
九番 祝

左 能因法師

君かよは白雲かゝるつくはねの峯のつゝきの海となるまで
海も山になり山も海とならばあしかりなん。海はうみ山
はやまにてあらんこそよからめ。いまくしとてまく。

右勝 すけふさの少將

おもひやれやそ氏人の君か爲ひとつこゝろに祈るいのりを
十番 戀

左 能因法師

くろかみの色もかはらぬ戀すとてつれなき人に我そ老ぬる
右勝 春宮大夫

あふまてはせめていのちの惜けれは戀こそ人の命なりけれ
左右 每講和歌一判者先以相定。第四題菖蒲
也。而左方先獻瞿麥歌。次右方出菖蒲歌。依
有乖違。改獻同題。各判決之後。右方云。題
之次第已以超越。待定之後可獻次歌者。殿
下仰云。天德歌合時。一題依違兩歌弃置。乃
是勝負未決之前。弁論逸興之故也。而今評定

之後奈何論難不致。前詞何有後求哉。仍右
方獻瞿麥歌。又至于講照射之比。右歌有
燈之詞。左方云。以照射一稱燈。古今之什所
未聞也。彼是交爭左遂勝。各評定了後中三
位賜祿。蘇芳織物。於東簀子敷。超拜之間。超卿相
座。是情感之餘。不知手之舞足之踏。歟。次
勸公卿酒饌。高杯本家。孟酌數巡。感情方催召
伶人。令奏管絃。丹波守濟政朝臣執拍子。興
闌醉淵。卿相相唱和。其後內大臣退出。即有曳
出物。龍蹄。自餘上卿猶以在座。爰明月斜照池
水浮光。歌吹之聲漫沸。晴天優遊之間。夜欲
參半。仍春宮大夫中宮權大夫權大納言退下。此
間曳出華厩馬各一疋。餘興不盡之故也。他上
卿同以退出。女房料左方調備檜破子。以紫檀地
繪圖山水盡風流之美。方人傳取置簾前矣。
足。以三村濃色結之。
同廿一日。左方又參八幡住吉。是爲遂宿賽
也。歌合日爲決雄雌。別。方人未時會合左中弁經
湮渭所立願也。
輔朝臣宅。或着直衣。或着狩衣。尾張守實基
朝臣在府之間不入。方人。已悔遲參之咎。苦
陳交會之詞。滿座響應。甚於鐘谷矣。各騎馬
出洛爭瞻之者連々不絕。至于淀津。乘舟。

師房

源大納言家歌合 長曆二年九月十三日

題 秋夜月

左

のとかにも見ゆる空かな雲晴てゐることをそき秋の夜の月

右

おほ空に月の光のあかき夜は楨の板戸もさゝれさりけり

あき風

左

萩の葉に吹わけて行秋かせのまた誰里をおとるかすらん

右

秋ふかくなりゆくまゝに風の音の梢に高く吹も行哉

露

左

白露ををきつるまゝに見渡せはぬきにぬきてもにたる玉哉

右勝

秋のゝは折へき花もなかり鳧こほれてちらん露のおしさに

霧

左

見わたせばはるかに見ゆる河霧の深き秋にもなりにける哉

右

花見むとしめしかひなみ秋霧のあしたの原に立わたりぬる

薄

左

花薄まぬくはつねの物なれと行過かたきあきの野邊哉

右勝

つねひら

美作守定經朝臣儲ニ酒饌。戊剋於ニ夫山前。着岸。先參ニ石清水。禊了奉幣。金銀御幣。其後權別當院被_レ賜_レ祿。白大掛。次走ニ十烈。其後奏ニ音樂。先萬歲樂。次賀殿。次陵王。廻雪之袖當_レ夏頻翻。修理權別當清成儲ニ饗饌。事了退出。廿二日。於ニ山崎橋下。乘_レ舟。聯句聯歌。和漢任意。樂人舟間唱ニ鼓笛。過ニ江口。間。遊女舟數隻。任_レ波容_レ興。光粉妖冶。歌曲幽咽。盖非_レ受_ニ天然之性_一。乃是土俗之爲也。酉剋着_ニ熊河岸_一。駕_レ馬向_ニ住吉社_一。禰宜率_ニ神人_一。鳥居外迎謁。禊了先向_ニ宿所_一。左少弁經長弁ニ備鋪設饗饌。依着_ニ禮殿_一。後奉幣。金銀御幣。次社司賜_レ祿。白掛。避_レ座再拜。次走_ニ十烈_一。次奏_ニ音樂_一。太平樂。賀殿。陵王。各賜_レ祿之。經輔朝臣召_ニ右近將監多正方_一。脫_レ衣。是爲_ニ賞_一妙舞也。即令_レ題_ニ倭歌_一。諷吟之間。達_レ旦不_レ寐。以_ニ式部大輔資業_一。令_レ書_レ序。以_ニ前甲斐守範國_一。令_レ講_レ歌。

本云。此長元歌合者西行法師之筆寫之。

さためなき風しふかすは花薄心となひくかたは見てまし
菊

左勝

香のみこそまきれさりけれ初霜のあしたの原のしら菊の花
右

むはたまの黒髪なから年ふれは菊のあたりのなつかしき哉

秋田

左持

早苗より穂に出るまで守る田をかりにのみ社人は見えけれ
右

秋の田になみよる稻は山河に水ひきうへしきなへなりけり
紅葉

左

右勝

たつねつる心のまゝにいりにけり紅葉の色のふかき山邊に
風吹はそこにくれなぬみちぬめりいかはかりなる山の紅葉そ

鴈

しら雲に宿かりかねのきこゆるは旅の空よりゆけは也けり
右

よしきよ

左

をとつれぬたひのなきかなかりかねの行かふ道も遙なれ共
鹿

左

つまこひて秋の夜深く鳴鹿のこゑには人もいやはねらるゝ
右

いつ方と聞こそわかね小夜更てたちともしら鹿の音なれは

弘徽殿女御十番歌合 長久二年

一番 霞

左

春のこしあしたの原の八重霞日を重てそ立まさりける
右勝

侍従乳母

春は猶千種に匂ふ花もあれとをしこめたるは霞なりけり
かすみの春のけしきはよしのゝ山あたりにて。としこ

ろみなれて侍れは。けにさためまし侍りぬへきを。この

あしたのはらひと所に八重よりもまさりてたちそふと
侍るばかり。かく許の言のこゝろいふせう見えはへめ

り。大かたに萬をもおしこめたらむこそさることゝ思

しられはへれ。

二番 柳

見るに猶たくひなき哉春風に岸の柳のなひくけしきは
右

侍従乳母

花ちりぬ柳の糸はうちはへて吹くる風にまかせてそ見る
あをやきのいとめてたきすちに思ひより侍れと。風に

つけてよるなとはへるけしきは。しつのをたまきくり

返しなへてのよのことにて。なひくすかたはめつらし
く見え侍れは。今一しほの色まさりぬへきを。大かたの

歌のしなのえすくれす。なをちとや申すへく侍らむ。

三番 櫻

左

ちらてたにほとへぬへくは花櫻もろこし迄もやるへき物を

右勝

しゝうのめのと
遠近に匂ふ櫻の花を見て野にも山にもちるこゝろ哉
このうたは我もくゝとあかつきの露におもひをと
め。春の花に心をそめこのよならすもろこしまておも
ひやりてはへれと。なかゝにひのものと國なから。野
にも山にもこゝろをちらすはまさりてそ侍る。ひかめ
にや。

四番 春駒

左勝

しけなか

立はなれさはへに荒るはる駒はをのか影をや友とみるらん

右

まこも草青みわたれは澤にあらで取つなかれぬ野への春駒
まこも草あをみわたれるなとは。ひきところある春駒
と見えはへるを。すへそおくはしらぬやうに見え侍る
に。をのかゝけをやともとみるらむと侍るうたのすへ
は。しめのうちにかちふちうちたぬへう。のり人ゆか
しくなむ。

五番 さわらひ

左

さかみ

狩人のとやまをこめてやきしより下もえ出る野邊の早蕨
侍従のめのと

右かつ

花をのみおりにかへらん早蕨はおきのやけのに今そ生出る
さわらひといふ事はいにしへの人々も。さまゝに
ひはへるを。これもひとつのすちなり。花をたにおりて
かへらむとは。けにいとおかしく思ひよりてはへるを。
もえいつるをはるはかりならは。ほかほかもなとかも

とめて歸らさらむ。さてかり人のとやまをこめてと侍
るは。いとあまりあつまちにいりたるやうにいひつる。
うとましくこそはへれは。かれはまされるにや。

六番 歸鷹

左

伊勢大輔

行そらもなくく歸る鷹金の聞えぬほとに成にけるかな

右かつ

あかそめ
とおもふにイ

歸る鷹雲の遙になりぬなり又來ん秋もひさしとおもへは
かへるかりの雲井はるかになり行かた。いつれもく
おなし心におもひをかけてはへれと。行そらもなくな
くとはへるよりも。又來ん秋をとへるは今すこしま
さりてや侍らん。

七番 かはつ

左かつ

良選

みかくれてすたくかはつの諸聲にさはきを渡る井手の浮草

右

赤染

歸るへき道も遠きにかはつなく河邊に目をも暮しつるかな
大和歌はことのおこりやかであることをよむへきに。
かはつは夕暮よりなきはしむる物としりてはへるを。
日暮しつとめてより聞はしめて。をのゝえくたしけむ
人のたとひにそおほえはへりける。さてすたくかはつ
のもろこゑにと侍るは聞所まさりてはへり。すゑの
よにはかゝることありかたくや侍らむとそ見え侍る。

八番 なはしる

左勝

藤原隆資

山里のそとものをたのなは代に岩間の水をせかぬ日そなき

右

侍従のめのと

うへぬよりもめるものを小山田は苗代水にまかせたらなん
なはしる水のこひちにおりたちてきたためさむこと
は。いとふるめかしきほとに成にて侍れは。ことのほゝ
かりおほうはへりなから。うへぬよりもるといふこと
は。しかかきなかしけん水くきおかしう侍るを。なはし
る水にまかする事や。よになかれてふることにはへら
む。山里のそとものをたにとはへる歌は。すかたをそ今
すこしあらたむへう侍れと。すへよみすましてはへれ
は左はまさるへきにや。

九番

祝

左持

永成法師

君か代はすゑの松やまはる／＼とこす白浪の数もしられす

右

赤染

なぬか行濱のまさこの数ことに岩ほとならんほとをへよ君

なぬか行はまのまさこといふことは。いはひのかたは
たしかにはへれと。むけにいそのかみのふることのか
きりもとすゑに見えて侍らす。末の松山とはへる歌の
すかたはいとおかしう。しきしまのやまとことはたと
見えはへれと。男女いかにそやある。うらみうたと覺え
ていはひのうたには聞えず覺侍れは。これもかれもわ
たつみのかた／＼にたかせふねさして。いつれまさり
ともましかたく侍れは。これをや持とさためましはへ
らむ。

十番

戀

左

伊勢たいふ

世中にわりなき物は人しれす戀つゝとしをつむにそ有ける

右勝

あかそめ

夢にたにみはやと思に人戀る床にはさらにふされさりけり
戀のうたはいつれも／＼心をしむるすちなれは。をと
らぬこゝろはへはへるにも。夢の床にふされぬまては
へるうたは。今すこしまさりてやと見えはへれは。あは
せからにやはへらん。これはあるやうありて。右かちに
はさためたるそといひ侍りけるを。ひたりの人々相摸
にいかにとひ侍りければ。あからさまなるたひねの
いとつれ／＼なるに。ちかきまたさためたるとか。夢さ
めむ後のよまての思ひ出にかたるはかりもわかみえぬ
かな。

判者

大和守義忠朝臣

歌撰人

左

相摸

右

侍従乳母

此本以西行上人自筆本一書寫之。少々雖
有ニ不審事一任本寫畢。重而以ニ類本一可
レ考レ之而已。

祐子内親王家歌合

永承五年六月五日。於賀陽院一宮御方。有和

歌合事。兼日關白殿下相分男女各六人。賜題。

櫻。郭令。獻和歌。以西渡殿爲上達部座。聊

有。益盤儲事。雖在前議。引以及今日。蓋爲

相。當庚申也。右大臣不期而會。內大臣。中宮

大夫。源大納言。左衛門督。右大辨。左大辨。式

部大輔資業各在座。着鳥帽子直衣。聽不及

廣席。坐席惟窄。仍殿上侍臣不得追從。歟。頃

之。宮女房小辨。所獻和歌入香壺宮。自御簾

中。出之。便擬文臺。歟。以銀彫透唐草。以瑠璃

置口。其底以鏡爲水。以銀龜爲薰爐。在雲母爐。香四

散。蘭麝漫薰。置洲濱。立沈香。右洲濱上立銀鶴一雙。爲

築匙臺。兩鶴翼上置郭公鹿歌二首。又銀

兼房朝臣。令傳取置寢殿南廂西戶前。女房所

獻歌置宮上。各書彩牋。或以題目趣。施畫

圖。或以金銀泥。成文彩。風流之美。不可觀

縷。男以白色紙書之。兼房朝臣。又召菅圓座。

置御簾前。爲左右講師等座。左講師右大辨。孟酌

數巡之後。令講和歌。有儀。以女房爲左

方。以男房爲右方。衣色照輝於簾前。香氣

發。越於戶外。乃縱觀之好。不。俗眼所可窺。

獻歌者依召候。南簀子敷。觀會有。限。感情難

抑。仍內大臣評。定和歌。源大納言注。勝負。依

無。籌刺也。象外之勝遊。未曾有者歟。

一番。櫻。典侍

吹風。所思。へは。つらき。櫻。は。な。こ。ろ。と。ち。れ。る。春。し。な。け。れ。は。式部大輔資業

君。か。す。む。や。と。に。ほ。へ。る。櫻。花。春。く。る。ひ。の。か。さ。し。な。り。け。り。侍從

二番。左。霞。た。つ。峯。に。ほ。へ。る。櫻。こ。そ。な。に。も。ま。さ。る。物。に。は。あ。り。け。れ。中宮亮兼房朝臣

長閑。にも。み。ゆる。櫻。の。匂。ひ。か。な。や。と。の。け。し。き。や。風。も。し。る。ら。ん。伊勢大輔

三番。左。君。か。よ。の。は。る。か。に。み。ゆる。山。櫻。と。し。に。そ。へ。て。そ。匂。ひ。ま。し。け。る。讃岐守家經朝臣

右。さ。て。も。な。を。あ。か。す。や。あ。る。と。山。櫻。花。を。と。き。は。に。み。る。由。も。か。な。出羽辨

左。さ。く。ら。咲。は。る。の。霞。の。た。ち。し。よ。り。花。に。心。を。や。ら。ぬ。ひ。そ。な。き。大膳大夫範永朝臣

右。さ。け。は。な。を。き。て。み。る。へ。き。は。霞。立。み。か。さ。の。山。の。櫻。な。り。け。り。

五番

左勝

小 辨

たつねくるかひもある哉山櫻しら雲とのみよそにみつれば

右

兵部少輔經衡

年をへて匂ひまされは櫻花みるにあくへきはるやなからん

六番

左勝

相 摸

浅みとりかすむやまへは白妙の櫻にのみそはるはみえける

右

能因法師

春かすみしかの山こえせし人にあふ心地する花さくらかな

七番

郭公

左

典 侍

いつしかとまちつるよりも時鳥きゝてそいとゝしつ心なき

右勝

式部大輔資業

郭公こそにかはらぬ初聲をねさめてきけはとこめつらなり

八番

左持

侍 從

ほのかにてすきぬなれとも郭公聲は耳にもとまりぬるかな

右

中宮亮兼房朝臣

なつの夜はさてもやねぬと郭公二こゑさける人にとはゝや

九番

左持

伊勢大輔

きゝつともきかす共なく時鳥こゝろまとはすさよのひと聲

右

讃岐守家經朝臣

時鳥かたらふこゑをきくおりそまたことゝは覺えさり鳥

十番

左持

出羽辨

さみたれにぬれてきなくはほとゝきす初聲よりも哀とそ聞

右

大膳大夫範永朝臣

初聲をきゝそめしより時鳥ならしの岡にいくよきぬらん

十一番

左勝

小 辨

ねぬよこそかすつもりぬれ時鳥きくほともなき一聲により

右

兵部少輔經衡

まつほとに一聲なきて過ぬれはなこりこひしき子規かな

十二番

左持

相 摸

さみたれもあかてそする時鳥よふかくきゝし初音計に

右

能因法師

夜たにあけはたつねて聞む時鳥しのたの杜のかたに鳴也

十三番

左勝

典 侍

秋霧のはれせぬ峯にたつしかは聲はかりこそ人にしらるれ

右

式部大輔資業

妻戀も色にや出るさほしかのなくこゑ聞はみにそしみける

十四番

左勝

侍 從

小倉山たちともみえぬ夕霧につまゝとはせる鹿そ鳴なる

右

中宮亮兼房朝臣

たかせこに妻こひかねてなく鹿は逢坂山にゆきてすめかし

左

伊勢大輔

夕霧につまゝとはせる鹿の音やよるぬるしきも驚かすらん

右 讃岐守家經朝臣

鹿の音そねさめの床に通ふなるをのゝ草ふし露やをくらむ

左 出羽辨

きく人のなそやなからん鹿の音はわかつまをこそ戀て鳴らめ

右 大膳大夫範永朝臣

あらし吹山のおのへにすむ鹿はもみちの錦きてやふすらむ

左 小 辨

さをしかの聲きこゆ也みやきのゝもとあらのか萩の花盛かも

右 兵部少輔經衡

妻こふる鹿のこゝろは秋萩のしたはをみてや色になるらむ

左 相 摸

露むすふ萩の下葉やみたるらん宮城野のはらにをしか鳴也

右 能因法師

秋の野に妻を戀つゝ鳴鹿はしからむ萩になくさみやする

勝負褒貶之比。第十七番鹿歌持疑。反覆被レ定

持了。其後簾中有二驚耳微音。相挑之心中動

外形一歟。滿座高聲乘レ興催レ感。着二本座一後置

碁手料紙一。擯俗佳遊掩レ古被レ今。遣美難レ盡餘

興交侵。賞嘆之腸欲レ罷不能。仍當座上卿以

三首題一。同成二嘉詠。召二讃岐守家經朝臣一令講

歌。

郭公 殿 下

晨明の月たにあれやほとゝきすたゝ一こゑのゆく方もみむ

同題 右大臣

ほとゝきす過にし聲を忍ふるは待しよゝりもめこそ覺ぬれ

櫻 内大臣

櫻花あかぬあまりにおもふ哉ちらすは人やおしまさらまし

郭公

まつことは今もたえせず時鳥なのみたちぬる五月と思へは

鹿

秋をたに空にしるなる小男鹿の戀にはまとい聲を聞ゆる

櫻 中宮大夫

花の色にあまきる霞立まよひ空さへ匂ふやまさくらかな

郭公

ね覺して聞たひことに時鳥ふりせぬ物は五月雨のこゑ

鹿

過て行秋のかたみにさをしかの己か鳴音もおしくやある覽

櫻 源大納言

君かよにあふへき春のおほかれはちる共櫻あくまでそみむ

郭公

あたに聞人もやあらむ時鳥ぬるよもなくて待出たる音を

鹿

いつとなく思ふ心のなけれはや秋しとしかの妻を戀らむ

櫻 左衛門督

ちることはならはさりけり櫻花匂ひそめしは誰かをしへし

郭公

五月闇またれし物を時鳥いまは山ちに入やしぬらん

鹿

秋の野に多かる物をゝみなへしなにをこふとか鹿の鳴らむ

櫻

右大辨

たつねてもなをみなみはや櫻花咲とつけらむところゝに

郭公

哀ともしらぬもの故ほとゝきすまつに幾よのれ覺しつらむ

鹿

たひことのかりぬの野へに夢覺ておきふす鹿の聲を聞かな

櫻

左大辨

たくひなく匂ふやと哉櫻花ほかの春をはなにか尋れん

郭公

ほとゝきすよ深き聲にならひつゝなかなぬ折さへ待明すかな

鹿

み渡せはのへの秋霧立こめて鹿の音のみそかくれさりける

殿下抽_三郭公題_一殊令_レ詠_三嘉什_一詞林花鮮_二豐流

泉清_一講席之間諷吟無_レ止嘉歎之餘右大臣

執而懷_レ之退出之比曳_二出龍蹄二_一正_一正_一右大臣

大臣前_レ駟者取_レ之浮雲半漢觀者驚_レ眼自餘上卿達旦退

出興味不_レ盡之故也式部大輔資業奉_二教旨_一

粗記_レ之而已

皇后宮春秋歌合 天喜四年四月晦日

判者

内大臣頼宗

歌撰者

左頼宗 右長家

講師

左顯房 右隆俊

講師

一番

左 臨時客

春たては先もろ人もひきつれて萬代ふへき宿に社くれ

右 八月十五夜月 伊勢大輔

くもりなき空の鏡とみゆる哉あきの夜なく照す月影

二番

左 春日祭

範 永

けふ祭る春日の山の神ませはあめの下には君そさかへん

右 七夕祭 内侍土佐

萬代に君そ見るへきたなはたの行あひの空を雲の上にて

三番

左 櫻

右 大臣

春雨にぬれてたつねむ櫻花雲のかへしの嵐もそふく

右 こまむかへ 下 野

ひく駒の數より外に見えつるは關の清水の影にそありける

四番

左 鶯

宮大夫隆國

山里の垣根に春やしるからむかすまぬさきに鶯のなく

右 はき

美 濃

折やせむおらてや見まし秋萩に露も心をかけぬ日そなき

左勝 子日

頭中將

いつれをかわきてひかまし春日野のなへて千年の松の緑を

右 鷹

伊勢大輔

小夜更て旅の空にて鳴鷹はをのか羽風や夜寒成らむ

六番

左持 梅

相 摸

岩間もる水にそやとる梅花梢は風のうしろめたさに

右 小山田

伊勢大輔

秋の夜の山田のいほは稻妻の光のみこそりあかしけれ

七番

左 青柳

宮内侍

みな人の心にかけてくる物は岸になみよる青柳の絲

右勝 もみち

民部卿長家

大井河瀧つせもなく秋ふかみ紅葉の淵と成にけるかな

八番

左 残雪

但 馬

花ならておらまほしきはなには江の芹の若葉にふれる白雪

右勝 菊

民部卿

紫のまたあかさりし二葉にも菊に心はそめてしものを

九番

左勝 祝

源三位俊賢

長濱の眞砂の数もなにならすつきせすみゆる君か御代かな

右

大夫隆國

住の江に生そふ松の枝ことに君かちとせの数そこもれる

右清書

左兼行眞名

右經任卿母

右天喜四年四月晦日後冷泉院皇后宮歌合也。

備中守定綱朝臣家歌合

治暦三年三月十五日
式部丞基綱合之云々

題

祝

春雨

霞

鶯

夜風

綠草

蕨

櫻

岸柳

苗代

歸鷹

弦月

款冬

躑躅

歌人

判者

一番

祝

兼 清

神まして君か命のしるしあらは千とせをふるの社なりけり

右

忠 季

かすしらす行末遠き君か代は鶴龜よりもひさしかりけり

二番

春雨

左持

佐 忠

春雨はぬるれとさらにいはれす花さきそむる始と思へは

右

昌 任

しめくんと降くらすなる春雨は軒のしつくの絶るひまなし

三番

霞

左勝

基 綱

あさまたきふる秋きりに夕されの春の霞はたちまさりけり

右

若乳母君

はれまなく夕のかすみたつ折は月なき夜半の心地こそすれ

四番

鶯

左勝

惟 兼

としことになきふるさとも春くれは猶めつらしき鶯の聲

右 信通

としふれとみゝなれはせて鶯の聲きくことにめつらしき哉

五番 夜風

左 相兼

さ夜更てはけしかるらしこち風の花咲宿はよきてふかなん

右 良成

風のをとの横の板戸に聞ゆるはよ更て人のとふかと思ふ

六番 線草

左 爲時

をしなへて野もせにおふる草の色は緑深くそなり増りける

右 成道

野邊みれはみとりの草に成にけり變らぬ松の色はかりして

七番 蕨

左 頼成

野へ見れば烟もたゝて春の日にもえいつるものは蕨なり鬼

右 貞義

花見にと人にはいひて春の野に立ましりつゝ蕨をそおる

八番 櫻

左 頼賢

さくら花さける盛りの山里はそらよりふらぬ雪とこそみれ

右 國信

なかめつゝおるへき枝も見えぬ迄ひまなく咲る八重櫻かな

九番 岸柳

左 成助

みる人はきしになみよる青柳のいとに心をかけてこそくれ

右 永則

河波のみとりの色にみえつるは岸の柳のかけにそ有ける

十番 苗代

左 頼方

みな人のをのかひきくせき入つゝまかする物は苗代の水

右 頼季

みわたせばみな苗代におりたちて民のいそかぬ里のなき哉

十一番 歸鷹

左 相任

雲路わけこゝろそらにて行鷹のこの春はかり歸らさらなん

右 成任

行鷹のみち見えぬ迄しら雲の八重立かくせしはしとゝめん

十二番 弦月

左 經俊

出るよりこよひ計は弓はりの月は入までのとけからなむ

右 道賢

弓張の月はのとかにみゆれとも入山のはのなからましかは

左 經光

千代ふへき君か御代にはいとしくゐての山吹咲まさり鬼

右 信

咲さかすおほつかなきに山吹をよらぬゐてなくたつねつる哉

十四番 躑躅

左 石見君

此比はつゝしの花に照されて端山のしけりこくらからしな

右勝

五節君

さほ姫のみなくれなるにいは蹴躑もえぬ計もそめてける哉

左勝

信 綱

みるめなきあまのうき舟戀にのみこかれて物を思ふ比かな

右

忠 季

思ひし人もなきよにあちきなく戀にしにする名をや止めむ

右以猪苗代兼誼本書寫遂一授了

祿子内親王家歌合

治曆三年九月九日庚申

題

菊

歌人

左

美作

讃岐

駒

出羽

せし

九月九日おまへに。女房たち菊ひととつゝうへさせて。御らんせさすとして。

一番

菊

左

美 作

君か世をなか月のかふ移しうふる菊にはならふ花なかり鬼

右

中 務

君かため移しうふれは菊の花ちとせ句はんことそしるけれ

二番

左

讃 岐

うつしみは冬しも深くうつろへよ菊より又は花もあらしな

右

兵 衛

うつしうふる宿をやかねて菊の花嵐とゝもにをける白露

三番

左

こ ま

君かすむ宿に千年の秋をへてのとかに菊のにほふへきかな

右

せし

露深く植つる菊のえにしあればぬれても千世の秋はへぬへし

四番

左

出羽

うふるよりしかこそみゆれ白菊の久しかるへき花の匂ひは

右

さいも

なか月のなかきためしの菊の花心してをけ夜半の初霜

五番

左

せし

ふかきえを心にかけてうふるよりかすをきまされ菊の白露

右

さいも

色々のにほひをこめて初霜のおくゆかしけに見ゆるしら菊

祿子内親王家歌合

治曆四年五月五日

題

菖蒲

時鳥

五月雨

橘

卯花

樗

早苗

照射

螢

水鶏

夏草

蚊遣火

歌人

左

右

兵衛

駒

近江

武藏

大和

式部

讃岐

せし

出羽

中務

さいも

美作

遠江

一番

菖蒲

左

兵衛

玉にぬくけふの菖蒲は宿ことの軒端にかけて誰か見さらん

右

駒

なかきねをたつぬくとせし程にひきもやられぬ菖蒲草哉

二番

郭公

左

あふみ

時鳥なけは心そあくかるゝ空たのめすとおもふものから

右

むさし

夏山の道もまといぬ時鳥あかてやみぬることゑをたつれて

三番

五月雨

左

大和

なかむれと行かたもなし五月雨のをやまん空の雲間をそ待

右

しきふ

かきくらし晴間もみえぬ五月雨はたこの裳裾をほす程もなし

四番 橘

左

さぬき

玉にぬく花たちはなをいつしかとけふの袂に香りかへたり

右

せし

たち花の花吹みたる夕風はむかしをこふるみにそしみける

五番 卯花

左

さぬき

山かつのしつの垣ねも卯花のおりにや人のおもしろくみん

右

しきふ

卯花の盛りならすは山かつの垣ほにたれかこゝろとめまし

六番 榎

左

兵衛

身にかへて誰かみさらむいつしかと待しあふちの花咲に鳧

右

中務

我せこかいつかとまちしかひありて妹にあふちの花咲に鳧

七番 早苗

左

里遠み山田のさなへとるほとはしつ心なくものをこそ思へ

右

美作

衣手のぬれゆくまゝに早苗とるたこはかりほに秋を待らむ

八番 照射

左

出羽

奥山のしかのたちとをたつぬとてとしにのみもいる心哉

右

美作

ともしせぬ木影なれば小倉山立かくれける鹿そかひなき

九番 螢

左

さいも

澤水にすたく螢の光には草の根さしもかくれきりけり

右

中務

久方の月ならねとも草村のほたるそよるの光なりける

十番 水鶏

左

遠江

まつ人のなそありかほに夜を重ね叩く水鶏におとろかる覽

右

武藏

待人のなき宿なれと夜もすから叩く水鶏におとろかれぬる

十一番 夏草

左

やまと

夏草をむすふしるしのなかりせはいかてゆかまし山里の道

右

こま

見渡せはのへの夏草さをしかのかくる計りもなりける哉

十二番 蚊遣火

左

出羽

誰かかくつけはをきけん夏くれはまつした燃る宿の蚊遣火

右

せし

すくもかきをのれふする蚊遣火の煙にむせふ賤のおやなそ

呂保殿歌合 治暦四年十二月廿二日康申

こよひろほとのはさまにて。庚申かしをまもらせたまはむとて
うたあはせあり。ひたむのかたむたにまいる。いては。みま
さか。せし。さかみ。こま。右の方人にまいる。みやとの。中
將。さいも。なかつかさ。式部。題五首をたまふ。月光似氷。雪
埋松。夜霰。寤夢。炭竈烟高。佛名。これなり。はたみかのれい
れいたるつきもかけたかく。ちゝたる雪のよも。とりのこゑ
あかつきをつけわたるに。つかひをはりぬ。
左右のかたむたうたなきは。その名をかゝすかし。
一番 月光似氷

天の原みなそこかけててらす哉池の水にやとる月かけ
左 いては
右 みやとの
冬のよの氷にやとる月見ればひかりもさゆるこゝち社すれ
二番

見る人のみにさへそしむ池水のこほりの上にすめる夜の月
右 みやとの
こほるとも宿れる月のみかゝすは池の鏡は暗くやあらまし
三番 雪埋松

ちとせふる松の縁はふかけれとひとよの雪にうつもれに鳧
右 いては
高砂の松はいつれそしら雪に梢もみえす埋れにけり
はりま

四番

左

松かえもふりつむ雪にうつもれて冬は縁の色そわかれぬ

右

おほつかないつれみとりの松ならんみな白妙に雪し積れは

五番

左

ねとはなし霰ふるやの板まあらみりくる毎に夢も覺つゝ

右

冬の夜はあられの音に寐覺つゝ夢みることのたえてなき哉

六番

左

冬の夜は夢結ふまそなかりけるあられ降しく音したえねは

右

夢さむる夜半のあられのもりくれは片しく袖に玉を亂るゝ

七番

左

つねよりも深山さゆへしはれまなくまきの炭竈烟たちます

右

大原のまきのすみかまたちまさりあま雲はれぬ山とこをみれ

八番

左

すみ竈の烟は雲とたなひきてはれまもみえす大原の里

右

おほはらや横の梢も見えぬまでやくすみかまの煙たつめり

九番

佛名

左

あらはるゝみよの佛のなをきくに積れる罪は霜ときえなん

右

頼みつるみよの佛の名をきかは積れる罪もあらしと思ふ

十番

左

年のうちにつもれる罪をのこさしとみよの佛の名をそ唱る

右

君かよをみよの佛にとしへてもかへすゝもいのる月かな

日記は女すらもすへきわさならむよ。わすれぬさきにとめよと。おほせことありしかは。またかきつけてこそはへめれ。

治暦四年十二月廿三日のよのみわさにて南。

こよひうたよみし人々。

みまさか

後一條院乳母。從三位藤豐子トイフ。右大將道綱女。大江定經美作守ノ時妻トナル。仍ミマサ

カトヨフ。

こ

ま

上東門院ニテ小馬命婦。後一條院ノ時内侍トナル。後一品宮ニマイル。父母イマタ見アタラス。

せ

し

一條院皇后女房。後一品宮ニマイル。中納言平惟仲女。此人道雅ノ妻ニテ子一人アリシ。イカカシテカアリケン。アル時ミソカニケテ一條院皇后宮ニマイル。後ニ大和守義忠妻トナル。仍大和ノ宣旨トヨフ。

みまさか

式部

せし

中將

い て は 上東門院ノ女房。後三品宮ニマイル。出羽守平秀信女。仍出羽弁フヨフ。

さ か み 入道一品宮女房。父未詳。母能登守慶滋保章女。公資朝臣相摸守ノ時妻トナル。仍號ニ相摸。本名乙侍從。

さ い も 入道一品宮女房。三河守菅原爲理女。母ハ加賀丹波守奉親女。仍加賀左衛門トイフ。時ノ人サイモトヨフ。

中 將 大齋院女房。源爲理女。母上東門院播磨。大齋院中務姉。

式 部 上東門院式部命婦。後朱雀院ノ乳母トナル。筑後守藤信君女。時ニウタヨム女房ニ式部トイフ名多シ。紫式部。和泉式部。繪式部。紀伊式部。小式部。マキラハシサニシルス。

み や と の 後一條院中宮女房。出雲守成親女。仍ミヤトノ出雲トヨフ。

な か つ か さ 大齋院女房。源爲理女。同院中將弟。後ニ土佐守範基妻トナル。

呂 保 殿 ハ 香 爐 峯 ノ 圖 障 子 ニ ア リ 。 仍 呂 保 ト ノ ト イ フ 。 麗 景 殿 ヲ 麗 ノ 字 ヲ ヨ マ イ テ 。 計 以 殿 ト イ フ ニ 同 シ 。 香 ノ 字 ハ ヨ マ ヌ ナ リ 。 日 記 ハ 出 羽 弁 カ ク ト イ フ 。

群書類從卷第百八十二

和歌部卅七歌合三

氣多宮歌合

延久四年三月十九日國司
通宗朝臣於三社頭合之

題

松 榊 鶯 鹿 櫻
 紅葉 卯花 雪 郭公 千鳥

歌人

松

通宗

よろつよの子日とそ見る春かすみ棚引山の峯のまつはら

榊

橋成元

かけまくもかしこき神の榊はな手にとる君は萬よやへむ

鶯

國元

梅か香をとめつゝ鳴か山里の垣ねをつとふ鶯のこゑ

鹿

吹かへす葛のうら風さひしきに鹿も鳴也秋の夕暮

櫻持

源縁

山さくら白雲にのみまかへはや春のこゝろのそらに成らん

紅葉

行宗

秋ふかみあさ夕霧のたつ田山紅葉のにしききてのみそみる

卯花

卯の花のをりはかりこそ山里のかきねの山は一重みえける

雪

つきもせず越のしらねに年積る雪は常盤のものにそ有ける

郭公

明方にほのめくこゑは時鳥ねさめのこひのこゝちこそすれ

千鳥

ねさめする有明かたの淋しきにさほのかはらの千鳥なく也

攝津守有綱家歌合

承保二年八月廿日拾國合之七番

題

風 霧 野花 芦 雁
鹿 戀

歌人

左 帶刀兼定 史大夫成時 兵衛大夫 縫殿助
右 帶刀敦定

越後四郎 馬大夫頼清 上總大夫惟清 遠江前司
越後前司 馬允宗忠 兵部大輔

一番 風

左勝 帶刀兼貞
秋風になにはのあしもなひくめりうらみつるかな人の心を
右 越後四郎

二番 霧
いつくにも秋は身にしむ風なれとなにはゝ芦のしつ心なし
左勝

かば霧のひまなけれは程近みゆきかふ聲を音にこそきけ
右

さたかにもえこそみわかね難波瀉ふる秋霧のたち隔てつゝ
三番 野花
左勝 史大夫成時

みやきのゝ小萩かはらの花さかりから錦ともみえわたる哉
右 上總大夫惟清

年をへて野への花をはみつれ共かはかり匂ふ秋はなかりき
四番 芦
左持

難波江にまたき初雪ふりにけり芦のほにいててしけき汀に
右 遠江前司

難波瀉芦かりをふねなかりせは水にきえせね雪とこそみめ
五番 雁
左勝 兵衛大夫

年をへてきく度ことに身にしみてこひしきものは初雁の聲
右 越後前司

かりそめの宿としらるゝばつ雁の雲るはるかに鳴わたる哉
六番 鹿
左 縫殿助

まつ人もなき山里も秋は猶ねられさりけり鳴しかのこゑ
右 馬允宗忠

いつとても忘やはするいかなれは秋しも鹿の妻をしるらむ
七番 戀
左 帶刀敦定

こひすれは旅ねの床の草枕露置増るものにそ有ける
右 兵部大輔

戀しさに命たえなはつの國のいく田の杜の名にやたかばん
右 攝津守有綱家歌合以猪苗代謙庭本書寫一校了

内裏歌合 承暦二年四月廿八日

題

子日 霞 鶯 櫻 藤花

菖蒲 郭公 五月雨 七夕 月 戀

讀人

實政朝臣 公實朝臣 家忠朝臣 伊家朝臣
政長朝臣 匡房朝臣 顯季朝臣 通俊朝臣
仲實朝臣 道良朝臣 道時朝臣 爲家朝臣
基綱朝臣 顯綱朝臣 師賢朝臣 正家朝臣
定綱朝臣 家道朝臣

講師

左方

權左中辨師賢朝臣

右方

右中辨通俊

判者

皇后宮大夫源顯房

一番 子日

左方

ねのひするあまたの人の引つれて君か千年をまつと社みれ

右

君かよにひきくらふれは子日する松の千年もかすならぬ哉

頭實政朝臣

中宮權亮公實朝臣

いつかたもなむあらん。まうせとおほせらるゝに右の人。右は千年をかすならすといへり。あれはたゞ千とせをまつとあれは。ことのほかにとおれり。又松といふことかくしたる。子日歌のためしにあらず。そへたるとわさといひたると。いかてかひきくらへむさ申に。もろきたいきの下に。あめの下にありとあらん人のまたん千とせをは。すくなくやはあるへきとはかりまうすに。右の人あめの下の人のみな待とも。おなし折のちとせにこそあらめ。かすならすといひたると。ゆくすゑはるかに遠くなんあると。又松をそへたるとばえのへ申しぬに。右のうたの難を。つゆはかりも左に申人なし。判者大納言。右の歌はいみしうおかしくよき歌也。左のうたはたたよみたるにうたなれと。かつと定られしこそ心えさりし。

二番

霞

左持

たに河の音は隔すまかねふくきひの中山かすみこむれと

右

左中將家忠朝臣
藏人辨伊家

いつしかとけさは霞のたなひけは春きにけりと空にしる哉

俊綱。このうたはまつさしところこそなきやまひあり。

へたつゝへ「ま」こといふはきのやまひありと申す程に。

右の人々たに河の音とよみ。まかねふくきひの中山といへれは。ふるき歌ののこりすくな也といふ。通俊。このかすみはたちとこそはるかなれ。女四宮の前裁あは

せにも。さかのをすきてあたし野まで行けんも。あちき

なしなとこそ。さためためれと申すに。實政。へたてか

くすはつねに讀ならはしたること也と申せさも。その
ことはきこえず。させるろうもなし。ふる歌あまりかく
れなくとりたる事も。えいひやらぬほどに。右のうたを
難せよとあれは。實政。いつしかとあるはこゝろえず。ま
つ春もなくて。いつしかとはいかていふそといふに。通
俊。やまもかすみてなとこそはよめなと申程に。判者い
つれもく持也とさためられぬ。

三番 鶯

左持

刑部卿政長朝臣

としをへてきけとあかぬはわか宿の花にこつとふ鶯のこゑ

右

美作守匡房朝臣

いかなれは春くるからに鶯のをれかなをば人につくらむ

我宿とはうちにてはよまぬことなりとなすれは。左。天

徳のうた合にもよめりなといひて。右のうたをもから

にとよめることは。いかなることそといふに。右の人々。

からにといふ辭。きゝつるからによしの山とよめるは。

歌合のうたにて。かちて後撰などにもいれるうたそか

し。わか宿さは近くはよまぬことゝなんきく。ことはの

もしばふるきよきうたによめりとも。たゝ今のうたの

定にそしたかふへき。左よはけ也。右もされ歌なりと

て。持と定られしも。され歌とはいかなるをいふそと。

四番 櫻

左

讃岐守顯季朝臣

たつねこぬさきにはちらて山櫻みる折にしも雪と降らん

右勝

右中辨通俊朝臣

春のうちは散らぬ櫻とみてし哉さてもや風のうしろめたきと

右の人々さきにはちらてとあるは。花をむけに惜む心

なし。ちらさてあらんこそ本意なれなと申程に。師かた

惜きのあまりに。わかみるをりよりは。こさりつるさき

にとはいふなりと申に。右の人々。中々みぬ折にとおも

ふらん心は。後のうたによまんするにや。また注なとな

こそかゝましとといふに。人みなわらひぬ。判者持と定

めんとある程に。御前よりさりとをもとりまさりあら

んとおほせらるゝに。さらは右かつとさためられしも。

いとあやしく。さきにはいかにさためむとおほされけ

るにかとおほえし。

五番

左持

中將家忠

藤浪はみきはの松にかゝれ共風のけしきはのとけかりけり

右

丹後守仲實

みなそこも紫ふかくみゆる哉岸のいはねにかゝる藤なみ

實政かいふやう。かけうつるといはては。いかてかみな

そこむらさきふかきとはよむへきと申ほどに。右の人。

藤の歌の本にするうたには。たこのうらのそこさへに

ほふとよめるは。いつかうつれるなとよみたと申に。

通俊。左の歌にかせのけしきのとけしとよめるも故な

し。藤なみににたらんからに。かせのともかくもあるへ

六番

左持

大宮亮通良

菖蒲草なにのためしに引そめてかゝらぬ宿のつまなかる覽

右

大江匡房

けふよりはつまとそ頼むあやめ草かりそめ也と思はさら南
師賢あやめにあらて。戀にてなんあるといへは。右の人。
なにこともつまといふ處あり。やとならねはさつき
つまのもの也。宿ならてふるきうたにも。秋はわか心の
つまとあらねともとよめり。またなにのためしにとよ
めるは。あやめをものゝためしにせんといふこと。いは
れすといふに。通俊。つねならてひくとよめるは。いか
なるそといふに。さねまさ(原カ)めんあやめ草とよめる
歌ありといふに。俊綱通俊など。是はなにの歌そ。誰か
よめるそとへは。その人のともおほえすなといふに。
判者。右のうたのけふよりのむらん。いまはしめたり
とて右まくと定られぬ。なにのためしにといふも。今は
しめてしかにこそ。はたまうすめりき。

七番

左持

郭公

右近中將家忠

時鳥あかて過ぬるこそあとなき空をなかめつるかな

右

藏人辨伊家

ほとゝきす曉かけて鳴こゑをまたぬねさめの人やきくらん
とし綱申すやう。あとなきそらとは。いかによみたる
そ。郭公はあとの物かは。又いましきやうなりと
申すに。左ことにのふるところなし。右の歌もまたぬ
ね(原カ)さめといへるいはれなし。たゝおのつからきく
らんひとを思ひやりたるも。おもへる處なきやう也と
て。持と定られぬ。

八番

五月雨

左持

道時朝臣

五月雨にたまえの水やまさるらん芹の下葉のかくれゆく哉
右 爲家朝臣

五月雨のひまなき頃はいせの海士のも鹽の煙たえやしぬ覽
このたひのうたは定られす。左かちぬ。右の人々はおほ
みついてたるひよりのうたにこそと。すゑににてし
のひやかにいへは。左の人きゝつけて。下葉のといへた
らんを。いかてさおもふへきそ。あしのほすゑのかくれ
なとしたらんをそ。さはいふへきとてをかれぬ。

九番

左持

七夕

藏人少納言基綱

何れをか思ひますらん七夕のあふ嬉しさとあはぬつらさと
右 丹波守顯綱朝臣

たなはたに心はかすとおもはねと暮行空はうれしかりけり
あき綱。たなはたは七日をのみよむもの也。あふたなは
たあはぬたなはたふたつあるやう也。又あはぬつらさ
とはむゆかの日よりさき。八日のひよりのちのかたか
といふに。師かた。あひたる程のうれしさを。あはぬほ
とのつらさにまされりといふなりといへば。つらきも
いはれす。さるちきりのあるにこそあれ。心とつらきか
は。さらはひこほしをも。なとゆかぬそとやいふへきか
といふに。左また。たなはたの契りつらしなとよめるこ
とは。ふるきおほくの歌も。みなさはいはれなしと思
ふへき。またなとかさぬに心はうれしきそといへは。さ
れは心もかさぬに。なとくれ行かうれしからんと讀な
りといへは。左たかすゝろに日のくれんかうれしかる

へきやうなし。後朝などにこそくもるさへこそなとも
うれしかれ。たなはたをこそうれしからんともよみ。又
わかこゝろをばかしたりといははこそは。我はうれし
からめなといふに。例の持と定られぬ。

十番 月

左

權左中辨師賢朝臣
み草ゐてかけたにみえぬにこり江の底まで照す秋のよの月

右勝

東宮學士匡房

おほつかかなこや有明の空ならんよるともみえす照す月かけ

右の人のいふやう。左の歌いとよからぬ心ちなむする。

さらぬ水にも月ぼうつりなむは。光もさして おとゝう
ちなんすると申すに。通俊か影たにうつらさらん水に

はいかてか。せめてあかき月なりともすむへきといふ

に。左の人ことに申す事なし。右のうた難しまうせとあ
るに。政長よはあけにけるはと申す。さらに心うる人な

し。たまさかに右かちぬ。

十一番 鹿

左持

左中辨正家朝臣

ゆふ暮はをのゝ萩はら吹風にさひしくもあるか鹿の鳴なる

右

右近中將公實朝臣

霧ふかき山のをのへにたつしかはこそ計にや友をしるらん

實政。このうたは近きふる歌なりと申すに。公實。こそ

はかりこそ人にしらるれといふと。友のゆく方をする

といふ事。ことごとといふに。右の人。うたはもしつ

かひをこそいへ。もあるかといへるわたり。いとにくさ

けなり。是もきむもとか家の歌合にかはらさるはとい

ふに。又持と定られぬ。
十二番 紅葉

左持或勝

師賢

吹かたに散もみちはの從へはうらやましきはこからしの風

右

匡房

立田山散もみちはをきてみれば秋はふもとにかへる也けり

紅葉ちらすらん風の。うらやましきこそあやしけれ。大

かたは。さはわさと紅葉をちらさはやとおもひけるか。

心にもかなはさりけるにや。又したかへはと讀るも。む

けに歌のことはとも覺えすみはけなれと。まさふさ申

すに。師賢麓の里の秋にそありけるといふうたににた

りといふに。匡房。これは又心もえて申すなめり。これ

こそまことのことしらぬはくち惜けれ。このうたはか

へるといふことをよむなり。秋をもみつるをは。かへる

といふはをも根にかへるといふことなれば。秋のふも

とにかへるとよむ也。麓のさとの秋なりといふ歌に。い

つこかにたるなといふに。判者かすはいつかたのまさ

れるそとあるに。あやしく成ぬ。右。今ひとつなんまけ

たる申に。此うたかたはひとしくなりなんとて。ちと定

十三番 雪

左勝

實政朝臣

ふる雪のひかす積れはしからきの楨の青葉もみえす成ゆく

右

通俊朝臣

雪降はみえしときはの山もなしみな白妙の梢のみして

右の人。雪は一夜にもあを葉かくるはかりはふらぬも

のかは。日かすあなかちにつもらすともありなん。まきの葉といはむに。文字のたらねは青葉といへる程。水とりのうは毛なとをいはんやう也。又これは松の葉しろきよしの山といふ歌をよめるにこそと申すに。左。そのことゝえまうさて。右の範永か五月雨の歌にみえしをさゝのはらもなしとよめるに似たりとなんする程に。右しをりたりと定られぬ。

十四番 祝

左

道時朝臣

みつかきはつきしと思ふ神風やみも裾川のすまん限りは

右

匡房

八百萬こゝらのかみの年ならはひるよる守る君かみ代かな

祝のうたはとかくな申そとて。左かちぬ。

十五番 戀

左

内藏頭定綱朝臣

わたつみにみるめ求むるあまたにも千尋の底にいらぬ物かは

右

越前守家道朝臣

戀すとも泪の色のなかりせはしは人に知られさらまし

右の人。左のうたはいつこに戀はあるそ。海人たに千尋の底にはいる。われもいらんと思ふらんも。すゝろかましき心ちすといふに。左も右もわらひぬ。實政。みるめこそは。戀よといへは。さてはあまのみすへき事なゝりなといふほとに。右かつと定られぬ。なにのみるめにありけむ。千尋のそこの心のあさゝもみなみえにけり。左の人々かもにまいりて。よろこひまうしてこうまくらへなとせさすとて。はらへしてたちける程に。内のた

いはむ處より。みちのくにかみのたてふみして。あふちのうすやう二かさねにそかきたりける。

流れてもいとゝや頼むみたらしの河せにみそく祈かなひて

かへし。

頭 辨

いのる事はせに深くなりぬれは汀ひとしくみえぬ也けり

みたらしのみそきは神もうけしかし汀まされる流と思へは

殿の女房。ものみ車よりこむまかきたるあふきのつ

まに。すたれのさきして。

嬉しきはみたらし河のためしにて引くらへつる駒のかす哉

かへし。

頭 辨

禊して心くらへにかちぬれは早くはこまもみゆるなるへし

右のかへし。

いつはりの心くらへのかちまけは空にたゝすの神そしる覽

右内裏歌合以猪苗代謙庭本書寫一按了

若狹守通宗朝臣女子達歌合

應德三年三月十日於七條亭

題

春駒 櫻 子規 水鷄 萩
月 鶯 雪 戀 祝

歌人

左 右

判者

通俊朝臣

一番 春駒

左勝

阿闍梨

春かすみたちの薄つのくめは冬うちなつむ駒をあれける

右

ある馬は皆葦毛かけにそみえつれと澤に移れる影も有鬼

左のうたは。春かすみたちの薄なといふほとは。おなし野なれとつきおかし。さはあれと近きやむことなき人の歌に。冬たちなつむ駒そいはゆるなといふ事のはへれは。めつらしけなけれと。右の歌のあしけかけなとおもひよりたる。たはふれ歌のやうなり。又やまゐとや申へからむ。

あさ緑野への薄はひにそへてつのくむ色のまさる也けり

二番 櫻

左持

さくら咲はるの山へは雪消ぬこしのしらねのこち社すれ

右

山さくらちらぬかきりは白雲のはれせぬ峯とみえわたる哉

左歌右のうた。ともにめつらしきふしなけれと。あるはこしのしらね。あるははれせぬ峯なといへる程。をののいひなれうためきたり。

咲まさる句ひそみえぬ櫻花いつれか人のわきて折へき

三番 郭公

左勝

郭公あかすもある哉玉くしけふたかみ山の夜はのひとこゑ

右

五

郎おほとねり

五月雨の空になけはや子規あかぬ心もはれせさるらむ

左の歌はふたかみ山あかすなといふ心いとおかし。ふることなとにやあらんとおほえ侍れと。たしかにそのことゝも覚えぬほとはさためかたし。右のうたは五月雨の空にはれせぬなと思ひよりたるほともおかしけれと。郭公をあかぬ心の。はれせぬといはんことそいかゝ。

ふたかみの山ほとゝきすき鳴也はれせぬ空を誰か尋ん

四番 水鷄

左

藏人大夫

とふ人もなき山里のまきのとをよはに叩くはくゐな也けり

右勝

中務命婦

月のさすまきの板戸としりなから誰あけよとて叩く水鷄そ

右の歌月のさすまきのいた戸なといふ事。めつらしからねと。いひなれておかしくなむ。

楨のとを叩く水鷄はおほかれと月の光そさし増りける

五番 萩

左

備前助一品宮御乳母

秋はきを咲のへことに尋つゝ露もおとさてみるよしもかな

右勝

阿闍梨

左歌。かみのもしつかひ。いひにくゝて。露もおとさす
なといへる心。いまもむかしもいひふるしたる事なれ
は。めつらしけなし。右のうたあたの大野なといへる
程。いとおかしうおもひよりたり。萩のにしき織けるな
といへる處。いまそこの葉はにしき織けるなといへる。
故き歌のこゝちせられて。珍らしけなれと。おほかた
いひなれたるこゝちせられてこそ。

六番

左持

出雲君

月みるとねぬよなゝの重なれは戀する身とや人にいはれむ

右

中務命婦

みる人の心に月のいりぬれはまつ山のははかひやなからむ
左歌ねぬよなゝのといへる程。歌めきたれと。月の心
すくなくて。こひの心おほくなむ。右歌心に月のいると
いふ事は。近き人のよまれたる歌になんある。又まつ山
のはといふことは。人こそ月をはまため。山の月またむ
ことはいかゝ侍らん。たゞしまちとる山のはこそつら
けれといふる歌(ことゝ)を思ひよそへたるにや。かれは
人の惜むあまりに。まちとるとみゆるにそ。此心にはあ
はすなん。

七番

鶯

おしこめて夕霧たては久方の月はさやかに見えぬ也見

左勝 出雲君
浮ねしてしたさえわたるをし鳥のうは毛にさへも置る霜哉

右

山河に心ほそくそすたくなる獨みなるゝをしにやあるらむ
左歌は末にうは毛にさへも置る霜かなゝといへるこ
そ。霜といふ題をよまんこゝちすれと。うきねしてした
さえわたるといへる。歌めきていとおかし。右のうたは
すたくといふことを。こゝろほそしとはいかゝいふへ
からん。あまたある聲をいふにやあらん。かうやうのこ
とは。證歌なとや入へからむ。獨みなるゝなとはいひな
れたり。

八番

左勝

雪

なにはえの芹のしのやも雪ふれは花の都にをとらさりけり

右

阿闍梨

あさとあけ衣手寒くうちみれはまかきもたはに降るしら雪
左のうたとりわきておかしき處なれと。花のみやこ
にをとらさりけりなといへる事。けにさもいひつへし。
右のうた朝戸あけ衣手さむくなといへる。ものいひさ
したるやうなり。うちみれはなといへるも。つゝみの瀧
なといはまほしくなん。又まかきもいかゝたはむへか
らん。

九番

左持

戀

いつくとも降白雪はわかなくに都はことにみゆる也けり

藏人大夫

人しれぬ思ひに年のへぬる哉いきのをたえはさてややみ南

右

戀しなは面影にもや別れなんそれはかりこそ身をは離れね
左歌人しれぬおもひにとしへぬるなといへる事は。い
ひふるしたる事なり。我のみしるはなといひつへくに
そ歌めきたるは。ふるきことなれはにや。右のうた面影
にわかるなといへること思ひえかたし。心あまりて其
詞たらすなといへるは。かうやうの事をといふへきに
や。これかれいきのを絶は。面かけにわかつといへるこ
とおなしやうになむ。

十番

祝

左勝

君か代は松よりすたつまな鶴の千歳をへつゝひなかへる迄

右

君か代はやほよろつよの神ことに齡をゆつる程としらなん
左はさても。右のうたやほ萬代の神ことにといふ事お
ほつかなし。

何よりも久しきものは雛鶴の松よりすたつ程にそ有ける

了
右若狭守通宗朝臣女子達歌合以百花庵宗簡本書寫一按

高陽院七番歌合（首イ） 寛治八年

題

櫻

時鳥

月

雪

祝

作者

左

大殿中納言君

周防内侍

一宮紀伊君

齋院攝津君

右

藤中納言通俊

顯綱朝臣

行家朝臣

左京權大夫俊頼朝臣

講師

左

右大辨基綱朝臣

右

右中辨宗忠朝臣

判者

帥大納言經信卿

一番

左勝

櫻

大殿中納言君

山さくら匂ふあたりの春かすみ風をはよそにたちへたて南

右

中納言通俊

春かせは吹とも散なさくら花はなの心をわれになしつゝ
〔此左歌いとうるはしうよまれたり。右歌は花の心をと
よまれたる。花の心やは侍らんと 思給ふれば左はまさ
りたりとや申へからん。〕

二番

左持

四條宮筑前君

くれなゐのうす花さくら匂はすは皆しら雲とみてや過まし

右

白雲とみゆるにしるしみよしのゝ吉野の山は花さかりかも

〔左歌はめつらしきやうによまれたれとも 歌の心はと
をくて雲と見つれと。ちかくてみれば紅に匂ふ櫻なり
けりとよまれたる也。さらは山なとかけてとをきこと
なとやあるへからん。右歌はめつらしからねと別に難
もなければ持とや申へからん。〕

三番

左勝

周防内侍

山櫻惜むこゝろの幾度かちるこのもとに行かへるらむ

右

顯綱朝臣

花ゆへにかゝらぬ山そなかりけるこゝろは春の霞ならねと
〔右かゝらぬ山といふことは中比の歌にてみな知たる
歌也。又霞かゝるとやよまれてあるへからず。おほつか
なければ左勝とや申へからん。〕

四番

左持

右大臣家讃岐君

八千代へんやとにほへる八重櫻やそ氏人もちらて社みめ

右

正家朝臣

風の音のときき春の宿なれはにほふ櫻をあくまでそみる
〔左八十氏人もちらてこそ見めとよまれたるは。いのち
ちらぬこゝろをちらてあれば俄に花のちらぬにやとお
ほゆるうへに。句の上ことや文字やおほからん。又右の
歌はあくまでといふ 詞よむことにてはあれと。花をあ
かんはいかゝ侍へからんとおほゆれば持とや申へから
ん。〕

五番

左勝

一宮紀伊君

朝またき霞なこめそ山櫻たつねゆくまのよそめにもみん

右

行家朝臣

おもふ事露たになきは山櫻はなみる程のこゝろ也けり
〔左歌はいとなひやかによまれ侍り。もしふることにや
あらん。右歌の思ふこと露たかりなしとはまことの歌
の詞には見すこそ給ふれ。左の勝とこそ申さめ。〕

六番

左

信濃君

たつねくる心もしるく山櫻いまこそ花の盛なりけり

右勝

頼綱朝臣

山櫻にほふ盛に風ふけはあたりの松も花さきにけり
〔左歌は殿上の花の歌なとに常に侍る歌。又わさとの難
にはあらねと目なれたるやうにて。右歌は風そかしけ
るといふ古うたのすちに。めつらしからねとすこし
まさりたりと見給ふる。〕

七番

左持

齋院攝津君

ちりつもる庭をそみまし山櫻かせよりさきに尋ねさりせは

右

左京權大夫俊頼

山櫻咲そめしより久かたの雲ゐにみゆる瀧のしら糸

〔左歌はいと心はへおかしう侍り。右歌はきらひやかによまれたるやうに侍れと持とこそ申さめ。〕

一番

左

中納言君

五月雨のはれぬそらにも郭公こゑはさやかに鳴わたるかな

右勝

通俊朝臣

郭公こゑのまゝにたつねつゝ生田の森に一聲そきく

〔此左のつゝきはまたくたりつかぬやうに覺え侍るはひかことにや。されといくたのもりにて聞なと歌めきたれは右勝とや申へからん。〕

二番

左勝

筑前君

山ちかくうらく舟は郭公鳴わたりこそとまり也けり

右

子規雲ゐはるかになのはやあさくら山のよそに鳴らん

〔此左歌いとおかしくよまれて侍めり。かゝるふることあるやうにほのおほえ侍れとたしかならねは一定申かたし。右歌は心ふるゝき歌と見給ふれ。上句もとの句も本歌とも侍らん。若朝倉や木丸とのに我をれは名乗をしつゝといふことをよめるにや侍らむ。下句はもし昔見し人をそ今はよそにきく朝倉山の雲非はるかにと

いふ歌にや侍らん。さらば朝倉山に名のりをしたらんを聞とあらんはかなひなん。此ことのおほつかなく侍れは左勝とや申へからん。〕

三番

左勝

周防内侍

よをかさねましかね山の郭公雲のよそにて一聲そきく

右

顯綱朝臣

あくるまでましかね山の郭公けふもきかすやくれんとす覽

〔此歌は同しやうにのみ申侍を。左は時鳥を聞たる歌右歌はまたきかねは。さき／＼も聞たるをは勝とそ申める。〕

四番

左勝

讃岐君

ほとゝきす夏のよな／＼ま／＼て去年も今年も一聲そきく

右

正家朝臣

きゝつともいかゝかたらむ郭公おほつかなしやよはの一聲

〔右歌問人もなきにいかゝ語らんと侍ることつゝかねやうにきこゆれは左の勝にや。〕

五番

左勝

紀伊君

きゝてしも猶そまたるゝ子規なく一こそにあかぬこゑろは

右

ほとゝきす音信しより音羽山ふもとの里をかれすとふかな
〔左歌よくしりたるやうに聞給ふるに。右のかれすとふとはなくてよみたるにやことたらぬやうにこそ見給ふれ。左の勝にや。〕

六番

左勝

信濃君

ほととぎす雲井のこゑを聞人はこゝろさへこそ空に成けれ

右

顯綱朝臣

郭公いまそ鳴なるとなりにも吹つる笛を音にとらめて

〔右歌笛の音とゝめつといふこと。おもひかけぬことなれは左めつらしからねとも勝りたりとこそは申さめ。〕

七番

左勝

攝津君

ゆめかとおおとろかれぬる子規またも音せぬよはの一こそ

右

俊頼朝臣

待かねてぬるよもあらは郭公あかねためしの名をやたまし

〔左の歌は今すこし思ひや入て侍らん。〕

一番

左勝

中納言君

曇りなきくものうへまで照月はいと光をみかくなりけり

右

通俊朝臣

月みれはひるとそ思ふ秋のよをななき春日と思ひなしつゝ

〔右歌にひるとといふ事又これ同事にやと申しかは。

中納言はひる日とはみな又言かはりたれは同じことにあらすとの給ひしを。詞かはりたれと同やうなれは猶さる心なしと聞給内に。櫻花咲ぬる時は常よりも岑

の白雲立まさりけりと云歌合の歌いとよき歌也。それに猶まさるへしとこそ申しかとも。かく物え申されさ

りしかは。左の歌いともえさらさりしかは殿下にかかさふらふへきと申しかは。例などはいかかとおほせ

二番

左

筑前君

きみゝると空にしればや秋の月曇らぬかけのよゝにすむ覽

右勝

あふ坂のせきの杉原下はれて月のもるにそまかせたりける

〔右歌は君みると空にしればやとよまれて末にすむらんとよまれたるは。末の代はさもやまれん。はしめを

代々といふことはあまり久しうこそ思給ふれ。右歌杉原下晴てと侍る月のさし入て後侍らん。またしきには

れたりといはむこと先立てなん思ひ給ふると申たりしに。ともかくものへ申さゝりしところにも。なとかいは

れさらんと思ふ給ふれは右勝にや。〕

三番

左勝

周防内侍

つねよりもみかさの山の月影はひかりさしそふ天の下かな

右

顯綱朝臣

岩橋の神のちきれるかひもなしくまなくてらす秋のよの月

〔右歌岩橋の神の契れるとよまれたるは葛城の神にや侍らん。さらは此はしをはえわたさすところいひつた

へたれ。月にはえわたさしとやはあらん。月のあかきかひるのやうなれはこそさもみえめ。さこそ月の隈をよ

まれたれは神もさやはいひしとおほさむと思ふ給ふれは左の勝にや。〕

四番

左勝

讃岐

秋のよはいとゝなかくそ成ぬへき明るもしらぬ月のひかりに

右

正家

常磐山した葉の露のかすことに影さしそふる秋のよの月

〔左めつらしきことのみ見えて。右の歌のときは山とよめるは。山口のみやかて露はをかね下葉といふことは。いかなることにかあらんと見給ふれば左の勝にや。〕

五番

左勝

紀伊

かゝみ山みねよりいつる月なれば曇るよもなき影をこそみれ

右

行家

水ならて人にも月やうつるらんみれは心のすみわたるかな

〔右歌人にも月やと侍るはいかなることによ。左の勝にや。〕

六番

左侍

信濃

くもりなき玉のうてなのみかけるに光をそふる秋のよの月

右

頼綱

秋のよの月に心のひまそなきいつるをまつといるを惜むと

〔左右歌よせることみえ侍らねは持とや申へからん。〕

七番

左

攝津

照月の光さえゆく宿なれば秋の水にもつらゝぬにけり

右勝

俊頼

山のはに雲のころもをぬきすてゝひとりや月の立のほるらん

〔右勝に侍るにや。〕

一番 雪

左侍

中納言

岩代のむすへる松にふる雪は春もとけすやあらんとすらん

右

通俊卿

押なへて山のしら雪つもれともしるきは越の高根也けり

〔左歌おかしくよまれ侍。右もうるはしく侍り。持にや。〕

二番

左

筑前

ふみゝける鳩のあとさへ惜きかな氷のうへにふれるしら雪

右

匡房

みかりのはかつふる雪に埋れてとたちもみえず草かくれつゝ

〔左歌鳩鳥ふみかけるといふことは。人こそふみめ鳩の心はしりかたし。又跡さへおしきとは跡をおしみたるにや。ふるくはおしきと云ことは雪をおしみたりとこそみゆれ。右草かくれつとよまれたるは。鷹かりに草かくれといふことは鳥の草にかくれたることを申にやあらん。これは雪を詠たるにこそ。されと雪の草かくれたるにやあらむ。右の勝にや侍らん。〕

三番

左

周防内侍

雪もみな降かひありて積ればやしら雲かゝる山とみゆらむ

右勝

顯綱

と山には柴の下葉も散はてゝ遠の高ねに雪降にけり

〔左歌は白雲かゝるといふ言葉。ふるきことゝこそ覺ゆれ。右歌下葉もちりはつといふことゝいかゝあらん。〕

四番

左

讃 岐

近江路はたみの笠のみみゆる哉こしもまさる雪にそ有ける

右

正 家

旅人のねすりの衣うちはらひはらひもあへすけさのはつ雪

〔左歌近江路といふ事何事にか。たみの笠といふことを

思ひてよまれ侍にや。それはさいはれてきこゆる物を。

さらは右の勝にや。〕

五番

左〔持〕

紀 伊

あまのはら空かきくらし降雪に思ひこそやれみよしのゝ山

右

行 家

雪ふれは野原を行も分やらすかやか下折いとゝしみたれ

〔左歌思ひこそやれ神なひの森といふ同じ心にや侍ら

ん。右かか下おれ雪に見たるともみえねはおなしほ

とにや。〕

六番

左

信 濃

遠近のみねのつゝきもみえぬまであまきる雪も降しきにけり

右

頼 綱

衣手によとのうら風さえゝてたなかみ山に雪ふりにけり

〔左歌勝にや。〕

七番

左

攝 津

降ゆきに杉の青葉もうつもれてしるしもみえぬみわの山本

右

俊 頼

ふる雪に谷のかけはしうつもれて梢そ冬の山ちなりける

〔左の歌いとおかしく侍り。勝にや。〕

一番 祝

左持

中納言

きみか代は萬代までにさしてけりみかさの山の神の恵に

右

通 俊

君かよの天のこやねのみことより祝ひそめし久しかれとは

〔左右やんことなき神をかけたれは申かたし。持に侍め

り。〕

二番

左

筑 前

君か代はまさこの數もあかすして瀨々の千鳥も猶そふる哉

右

匡 房

君か代は曇りもあらしみかさ山みねの朝ひのさゝん限りは

〔左猶そふる哉あなちにな侍らん。右の勝。〕

三番

左

周防内侍

きみか代は龜のお山に住鶴の毛衣さへや千代をかきねん

右

顯 綱

君か代はなからの濱のさゝれ石のいはねの山に成はつる迄

〔右はまさりてこそ見給ふれ。〕

四番

左持

讃 岐

萬代といのりそつむる君か代は山田の原の下つ岩ねに

右

正 家

君か代はかねてそしるき春日山二葉のまつ神さふるまで

〔左歌萬代とよみて又君か代とよみたるもいかゝあら

ん。持とや申へからん。」

五番

左持

紀伊

よろつよをまつの尾山の陰しけみ君をそ祈る常磐かきにはに

右

行家

あめの下久しきみ代のしるしにはみかさの山の榊をそさす

六番

左勝

信濃

萬代を又よろつよを増かゝみかけをならへてしるそ嬉しき

右

頼綱

もゝとせをかさねゝて君か代はつきしと思ふ萬よ迄に

七番

左持

攝津

千代ふへき君をまもれはみかさ山神の心ものとかかるらん

右

俊頼

おちたきる八十う治川の早きせに岩こす波は千代の數かも

〔右三番判之詞不見後人被勘之給ふへし。〕

中納言

勝一 負一 持三 筑前君 勝一 負三 持一

周防内侍

勝三 負二 讃岐 勝三 負一 持一

紀伊

勝三 持二 信濃 勝三 負一 持一

攝津

勝二 負一 持二 匡房 勝三 負一 持一

通俊

勝一 負一 持三 正家 勝一 負二 持二

顯綱

勝二 負三 頼綱 勝一 負三 持一

行家

勝無 負三 持二 勝一 負三 持一

俊頼

勝一 負三 持一

右高陽院歌合以村井敬義本書寫以流布印本及一本校合了

東塔東谷歌合 永長二年

題

苗代

水鶏

照射

擣衣

鷹狩

神樂

一番

苗代

左持

ますらはたに水ひきて小山田の苗代すとて春日くらしつ

右

春くれはをのゝ山田は苗代にゆきけの水をまかせこそすれ

左歌あまりにこはくて。おそろしきまでしなゝかなら

す。なかにみつひきてなはしるはなと讀る。つかへた

るやうに開えていやし。右歌にをのゝ山田とよめる。い

ひつかす。されはおなしほとこのうたにそ。

二番

左勝

賤のをは山田の氷とくるよりまつなはしろのいそきをそする

右

津の國やたか世わたりの河邊には苗代のためむせきをそする

右歌なはしろともおほえす。津の國のなにはほりえ。ま

たはさぬきのまのうの池なとのたおほくやしなはんと

て。しはしめけむこゝちそする。左歌はむろのはやわせ

なとならむにても。あまりにそとくおほえはへれとも。

すこしはまさりてそ。

三番

左勝

水鶏

さよなかに水鶏ならては山里の杉のいたとを誰たゝかまし

右

夏くれはたゞく水鶏に驚きて草のとさしをあげぬよそなき
右のうたとさしあくるといふこと。すこしおもふへし。
又草のとほそはたゞくとも。水鶏にはまかはすやはへ
らん。又一度はかられて。よことにあくらんもあまりに
そ。しかのみならず。たゞく水鶏をは。人かとおもひな
してこそかとをもあけめ。此歌はさこそ聞えね。ふるき
歌にもなときはよみ侍らむかし。もし又證歌などはへ
るにや。左のうた杉のいたとゞよめるは。かゝるとかも
なうて。けにときこえはへり。

四番

左持

さよなかに誰かはこんと思へとも驚かれけりたゞく水鶏に
右

まつ人のくへきよなれはさゝぬとをいかにあけよと叩く水鶏そ
左のうたに。誰かこんとおもふらんは。夢のうちのこ
にや。さらはこそはおとろかれめ。もしはまどろまぬさ
き。もしはまどろみたるのちならは。おとろかれけりと
は如何よまれはへるへき。又はものおそろしきかたさ
まのおとろきにや侍らむ。右歌にまつ人のくへきよな
れはとはへるは。さゝかにのふるまひなどのし侍りけ
るにや。おほよそすゑもふるめかしければ。持にや。

五番

左持

照射

鹿待とは山のすそにともしして夏のよなくたちあかす哉
右

すかるゆへ夏のよすからともしすと人にもへのに立あかす哉

左右おなしほと歌なり。右の歌のすかるゆへとよめ
るを。なか／＼しうゆへにとはへらましかは。もと末か
はらぬやうに聞えて。いよ／＼ひとしくはへりなまし。
いとしもはへらぬつかひとそいひ侍る。

六番

左勝

霧ふらぬくらふの山にともしひは覺束なしや鹿のたちとも
右

かつらきの神ならなくにともしする人もわりなし明る東雲
左の歌におほつかなしと讀るは。いかにへる事にか。
ともしはさつきやみにし侍るものそかし。くらうおほ
えは。ほくしをこそはうちふらめ。もしくらふの山と讀
はにや。ふるうたそこの心みれとも。それはなをましく
ならねは。歌合にはいかゝ。右のうたに。ともしするも
のゝふの心の。かつらきのかみのやうにおほゆるこそ。
すこしおもふへきこゝちし侍れ。しかをまちえぬこと
をなけくへき。明むよをはさまておもふへきならず。い
かにいはむや。なく一聲とよむこゝちのすれは。猶これ
はまくへきにや侍らむ。

七番

左持

擣衣

長月のなかきよきけは衣うつもゝこゑちこゑやむ時もなし
右

秋ふかみよ風し寒く成ゆけは衣してうつ音そ絶せぬ
右歌したゝかならずこほく。詞たらず。又もゝこゑ千こ

ゑ。たゝうち讀ことはあしかるへき事ならねとも。ひとへに文集をよむならは。萬聲とはいはまほしきを。けにもしの置にくゝ侍るそかしな。右歌しならかなれとも。ころもしてうつなといふことは中ころの名歌なれはちにや。

八番

左

秋ふかみよ風はけしゝむへしこそよもの里人衣うつなれ

右勝

夜もすから衣うつ也我ことやまたきく人もねられさるらん
左歌にむへしこそと讀るおもふへし。さすかによむやうある詞也。此歌にはかなはすやあらむ。せめては衣うちけれとやよむへからんとそみえはへる。そまにあたりて。風もはけし。衣をも打をきゝてよむならは。よ風も寒く吹なへにころも打也なとそよまれ侍るへき。又四隣の掃衣とはいひなから。よもの里に打あひなむも。あまりかしこましくて。心ほそからすやはへらむ。右歌はさせるとかなし。されはかつへきにや。

九番

左持

鷹狩

こゐもせずそりぬる鷹の行方みんなまきる雪の暫しやまなむ
右

みかりすとゝへる鷹をてにすへてあしたの原にけふも暮しつ左のうた。心はさもと聞ゆれとも。まくらもしにせずとよみ。こしのいつもしにみんと讀。はてになむとよめる。すこし思ひあはすへかりけり。又ふるき歌の心とそお

ほえはへれ。ひかことにや。右のうたみかりと讀る。なをおもふへし。いかなる野にも。うちまかせてよむへき事にや。あしたの原はさもきこえす。たゝけふやゝめるといふふることのみ思ひいてられてなむ。されともなたらかなれは持。

十番

左

さかりふのたかへる鷹を合すとてかたのゝみのに日も暮に鬼

右勝

御狩するかたのゝみのに雪降はくるふの鷹もしらふとそみる
左歌たかへる鷹と讀ることおもふへし。ふるき歌に。たかへる鷹のたひにかもせむと讀るは。なかころの人のさたしけるなむ聞つたへて侍る。またさかりふのたかへると讀るつゝき。よしともおほえす。右歌にしらふとそみゆるなとそいはまほしけれとも。けにいかゝはいはむする。されは猶これはかつへきなめり。

十一番 神樂

左持

これやこの天の岩門を押ひらきあらふる神もなこむみ神樂
右

十二番

左持

よもすからたきあかしつる庭火をは神も哀と思はさらめや
左歌よし。右歌はしならかにまことにそたにたり。
さかきには雪降ときのみかくらは面白さます物にそ有ける
右

にはかなる庭火の煙かせ吹はなひかさらめや神の心も
右歌。風ふかはなひくへしと讀るは。ふかすは神のこゝ
ろもなひくましきとや。もししかるならば。かくらして
たてまつるかひもなき事にこそ。かゝれはおほよそ風
に神の心なひくといふことの。たはふれことのやうに
おほえて。尾はなの末などにおもひなされ侍る也。右歌
もとそすこしおもふへくはへりける。こしの五もしに。
雪降はとけにあらさらましかは。又おもしろくといふ
ことふるめかしくはへり。近き歌にもまたはへり。され
ともかくらのおこりしりてよむなれは。とかにもはへ
らし。右歌もちかきうたとこそおほえ侍れ。それはこの
歌とりはへられてや候けむ。きゝおよけさらむはいか
かはけそすへき。おほかた歌のしたゝかなれは持。

右東塔東谷歌合以古寫一本按合了

山家五番歌合 天仁三年四月晦日歌人
不分左右當座探得之

題

卯花 野草 郭公 五月雨 寄衣戀

作者

中宮亮藤仲實 左近中將源師時 木工頭同俊賴

皇后宮權亮同顯國 左少辨同雅兼 少納言藤定通

前和泉守藤道經 木工助藤敦隆 阿闍梨大法師隆源

琳賢法師 一番 卯花 敦隆

遠近のかきねに咲る卯花はたかせこかくるゆふかとそみる

右 顯國

卯花のさけるあすかの里にねてまたきあけぬと驚かれつゝ

左 仲實

うのはなのしのゝに咲る山賤のかきねもたまの庭となる覽

右 隆源

枝毎に玉ぬきかくるうの花をさかはといひし人にみせはや

左 道經

下つ關ひかりともしきこのまよりもる月かけとみゆる卯花

右 俊賴

雪の色をぬすみて咲るうの花はさえてや人にうたかはる覽

〔し家集〕
〔え詞花〕

左 雅 兼

うの花のまたらのかきにいかにして道ゆく人の心とむらん

右 師 時

うの花のかきねにとまる旅人は月に宿かるこゝちこそすれ

左 琳 賢

さえぬよりあやめにみれはうの花の積れる雪とみゆる也けり

右 定 通

故里はすきならねともうの花の咲る垣ねそしるし也ける

一番 野草

左 顯 國

男鹿ふす原のゝ草の深ければさつをのゆみちほらはよりみゆ

右 俊 頼

鹽みてはのしまか崎のさゆり葉〔に千載家集〕は波こそ風のふかぬひそなき

二番

左 師 時

春もえしのはらの草のおひたちて夏はけふりとみゆる也

右 道 經

夏のゝは過そやられぬ急け共ゆくてにかゝる草むすふまに

三番

左 雅 兼

かへるさの道のしるへに宮城のゝ花つまはきを栞りてそ行

右 定 通

やきすてしふるのゝ小野のまくすはらたまゝ計也にける哉

四番

左 仲 實

〔マコ〕
あけをゝのひさきまぢりの淺茅生も今はすかるのふしか也

右 隆 源

道しはの茂るのみかは眞葛原まくほとにみなのは也にけり

左 琳 賢

花の折過かてにみし宮城のゝ萩のかつらもは茂りあひに

右 敦 隆

野へことにいつ茂るらんさゝみたつま朝伏鹿のかくるなる迄

一番 郭公 仲 實

とこよゝりかくのこのみを移し植て山子規の時にしそきく

右 師 時

あふさかの山子規なのる也せきもる神やそらにさゆらん

二番 左 琳 賢

常になけあはてのもりの子規しのひかぬ也こゑたてつなり

右 道 經

郭公鳴よのみかは鳴ぬ夜もまつときくとにいこそねられぬ

三番 左 雅 兼

忍ひ音はこよひはかりそあけはとくまたれてきなけ山郭公

右 顯 國

郭公あかぬ山ちにひかすへてよをそむくにも成ぬへきかな

四番 左 俊 頼

郭公なかかそいろのくひこまれこなくといふことな事ひそ

右 郭 隆

忍ひかねまたれて鳴ぬ子規ことしや聲にあかんとすらん

五番

左

郭公まつよのかすをしられはやふる聲をたにきかせさる覽

右

一聲のゆきかたもみむ郭公さ月のやみのなからましかは

一番 五月雨

左

五月雨は降からをのゝ忘れ水おしひたすらの沼こえはてゝ

右

五月雨にあせのほそ道水ふかみ田なかの里は人そかよはぬ

二番

左

五月雨のあまゝをまつと我さへも旅の假庵に日數をそふる

右

五月雨はひかすへにけり東屋の軒はのかやのしたくつる迄

三番

左

なぬかふるさ月の雨のさかなれは霽すも人をわひさする哉

右

賤のやをふくまもはれぬ五月雨にもりもとまらぬ杉の板葺

四番

左

日數ふる五月雨なれは難波めのやへ葺こやもゝりやしぬ覽

右

五月雨にのみなうみと成ぬれはをさゝか原は波そ立ける

五番

五月雨は常にわたりしみな瀬川かよはぬ程になりける哉

敦 隆

定 通

俊 賴

道 經

琳 賢

定 通

仲 實

雅 兼

敦 隆

師 時

顯 國

右

五月雨もする限ありけふはやめ民のをたにも暫しさほさん

一番 寄衣戀

左

いとほるゝあけのたもとに紅の涙のいとゝいるをそへつる

右

是をみよむつたのよとにきてさしてしほれしたつの寢衣かは

二番

左

あひきするたてしの蜚のふちきぬも何によりてか袖はひつ覽

右

我こひはしつのかり衣をのか身にあはぬ事をも歎きつる哉

三番

左

陸奥のしのふのねすりすり衣みなれてこひのしけりそふ哉

右

よと共にほせとほされぬ衣哉身をやく戀はきえぬものから

四番

左

なさけなくふりはなれにし袂にはいかで心のかくかゝる覽

右

なのりそを刈ほすあまのあさ衣おのれとしほる戀もする哉

五番

左

よも重ねうちはとけすと夏衣へたつる程による身ともかな

右

あはさらはしほちのたまもいかゝせん涙の海にぬるゝ袂は

右山家五番歌合以屋代弘賢本書寫校合了

隆 源

雅 兼

俊 賴

仲 實

顯 國

道 經

師 時

琳 賢

定 通

隆 源

敦 隆

散位源廣綱朝臣歌合

長治元年五月日

題

子日小松

鶯閑中友

霞隔山家

花滿遠色

夏草漸滋

藤花廻岸

卯花盛開

林間蟬聲

閑思七夕

叢裏虫聲

野花暮靄

露染紅葉

籬菊色々

曉見初雪

深夜擣衣

庭上鶴馴

歌人

左

女房

萱之貫

典藥助源雅光

紀康盛

小監物藤原貞光

大江文途

僧俊義

藤原兼行

忠基朝臣

散位顯親

平貞基

判者

一番

左

子日小松

女房

子日する松の葉ことにかそふれは猶そつきせぬ君か千歳は

右

女房

はるかなるきみか齡にくらへんと子日松をけふはひくかな
二番、鶯閑中友

左

鶯のこゑを友にてくらすかなひとりなむる春のやま里

右

散位藤原國基

山家は鳴うくひすのこゑのみそのとけき春の友と聞ゆる
三番 霞隔山家

左

萱之貫

おほつかたなりもみえず也にけり霞へたつるむら雲の里
之恒

右

春かすみ八重たちぬれば尋ねゆく道も忘れすくらはしの里
四番 花滿遠色

左

典藥助源雅光

なつかしきかこそ袖まで匂ふなれ花の梢ははるかなれとも
同

右

花さかり咲そめしよりあかなくによその梢を折つゝそ見る
五番 夏草漸滋

左

兼弘朝臣

あさみとりむら／＼みえし若草の夏とゝもにも深く也ける
紀康盛

右

夏草にはつさなとみしかと鹿ふすはかり也もゆくかな
〔マ〕
六番 藤花廻岸

左

藤原宗成

さためなく吹風なれば池水の岸をめぐりてよする藤なみ
少監物藤原貞光

右

藤浪のかゝらぬ岸のなけれはや漕くる舟のよるひまもなき
七番 卯花盛開

左 源成方

白妙にうの花さける垣ねをはつもりし雪とおもひけるかな

右 大江文途

み渡はたねの野へのうつき原みな白妙にさきにけるかな

八番 林間蟬聲

左 僧俊賀

ゆく風の雲のはやしに鳴蟬はこゑもともにそたく聞ゆる

右 僧俊義

夏木たちしけき梢に鳴蟬の聲きくからにあつくも有かな

九番 閑思七夕

左 平貞繼

八重むくらしける軒はをかきわけて星合の空を眺めつる哉

右 藤原兼行

七夕のあふよのほとは思ひやる心さへこそ空にすみけれ

十番 叢裏虫聲

左 女房

尋ねくるかひもあるかな草むらに我まつ虫の聲そきこゆる

右 女房

まつむしの聲も絶せぬくさむらは尋ねぬ人も尋ねきにけり

十一番 野花暮馥

左 明法生大比盛佐

宮城のやたつねてきつる藤はかましるくも匂ふ夕まくれ哉

右 忠基朝臣

今よりはいそきもゆかし入日さす野山の花そ匂ひましける

十二番 露染紅葉

左 女房

しら露のそむる紅葉のいかなれはから紅にふかくみゆらん

右 女房

いかに置しら露なれは紅葉はのくれなる深く色をそむらん

十三番 籬菊色々

左 女房

をく霜に籬のきくをみわたせは色々にこそうつろひにけれ

右 女房

をく霜に籬の菊をみわたせは色々にこそうつろひにけれ

十四番 曉見初雪

左 雅樂允藤原明信

かゝみ山曉かたにみわたせはあまきりあひて初雪そふる

右 散位顯親

朝ほらけまたふみわけぬ初雪に何れを道とわきそかねつる

十五番 深夜掃衣

左 紀助實

我妹兒かうつから衣さよ更てほのかに聞ゆいつこ成らん

右 平貞基

手もたゆく成もゆくらんさよふかみ衣して打里ののとけさ

十六番 庭上鶴馴

左 女房

庭の面に人に馴たるあしたつはよはひを君にゆつる成へし

右 女房

千とせふるやとの景色やしるからん汀のたつの馴にける哉

六條宰相家歌合

永久四年六月四日
於南六條泉亭行之

歌人

左

前木工頭俊賴朝臣

左近少將實能

散位藤原家信

筑前權守爲忠

主殿介兼能

浦風

或女房

右

前越前守仲實朝臣

右近中將雅定朝臣

加賀守顯輔朝臣

散位藤原道經

大貳上

皇后宮攝津

或女房

判者

修理大夫顯季卿

講師

左 散位家信
右 散位道經

讀師

左 前木工頭俊賴朝臣
右 散位仲實朝臣

一番 子日

左持

春日山ふもとの小野に子日してかことを神に任せてそみる

右

源俊賴朝臣
修理大夫上

ねのひする野への小松を諸人の君かよはひにひきかくる哉

左歌こと葉つかひなたらかならず。又子日の松をさし

置て神にことよするも。あしかるへき事ならねと。けふ

のことはかなはずや。又まつといふことあらまほし

くそ。右の歌はめつらしき事なけれど。なひやかなれ

二番 霞

左

あさみとり霞める空のけしきにやときはの山も春をしる覽

右

うらかせ少將公教
藤原顯輔朝臣

年ことにかはらさりけり春霞たつたの山のみねのけしきは

右歌かすみなどはさほ山にこそ讀まうてくれ。たつ田

山は紅葉の錦など申來ること也と。左のかたの人のの

たまはする。さらにくせなるへからず。たつたの山の鶯

のこゑとこそよみてはへめれは。左のうた。ときはの山

も春をしるらむとよめるこそ。己なきてやなといへる

をおもへるにや。にぬことにてなむ。かれはしかのこゝ

ろあるものにてしるにこそ。山はしらむことありかた

くなむ。しるとてもいかやうに有へきにか。されにまけ

とや申へからむ。

三番

左持

藤原實能

花さかり末のまつ山風ふけはうすくれなるの波そたちける

右

藤原仲實朝臣

たかさこの花のしら雲立にけり吾やまもり成やしなまし

此櫻のうたこそ。おもふたまへあつかひにたれ。ましか

き櫻さくころは。むかしもいまもあまた讀きたるところ

をさしすきて。花もよみこぬすゑの松山。まことにお

もひかけられす。むねと又まつの花とみえたり。うす紅

といふこと葉。そのかみよみたりし後より。今は讀はへ

らす。かた／＼おもひかけられす。又右歌ははなのしら雲とはへるもこゝろえられす。花咲ぬればしら雲に似てなむなとこそは讀きたれ。是も其心とおなしけれとも。さして花のしら雲と云事有やうになんおもふ給ひらるゝ心に。こと葉もあらはれぬやうなれば。ちとや申へからむ。

四番 郭公

左

有女房宰相上云々

ほとゝきす夏のよさへそ恨めしきたゝ一聲に明ぬと思へは

右

藤原仲實朝臣

子規こゝろしあれや橘のたまぬく月にこゑをあらはす左のうたは。百首の歌に一文字もかはらねは。何事をかは申へき。右のうたも。左ほとゝきす。いそのかみふることならずは。いかゝあらましとこそ思ふたまふれ。

五番

左勝

源俊頼朝臣

雲はれぬさ月きぬらしたま衣むつかしきまで雨しめりせり

右

修理大夫上

さみたれにとふ人もなき山里は軒のしつゝの音のみそする左のさみたれは。ふるめかしからぬこと葉なれと。むつかしきなとこそ。むけにたゝ言葉にて。けひたるやうにおもふたまふれとも。右のうためなれたるさまなれば。まくとや申へからむ。

六番 夏草

左

女房

うつら鳴なつのゝ草は生にけり朝ふす鹿もみえぬ計に

右勝

修理大夫上

ゆきなれし道わすられて夏草のむすふ計に成にけるかな左夏草はくせなくみたまふれと。右よりうつらは秋なむ鳴。夏なとは鳴ぬ物也とはへめれば。證歌こそはいたさるへけれと。そのいてこぬはあやまれるにや。右のうたは。結ふ計に成にけりといへるは。のかひしこまのこちなむするとはへめれば。むねとあるふしにはあらねと。道わすられてなとこそは。ふしに思ひたるにやとみゆれば。右のかちにこそ。

七番

左勝

女郎花

修理大夫上

ひとことに折られにけりな女郎花むへこそ露の心をきけり

右

皇后宮津君

あかなくに我しめしのゝ女郎花こゝろ許さぬ人におらるな左の歌は。へちにそことみゆる處はなくそみたまふるを。右のかたより。むへこそなとをなむし申は。せめていひところのなきにや。つねの歌こと葉にてなむ。右の我しめしのゝとあるこそこゝろえね。花みてこそあかなくともおもはめ。何をみてかはしめけむ。しめつとあらはこそ心にはかなはめ。こと葉こゝろとちかひてなむ覺ゆる。まくとや申へき。

八番

左

源俊頼朝臣

軒はよりもりくる月を我妹兒かたまもの裾に宿してそみる
右
いかはかり照月なれやまくすはふ杜の下草かすみゆるまで
藤原顯輔朝臣

左歌は玉ものすそにやとしてそみると讀る。ありかたき事也。水なとにうつれるこそ。やとれるなとはいはめ。ものすそにはひかりはかりこそあらめ。月のかたちのやとらむことは有かたくや。右のうたは古く人のよめりける森の下草はかりをかへていたしたると。左より申はふる歌にこそ侍れ。

九番 紅葉

左

紅葉はをきてみる人のあまたあれはぬしも定めぬ衣ての杜

右

源俊頼朝臣
源雅定朝臣

おしめともいとかの山の紅葉はの心よはくも風に散かな此もみちのうたこそ。年おいほけて。右かつと申てしかとよ。よくもおほえはへらぬかな。左のうたこそ。衣手のもりと有は。散とよみてこそきるなとは云へけれ。ちらぬ紅葉はいかゝきるへからむとこそみゆれ。

十番 雪

左

主殿助兼能

さらぬたにくる人もなき我やとに跡たえまさるけきの白雪

右勝

仲實朝臣

いつのまに降つもりける雪なれはかへる山邊に道まどふ覽雪ふりて道たえぬとは。山里なと云てこそあらまほしけれ。又道は雪にたえぬるを。たえまさるはいかなる事にか。右はかへる山ちになと申たるかうためきて。かつとや申へき。

十一番 霰

左

家信

とふ人もなき山里のしはの庵に音するものはあられ也けり
右 道經
冬さむみいなの中山こえくれはならの枯葉に霰ふるなり
右のうたは。百首歌にふた文字三もしそかはりたると。
左方の人々はへめれは。何事をか。

十二番 水鳥

左持

主殿助

水鳥の霜うちらはらふは風よりいとゝたま江の底やさゆらん

右

雅定

山河につかはぬおしの終夜ともをこふとやうきねなくらん
左歌。は風にそこやさゆるらんなとこそ。餘り心ふかく。おもひよりてはへれ。右歌は。友をこふとやなとかこはきやうなれは。持とや申へき。

十三番 祝

左持

藤原爲忠

みつかきの久しかるへき君か世を天照神やそらにしるらん

右

顯輔朝臣

かきりても君か齡は岩清水なかれむよには絶えしと思ふ
左歌天照かみなとこそ。あまりおとろしくおもふたまふるに。右に又。いはし水なとはへめれは。いせやはたの御事など。おとりまさり申につけておそり侍りぬへし。

十四番 戀

左

宰相上

なかれてのなにそ立ぬる涙河人めつゝみをせきしあへねは

右勝

道經

こひわひておそふる袖やなかれ出る泪の河のいせき成らん
左のうた。人めつゝみをむねと有ことにやとみ給ふれ
は古今なとをみぬ人にやと。すこしあなつらはしくこ
そ。右歌はなみたのかほのいせきなとめつらしくはへ
れはかつとや。

十五番

左

俊頼朝臣

いつとなくこひにこかるゝ我身よりたつや浅間の煙成らん

右

修理大夫上

しるらめや淀のつきはしよと共につれなき人を戀渡るとは
又左右のうた。いたはる事ありて。いそきまかりいてぬ
れは。

右六條宰相家歌合以猪苗代諫誼本書寫校合畢

群書類從卷第百八十三

和歌部卅八歌合四

内大臣家歌合 元永元年十月

題

時雨 殘菊 戀

左方

皇后宮攝津公

定信朝臣

女房

盛方朝臣

少將公俊朝朝臣女
關白家女房

信濃公永實女
關白家女房

顯仲朝臣

忠房朝臣

上總公

俊隆朝臣

師俊朝臣

重基朝臣

右方

俊頼朝臣

顯國朝臣

雅兼朝臣

道經朝臣

基俊朝臣

雅光朝臣

宗國朝臣

忠隆朝臣

信忠朝臣

兼昌朝臣

時昌朝臣

爲實朝臣

判者

俊頼朝臣

基俊朝臣

一番 時雨

左兩人共爲勝

皇后宮攝津公

終夜嵐の音にたくひつゝ木の葉とゝもに降しけれ哉

右 俊頼朝臣

覺東ないかにしくるゝ空なればうらこの山のかたみなせなり
俊頼云。さきの歌は心も詞もめつらしからねと。させる
難みえず。後のうたはかたみなせ也とそへたる詞おほ
つかなし。若此山に。さも讀へき事のあるにか。たゝう
らこの山といふに付ていはゝ。歌詞とも覺ぬかな。人々
も申されん。然者左勝とや申へき。基俊云。木の葉と
もに降しけれ哉と。心にしみておかしう思ひたまふる
に。右のうらこの山はいかにかたみなせとはあるにか。
こゝろ得かたく侍り。左まさりたりと申へき歟。

二番

左俊持 基勝 女 房

あやしくも時雨にかへる袂かないなの笠はらさして行とも

右 顯國朝臣

ぬるれとも嬉しくもあるか紅葉はの色増雨の雫とおもへは
俊云。さきのうたは。いな笠原なといへるわたりいひ
なれたり。但時雨にかへるなといはゝ。衣の事にやあら

ん。次の歌はけふ紅葉の下にたちて。その雪にぬれてこそ。嬉しくとも讀へけれ。たゝおほかたのしくれに濡て。是は衣をそむる時雨なれば。嬉しとてたちのかさらん。あちきなくそきこゆる。ともにおほつかなしときこゆれば持とや可_三定申。基云。しくれにかへる袂はうれしくも有かなと侍。次には増りてや侍らん。

三番

左俊勝

少將公

右基勝

雅兼朝臣

時雨には色ならぬ身の袖笠もぬるればかほる物にそ有ける冬くれは散しく庭のならの葉に時雨音なふみ山へのさと俊云。さきのうたの色ならぬ身といへる。きたりける衣のしろかりけるにや。我身を色好にあらすといへるにや。衣のいろしろきならは色かはるといはむことかたし。我みを色好ならすといは、袖笠かほるらん事又かたし。おほかた歌からはなたらかなり。後のうたはふるきうたをあしきまにとりなしたるとみゆる。ならの葉の散しく庭とこそいふへけれ。散しく庭のならのはと侍れは。次第あしき心ちそする。是はあなかちのことをふるき歌の過難_レ避けれは猶可_レ負にや。基云。色ならぬ身そ。いかなる身にかとゆかし。ぬるればかほるなと讀る。梅なとをこそふるき歌にはかくよみて侍れ。なをしくれおとなふみ山へに。たちよりぬへくおもひ給へる。

四番

左基勝

顯仲朝臣

水鳥の青葉の山やいかならん梢をそむる今朝のしくれにかきくもり蟹の小ふねにふく筈の下とをる迄時雨しにけり

右俊勝

道經朝臣

俊云。水鳥の青羽の山とつゝきて。梢をそむるといふほど無下にあらはなり。次歌。蟹のをふねにかゝらむほと。おもひかけぬさまなれと過にはあらねは勝とや申へからん。基云。水鳥の青羽の山なといへる。いみしくふるめきたれと。右のうたのかき曇りあまのをふねにふく筈なと侍れと。春雨五月雨などのやうに。つく／＼と降物にもあらねは。下とをるまで有へしと覺え侍らす。猶梢を染る時雨少まさると定申へし。

五番

左俊持

上總公

右基勝

基俊朝臣

時雨には菅の小笠も水もりて遠の旅人ぬれやしぬらん霜寒て枯行をのゝ岡へなるならの朽葉にしくれ降也俊云。前歌に水もりてといへるおほつかなし。後うた岡へなるすへらかにくたらず。ならの朽葉もいかゝ。朽なは言つれすもやあらむ。あなかちの事か。基云。時雨には菅の小笠も水もりてといへる詞。なつらへ申へきかたなし。水もるとは玉たれのかめなとの石間あらんこちこそし侍る。いかなるしくれのさまで侍へきにか。袂をかへすなとこそよの常のことにてははへれ。いとすくれたることなけれは。ならの朽葉におとつれんしくれは。今少きゝなれたるこゝちこそし侍る。

六番

左 基持

師俊朝臣

右 俊勝

雅光朝臣

さも社は横のまやふき薄からめもるはかりにもうつ時雨哉

木の葉のみ染るかところ思ひしに時雨は人のみにしみに梟

俊云。前歌。横のまやふきなといひなれたり。末にうつ時雨とよめるそおほつかなき。若蕭々暗雨打窓聲と云

きこゆるを思ひてよめるにや。さりとも歌

によますは。さらすもやあるへからん。かゝることをよ

まんとては。そのすしにいはて。みくるしからすかまふ

る也。右。是は俄なれはいたけに聞ゆる。但いかなる色

にかしみけむ。もし木の葉の色にしまは。おひたゝしく

や有へき。松風の色になといへる。是もなとかよまさら

ん。うつ時雨なとよめるには少まさりてそ聞ゆる。基云。

横のまやふき。さこそうすくとも打とをすまでふらん

時雨こそ。うちに居たらん人おそろしかりぬへく覺え

侍れ。代のはしまりにこそ車のよこかなとのやうにて

雨は降り侍りけれ。いとおそろしう侍ける時雨かな。暗雨

七番

左 雨人共爲勝

定信朝臣

音にさへ袂をぬらす時雨かな横の板屋のよはの寢覺に

右

宗國朝臣

しくれとて柵の杜にたちよれば木のはとゝもに降かゝる哉

俊云。前歌。音をきくに袂濡とよめるとおかし。さも

ある事と聞ゆ。次歌もなたらかなり。末の七文字をおも

ひかへけるとみゆ。されはまへのうたかちにや。あなお

そろし。基云。横の板やの夜半のしくれは。ことにめさ

ましくきゝ侍物かな。袂ぬるらんも。いとおかし侍り。

はゝその杜あしうはみえねと。めつらしけなきやうな

れは。夜はの寢さめそ。けにさることゝは思ひ給ふる。

八番

左 雨判共爲持

盛方朝臣

神無月み室の山の紅葉ばも色に出ぬへく降しくれ哉

右

忠隆朝臣

左 俊持 基勝

信濃公

神無月旅行人もいつくにかたちかへるへき時雨もる山

信忠朝臣

くらふ山いかゝこゆへき神無月木の葉とゝもにしくれ降也
俊云。前うたは神無月旅とつゝくへしとおほえす。い
つくにかもなたらかに聞え侍らぬもの哉。後うたはく
らふ山と云てくらしとも云。くれぬともいひてこそい
かゝこゆへきとは云へけれ。木のはとともに時雨とい
ひて。こえわつらふはおほつかなし。このはの散をわつ
らふならはみちのうたとやきこゆる。是はあなかちの
事なり。たゝおなし程にそみたまふる。基云。もる山の
しくれはくらふ山に今少まさりてや。たちかへるへき
かけのなからんも斷と思ひたまふる。

十番

左俊持

忠房朝臣

波よする蜚の管やの隙をあらみ漏にてそしるよはの時雨は

右基誘

兼昌朝臣

ゆふ月よいるさの山の高根よりはるかにめくる初しくれ哉

俊云。前うたは時雨すけなきやうにきこゆ。しくれは起

ゐてきゝ明すへき事なれど。是はもるに初て知とい

へは寝入たるか。もりて衣のぬれければ起きはくとみ

ゆ。若もらましかは又の日人傳に社きかまほしと。おほ

つかなくそきこゆる。後歌は山の高根をめくるといへ

る事おほつかなし。もるともに山めぐりするといへる

うたは。この山にふるといへる事や。是はおなし高根を

めくるといへは行道しけると聞ゆるなり。さもありな

むにや。偏に難申にはあらず。おほつかなきなり。きゝ

あきらめん程は持とや可申。基云。おしなへてところ

もわかす降らむ時雨に海士の笛やまてはおもひよらて

も侍ぬへかりける事かな。又横の板屋などには。たゝか
るにても時雨の音を知侍なんかし。春雨のいとをみた
り音もせすしてもらんによおとろかれはへらむ。右の
うためをよるこはしむるまで。もてあそひとはすへく
もあらねとも。遂にめくるはつ時雨。いま少こゝろあり
てや侍らん。

十一番

左

俊隆朝臣

さころもの袂はせはしかつけども時雨の雨は心してふれ

右雨判爲勝

時昌朝臣

はつ時雨音信しより水くきの岡の梢の色をしそ思ふ

俊云。さ衣のうた心してふれといへるは。ぬれん事のお

しさにいへるか。又かつけどもといへること。さきにあ

るへきか。はつ時雨のうためつらしからねとすへらか

にきこゆ。色をしそおもふそふるき事よとみゝにとと

まる心ちする。されと水くきなと讀れたればにやまさ

りてそみゆる。基云。狭衣と云て。せはしとはいかによ

まれたるにか。四條大納言の式には満歌重言とてわろ

き事にそして侍る。右歌初時雨音信しよりといへる。時

雨はかやうにこそは侍らめとおもひ給へる。岡の梢の

色をおもふなといへるも。云なれておかしさまりたる

十二番

左俊隆

重基朝臣

柞原紅ふかく染てけり時雨の雨はいろなけれとも

右基誘

爲實朝臣

山家にはならのから葉の散敷て時雨の音もはけしかりけり

俊云。柞原のうたは露しもなとの紅葉をそめ草木をうつろはするは。わきも子か裳すそよりをちたる事なれはめつらしけなし。山家のうたはならのからはといへるいとくきさまなり。枯はといはんにつゝかすはこそさもいはめ。又しくれの言はけしといへる事いか。あち山の高根より谷の岩とをみおろしていはむこちする。前のうたや少まさらん。基云。左右のうたからはおなしほとなれと。左は時雨のこゝろなくて。偏に紅葉のうたにて侍れは。ならのから葉は今少まさりてやはへらん。

一番 殘菊

左兩判爲勝

上總公

紫に匂へるきくは萬代のかさしのために霜や置つる

右

俊頼朝臣

おのつから残れる菊をはつ霜は我置はとそおもふへらなる俊云。前歌はめつらしけなれともなたらかなり。はての置つるそ耳にとまるこゝちすれとも。さまではいかか。後歌にへらなるといふ事は。すゑのよにはきゝもつかすと人々申さるれとも。さる事と聞ゆとて左の勝とす。基云。紫に匂へる菊とまで歌めき侍れとも。かさしのためとなといへるわたり。又はての置つるなとも。文字つゝきさゝへたる所おほかるやうにて。たをやかなる事すくなけれと。次のうたおのつから残れる菊なといへる。はてのへらなるもいかなることのもしつゝきにかあらんと。きゝなれぬやうに覺ゆれは。紫のかたに

二番

左

顯國朝臣

ま袖もて朝置霜を拂ふ哉あへす移ふきくの惜さに

右兩判爲勝

師俊朝臣

露結ふ霜夜の數をかさぬれはたへてや菊のうつろひぬらん俊云。前歌いとおかしう。但あへす移ふといへる事たつぬへし。聞えぬやうに覺え侍る哉。とりもあへすなといへる詞につきて心うるに。たへすなといへる詞にや。たとひふるき詞なりとも。よみたる事あらん。此歌にてはきゝつかぬこゝちをする。次歌は心詞いとおかし。但是もおほつかなし。露結ふと初に置れたるはいかに。もし露結ひて霜となるといへるか。それならばこよみなとに付たる事なれは一夜のことなめり。次の夜はかりは霜のかきりこそ置へけれ。此歌のこゝろは。よことに露のしもになるやうに聞ゆれはひかことならん。おほつかなれれとも。文字つかひなと優なれはまさりてそみゆる。基云。左歌は姿歌めきて侍れとも。まそててもいとよまほしき詞とも覺えぬ。また古の萬葉集にも侍めり。これされはにや古今の序には。見_ニ上古之歌_ニ存_ニ古質之語_ニ未_レ爲_ニ耳目之概_ニ徒爲_ニ教誡之端_ニとそ申たるやうに覺え侍る。古今後撰拾遺并中比のうた合に。この詞よみたり共みえす。あそひにする事とはみなみ侍るめり。此袖こそ延喜十二年の歌合にもとよみてわらはれて。誹し侍らすなりにけんこゝちそし侍る。右歌しなすくれねと。露結ふしもよの數なと。文字つゝきあしう

三番

左

顯仲朝臣

萬代の秋のかたみになす物はきみかよはひをのふるしら菊

右

基俊朝臣

今朝みれはさなから霜をいたゝきて翁さひゆくしら菊の花

俊云。此歌祝にことよせて。ともかくも難レ申。次歌には翁さひゆくといへる事。たしかに知ぬことなり。たゞ古歌に付て心うるに。翁さひと云事は翁されと云詞とこそ承置たるに。是は此こゝろにはたかへり。よもさは侍らし。慥なる事をたつねて一定を可レ申。基云。萬代の秋のかたみになる物はいへる。兼盛か名歌にてみなよみたる也。是はおかしう社侍れ。なすものはといへる。つめけにみえ侍り。さても下句よはひをのふる白きくと。そのことなくなんみえはへる。友則か歌に。露なから折てかさゝんとよめる。又九月九日に忠峯貫之かもとに送れる返しに。雫もてよはひのふてふ菊なとぞ讀て侍るそかし。左様にてこそよはひのふる形みにはよく侍れ。右のさなから霜をいたゝきて翁さひ行と讀る。残れる菊はかやうにもよみてんとみえはへり。ひかことにや。

四番

左持

雅兼朝臣

白妙の霜よに置いてみつれさも移ふ菊はまかはさりけり

右俊勝

忠房朝臣

八重菊の花の袂をあかすとや霜のうはきを猶かさぬらん

俊云。前歌月もなく星もなくて。よる霜にまかふらん事かたし。人々申されしもさる事有と聞ゆ。後歌花の袂をあかすおもはむ事は誰かおもふべきぞ。猶きたる人や入へき。若菊をぬしになしたるにや。されは八重菊といふ事たかひぬ。されと歌からたくみなりけるとそみ給ふる。基云。此うたは白妙の霜よに置てなとよめる。少云なれたるを。うつろふ菊はまかはさりけりと讀る。移ひなん菊を霜いかゝまかはすへき。また右歌のやへ菊の花の袂をあかすとやとよめる社いとおもひかけす。人の袂にや菊の袂にやと。かた／＼思ひなやみはへる哉。詞たくみなるやうにて事たらぬこゝちし侍るは。勝負のほと定かたくこそ。

五番

左俊持 差勝

信濃公

秋はてゝ霜枯ぬれときくの花残れる色は深くみえけり

右

女房

白きくも移ひにけりうき人のこゝろはかりとなに思ひけむ俊云。前のうた秋はてて霜かれぬといへる。名残なきこちす。あきはてぬれと菊は猶みゆれは。すゑに残れる色は深くみえと侍。首尾相たかへり。後歌は人に忘れられたる人の恨たるに常に讀ふし也。戀のうたとそ云へき。菊のうたとはみえず。されとさせることなき歌に。おほつかなき事ともあれは持とそ申へき。基云。のこれる色は深くみえけりといへる。なに事とみゆることなくて。いかにみえけるにか。又歌の鉢も。すくれてもあらず。詞もとゝこぼりたるやうにみえ侍り。されと右の歌の

偏に菊を惜うたとはみえていかにそや。かれ／＼にな
りたらん男女のきくによそへて恨やりたらん心ちし
て。題の心深からされは。猶左の勝へきとそおもひたま
ふる。

六番

左俊持

少將公

かれ行をなけきやすらん初霜のきくのゆかりに置と思へは

右基勝

信忠朝臣

わか宿の籬にやとる菊なくはなに、つけてか人もとはまし

俊云。前歌古言にておもしろしと覺ゆる事もみえず。又
なになる事もなし。次うたもふりてめつらしけなし。な
くはなといへる腰の文字つかひをさなき也。是も持と
可申。基云。霜心なき物なれは菊のたよりに惜をなけ
くへき事にてあらず。右うたは後中書王の四條大納言
に送られける歌に。花もみな散なん後はわか宿のなに
につけてか人をまつへきといへる歌の末にて侍。是は
少歌めきたれは右まさるとや申へからん。

七番

左基勝

定信朝臣

霜かれの菊なかりせはいと、しく冬の籬やさひしからまし

右俊勝

雅光朝臣

しも枯るはしめをみすは白きくの移ふ色を惜さらまし
俊云。前歌きくなりともしも枯なん後は。冬のまかきの
さひしからさん事は。いかゝあるへからんと人々申
されしかさもやあるへからん。冬もふかくなりてこそ
菊はみ所なくならめ。あさからんほとはなとかさも讀

さらんとそ聞ゆる。後のうたはおなし程の歌なれと。今
少たましひ有こゝちす。基云。左右おなしけれど。冬の
籬さひしく侍らんといへり。さもやとみえ給ふる。

八番

左俊勝

盛方朝臣

冬枯にうつろひ残る白菊はうは葉に置る霜かとそみる

右

道經朝臣

露しもの曉置のあさことに移ひまさるしらきくの花
俊云。冬枯にといへる文字。聞えかぬる心ちして侍る
を。萬葉集に讀る事慥にも覺侍らす。右歌はなたらかに
もいとおかしこそ。朝置霜のなといふ事聞なれ侍り。
是はことありかほなる物かな。猶さきの歌を増たらん。
基云。左歌移ひ残ると云わきかたし。又花をうははに置
るしもと。實にいみしきひかめなり。右歌はあかつき置
とよめる。又朝ことにといへる重言。いづれも勝負のほ
とさたかにみえ侍らす。持とや申へからん。

九番

左基持

重基朝臣

秋くれて千草の花は残らねと獨うつるふ白菊のはな

右俊勝

忠隆朝臣

かきりなく君か千代經むしるしにや散残るらん宿のしら菊
俊云。秋暮ての歌させることなし。其中にも残らねと、
いへる。のこりてそとや云へき。扱こそ獨移ふとは云へ
けれ。次歌菊散といへるうたは。なにゝあらねと猶如何
聞ゆ。さはあれと權門にことよせたり。なとかかたさら
ん。基云。左右のうた。心も詞もおなし程なれは。いづれ

十番 とみえ侍らす。是もおなし程にこそ。

左

宗國朝臣

植しその心も置ぬ白菊はあたる霜に移ひにけり

右 兩判爲勝

兼昌朝臣

菊のはな夜のまに色やかはれると霜を拂て今朝みつる哉

俊云。前うた心も置ぬと云る事にや。後歌の文字つかひはおさなければとも。霜を拂ふ事はさもと聞ゆ。まさりてもやあらん。基云。何ことにてかはきくに心置けん可_レ尋_レ之。右よのまの色心おほつかなしとて。霜を拂みつらんこそいとおかしう侍れ。猶こなたそ老の心ともまりぬへき。

十一番

左 兩判爲持

信濃公

こけのむす岩ねに残る八重菊はや千代さく共君そみるへき

右

時昌朝臣

霜かれに我ひとりとや白菊の色をかへても人にみすらん
俊云。昔のむす岩ねに菊の残れる證歌やあらむ。若なくはきはめてあしし。すゑはことのほかにふりたり。後歌は我ひとりとやといへる心ゆきても聞えず。人々やまひといふ事に事きる。持とや申へからん。基云。雛をは置いて岩ねに残らん菊こそ松などのこゝちし侍れ。右の我ひとりとさくのおもふらんも。おしはかり事にこそ。此花開てなといひて侍るは。みる人のおもふことにこそ侍れは。何れも勝負のほとみえねは持とや申へき。

十二番

左

俊隆朝臣

霜枯に移ひ残る村菊はみる朝ことにめつらしき哉

右 兩判爲勝

爲實朝臣

置しものなからましかは菊のはな移ふ色をけふみましやは
俊云。前歌無_レ指事。むらきくおさなけなり。次歌は霜置つれはうつろへる色もみせすところ云へけれ。霜置てみゆといへる事たかひぬ。但置たれはひさしく有とみゆと讀るにや。心得ては勝もやせん。基云。此_レさせる難はみえれと歌合のうたとはみえず。なけ歌のやうにそ侍るめる。右歌もさせる事はなけれとも。移ふ色をけふみましやはといへる。少云なれたるやうに侍れは。増りたりとや申へからむ。

一番

戀

左 兩判爲勝

攝津公

絶すたく室の八嶋の煙にも猶立まさる戀もする哉

右 共勝

頼國朝臣

盃のしるてあひみむと思へ共戀しきことのさむるよもなき
俊云。前のうた絶すたくといへるは。ひか事とや申へからん。此室のやしま實に火を焼にはあらず。野中に清水のあるより氣のたつか煙のことくみゆるなり。それを焼といはんこといか。但實の煙とのみ讀きたれは。なとかさもいはさらんや。歌からはあしくもみえず。後歌はたくみにておもしろけれと。必よまるへき様のみえぬなり。盃と云ては酒ありなんや。又のむと云る事大切なり。酒もなくてのむともいはては。いかしむんとする。又盃のと初に詠し出さんもいか。有へからん。是は

右基勝

其俊朝臣

たくみにおもしろけれとことたらず。左歌めきたれは勝とや申へからん。基云。絶す燒室の八嶋（マ、）の燒にもと讀たるはいかに侍にか。此處に火燒とは何にみえて侍にか。室の八嶋と云事二有。一には下野にあり。二には人の家に有なり。爰は室ぬりたるを云と或物にみえて侍り。是はいつれによりてよまれたるにか。いつれにても絶すたぐといふ事いまたみ給はす。さればにや惟成歌にや。風ふけは室のやしまの夕煙心のうちに立にける哉と讀るも。絶すたちけるとはみえず。淺間の嶽不二の山なとを煙絶ぬためしにはよみふるし侍るめり。絶す燒心を本意にて。此うたは讀れて侍るめればかやうに尋申也。所見すくなくて左様のことをみ給はぬにや。右歌盃のしゐてあひみんとおもへともとよめるは。しゐてといふ心はけにめつらしく聞え侍るに。戀しき事のさむるよもなきとは。なにと讀たるにか。さむるといふ詞はおもふにゑひによせてよめるにこそ侍めれ。それならは。なをゑひといふ本文有てやよくは侍らん。たとひ醉たるにても。又いかなれはさむるよもなくてはありけるにか。唐にこそ千日醉たる人は侍けれ。それも三年か間こそ侍けれ。是はいつといふことも侍らす。若法文に無明の醉なとや侍らん。それこそさむる世もなくは侍るなれ。此歌なすらへて申へき方なし。左歌絶す燒らんよりは。今少まさりていとおかしう侍る。

二番

左俊持

俊頼朝臣

口惜や雲のかくれにすむたつもおもふ人にはみえる物を

かつみれと猶ぞ戀しき吾妹子かゆつのつま櫛いかてさゝまし俊云。前のうたは心もえす。ことやう無極歌にこそ侍めれ。後のうたはゆつのつまくしとは素盞烏尊の稻田姫に逢初給し時。御みつからにさし給し櫛也。此歌はかつみれと讀れたれは。すてに逢にける心なん見ゆる。末の句にいかてさゝましとあれば。またさゝぬとこそみゆれ。本文にはたかひたるやうにみゆる。讀人に可尋事也。昔承しにたかひたり。ひかことの覺けるにや。勝負無論。基云。口惜やなと讀たらんは。かやうの歌合なといまたみ侍らす。無下にこそおほえ侍れ。和歌詩などは詞をえりて。先花後實とそいにしへの人も申ける。されはにや諸家集竝歌合なにも。此詞よみたりとみえず。況やまた初の句にもあらず。又雲のかくれに住田鶴と云事。和歌にいまたみ出し侍らす。唐の文の中にやと疑れ侍る。若世説と云文に鳴鶴目下といへる心をよまれたるにや。次の句に青き雲をひらひて白き鶴をみると社いひたれ。雲のかくれにとふなと云ん事こそ侍らめ。鶴といひなから雲の中に住侍るへきこそ。淮南鶏そ雲には入侍りければ。又若はつるといふ事にや。然者源近公相鶴經と云文に。つるは百八十歳にて雌雄あひみてはらめる事ば侍れ。さらは人といふことはいかに可謂にか。又雲井のかくれに住といふところもなければ。ことほりともおほえす。大方此歌は詞も心も不及そみ給ふる。右歌詞にあやまつところもなく。歌からもあしからねはよろしとはひかことにや。

三番

左雨判爲勝

女 房

いはぬまの下はふ芦のねを重みひまなき戀を君知らめや
右 雅兼朝臣

〔歌關〕

俊云。前歌いとおかし。指事不_レ見。後歌汝かためつらきと女をいはん事は。なめけにやあるへき。女房なとは我にしたりたれと。詞はうやまひてこそいふめれ。指證歌なくは前歌勝にや。基云。此歌可_ニ難申_一事も侍らさめり。それかなかにも。下はふ芦は今少やさしうそみたまふる。

四番

左雨判爲勝

上總公

こひわふる君か雲の月ならは及ばぬ身にも影はみてまし
右 顯仲朝臣

祈らん神のたゝりはなさる共逢てふ事に身をはけかさし
俊云。前歌は人を月になすは。天徳の歌合におよはぬみをもといふにそうたかはるへき。後歌は人に知れたる歌とそみゆる。さはよむらんやは。證歌そ入へき。又男のもとよりいのりをなんすると讀おこせたらん返したとに。かくよみやるへき。みしらぬに似たり。負ぬるにや。基云。左歌君か雲の月ならはといへる文字つゝき優なる様にみえ侍るを。及ばぬ身にもとある。天曆歌合に中務か。雲井の月とよみたるを。おもひてよまれたるにや。戀しきかけはいとよくみえ侍るに。詞とゝこほりたるやうにこそ。右祈らん神のたゝりなとまては有南。

五番

左俊持

師俊朝臣

逢てふ事に身をはけかさしといへる。いかにと心得かたし。逢と云事いかなるものなれは身をはけかすへきにか。みそなとにおち入たらんこゝちし侍り。いつれもおかしき心はなれと。雲井の月は今少よろしくや侍らん。

右基勝

定信朝臣

逢事をまつの汀に年ふれはしつえに波のかけぬ日そなき
俊云。前歌は委詞ことにして。ともかくも申かたし。後歌は逢ことを松の汀にといへるほと歌めきたれとも。しつえに波のかけぬ日なきといへるわたり戀の歌ともみえず。泪をかけたらましかはさもや聞えなまし。左は戀のこゝろみゆれと。牀詞優ならず。右はなたらかなれとこひの心すくなし。仍持と可_レ申。基云。この歌は詞滑て詩にこそ侍めれ。いみしくけつく(ようい)しくはらくるけに思ひよりて侍る戀哉。なかともののとくゐかへしといふ文にこそかゝる詞はみたまひしか。よしや草葉のと讀たる事も侍めれと。そればいとおかしうつゝきたるに。是ばいとむくつけに聞え侍る。さて逢事を松の汀になとよめるわたり實におかしくこそ。次句のしつえに波のかけぬ日そなきと。いとゝたしかにみえ侍めり。小町か歌にむかひたるやうにみたまふる物かな。これは右かちとまをすへし。

六番

左俊持

少將公

うかりける汀におふるうきぬ纏くる事なくて幾よ經ぬらん

右基勝

信濃公

夜とゝもに袖のみぬれて衣川こひこそわたれ逢瀬なけれは

俊云。左右共にさせる難みえす。ふるめかしきは常の事

なれは。ひとしとや申へからん。基云。是は何もくよ

ろしうみ給ふる。逢瀬なくてこひわたらんこそいとお

かしけれ。

七番

左

兼昌朝臣

戀せしとおもひなるせによる浪の平句欠

右兩判爲勝

雅光朝臣

玉藻かる忍ふの浦の蜚たにもいとかく袖はぬるゝ物かは

俊云。いづれもくおかし。但前歌は初五文字明言をお

かしたれは。うち聞に思ひ出られぬ。古人もかやうの詞

さるへしとそ申されけれ「ま」。おとるへきにや。基云。

是もかれもひか事にはあらねと。なる瀬によする波の

下句のこし。たえくしくこはくしく慥くるしけにみえ

侍るに。忍ふの浦の蜚よりもけにぬるらん袖こそ今少

こひまさりてみえ給ふれ。

八番

左俊持 基勝

盛方朝臣

山のはにはつかの月のはつくにみし計にやかくは戀しき

右

信忠朝臣

戀すてふ皆人ことにとひみはやいと我計あらしとそおもふ

俊云。前うたは古歌にかゝるうたのあるこゝちするは

ひか覺にや。末やすこしかはりたらん。次の歌は文字つ

つきこはけにそ聞る。おなしほとこのうたにや。基云。左

歌は廿日の月の出るよりはてまで。しつのをたまきく

りかへし。石上ふるき歌ともものと末にて。めつらしけ

なく侍と。人ことにみるよりは歌めきたれは猶左の勝

にや。

九番

左基勝

道經朝臣

逢事の今はかたのとなりぬれはかりに問こし人もとひこす

右俊勝

忠隆朝臣

おさふれはあまる涙はもる山のなけきにあたる雪成けり

俊云。前うたはかた野となりなは。かりにくといふへけ

れ。こすといへるはたかひたり。次歌はあまる涙はもる

山のなといへる。思ふこゝろなきにはあらず。さもと

きこゆれは勝とも申さむにかたからし。基云。此歌とも

にいつれもくことなる難もなく。心とゝめたる事も

侍らぬ中にも。かりに言する人なからんば。今少こゝろ

ほそくそみえ侍る。

十番

左俊持 基勝

忠房朝臣

愛人をわすれはてなて忘川なにとて絶す戀わたるらん

右

宗國朝臣

戀すてふこひはこれにて限てん後にもかゝる物をこそ思へ

俊云。前歌はなにともなし。是ほとこのうたはめもおとろ

かす。奥の歌はこれにて限てんといひたれは。この人の

ほかにこと人を戀しといへるにや。また明日よりは戀

しといはん事かたし。慥にも聞えぬはおほつかなし。おなし程の歌にや。基云。いづれもくとかむへきも侍らさるに。右是にて限てんこそいみしう庶幾せすみえ侍れ。なにとて絶すと有は今少うためきてそおもふたまふる。

十一番

左 俊勝 基持

重基朝臣

逢ことをその年月と契らねは命や戀の限成らむ

右

俊隆朝臣

よと共にえ社わたれ我戀は不二の高根のけふりならねと
俊云。前歌あしくもみえす。次歌ことのほかにふるめかし。仍前のうた勝たるへし。基云。逢ことをそのとし年と契らて。命をこひの限にて侍らんこそ哀心くるしく侍るに。又よとともにもえ渡らん人もいとをし。されはおとりても侍らす。ひとしくそ侍る。

十二番

左 俊勝

爲實朝臣

わか戀はたかしの濱にゐる田鶴の尋てゆかん方もおほえす

右 基勝

時昌朝臣

あふことのたのむる人のなき時はよをうき物と思ひぬる哉
俊云。左右のうたおなしほととそみ給ふる。初歌はいささかことなるさまなれと指てことなし。ある田鶴のたつねてゆかん勝と申へからん。基云。わかこひはたかしの濱のうた猶上に浪といひて。たかしのとはいはくやとこそみ給ふる。忠房の返しに貫之よみたるにも。おきつなみたかしの濱とそよみたる。濱はいつくにもお

ほかるに。このたかしの濱のふしにて事たかひてすゝろに覺え侍る。老ほけにたる心なるに。ひか覺にも侍らんかし。右歌みをうき物と思ひたらん。今少しなたらかなるやうにみ給ひはへる。

基俊判奥に獻する歌

身をおきてなとやうきよをうらむらん斷しらぬ我心かな

右元永元年十月内大臣家歌合以古寫二本校合了

内大臣殿歌合 元永二年七月

判者

修理大夫藤原顯季朝臣

左方人

備後守季通朝臣

無名女房 實内大臣殿

刑部少輔尹時

爲實

前兵衛佐顯仲

左近衛權少輔顯國

右方人

前淡路守仲房

刑部大輔定信

〔式部少輔行盛〕

時昌

前和泉守道經

右中辨師俊

題

草花

晚月

尋失戀

一番

左持

さま／＼の花にしおけは白露も秋はいろをそ定めさりける

右

季通
仲房

をみなへしなつさふほとに花薄まねく方へはゆかれさり鬼

左右歌よみあはせて終にたり。かちまけまをすへきよ

しおほせられたり。卅一字をはつかにそなふといへと

も。勝まけのほとわきまへかたきよしを申に。御返事な

きによりて仰をおそりて。末のはちあさけりをもわす

れて。むなしきおもえかりのことくもつたなきをのみ。

あらはすらくのみ。

二番

左

むすひおく露やわくらんいろ／＼に亂てさけるも、草の花

右勝

つのみ
まさかぬ

こ萩原花さきにけり今年たにしからむ鹿にいかてしらせし

左うた露やわくらんとはいかなる事にか。花の色にひ

かれてこそいろ／＼にみゆへけれ。右歌へちのなんみ

給へられねはかちとす。

三番

左勝

女房

女郎花のはらの霧にかくれるてうたても露にたなれふす哉

右

さたのふ

〔毛トノマン〕 秋のさかなれと猶はつ花はめつらし

左歌くちをかしきさまなり。右のうたを秋のさかなれ

となほ初花はめつらしといへるは。めなれなはめにた

つましきにや。まことに花こゝろの人にこそ。よりて左

勝。

四番

左

もりいへ

めかれせす我社みつれ女郎花いつのまにかは露はおきつる
右 たゝつね

うらうへに何まねくらん花薄ひとかたにこそ秋はゆくらめ
左歌われこそみつれ心えすなむ。又あやしく。いつの人
まにうつろひぬらんといふ歌。思ひいたされ侍るもの
哉。右歌はしめのくに。いとしもみ給へれと右はかつへ
きになむ。

五番

露はそめきりたつのへの藤はかま吹秋風にほころひにけり
左 まさとき

くさ／＼の花の袂をむつましみ野守はみるといきたはれ南
右 ゆきもり
左歌露はそめ。いみしくすくれて聞ゆ。右のうたたまし
ひこゝろあるをもちて右かちとす。

六番

秋のゝに千草の花のさくなるにみるも露けきをみなへし哉
左持 かむつきの君
右 もとゝし

白露のおりたす萩のからにしき鹿のよる／＼ころも也けり
左の歌みるも露けしといへるもしこゝろえすなん。右
のうた露をおりたすとはいかに。つゆしもをたてぬき
にこそよみたれ。つゆにしきをおりいつらんは人にて
侍る。またはたなとこそいへれ。たすこそをさなひた
れ。されとも左歌からよからす。もて持とす。

七番

左

ためさね

女郎花いくのぬへはか藤袴ひとのにもあらずほころひに鳧
右 ときまさ

ゆくすゑのにほひさへこそゆかしけれ君か千歳の秋の初花
左歌の詞つかひよからすこそゆゝしくきたなけれ。か
くるひたる歌におもひけるにや。よのきすにこそ。右
のうた心かしこし。又すちかはる事なし。よりて右かつ。

八番

年をへてふるのゝ小野に匂へとも猶めつらしき萩のはつ花
左 まさみつ
右 かねまさ

秋くれは千草に匂ふ花の色のこゝろ一つにいかてしむらん
左うた。ふるののの小のこそいとこのましくも聞え侍ら
ね。はつはなはつき／＼はめなれぬへきにや。右歌千く
さの花の色。心ひとつにしむる心なきにあらず。右かつ。

九番

手向にと結びておかむかさこしのすそのに尾花ほに出に鳧
左 あきなか
右 みちつね

あたしのゝ萩の錦やとこならん露ふしあかすをみなへし哉
左歌かさこしいとにくし。ところの名なとは。おかしき
をこそとり出まほしけれ。又すそのにといへるちかひ
たり。すそのゝとこそあらまほしけれ。右歌露ふすこそ
めつらしけれ。露おくとこそ申つたへたれ。もしそうか
やはへらん。なくはちとす。

十番

左

むねくに

たつた山すそのに匂ふふちはかま玉ぬきかくる露やおく覽

右勝

たゝすゑ

佐保川のみきはに匂ふふち袴浪のよりてやかけんとすらん
左歌露かみにあらまほし。右歌心はへ増りたり。よりて
右かつ。

十一番

左勝

あきくに

東路のなこそその關におひながら猶人まねく花すゝき哉
右 もろとし

山のかけいくのにさけるをみなへし色故人につまれぬる哉
左歌いとけうある歌なり。右歌はくちいとにくさけな
り。歌からもおとりてなん。よりて左かつ。

一番

左 晩月

まさみつ

いなり山杉のむら立はをしけみおほるにみゆる夕つくよ哉
右 かねまさ

ゆふつくよとしき影もみる人の心はそこに立くらしけり
左歌よからねとなたらかに聞ゆ。右歌かみひつゝけ
にくし。左かつ。

二番

左

あきなか

山のはに急きないりそ夕月夜うきみに社よにはすみけれ
右勝 みちつね

大そらのたそかれ時の雲まよりりくる月の影そさやけき
左歌よしなし。さき／＼の歌ふるきなとにこのさまの
歌なし。右歌ははしめのくそいかにせましと。もりくる

三番

左

もりいへ

月かたなくみゆれと左には勝へきにや。
秋は猶くれ行空に照月をおほろけならぬひかりとそみる
右勝 たゝたか

吹風はえたやすからぬ木まよりほのめく秋の夕月よかな
左歌くれゆく空に照月をおほろけならぬ光おとろかさ
てこそ。右うたえたやすからぬなといへるこそ歌めき
てみたまふれ。もて右かつ。

四番

左

むねくに

「ふ勝歌」
ゆつく日いるやおそきと久かたの空すみわたる弓張の月
右勝 たゝすゑ

東ちやふなきの山のこのまよりほのかにみゆる夕月よ哉
左歌ゆふつく日こそみゝにたちてきこゆれ。またゆみ
はりの月の空すみわたらむこともかたし。右歌ははし
めの句のや。はてのゝこそよしなけれと。末なたらかな
れは。よりて右かつ。

五番

左勝

あきくに

夕されは竹のあみとも月かけもさしあはせてそ物は悲しき
右 もろとし

月のまゆ峯に近つく夕まくれおほろけにやは物あはれなる
左右の歌おなし心に物あはれけに侍りけるかな。しか
はあれと右のゆふまくれ事つよなし。よりて左かつ。

六番

左

女 房

竹の葉に秋風そよくゆふくれは月の光も心にそしむ
右かつ まさかぬ

たかまとの山のすそのゝ夕露にひかりさしそふ弓張の月
左うたさせることなし。右歌末なたらかにや。もて右かつ。

七番

左勝

夕されはこのまの月しくられはたとりそわたるこやの松原

右

さたのふ

たそかれのおほつかなきに天の原空めつらしき夕つくよ哉

左歌まつとした。ゆふつくよ。まことにおほつかなかり

けむとおしはかられてなん。右のうたつた／＼にきこ

ゆ。よりて左をかちとす。

八番

左

すゑみち

さらぬたにかすかにみゆる三日月を夕霧しはしたちな隔そ

右かつ

なかつさ

いかたおろす柚山川の夕暮は月のひかりのさすかうれしき

左歌かすかにと讀るちからなげになん。右のうたも筏

はおとすところいへれ。おろすはこゝろえされと末な

むうためきたれは右かつ。

九番

左

まさとき

ゆふされや天つ空なるしらま弓とみれは月を山のはにいる

右勝

ゆきもり

いつるよりさやけき月の光哉いるひの影のそふにかある覽

左歌しらまゆみといへれは月とは聞えにたるに。とみ

れは月といへるいかに。このこゝろにては月ともし

らさりけるにや。さてはいるはかりのれににや。こゝろ

ならは。しらま弓はなにとおもひけるにか。ふるくよめ

る天の原ふりさけみれはしらま弓はりてかけたるよみ

ちはよけむところ讀たれ。こゝろえぬ事なり。又かみの

はてのやもしいとにくし。右歌なたらかに侍るめり。日

の光のさしそふそ心えぬや。日のひかりあるをりは。月

の光はいかゝとおもひ給ふれとも。猶右のかつへきに

十番

左持

女 房

宵のまにいつるかけたにさやか也月みつ空を思ひこそやれ

右

もとゝし

なくさむるほとこそなけれ宵のまにわれていりぬる更級の月

左歌いつるかけたにさやかなり月みつ空をおもひこそ

やれと讀る心えすなん。みたんをりこそとこゝろはへ

あるにこそ。これはみつそらみたぬそらのならひてあ

るにやとおほえてなん。右歌さらしな月とよめる山

ならてよむことにや。それとおほつかなし。そう歌なく

は持とす。

十一番

左持

ためさね

ゆふつくよ關の小川に宿らすは立とまりても人のみましや

右

ときまさ

山のはに惜むもしらぬ夕つくよいつ有明にならんとすらん
左歌へちにそのことゝあるなんみえす。右歌はふる歌
とこそおもふ給ふれ。まことにいまは物もおほえすま
かりなりたれは。ひかことならは持と申へし。山のは
もあかていりぬるゆふつくよいつ有明にならむとすら
ん。かやうにそおもひいたされはへる。なにの歌にかわ
かかまへおほえ侍らんものを。たつねうしなふ事。

一番 尋失戀

左 女 房

くれことにたつねわひつゝ行方もしらぬ戀ちにまとふ頃哉
右かっ まさかね

さりととも尋ねこしちの方もなくあと方にみてかへる山哉
左歌くれことにたつねわひつゝいとあやし。右歌めつ
らしからねと。たくみなるこゝちしたり。よりてかちと
す。

二番

左勝 ためさね

たつねかれゆきけんかたもしら雲の心空なるこひもする哉
右 ときまさ

なほさりにみわの杉とは教へおきて尋ぬる時はあはぬ君哉
左歌なたらかなり。右歌は三輪の杉とおしへおきてけ
れは。うしなひたるにはあらさなり。よりて左かつ。

三番

左 もりいへ

人しれぬ心はゆきてたつねれとあはぬ戀ちにまとふ比かな
右勝 たゝたか

ありしたにうかりし物をなにもかて行へもしらすつらさそ覽
左歌たつねうしなひたりといとみえす。右歌ははしめ
のふたくふるなれと。たいのこゝろはへ侍めれは右
かつ。

四番

左勝 あきくに

うつゝにはゆくへもしらぬやみなれは夢に心をかくる頃哉
右 もろとし

たつぬるも尋ぬるかきり有ければ神にそ祈る夢にしるかに
左歌はあらはのこゝろはよははれと。ゆくへもしらぬ
なとは申候めれは。みきの歌はたつね計をあらはのこ
ゝ脱離ろにしたるにや。いとちからなくなむ。よりて左
の勝とす。

右元永二年内大臣家歌合以忠家卿眞跡書寫

關白内大臣家歌合

保安二年九月十二(十三イ)日
兼日被下題

題

山月

野風

庭露

戀二首

歌人

殿下

散位重基

女房

右

前彈正大弼明賢朝臣

前左衛門佐基俊

右少辨師俊

刑部大輔定信

散位道經

藏人修理亮爲眞眞殿

文章生時昌

判者

前左衛門佐基俊

一番

左持

山月

女房

木の間より出るは月のうれしきに西なる山の西にすまはや

右

明賢朝臣

みそらはれ所もわかす照る月の影もてはやす越のしら山

左歌月は山のはよりこそ出るものとしりて侍るに。こ

のまよりはいかに出けるにか。古き歌ともあまた見侍

るに。木のまよりもりくるなとそよみて侍るかし。(又)

西なる山のにしにすまはやとよまれたるも。いと心え

二番

左持

俊頼朝臣

こよひしも姥捨山の月を見て心の限りつくしつる哉

右

基俊

あなし山ひはらか下にもる月をはたれ雪とおもひける哉

左歌はこよひしも姥捨山のなといへるもしつゝき。こ

となることななくそ見えはへるに。またおはすて山

の月はなくさめかたき事にそ。いにしへよりよみふる

したるな。この歌には心をつくすと侍るこそみゝなれ

すあたらしき心ちしはへれ。右のひはらか下にもる月

は。なんすへきところはなけれとも。ふるめきすきて。

めつらしからぬさまにはへれは。おとると申へきにや侍らん。

この歌とも別に無_ニ其難。左の歌は木のまよりもりくる月のかけみれは心つくしの秋は來にけりといふうた有。それによそへられたれとも。つくしつるかなとある義にあはす。心えす。方人申云。我心なくさめかねつさらしなやをは捨山に照る月をみてとよめる歌あれは。つくしつるかなは左様のこゝろにやさふらはん。判者云。姥捨山の月はなくさめかねつとこそよめれ。心つくしにはあらず。右歌あなし山ひはらかしたのなかつ道はたれしもほの_{イニナシ}ふる月いてにけりといふ歌をおもひてよめるか。左詠_ニ僻事。右似_ニ古歌。持とや申へからん。

三番

左勝

殿 下

神のますみかきの山に月かけのゆふかけてしもさし登る哉
右 定 信

我ひとりいるさの山と思ひしにまつすみまさる秋のよの月
左歌月はつとめて照るなといへるものならはこそ。ゆふかけてしもとはよみ侍らめ。さし登るなといへるわたりも月とはおほえて。たかせ船なとよまん心ちそし侍る。おほかた歌からも。ひまおほかるやうに見えはへめり。なをうみのうへ舟のうちの月ならは。さし登らんもよくはへりなんかし。また右歌三十一字とるへき所なくはよみてはへらん。左におとれりとはおほえす。されと三笠のやまのかみにことよせたてまつりたるわつ

らはし。さらはいかてかかたきりたてまつりはへらさらむ。

右歌ことはたひたり。

左歌たけたかし。かちとや申へからん。

四番

左勝

雅 光

月影をまつも惜むも苦しきにいつくなるらんやまなしの里
右 師 俊

いさらなみはれにけらしな高砂の尾上の空にすめる月かけ
左歌まつもをしむもくるしくて。山なき里もとむらんこそ。むけに月のおほえうすくて。もてあそはんの心もなきやうに見えはへれとも。右歌のいさらなみとはなに_ニかはへらむ。古き歌にも見えたる所もはへらす。またをのへの空にすめる月かけなとも。おほかたおもひえたる所なくおほえはへれは。なを左はいま少しよろしきにや。

右歌いさらなみとあるは。なにのなそおほつかなし。方人申云。くもゐのな也。判者云。さらは證歌有へし。方人申云。萬葉集の歌なり。判者問_ニ其歌。方人不_レ陳。仍左勝。

五番

左持

〔宗 國〕

もみちする山のはにすむ月影はいと_ニ光そさしまさりける
右 道 經

もみちするか_ニみの山の月影は光ことにそてりまさりける
此歌左も右も心もことはも。た_ニおなしやうに侍れは。いつれまされりと見え侍らす。

左右皆同様なり。持とや申へからん。
六番

左勝

重基

秋の夜の月のひかりのもる山はこの下影もさやけかりけり

右

時昌

神のすむみかさの山の月なれはかり初にきる雲たにもなし

左歌すかた心ともいとおかしうよまれてはへめり。

右歌かりそめにきる雲たにもなしと。いかによめりと

いふ意えしりはへらす。なんするにもおよばす。此三笠

の山の神。おなし心にわつらはしく侍れとも。ことの外

ならんをは。ことわりに御らんしゆるしてんとそおも

ひ給る。

右歌きるといふことは心えず。あまきる雪なとよめ

るは雪のふるかきりて見ゆるなよめる也。雲をきると

よめる證歌不審〔也〕。

左歌ことなるなんなし。左を爲勝。

七番

左持

親隆

三輪の山すきまもり來る影見れは月こそ秋のしるし也けれ

右

爲眞

伊駒山木しけき物をいかにして谷のをかはに月のすむらん

此歌左右勝負定かたし。左右ことなる難なし。仍爲持

一番

左

俊頼朝臣

けさ見れは萩女郎花なひかしてやさしの野への風のけしきや

右勝

基俊

たかまとの野ちのしのはらすゑさわき空や秋風けふ吹ぬ也

左歌。はきをみなへしなひかしてといふもしつゝき。や

さしの野へなとまで。いと見ところなくはへめり。誹諧

の跡のことはゆかぬにてこそはんへめれ。右歌さまも

いとたかく。ことはおかしうはへれは。かつへきにやと

おもひたまふも。いかゝはへらむ。左方人右歌のそらや

といふことはを。すこふるあさけりまふす。判者云。左

歌なひかしてと云ことは。いみしくけなるさまなり。上

句すこふるちからもなきやうなり。

右歌そらやとよめるは曾根好忠歌に。そらや秋風ふき

ぬなりとよめれは。證歌なきにあらず。されは右をやま

さ〔れ〕りと申へからむ。

二番

左勝

上總

風はやみうへ野の尾花おきふすを須磨の浦浪立かとそ見る

右

明賢朝臣

旅衣のちの草ふしきむけきに風も同じくゆふるせよかし

左歌風ふけはうへのゝ尾花おきふすをなとまでは。す

ゑいかなる事かあらんすらんと思ふほとに。すまのう

らなみたつかとそ見るとよめるとおもはす也。うの

花さける玉川の里なとこそ波のしからみかくるもけに

とおほえ侍れ。此すまのうらなみはいとこちたく。を花

はさまでおしこりておふるものにてもばへらす。ひと

むらつゝなとこそ秋野にもまねきはへめれ。右歌のた

ひ衣野ちの草ふしこそまた心もえず。さをしかこそを

のゝ草ふしはし侍れ。たひ行人のちの草ふしは。なをふ

るき歌の左様によみたるこそおほえ侍らね。又風もゆふむせよなといへるわたり。いふにもたらずおほえ侍れは。なをすまの浦波のすこしは立まさるへきにや。

四番 左勝 親 隆
鶉鳴かた野にたてるはち紅葉ちりぬ計に秋風そふく

左歌尾花なみに似たりとよめる證歌不審也。
右歌野ちの草ふしは。おほくしかの歌にそよめる。されはをのゝ草ふしなとゝよめり。人の草ふしといふ本文ありや。方人申云。伊勢のはまをき折ふせてとよめれは。草ふしとよめるもなとかとこそ聞えはへれ。判者云。いせのはまをきの歌は。此證歌に引へからず。その儀すてに異也。(左)右歌みなよろしからず。但右歌難おほくは左をやまされりともふすへき。

三番

左

雅 光

かるもかくぬな野の原の秋風にこやの池水さゝらなみたつ

右勝

師 俊

唐崎やなからの山にあらねともなきゝ浪よるまのゝ秋風
此歌ともはたゝおなしほとにはへめれと。なをさゝなみよるまのゝ秋風はよろしうはへ(め)り。

左歌かるもかくぬなのとよめるは。いかに心えたるそや。雄略天皇御時の事なり。ゐなのとよめるは。ゐのしなき野とよめる也。されはゐなき野には。なにのかるもいかゝあるへきそ。方人申云。猪なのとよまんとて。かるもかくぬもなきのとよそへてよめる也。ゐのししのありなしは。そのなんはへるへからず。判者云。陳申旨なをうちまかせたらず。

右歌ことなる難なれば勝とや申へからん。

りと見ゆ。

五番

左

殿 下

ありま山すそ野のはらに風吹はたまなみよるこやの池水

右

定 信

秋ふかみ風ふきとよむ宮城野にふすぬの床もあれやしぬ覽

左歌すかたこゝろともにもてあふへき。されとも 右歌

のみやきのにとよむらん風こそ。いとおとろしう。

山やはやしなとの風こそさはふきとよめ。小萩かうば

はふかん風は露はかりやみたれはへらん。又みやきの

には妻こふる鹿こそすむとしりてはへるに。ふするの

ところもきゝならはすそ おほえ侍る。されは左の勝へき

とさため申はへり。

右歌風吹とよむとよめる。萬葉集などにはおほくとよ

むとよめれと。寛平九年歌合に鶯の歌にとよむとよめ

るを。そのことはよろしからすとさためられたり。また

山したとよみなとゝこそよめれ。野にはとよむとよめ

る歌おほえはへらす。草の葉のおとすと讀は竹萩のは

なとをこそあまたよみならへれ。おしなへて草のとよ

まん事はいかゝはへるへからむ。左歌頗よろしきか。

六番

左

宗 國

秋野のはなすり衣ふきかへし色ならなくに風そ身にしむ

右

道 經

常よりも身にしむ物はさを鹿の朝たつ小野のくすのうら風

此歌ともすかたたゝおなしほとにはへれとも。左歌の

秋の野の花すりとよめる。いつれのはなしてすれるに

か。萩かはなすりにこそはへめれ。花とてもおしなへ

てをみなへしふちはかまなとにて する物ならねは。な

ほ秋の野のはなすり衣には。はきかたいせはにおほえ

侍る也。右歌はことなる難なけれは。右の勝へきにや

侍らん。左歌はなすり衣とよめるは。なにのはなしてす

れる衣そ。はきかはなすりなとゝこそよめれ。此歌にて

は萩か花すりのやうに。いはまほしくこそ見ゆれ。さ

れはことはたらはぬ歌也。右歌ことなる難なし。仍爲

七番

左持

重 基

吹風は色なけれとも野はら行人の身にしむ秋の夕くれ

右

時 昌

いとゝしくうらかれもていく秋野に淋しくもある風の音哉

此歌ともはいつれもまされりとおほえす。持と申へき

にや。

左歌ことなる難なし。

右歌おもへる所あり。左右ともに一の躰を拾ひたれ

は持とや申へからむ。

一番

左

雅 光

あさまたき庭のあさちのうへ毎につらぬきかくる露の白玉

右

師 俊

かるかやのみたるゝ秋のあさきよめ賤の衣や露ふしぬらん

左歌ふるき歌ともにそおほえて侍る。歌のすかた少し

したゝかに侍めり。

右歌あさきよめ露ふしぬらんといへる。いふにもたらすそおほえ侍れは左の勝とそ見たまふる。

左歌古歌のこゝちそしはへる。右歌「あさきよめとよめる歌をおもへるか。それは」あさきよめすなとよめれはこそきゝよくはへれ。このあさきよめは。ことはもたらすこそきこゆれ。左まされりと申へし。右方人。猶にはのあさちはいかゝとかたふきはへりしかは。判の後なりしかは。おもひなからそ。

二番

左持

庭もせに玉ときちらす白露をみたれてぬける糸薄かな

右

宗國
道經

朝またきくさはの露の消ぬまは玉しく庭のこゝちこそすれ

左右おとりまさりのほとさらに見えはへらす。

左歌いとすゝきとよめる不審也。證歌をたてまつるへし。おほかたの歌からはあしくもはへらす。

右歌うたからはいとしもなけれと。させる難なし。ちとや申へからん。

三番

左持

しつか家のそとの庭のよもきふにやつれす露の玉と置哉

右

殿下
定信

いろゝの玉とそ見ゆる紅葉ばのちりしく庭における朝露

左歌しつか家のとよめるもしつゝき苦しけにはへめり。

玉とおくかなといへるも。いとたえ「こはい」ゝしくそ。

右歌ちるらんもみちのうへには時雨のおとなひしそ。常のことにて侍る。千種の花におけらん露とも。いろいろの玉とは見えはへりなんものを。このもみちの露にそけにともおほえはへらねは。いづれもおなし程のうたにこそはへめれ。

四番

左

俊頼朝臣

庭もせにさきすさひたるつき草のはなにすかれる露の白玉

右勝

基俊

岩のうへの苔のはことに置露を玉しく庭とみけるはやわか

左歌さきすさひたるこそいみしうけにおほえはへれ。萬

葉集などには侍りもやすらん。かやうの歌合。古今後撰

なとにこそ。ことによみたりとも見えはへらね。すかれ

る露もいとお「か」しうも見え侍らす。右歌させること

はなけれとも。うたさまなたらかにて。よみしりたるさ

ましてはへれは。右のまさりたるにやはへらん。

左歌よろし。されと右歌からまされり。はやわかそ人

におほつかなけなる。されと名歌詞也。

五番

左持

重基

うつしうゑし草はの露のこほれれは秋の庭をは拂はてそみる

右

時昌

玉しくと人や見るらむ朝ことにこけむす庭におけるしら露

左歌うつしうゑる草葉やその名あるへからむ。されと

歌さまあしくもはへらす。

右歌も難なければ。ちとや申へき。

六番

左持

親 隆

露しけみさこそひする宿ならめ玉ちる庭と人やみるらん

右

爲 眞

みとりなる玉ぬきちらす心ちしてこけむす庭に置く朝露

左歌露しけみさこそひするやとならめといへることはこそ。つゝきもなきやうにはへれ。また露しけき宿に

は。かならずこひすることにやばあらん。また玉ちる庭もいとおとろくしう。されは露の玉にはあらて和泉式部かきふねにまいりてよむうたに。

物おもへはさはの螢も我が身よりあくかれいつるたまかとそみる。

御返し。

おく山にたきりておつる瀧津瀬に玉ちるはかりものなおもひそ。

とはへれは。玉ちるといふは露の歌かなひたりともおほえはへらす。右歌しそく五寸かうちに十首なとよむ

うたの心ちしはへれは。あらましまうすへきほとにもはへらさめり。されはちとやまうすへし。左歌玉ちると

よめる如何。き舟明神たくせん。和泉式部歌に。玉ちるはかり物なおもひそとよめるに。おもひよそへたるか。

それはたましひちるとよませたまへる也。されは露にはいかゝあるらん。方人申云。露は玉に似たり。なみた

も玉に似たりとよめれは。その難いかゝはへるへから

七番

左持

少將君

庭のおもにおく白露のなかりせは葉草にやとる月をみましや

右

明賢朝臣

あれ行は秋の野らなる庭の面をはらはてそみる朝ことの露

此歌いつれもくいとしたくにおかしうはへめり。左歌月をも見ましやとよめる。さきに山月といふ題あり。かたはらのたいをおかすはおほひなる難也。

右歌秋の野らなるとよめるは。のらとはなにをよめるそ。方人申云。野らとは草をいふ也。やかて草といふも

しなんよみはへると陳申。又判者いはく。古歌にのらとよめるおほえはへらす。またその證歌を不陳申。左歌

題ををかせり。されはちとや申へからむ。其外各ことなる難なければなり。

一番 戀

左

俊頼朝臣

秋かへすさやたにたてるいな草のね毎にも身を恨みつる哉

右持

基 俊

から衣立田の山にいくしたて神さひにける我がこひかな左歌秋かへすさやたといへることは。いかなる田にか

はへらん。證歌もおほえはへらす。ねことにも身をなといへる。またふるくよみたらん(こ)と見はへらす。こと

はいやしくてとりどころなし。右歌たつたの山にいくしたてかみさひにけるなといへるわたり。よみしりて

はへめれは。右の勝へきにや侍らん。左歌秋かへすとよめるはいかなることそや。さや田といふはいかなる田をいふにか。なかにもみとよめるたねの事か。いまたもみとよめるうたきこえず。まさなくこそはへれ。右歌ことなる難なし。仍爲勝。

二番

左勝

女房

ときのまに命をかへて泪川あはぬためしの名をはなかさし

右

明賢朝臣

あふ事を頼み頼ますいせちなるいなうの神のきゝもはてはやあはぬためしのなをはなかさし。いなうのきゝはてんよりは。まさりてそおもふ玉ふる。左歌からたくみに見えはへり。

三番

左持

殿下

わか戀の衣の浦の玉ならばあらはれぬるも嬉しからまし

右

定信

戀せしとおもひたちのゝ駒なれと心はしりになをそ苦しき左歌うたからはあしくもはへらねと。戀にはあらて法花經の歌よまんに。以無價寶を二題にえたらん歌の心ちそし侍る。戀にはいとたふとくそきこえはへる。右歌戀せしとおもひたちのゝこまなれとゝいへる。もしつつきよくもおもひたまへぬに。しもの心はしりのくるしからんも。とにかくにさゝへたらむところおほく。いづれもなんのかちとも見えはへらねは。持とや申へからん。

四番

左持

重基

左歌法文ににたり。いみしうたふとし。戀の歌とはおほえす。右歌心はしりとよめるは。いかゝはへるへからん。證歌あらはたてまつるへし。方人申す有證歌一由。されと不分明。左なを戀の心ともおほえす。持とや申へからん。

うしとてりさのみや人を恨むへきことはりとたに思ひなさはや

右

時昌

ひと心うきたひことにいとへ共たへたるものは我身なり鬼此歌左も右もすかたこゝろともにおかしう。けに戀の歌はかやうにこそよまめとそ見たもふる。左右ともによろし。正義をよめる歌なり。ちとや申へき。

五番

左勝

雅光

よとゝもにしほるゝ袖や衣かは汀にやするもくつなるらん

右

師俊

こゝろのみくたくる戀や淵となるそはゐにやする興津白浪左歌しほるゝ袖やこゝろも川なとよめる。いひなれおかしうはへめり。右歌ふちとなるそはゐとは。いかにつゝけてはへるにか。歌からもおとりてはへれは左勝とそ。左右歌おなしやうなれとも。ところのなによそへんに。衣川はすこしまさりてや侍らん。されは左爲勝。

六番

左勝

女房

山ふしの旅の泊りに燈す火のうち出て人にほのめかしつる

右

明賢朝臣

うちとくる事の難くも見ゆるよをいひいてあはん方そ又なき
左の山ふしのたひのとまりのとよめるもし。ますらを
の戀にはあらて。まことに山ふしのこゝろうちにこめ
たりける戀にやとそおほえ侍る。こけの衣はたゝひと
へなとよめる。まことの山ふしの歌にてあるを。そうか
にてよめるにやはへらん。右歌は六義とらへたるところ
はへらす。難すへきことはたにおよはねは。なをうち
出てほのめかすらん戀やすこしまさりて侍らん。
左歌の山ふしのとよめるそいとしもなけれど。右歌で
つきたるやうに見ゆれば左爲_レ勝。

七番

左

俊頼朝臣

くれ行は忍ひもあへぬわか戀やなるとの浦にみつしほの音
右勝 基 俊

よそなからしらせてし哉みかり野にましろの鷹の戀の心を
左歌なるとのうらにみつしほのおとゝいへる。むけに
つふきれに。にほひなくおほえはへるに。ましろのたか
のこひの心は。いますこしたかくや侍らん。左歌しほの
おとはいかにあるへきそ。戀するはかならずおとある
物かは。右歌無_レ難。仍爲_レ勝。

八番

左持

親 隆

戀をのみすまの浦なる濱ひさき誰かはしらぬしほれたりとは
右 爲 眞

此歌左右見くるしからすはへめり。みところある心ち
そしはへる。左歌からは優なり。
右歌有_レ念。されはちとす。

九番

左持

宗 國

見せはやな時雨ふるやの淋しきに獨ぬる夜の床のけしきを
右 道 經

あやにくに夜を長月の秋しまれ草かれ／＼に人のなるらん
左ぬる夜の床のけしきは。まことに物さひしくあはれ
にはへるに。また草かれ／＼になるらん人のこゝろも。
いと心ほそきことにこそ。されは此戀のこゝろは。いつ
れもなんなくこそおほえはへれ。左右おなしやうにそ
おほえ侍る。

十番

左

殿 下

忘れしよその情はさもあらはあれうきめ也共あひて社みめ
右勝 定 信

おもひかね返す衣はもゝよかはかりにあひみぬ戀もする哉
わすれしよそのなさけはといへるよりも。かりにあ
ひみぬ戀は。いますこしきゝなれたる心ちそしはへる。

左歌

かしきさまなり。

右歌

爲_レ勝。

十一番

左持

雅 光

さもあらはあれ涙の川(は)いかゝせん逢みぬなさへ流さすも哉
右 師 俊

夜とゝもに袖のみぬれてあさりするあまゆふなりや我思ふ事

左歌あひみぬなさへなかさすもかなとおもふらん人も。

ことはりにいとおかしう。右あまゆふなりやとよめる。

あふかた心もえはへられは。なみたの川こそあはれに

おほえはへる。

右歌あまゆふなれやとよめるはなにこそや。左歌よ

ろしくみえはへれは爲_レ勝。

十二番

左勝

親 隆

こひしなて心つくしにいままてはたのむれは社いきの松原

右

爲 眞

芦の屋のかりそめふしは津の國のなからへ行と忘れさり梟

左の心つくしのいきの松原は。あしのやのかりそめふ

しには戀のこゝろも歌のすかたも。まさりてそおほえ

はへる。左歌すこふるよろしく侍り。右歌もよけれと

も。なを左勝とや申へからむ。

十三番

左勝

重 基

つらさのみありそのうみの磯つたひ忘貝たにいかて拾はん

右

時 昌

心さしあこねの浦の底深くこふるしはいつか見るへき

右歌あこねのうらとよめるかみの五文字古歌にあはす。

心えられす。

左歌させる難みえすしてよろし。されは爲_レ勝。

十四番

左勝

宗 國

わりなしや心をいつちやりてまし行てなくさむ方もありやと

右 道 經

そりかへり様のま弓ふすよなき人をはなにと戀わたるらん

左歌やりてましといへるわたり。おかしけにもみえは

へらす。いとこはけにそはへれと。右のそりかへるにく

らふれは。いま少しみゝちかくそおほえはへる。左爲_レ勝。

爰に又はへる。

あまゆふなれやとは。あまゆふとはならぬことをいふ

也。それをしらさらん人をまけにせんとてこそ歌のぬ

しはらたゝせたまふめりしか。いさらなみとは。きりの

ななりとそ。誰かしらぬとそ。よろつのすいなふにはへ

り。

此一册左金吾基俊以自筆之本令書寫再三加校合畢

右保安二年關白内大臣家歌合以古寫二本校合了

群書類從卷第百八十四

和歌部卅九歌合五

永縁奈良房歌合 大治三年二月五日

題

櫻

歌人

郭公

月

雪

祝

左

大納言君

三郎君

世宇治山老隱

香象房

弁得業

香雲房

上總君

右

中納言君

弁君

大輔已講

眞常房

花林院得業

慈光坊

式部君

判者

前木工頭源俊頼朝臣

一番

左勝

櫻

大納言君

深山にはしもとかさをれはやけれと麓の花は今年咲めり

右

中納言君

散花をさそふとみつる春風のうはの空にも捨てける哉
左歌はしもとかさなれなといへるなど。ことせぬにあ

二番

左

遠近のちる花ことにたくひつゝ春は心のあくかるゝかな

右勝

三郎君

山櫻ひるみる色のあかなくによるさへ花の影にむつれぬ

左歌ことなる難見えす。世のつねのことなれは。めつら

しくなくそ見給ふる。右の歌はひるみる色のなといへ
ること葉頗おさなけなり。されとあかぬ名残によるむ
つるゝなと心ありとや申へからむ。

三番

左勝

世宇治山老隱

浮世にも花のさかりに成ぬれば物思ふ人はあらしと思ふ
右 大輔已講

散さらん事こそ花のかたからめ侘ては扱もしはしあらなん

左歌心あり。さもいひつへきことかなと見ゆる。春のころはなといへるふることに。心はしかをりていとおかし。但おもふといへる詞そ二所みゆめる。句をつゝくればとかなしといへは。さてもありなんとおもひ給ふれと。次のおもふ句のはしめにあらましかはとそみゆる。右歌はわひてはなといへるより。すゑまでおさなけなり。歌とは聞えてたゝこと葉に似たり。仍左を勝とそ申へき。

四番

左勝

香象房

春の目を猶なかゝれと思ふ哉花みることのあかぬ心は

右

眞常房

ことしもやあたに散ぬる山櫻さもあさましき花のくせかな
左右とも優なり。されと左は猶おかしう聞え侍り。右はなにくせ哉なといへる深難にはあらねと。みゝとまりて聞ゆれば猶左勝へきにや。

五番

左勝

弁得業

櫻山はなの盛に風ふけは梢をこして白浪そたつ

右

花林院得業

此春は花に心のあくかれて木の本にてもくらしつる哉
左歌すゑのこと葉すへらならねと。こゝろあるににたり。右歌は心あくかれは花の梢ことにこそあるへけれ。木の本にしつまりてくらは。花に心とまるところそいふへけれ。このふしは事たかひて聞ゆれば勝にや。

六番

左勝

香雲房

八重櫻ふるき都に匂へともふるすも花の珍しきかな

右

慈光坊

宮古いてゝかりそめにこし山里の花に心のからめられぬる
左歌は心いとおかし。ふるとふりと。やまひと申へからん。されととかにはあらすもや侍らん。右歌はかりそめにこしも花をたつねけると見えれは心さしもなし。すゑのからめらるゝといへること葉おひたゝし。古きことになきとにはあらねと。なをみゝとまるところちしてそ。

七番

左持

上總君

しら浪の立田の川にしきる哉山の櫻はちりにけらしも

右

式部君

花さかり雪とそみゆる年をへてよし野の山は冬は二たひ
左歌はしきるかなといへるこしの文字。あさはなれて聞ゆ。又水のなかれにつきて見たる本意にあらず。猶梢をみはや。深山かくれのはなをみましやなといへるは。さるなにむかひてあることをいふなり。是は歌合に求めてよまむにはこゝろさしなし。右のうたは花を雪に似する。あけくれの事なれはめなれて聞ゆ。すゑの冬はふたたびゆうにもなし。又ことたらぬに似たり。もし持にや侍らん。

一番

郭公

大納言君

時鳥まきのはかり待つれとなかて明ぬる夏の東雲

右勝

中納言君

郭公なくうれしきをつゝめとも袖には聲もとまらさり鳧

左歌はとはかりといへること葉は。たゝしはしと申す

詞にや。さらは心さしなくもや。あくる東雲とよめるは

暁のかたより待そめけるにやと聞ゆ。ほとゝきすをき

かぬ歌。ふるき歌合に其數みゆめり。されときゝたらん

うたのとなからんにはいかゝはへらん。右歌別によ

からねと歌めきたり。なとかたさらん。

二番

左持

三郎君

遠方やくもゐの山の郭公あまつよそにも鳴わたる哉

右

弁君

ほとゝきす信太杜の忍ひ音を尋ねさりせはいかて聞まし

此つかひともにあしくもみえす。左はめつらしきさま

なり。右はふるめかしきやうなれと。歌からなたらかな

り。もし持にもやとそみ給ふる。

三番

左勝

老隠

五月雨にぬるともきかん時鳥二こゑきなく里は有やと

右

大輔已講

五月やみくらくはくらく時鳥聲はかくれぬ物にそ有ける

左歌殊に珍らしからねと。させるとかなし。みくるしき

もしなとはすへすよみわたるににたり。右歌は暗はく

らくなといへる。はらあしき人のいはんこと葉とそ聞

ゆる。歌詞とはおほえす。すゑの聲はかくれぬるなとい

へる。古き歌に。こゑはかくれぬとも。聲はへたてぬともいへるうたあれば。かたゝにはゝかり有へし。難もなき左の勝なり。

四番

左勝

香象房

あたらしき只一こゑを郭公いかなる里に鳴とよむらん

右

眞常房

いかはかり哀ならまし郭公かくまたれてしきなかましかは

左歌はいといたくおもひよりたりとみゆ。但まさしう

なきとよむを聞てこそ。きなきとよむなとはよめれ。き

かて鳴とよむらんとをしはからんこと頗荒涼なり。な

かすもあらむものをされと心あり。右歌かくまたれて

しなとよめるほとすへらかならず。句きらまほしきこ

ともあれば。左の勝にやとそ申へき。

五番

左持

弁得業

郭公はな橋にやとるともなのらさりせはいかてしらまし

右

花林院

さよ中にみふねの山の時鳥ほのかに鳴てすきぬなる哉

此歌ともあしうもあらず。左なたらかにてゆうなり。右

みふねの山といひて。ほのかになといへるわたり。思ひ

所なきにあらず。仍持とや申へからん。左のさくさ(作者)

そなをこゝろゆかすおもはれん。

六番

左

香雲房

終夜まつにはなかてほとゝきす朝の原に一こゑそきく

右勝

慈光房

五月にはしはなくやとそ時鳥猶うら待にさぬるよもなし
左歌はあしたの原をかひなきさまによまれたるこそあ
やしけれ。今ひとこゑのなといへるは。ひるもまち尋ぬ
へきにや。右歌は時鳥はしはなくへきものにはあらね
と。ねかはんにはなとかはさもよまさらん。うらまつそ
はしめとはかりのおりによくしつるやうに。ほとなき
ことにまうすやうにおほゆる。右にの字そへもしにや
あるへからんとおほゆる。萬葉集みける人の歌にやと
心にくく見ゆ。

七番

左

上總君

郭公ひと聲なきて過ぬれとしたふ心そち々に有ける

右勝

式部君

ほととぎす雲のたえまにもる月の影ほのかにも鳴わたる哉
左うたさもなとかと聞ゆるほとにすゑの有けるこそ。
そくたい(東帝)してしたふつはかさらん心ちすれ。右歌
雲のたえまにもる月は。あやにくにあかき物とこそみ
給ふれ。なをかけほのかにといはく。月に雲をやかくへ
からん所社おほつかなき。もし證歌あらはよき歌なり。
しはしにても勝とそ申へき。

一番

左

大納言君

板間よりねさめの床にもる月を戀しき人と思はましかは

右勝

中納言君

くれはとり二村山をきてみればめもあやに社月もみえけれ

二番

左勝

三郎君

秋のよの月の光はかはらねと旅の空こそ哀なりけれ

右

弁君

秋の夜はたのむる人もなきやとも有明の月は猶そ待出る
左の歌すゑの哀なりけれそ。誠におさなくあはれけに
聞ゆめる。右歌は本にも字しきりたり。又有明の月は
哀に心ほそき事にこそ讀めれ。歌合の月の題にはいか
かあるへからん。證歌を侍へき。是はまちつきたること
をありかたき事にいひたれは。廿日あまり晦日のほと
の月にや。哀にはありもしけん。光は侍らしものを。若
左の勝にや。

三番

左勝

老隱

いかにして秋は光のまさるらん同し三笠の山のはの月

右

大輔已講

秋のよは曇るといへとこと月のさやけきよりもさやけかり鬼

左歌あしうも聞えず。すゑなといひなれてうたとおほゆ。いかなる影をなといへるふること。おもひ出られていとおかし。右歌はこと月とはなみの月をいへるにやと思へと。うち聞からに。月の二つあらんやうに聞ゆるかな。又歌からもすへらかならず。是もみにけのほとにや。秋月なりとも曇らんにはをとらざらん。余のよせい也。

四番

左持

香象房

眞葛はふ山路は晴て秋のよはこゆる旅人やすき月哉

右

眞常房

くまもなき月の光を詠ては日たけてそしる夜は明にけり
左歌はやすき月影とは。月の光にくらかりぬへき山路をなんとらすこゆるとかや。ことはたらす。古今序在中將の歌をいふに其心あまりて詞たらず。しほめる花の色なくて匂ひのこれるかことくといへり。たゝ其體にや。右歌是も夜は明にけりといへる。なを詞とゝこほりて心ゆうならず。おなしほととの歌ともや申へからん。

五番

左

弁得業

秋のよの更ゆく風に雲はれてはなたの空にすめる月影

右勝

花林院得業

故郷の時そともなき淋しさもなくさむ計澄る月かな
右の歌あしうもあらず。但みとりの空とこそいひならはしたれ。はなたの空とよまれたれはおほつかなし。定證歌侍らん。右歌いとすぐれたるにはあらねと。さもと

六番

左

香雲房

秋のよの有明の月はくまもなし朝くら山も名のみ社あらめ

右勝

慈光房

秋の月あかしの浦はなひきみにすむ我からの數もみつへし
左歌有明の月のこと。さきに申つればこれにてよくともほめ申さんことかたし。いかにいはんやすゑの名のみこそあらめとなのみなりけりとはいはさりけるか。すへらかにいふには義のたかふをこそわひてかうもいへ。心えかたくや。右歌これも心えす。數もみえけりとこそいふへけれ。見つへしとは只今までは見えぬにや。いつ見るへきにかおほつかなし。されといまあけらん
すれは有明の月には光まさるへきにや。

七番

左

上總君

秋のよは長井のうらに泊してのとかにてらす有明の月

右勝

式部君

あきの夜の雪吹はらふ嵐こそ月みる人のこゝろなりけれ
左歌長井のうらにとまりしたるは人か月か。月ならはとまるとはよむらんや。よむ人ならは長閑にてらすといふことたかひぬ。おほつかなき事あるかうへに。なを
有明いかゝと聞ゆ。右うた月見る人のこゝろなりけりといへる。心ゆうなり。詞もなたらかなり。よみしりたるひとの歌とおほゆ。仍勝とそみ給ふる。

一番

雪

左勝

老 隠

玉のきには、その杜も成にけりふる白雪の消ぬかきりは

右

中納言君

雪ふれは青葉の山もみかくれて常盤のきをやけさはおる覽

玉の木のこと本文にきることありとかや。むかしうけ給はりしよ。たとひ難ありともよくもしらぬことなれ

は事かたく。何況あしうもきこえず。しりてよむはかりの人あしくよまむやは。右歌ゆうにもなし又別の難も聞えず。左にはたゞけすらひの劣たるなり。

二番

左

三郎君

雪降はしるしの杉も花咲て三輪の山へもいかゞ尋ねん

右勝

弁 君

白雪にふるの山道うつもれてたとる計になりも行かな

左歌は賀陽院の歌合にありし歌の心なり。古き歌にはよみましたるこそよかなれ。是はえまさらずそみゆる。はなはかり咲たるはなとかたつねさらん。あれは雪にうつもれたれはこそ尋ねにくけれ。右歌はいとよからねと左よりはとみゆれば勝へきにや。

三番

左持

大納言君

覺束ないつれ何地の道ならんしおりもみえすふれる白雪

右

大輔已講

雪ふかみ隣の里もうつもれて煙のみこそしるし成けれ

左歌はいつちの道といへるみちしきりたる心地す。但かくしきりていふ事もあり。それはことさらにいふと

見えたるこそよけれ。是はをのつからをきたるとそみゆる。しおりは奥山の峯にすることなり。山のみねとならば。雪積りたりともをしはかりてんや。あなかちの事にや。右歌は隣といふはかきなとをへたてたるさにやあらん。さらはけふりをしるへにはといはん事おほつかなし。殊のほかに雪つもりたりともしるかりな

んものを。煙にまでもをよはし物をひかことにや。猶遠きほとこそ煙をしるへにせんもよからめ。

四番

左持

香象房

水の面もみなふる雪に埋れてたちぬや歎く池の鴉鳥

右

眞常房

みよしのに雪ふりぬれは我宿のならの枯葉そいと淋しき氷らさらん水の面雪にうつもれんもいとかたし。ゆきいたくふらは池の水こそまさらめ。なをこほらせてうつまはや。あまりの事か。右うた我宿はみよし野にある

か又里にあるか。さとにあるならばふれる雪を見てみよし野を推はかるおほつかなく。峯ならば雪つもりたりともいはねはたゝをしはかりの雪にや。たしかにみすはいかゝはあるへからん。峯ならすもさりとともあらん。雪は所をわかぬ物なれは。

五番

左持

弁得業

うちきらし天きる空とみし程にやかてつもれる雪の白山

右

花林院

年をへて伏見の山に降雪はとこめつらにもおもしろきかな

左歌うちきらし心えす。ふりきらしといはゝやな。又すゑの雪のしら山こゝろえす。白山の雪とそ。次第はいはまほしき。かみにをけはなたらかならぬなめり。されはわひてをけるにや。右の伏見の山こゝろえす。里に社讀めれ。山あたらしふしみなといひてや。とこめつらといへるほと思ふ所なきにあらず。されとも山おほつかなし。

六番

左持

香雲房

降雪に山の細みち埋れてまれにとひこし人も通はず

右

慈光房

あしたつるみわのひ原に雪ふかみ宮木ひくおの通路もなし
左よまむともせずたゝ事もなしたるなめり。おいらかにてゆうなり。右わりなく思ひよりてつくりいたしたるなめり。これも力入たり。彼もおいらかなり。持とや申さまほしき。作者いかはかりはらたちて。ようもしらぬ事知顔にいひつゝけたりと申さん。誰にか。

七番

左持

上總君

白雪のふりしきぬれは葛城やくめの岩橋そこと知られす

右

式部君

卷向のあなし檜原も埋れてかゝるみ雪もふれは降りり
左ふかきとかはみえす。かつらきやのやもしそあきはなれて聞ゆる。はしなとにかゝるみえわたるなといははやな。わたらはなかなはしなれはさはいひかたきにや。右あなしひはらもなといへる事は。さしこう(そい)てをし

けつらまほし。又すゑのふれは降りりもすくなる心地す。左のかちかとよ。

一番 祝

左

老 隠

みとりなる松陰ひたす池水に千代のすみかと思ゆる宿かな

右持

中納言君

ちとせとも色にはいてゝ石清水なかれん程は君か代なれは左のかけひたすとよめるきはめておほつかなし。ひたすとは物を水にいれんをそいふへき。まつ枝なとこそひたすへけれ。物の影は水の底にうつる物なれば影ひたすといはん證歌なくは。いかゝあるへからん。すゑはいとおかし。右歌なとさせることなし。尋常のふしなればいかゝおもひよりけんとも見えず。ふるめかしうてへちのなんなからむとおほつかなき事あらんといかあるへき。

二番

左持

三郎君

君か代は天の岩戸を出る日の幾めぐりてふ數もしられす

右

弁 君

三笠山ふもとの里は天の下ふるに思ひもあらしとそ思ふ天の岩戸とはあまてるおほんかみのたてゝ入給ひたりしとなり。たゝし夜の明くるゝは天の戸といふなり。それとおもひてよめるにか。あけくるゝことをよまんと思はゝひかことなり。天の岩戸にても日のめくらん事はあるんや。これおほつかなし。又すゑのてふといふこといひにくし。右歌あめのしたこそ匂ひなきこゝち

すれ。おもふといへる事二所あるはさきにも申けるやうに。やまひにはあらねともみゝとまりて聞ゆ。

三番

左

大納言君

君かへむ八千代の數は天にますとよをか姫の神やしるらん

右勝

大輔已講

君か代は盡しと思ふ春の日の三笠の山にさゝむ限は

左歌うたかひなきにあらず。八千代といひつれば數は定てけるは何事をかは豊岡姫はしるへき。神にまかせてしらすへきにては數もしらすとこそいふへけれ。何ことをしるへきそと神やの給ふらん。猶右つよけにそ見ゆる。

四番

左

香象房

打むれて岩れこねさす小松はのきくの千歳は君そかそへん

右勝

眞常房

たとふへき物こそなけれ君か代は濱の眞砂も數なからめやうちむれてこそ人などの物へまかるこゝちすれ。是もかのおまた立なみたるこゝろかひか事にはあらすもやあらん。又こまつはは何ことにか。もし小松の葉といふにや。證歌やあらん聞もつかぬ詞かな。右歌ひたくちにこそ見ゆれとしかはみえず。

五番

左持

弁得業

君か代は長井のうらの濱風に立しら浪の數もしられす

右

花林院

君か代をまつちの山の小松原千代のけしきを見るそ嬉しき左右ともに珍らしからねと指難みえず。持なとやまうすへからむ。

六番

左勝

香雲房

うれしきは大洋の濱に立なみの數もしられぬ君か御代かな

右

慈光房

春日山みれのしらかし萬代を君にといへは神も諫めす左歌はしめのつかひのことし。なたらかにてさせるとかもみえず。右歌のしらかしはひさしき物にや。證歌のおほえぬかな。神もいさめすもおほつかなし。みにかなふらんや。管見の身おほつかなきまゝに。をとるなと申もおそろしや。

七番

左持

上總君

春日山ちえにさかゆる榊葉は萬代までのきみか

右

式部君

君か代ははふはかりなしみ吉野のこかねか峯に御代を待迄左春日山なとにことよせていとわつらはし。右こかれの峯なとはみたけの御山の事にや。ことありけなるいにも申かたし。をしこめて持なとにて候へきにや。歌からもさやうにそみゆる。

此道被_レ催_二宿習_一雖_レ似_レ好。於_二善惡事_一者全所_レ不_二知_レ給_一也。偏依_二難_レ有_レ仰旨_一不_レ顧_二嘲哂_一所_レ令_二判申_一也。莫_レ不_レ逮_二他見_一者。幸甚々々。努々。

源俊賴朝臣

西宮歌合

大治三年八月廿九日於廣田社頭講之神祇伯顯仲卿一家人々相共所會也

判者

前左衛門佐基俊

一番

月竈遠帳

左

前美作守顯輔朝臣

難波江のあしまにやとる月みれば我身ひとつも沈まさり鬼

右

神祇伯顯仲卿

かゝみ川影見る月にそこ澄て沈むみくすのはつかしき哉

左右いつれもなたらかに侍。中にも若間にやとる月見て我身ひとつもしつまさりけりとおもひしられける。

姨捨山の月みけん人の心よりもなくさめかたく思たまへらるれば今少し心ありとや申へからん。

二番

左

前大貳長實卿

人しれすはれぬ歎きの有物を普くてらせ秋のよの月

右

兵衛督君

山端のうき雲晴てすみのほる月と共にゆくこゝろ哉

左歌はれぬ歎きの有ものをとよめる。もしつゝきこはけにてたをやかならずみえはへるに。又右のうた浮雲はれてとよめるわたり。さゝへたる所あるやうなればこよひの月の光は同じほとにそ見えはへる。

三番

紅葉寄書

左

大進

朝霧の晴行まゝにもみち葉はあかねさしてそ色まさりける

右

顯仲卿

月草の色とる比はかへれともはゝそのもみち心にそしむ

四番

左

四位少將公教朝臣

いとしく照こそまされ紅葉はに日影うつるふ天のかこ山

右

伯卿女

天の原時雨にくもるけふしもそ紅葉の色はてりまさりける

左の日影うつるふ天のかこ山はもみちにうつるひの光とおほえて。をみのかさせるひかけによみたかへつへき心地こそし侍れ。又もみちするやうは所々に名聞えたる山共の多かる中に天のかこ山まで思ひよられけむも萬葉集などのやうにふるめかしくそおほえ侍る。右の時雨にくもるけふしもそとよめる。もしつゝきのしたゝかさは。紅葉の色の今一しほは染まさりにけるにやとそみえ侍る。

五番

鹿寄書

左

前左衛門佐基俊

曉になりやしぬらん小倉山なく鹿のねに月かたふきぬ

右

伯

曉や聲高砂になく鹿をほのかにやきく沖の舟人

左歌すくれたることはなけれども其こととめとまる所のばへらさめり。右歌の曉やとよまれたる。やもしのおきところいかにそや見えはへるに。又こゑ高砂になく鹿のといへる文字つゝきさかきまなるやうにて。心ゆきてもおほえす。なをさをしかのと上によまれたらば。聲高砂はたよりある心地し侍なんかし。

六番

左

仲正

雲かゝる高志のやまの明暮に妻まとはせるを鹿鳴也

右

伯

山かつの先あかつきをしりかほに裾野に出て鹿そ鳴なる左歌すゑは高陽院の一宮の歌合に江侍従か妻まとはせる鹿そなくなるとよめるに。たかふところも侍らさめり。右歌の山かつの先曉をしりかほにといふ。山かつあかつきを待とは何にみえたるにか。唐土に函谷關といふせきの關守こそ曉をまちて鳥のなく聲をきゝつけて關の戸あくといふことは侍れ。やまとことの葉にもからのうたにも。山かつの曉まつといふ事みえはへらねは左右いつれまさともおもたまへられす。

七番

左

大僧正

はふりこかしめゆふ野への鈴虫は夕つて社ふりたてゝなけ

右

宮内大輔忠季

神かきのいはねにさせる榊葉にゆふかけてなく鈴虫のこゑ左右の歌ことは姿是もおなし程と申へきにや。

八番

左

親房

風さむみゆふかけ草にかくろへてはたをる虫の聲聞ゆ也

右

兵衛君

誰ためさあやめも見えぬ夕されにはたをる虫の聲聞ゆらんゆふかけ草にかくろへてはたをるらん虫よりも。あやめもしらぬ夕されは今少し心ありてみ給へらるゝ。

九番

左

四位少將公教

忍ひねを我袖のみと思ひしを劣らさりけり萩の下露

右

宮内大輔忠季

色かはる萩の下葉の露けさは我身のうへと成にけるかな忍ひねの袖の雫にをとらさりける萩の下露いとおかしく哀にみえはへるに。又はきの下葉の露けさの我身のうへになりけるこゝろくるしさに。左も右も袖ぬれぬへき萩の露にこそはへめれ。

十番

左

大夫典侍

秋はきの下葉の露にあらねとも消ぬ計そ人は戀しき

右

伯卿女

わすられて年ふる里の淺茅生に誰ためしける萩の錦そ左のうた消ぬ計そ人は戀しきといへるこそ。歌めきて見ところある心地しはへるに。右の年ふる里の淺茅生にしける萩の錦もけにとかめまほしきことにこそはと。ひとかたならす心うつりて。これも勝負のほと思ひわかれ侍らす。

十一番 女郎花同

左

前大貳

戀しきにおもひよそへて女郎花折わか袖そいとゝ露けき

右

伯卿

なつかしく折手にかほれ女郎花戀しき人もわする計に

左のおる我袖そいとゝ露けきといへる。詞つかひなと

したゝかにて。歌合のうたはかうやうにこそはとおか

しくみえ侍り。又右の折手にかほるをみなへしにわす

れん戀のこゝろはすこし頼もしけなく。心淺きこゝち

こそし侍れ。なを露けき袖はまさりてやとそおも給ふ

十二番

左

大夫のすけ

あふことをいなみ野に咲女郎花をらぬ物ゆへ袖そ露けき

右

忠季

うき人の心なりせはをみなへし吹とも風になひかさまし

いなみ野に咲をみなへしよりは。吹とも風にといへる

わたり。今すこしいひしりてや。

十三番

薄同

左

大僧正

ほに出てもなとかひもなき花薄思ひこめてそ有へかりける

右

伯

うしとのみ人の心はいはれ野にまねくすゝきを何か頼まん

左右おなしほとにそ見えはへる。

十四番

左

頭弁雅兼朝臣

つれもなき人にみせはや花薄うらなく風に靡けしきを

右

忠季

くる人も絶ぬる宿の糸すゝきほに出て誰を招く成らん

左の人に見せはやなとまては歌めきて侍れとも。下の

うらなく風になひくけしきをなといへる詞つかひいと

ゆうにもおほえぬ。こひにくれたけのよゝのふること

の残りすくなく上下にとられて侍めり。右たえぬる宿

の糸薄は其ことゝめとゝまるふしなけれとも。あまり

亂れかはしきやうに見えはへれは。誰もかちまけの程

こそ定めかたし。

十五番 萩同

左

覺雅已講

うき人を驚かすへき方そなきうらやましきは萩の上風

右

伯

萩原やよかせそつらき音せすはねてこそ人を夢にみましか

夜風そつらきといへるよりは萩の上かせをうらやむら

んこひの心は今すこしまさりてそ聞え侍る。

十六番

左大弁爲隆

萩のはゝ暮行風に音すなり我まつ人のかゝらましかは

右

堀川殿下女房

逢ことはかた野にしける萩のはの音をはたつな秋ははつ共

わかまつ人のかゝらましかはと思ひける風の音社。片

野にしける萩のはよりも聞所ありておほえはへれ。

左

前淡路守仲房

十七番 蘭同

あふことは片野のへの蘭たれきてみよと露のをくらん

右

兵衛督

色もかもよそへてそみる蘭ねすりの衣馴しかたみに
此歌は左右おなしほとに見え侍るへきに。紫とよみて
けにねすりの衣とはよむことゝしりて侍るに。此衣は
何のねすりにか藤はかまとよみて紫にとおもひよそへ
られたるにや。それにても心も見えすおほえ侍れは猶
左をよろしと申へからん。

十八番

左

親房

蘭きてみる人もなき宿に戀すてふ名のいかて立けん

右

伯女

わか戀る人もきてみぬ蘭何とてつゆの染てをくらん
左のうたからはあしくも侍らねとも。來てみる人なき
宿ならんからに。戀すてふ名はことにいかて立けるに
かと其心をしらまほしくこそ。さて右の何とて露のそ
めてをくらんとよまれたる。詞しけきやうにてもしつ
つきやすらかに聞えねは。おなし程にそみ給へ侍る。

十九番

菊寄祝

左

大僧正

幾重そとかさなる菊を尋れば君か八千代の數にさりける

右

伯卿

岩間ゆく菊の下水たえせねはくみてそ千代の數はしらるゝ
八重さく菊を八千代のかすにかそへなしたるは。菊の
下水くまんよりも。今すこし便ある心地しはへる。いは
ひの心もまさりたりと申へきにやあらん。

廿番

左

顯輔朝臣

君か代はかきりもしらす長月のきくを幾度つまんとすらん

右

忠季

君か爲千代まつかけに住吉の神やうへけん岸のしら菊
左歌のかみの句に君か代はかきりもしらす長月のとよ
める古今に君か代はかきりもしらすなかはまのとよめ
る歌にわつかに二もし三文字やかはりて侍らん。下の
句をいくたひつまむとすらんといへるも。はしめ終た
しかならぬ心地そしはへる。又右のすみよしの菊はい
はひの心にはけにいと珍らしく聞え侍るをかくよみた
らん歌合のうたこそおほえはへらね。すみよしの岸に
は忍ふ草わすれ草まつなとをそ。いにしへよりよみふ
るしたるに菊さかん岸には。すみよしまでおもひよら
すともありぬへきこと哉とておほえはへる。されは證
歌を聞て勝負は申へき也。

南宮歌合

同九月廿一日於三門妙社合之南宮にてこと
題ともにて有へかりし程にもとの歌とも
えり残しにてせよと度々人の夢にみゆるに
よりて

判者 大僧正

一番 月邊媛

左 大僧正

ありし世にかはらぬ秋の月影は昔の友にあふこゝちする
右 伯

月よみの神も昔をわすれすは普き影に我をもらすな
二番 左 親 房

久堅の空ゆく月にさそはれてうき身もしはし心をそやる
右 忠 季

秋のよの月みる程もなくさまでいとゝゆかしき雲のうへ哉
三番 左 紅葉 晝

出る日の光はるかにたけ行はてるとそみゆる峯の紅葉は
右 伯 名欠

霧のまに峯のもみちは尋ねとてひもたけにけり高圓の山
四番 左 仲 房

秋霧の朝な夕なに立田山晝そ紅葉の色は見えける
右 伯 女

紅にそむる時雨のひるまにもぬれ色にのみみゆるもみちは
五番 鹿 曉

歌關

左 大僧正

右 伯

終夜しけみにしのふきをしかもあけつけとりと今そ鳴なる
六番 左 頭 弁

秋深み霜まつ峯の鐘の音に聲うちそへてをししか鳴也
右 伯 女

衣手の山のすそ野にたつ鹿のうら淋しきは曉のこゑ
七番 虫 夕 左 六條院大進

何ことを思ふなるらん鈴虫の夕くれなるにふりいてゝなく
右 伯

夕されは蓬かねやのきりゝす枕の下に聲を聞ゆる
八番 左 大夫典侍

夕されは淺茅かうへの露寒み誰まつ虫の下になくらん
右 重 道

ひくまのゝゆふつけをけるくらゝに聲たてゝなく響虫哉
九番 萩 壁 左 仲 房

秋はきにをく白露の玉ゆらも戀しき人はわすれやはする
右 内大臣家越後

萩のえにまかひし袖の白露はあひみぬ程に色つきにけり
十番 左 親 房

戀ふれとも粟津の原に咲萩の花と散なん名社おしけれ

右

伯

まくすはふ小野の糸萩くりかへし恨めしなから猶そ戀しき

左

爲實肥前司

あたなりといはれの野への女郎花なと我にしも驛かさる覽

右

兵衛君

みをつめは哀とそみる女郎花人もこす野の露にしほるゝ

左

大夫典侍

女郎花なひかす風にみをなして人を心にまかせてしかな

右

重道

我のみとおもふ夕へに女郎花誰をこふとて露けかるらん

左

大夫典侍

逢ことはさこそかた野にたてりとも忍ひて驛けしのゝ小薄

右

忠季

わか身からうきふし繁さしの薄忍ふとたにもしらすや有覽

左

親房

花すゝき招くをよそにみし物を我もほにいてゝ人そ戀しき

右

三宮大進

篠原やをさゝましりの村薄よをならへてもつらき君哉

左

大僧正

待人を萩の葉とたに思ひせは風のつてにも音はしてまし

右

伯

うきことを風のつてにも聞つれば萩の上葉の露そこほるゝ

左

修理權大夫行宗

我戀の萩ふく風の音ならはしられてかくは歎かさしまし

右

兵衛君

よひゝに分こし人は音もせてそよと聞ゆる萩の上風

左

蘭戀

徒にやとに匂へる藤ばかま戀しき人のきてもみよかし

右

伯

うらやましみやけかはらの蘭たれにむつれて紐ときつらん

左

顯輔朝臣

わきもこか裾野に匂ふ蘭おもひそめてし心たかふな

右

兵衛君

きてなれし人はみねとも蘭をのか心とほころひにけり

左

菊親

老せぬは汀のきくのしるしとも流をくめる人そしりける

右

頭弁

君か代を長月にしも咲初て久しく匂ふしら菊の花

左

女

右西宮歌合南宮歌合以御子左忠家卿眞蹟書寫畢

住吉歌合

大治三年九月廿八日参三社頭合之前との歌
合のうちに住吉のうらやませ給ふよしのめ
め度々有しかは参りてあはせられたるなり
題同前

判者 神祇伯顯仲卿

一番 月邊樓

左 前和泉守道經

くまもなき月に心をなくさめてうきみに年の積りぬる哉

右 伯 女

月清み心もすめる秋のよや身をうき雲の晴間なるらん

判云。左和歌うるはしくよまれて侍。されとくまもなき

月に心をとといへるこそふるめかしくや。右歌今めかし

く侍れとすこしもの心ゆかす思ふ給ふらるれば。

海士の舟さしてもいはしつきひとの桂のかちをとるに

まかせて

二番 紅葉寄書

左 前淡路守仲房

みつ汐のひるまに過る東路や清見か關に紅葉しにけり

右 帥大夫重道

散ぬへき紅葉のにしき夕風のたゝぬさきにときてもみる哉

左歌の心おほつかな。いかて過らん旅人のもみちは關

のかたみと思ふにとこそみえ侍れ。いかゝ。右をりかく

る社のもみちの錦なも風のたつにそうはきともなる心

地しはへる。錦ちらさしと思ふ心よくはへり。されとた

たぬさきに紅葉のにしきをきたればにや。姿心ゆかす

みえ侍れは梢の風たちまさらんことかたくやとおほえ

侍れは。

清見かたやしほに染る紅葉はにもみちのにしきたちも
まさらしと申へきにや。

三番 鹿寄書

左 親 房

しら露のおきいて聞はさほ山に曉かけてをししか鳴なり

右 重 道

柴の戸を嵐の過る明方に妻よふ鹿は聲たてつなり

左右ともに物によせられたるさまくたけて侍れと今す

こし左やすゝみて。

さ衣の袂すゝしき風よりもを鹿の聲そ身にはしみける

四番 虫夕

左 覺雅已講

とふ人もなき古里の暮ことに誰まつ虫のたえず鳴らん

右 兵衛君

眞葛原なひく夕の秋風にうらみ顔なる松虫の聲

身をしれはみな松虫としりながら恨顔なる聲やまさら

んとなむみえ侍る。少しすこき所の侍るかとよ。

五番 萩

左 大夫典侍

糸萩のいとはるゝ身としりぬれはくるも苦しき心地こそすれ

右 伯 卿

我をこそ忘れもはてめ諸共に植し小萩の花はきてみよ

右歌すゑのこゝろゆかす侍れは。

をしなへて宿の小萩のすゑよはみ露もこゝろそとまら

さりけるとみえ侍れは。左まさるへきにや。

六番 女郎花戀

左 大僧正

女郎花咲野へことに身にしてみて花心なる戀もするかな

右 兵衛君

我戀のなくさむつまにあらねともおらて過うき女郎花哉

をみなへしくちなし色の花なれは。いかにもえこそいはれさりけれとてや。

七番 薄戀

左 顯輔朝臣

いつとなく忍ふもくるし篠薄ほに出て人に逢よしもかな

右 伯卿

いかにせんまのゝ入江に汐みちて泪にしつむ篠のを薄

左歌つねのさまならねといさほに出てなんともしいへれはとかなし。右のうた泪に沈むといふ事心もゆかねは

おもふ事大野にたてるしのすゝき忍ふ心の有かたき哉とみ給ふるこそいかゝ。

八番 萩戀

左 仲正

そよ／＼と萩吹風は音すれと人はたのむることのはもなし

右 兼昌入道

よきの浦に一村たてる濱萩の又たくひなき戀もする哉

左歌人はたのむるなといへるほとありつきて聞えはへれとも。もそこそ心よくもみえ侍らね。右歌は戯れうた

にてやはへらん。されと今少しめやつき侍らん。

汀なる鹽あしに紛ふ濱萩はよしとそみゆるよきの浦人

九番 蘭戀

左 基俊

白露のむすひをけはや蘭花の下ひもとけかてにする

右 伯卿女

匂ふ香を君によそへて藤はかまなつさふ袖に露そこほるゝ

右歌よくはへれと末のこと葉うたすかたににぬ心地して如何はへらん。されは。

蘭露の結ふをみるよりも玉ちる袖はなつかしきかな

十番 菊寄説

左 宮内少輔定信

君かへん世を長月に咲ぬれはいく秋としもしら菊の花

右 伯卿

みる人もよを長月の花なれは久しと聞そうれしかりける

左歌こと葉まことに心もをよはされはいかにも申かたくそ。右とかく申へき程ならねはたゝ。

とゝこほることのばなれはよし水に流れさり鳧菊の雫も藻汐艸かき散すよりちかの浦の玉つ嶋守みるめ耻かし

中宮亮顯輔家歌合長承三年九月十三日

題

月

紅葉

戀

歌人

左

左衛門督雅定

新中納言宗能

右兵衛督顯賢

大藏卿經忠

左宰相中將成道

神祇伯顯仲

丹後守爲忠朝臣

太皇太后宮大進忠兼

前越後守國能

信濃守親隆

僧琳賢

參河

判者 前左衛門佐基俊

一番 月

左

いかなれは同し空なる月影の秋しもことに照まさるらん

右

中宮亮顯輔

終夜ふしの高ねに雲消て清見か關にすめる月影

左歌姿こと葉共にうるはしく見所侍るめり。おなし空

右

中宮亮顯輔

散位道經

前備後守季通

彈正大弼維順朝臣

兵庫頭仲正

修理權大夫行宗朝臣

宮内大輔忠季

前肥前守爲眞

顯時

雅親

僧隆緣

讀人不知

左衛門督

二番

左

あかなくに惜むもしらす傾くも思ひくまなき秋のよの月

右

秋のよも天の川瀬や氷るらん月の光のさえわたるかな

左右兩首。文花義興等同。勝負難分。仍爲持。

三番

左

すみのほることひの月の影をこそ秋の例の空と詠れ

右

さらぬたに秋の心にたへぬ身をあなあやにくの月の氣色や

左右歌等 一端之興。餘情猶似薄。仍爲持。

四番

右兵衛督

前備後守季通

左

大藏卿

岩間行八十氏川のはやき瀨にみなはたてともやとる月影

右

彈正大弼維順朝臣

なかめする身は池水にあらねとも心に月のすまぬよそなき

左右歌花實同神。等級難_レ定。雖_レ然左歌徒多_二河情_一。少_二月辭_一。右歌偏存_二月思_一。無_二餘趣_一。仍_レ以_レ右爲_レ勝。

五番

左

左宰相中將成道

たとふへき方こそなけれ天河月すみわたる有明の空

右

兵庫頭仲正

うかれ行ありなし雲も晴のきてかゝる隈なき秋のよの月

左たとふへき方こそなけれなといへるわたり。こと葉

いやしくて歌合とも聞えはへらす。右歌三十一字の詞

ひとつとるへき所も侍らされは左少し宜見え侍れは以

左爲_レ勝。

六番

左

神祇伯

おなしくは朝日の影にうつるまてしはしな入そ山端の月

右

修理權大夫行宗朝臣

雲晴て庭さえわたる月影は手にもたまらぬ秋の雪哉

左歌上句同字頗以卑陋歟。又何爲不_レ賞_二今夕停午之光_一。

空可_レ惜_二明朝寅卯之影_一哉。事義云相違蒙_二既裁_一。右歌文

舛雖_レ似_レ可_レ觀。於_レ癖有_二狐疑_一。手にもたまらぬ秋の雪

とよめる。若有_二本文_一歟。將亦有_二證歌_一歟。井蛙智短。已

迷_二身緒_一。聞_二正說_一。決_二雌雄_一。但右歌製舛頗可也。云爲之

間暫以_レ右爲_レ勝。

七番

左

丹後守爲忠朝臣

古の人あらませはとひてまし今宵計の月はみきやと

右

宮内大輔忠季

隈もなき月の光のさすからになとかさゝきのまたきたつ覽

左歌文舛無_二曲折_一。辭義無_二異端_一。作者之心依然可_レ觀。右

歌何忘_二我朝之艷詞_一。偏授_二漢家之難儀_一。和歌之本意豈可

然哉。詠日隈もなき月の光のさすからになとかさゝきの

のまたきたつらんといへり。是依_二何書文_一被_レ詠哉。依

分暉度鵲鏡詠者全非_レ月。本文已爲_二百詠文_一被_レ欺歟。若

又依_二魏鵲之文_一被_レ詠者。又已乖_二本文之意_一。倩于案_二文

意_一。此二文之外無_二別與事_一歟。未_レ聞_二正說_一之間推以_レ左

爲_レ勝。

八番

左

太皇太后宮大進忠兼

更科の山路にさける白菊の花のまはゆき秋のよの月

右

前肥前守爲眞

空晴てきれる雲たになきよはに月の桂の影のみそする

左歌更科の山路にさける白きくはとよめる。未_レ聞_二本

文證歌_一。としころは更科にはたゝなくさめかたき月照

所とのみそ知りて侍。更に菊咲る所とは承らす。若山路

の菊の露のまにとよめるふることなとおほしわたり

て被_レ詠たるにや侍らん。彼は仙家の菊なり。更非_二俗境

之菊_一。又花もまはゆきと被_レ詠者。はなのまはゆからん

するか。人のまはゆからんするか。此事度_二兩端_一未_レ知_二

正說_一耳。右歌語似_レ近_二人耳_一。又叶_二物情_一。依_レ月詠_二桂影_一。

者は詩歌の常の事也。仍以右爲勝。

九番

左

前越後守國能

秋のよの月には雲のいとはれていつくの空に立かくるらん

右

顯時

天河雲の梯とたえしていかてか月のすみわたるらん

左歌詠月甚少雲辭尤多意趣一候。已處背題意歟。右

歌天のかは雲のかけはしとたえしてといへり。依此文于案之。天の川に自本無雲梯。只有鵲橋。詩にも鳥鵲

橋とつくれり。又和歌にも空すみわたる鵲の橋となん

よめる。橋といへは何れもおなしやうに聞え侍れと橋

と梯其義不同。河や池にわたすを橋といひ此峯彼谷

にわたすを梯といふ。おなしことのやう侍れと所用

之字不同はへるなり。雲梯者劔閣と云所にそ侍るとう

け給はれ。但此難は侍れと此歌こそ。いかてか月のすみ

わたるらんといへる程いひしりて聞えはへれは。以右

爲勝。

十番

左

信濃守親隆

心にも見れは入ぬる月影を山のはのみとおもひける哉

右

雅親

秋の山峯のあらしに雲はれて空すみわたる有明の月

左歌此歌は後冷泉院御時の歌合に。大貳三位所詠之秀

歌也。于今多在人口。文字頗雖相違大意無違。本歌

云。山のはも名のみ也けり月影はなむる人の心にそ

いる。誠與心相通事者。甚興あることにははれと。

歌合之所頗可避事歟。右歌は一首中帶二巨病一者蜂

腰病之。二者鶴膝病之。和歌作式准詩門病立八病

云。一首の中同字三あるを蜂腰同字四あるを爲鶴膝

者。今于勘此歌一の字四あり。又のゝ字三あり。已犯

蜂腰鶴膝也者此巨病也。入和歌腹心。非扁鵲者誰得

痊哉。左歌者已舊秀歌也。右歌者一篇中有二巨病

十一番

左

僧琳賢

秋の夜の月と計に言なれやはれたるなつの日とそ見えける

右

僧隆縁

むは玉のおほおそ鳥の羽にかける程さへしるき秋のよの月

此左右詞義兩不評定。

十二番

左

參河

底清みうつらぬ水そなかりける雲の月はひとつなれとも

右

すみのほる月の光やまさるらんひまなき星の見えす成行

左歌はしめの句の底清みそいとゆうにもきこえ侍らね

と。末はきゝ所ありてよみすまされたるやうに聞え侍。

右歌心もたらず詞も聞所少く侍めれは以左爲勝。

一番

左

左衛門督

みな人の心にそめておもへはや紅葉の色の深くみゆらん

右

顯輔

山姫に千重の錦を手向てもちるもみちはをいかてとゝめん

此左右歌心詞共に云所ありて何れまさるとも思ひ定め
かたく侍る程に。なを右のちへの錦を手向てもといへ
るふること思ひ出られて。今一しほ色やまさらんと思
ふ給へられて。以_レ右爲_レ勝。

二番

左

新中納言

見渡せはもみちにけらし露霜に誰すむ宿のつま梨の木そ

右

道經

紅の末つむ花にうすくこき露や紅葉の色をそむらん

左歌詞雖_レ擬_ニ古質之軀_ニ義似_レ通_ニ幽玄之境_ニ。右歌義實雖_レ無_ニ曲折_ニ言泉已凡流也。仍以右爲_レ勝畢。

三番

左

右兵衛督

紅の八しほの杜のもみち葉は深き色こそ身にはしみけれ

右

季通朝臣

秋の色を心に染し唐人もまつはもみちの錦

左歌詞雖_レ非_ニ秀逸_ニ義存_ニ尋常_ニ。右歌心感_ニ秋興_ニ雖_レ類_ニ宋生潘良之思_ニ辭希_ニ古質_ニ徒仰_ニ億郎萬撰之風_ニ事非義。

仍以_レ左爲_レ勝。

四番

左

大藏卿

嵐吹舟木の山のもみち葉は時雨の雨に色そこかるゝ

右

維順

秋ふかみ朝夕露のもる山は楨の下柴もみちしに鳧

左歌詞かしこくさゝへやりて侍れとも。姿そ甚いやしく侍れ。あまくたるひなに年へたる_レの。都のて

ふりしらすして。花の宮古にきたりたらんやうにそお
ほゆる。右歌朝夕露のといへるわたりこそ白露も時雨
もいたくもる山は下葉残らず紅葉しにけりといふふる
言に。いくはくたかひたりとも覺えはへらす。下柴と云
事こそふるくよみたりともおほえ侍らね。なとかへて
まゆみ杵はしなとを置て。楨の下にいふせくわりなけ
に生たらん檜柴椎柴の。もみちすらん事もしらぬに。わ
りなく紅葉せせんとはおほしよりけるに侍らん。さ
れはたゝ姿はわるくはへれと。舟木の山の紅葉をまさ
りと申へくや侍らん。

五番

左

宰相中將

をしなへて紅葉の色に成にけり時雨に染ぬ梢なけれは

右

仲正

もみちはは峯のあらしにはつられてをりとめ難き錦成けり

左の時雨に染ぬもみち葉右の嵐にはつられたらんもみ
ち葉よりはまさりてや侍らん。

六番

左

伯

木のまゆくいさゝ小河にもみち葉の深くも色を移しつる哉

右

行宗朝臣

時雨する二上山を見渡せは梢もあけに染にけるかな

左歌詞花言葉共可_レ見。右製依_ニ已迂誕_ニ首尾少_ニ妖艶_ニ仍
以_レ左爲_レ勝。

七番

左

爲忠朝臣

幾入か時雨ふり出て染つらんからくれなゐに木からしの杜

右

忠季

秋されば小倉の山も名のみして下照峯の紅葉しにけり
左歌いくしほかといへるより唐紅にといへるまで。い
ひかなひたりと聞ゆるほとに。次句の木枯の森そつ
てうしなへと。唐紅にといへるもの居ところのあし
きにこそ待めれ。右歌小倉山に下てる峯といふみねの
侍るにや。證歌證文きかまほしくこそはへれ。左歌は下
句にもしのゐ所たかひたりと聞ゆ。右歌はしたてる峯
おほつかなくはへり。仍爲持。

八番

左

忠兼

散ぬへき小嶋か磯のもみちはにあらくもよする奥津白波

右

爲眞

山城のこまの山へのもみち葉を唐錦とや人は見るらん
左歌詞義頗似有疑。小嶋磯には紅葉ありとよめる證
歌侍らんや。但歌云まつ嶋やをしまか磯にかつきせし
海人の袖こそかくはぬれしかといへり。若依此歌文
者彼詞頗口詐僞贗者。非可指事也。右山しるのこまの
山邊の紅葉はをから錦とや人はみるらんといへり。山
城のこまの山をは。昔かのうりふ山といひて瓜つくる
所とこそ聞わたりて侍りつれ。紅葉すとは。されは山し
るのこまのわたりのうりつくりとなりかくなりなる心
哉となんよみて侍り。古歌にをしまか磯にもみちすこ
よめるふる歌も見侍らす。松嶋やとそ讀つたへて侍る。
又こまのわたりもみちよめる歌も見えず。たゝ瓜つく

九番
るとそよみて侍れは。此左右歌辭義共關。仍爲持。

左

國能

は山より紅葉の色の深ければおく床しくも尋れいらるゝ

右

顯時

時雨にはかへる袂もある物を色はへまさる衣手の森
左歌詞義共滯比興花少。就中卒章のいらるゝの辭。尤有
忘口故人有言。人文之懲尤可恐之。右歌辭無比興之
辭。義無可採之義。就中色はへまさるの句尤類迂。仍
爲持。

十番

左

親隆

三輪の山秋のしるしを尋れば杉間を分て紅葉しにけり

右

雅親

露霜やまなく置らん神なひのいはせの杜の色付にけり
左歌なと名に高きもみちする所々を過て。三輪の山本の
杉たてる門よりわつかに透て見えけん紅葉を。秋のし
るしと尋んもとおほしより侍ると。あやしきこそ思ひ
給ふれ。右歌たとひ霜は大鳥の羽にはふり侍れとも。な
をいはせの森にはをかせまほしくそ覺えはへる。この
二首大畧雖同科。右は今すこし文字つゝきいひなれた
るやうにみ給ふれは。以右爲勝。

十一番

左

琳賢

朝日山てる紅葉はのあたりに松の緑もうつろひにけり

右

隆縁

朝霧のかゝる紅葉の色みんとから紅のふりてゝそこし

左歌朝日山にもみちのてらんからにあたり松さへうつろふへきやうもなし。うつろふとよみ侍るは猶みな月の萩の下葉や秋ふかき籬の菊なとをこそ讀はへれ。いかてか千とせを契れる松の。もみちの色にあひてうつろひはへるへき。然者以言加山山水只紅葉といふ題をつくれる詩にも。ほのおのくひとりさめける松のたにの色となん偽て侍る。此歌の心にまつに紅葉のせさせて侍るこそ。いひ知らぬに聞はへれ。右歌朝霧のかゝるとよめらん。聞侍らす。又から紅のふりてゝそこしといへるわたり。いともみちを唐紅とよめりとも見えす。我身をよめるところを覺え侍れ。此事いと心えかたく侍り。かすにいみしき事に侍れと。みえん所をはしのはす書付よと侍は申になん。此二首は定め申にもたらぬ事にこそ侍るめれは。さるにて持なとこそは申侍らめ。

十二番

左

紅のやしほの岡のもみち葉は時雨ふり出て染る也けり

右

柞原ゆくへき道もなかりけり散紅葉はのふまくをしきに

左歌無響。纔存二一興一歟。右歌詞滯義迂風義共薄仍以

左爲勝。

一番

左

つゝめとも涙に袖のあらはれて戀すと人にしられぬる哉

右

顯 輔

參 河

左衛門督

つらからんことの葉もかな侘つゝは恨てたにも慰めにせん
左歌辭義花麗。心匠軍可掌。謂秀逸乎。右歌辭已有所
闕義又有所。仍以左爲勝乎。

二番

左

我こそはねをのみ鳴て逢瀬なき涙の河の身をつくしなれ

右

新中納言
道經

あやにくにつゝめは出る泪かな戀すと人に見せしと思ふに

三番

左

逢ことを身にかふはかり歎けともつれなき物は命也けり

右

右兵衛督
季通朝臣

身のうさの歎きに戀のまさるとは泪の色の深きにそしる

左歌辭花可ニ以翫。義實可ニ以憐ニ而已。右歌以ニ涙色之深

淺ニ可論ニ憂戀之勝劣ニ哉。心口尙以左爲勝乎。

四番

左

身につゝみいひたに出ぬ池水の流れもやらぬ戀をする哉

右

大藏卿
維順

おく山の谷の埋木人しれす戀に朽ぬる名こそ惜けれ

左歌詞涉ニ妖艶ニ富ニ風流ニ就中論ニ其氣味ニ尤足ニ詠之。右

歌初句雖學ニ英花之舛ニ卒章已舊歌也。其歌云。うらみ

わひほさぬ袖たにあるものを戀にくちなん名こそをし

けれ。以左爲勝。

五番

左

宰相中將

右

仲正

けふこそはしらせ初つれ戀しさを扱のみやはと思ふ余りに
今はさば如何いはまし戀しとは盡しはてつる言のはなれは
左右二首。言花口實以同科也。指南難定。仍爲持。

六番

左

伯

右

行宗朝臣

袖のうらに海人の栲繩繰かへて干とはすれと乾くまそなき
忍ひ妻おきゆく朝の霜のうへに跡ふみつくな人もこそしれ
左歌文舛雖不驚耳目一首尾以存戀心矣。右歌戀心
已髮空只言明利矣。詠物理空以可然哉。仍以左爲
勝。

七番

左

爲忠朝臣

右

忠季

住吉のちきの片そき我なれやあはぬ物ゆへ年のへぬらん
逢ことをなのみたちちゐて松浦川七瀬の淀のよとみかちなる
左歌一篇雖存風舛但ちきの二字頗近俗也。右歌に
も松浦河七瀬のよとよめるは。させる文侍歟。鈴鹿
川八十瀬とよめるなど。かやうなる事のはへるにやあ
らん。未見及之間以左爲勝。

八番

左

忠兼

あまたかよるはのたなは君によの亂れかちなる我心かな
右

爲眞

ひたふるに思ひたえてもあるへきにあなむつかしの心情や

左歌よるはのたなはといへるわたり詞甚いやしうてき
き所侍らす。雖然末句はいひなれたるやうに聞え侍り。

右歌已存俳諧之舛尤爲詛誕兩首程自由、仍爲持畢。

九番

左

國能

あふ事をいつともしらぬ我戀やときはの山の谷の埋木
逢事の跡たへてなき戀路には入よりまとふ物にそ有ける
左歌一篇有義理一首尾叶。右うた跡たえにたるといへ
るわたり。詞滯て聞所少し。仍以左爲勝。

十番

左

親隆

思ひやれこはいかなりし雫そと問はるゝ迄の袖の泪を
戀わひて落る涙の玉ならはちはこの數にぬきもしなまし
左歌縁陳旨意也。隔艶流。右歌雖存古風。頗有逸
興。但ちはこの數といふ事こそふるき詩にも歌にもみ
えはへらね。此歌おもへ侍る。物しりたる人のよみたる
にやあらんとこそみはへれ。定めてちはこ文の文に侍ら
ん。たゝ常は信太の葛の千枝は物かはなとよめるにや。

又錦木のちつかの數なといへることをのみそ口つめて
侍る。ちはこといふ事いまたきゝはへらす。若毛詩とい
ふ文の千箱といふ事をおもひてよまれたるにや侍らん。

それはくるまといふ事なり。されば交還にも千箱とは
つくりて侍る。箱と□とはもしかはりて侍れと。こゑを

右衛門督家歌合久安五年六月廿八日
於市御門亭二合之

題

秋月 九月盡

戀

十一番

左

琳 賢

打とけぬ人に契を結びけん身をそつらしといふへかりける

右

隆 縁

さくらあさのおふの繁みに思ふ事こへはた帯のいかで結はん

左右雨首。不_レ遑_二議定_一凡_レ不知_二和歌之趣_一者歟。

十二番

左

參 河

人しれす袖をそしほる數ならぬ身をしる雨の音はたてねと

右

人しれすねをのみなけは衣河袖のしからみせかぬ日そなき

左歌の身をしる雨に袖をしほるをきゝては。あやなく袖のうへに時雨の音はれかたく。右の袖のしからみせ

かぬひそなきといへるを聞ては。又あやなく右のそてのうらにあまもつりしつへく思ひ給へられて。これを

聞て情をかけ。彼にむかひて心を通はすほとに。老のころいとほれまさりて。いつれまされりと定めかた

くそ侍るや。むかし潯陽の江のほとりに。よる琵琶をききて。みとりの袖うるほしける人も。かくやありけんと

さへそおもひやられける。

歌人

左

右衛門督家成

權中納言忠雅

左京大夫顯輔

左馬頭隆季朝臣

少將家明朝臣

散位頼保

散位範綱前馬助

忠兼入道

散位頼政源藏入大夫

散位季時

女房土佐

判者

左京大夫顯輔

一番 秋月

左

秋はなをあまたの星のみえぬ迄いかでひとつの月照すらん

右

秋のよは天の川瀬やすみまさる流るゝ月のことにみゆるは

左歌月のあかけにはへれとも。あまたの星ひとつの月

〔右歌歟〕

前齋院兵衛顯仲伯女

攝津守重家

治部少輔能輔

散位顯方禮入大夫

散位隆長清輔本名

前阿波守頼佐

散位遠明

資基入道

僧隆縁伯耆公

藤原宣宗兼權前待賢門院藏人

女房丹波

右衛門督家成

前齋院兵衛

なところ。歌こと葉ともみえ侍らね。右はすみまさと
いへるほとと。さゝへたるやうなれとも。きゝつきて侍
り。

二番

いかなれは星みえぬまで照月に天の川せの澄まさる 覽

左

權中納言忠雅

我からや月に心のすみぬれは秋のよなれと程なかりけり

右

攝津守重家

秋のよの月は心に入にけり山のはとのみなにおもひけん

左歌は五文字こそはくみゆれともふること見えす。

右歌は山端は名のみなりといふ歌に。かはりはへらさ
めり。

月影の心にいるは石上ふるきことゝはしらぬなるへし

三番

左

左京大夫顯輔

秋毎にひるにかはらぬ月影はわかいつるをやよととしる 覽

右

治部少輔能輔

人はいさわかよはふけぬ秋の月かたふく物の影をなかめん

左歌はをのれなきてや秋をしるらんとといふ歌の心なれ

はにやおかしくはへめり。但心こと葉ともにとりたる

を古歌とは申なり。心をとりによめるはおかし。何にか

へたる命とかいほんとよめるは是なり。右うたはわか

よのいたくふけにける哉といふ古歌やはへるらん。

往侘て我よふけぬと歎けん昔のことはわかゝらめやは

四番

左

左馬頭隆季朝臣

久かたの天の夕きり晴にけりうつろふ月の四方にさやけき

右

散位顯方

天の川やそせの浪やあらふらん清くもすめる秋の月かな

左歌は月のさやけきによりて。霧晴にけりと思ふらんこ

そえみぬにやおほゆれ。右歌さやうのことみえ侍らす。

天の河八十瀬の波のあらふなる月の光やすみまさる 覽

五番

左

少將家明朝臣

晴わたるみとりの空の清ければ曇なく見ゆ秋のよの月

右

散位隆長

さゝ波や志賀の都はあれにしをまたすむ物は秋のよの月

左歌くもりなく見ゆと侍るほとこそ。俄にとまりたる

心ちすれ。右歌はあしからねとも。さゝ波や大津の宮

をきて見れば霞たなひき宮守もなしとそ萬葉集にはへ

る。さゝなみや志賀の都とはよめらんこといまたみ給

はすそ。難はへるましくは歌まさりてや。

さゝ波や大津の宮はみしかとも志賀の都はいつこ成 覽

六番

左

散位賴保

よくとてもねられさりけり秋の月光はひるの心ちのみして

右

前阿波守頼佐

常よりもうつれる月の影清み秋は水もや澄まさるらん

左歌はこしのもしをこそ置わつらひてはへめれ。右歌

は水のみまさるによりて月のきよくみゆるにては。

大かたはいかゝ侍らん。おほつかなき月の影哉。

宿すらん水のみ澄る月よりも晝とみゆるは照まさり 鳥

七番

左

散位範綱

涼しさにさやけき影やまさる覽すくれてみゆる秋のよの月

右

散位遠明

すみわたる月を見てしか白川の關までおなし影やしたると

左歌月の光なんすゝしく覺ゆるとそいはまほしき。す
すしきによりて月のさやけく見ゆるは冬の月にはしか
し。又すぐるとはあまたの物の中にひとつかことに見
ゆるをや申らん。ひとつつゝある物をは。たゝほむへき
にや。右歌はかみおろしの句はなたらかにはへるに。影
やしたると侍るこそ誠に秋の月をもてあそふに曉の雲
にあへらんこゝちすれ。又秋といふもしやはへらぬ。
すぐるてふ覺束なさに比ふれば秋ならさらん月はほいなし

八番

左

忠兼入道

千代ふへき宿のけしきにことよせて長閑に澄る秋のよの月

右

資基入道

宿わかすさのみもいかゝ照すらんみぬ人もなき秋の夜の月

左歌はさせる事はなけれとも祝によせられたれは。右
歌普き物は。日月の光とこそ申めれ。事あたらしくこそ
聞ゆれ。

九番

左

散位頼政

月影の思ふ思はぬあるよりも君を祝ふはいふ事はかりイもなし

右

僧隆縁

常よりもさやけき月にさそはれて床あくかるゝ秋はきに鬼

右

僧隆縁

秋のよの露も曇らぬ月をみて置所なき我こゝろ哉

左歌はいまた月をはみて初秋のこゝろをよまれたるに
や。右歌は心こと葉おかしくはへり。

十番

左

散位季時

宿からかことにも月のさやけきは何處も同じ秋のよなれは

右

藤原宣兼

さもこそは鏡の山のかひならめ光をそふる秋のよの月

左歌のことにもといふもしこそ。たいおちにもはへら
ね。右歌かゝみの山に光さしそへられたるより侍り。
曇りなき鏡の山の月なればひとしき影もあらしと思ふ

十一番

左

女房土佐

秋の夜は軒端にすかくさゝかにの糸の數さへ見ゆる月影

右

女房丹波

いかさまに靡くもみゆるさゝかにの影曇りなき秋のよの月

左

左右歌心こと葉かはらねとも。左歌はさゝかにの糸の
數さへみたれたれは今少しあかくや。

さゝかにを同じく照す月なれと糸のみゆるや澄勝る覽

一番

九月盡

秋のゆく道しりたらはけふはかり惜こゝろも惑はさらまし

右

重家

とゝまらぬ秋こそあらめいかてきはくたく心を思ひ返さん

左

左歌道しりたらはといへる程こそくちつゝに聞ゆる。

天徳四年内裏歌合に春のゆくとまりししるき物ならは
我もふなてゝをくれさらましといふ歌にこそはへれ。
右歌くたくる心とそいはまほしき。くたく心とはわか
心とくたくとや。心さしはや持なり。

くちつゝに世の故事をいふよりは心くたくや思ひ増覽
或本御歌
利をおしむ心の程を比ふれはまどふ心は同じ程なり

二番

左

左京大夫

何方とさためてまねけ花すゝき暮行秋のゆくゑたにみん

右

能 輔

大江山秋の幾のゝ夕露はかたみにをける物にそありける

左歌ゆくゑたにみむとおもふとも。心さしそあはれな

れとも行秋を尾花のまねくといふこと。一定しりかた

し。右歌は大江山はいく野の道とをけれはとよめるこ

そきゝよけれ。秋といふもののはままりていかにそや

聞ゆれとも。中比の上手のよみたることなれはさため

てよく侍らん。又かたみの露もをきたまりてそ候つら

んかし。

行さきの心の程をくらふれは形見の露や置まさるらん

三番

左

右衛門督

紅葉はのなもおりつへしけふよりは秋果ぬとは我にきかな

右

兵 衛

暮て行秋を男鹿の聲さへやけふ計とて盡しはつらん

左歌紅葉のなもおりつへしとよめる。心えかたし。冬に

なれはもみちのさたのあるましき。ふるくもから錦枝

に一村残れるは秋のかたみをたゝぬなりけりとこそよ
みたれ。あやしけなる物のなにしにのこれるそとはよ
まさめり。右歌こゝろ言葉おかし。

四番

左

家 明

とまり居て秋をも何かおしからし暮行道をそれとしりせは

右

隆 長

花すゝき招く方をそ詠やるくれ行秋の道とおもへは

左右。こゝろ詞おなし程にそ。

行方をしるとしらぬと比ふれは火と水とをは如何定めん

五番

左

頼 保

心にはあきもはてぬを長月の今宵計ときくかわりなき

右

頼 佐

霧たにもしはしとゝまれ小倉山秋立こめてやらすや思はん

左歌は長月のといへるもこそ。今すこしおもふへかり

けれともいひなれたり。右歌の秋たちこめてといへる

は。秋を立こめてといへるか。心あまりて詞たらすとは

是にや。又小倉山をしも霧のこめていつらんも物おそ

るしけにや侍る。

恐ろしや小倉の山を霧こめてつゝ暗なれはみ所もなし

六番

左

隆 季

涼しさば袂にしらる此暮のあさけの風に衣かへせん

右

顯 方

命あらは秋には又も逢へきに身にそふはかりをしき何なり

左歌は初秋のこゝちそする。秋たちて幾かもあらぬに
此ねぬる朝氣の風は袂すゝしもとよめる心也。くれの

秋とは見えず。又此暮のあさけはあすにやはへるらん。
しかやあらまほしき。衣かへも中間なり。右歌はさても
ありぬへし。はてのもしそなを物語をみるにのみたる
心ちすれとも。

かねことに衣更せん人よりも身にかふ計惜むまされり

七番

左

忠兼入道

暮てゆく秋をとゝめよもみちはの手向なうけそ逢坂の關

右

資基入道

けふはなを紅葉の影にくらしてん今年は又も見へき秋かは
左歌あふさかとしもよまれたるは。秋はいつこよりい
つくまでまかるにか。又われはいつこにゐてよまれけ
るそ。又秋をとゝめんとおもふ心ならば關といふもし
やそへるへき。右歌はおほつかなき事はへらさめり。

逢坂の關もみえねは行秋も誰かとめんにか通らるへき

八番

左

頼政

かくはかりおしまはしはしやすらはて情もしらぬ秋の暮哉

右

隆縁

宿毎にかく惜まるゝけふをしもあき果ぬとはなとかいふ覽
右歌心おかしくはへめり。

けにさりや惜物よに誰もみな秋果ぬてふ事そおかしき

九番

左

範綱

野へことに尾花をしなみ招けとも秋の夕霧たちもとまらて

右

遠明

入日さす影こそけふはをしまるれ秋もにしへや暮て行らん
左歌きりの立もとまらねは秋くれぬと思ふにや。初秋
にも霧はたちまたれぬに待めるは。右歌秋もくれてや
西へゆくらんと思へはとそいはまほしき。もしたらぬ
心地そすれとも。九月盡の心はへめり。

暮はつる秋の心はしらすしてなに霧をのみ惜むなる覽

十番

左

土佐

いかにせん風ふきみたる道芝の露もとまらぬ秋のおしさを

右

丹波

きえかへりおしめと人を思へはや露をかたみに秋のをく覽
右歌露をかたみにとゝめられたるは。形見とはあかな
からんおりこのくれとなり。冬の露はいかゝ。それ難に
侍るましくは秋のおしさをとよめるよりは。なたらか
にはへめり。

十一番

左

季時

野へ毎にをけは草葉の露なれと形見にをくは情勝れる

右

宣兼

惜めとも暮行秋の悲しきに木の葉をさへにさそふ風哉
我ならぬ人もかくやは惜らん今宵ばかりの秋のけしきを

左歌に木の葉さへと侍るこそ何ゆへにおしき秋なれは
もみちに心さしこそはへらね。三月盡の歌にも花たに

もちらてわかるゝ春ならはいとかくけふもおしまさら
ましとこそよみたれ。右歌は珍らしき事はなれとも。
目にたつところはなし。

諸人の情もしらすくれて行秋の景色はわりなかりけり
一番 戀

左 左京大夫

よしさらは我戀しなん思ひをは誰やまひにかなんとはしる

右 能 輔

深山木のくち葉か下の埋水かきなかさはや戀しとたにも
左歌はいと／＼おそろしくはへり。萬は身の爲なり。と
くといそきなひき給ひねと申さまほし。右歌は題に
忍ひたる戀ともはへらさめるに。なと戀しとはえかき
給はさる。こゝろにこそあらめ。

心には思ひやすらん戀し共かゝねは誰かそらに知へき
二番

左 右衛門督

あさりする海士の衣にあらね共しほたれぬるゝ袖のうら哉

右 兵 衛

人しれぬ思ひは色にいてぬより先うつろふは泪成けり
左歌しほたるといへるにもぬれ侍りなんかし。しほた
れぬるゝとよまれたるこそ。十八日の目といふやうに
聞ゆれ。右歌はなみたうつろふとはいかに申事にか。心
えかたし。但しほたれぬるといへるよりはなたらかに
や。
しほたるといふにて路もしりぬへしなと聞にくゝくり
とをする。

三番

左 中納言

思ひかね泪のふちに身をなけはちへ迄いりて君にみえまし
右 重 家

つれもなき人こそ今はつらからめ戀は心になはましかは
左右心こと葉おかし。右歌の人こそつらからめ。戀さへ
こゝろにかなはざらん。さることゝ聞ゆ。左歌泪の淵に
身をなけんも便あり。また九重のふちとそいふにちへ
まていりてみえんも。心さしの深き今すこしまさりて
や。但あらましことにそはへめれ。

誰も皆哀にいへと身をなけてみえましてふゝ戀は勝らん

四番

左 頼 保

いかならん言の葉にてか驕くへき戀しといふはかひなかり梟
右 頼 佐

篠すゝき忍ひかねてそいはれのゝ萩の下葉の亂有まし

左歌心こと葉いと／＼おかし。

とにかくに右は心になはねは左かちとや人はみる覽

五番

左 隆 季

風吹は浪よせかくる岩のうへのいつもの花のいつか逢見ん
右 顯 方

人しれす思ひいれとも梓弓ふすなければ夢にたにみす
左歌萬葉集におもひいてられわき／＼しけにはへめ
り。右歌ふることなればにやなたらかにへめり。あた
らしきよりいはゝ左こゝろあり。

つねにみるきの關守か弓よりもいつもの花は珍らしき哉

六番

左

家明

浪うてはいそにかたよるなひきもの驕くを人の心ともかな

右

隆長

さりともと逢事をこそ頼しか戀しなん日を今はまつかな

おなし程にやはへるらん。但右歌は今すこしせちにや。

おもひて待ちむ。

たれも皆戀しといへと死計思ふらんこそ哀とそみる

七番

左

頼政

逢ことはなききにかへる白波の猶よりくるやこりすまの浦

右

隆縁

見れはうしみねは恨めしとに角にあふさきるさの思ひ成鳧

左歌のなききにかへるといへるきゝつかす。又なをよ

りくるやといへるわたりいひつかす聞ゆ。右歌はみね

は戀しとそいはまほしき。みねはうらめし心えす。され

とも左よりは歌めきてや。

うしと思ひ恨めしと社しらるれは泪の川の汀まされり

八番

左

範綱

我袖はすきの入江の磯なれやなつさふ波のかけぬまそなき

右

遠明

つれなきや思ひなをると待はかり戀ゆへおしき我命哉

左歌戀のこゝろすくなし又なつさふ波も心えす。右歌

まつはかりこひゆへをしき我命かなといへる末句かき

あはす。同し程の歌にや侍るらん。

判歌關

九番

左

忠兼入道

忘艸しけるしの屋の白露のかはかぬ袖をとふ人そなき

右

資基入道

逢事のなと片きしにおひにけるいつをまつともなきみ成覽

左歌これもこひの心うすくなけれとも。心えぬこと葉

見えず。右歌はきしとまつとことのほかに物へたゝり

て。かたしきにはなにのおひたりけるそとあきれて。

かたきしにおふとは人のいふめれとはるかにのきてた

てる松哉

十番

左

季時

心から心よりする戀なれは我みそつらき人のとかゝは

右

宣兼

誰ために逢ことなれは命にもかへつはかりは歎く成らん

左右ともに心なきにしもあらず。おなし程なり。

皆人のいふことのはのおかしきにいつかたへともえこ

そなひかね。

十一番

左

土佐

にこり江の下かくをし心地してすむよしらぬ戀もする哉

右

丹波

黒かみに泪の玉のぬきかくるかすはかりなき戀もするかな

左歌にこり江の下かくをしこゝちしてすむとよめる

太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合

永曆元年七月日

題

鶯二 梅四 櫻二 時鳥二 織女五
月四 紅葉二 雪二 戀六 述懷六

歌人

左

右

太宮大進清輔朝臣 僧俊惠
前紀伊守雅重 僧顯昭
式部丞藤原憲盛 入道空仁
刑部少輔家基 前馬助敦賴
女房大輔 侍從輔光
前越後權守資隆 豐後守賴輔
前少將公重朝臣 僧祐盛
判者
左近少將通能朝臣

一番 鶯

左持

清輔朝臣

右

俊惠

鶯のなく木のもとに降雪は羽風に花のちるかと思見る
鶯のなきて木つとふ梅かえにこほるゝ露や涙なるらん
左右ともになたらか也。但左歌は鳴て木つたふといふ
句そいかゝあるへからん。それも露こほさんれうに大

こゝろえす。をしの下かく水の心ちしてすむとそよむ
へき。右歌は涙の玉のぬきかくるといへるいかにそや
おほゆる。たれかすることならは。ぬけかゝるとやいふ
へき。人のすることならは。ぬきかくるとそいはまほし
き。いづれも／＼心えぬことおなしほとにや。右はゝか
りなしとそ見えはへる。
をしとりのかたらんよりはこひしさのはかりしなきや
まさる成らん

切なれは持とにやあらん。

二番

左

雅重

鶯は春を知ても鳴ぬなる我身は春をしらてこそなけ

右持

顯昭

柿人はをのゝ音しはしとゝめなん谷のうくひす初音鳴也

左歌もなたらかなり。右歌は詞はとゝこほるやうなれ

とも。心あしくも聞えず。勝とやいふへからん。

三番

左持

清輔朝臣

あしかきのおくゆかしくもみゆる哉誰すむ宿の梅の立枝に

右

顯昭

光ある春の日くらし袖たれて垣根の梅の花みる我は

左はいひなれたるやうなり。右は末句さゝへたる様な

れとも持歟。

四番

左持

憲盛

春の夜はいこそねられね聞近き梅の匂ひにおとろかれつゝ

右

顯昭

小夜ふかみ旅寐の床に香らすは梅さく宿といかてしらまし

左ことにゆうなり。右古歌合歌なり。

五番

左持

家基

匂ふかはいつれの梅も變らねと色なる花そわきて身にしむ

右

空仁

梅のはな香をは袂にしむれとも色をはえ社移さゝりけれ

六番

左持

雅重

梅の花折てかさせは二月の雪は衣におつるなりけり

右

敦頼

時ならぬ卯の花ともや思はまし垣ねの梅の薫はさりせは

左心なきにもあらず。

七番

左持

清輔朝臣

唐國のとらふす野へに匂ふとも花の下にはねてそ歸らん

右

顯昭

わきもこかはこれの山の糸櫻結び置たる花かとそ見る

彼是あしくもそ□すこしは猶めつる心深ければ。左

やすくならん。

八番

左持

女房大輔

浮世をは又何にかはなくさめん花に先たつ命ともかな

右

師光

櫻花春の山かせみねこせは雪ふり積る谷の細道

共になたらかなり。それにとりて右はまさりたりとも

いひつへけれとも所もふりたり。左もめつらしうしも

なし。よき持にこそ。

九番

左持

清輔朝臣

時鳥心のまゝに尋ぬとて鳥の音もせぬ山に來に鳥

右

敦頼

しほりして又たつねこん郭公此山にてそ一聲もきけ

左尋心はふかけれと。上に時鳥といひて末に鳥といふ。

病にやあらん。但證歌有らん。されともよからさらんこ

とはまねふまし。右させることなし。證歌云賀陽院歌

合。通俊卿云。おしなへて山の白雪つもれとしるきは

こしの高根なりけり。こしの高ね山なり。叶ニ此證ニ難レ然

不レ感。無レ難。又驚郭公と詠。又鳥と證歌兩以在歟。

十番

左尋

宵のまど人をは待し時鳥明るまでこそねられきりけれ

右

花はすきもみちはまたき夏山にをりえても鳴時鳥かな

左歌ゆかしくもとめたりける物かな。

十一番

左尋

七夕はたえぬ契りをうれしとも今宵はかりや思ひ知らん

右

天の川わたるこよひや七夕は中々袖をぬらさゝるらん

左

秋風の吹と聞より七夕は心のうちやすゝしかるらん

右

七夕のまぢつる程の久しさにはかなく明る空をかへはや

十三番

左尋

彦星の暮をまつまはあちきなく雲のよそなる心地こそすれ

大輔

右

さもこそは身はならはしといひなから七夕いかで堪てすく覽

歌からは左勝れとも心もえす。右はすゑけういてい也。

十四番

左

七夕のわかるゝ今朝の袂にや秋の白露置はしむらん

右

秋へてもはてなき中を見る折は七夕つめそ美れぬる

十五番

左尋

おもひやる今朝の別は天のかは渡らぬ人の袖も濡けり

右

七夕のあすの別をなけくまにあふ夜も袖やかはかさるらむ

左右ともにさもおほえたる。

十六番

左尋

今よりは更行までに月はみし其ことゝなく泪落けり

右

待人の來ぬも思へはつらからす寝なは今宵の月をみましや

共になさけあり。何れとわきかたし。

十七番

左

終夜をは捨山の月をみてむかしにかよふ我こゝろ哉

右尋

山のはに雲のよこさる夜のまは出ても月を猶待れける

敦頼

清輔朝臣

空仁

清輔朝臣

清輔

敦頼

顯昭

俊惠

顯昭

左

資 隆

久かたの月のかつらの色のみそ秋をふれとも替らさりけり

右勝

俊 惠

おのか爲あくるにもあらぬ天の戸に急きな入そ秋のよの月

左離はなけれども劣りてや。右はよ明ぬさきにいろを

りやあらん。されとも月の心なとはさやうにもあらむ。

歌からのまさりてみゆれは。

十九番

左勝

大 輔

うちはらふ枕の塵もかくれなく荒たる宿をてらす月影

右

頼 輔

秋の夜の月みる袖にをく露やひるにかはれるしるし成らん

ともにあかくほいありて覺ゆれとも。今すこし詞なれ

たれは左勝とす。持ともいひつへし。

廿番

左持

雅 重

秋されは曉露にいか袖まきゝの山に匂ふもみち葉

右

空 仁

した染はおなしみとりに見し程も紅葉の色の薄くこき哉

左は歌のたけはあれとも。右は又なたらか也。仍爲持。

廿一番

左勝

清 輔

小倉山きゝの紅葉のくれなるは峯のあらしのおろす也鳥

右

俊 惠

深く浅きもみち豊葉なかる飛鳥川ふち瀬は色に顯れに鳥

共にあしくもなし。右は五文字こはし。左は難なし。

廿二番 雪

左勝

資 隆

霜かれて離のなかに雪降は菊より後の花も有けり

右

空 仁

花咲は雪かとみせて雪ふれは花かと思するみよしのゝ山

共にゆうなり。されとも右は負といひつへし。

廿三番

左勝

公重朝臣

雪深み賤のふせやも埋れて煙計そしるし成ける

右

空 仁

花のはる紅葉のあきもしるかりし松の梢もみえぬ白雪

左歌はしるしの煙心すこく聞ゆ。右は下葉まではふり

かくさん雪もかたし。けにともきこえす。

廿四番 戀

左勝

清輔朝臣

戀しさの慰さむことやなからましつらき心を思ひよせすは

右

俊 惠

君こそすはうちへもいらし拂ひつる聞の思はん事も恥かし

ともに優なれとも。うちのしたまでもおもほえねは。右

負ともいひてん。

廿五番

左

家 基

戀しなん後は煙とのほりなは柵引雲をそれとたにみよ

右勝

師 光

我身たに思ひにたかふ物なれはことはりなれへ人のつらさは

右けにとおほえたり。なさけあり。

廿六番

左

俊 惠

戀しなん命を誰にゆつり置てつれなき人のはてを見せまし

右

顯 昭

つれもなき人に思ひも捨てられてうき身のみ社なけまほしけれ

左あしくもなけれとも。ふるめきたり。右すつとなくと
病にてあるへからん。されともおもひすつといひつれ
は心たかひぬ。いかさまにも勝なり。

廿七番

左

雅 重

我戀はすさの入江のこもりえの思ひこめても年をふる哉

右

敦 頼

わか戀は音なし川の浪なれや思ひかくれと聞人もなし

右こゝろ詞かなひて。姿あしくもなし。

廿八番

左

俊 惠

わきもこをかたまつ宵の秋風は萩の上葉をよきて吹なん

右

敦 頼

朝夕におつる涙や戀草のしけみにすかる露と成らん

右歌のふるまひあしくもなし。つきくし。

廿九番

左

俊 惠

君やあらぬ我身やあらぬ覺束な頼めしことの皆替りぬる

右

頼 輔

戀しなん命を惜きつれもなき人にしも身をかへんねたさに
左ふりてやあらんとおほゆれとも。なさけなきにしも

あらず。右こゝろはあしくもなけれとも。詞たらず。
三十番 左持 清 輔

年をへて梅も櫻も咲ものを我身の春に待そかねぬる

右

俊 惠

數ならて年經ぬる身は今更に世をうしとたに思はさり鬼
共にさせる難もあらず。又すくれたるふしもなし。

三十一番 述懷

左

雅 重

紫に色もかはらずあけ衣我黒かみの白くなるまで

右

空 仁

よをも厭ふよにも我身の厭はれて離れ難きそ惟しかりける
左もあしくもなし。右さもけに惟しかるへし。

三十二番

左

敦 頼

いつとても身のうき事はかはらねと昔は老を歎きやはせし

右

空 仁

かくはかりうき世の中も捨果んと思ひになれは悲しかり鬼
ともにさもとおほゆ。されと右は今すこし勝らんかし。

三十三番

左持

公重朝臣

人數にあらす鳴海のうらに又老のなみさへよるそ悲しき

右

帥 光

うきながら猶惜まるゝ命哉後の世とても頼な

ともに心えぬへくもなし。
三十四番

左

家基

世のうさに秋の心のふかけれは落る泪も紅葉しにけり

右勝

祐盛

思ひ出も又待こともなけれともさすかに世社捨もやられね
共にあしくもなけれとも。右勝りたり。

三十五番

左持

雅重

われか身はさそふ水待浮草のあとたえぬとも誰か尋ん

右

清輔朝臣

うきながら今はとなれは惜き身を心のまゝにいとひつる哉
ともに神妙なり。

右清輔朝臣家歌合以百花菴宗固本書寫得一本按矣

群書類從卷第百八十五

和歌部四十歌合六

中宮亮重家朝臣家歌合 永萬二年

題

花

郭公

月

雪

戀

作者

左方

權中納言實國

左大辨雅賴

前少將公重

前少納言資隆

前石見介親部成仲

右方

小侍從太皇太后宮女房待曾 三河二條院內侍

右京大夫殿下女房

前豐後守賴輔

僧顯昭

賀茂政平 片岡嗣宣

判者

前左京大夫顯廣朝臣

別當隆季

中宮亮重家

左少將通能

中宮大進賴保

阿闍梨心覺

兵庫頭賴政

侍從有房

寂念爲業入道

僧俊惠

宰相中將宗家

若狹守經盛

前中務少輔季經

西遊範綱入道

辨殿下女房

右京權大夫師光

右馬權頭隆信

生西爲業入道

一番

左持

をちかたの風に亂るゝ糸櫻わかてにかけてみるよしもかな

右持

命あらは春には父もあふへきを花にをくれて一日やはへん

左歌をちかたの糸さくら。まことにおもひよりかたく

めつらしくみゆ。右歌春には父もなといへるわたり。お

かしくもきこゆるを末の句やあまりならん。さすかに

さき／＼のとしも。花にはをくれてのみこそは。彼貫之

か我身にしあれはおしき春かなといひ。長能かいけら

は後のなとよめるは。めてたく侍るものを。この一日や

はへんはいかにそや。たらずもきこえ侍る。但歌のさま

とり／＼也。仍爲持。

二番

左持

打よするいそへの波のしらゆふは花ちる里のとをめ也けり

右持

ちりちらす覺束なきに花さかり木のもとを社住家にはせめ

左風鉢は幽玄調。義非凡俗。但し花をしらなみしらゆ

權中納言實國

小侍從

別當隆季

三河

ふなとよむはつねのことなれと。波によせつる時は海河をひきゆふとかけつれば森やしろともいへるや。よしありてきこゆらん。花ちるさとのとをめならは。いそへのなみのしらゆふならずともや侍るへからん。右ふることとをも。とかくひきよせられたるうちに。かのいせのみやす所の歌は。山ちにて故郷のといふかしかりけになにちりちらすきかまほしきをとひへるこそ。ことにおかしきを。この歌にはちりちらすおほつかなからんことは。花を思ふ心はふかゝらんやときこゆらん。末にすみかにはせめといひはてられたるほど餘情たらずやあらん。猶なみのしらゆふは歌のさまたけまさりてや。

三番

左

春はたゝ花咲よもの山ことに心をさへもちらしつる哉

右勝

辨

又さかん春に心のかゝらすはちりゆく花に身をやかへまし左歌のさまはおかしく侍るを。花により四方の山に心をちらすこと。ちかき世の歌人よみ給ひし心地する。右歌は末句いかにそや。ことたらぬところある心地すれと。春に心のかゝらすはなといへる心すかた右はまさるべくや。

四番

左持

左大辨雅頼

春風にうこかぬ雲とみえつるはまたちらぬまの櫻なりけり

右

右京大夫

櫻花さかりになれば吉野山ふもとの里に旅ねをそする左歌花のけしきしつかに。心つかひ歌合の歌とみえ侍るか。うこかぬ雲といへることはや優にしもきこえさらん。雲とみえ侍ることも山なとやあらまほしからん。右歌はことなるとかなけれど。かやうの心つねのことに侍るめれば持とみえたり。

五番

左持

中宮亮重家

をはつせの花のさかりをみわたせは霞にまかふ嶺のしら雲

右

兵庫頭頼政

あふみちやまのゝ濱邊に胸とめてひらの高根の花をみる哉此左右の歌。已如_下看_二陵雲臺_一在_中望海樓_上。いづれもまことにみところ侍るかな。それにとりて左歌は後撰集にも入れらるゝにや。すかはらやふしみの暮にみわたせは霞にまかふをはつせの山といへる歌を。花のうたにひきなされたるなるへし。かやうのことはいみしうはからひかたきことになん。ふるき名歌もよくとりなしつるはおかしきことゝなんふるき人申侍りし。白氏文集古萬葉集などは。いさゝかとりすくせるにとかなきにやあらん。まことによくなりにけるものは。かれをまなへるとみゆるに。なさけそふわかなれはなるへし。たゝしふるき歌名歌をはとるへきこと。いむなりなんとはおもふたまへるに。かのふしみのくれにといへる歌を。ことに心にそめならひにければにや。この霞にまかふ嶺のしら雲と侍るも。いみしくおかしくおほえ侍るなり。右歌のまのゝわたりの眺望もいとおかしく思ひや

られて。ひらの高根をたちまきると申さは峯のしら雲
すてかたく。をはつせ山に心をよせんとすれば。ふるき
とかきためかたし。よりて持と申へきにや。

六番

左持

若狭守經盛

さくら咲峯をあらしやわたるらん麓のさとにつもるしら雪

右

右京大夫師光

櫻花としの一とせ匂ふともきてもあかてやこのよつきなん
左峯のあらしをわたし麓に花をちらすさまなる心は。
つねにみゆる心地すれと。此ふもとの里につもるしら
雪は。すかたもいとおかしくこそ。右歌ことにめつらし
くはあらねと。としの一とせ匂ふともなと。いひしれる
さまにて。花を思へる心もふかく侍るめり。かみしもの
句のはしめの文字おなしきことそ。ふるき歌合にとか
とせるやうにおほえ侍る。たゞしかれこれをなすらふ
るに。これも持とみえたり。

七番

左持

前少將公重

よしの山花のさかりに成ぬれば梢におつる瀧のしら糸

右

前豊後守頼輔

春の日のけしきに花のにさりせは長閑に匂ふ色はみてまし
左歌梢におつるといへるすかたおかしくもみゆ。たゞ
しちかくも雲井にみゆる瀧のしら糸なんいへるは。お
かしくこそ侍るを。これは梢におつるといへれば。梢よ
りうへには瀧やはあらんとそおほゆる。右歌はふかや
ふか春はさばかりのとけきを花の心やなにいそくらん

といへる心思ひ出られていとおかしく思ふたまふる
か。末の句の色はみてましといへるほと。またすこした
らぬ心地すれば。これもまた持とす。

八番

左

左少將通能

年をへて惜むにとまる花ならはいくへか今は咲かさねまし

右勝

侍従有房

ねにかへる時をみんこそ悲しけれ花にさきたつ命ともかな
左風情すきたる心地やすらん。右もあまりなるとは思
ひ給ふれと。ねにかへるといひて。花にさきたつなとい
へる心おかしくもみゆれば右勝と申へし。

九番

左持

前中務少輔季經

春風やかへりてわれを恨むらんのこさす花を折つくしつる

右

右馬權頭隆信

年をへてつくす心をあはれとや匂ひをそへて花もさくらむ
左歌春のかせのうらむまで。さしも花を折つくしけん
こと。いかなりけることにか。右歌としへて心をつくす
によりて。花の匂ひそへんこと。花の芳心殊のほかにや
あらん。さほと思ひにかなふ花ならば。たゞつねのほ
ひなからも。ちらてそ今しはしもなとやおほゆる。され
とおりつくしてん花よりは。匂ひそへたらんはまさる
へけれと。年をへて匂ひをそへてといへる。ての字おな
しことにやとみゆれば。なを持なとにそ。

十番

左持

前少納言資隆

しら雲のやへかきなりてみえつるはならの都の櫻なりけり
右 僧顯昭

をちここに匂ふ櫻や春ことに人の心にかゝるしら雲
此左右のしら雲。いづれもきよけにみゆるにとりて。左
はやへさくらよしのなは。雲のやへとみえんことい
か。また雲のやへかきならんことは。山なとにもかけ
とをきほとなとや。よろしくきこゆらん。されとやへさ
くらといふかたつかたの心につきては。たくみおかし
くきこゆるに。またなりの字そふたところ待るめる。右
は姿なと今すこしゆうにはみゆるを。ちかくもかやう
なることみ給へし心地そすれとたしかならず。歌さま
はともにおかしければ。また持たるへし。

十一番

左

中宮大進頼保

急きてや花のあたりをすきなましちる迄あらは物を社思へ

右勝

寂念

世をすつる心ならすは櫻花あかてやけふの日をくらさまし
左歌花のちらぬさきにすきなんといへる。これも花を
おもふゆへのこと葉とみゆれと。つねのならひ。はるか
なるやまちと。うとき人の宿をも。花あれはたつねいる
こそつねのことなるを。胸をもよほし鞭をあけてすき
なんこと。あまりにかしこくやあらん。右歌おなく花
のもとにはとまらぬ歌なれと恩を弄無爲に入心あらず
はといへる。さる事ときこえたり。心ならすはさくら花
なといへる。すかたもいひしりてきこゆれば。以て右爲
勝。

十二番

左持

西遊

さゝ波やなからの山の峯つゝきみせはや人に花のすかたを
右 生 西

風ふけはみふねの山の櫻花しら波かくるこゝちこそすれ
左こと葉つゝきいひしりて。やすらかにきこゆ。右みふ
ねの山しら波かゝるなといへるたくみにはみゆるを。し
らなみかくるほとそ。いかにそやきこゆれと歌のさま
持とみえたり。

十三番

左持

前石見介祝部成仲

あかなくに花のあたりに旅ねして月たにあれや散迄もみん

右

片岡彌宜加茂政平

身にかへて花を散さぬ世也せは惜まぬ人やあやなみるへき
左歌のすかた詞つかひおかしきこゆるを。月なくて
くらき夜の花をしもなとかとそおほゆる。右は心あり
てみゆるを。いつこにかと。こと葉たらぬ所ある心やす
らん。左ははるの夜のやみをあやなくきこゆれと。歌す
かたおかし。右はいかにそやいひおほせられぬ所あれ
と。花を思へる心ふかし。又持と申すへし。

十四番

左

阿闍梨心覺

よしの山花のさかりをみわたせはたゝ春の日にきえぬ白雪
右勝 僧俊惠

みよしのゝ花咲ぬらしよそにさそ峯にはかけしやへの白雲
左の歌常のことなから。さしてそのふることゝはおほ

えぬにや。歌合の歌とみえたり。しもの句のたゝの字そ
いますこし思ふへしやときこゆる。右の歌すかた詞い
さおかしくみゆる。但みよしのゝ花咲ぬらしといへる
ほとそ山あらまほしくやときこゆ。またかみしもの句
のはしめに。みよしのゝ峯にはとをけるやいかゞ。され
とかやうのとかは毛をふく疵なるへし。猶嶺にはかけ
し八重のしら雲といへるすかたいとおかしくみゆ。仍
以右爲勝畢。

一番 郭公

左勝

權中納言實國

なこりなく過ぬなるかな子規こそかたらひし宿としらすや

右

小侍從

たつねつる心のほとやみえぬらんかへれはをくる郭公哉
左歌きゝなれたる心地こそすれと末の句いとおかし。右
の歌もかへれはをくるなといへるすかたはいとおかし
くみゆるを。時鳥にをくられんほとや。きゝすてゝとく
かへりけるにやとおほゆらん。猶左のこそ。かたらひし
宿としらすやといへるすかたいとおかし。左可爲勝。

二番

左勝

別當隆季

いかなれはなかな名をよはふ時鳥いねかてにのみよたゝ鳴覽
右

三 河

年をへてきゝふるせとも時鳥なくたひことにめつらしき哉

此左右の歌。左はむかしの詞にして心めつらしく。右は
ちかきすかたなから。ことふりてきこゆれば以左爲
勝。

三番

左勝

宰相中將宗家

夕つく夜いるさの山の木かくれにほのかにもなく時鳥かな

右

辨

時鳥なく一聲のあかなくにすくる雲路の關とならはや
左歌すかた詞いとおかしくこそみえ侍れ。右歌過る雲
路のなといへるすかたおかしくみゆるに。せきとなら
はやといへるほと。すこし俄なる心地とする。またあり
かたきことゝもおほゆれば。左のいるさの山木かくれ
は。猶おかしくおもふたまへられて左を勝と申へし。

四番

左持

右大辨雅頼

時鳥なかくて明行夏の夜はまたれぬ聲をたてつへき哉

右

右京大夫

ましかねてまゝとるむほとに郭公夢のもりにて今そなくなる
左めつらしきさまにはみゆるを。またれぬ聲とはいか
なる聲にかあらん。もし秦女野客のたくひならは。明か
たの聲もおかしくやあらん。さらすは輕々にもや。右ま
とるむほとに夢のもりにてなんといへるおかしくはき
こゆるを。この夢のもりこそきゝなれてもおもふたま
へられね。若證歌あらは勝侍りなん。當時はおほつか
なけれは愚見の判者暫持と可申。

五番

左勝

重家

さみたれにしほれつゝなく時鳥ぬれ色にこそ聲はきこゆれ
右
頼政

時鳥きゝてもいとゝくるしきはあかて猶まつ心なりけり

左歌しほれつゝなくといへるほど。おかしくきこゆるを。聲はいかにぬれ色なるらんとそおほゆれと。ものゝ色をほむる時ぬれ色なりなといふなるへし。又こは色

なといふこともあれば。なとかさもなからん。右歌は心ありてみゆるを。高陽院の歌合にや。きゝてしも猶そま

たるゝほとゝきすなく一聲のあかぬ心はといへる歌思ひ出られて。きゝなれたる心地すれは左の勝にやとそ。

六番

左持

經盛

郭公なくねは年にかはらねといやめつらしき心地こそすれ

右

師光

足引の山より出るほとゝきすはつ音ふるさて我宿になけ

此左右の時鳥。左のなくねはとしにといへるすかた。右のはつねふるさてなとよめる心。いつれもいひなれて

きこゆれは持と可申。

七番

左

公重

心あらは我にちかはて時鳥たつぬるかたの山路にをなけ

右勝

頼輔

時鳥まつはをろかに思ひけりたつぬるおりを聲もおしまぬ

左おかしきさまにはみゆるを。われにちかはてといへるほど。かならずちかふへきことにやはときこゆ。末の句も心たらぬ心地やすらん。右末の聲もおしまぬやあまりならんとおほゆれと。まつはをろかに思ひけりな

といへるわたり。よろしくきこゆるうへに。左はなけと

八番

左勝

通能

子規かたらふ聲はとまらねとすきぬる空のなつかしき哉

右

有房

まちてたになくさむへきを時鳥鳴出る夏そ夜さへみしかき

左歌すきぬる空のなといへるわたりおかしくみゆ。あとなき空をなかめつるかなといへる歌にそかよひてき

こゆれと。さてはあらすやあらん。右歌はなき出る夏はといへるほど。ことのほかにたえすきこゆれは左の勝なるへし。

九番

左勝

季經

時鳥さこそまたなき聲ならめたゝ一たひもなのなるかな

右

隆信

時鳥雲路にきゆる一聲はゆきかたをたにえやはなかむる

左歌すかた詞めつらしくはきこゆるを。さこそまたなきとはいかによまれたるにか。もし無二亦無三なるにやあらん。時鳥はけにさもある事なり。聲ならめなのる

かなそおなし事にやきこゆる。右末の句はよろしくみゆるを雲路にきゆるといへるほど。いかにそやきこゆ。おなし一聲なれときゝまよはしてんよりは。たしかに

なのるらんはまさるとなん。

十番

左勝

資隆

かをとめて山時鳥きなすは花橋のなをやおらまし

右

顯昭

郭公まちなね山の一聲はきくに付けてもうらめしき哉

左歌かをとめてといへるより。花橋の名をやおらましなと。いとおかしきこゆ。もし花橋の心やすみたらん。

右歌まちなね山の一聲きくに付けてもうらめしなといへる女の歌とおぼえて優にはきこゆるを。またきなれたる心地もすれは。猶花橋をまさると申へきや。

十一番

左持

頼保

たれにこはしのひの岡の時鳥なをうちとけて夜半に鳴らん

右

寂念

石上ふりぬる身にも時鳥あかぬ心はかはらさりけり

左たれにこはとをきて。よはになくらんなどいへるこゝ葉つかひおかしきみゆ。右は素性かふるき都の時鳥といへる述懐の歌にやとそみえたれと。作者にあひかなはゝさてもありなん。持とすへし。

十二番

左持

西遊

子規しのたの森のしのひねはきち竹われそまつはきける

右

生西

とゝまらんところをしへよ時鳥尋ねゆきつゝ又もきくへく

左歌信太森のしのひねはなと。うためきてきこゆるに。きち行我そとなのれるほとやなたらかにしもきこえざらん。右のうたはたつねゆきつゝ又もきくへくもなと。あまりたしかなるやうにそきこゆれと。はしめよりた

たことはいひくたして理つよくみゆ。左はきこはけれと萬葉集などにもいへることなれは。信太森も打すきかたくて。これもまた持と申す。

十三番

左持

成仲

常よりもめつらしきかな時鳥いまきの山のけふの初聲

右

政平

うの花の垣ねにきなく子規さなから宿にいかてうつさん
左いまきのやまのはつ聲は。まことにめつらしくはきこゆるを。この山こそつねにきなれてもおほえ侍らね。萬葉集にいまきの岡とはよめる心ちすれは。山もありもやすらん。證歌やいるへからん。右卯花のかきねになくらん時鳥は。けにうつさまほしくもやとはおもふたまへるを。これはいかにそや。かの鹿のねなからといへるには。さすかにあらぬ心地やすらん。但歌さま持と申へき。

十四番

左持

心覺

子規しはしわれともかたらはて誰忍ひねをなきてすくらん

右

俊惠

今こそはいてちかふなれ時鳥しはしすそ野にまつへかり鳧
左歌我ともといへるほと。いと庶幾せられねと歌さまなたらかにみゆ。右はすかた詞おかしくはみゆるを。山なくてすそ野はかりやいかゝ。又いてちかふなれといへるほと。みやこのいちなとやと人しけきこゝちやすらん。左はさせる事なし。右はすかたさまおかし。仍

爲レ持。

一番 月

左持

なにゝかく更行月をおしむらんまつに心はつきにしものを

右

權中納言 小侍從

心すむ折からなれや月影の秋しもなにかひかりそふへき

左歌こゝろありておかしくは侍るか。いさよひるま

のほと。心をつくしはてゝ。くまなくすめらん空をは。

すくなくてみん事あいなくやあらん。右歌心すむおり

からなれやといへるは。すかたも心もおかしきこゆ

るを。秋しもなにかとよまれたる。すこしことのちにた

かふらん。四序五行隨節運轉。秋は少陰之位也。月又陰

之精也。かゝれは月の影もひかりをそへ。人の心もあは

れをますへきおりにて侍る也。されは秋しもひかりの

ますことは。ことはりなりとそあらまほしき。されとい

つれも歌のさまおかし。仍爲レ持。

二番

左持

別當

あかなくの心つからに契り置て千世てふ秋の月をみてしか

右

三河

天のはらくもらぬ月をなかむれは心もはるゝ物にそ有ける

左は多秋の月をちきらんなと心なくすへたり。右はす

かたはおかしくみゆるを。心もはるゝといはんために。

くもらぬ月をとをかれたる。はるゝくもらぬおなしこ

となれは。わけしるへきにもあらずやあらん。されと歌

のさまなたらかにみゆれは。これも持とす。

三番

左持

宰相中將

なかむれは雲井はるかにすみのほる心や月のかけにそふ覽

右

辨

まつ人のこぬも思へはいかゝせん月をみすてゝ人もせましに

左は心すかたおかしくみゆるを。月影に心をそへたる

事。近き歌合ともに見給へしにや。めなれたる心地をす

る。右は人をまつ心はおほくして。月をみることはすく

四番

左持

左大辨

くまもなきみ空に秋の月すめは庭には冬の氷をそしく

右

右京大夫

名にたかき嫉捨山の月影も秋はことにそてりまさりける

左歌銀漢雲盡秋月澄々。沙庭霜凝冬水凛々。見其文牋。

已以詩篇。心匠(有イ)之至尤可(レ)翫(レ)之。右歌嫉捨山の月も

秋なりといへる。猶詠(レ)月歌已當(レ)正理。ことにめつらし

きところなけれと歌合の歌とみえたり。仍爲レ持畢。

五番

左持

重家

いかてわれしはし此世になからへて月みる秋の數を重ねん

右

頼政

月影にうつもれぬとや思ふらん雪にならへるこしの里人

左歌不(レ)饒(ニ)文(ニ)花。偏全(ニ)義(ニ)實。ことにさる事ときこゆ。右

うつもれぬとやおもふらんなどいへるすかたいひなれ

て。心もおかしく侍るか。こしの里人やすこし荒涼なら

ん。越の國とこそ申めれ。その國にもきためて里はあらめと。をしこめてこしのさと、いはん事はいかゝ。されとこれはあまりのことにあらん。左は詞をかきらすして。月を思へる心ふかし。右おほつかなきところもあれとすかたおかしければ。これも持とす。

六番

左勝

經盛

我心あくかれにけり清見かた波路はるかにてる月をみて

右

師光

秋のよは月の舟にやのりぬらんあかしのうらへゆく心かな

左右おなしほとにみゆるにとりて。左は波ちはるかにてる月をみてといへるすかたいときよけにみゆ。右はこれも歌さまはいとおかしきこゆるを。月の舟にやのりぬらんならは。あまのかはらなとやいますこしいはれたらん。あかしの浦まではたゝよのつねの舟にても。いとやすくかよふへきにやとおほゆれば左のかちと申へし。

七番

左

公重

くもるとてこよひねたくは月影の更行空のかけをみましや

右勝

賴輔

終夜さえたる月の影みれは水なき庭も氷しにけり

左歌のかけをみましやと。優にしもあらずやきこゆらん。右歌はことにめつらしきところなけれとも。いひしりてきこゆ。右のかちとみえたり。

八番

左持

通能

秋毎にこよひはかりの影をみはめつらしけなき光ならまし

右

有房

月により山のはをのみかこつ哉まつもおしむもおなし心に左こよひの月を賞する心はおかしくも侍るか。首句に影をみはといひて。卒章にひかりならましといへる。影と光といへる。おなしことを二ところにをかれたるやうにあらん。右は山のはをのみかこつかなといへる詞つかひおかしきさまにきこゆるを。末のおなし心にといへるほと。たらぬ心地すれば持と申へし。

九番

左持

季經

うき雲のたちやは出る照月のあたりを拂ふよはのけしきに

右

隆信

雲はらふ風にあはれをさきたてゝ空行月の影のさやけさ左の月のあたり拂ふ事。ちかく空頭俊頼の。吹風にあたりの雲をほらはせてひとりもあゆむ夜半の月哉といへる心にやあらん。右は風に哀をさきたてゝといへる。末はましてあはれもいかにとをしはからるゝを。たゝ影のさやけさとはてたるや思はすなる心地すらん。右は末よはし。左はことふりたるにや。仍又爲レ持。

十番

左持

資隆

澄のほる月しやとれは難波瀉みちくる汐もつらゝゐにけり

右

顯昭

終夜ゆきちかひてやすみぬらん心は空に月はこゝろに

左の歌難とすへき所なく。歌合の歌とみえたり。右歌心すかたいとおかし。但夜もすからゆきちかはんほと。しつかならぬ心地やすらん。そもく此たひの歌に。おほくちかふといふことのみえ侍れは。もしこのころの歌のおかしきことはなとにやあらん。それをもしらすやかやうに申にやとあやしく侍る。下の句の心は空に月は心にといへるも。すこし心みたるゝ心ちそすれと。たかひにすめるほと。なをこれはおかしかれは心うるはし。よりてこれも持と申へし。

十一番

左持

頼保

こよひこそ雲のへたてはのけてけれみ空は月のすみ所とて

右

寂念

秋のよは光をそへて玉かつらかつらき山にすめる月影

左の雲のへたてとりはらひけん空のけしき。はれしからんときこゆ。右のかつらき山の月は。よるともなにいへるふることゝおほえて。心もすみぬへく侍るを。これは光りをそへてといはんために。玉かつらとはをかれたるへしとはみゆれと。かつらき山の葛藟まつはれたらん。樛木のしたの月にやと。いふせき心地するかたやあらん。但歌のすかたこそ。なたらかに侍めれ。又左はいかにも月あかゝらんとみゆれは。またもて持とす。

十二番

左勝

西遊

はつゝに山端出る月みれはいかにすへきかいらん惜さを

右 生 西

池水の底に紅葉のちりしけはやとれる月もあかき也けり左の月の山のはいつるよりいかにすへきかいらんおしさをといへる。あまりさへきりてやあらん。空にすむまもなをあはれにもめてたくも侍れは。これは二山之間谷底にてみたる心地やすらん。右は池水の底にもみちの散しけはといへるまたいかゝ。水にちりしく木葉は池にも河にもうかふものなり。されは石などの心ちやすらん。又月もあかきなりけりなともをろかにきこゆ。ふるき歌にはときゝよめれと。なをかやうの詞はよく用意すへき事也。左は出る月をみんに。入ことのおほえんもなとかはとおほゆれは左かちとすへし。

十三番

左

成仲

右勝

政平

たちかへり天の川波あらへはや流るゝ月のくまなかるらんいつもかく空に有明の月ならばあかて入夜のものと思はし左歌なたらかにはみゆれと。あまの川なかるゝ月のなるといへる事。つねにいひなかつてふりにたる事にや。右歌は心ありておかしくも侍るか。月は四維をめぐる事こそあれ。いつもされは空にこそはとやおほゆる。されと南閭浮の空にと思へるなるへし。又歌はさやうにこそわかち申事なれは。なとかはさもいはさらん。左めつらしけなければ右のかちとみえたり。

十四番

左勝

心覺

さやけさはひるにかはらす秋の月哀そにたる物なかりける

右

俊 惠

かきくもる折こそあらめ月影ははるゝにつけて物そ悲しき
左歌あはれそにたるなんといへる。すかたいひしりて
おかしくきこゆ。但さやけさはひるにかはらぬとよまれ
たる。ひるをさやけしとやは申すらん。このさやけしと
いふ詞。古語にいへるは神樂のばしめよりおこれる事
とそみえたる。群神の歌舞し給ひしとき。あはれあなお
もしろあなさやけなんとうたひし詞也。されはひるも
いひつへきやうにはきこゆれと。さやけとは竹のはや
聲なりとそいへる。すゝしけなる心なるへし。それより
月のひかりなとをさやけしといひならはしきたる也。
ひるは陽氣なるかゆへに。すさまじく心ほそきけしき
なとはなきにやあらん。右の歌はことにおほつかなき
ところなともみえす。心すかたこれもおかしくはみゆ
れと。左はすこしおほつかなき所はありながら。月やな
をしつかにあきらかならんとみゆるうへに。末の句な
とよろしくみえ侍れは左かつ。

一番 雪

左

權中納言

その原やふせやは雪に埋もれてありとはかりもみえぬ筈木

右勝

小侍從

庭の面に降つむ雪の上をみてけさこそ人はまたれさりけれ
左歌ふせやの雪はゝきゝみえすなといへること。つね
にみゆる事にやあらん。右歌心はめつらしからねと。降
つむ雪のうへをみてなといへるすかたおかしくみゆ。

右の勝と申へし。

二番

左持

別 當

ますらおか殖生のこやのむね弱み幾重に成ぬ雪のうはふき

右

三 河

雪ふれは草木もわかすをしなへてよにおもしろく花咲に鳧
左はにふのこやなど。さるかたにきこゆ。むねよはみや
なだらかにしもきこえさらん。右よにおもしろくなと
いへる。まことにおもしろからんとはおほえ侍れと持
なとにや。

三番

左持

宰相中將

久かたの天津みそらや春ならん花ちるとのみみゆるしら雪

右

辨

道もなく雪降つもる故郷はもとこし駒もいかゝとそみる
左歌雲のあなたは春にやあるらんといへる歌思ひ出ら
れておかしく侍る。これは春ならんといへることの葉の
いひおほせられぬやうにきこゆるにや。右歌さまはいと
きよけにみゆ。もとこしこまもいかゝとそみるといへ
るそ心えす思ふたまふる。これは管仲か老馬の智もち
ひたりし事をいふ事也。それは齊桓公征々孤竹の時。雪に
あひて道をうしなひて。軍衆みなしる事なかりしに。管
仲老たる馬をはなちて。それにしたかひてかへりたり
しなり。されは道もなく雪ふりたらん故郷に。むねとも
とこし駒はきたるへきやいかゝとは。おもふへくもな
き事なり。これはたゞ道みえねとも故郷はもとこし駒

四番

にまかせてそくるといへる歌はかりにつきてよまれたるにこそ。その歌も本筋はこの事をよめる也。されは歌の程同料なり。これも持とすへし。

左勝

左大辨

右

右京大夫

いかにせん冬木もいまたこらなくに深くも雪の成まさる哉
いかばかりさひしからまし雪深き大原山のけふりたゝすは
左右ともにさせるとかなくはみゆるに。左はふかくも
雪のなといへるほといひしりて。いますこしはまさり
侍なん。

五番

左持

重家

右

頼政

しら雪の降ぬる時そ花さかぬ常葉の山は春とみえける
雪つもるこしの山風吹ぬらしひはら松のはあらはれてみゆ
左歌おかしくは侍るめり。但ときはの山の雪を花にま
かへてのちや春とみゆともいはん。みな白妙に雪ふれ
らん山を春とみん事さすかにいかゞ。またもみちせぬ
常葉の山は吹風のなといへるは。いみしくきこゆるを。
花さかぬときはの山はよろしからすきこゆるにや。右
歌こしの山風吹ぬらしなといへるほと。いひなれてき
こゆるを。檜原松の葉といへる。すこしかそへたてたる
心地すらん。されとかゝるふるき姿もあるへし。左もい
さゝかおほつかなきかたはあれと。歌のさまおかしけ
れは持と可申。

六番

左持

經盛

住吉の濱松かえにふる雪をしらゆふかくと思ひけるかな
右 師光

をさゝはら夜のまの雪に埋もれてゐなの山風音そとしき
左すみよしの松しらゆふかくなといへる詞。きゝなれ
たる心地すれとも。はま松かえにふる雪をなといへる
すかたおかしくみゆ。右のゐなのさゝはら雪にうつも
るゝなど。これもまたつねのことなるを。音そとしき
なといへるほと心ありてきこゆればこれも持とす。

七番

左持

公重

霜かれの尾花も雪のふりつめはまねくかたなく埋れにけり
右 頼輔

雪ふれるせたの長橋みわたせはたゝしら玉をしける也けり
左雪降つめらん尾花まことになにかはみえわかん。右
の瀬田の長はしの雪。おかしくもみわたされなんとは
思ふ給ふか。又玉のしき所思ひかけぬ心ちやすらん。庭
なとこそつねの事なれ。されはほり江には玉しかましを
なといへる事もあれ。いつこにもなとかはしかすらん。
但歌のほとおなししなにみゆ。よりて又持と申へし。

八番

左勝

通能

高砂の尾上も雪にうつもれて道絶ぬらん志賀の山こえ
右 有房

左歌すかた詞おかしくきこゆ。たゝし秋冬なともしかよりゆきかふものを。しかの山越すとこそは申らめ。うちまかせては春の花さかりなとにこそは。志賀の山こえとて。いにしへもおかしき事にはしける。この事そいかゝとおほつかなく侍る。右歌偏效ニ萬葉之歌風一頗背ニ中古之妙躰一也。かゝるかたにてはさても侍りぬへけれと。左おほつかなき所ありなから。道たえぬらんなどいへるすかた。みちたるの詞にはまさりてきこゆなり。

九番

左持

吳竹はそこ共みえす雪ふれはたへすおれふす音はかりして

右

季 隆 信

降そめて花かとみせしその梢かくるゝほとそ雪の日かすは左くれ竹雪におるなといふ詞。つねにいひならはせる事なれと。吳竹はとさしてをかれたるほとやいかゝ。なよ竹なとこそさはあらめ。右その梢なといへるおかしきまなるへし。末の句のかくるゝほとそといへるわたり。いかにいひおほせられねは。歌のほと持とや申へからん。

十番

左持

ちとせ迄春をもしらぬ松かえにあたる花を雪そかしける

右

資 隆 顯 昭

ふまはおしふまてはゆかん方もなし如何はすへき野ちの初雪左歌はよそのもみちをかせそかしけるといへる歌を。あたる花をとひきなされたるこゝろおかしくも侍る。

かみの句そいかにそやきこゆ。松をはもみちせず秋をしらすなといへるはよくきこゆ。花こそさかさらめ。ちとせまで春をしらすといはんいかゝ。春のはしめのはつねにも。小松をこそはひくことなれは。春をはしりてやあらん。されはかの寛平の御時きさいの宮の歌合にも。ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけりとこそ。宗子朝臣よみて侍るめれ。はしめつかたのつかひに。ときはの山の雪にかやうの事侍るとよ。松をは猶いはひのものにてを。かまほしくて。たひ／＼かたふき申になん。右の歌上句はちかくかやうの事きさし心地する。ひかおほえにや。末の句もことにすくれてきこえねと。左おほつかなき事ともあれは又持とすへし。

十一番

左持

降雪に谷のかよひちまよふらし人こそみえぬみやまへの里

右

頼 保 寂 念

さらぬたによもきか宿は寂しきに雪踏わけて誰かとふへき左谷の通路迷ふらしなといへるすかたいとおかしきこゆ。右も雪ふみわけてなといへるほとは。いひしりてなたらかにみゆれと。左かみしものすかたいひかなひてみゆ。左勝たるへし。

十二番

左持

かきくらし越のかたみち降雪はいつはた山を思ひこそやれ

右

西 遊 生 西

よの常は雲の衣をこしにまくたかまの山は雪降にけり
左こしのかた道いつはた山など。なつかしきさまには
きこえねと。またかゝる歌にてはさてもありなん。右は
いとめつらしくこそみえ侍れ。但この山をは。よそにの
み見てやゝみなんかつらきやたかまの山の峯のしら雲
などのみこそきゝならひぬるを。これは雲の衣をこし
にまくといへる。それよりかみおもひやられて。山のす
かたもよろしからすやきこゆらん。かのまかねふくき
ひの中山帯にせるなといふやうなる事のあるにや。よ
もゆへなくはあらしを。元見をよはぬことにて。おとろ
きおもふたまへるこそいとくちおし。されとこしにま
くとは猶すかたもいかゝ。いつはた山を勝と申へし。

十三番

左勝

成 仲

雪ふれは草のとさしも埋もれぬいかゝはすへきあくる春迄
右 政 平

雲井まで降雪なれは名にたかきことはりなりや越の白山
左右ともになたらかにみゆるにとりて。左の草のとさ
しあけん春までなといへる心おかしく聞ゆ。右のこし
のしら山も。まことに雪たかくきこゆるを。降雪なれは
ことはりなりやといへる。おなしき事にやともみゆれ
は左かちと申へし。

十四番

左

心 覺

ふる雪にまきの柚山跡たえてをのゝひゝきもけさは聞えず
右勝 俊 惠

雪ふれはきゝの梢も咲そむる枝より外のはなもちりけり
左歌さまはいときよげにみゆるを。まきのそま山には
雪ふりをのゝ音きこえすなといへること。つねにきこ
ゆる事にや。右はきゝの梢にさきそむる枝とつゝける
程そいかにそや。木々まかへらるゝ心ちすれと。枝より
外のなといへるすかたいとおかしければ以て右爲勝。

一番

戀

左勝

權中納言

鹽たるゝいせおの蟹や我ならんさらはみるめをかる由もかな

右

小侍從

夢にさへみし面影のたちそひてぬるにもやすむ心地社すれ
左歌いせをのあまやわれならんとをきて。さらはみる
めをなんといへるすかた。いとおかしくも侍るかな。右
歌よるの衣をかへし曉の枕をそはたてゝも。夢のうち
になりぬれはあはれともつらしともみん事こそつねの
事なれ。夢のうちにさへ梯のたちそはん事いかゝおほ
え侍れ。左のかちとすへし。

二番

左勝

別 當

あちきなやあはぬつらさを種として劔の枝のみとや成へき
右 三 河

數ならぬわれから人もあひみねは戀しき度に身をそ恨むる
右歌はもにすむ虫のなといへるよりは。われから人も
あひみねはなといへるよはくきこゆれば。左はつよか
らんとそ思ふ給へられ侍る。

三番

左勝

宰相中將

つれもなき人の心はうきぬなは苦しきまでと思ひみたるゝ

右

辨

かくはかりつれなき人に昔なととくる契りを結はさりけん

左人の心はうきぬなはとつゝけるほとこそおかしくみ

え侍れ。末のくるしきまでといへるほとや。かたつかた

の心つよからぬ心すらん。右はつれなき人にむかしな

四番

左

左大辨

いひしらぬ戀は君社もたりけれみそめしよりそかくは焦るゝ

右勝

右京大夫

戀しさはその色としもなき物をなと身にしみて思ふなる覽

左歌めつらしきさまにはみえ侍るを。なかの五文字そ

よろしからすや。右歌なたらかにきこゆ。おはりの句そ

今すこしおもふへくやとみえたれと。ことなるとかな

ければ右の勝にこそ。

五番

左

重家

夜とゝもにくたく心のいかなれは戀より外にちらぬなる覽

右勝

頼政

くれなゐの涙にそまる戀衣かへせは袖そうらみなりける

左心詞おかしく侍る。和泉式部か歌に。君こふる心はち

らぬくたくれとひとつもうせぬものにそありけるとい

へる心にそかよへる。右かへせは袖そなといへるすか

六番

左

經盛

たおかしくみゆるに。涙にそまる戀衣なとや優なる詞

右勝

輔光

ともきこえさらん。されと萬葉集にも。戀衣きなれの山

になとよみたるにや。かゝるかたにて歌のさまもこれ

はめつらしきにつきて右勝と申へし。

あふ事のこの世ならねはいとゝしくしなん命も惜からぬ哉

戀しとも又つらしとも思ひやる心いつれかさきにたつらん

左歌あふことのこの世ならねはいとて。しなん命な

と侍る。戀の心もふかくさることゝきこゆ。右歌は又す

かた詞いとおかしくて。かたゝ思ひわつらはれ侍れ

と。なをまたつらしとも思ひやるといへるけしき。あは

れにもみえ侍れは以て右爲勝。

七番

左勝

公重

君かすむ宿のうへきにたなひかん戀しなんまに雲となりなは

厭ふにはいとゝ思ひそまさりける戀はつらさにはゆる也鳥

とや。たへぬ心地やすらん。右はことなることなけれと。

やすらかにてゆうにきこゆるか。末のはゆるなりけり

といへる詞。おもふへくやとみえ侍るに。またまさりけ

るとおなしことあれば。いかにも左の勝にこそ。

八番

左勝

通能

錦木もさてこそよそに朽にしか戀すてふなのなそやたつ覽

有

有房

をのつからあふにもかふと思はすは戀には身をもなけつへき哉
左歌錦木はむなしく朽てやみにけんに。戀すてふ名の
なそやたつらんといへるすかた詞。いとおかしくこそ
きこえ侍れ。右歌も心はあしくもあらぬを。あふにやか
ふといへるほと。もしのたらぬにやあらん。左の勝とみ
えたり。

九番

左

季經

いかなれは戀をはわれにならはして逢みることを教へる覽

右勝

隆信

我ゆへの涙とよそにこれをみはあはれなるへき袖のうへ哉
左ことのいはれおかしくもみゆるを。あひみる事を
しへさるらん。おさなきやうにやきこゆらん。右歌よろ
しく侍るにや。仍爲勝。

十番

左

資隆

相坂の關をゆるさて年ふれは思ふ心もゆかすそありける

右勝

顯昭

かはり行姿をのみやつまゝし涙にくつる袖なかりせは
左歌さまはおかしくも侍るか。心ゆかすおほえんはか
りは戀の心すくなくやあらん。せきをゆるさてといへ
る詞も。かの清少納言は雨谷關の昔のことによせて。よ
に逢坂の關はゆるさしとよめる。ことにおかしくきこ
ゆるにや。右歌はいかにそ。かたつかたの心いひおほせ

ぬやうにそきこゆれと。すかたをのみやつまゝしな
といへる詞つゝきいとおかしくきこゆれは右の勝と申
へし。

十一番

左勝

賴保

戀かはにしつむにつけて思ふ哉我身も石となるにやある覽

右

寂念

岩に生る松に心はかくれともかひなき戀に年そへにける
左戀河にしつむ我身も石なといへる。ふかくかたき義
なるへし。但此石になる事は。もし望夫石と申ことにや
あらん。そのかみにおろくみ侍りしは。武昌北山上
有望夫石。其狀如金。むかし貞婦ありけり。その男遠
き國へ行けり。わかれをおしみて。かの山のうへにたて
りて夫を見をくりけるか。化してたてる石となりけり。
されは戀かはにしつむにはおもひ出へしともおほ
えねと。たゞ石になるといふ計に侍るめり。右まつに心
はかくれともなといへる。すかたよろしくきこゆるを。
末の句やこともなく侍らん。左の河にしつむ石。右岩に
おふる松。堅柔雖異勝劣已同。仍爲持畢。

十二番

左

西遊

我戀はかけおふ鷹にあらね共あふことぬるき頼みをすする

右勝

生西

老ぬれは錦木をたにえそたてぬ千束こるへきよはひならねは
左の歌かけおふ鷹あふことぬるきなといへるけしき。
たゝならておかしく侍る。右としのほと思ひしりなか

ら。なけきなやめるけしきあはれにも侍る。ちかくかやうなる事きし心地すれとひかおほえにや侍るへし。すかたなとおかしくみえ侍れは右勝とすへし。

十三番

左

成 仲

思ひかねなくさむやとて芹つめは田中の井とに袖を濡ぬる

右勝

政 平

君故に世にあらはやと思ふ哉しにてあふへき道をしらねは左の歌のさまは。おかしく思ひよれることゝはみゆるを。たなかのゐとには。なきつむところとこそきゝならひて侍れ。またちかく田中の井とに袖ぬれてあふ事なきのなといへる歌きこえし心地するを。これは芹つめはといへる。なきにはかはりたれと歌はふるくや。右末の句なとゆうにきこゆ。かみのよにあらはやさいへるいかゝならん。されと左おほつかなきところあれば右の勝とみえたり。

十四番

左持

心 覺

いさなみの神ならね共戀すれは夜晝わかすねをのみそなく

右

俊 惠

きぬくになるへき人もなき物を明ぬと鳥のたれにつく寛左歌事及日本紀てわつらはしくは侍るめれと。よるひるねをのみそなくと。いはんためはかりば。なにことによせてもおほくありなんを。やんことなき神代の御事。よみあらはさすともや侍るらん。右歌すかた詞おかしくはきこゆるを。これはまたひとりねのあかつき鳥の

音きけるはかりにては。戀の心やすくなからん。鳥きこゆれときぬくならずして。つまなを思ひいてん事おほえ侍る。このあけぬと鳥なといへるけしき。ふるく戀の道になれにける人にやとあはれに歌のさまもおかしくこそおほえ侍れと。左もいさなみのみことなと侍れは。いかゝをろかにはとてなを持とす。

太皇太后宮亮平經盛朝臣家歌合

仁安二年八月日

題

草花 鹿 月

紅葉 戀

歌人

刑部卿藤原重家朝臣

前少將藤原公重朝臣

前中務少輔藤原季經朝臣

皇太后宮亮藤原賴輔朝臣

左少辨藤原爲親

左近權少將源朝臣有房

宮内權少輔藤原朝臣伊行

日吉禰宜祝部成仲宿禰

左京大夫入道教長

帥阿闍梨心覺

亮公闍昭

三河大藏女房

判者

太皇太后宮前大進藤原清輔朝臣

一番 草花

左持

色とこそ萩か花すり思ひしか香さへ袂にうつりぬる哉

右

前少納言藤原資隆

秋の野にいつれともなき花なれと招く薄をまつめにはたつ

左右歌み給ふるに。をの／＼おもふところなきにあらす。はた左歌のまへの句。右歌のむすひ句。ともに心ゆかす侍れは。みしかきおもひはかりひたりみきにまといて。なましひに持に定畢。

二番

左勝

大宮亮經盛朝臣

花すゝきたれともわかす招くにも心をとむる我やなになり

右

前少將藤原公重朝臣

あたにをく夜のまの露にむすほゝれて思ひしほるゝ女郎花哉

このつかひ又ひとしきほに侍るを。右はおもひしほるゝといふこと葉おほつかなし。させる證なくは左勝にそ侍るめれ。

三番

左

右近少將源通能朝臣

女郎花露もわきてやをきつらんしほれ姿のあてにもある哉

右勝

小侍從

もゝ草の花もあたにや思ふらん一色ならすうつすこゝろを

左露もわきてやをきつらんといひて。色のうすくこき

ともそいはまほしき。しほれすかたのかたにはかなひ

てもきこえず。またあてにみゆなんと。ゆうにもあらず

や。右心なきにもあらねは勝もしなん。

四番

左

前中務少輔藤原季經朝臣

行人を野への尾花にまねかせて色めきたてる娘部志かな

右勝

左少辨藤原爲親

吹おりそ過る人をはまねきけるかせや尾花の心なるらん

左ことなる事みえず。右もとの三句にてつゝけにきこゆれは。心ありてみゆれは勝とも。

五番

左

皇太后宮亮藤原頼輔朝臣

秋の野は花のいろ／＼多かれと萩のにしきにしく物そなき

右勝

前兵庫頭源頼政朝臣

ほりはてぬ花こそあらめ秋の野に心をさへものこしつる哉

左ふるめきてみゆれとあしくもあらず。右ほりしそ心ゆかねとさしてはいかゝ。心はへいとおかしければ勝とすへし。

六番

左持

右京權大夫源師光

むつ言もいはまほしきを女郎花くちなし色のつらくも有哉

右

日吉禰宜祝部成仲

娘部志花の心はしらねとも名をきくにこそおらまほしけれ

左おかしく侍り。但くちなし色ならぬ花はものは申てんや。おほかたは花をはものいはすところいひならはしたれ。されとふかきとかにはあらねは。おかしきにゆつりつへし。右うるはしくよまれて侍り。名をきくにこそなといへるわたり。思ふ所しあるやうにきこゆれは勝まけ申かたし。

七番

左勝

右近少將源有房

はきか花わけゆく程は故郷へかへらぬ人もにしきをそきる

右

中務少輔定長

聲たてゝなく虫よりも娘部志いはぬ色こそ身にはしみけれ

左よくよまれて侍り。右いはぬ色とはいかなるいろにか。くちなし色とおもひなされたるにや。心えかたくや。いかにも左勝に侍るめり。

八番

左持

亮公

うつらなく遠里をのゝ小萩はら心なき身もすきうかりけり

右

登蓮

秋の野の花に心をそめしよりくさかやひめも哀れと思ふ

左こはきはらをよまは宮城野などそいはまほしき。右くさかやひめは日本紀に侍る事にや。この紀にはいさなきのみこといさなみのみことみとのまきはひして。まつ國土あきつしまをうむへきに。諸國山河海をうむ。草木をうむと侍る。いはゆるきのおやくゝのち。くさのおやかやの姫なり。歌の心はたかはぬくさかや姫とつ

つきたるおほつかなし。かゝることは本文をたかへすこそよむへけれ。日本紀竟宴歌にも。としことのはるやむかしのかやの姫とこそよめ。たゝしかやうの事は。たしかにみる所ありてそよまれたらんとおもひ侍れは。おとりまさり申かたし。

九番

左勝

片岡禰宜賀茂政平

女郎花いつれの秋かみえさりし野原の霧にたちなかくれそ

右

宮内權少輔藤原伊行

心から夜のまの露にしほたれてあさしめりする女郎花哉

左いと興ありてよまれ侍り。右露にしほたれん事もいかゝ。又いせおのあまなとおほゆるうちに。させる心も

なければまくへきにや。

十番

左勝

阿闍梨心覺

いろ／＼に心そうつる秋の野は露もあたる花しなけれは

右

右馬權頭入道實清

花すゝき風のけしきにしたかひて心おこらぬ人なまねきそ

左心も詞も右にはよみまして侍めり。

十一番

左勝

大進公

我こそは野へをは宿に移しつれたかさそひこし虫のねそこは

右

三河

秋の野の千種の花のいろ／＼を心ひとつにそめてこそみれ

左むしをいとひたるやうにきこゆるそほいなけれと。

またおかしくおもふあまりともきくなしてん。右元永

二年内大臣家歌合に。兼昌歌にや。秋くれは千種に匂ふ

花の色の心ひとつにいかてしむらんと侍るたかはねは

左勝にや。

十二番

左

太皇太后宮大進藤原清輔朝臣

我宿も残る花なくうへつれと野へのけしきは猶そゆかしき

右

左京大夫入道藝長

秋はきの枝もとをゝにをく露のはらはゝあやな花やちり南

右古今集に。おりてみはおちそしぬへき秋はきのえた

もとをゝにをけるしら露といふ歌にや似て侍らん。

一番

左持

重家朝臣

小男鹿も秋をはなにと思へはやときしも聲をたてゝなく覽

右

經盛朝臣

嶺になく鹿の音ちかくきこゆ也もみち吹おるす夜半の嵐に

左さきしも聲をなと侍るわたりいひしりてきこゆ。右

ももみち吹おるすなと歌めきたり。そも／＼傍題はよ

まぬ事なりとや申人もあれと。天徳花山歌合にも侍る

めれは。ひかことにはあらしとて持にきため侍りぬ。

二番

左勝

通能朝臣

吹風も身にしむ秋の夕くれにあはれをそふる鹿の聲かな

右

爲親

妻こふるさ夜ふけたたの鹿のねに聲うちそへて秋風そふく

左右おなしさまに侍るに。右のつまこふるさ夜ふけか

た。詞上下したるやうなる。さよふけかたにつまこふる

とそいはまほしき。左はかゝるところのなけれは勝も

しなん。

三番

左勝

頼輔朝臣

たれよりも秋のあはれやまさる覽聲にたてゝは鹿を鳴なる

右

亮公

春夏はなにゝ心をなくさめて秋のみ鹿の妻をこふらん

左あることくきこゆ。おかしく侍。右もあしくもなきを。

有綱朝臣家歌合にや。秋しも鹿のつまをこふらんとよ

める歌侍るやうにおほゆれは。末二句は猶はゝかる事

也。左勝とすへし。

四番

左

定 長

小男鹿のなくねはよそにきゝつれと涙は袖の物にそ有ける

右勝

季經朝臣

山たかみおるす嵐やよはるらんかすかになりぬ小男鹿の聲

左は俊賴朝臣の歌に。小男鹿のなくねは野へにきこゆれと涙は床のものにそありける。右のかたは心なきにあらされは可_レ爲_レ勝。

五番

左勝

公重朝臣

きく人の袖もぬれけり秋の野の露わけてなく小男鹿の聲

右

清輔朝臣

鹿のねの吹くる方にきこゆるは嵐やをのかたちとなるらん

左鹿のねはあはれとはうちきくも。袖ぬるゝまてはいかゝなるへくも。かくよめる歌こそおほえね。このさきに申つる俊賴の歌こそ涙とよまれて侍るめれと。歌合などには猶跡なきことはいかゝ。おほかた歌めきて侍るめり。右のあらしやをのかたちとなるらんと侍ること。おもひかけすおとろき思ひ給ふれは。みつからの歌に侍りけり。かゝるやうになきにはあらねと。歌合の歌はよみやうありとは。かやうの事也。左尤勝侍なん。

六番

左

資 隆

草枯のふしとさひしくなり行は鹿こそ妻もこひしかるらん

右勝

登 蓮

小男鹿の聲しきる也みよしのゝいさかた山に妻やこもれる
右いさかたやまきゝつかすや。又何のゆへともみえず。

七番

左特

賴政朝臣

草かくれみえぬ男鹿も妻こふる聲をはえこそ忍はさりけれ

右

成 仲

秋の野の花の袂にをく露や妻よふ鹿の涙なるらん
左はおもしろく右はやさしく。とりくみに侍るに。右歌はおなし文字やおほく侍るらん。これは遍身病とて和歌作式にせいたれとも。このやまひある歌おりおりの歌合になきにあらず。かつはこのたびあまた侍れは申あふへくもなきうち。かやうの事は歌のさまによるにやとみ侍れは。この歌まけにきためかたければ猶可_レ爲_レ持。

八番

左

師 光

山風にしほるゝ野への草むらのねや寒しとや鹿のなくらん

右勝

實清入道

あはれとはねらふさつおも思ふらん男鹿妻とふ秋の夕暮
左首尾おもへるところもなきやうなり。中にも鹿のふしとはつねのことなり。ねやこそきゝつかす侍れ。右ね

らふさつ おそにくさけにきこゆれと。あしくもあらね
は可_レ爲_レ勝。

九番

左持

伊行

秋萩を草の枕にむすひてや妻戀かねて鹿のふすらん

右

有房

妻こふる秋にしなければ小男鹿の床の山とてうちもふされし

左あしくも侍らぬを伊家弁の歌にや。秋はきを草の枕
にむすふ夜はちかくも鹿の聲をきくかなといふ歌を侍
れと。歌のふしにもあらず。心もことなるうちに右の歌
よろしからねは。とかくゆつろひて持にて侍りなん。

十番

左持

三河

終夜妻こふるまに小男鹿のめさへあはてやなきあかすらん

右

小侍從

ひとりのみみねの男鹿の鳴聲にあはれふきそふ風の音哉
左めさへあはすといふ事つねのふしなり。右あはれふ
きそふ。うちそふなとこそいへ。されとふかきこととなら
ねは。たゝ持なとにて侍るへし。

十一番

左

政平朝臣

小男鹿の空にあはれときこゆるは山のたかねにけは也梟

右勝

心覺

ゆふまくれ霧のまかきのさひしさに男鹿なく也秋の山さと
左そらにあはれときこゆとよめるいかなる心にか。鹿
のなくなんその事としらねと空にあはれるとにや。

もししからは鹿はつまこひてなくことゝは人しれるこ
とにてばあらずや。霧のまかきになきけん鹿こそ。いま
すこしなさけありてきこゆれ。

十二番

左持

大進公

嵐ふく眞葛か原に鳴鹿はうらみてのみや妻をこふらん

右

左京大夫入道

山里は妻こひかぬる鹿のねにさもあらぬ我もねられさり梟
左まくすか原にうらふれけん鹿の音も。右のやま里に
いねかてにきける聲も。ともにものさひしくおもひ
やられて。いづれもあはれおとるへしともきこえねは。
おもひわきかたきことにてそ。

一番 月

左持

重家朝臣

月きよみなかむる人の心さへ雲井にすめる秋の夜はかな

右

頼政

のころへき垣ねの雪はまつ消てほかはつもるとみゆる月哉
左よのつねのことに侍めり。秋のよはかなといへるわ
たりもたよりなき心地す。右かきねの雪のまつきゆら
んはいかなることにか。もしかきねのかけにて。月のひ
かりのみえぬ心にや。めつらしさすきてこそきこえ侍
れ。ほかはつもるなとも。左の秋のよはかなといへるに
まさりてもみえねは。いづれとも申かたし。

二番

左勝

經盛朝臣

松浦舟明石の鹽にこきとめよこよひの月はこゝにてをみん

右 登 蓮

月影のさえゆくまゝにをく霜と思ひもあへず鐘やなるらん
右豊山の鐘の心にや。それは霜降時白鳴とかや申める。
されは秋月似^ニ夜霜云詩にも。歎^ニ豊嶺鐘聲一否とそつ
くられたる。これはわか月光を霜とみておもふとなり。
かねは霜に和してこそなれ。心なきものなれは霜をみ
てならんとおもひあへすや。なるらんといはん事はか
なはずや。左五もしそ心ゆかれとも。ことはり侍めれは
勝なんとおおもひ侍る。

三番

左持 参 河

おきあかし隈なき月ななかわれは野原の草の露もかくれす

右 公重朝臣

月をみて心をこよひつくす哉くまなき空はみえもこそすれ
左おきあかしなかわれは我宿にやと思ふに。末に野原
の露と侍るいかゝ。月はかならず野へにいてゝみるこ
ともあらず。旅のよしなとをいひてやかくよむへか
らん。右あしくも侍らぬに。末の七もしいとくちおしけ
れは持なとや。

四番

左勝 俊 惠

月清みかひの白ねをなかわれはいつかは雪に空ははれける

右 通能朝臣

くまもなき月みる程の心にてやかてこのよをすくしてし哉
左心さしうちにおいて詞ほかにあらはれぬやうなり。
月光を雪にまかへは雪なき所にそよまゝほしき。かひ

のしらねをとあれは。かの雪なよめるやうにてたしか
ならず。又娘捨山をきてかひのしらねの月をよめる
も。野宮歌合むけにたゝありのまゝにみゆれは。なを左
や勝侍るへからん。

五番

左 季經朝臣

さやけさに又ことゝもわすられてふた心なく月を社みれ

右勝 實清入道

いかて猶秋しも月のかゝりけんみる程あらし夏のよならは
左すかたたくみにて又させる心なければ右の勝と申へ
し。

六番

左 爲 親

しほ風の雲ふきはらふ秋のよは月すみわたる天の橋立

右勝 政平朝臣

あかさりし花にたとへて詠むれは月は心にすみまさりける
左風はいつことわくへきならねと。しほかせの雲ふき
はらふと侍る。ことたかひたるやうなり。右たとふと侍
ること葉そ心ゆかれと。させるとかのあらねは可^レ爲^レ勝
にや。

七番

左持 小侍從

天津星ありともみえぬ秋のよの月はすゝしき光なりけり

右 師 光

さよふくる空にきえゆく浮雲のなこりもみえぬ秋の夜の月
左口樹病あるうへに。いま一句そひて。三句までは初の

字おなし。こればふるき歌合にも申たる事也。右又夜も
しふたつあれは。まささまの病なれとも。左歌心えられ
ねはいつれとも申かたし。

八番

左勝

定長

月影をまつと惜むと秋のよはふたゝひ山のはこそつられ

右

伊行

吹はらふ月のあたりの雲みれは春はいとひじ風そうれしき

右月のあたりの雲ふきはらふとそいふへき。詞上下し

ときこゆ。大かたも至意なきやうなり。左ふるき心に侍
れは勝もしなん。

九番

左

有房

影きよく月をよこきる浮雲は秋の名をさへけかしつる哉

右勝

成仲宿禰

てる月を沼のうへにてみる時そますみのかゝみいる心地する

左秋の名をさへけかすと侍るいかにそやきこゆ。右留

僕鏡の心にや。沼のうへの月。まことに一片秋澤水にこ
とならず侍けんかし。右勝ぬへし。

十番

左

清輔朝臣

をくら山下行水のさゝれ石も數かくれなくてらす月かけ

右勝

心覺

銀河とはたる月の影すみてにこれるよともみえぬ空哉

左させる事なし右さもありなん。なとかゝたさらむ。

十一番

おしみかねあかぬなこりの苦しきに入迄はみし秋のよの月
左勝 顯昭

右

頼輔朝臣

月影のかたふく方にさしいれは宿のうちに霜ををきける

左いりなんなこりくるしかるへしとて。月をみはてゝ

いてんも。あまりうらかへりたる。右かたふく月やとに
いるへしといふ事荒涼なり。宿のありやうにそよるへ
き。詞つかひしらぬやうなれは左勝とすへし。

十二番

左勝

資隆

しら雲を心なしともいひはてし秋の月をはくらさゝりけり

右

大夫人道

わきてしもおしまさらまし照月の秋より後も限なかりせば

左大かた秋の月に雲のかゝらぬやうにきこゆ。古今序

に喜撰歌をいふに。望ニ秋月ニ如ク遇ニ曉雲一とこそ書て侍
れ。右秋より後はみな月のくらきやうにきこゆ。月は冬

こそみるへかりけれなともいへるものを。但ともに毛
をふくきすなり。おなしほとのことゝそみ侍る。

一番

左勝 紅葉

山姫やきてふる郷へかへるらんにしきとみゆる衣手のもり

右

俊惠

色々のきゝのにしきを立田川ひとつはたにもおりなかつ哉

左山姫はつねにいへる物にこそ。いつこか故郷に侍る

らん。右きゝゝのにしきもちらしてそ川にもおりなかつ
へきふるくも紅葉みたれてなかるめりといひてより。

わたらはにしき中や絶なんともよみたれ。又立田川ひとつはたとあるもいか。猶はたによりたる所名もしはこと葉につきてそいふへきを。さらてたつ田川ひとつはたとよめる。心にまかせて侍らん。古歌にもはたものなしのにしきなりけりなとよめる。歌からはおかしけれと。さりかたきことゝもなれは猶左勝とや申へからん。

二番

左勝

經盛朝臣

秋霧のたえまにみゆるもみちはやたちのこしたる錦なる覽

右

賴政朝臣

もみちゝる立田の山はえそ越ぬ錦をふまん道むしらねは右落花落葉なとに。なかくろ又ちかくの人もあまたゝひよめことなり。左はけふあることくきこゆ。歌からもきよけなれは勝とすへし。

三番

左

顯昭

くれなゐのこ染の色とみえつるややしほの岡の紅葉なる覽

右勝

資隆

初時雨ふりにし里をきてみればみかきか原は紅葉しにけり左くれなゐのこそめの色に。やしほの岡をとりあはせられたる。たくみにはみえ侍れと。右はいますこしすかたもうるはしく。ものさひしくよみすまして。むかしの歌をみる心地おはすれは。勝侍らんとそおもひ侍る。

四番

左勝

賴輔朝臣

五番

左

爲親

あさ日山嶺の紅葉をみわたせはよもの木するにてり増り鬼

右勝

師光

紅のやしほの色にめかれすなおなしはもりの神といふとも左させることなく。こと葉つかひなともうつくし。右はもりのかみは荒涼木にはよまぬこと也。かしは木にむへしなとそ。ものしれりとおほしき人は申めれとも。よるつのものには。それをまもる神あれば。葉もりの神とは樹神を申にやとこそおほゆれは。いつれの木をかまもらさるへき。されは此歌もあしからず。終のいふとも侍るそたしかにきこゆれは。かちなとにやみえ侍る。

六番

左勝

公重朝臣

山姫はもみちのにしきをりてけりたちなやつしそ嶺の朝霧

右

政平朝臣

しくれには紅葉の色を増りけるまたかき曇る空はいとはし右しくるゝ空はおかしくこそあれ。いとほるへきことかは。もみちの色まさりけり。猶たゝいまさとりけるも

ことたつらしくきこゆ。左あしくもあらぬを二韻字同。これは聲韻病と申にや。また天徳歌合にはとかめたる歌もあり。とかめぬ歌もあり。うちきくにみゝにたゝぬはさてもあるにや。この歌くせともきかぬに合て。右歌よからねは左勝にてはへるへし。

七番

左持

定 長

いろ／＼にそむるもみちに立田姫心の程のみえもするかな

右

季經朝臣

いろ／＼にとりそめてけり立田姫はしむらこなる衣手の森左ことなる事なし。末もふるめきてや。右又俳諧歌のていに侍るめれは。いつれとも申かたし。

八番

左持

伊 行

もみち葉はくれなる深く成ゆけとひとりさめたる松の色哉

右

小侍從

柞原しくるゝまゝに常盤木のそれなりけるも今そみえける左右ともにみちをはきて。ときは木をよまれたれは題のほいなしや。右はすかたはまさりたれと。むけにもみちみえず。又あやしく。つゐにもみちぬ松もなければ。たゝ持にて侍るへし。

九番

左持

成 仲

秋ことに葉守の神のつらき哉もみちを風にまかすと思へは

右

登 蓮

くれなるに梢の色のかはるより風の音さへあらすなる哉

左さもありなん。右も聲。林風といふ詩の心ならは。もみつるよりやはちり侍らんとそおほゆれと。また夏の梢の葉をさかりなるを。ともににはにすもあらんとおもひなせは。とかなくて持にてもありぬへし。

十番

左勝

有 房

一たひは風に散にしもみち葉をとなせの瀧の猶おとす哉

右

實清入道

色ふかき紅葉うつらぬところこそ立田の川のおさせ也けれ左おかしくみえ侍り。大井逍遙などによまれたらましかは。いますこしよからまし。右もみちうつらぬところをあさせとたのまん。あやまちしつへし。おほかたもととりて侍らん。

十一番

左

清 輔

おほつかないつれうらこの山ならん皆紅にみゆるもみちは

右勝

三 河

大井川岸のもみち葉ちるおりは波にたゝする錦とそみる左いかなることのあるへきそときくほとに。すゑいとこひさめなり。右へちに難もみえねは勝へし。

十二番

左持

心 覺

柞原しくれにそむるくれなるは梢の風やふきてほすらん

右

教長入道

もみち葉は入日の影のさしそひてゆふ紅の色そことなる左ころもにしきなといひてそ風にもふかせまほしき。

右めつらしきことはなれと。めにたつところもみえねは持なとにても侍りなん。

一番 戀

左勝 重家朝臣

今は早昔かたりになりなましつらきにたへぬ我身なりせは

右 師 光

戀しさもうき身の程につまればいつ迄ありし心なるらん
右おもひいたる事もなく。左あることゝきこえ侍り。
上下句にてみし心ちそし侍る。すゑは後拾遺に思ひ出
てとふことの葉をたれみましうきにたへせぬ命なりせ
はといふ歌のおほゆるにや。おほむねはにたれとも。詞
はたかひたれは。いかなるへしともおほえ侍らす。この
歌ににすは左勝なん。人々さため給ふへし。

二番

左 公重朝臣

あちきなく思ひによはる我身哉人のけしきは心つよきに

右勝 爲 親

思ひわひなくさめかたき夕暮はそなたの空に詠められける
左思ひによはる又心つよきになといへるよくもあらす。
右歌合の歌ともおほえねと。いとひくるしくおもひや
られ侍れば勝と申へし。

三番

左 有 房

戀しなん身は惜まれて妹か佳同しよにたになからんそうき

右勝 季經朝臣

君にまた思ひをかけん人もかなたれにもつらき心かとみん

左こゝろあるににたれと。すかたよろしからす。右よし
なきねかひことかなと。あやにくにおほゆれと。歌から
はまさりても侍らん。

四番

左 定 長

後の世もしらぬ契りを頼みつゝあらまし事に身をやうつさん

右勝 通能朝臣

あすからは七瀬の淀にゐる鳥のうきみにそへる戀そわりなき
左あふにみをかふといふ心にや。それはいかなること
なればかくはよめるにか。あらましことに身をかふら
んもおほつかなし。今のちの世にあはんと命をすてよ
とちきる人のありけるにや。さらはあらまほしき歌な
り。右心えぬ事はなれは。勝侍ぬへし。

五番

左勝 俊 惠

あふに社かへもえさらぬ我命なとやたゝさへ思ひやられぬ

右 清輔朝臣

我戀はあまのたく火の下もえてまたほのめかす方もなき哉
左詞つゝきそよからねとも心は侍るめり。

六番

左 資 隆

戀しなほえん煙を人はみよ君かかたにそ思ひなひかん

右勝

歌欠

左さてもありなん。つねにいひなれたる事にてや侍ら
ん。右すかたなひやかなる中に戀の心さしもせちにみ

七番

左勝

顯 昭

ゆるは勝侍りなんかし。

右

頼政朝臣

命をそ今は惜まぬ限りそときかはなさけにもしやとふとて

左しるへなしとはいかに。思ひのみこそしるへなりけ

れとこそふるくもよみたれ。すゑに思ひかへるとある

も。まことに心さしのなかりけるにやときこゆ。うしと

てもさらにおもひそかへされぬなといへるこそ戀のほ

いにては侍れ。右心さしはせちにみえ侍れと。すゑの七

八番

左

心 覺

さもあらはあれ涙に袖は朽ぬ共衣のすそのあひたにもせは

右勝

登 蓮

あふきてを祈らは扱や戀せしの御稜も今はかなはぬやなそ

左ころものすそのあひたにもせはとよめる。いかなる

事にか。したのおひこそゆきめくりてあふ事にはいふ

めれ。さやうのこと葉の侍るにや。もし萬葉集に。から

衣すそのうらうへ「うちかへ萬葉」あはねともけしき心をあ

かおもはななくといふ歌を思ひてよめるにや。衣のす

そはあはぬ事とこそきこゆるに。いまの歌には。あふこ

と、おほしくよまれたるは。このことにはあらぬにや。

大かたかゝることは物こしよりおちたる事をよむへき

なり。萬葉集にありとても。いひならはさぬことはよし

なし。四條大納言の新撰髓腦にも。歌はへもしにいふも

めつらしきことをよみ出へし。さりとてよみならはさ

ぬ事なとをいへるもわろし。われはおもひえたりとお

もへと。人の心えぬことは。かひなくなん有とこそ侍る

めれ。右おほつかなき事はなければ勝とも申へからん。

九番

左

實清入道

我袖や波こす磯のさゝれ石うちあらはれてひる事もなき

右勝

伊 行

とけやらぬ人の心はつらからてむすふの神をうらみつる哉

左こひの心ほのかにや。なにゝあらはるゝ袖にかとお

ほつかなく侍り。又こしの句もことはたらぬやうにき

こゆ。右うちきくは人ゆへに神もうらめしかるへきと

おほゆれと。そねみことはにこそは。戀の心もまさりす

十番

左

小侍從

たのめしをまちしほとなる暮毎におもひわひぬるわか心哉

右勝

頼 輔

こひしなん別は猶もおしき哉同しよにあるかひはなけれと

これは右勝にこそは。いとおかしく侍る。こはたれかよ

みたるにか侍るらん。こゝろにておもひたまふるもの

十一番

左勝

成仲宿禰

あふせたに涙の川にあらませはみくつとなると歎かきまし

右

政平朝臣

よしさらは異人かとてうちとけて戀にやつれて面變りせり
左よろしくみえ侍り。右もとよりうるはしくおもはね
はこそはあはさりけめ。いはんややつれたらんかたち
をみて。こととはすあらんこと。けにともおほえねは左
勝とすへし。

十二番

左

參 河

逢事の形見と思へは忍ふ故にぬれぬる袖をえこそしほらね

右勝

左京大夫入道

あふ事のいつともしらぬ戀草やまつに變らぬ常盤なるらん
左ぬるゝ袖をあふまのかたみとおもはんには。いかゝ
つれなき人のかたみとはいひもなしてん。右めつらし
くすかたもやさしくきこゆれは。もともかち侍りなん。
抑たひゝのおほせを。さのみやはいなふねそとで。さ
しもえぬことを申侍る。春の田のかへすゝおそれ侍
れと。あきの鷹のちきりをたかへたてまつらしとて。御
目よりほかにはちらさせ給はてを。

群書類從卷第百八十六

和歌部四十一 歌合七

左衛門督實國卿家歌合

嘉應二年五月廿九日講之

題

立春

更衣

九月盡

歲暮

後朝戀

祝

歌人

左

大納言隆季

左衛門督實國

左兵衛督成範

前少將公重

前大進清輔

左少將有房

前少納言資隆

右馬權頭隆信

權禰宜重保

前右馬助敦賴

講師

右京權大夫賴政

讀師

右馬權頭隆信

右

刑部卿重家

前左京權大夫師光

前皇后宮亮賴輔

右京權大夫賴政

勘解由次官親家

前中宮大進賴保

中務少輔定長

片岡禰宜政平

俊惠法師

顯昭法師

判者

前太皇太后宮大進清輔

一番

左將

立春

隆季

人はみなふりゆく物をけふといへは誰ためなれや新しき年

右

重家

老の波立かさなれるけふしもあれなと若水を汲はしめけん

左右の歌よみあけて後。をのくなむあるへきよし申

せは。人々左の歌させる難はなれと。すゑの句のあた

らしきとしや。こゝろゆかす侍らん。右はさせる所は侍

られ共けにとはきこゆれと。左の一番はいとまけぬこ

となれば持とさため申つ。

二番

左勝

實國

今日こそは春はきにけれふしのねの煙とみるや霞なるらん

右

師光

一歳ををくり迎ふる夜のほとはいづくに有て今朝かへる覽

人々云人あるににたれと。いつくにありてけさかへる

らんとある心えす。冬と春との行かふ程にはたえまや

あるへき。又いつくにありてといへるも。なにゝかあら

んと覺ゆ。左はこゝろえぬ事はなしとあれば勝にこそは。

三番

左持

成 範

めつらしき春のはしめのしるしとて山も霞の衣きてけり

右

頼 輔

春たつと水のおもにぞ聞そむるかけひの氷とくるやま里

いつれもなたらかなり。

四番

左

公 重

賤の宿にたてならへたる門松にしるくそ見ゆる千よの初春

右勝

頼 政

めつらしき春にいつしかうちとけてまつ物いふは雪の下水

左すゑあしくも聞えぬを。かと松にといやしきやうに

きこゆと申さるめり。右おかしといひあはれたるを。水

ものいふといはん事やいかゝと申せば。こそにつきて

いはるゝにこそなとてかと侍れは。右勝。

五番

左持

清 輔

いつしかと春のしるしの見ゆる哉三輪の杉原打霞つゝ

右

俊 惠

春のくる所はわかしものゆへに朝のはらのまつかすむらん

右あしたの原の先かすむらんと有は。ほかよりもとく

かすむ所にや。又わかしものゆへなとあるも。やり句と

てよからぬ事になと申しかと。それはなとてか。又あし

たのまつかすむによせたる事こそはなと申されしかは。

我歌にある番。それほとかく申きて持にて侍るや。

六番

左

有 房

春日たつはしめと人につけかほにいつしか霞む朝またき哉

右勝

親 宗

津の國のあしまの氷とけにけりこやたつ春の始成らん

七番

左持

資 隆

水の面に昨日も吹し風なれと春たつけふそ氷をはとく

右

頼 保

いつしかとたなひく山の霞かなけふをは春と誰かをしへし

左歌心おかしくすかたもあしく侍らす。右させる心も

なく又誰かをしへしといへるわたりも。心よくもきこ

えねとも。人々おなし程の歌とのみ申さるれば。何れと

も申さゝりき。

八番

左勝

隆 信

あふ坂の關のし水のうす氷とくるや春のこゆるなるらん

右

定 長

思ひやる程たにとをき東路をよのまにいかて春のきぬらん

左歌おかしく侍り。人々もさ申さるゝ。

九番

左持

重 保

今朝よりや春はのとわる春風に氷のはしのたえはしむらん

右

政 平

いつしかと霞わたれはわたつ海の浪のうへにも春立にけり
左歌橋とはかれよりこれにわたる物をそいふへきに。
ひたちこにほれらんをはいひかたくや。又氷の橋もき
ためたる事のやうにきこゆと人々申さる。ある事とき
こゆ。右心えぬ事なしとて持ぬ。

十番

左勝

敦 頼

さゝ波や志賀のわたりの霞めるは今朝山こえに春や立らん

右

顯 昭

いかなれは霞こめたる空をしも春のしるしといひ初めけん
左かすみ。あしき方さまに霞たりと申さるゝ人もあり
しかとも。とかともおほえすと申人もありしかは勝へ
きにやとて。

一番

左持

隆 季

おほつかな月の都にすむ人もあまの羽衣けさやかふらん

右

重 家

櫻色の衣をかへて卯の花のしらかさねきるけふにも有哉
左月の都はさにこそは更衣にてはなけれ。右ことなる
ことなけれとも。更衣にてはあめれば。勝へしと侍りし
かともすむ人もあまのは衣かへんといへれば。しの字
衣かへの心は侍と申しかとなる持になりにき。

二番

左

實 國

おもひなく花色衣ぬくはかりそめし心のまつかはれかし

右勝

師 光

櫻色の衣をかへて卯の花そおりにあへるしらかさね哉
左歌勝よし人々申あはれたれと。なを右めつらしくや
とて勝と定てき。

三番

左

成 範

さくら色にそめし衣をぬきかへて散にし時の心ちこそすれ

右勝

頼 輔

夏衣きれば心もかはりけり春はいとひし風そまたるゝ
左右共におかしくさためられしをひか事にや。後拾遺
に和泉式部歌に。櫻色にそめし衣をぬきかへて山ほと
ときすけふよりそまつといふ歌侍やうにおほゆるは。
なを初の句はいかゝ申しかは左右なしとてまけにき。

四番

左持

公 重

ぬきかふる蟬の羽衣うすければ夏は來たれと涼かりけり
右
今日やさはうの花色のしらかさね春のつゝしに引かへつ覽
左はなたらかにきこゆ。右はおもしろしとてよき持と
す。

五番

左

清 輔

卯の花もまたさかぬまの白妙はけふ立きたる衣なりけり

右勝

俊 惠

立かへり春やうらみんいつしかとけさぬきかふる花の袂を
右立かへりなむと春思ふ事あれば。勝とそみ給ふる。

六番

左勝

有房

右

親家

いつしかとかふる袂のすゝしきは春の別にたへぬなりけり
花の色に衣をそめてきたりせは何か袂をかへうからまし
左歌おかしとて勝へきよし人々申さる。

七番

左

資隆

せみの羽のうすき袂に成にけり衣に夏やたへぬあるらん

右勝

頼保

花の色にこそめの衣をしなから猶ぬきかへつうすき袂に
くれなゐにこそめとこそよみきたれ。花の色にはいま
たきかすといはるゝ人も侍れとも。左歌後拾遺の秋の
初の歌に。うちつけに袂すゝしく覺ゆるは衣に秋はき
たるなりけりといへる歌侍れは。ふるき事にたるも。
たひゝなれはいかゝとて右勝ぬ。

八番

左勝

隆信

衣をは一重にかふるけふもなを春のおしさは重ねてそ思ふ
右 定長

夏衣いそく中にもわれはたゝ散にし花そ面影にたつ

左なたらかにきこゆ。かさねて思ふなとあるもゆへあり。右むけにたゝ事なり。こしの五文字もてつゝに聞ゆとて負ぬ。

九番

左

重保

今日よりははつ卯の花のしらかさね櫻のすそに引かへて鳧

右勝

政平

こゝろさへけふはかはりぬ夏ころも山郭公昨日まちきや
左すそにひきかふるみゝに立てきこゆ。たもと袖なと
とそ常の事なれはさかさまなりと定らるゝ。思給ふる
まゝに忠臣の歌には數もやあらん。更衣にはさまてい
そくへしとも覺えず。しかいひて右歌心あればよき勝
に侍めり。

十番

左持

敦頼

けふこそは花の袂を立かへて春にわかるゝこひころもきん
右 顯昭

あかなくに花の袂をぬきかへてをりしらぬなは今日や立へき
左右共におなしとて持になりぬ。

一番 九月盡

左

大納言

身の上は秋はてゝのみわくれ共秋はつる身の秋はあかなく
右勝 刑部卿

これもまた同じ日數に暮ぬれば長月の名もかひなかりけり
左歌すゑかしきまましきやうなり。右歌はおかしとてか
たよりに申されしかは爲勝。

二番

左持

左衛門督

くれゆくをおしむにつくる心こそ秋の今宵のならひ也けれ

右

前左京權大夫

虫の音も花の匂ひもあすよりはかれゝゝらん事をしそ思ふ
左右おかしくきこゆ。右はむしのねも花の比もあすよ

りはかれ／＼と侍事もよろしからず。かきこそたゆへ
けれと人々申しかと。ゆへはさもあれとも 十月初ころ。
霜かれのこりたる花の下。虫のねおり／＼きこえすや
はある。心ほそくこそよまれたれとて 持ときためられ
き。

三番

左

しかさけひ山も嵐にむせひつゝ秋のおはりは悲しかりけり

右勝

左兵衛督
前皇太后宮亮

年をへておしむ心のつきせぬに今日計なる秋をなさはや
左しかさけひなとある 五文字よからすと。定あはれた
るをこれとはと詩の心に詩なとをよむには。さのみとそ
と申しかとも。山もあらしにむせひなとあるも心えす。
あらしのむせふへき山は。いかゝはせんと 思給ふるう
ちに。右歌もあしからねとさは勝にこそはとてやみに
き。

四番

左

前少將

しかはかく暮ゆく秋を惜め共野にも山にもとまりやはする

右勝

右京權大夫

秋にこそ今夜別め木葉さへとまらぬ音を聞そかなしき
ともにおなしき歌なれと右はいますこし心ありと。人
人侍りしかは。

五番

左

前大進

いつ方を秋のとまりと尋まし紅葉の 船はちり／＼に行

右勝

大矢君

今日こそは秋の哀ななめきて心つくしのはてはありなし
左あしからすと侍る人もありしかとも。ちり／＼にゆ
く程も。わうはせてきこゆるうちに。右歌とゝろかにい
ひくたして。心つくしのはてはなと侍もおかしければ
勝へし。

六番

左

左少將

鳴虫もこゑよりは行われはかり秋をおしめる物はなき哉

右勝

親家

くれて行秋のとまりを尋ぬれはおしむ心のうちにそ有ける
右歌すかた心うちかなひていとおかしく。おしむ心の
うちもけにいはまほしき事なりと思給ふるうちに。人
人もさ申しかはかつと申き。

七番

左

前少納言

いつ方へ秋の行らんかくはかりおしむ心のききにとまらて

右勝

前中宮大進

けふまてと思はぬ時のくれにたに秋の哀れはいかゝ悲しき
共におかしければ 持にてやと申しを。なを右はせちな
る所ある。勝へしと人々申されしかはかちにて。

八番

左

右馬權頭

けふのみとなかめぬ萩の風たにもたゝなる物か秋の夕くれ

右勝

中務少輔

行秋をおしむにさよのふけぬれは袂より社しくれそめけれ

これも左右ともにおかしく見給ふるに。右はたもとに
しくれそめたるめつらしき詞なるうへに。姿ゆうにき
こゆるなと一方の申あはれたれは。

九番

左

權禰宜

くれて行秋はおもひや虫のねもなかぬ袂に露そこほるゝ

右勝

片岡禰宜

長月はなのみ也けり暮はつるけふのおしきは春にかはらす

虫のねもきかぬたもとはいかにそや。我たまくらの下
に鳴なりとよめるも。ゆへをいひて後にいへはこそお
かし。たれゝもさやうにおもはれたり。右はしたゝか
によまれて侍り。すゑの句そいましはし思へかりける。
されと難にはあらねは勝へし。

十番

左勝

前馬助

白露を秋の形見とみるへきにあすは霜にやをきかはりなん

右

亮 君

わたつ海の手向は何そかへる秋もみちの山のぬさは思はし

判失

一番 歳暮

左勝

大納言

年の内にしめをく春のわか水を何れの里の板井なるらん

右

刑部卿

歌欠

左はあしくあらず。右はつねにいひふるせる事也とそ
たれも申されしかは。負になりぬ。

二番

左勝

左衛門督

身の上にかさなる年をこゆるきの急くや何のいさみ成らん

右

前左京權大夫

すきて行すかたもみゆる年ならは後るゝけふは眺めましやは

右すかたみへはこそ行方もいますこしななめられめ。
心得ぬとてまけぬ。

三番

左勝

左兵衛督

明はてはまたかへるへき年なれと暮行けふは猶そかなしき

右

前皇太后宮亮

暮て行年の惜さはならひかと老をはいはぬ人にとはましや
左ことはりにいはれて侍り。右もあしからねとなを左
勝にてと人々申されき。

四番

左勝

前少將

くれて行年を何ゆへいとはまし我身につもる老とならずは

右

右京權大夫

をのかしゝしつの門松もてきはくたつへき春や近く成らん

左あり事ときこゆ。すかたもなたらかなり。右させる事
なくてすかたもととりて侍り。

五番

左勝

前大進

行年に言つけやらんいつしかとまつ人ありと人につけなん

右

俊 惠

行年にたちかはらんと春かすみいつくに今夜待あかすらん

左歌との字おほかりと申さるゝ人もありしかと。多くは心をかしと侍りしは。まことにおなし文字おほかる歌みな勝たる例あれば人々の御心なりと申てき。就中右歌はらんの字二あり。やまひなるへし。

六番

左持

數ふれは一そち餘りふたつきのことそともなく暮にける哉

右

親宗

淺ましやこよみの奥を今日見れはくたりにも成にける哉一そちあまり二つきいかゝと。又こよみのおくも。むけにたゝ事とも也とて持になりぬ。

七番

左持

前少納言

程もなく月日の過てくれに鳧年とはけにそいふへかりける

右

前中宮大進

年くれてふり行事をなけく哉あたらしからぬ我身ならねと左心はおかしきを。ふるくあるやうにおほえなから。人入申さるゝにつきて思ふば。古今集にとゝめあへすむへもとしとはいはれけりしかもつれなく過るよはひかと侍る歌にやと申しかは。なりたゝ。ひとしけれとこそ歌の肝心也とて。右歌もあたらしからぬと侍あたりも。けにともおほへねはとて持になりにき。

八番

左持

右馬權頭

いかなれは惜む日數はかひなくて身にのみ年の立とまる覽
右
中務少輔

月も日も流れ／＼てあすか川けふとなりてや身に淀みなん
右月も日もなかれ／＼と侍わたり。いかにそやおほゆるとてまけぬ。

九番

左

權禰宜

何となくよそにやけふを惜まゝし身に積られて年の暮すは

右持

政平

いつくにも老せぬ門をたてたらはあけむ年をも厭はさらまし
右たいのみなり。左ふるき心なるうへに。結句の詞よからすとてまけにき。

十番

左持

前馬助

のこりありしその昔たに暮て行年を惜まぬ年はなかりき

右

亮君

暮ゆけとあくれはやかて立かへる年のよかれを何歎くらん
左歌はうた合の歌とそ覺ぬ。おいを積しこそ心ならずや。ふるくもかくそ申たる。但右はすかたあしくはあらねと。よかれ心得す。こもりの夜とてなく侍にやはある。夜かれといはむ事いかゝとて負に定められしにや。

一番 後朝戀

左持

隆季

波の上に夜すからむかふ友舟のあしたの浦は出そわつらふ

右

重家

命をはあふにかへむといひ／＼て今朝は千歳を契へしやは
左あしたの浦そ。おほつかなけれと。侍にこそあらめ。
右きもいひてむとおほゆれは然とそ見給れとも。左勝

とのみいひあはれは。かつへきにや。

二番

左勝

實 國

あひ初て又何事を思はましあけてかへらぬ習なりせは

右

師 光

はかなしやさらぬ別のあるものをけさ歸るさにおつる涙よ

左おかしくきこゆ。右さらぬ別よしなしとてまけぬ。

三番

左

成 範

うらみこし程たに有をから衣けさより袖のなとや露けき

右勝

頼 輔

つらかりし恨もませて玉章に戀しとのみや今朝そかきつる

左歌からはあしからね共。けさより袖のなをやつゆけ

きと侍。すきにし方まさりけるにやとおほゆ。けさそな

とそあるへき。右おかしとて人々勝おもはれたり。

四番

左持

公 重

逢見てもあはぬ思のつきせねは今朝よりいと、物を社思へ

右

頼 政

あさまたき風吹野への葛の葉もかへるはかくや露はこほる、

左右共におかしきさかりいとゝなと侍る。かくこそい

はまほしけれ。

五番

左勝

清 輔

むかしにも今朝の思はまさる哉つらくて人ははつへかり鳧

右

俊 惠

あけぬ共歸らぬ物としらすへく我やためしに今朝はならまし

右歌あしくも侍らぬを人々左すへてすこしおかし勝と

あれは。いなみ申へきにもあらず。

六番

左

有 房

これは又なをしめせん今のまは移り香のみそ形見也ける

右勝

親 宗

玉つさはかへる儘にそ急かるゝ猶時のまもおほつかなさ

右歌けにある事ときこゆ。

七番

左

資 隆

古の人のしわさもあらためてあくとも今はかへらすもかな

右

頼 保

命あらは猶このくれも待へきにけさの情のかはらすもかな

左歌人のしわさ何事にかとて心ゆかすけに思はれたり。

右はおかしといひあはれたりしかとも。はしめに命あ

らはといひて。するにはしぬへきよしそあらまほしき。

かゝらすもかなと侍る。たかひたるやうに覺しかと。満

座おかしといはれしかは申も出てやみにき。

八番

左勝

隆 信

さらに又今朝ははしむる思ひ哉あはても戀の年はへにしを

右

定 長

なれそめてあかぬ夜とこそ思へ唯しらぬにたにも通ふ心を

右後朝の心なし。日來月來あへるやうなりとてまけぬ。

九番

左

重保

したひものとくるあしたは中々にきへかへらるゝ道芝の露

右勝

政平

みちしはの露とそ今朝は消なん暮を頼まぬかへさ也せは
左右おなしくつゆにはよりたれと。右今すこしたまし

ひあるやうに。人々思はれたるにや。

十番

左持

敦頼

きぬ／＼のありつる袖をかへす哉又ねの夢に君や見ゆると

右

顯昭

今朝そしるあはぬよとこにとまりある身に従はぬ心うれしと

又ねの夢ちかく仁和寺の歌なりと申さるゝ人々ありし
かと。けふたゝはりしはもりのほとこの事はなと申さる

る人もありしうちに。右歌はともかくもさためなくて
持なめりと侍りしかは。さてやみにき。

一番

祝

左持

隆季

かみあけやかみのしるしにあふ人の契れる年を君そあらそふ

右

重家

君か代にあまの羽衣をりきつゝいくつの石をなてつくす覽

此かみあけの歌たれもしらす。右もへちの事なければ
持にてこそ。

二番

左持

實國

君か代はしたつ岩ねのかやは□しるしかへ□百かへり迄

右

師光

千々へてのやそのしまりのさゝれ石を君か千歳の數に比へむ

左右共にあしくもあらず。持にてや侍るへからむ。

三番

左勝

成範

君か代は神そかそへむ佳吉の濱のまさこそ十かつにして

右

頼輔

鶴龜のよはひをつきてくらふとも猶君か代の久しかるへき

左心たくみにすかたうるはし。右つるかめの歸つきか
たくやなと申さるゝ人あるめればまけぬ。

四番

左

公重

君か代は山のしつくの年をへておくらに石のなかくほむ迄

右勝

頼政

君か代はなからの橋を千度迄つくりかへても猶やふりなん

左のなかくほむまでとある。みゝにたつと侍めり。右は
さる事なしとて勝へしとそ人々も。

五番

左持

清輔

君をいはふ心のあかすな□千代をは物の數とやは思ふ

右

俊恵

萬代と君をいはへは春日やま山ひこさへそ聲はあはする

右よるつ代と山こそよはゝ又きみを人のよはらんこそ。

けにともきこへね。萬代とはいのりてん。いのるよはふ
といはふへきにやとおほへしと。かやうにとかむる人

も侍らざりしかは。われとはいかゝと思て。申いたさて
やみにき。

六番

左

八千代へて白玉椿さてもあらし君か爲にやかけをかふらん

右勝

有房親宗

君か代はやつのしほちに立波の數や千歳のためしなるらん

左歌は千とせに色をあらたむる物なるを。やち代へは

さてもあるへくといはれたるおほつかなし。君かため

にやかけをかふらんといへるも。けにともおほえすと

七番

左

龜の尾のいはねにおふる小松原をかよりことにみゆる千代哉

右勝

資隆頼保

千とせふる鶴のかひこもかへ□うら山ほととの君か御代哉

左歌のさためなくて。たゝ右めつらしと。くちく〜に侍

りしかは無左右二勝と申へき。

八番

左

限なきためしとみゆる君か代の數にはとらし千代も八千代も

右勝

隆信定長

春日山おひそふ松は君かためいく千とせ共かきらさりけり

當氏の家の歌合は。春日山とよみてむことをは。とかく

いふましとて右勝。

九番

左

重保

君か代はあまてる神の宮うつしうつしかさねて千度ふる迄

右勝

政平

君そなを雲のうへにてくもりなき千歳の秋の月はみるへき

わつらはしき事にかゝりぬる歌は可レ被レドレ不レ重。

十番

左

敦頼

歌關

右

顯昭

歌關

判關

住吉社歌合嘉應二年十月九日

題

社頭月

旅宿時雨

述懷

作者

左

正二位藤原朝臣實定

從二位行權大納言藤原朝臣實房

大法師俊惠

散位從四位上藤原朝臣清輔

正三位行左兵衛督藤原朝臣成範

從三位行左近衛權中將藤原朝臣實家

大皇太后宮小侍從

正四位下行內藏頭兼大皇太后宮亮平朝臣經盛

散位正四位下藤原朝臣公重

女御家兵衛佐元二條院參河內侍

女御家兵衛督

正四位下行中宮亮藤原朝臣季經

禰宜從四位上賀茂政平

正五位下行左馬權頭兼淡路守平朝臣經正

攝政家卿

從五位下守刑部大輔平朝臣廣盛

前齋宮大輔

散位從五位下藤原朝臣伊綱

大法師祐盛

從五位下行皇后宮權大進藤原朝臣邦輔

駿河權守從五位下藤原朝臣朝宗
飛驒守正六位上源朝臣宗長元通清
前齋宮中納言
法眼和尚位靜賢
沙彌寂念

右

正三位行皇太后宮大夫兼右京大夫藤原俊成

從四位上行右京權大夫源朝臣賴政

正三位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣實國

參議從三位行左大辨勘解由長官藤原朝臣實綱

散位從四位下藤原朝臣盛方

散位從五位上藤原朝臣敦賴

正四位下行右近衛權中將藤原朝臣實守

從四位上藤原朝臣賴輔

法眼和尚位圓實

正四位下行左近衛權少將藤原朝臣脩範

正四位下行右近衛權少將源朝臣通親

從五位上行右馬權頭藤原朝臣隆信

散位從五位上藤原朝臣親重

從五位下行隱岐守源朝臣仲綱

散位從五位上源朝臣季廣

大法師智經

從五位下行中務少輔藤原朝臣定長

散位從五位下藤原朝臣季定

散位從五位下藤原朝臣憲盛

前大政大臣家堀川

散位從五位下藤原朝臣懷綱

正六位上藤原朝臣憲經

沙彌素覺

沙彌寂超

前右大臣家輔

讀者

講師

左 從五位下行皇后宮權大進藤原朝臣邦輔

右 駿河權守從五位下藤原朝臣朝宗

判者

正三位行皇太后宮大夫兼右京大夫藤原朝臣俊成

一番 社頭月

左勝

實定卿

ふりにける松ものいはゝとひてまし昔もかくや住の江の月

右

俊成卿

こゝろなき心もなほそつきはつる月さへすめる住よしの濱

左歌むかしもかくや住の江の月といへる。こゝろすか

たいとおかしくも侍かな。かみの句はかやうの心きゝなれたるやうなれと。さしてかくいへるは覺え侍らぬうへに。ふりにけるとをき松ものいはゝなといへる心。いとよろしくそ覺え侍。

右歌おまへのはまの月に。をろかなる心もつきはて。こ

とはもをよはす覺えけるはかりにや。左歌ことによろし。かつとすへし。

二番

左勝

實房卿

庭火たくあたりをぬるみ置霜のとけぬや月の光なるらん

右

頼政朝臣

ひとすちにあふくこゝろを住吉の空行月に分そやらるゝ

左歌こゝろめつらしく。ことばいひしれりとみゆ。

右歌嘆仰心なるに。月をみてわけやりけん心はへ。また

いとおかしきこゆれと。なをとけぬや月のなといへるすかた。歌合のうたと見え侍は。以て左爲勝。

三番

左勝

俊惠法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はをき梟

右

實國卿

住吉のまつゆきあひの月影は雲まにいつる心ちこそすれ

左右おなしく松のゆきあひにおもひよれる心。ともに

おかしくは見ゆ。雲間にいつる。けにきこそはときこゆれと。左のひまよりもといへるもの字。ふかくさかひに

いれるにや。よりて左のかちとす。

四番

左勝

清輔朝臣

月影はさえにけらしな神垣やよるへの水につらゝるまで

右

實綱卿

月かけにかなつるきれか心まで雪をめぐらす心ちこそすれ

左歌よるへの水につらゝるまでなといへるもしつゝ

き。よろしくはみゆるを。おほつかなきことゝもは侍める。よるへの水といふことは。源氏のものかたりにそ。

賀茂のまつりの日歌に。さもこそはよるへのみつも見

えさらめとみたまへし。さらてはふるき歌にもみをよひ侍らす。このみつおろ／＼うけたまはるに。たとへはいつれのやしるにも侍らめ。まつ當社のおまへの月には。うみのおもてこほりをみかき。濱のまさこそたまをしけらむをはきて。よるへの水はかりむかひて。月はさえにけらしなと思はむことやいかゝ。

右歌まひのすかたをいふに。廻雪といふことのあるを。いま月の光によせて。ゆきをめくらすに見ゆらむ心。いとおかしくみゆるを。かなつるきねかといへるわたりや。よまぬことにはあらねと。ことに優にしもやきこえさらん。左はおほつかなきことゝもそ侍れと。歌のすかたよろしく見ゆ。なをかつとや申へからん。

五番

左勝

ゆふかくるこゝちこそすれすみよしの松の梢をてらす月影

右

成範卿
盛方朝臣

すみよしの松の梢をみわたせは今宵そかくる月のしらゆふ左右の月の歌。ともに松の梢にしらゆふをかけたる心。たかひにおかしくみゆれと。右歌こよひそとわける事はよしなくやきこゆ。猶左はもしつゝきうるはしく見ゆれは又かつとすへし。

六番

左持

住吉の松のむら立風さえてしきつの波にやとる月かけ

右

實家卿
藤原敦頼

なには江の空にやとれる月をみてまたすみのほるわか心哉

左歌しきつの波にやとる月影なといへる。すかたよろしき歌といひつへし。

右歌そらにやとる月をみて。またすみのほるらん。こゝろふかく思ひいれたりとは見ゆるを。なには江といふに住吉もこもるらめと。社頭の心やすこし荒涼にきこゆらむ。左又歌さまは歌合の歌と見えな。さすかにことなるよせなきにやあらん。よりて持とす。

七番

左持

住吉とあとたれそめしそのかみに月やかはらぬ今宵成らん

右

小侍從
實守朝臣

あきらけき神の心やたくふらんほかよりもけにすめる月哉左あとたれそめしそのかみになといへる。よろしくはみゆるを。下の句のこと葉やいひおほせられぬやうにきこゆらむ。右こゝろことは。社頭月にあひかなひては聞ゆるを。ほかよりもけにといへるこしのくのこと葉や。いますこしおもはまほしく侍らん。よりてかれこれをなすらふるに。又持と見えたり。

八番

左勝

住吉の松吹風の音たえてうらさひしくもすめる月かな

右

經盛朝臣
頼輔朝臣

やはらくる光や月にそへつらんしめのうちには照まさり覺左歌すかた言葉いひしりて。さひてこそ見え侍れ。右歌のこゝろ。又社頭の月のほひなり。たゝし光や月に

そへつらんといへるわたり。いさゝかたらぬところある心ちやすらん。左なを歌さまたちまさりて聞ゆ。よりて爲勝。

九番

左

公重朝臣

すみの江のこほりと見ゆる月影にとけやしぬらん神の心も

右勝

圓實

住よしのおまへの岸の松の葉もかすかくれなくみゆる月影

左こほりと見ゆるといひてとけやしぬらんといへる言葉は。よせあるやうなれと。寒夜之月江上之氷と見えは。むすひやすらんなどやうにそいはまほしき。春朝之風東岸之氷ともいはし。とけやしぬらんとあるへからむとそおもふたまふる。

右おまへの岸の松の葉もといへる。かやうのことによせて。月のあかきよしよむこと。さき／＼もある心ちするやうにそ聞ゆることなれと。月あかく侍めれば。右のかちとこそは申へけれ。

十番

左持

兵衛佐

松もみなしらゆふかけてすみよしの月の光もかみさひに梟

右

脩範朝臣

かたそきの行あはぬまよりもる月をさえぬ霜とや神はみる覽左歌月の光も神さひにけりといへる。すかたよろしくみゆ。

右歌又さえぬ霜とや神はみるらんといへる。もしつゝきおかしくは聞ゆる。月をもさゆるものとこそはよみ

ならはしたれ。たゞしまさしきしもにならふるとき。さえさるへしとにや。なをすこしはおほつかなくはおもふたまふれと。歌のすかたいつれもよろしくみゆ。持とすへし。

十一番

左持

兵衛督

住吉の神さひにける玉垣をみかくは月の光なりけり

右

通親朝臣

くまもなくさえ行月にみかゝれて光をそふるあけの玉垣左右の月の光。ともにたまかきをみかけるにとりて。みきのすゑの句。ちかく聞なれたるこゝちし侍に。左又けるけりといへり。よりて持とす。

十二番

左持

季經朝臣

すみのほる月の光にみかゝれて曇も見えぬ玉つしまひめ

右

藤原隆信

住吉の松の梢に入月はしつえのひまそ猶またれける左歌月の光たまつしまなみかける心。おかしくはみゆるを。くもりもみえす玉つしまとまでにてそあらまほしき。はてのふたもしは。くもりもみえすといはむには彈あらんや。

右歌こゝろあらむとはよめるやうなれと。松の梢にいる月はといへる。光のいるなるへしとはみゆれと。山端などの心ちやすらん。たゞしこれは當社月。左も玉つ嶋の明神をかけたてまつれり。いつれもめてたき心なれは。勝負はゝかりあり。又猶持とす。

十三番

左

住吉のあまくだります松の上に空よりかぐる月のしらゆふ

右勝

禰宜政平
藤原親重

しめのうちにしらゆふかけぬ隙そなき月も手向の心有けり

左歌そらよりかくるなといへるは。おかしきやうなれ
と。まつのうへにあまくだりましけむこといかう。おほ

つかなし。

右歌月もたむけのといへる。心すかたよろしくみゆ。よ
りて勝とす。

十四番

左持

平經正

ゆきもあはぬちきのかたそきもる月を霜とや神の思ひます覽

右

源仲綱

白妙の雪かとみれは風さえて月そしくるゝすみよしの松

左すかたは優に見ゆるを。ちきといへることある所の
歌合に。基俊のきみといひし判者にて。ゆるさすそいひ

て侍し。をはりの句も今すこしおもふへくやとみゆ。
右このまの月の光を。ゆきのしくれかゝるかとおもへ

るこゝろはおかしきを。月そしくるゝといへる言葉や
いかゝと聞ゆ。はしめの白妙のとをけるも猶思ふへし

やとみゆれは。持と申へし。

十五番

左勝

卿

住よしの松にとはゝや老かよに今宵はかりの月はみきやと

右

源季廣

すみよしの浦さえわたる月みれは松の木かけそ曇り也ける

左歌めつらしきふしにはあらねと。こよひはかりのな
といへる。すかたよろしといひつへし。

右歌月のあかきよしをよむに。そのものはかりそくも
りなりけるなといふこと。常のことなるうへに。松の木

かけをくもりといふならは。すくなからすこそ聞ゆれ。
よりて左の勝とす。

十六番

左持

平廣盛

住吉の松の梢にふる雪のつもりまさると見ゆる月影

右

智經法師

すみよしの濱松か枝をこす波に月のしらゆふかけそへて鳧
左右ともに。ことなるとかなくゆうにきこゆ。持とすへ

し。

十七番

左持

大輔

月さゆるつもりのうらのみつかきは降しく雪に色も變らす

右

藤原定長

あらし吹松の梢にきり晴て神も心やすみの江の月
左歌つもりのうらさえて。ふりしく雪かとみゆるに。み

つかきの色のかくれぬにて。月の光とはしるといへる
なるへしとはみゆれと。言葉のすこしかなはぬにやあ

らむ。たゝみつかきは雪ふれとも色かはらすといへる
やうにそ見えたるやいかう。

右歌心すかたよろしともいひつへきを。あらしふくと
をける。濱松などにはあらしとばいふへからす。むへ山

風をあらしといふらんと いふ歌にてしるへき事也。た
たし歌のすかたよろしきにたり。又爲レ持。

十八番

左持

藤原伊綱

てる月もをのか光やたむくらんしらゆふかくる 住吉の松

右

藤原季定

かたそきのゆきあはぬまよりもる月は霜に霜をや置重ぬ覽

左歌優にはみゆるを。をのかのことは。ことにあるへし
ともや覺えさらん。

右霜にしもをやなといへる。すかたおかしくはみゆ。た

たしかたそきのゆきあはぬことは。いまはしめてよむ
へからさるよし。心に思ふたまふる所ありて。よりて猶

持とす。

十九番

左

祐盛法師

さえわたる月の光やすみよしの松の葉しのきふれるしら雪

右勝

藤原憲盛

月のすむなにはの浦のけしきには神の心もたへすや有らん
左歌すかたもしつゝきよろしくは見ゆるを。ことに思

ひいれる所なく。たゝいひわたしたるやうにやあらん。
右歌こゝろありてはみゆるを。心あらん人にみせはや

つのくにのなとこそいひたれ。なにはの浦に人のこゝ
ろたへすといひて。ことのあらむやうにやきこゆらん。

たゝし神のこゝろもなといへるわたり。おかしくも見
ゆ。よりて以レ右爲レ勝。

二十番

左勝

藤原邦輔

玉垣にひかりさえそふ夕月夜神にたむくるかけにや有らん

右

堀川

雲はらふあらしのみかく月にまた光をそふるあけの玉垣
左歌ゆふつくよ神にたむけたるこゝろはへもしつゝき

いとおかしきを。もち月ありあけならてとく入なむや。
くちおしく侍る。

右歌光をそふるをふしにしたる。ちかくきゝなれたる
心ちするよしさにきに申をはりぬ。なを左歌さままさる

へくや。

二十一番

左

藤原朝宗

久かたの月も光をやはらけてしめの内にはすむにやある覽

右勝

藤原懷綱

月影を雪かとみれば佳吉のあけの玉かき色もかくれす
左月も光をやはらけてなといへる。歌すかたはおかし

くみゆるを。しめのうちの月のやはらかならむ光こそ
おほつかなく。

右雪かとみればさをき。色もかくれすといひはてたる
ことはつかひ。いかにそきこゆれと。こゝろにことはゝ

いひかなへて見え侍は。右のかちとす。

二十二番

左勝

源宗長

有明の月の光もすみよしの空にしりてやあまくだりけむ
右

やはらくる光やそふる佳吉のあたりくまなし有明の月
藤原憲經

左歌すかたもしつゝきゆうにきこゆ。

右歌題の心かくよむへしとは見えたるを。光やそふるといへるあたり。いさゝかたらぬ所ある心ちす。くまなしもすこし荒涼なるやうにやあらん。左とかなくみゆ。かつとすへきにや。

二十三番

左持

中納言

すみよしのきしうつ波に照月はこかけもあかし松のむら立

右

素覺法師

年ふりて神さひにけるすみの江の岸の玉をみかく月影
左歌きしうつなみにてる月の光かへりて。松のかけもかゝやく心いとおかし。たゝしあかしといへる言葉やいかゝあらむ。かやうのことはゝよくつかひおほせつるときはよく聞ゆさ。故人も申侍し。

右歌すかたことはよろしとはみゆるを。神さひにけるといへる。すみの江のきしまてはしかるへし。玉にいたりて神さひむこといかゝ。みかくといはむため。たまもにかゝらむことはりなくやあらん。たゝし歌のすかたよろしくみゆ。持さ申へし。

二十四番

左

靜賢

あまくたる神も久しく宮ゐして月ものとかにすみよしの浦

右勝

寂超法師

神代よりたくひなしとも住よしの松やこよひの月をみる覽
左こゝろすかたいとおかしくこそ見え侍れ。たゝし神もひさしくとをき。月ものとかにといへる。兩所のもの

字こそみゝとまるやうに侍れ。

右ことにとかとすへき所なきうへに。まつやこよひのといへるすかた。いとよろしくきこゆ。よりて右のかちとす。

二十五番

左持

寂念法師

松風にふけ行月の住の江は波のよるこそたちまさりけれ

右

輔

霜ならて月もる宵やかたそきのゆきあはぬひまも神は嬉しき
左歌更行月のすみのえはといへるは。よろしく聞ゆるを。なみのよるこそといへるや。ちかきうたとともに。なみのよるこそいはまほしけれといひ。なみはかりこそよると見えしになとやうの歌とも侍を。かみの句はことなれと。これをふしとしたるはめつらしけなくやあらん。

右歌うたさまはおかしきを。かたそきのゆきあはぬ月はかりを。うれしともみそなはすへきにあらす。神明のかきりなき。八しまのほかまでこそまもりおはしませ。いはんやつもりのうら。すみよしの濱は。なみのうへまつのかけ。へたつる所あるへからす。かたそきのこともさきに申をはりぬ。たゝし歌のすかたはあしくもあらす。持なとや申へからむ。

一番 旅宿時雨

左

寂念

時雨する紅葉の錦ゆかしきにあげてをたゝむふたむらの山
右勝

佐

都にもおもひやすらむ草枕うち時雨たる夜半のね覺を
左歌あけてをたゝむふたむらの山といへる。おかしく
はきこゆれと。かの兼輔卿のうたに。ふたみの浦はあけ
てこそ見めといへるより。常のことにそなりにたる。又
ゆかしきにとをける。まこと歌のことはにはあらさる
へし。撰集には。とき／＼あれとも。歌さまにしたかひ
ゆるすときのあるにこそあれ。いふかしといふことは
なり。歌合にはまことのことはならぬことは。いはさる
なるへし。

右歌しくれはたひの道なとにふれとも。かならずしも
都にふらぬも。つねのことなれと。たゝたひのねさめを
おもひやすらふといはむも。なとかはなからむ。歌の心
もよろし。かつとすへし。

二番

左勝

なら柴の旅の庵に音つれて時雨も今そ山めぐりする
靜賢

右

寂超

旅衣うらかなしかる淺茅生によはの時雨よいかにせよとか
左右ともに。よろしくは聞ゆるにとりて。たひの庵にを
とつらむは。今少あはれにもや聞ゆらんとて。左のか
ちとす。

三番

左

中納言

横の屋の時雨の音に夢さめて都戀しきれにそぬれぬる

右勝

素覺

旅ねするのちのしはやに音つれて過るはよはの時雨也けり

左歌うたさまはゆうに聞ゆるを。みやこならすともた
ひならぬまきのやもやあらむとおほゆるうへに。すそ
のくもたらぬ所あるこゝちするにや。
右歌ことなることはなれと。よろしく聞ゆ。かつと申
へきにや。

四番

左持

源宗長

旅ねするあれたるやとの時雨には涙も共にもるにそ有ける

右

藤原憲經

契らねとさよのね覺にをとつれて時雨そ旅の友となりける
左すかたこゝろよろしくはみゆるを。たひねするとは
いへれと。あれたるやとのなといへる。旅宿としも覺え
すを聞ゆる。

右はしめにちきらねとゝをける。やともといはむため
とは見ゆれと。ことはなれたるこゝちすらむ。たゝしこ
ころありてはみゆ。持とすへし。

五番

左勝

朝宗

晴くもり時雨する夜はまつかねの枕をえこそ定めさりけれ

右

懷綱

神無月しくるゝ夜半の旅やかたもるとはなしにぬるゝ袖哉
左右ともに。歌さまはゆうに聞ゆ。たゝし右歌。やかた
のもらさらむことよくは聞ゆれと。しくるゝぬるゝ。
ことはさるへしとみゆるうへに。左猶まつかねのなと
いへるすゑさまのもしつゝきよろしくきこゆ。よりて
以レ左爲レ勝。

六番

左持

邦 輔

旅ねするこやのしのやの隙をなみもらぬ時雨にぬるゝ袖哉

右

堀 河

時雨つゝ物そかなしきわすれ草枕にむすぶきしのたひねは

左歌すかた言葉あしくはあらず。もらぬ時雨にもとそ
いはまほしき。

右わすれ草を枕にむすふらんすみよしのきしの旅ねに
こそはと。えんにはきこゆるを。かみの句にわすれ草に
よりたるよしのあらましかはとそ聞ゆる。持なとにや。

七番

左持

祐盛法師

きしちかみ旅ねのとこを打波の歸るひまにそ時雨とはしる

右

憲 盛

柴の戸をたゝくあらしの音に又時雨うちそふ旅のよはかな

左歌しくれやうちへしつるなるらんとそきこゆれと。
かへるひまにそなといへる。心ありてはみゆ。

右歌たゝくあらしのをとに又なといへる。おかしくは
きこゆるを。柴の戸時雨とをける。はしめのもしいかゝ
とみゆ。よりて持とす。

八番

左

伊 綱

時雨もるかりほにぬれて乾衣なかるのあまは取やたかへん

右持

季 定

獨ねのあはれひまなき旅衣時雨はれても袖はぬれけり
左歌のすかたはいとおかしきを。時雨にころもたかへ

ん事やいかゝ。

右あはれひまなきとをきて。しくれはれてもといへる
心。いとよろしくこそ待めれ。右のかちと見えたり。

九番

左持

大 輔

うらさむくしくるゝ夜半の旅衣岸のはにふにいたく句ひぬ

右

定 長

思へたゝ都のうちのね覺たにしくるゝ空はあはれならすや

左歌きしのはにふにいたくにほひぬといへる。すかた
こそきこゝちすれと。萬葉の風体と見えたり。

右歌こゝろはよろしきを。思へたゝとをける。たれにい
へるにかあらん。かやうのことはゝ歌のかへし。戀の歌
なとにこそつかふことなれ。左のうたつよかるへし。

十番

左持

廣 盛

草枕しくれも袖をぬらしけり都をこふるなみたならねと

右

智經法師

かり庵さすならのかしはの村時雨哀れはまきの音許りかは

左右ともに。すかたことはゝゆうにみゆるを。左はしく
れの袖ぬらすことを。はしめてしれるやうなり。右はま
きの音のみあはれあるものと思ひける心ちす。より
て持とす。

十一番

左持

卿

かりの庵はそゝく時雨もとまらねは露分衣ほしそかねつる

右

季 廣

さらぬたに旅ねの床は露けきにいかによとてうちしくる覽

左そくしくれもといひ。右いかにせよとてなといへ

る心ことは。いづれもよろしからざるにはあらぬを。右の歌の五七五。むけにつねのことくやすらかにそきこゆる。左は露わけ衣ほしわつらへる心も。今すこしはまさるへくや。

十二番

左

經 正

時雨には庵もさゝし草枕をときくとてもぬれぬ袖かは

右勝

仲 綱

玉もふくいそやか下にもる時雨旅ねの袖もしほたれよとや

左の草枕いほりもさゝしと思ひすてゝ。をと聞とてもぬれぬ袖かはといへる。いとおかしく見え侍を。右歌のたまもふくとをき。たひねの袖もしほたれよとやといへるすかたもしつゝき。いとあはれにも侍かな。よりて

右の歌なをかつと申へし。

十三番

左

政 平

しくれもる旅ねの床は花そめの袂そさきにまつかへりける

右勝

親 重

はなれゆく都を思ふひとりねの涙をさそふはつしくれ哉

左歌すかたおかしくはみゆ。たもとそさきにといへるや。みやこへかへるさのたひと見たるよしあらは。おかしかりぬへくそきこゆる。

右歌はなれ行とをけるより。なみたをさそふなといへる。心ことはいとよろし。右のかちと見えたり。

十四番

左

季經朝臣

心あれやかきなくらしそ初時雨またさしはてす柴のかり庵

右勝

隆 信

住吉の松かしたねのたひ枕時雨も風にきゝまかへつゝ

左またさしはてすといへるしもの句。たひの心。歌のすかた。いとおかしきを。こゝろあれやとをける。やの字こそふるくをきならはしたる心にはあらす侍めれ。これはしくれをかりていはむこゝろなるへし。

右たひ枕そ。いかにそきこゆれと。詩にもたひ枕とはつくれば。のの字なくともいかゝせん。しくれもかせにと

いへる。もしつゝきよろしきにや。よりて右のかちとす。

十五番

左

兵衛督

道芝の露分きつるたひ衣しくるゝ夜半はほしそわつらふ

右勝

通親朝臣

時雨するをといくたひね覺して草の枕にあかしかぬらむ

左のみちしは。ことなるふしもなく。又させるとかもなし。右の草のまぐらにあかしかねたる。心はおかしきを。かのいくたひはかりねさめして。ものおもふやとのひましらむらんとしへる歌は。冬の夜のおかしきたきことなひへるかおかしきなり。是は時雨するをといくたひといへるや。つゆけき草の枕にしけくまるとるめるこゝちやすらん。たゝし右猶おもひいたるにやと

見ゆ。かつと申へし。

十六番

左

兵衛佐

草枕たひねさひしき山かけにこの葉さそひて時雨ふるなり

右勝

脩範朝臣

住の江のまつかはひねを枕にて波うちそふる時雨をそきく
左のやまかけのたひね。このはさそひてといへる。すか
たよろしくはきこゆ。

右時雨をそきくといへるをはりのこと葉そ。いかにそ
みゆれと。なみうちそふるなといへるも。よろしくきこ
ゆるうへ。なをすみのえのまつのはたは。波のこゝろも
よすへくやとて。右のかちとす。

十七番

左勝

公重朝臣

今宵しもあやにくにふる時雨かなまはらにさせる柴の庵に

右

圓 實

草枕つゆけきたひのくれはとりあやにくに又しくれふる也

左右のしくれ。ともにあやにくにふれるにとりて。右歌
はくれはとりとをきて。あやにくにとつゝけたる。おか
しくはきこゆるを。つゆけき旅のといひて。くれはとり

といへるほと。おもひかけぬこゝちやすらん。左はくれ
はとりはなれたるあやは。ことなることはなけれと。ま
はらにさせるなといへるわたり。うるはしくきこゆ。よ
りて左のかちとや申へからん。

十八番

左持

經盛朝臣

なにはかた芦のまるやの旅ねには時雨は軒の雫にそしる

右

頼輔朝臣

津の國のイやこの旅ねに時雨して何かはもらむ芦の八重ふき

左右ともに。攝州芦のやの旅宿なり。たゝし。左はすか
た心とかなくはみゆるを。歌合にはおなし文字よつあ
りなと。ふるくはとかめたるおりしもあれと。のゝ字よ
つあるは。ことにとかときこえず。たゝたひねにはとを
きて。またしくれはといへる。はの字やふたつなれと。み
みとまりてきこゆらむ。右おなしくもらぬ時雨なれと。
しくれしてと置て。なにかはもらむといへるや。すこし
こととかひてきこゆらむ。しくるともなといへらはこ
そは。なにかはといはむにはかなはめとおほえ侍。いか
か。たゝしいつれもあしのやのしくれなれは。勝負きゝ
わかかたし。よりて持とす。

十九番

左勝

小侍從

草枕おなしたひねの袖に又夜半のしくれも宿はかりけり

右

實守朝臣

いほりきすやまちは過ぬ初しくれ故郷までやめくり行らん

左歌おなしたひねの袖に又といひて。よはのしくれも
宿はかりけりといへる。すかたいとおかし。

右歌もこゝろおかしくみゆるうへに。はつしくれとを
きて。ふる里までやとをけることは。よくをかれたりと
こそ見え侍る。たゝし左歌心なをよろし。かつと申へ
し。

二十番

左

實家卿

旅ねするいその苦屋の村時雨あはれを波のうちそへてけり

右勝

敦 頼

もりもあへすまたきにぬるゝ袂哉梢しくるゝ松のしたふし
左いそのとまやの時雨に。あはれをうちそふらむなみ
の聲は。けにあはれにこそおしはかられ侍。うちそへて
けりといへるをはりことはや。すこしかなはすきこゆ
らん。

右こゝろすかた又いとおかし。松のしたふし。あたらし
きことなるを。ふるくいひならはしたらむやうにきこ
ゆらんとそ思ふたまふれと。もりもあへすまたきにぬ
るゝなといへる。こそゑしくるらん松のした。けにさこ
そ侍らめと。こゝろほそきこゆ。よりてなを右のかち
とす。

二十一番

左持

成範卿

かきくもり旅ねの庵に時雨して露けさまさる草枕かな
右 盛方朝臣
まはらなる庵よりもりて村時雨おりしくならのはにそ驚
左いとなほきこゆ。

右わりなくはこゝろさして見ゆるを。いほよりも時
雨の。しけるならの葉におとろかんほとふしたらんみ
のほと。心ほそさすきてやあらん。たゝし右歌の下の句
むけに思ひいれすみゆ。はからひあはするに。持とや申
へからん。

二十二番

左

清輔朝臣

いなむしろしきつの浦の松風はもりくる折そ時雨ともしる

右勝

實綱卿

大空も都のかたをしのふらし今宵はことにうち時雨つゝ
左歌まつ風の風に時雨をまかへて。もりくるおりそ時雨
ともしるといへる。心よろしくみゆるを。このいなむし
るは。しきつの浦といはんためをけるなるへしとはみ
ゆれと。いなむしろのほんたいを思ふに。しきつのうら
にことよるへしとこそおほえ侍ね。かはそひやなきの
かけ。もしは田家などのたひねならは。おかしかるへし。
住吉の松の下には。いなむしろしくへしともおほえ侍
らぬなり。またいなむしろはかりにて。旅のこゝろある
へしともおほえぬ。いかゝ。

右歌は大空とをけるより。都の方をしのふらしなとい
へるすかた。歌合の歌といひつへし左歌うけ給ひらく
へけれと。これに過たることなくや。をして以て右爲勝。

二十三番

左勝

俊恵法師

もしほ草しきつのうらの寢覺には時雨にのみや袖はぬれける
右 實國卿
旅ねにははにふのこやの板ひさし時雨のするをさやに聞ゆる
左もしほ草しきつのうらのといへるこそ。いとおかし
く。かくそいふへかりける。末のくにしくれにのみやと
いへるも。心こと葉やすからすこそ見え侍れ。右ははに
ふのこや。時雨のなとさやかならんも。ゆへなきにはあ
らねと。左歌ことによろしよりてかつとす。

二十四番

左勝

實房卿

風の音にわきそかねまし松かねの枕にもらぬ時雨なりせは

右

頼政朝臣

旅の庵は嵐にたくふよこ時雨しはのかこひにとまらさり嵐
左歌 わきそかねまし松かねのとをきて。枕にもらぬ時
雨なりせはといへる。こゝろすかた又いとありかた
も侍かな。

右歌 ことさまことはつかひ。おかしくはみゆるを。よこ
時雨さはあることなから。優にもきこえずやあらむ。下
のくの。しはのかこひにといへるにの字も。いさゝか心
たらぬこゝちす。左尤爲勝。

二十五番

左勝

實定

うち時雨物さひしかる芹のやのこやのね覺に都こひしも

右

俊成卿

あはれにもよはにすくなる時雨哉なれもや旅の空に出つる
左歌 ものさひしかるとをき。みやここひしもなといへ
るすかた。既幽玄之境に入。よろしくこそきこえ侍れ。
右歌は判者拙歌に侍りけり。依例不能加判矣。

一番

述懐

左勝

兵衛佐

昔とて身の思ひ出はなけれとも君忍ひねそたえすなかるゝ

右

脩範朝臣

幾世しもありへん物としらぬ身はうきもつらきも何か歎かむ
左歌 身のおもひ出はなけれともなといへる。すかた優
にみゆ。心もそのゆへはしらされとも。舊主をしのへる
おもむき。あはれに侍めり。

右歌 心のたつる所いとうるはしくはみゆ。たゝし右は
さして思へる所なきを。左はなをしのへる所あり。かつ
と申へくや。

二番

左持

公重朝臣

住吉ときこゆる里にいとすはをき所なき身をやなけかん

右

圓實

すきていにし秋に後れて霜かるゝきくや我身のたくひ成覽
左右のうた。いづれもこととかなくはきこゆ。たゝし
かやうの歌。すこしは人によることあり。左歌は心くる
しきやうなから。又をろかにきこゆ。女の歌ならば。優
なるへき。

右歌は孤露のよしをうれへたるにとりて。貴種のやか
ら。しかも花の最第の心になはゝ。いよ／＼おかし
るへし。たゝしかの延久第三のみこの歌に。うへなきし
きみもなき世にとしへたるはなは我身のこゝちこそす
れといへる歌にや。かよひて侍らん。いづれも作者おほ
つかなく侍ほと。暫爲持。

三番

左持

經盛朝臣

哀とや神も思はん住の江のふかくたのみをかくる身なれは

右

頼輔朝臣

たのみつるこのひとむらの人ことに千歳をゆつれ住吉の松
左歌 ふかくたのみをなといへるわたり。よろしといひ
つへし。
右歌 このひとむらは。このたひのうた人をいへるに

や。又たゝわかひとつ家のやからにや。いかにもともに
たのむこゝろあさからす見ゆれば。又持と申へし。

四番

左

小侍従

あくかるゝ玉とみえけむ夏虫のおもひは今そ思ひしりぬる

右勝

實守朝臣

いはすとも思ひはそらに知ぬらんあまくだります住吉の神

左歌心ふかゝらんとは見えたり。たゝしこれはかの泉

式部か。さはのほたるもわか身よりといへる歌を思ひ

てよめるなるへし。さらはあくかるゝたまとほたるを

思ひけむなとやうにあらはこそ。いつみしきふか思ひ

をしるにては侍らめ。これはたまと見えけむ夏むしの

といひつれば。なつむしのおもひを思ひしるにそきこ

ゆる。さらはかのかつらのみこによみてたてまつりけ

る。身よりあまれるおもひなりけりといへるうたのこ

ころにそかなひぬへき。さてはまたあくかるゝたまと

見えけんといへることは。たかふへくや。

五番

左勝

實家卿

くらゐ山峯のさくらをかきしても人は物をや猶おもふらん

右

敦頼

有て社あらぬ姿に成もせめうしとていかゝ身をはなくへき
左すかた心いとおかし。作者おほつがなくも侍かな。就

中人はものをやなを思ふらんといへる。すかたことに
よろしくそ聞え侍れ。

右もうしとていかゝなといへる。もしつゝきよろしく

はみゆれと。猶以_レ左爲_レ勝。

六番

左

成範卿

何事をあけぬくれぬと急ぐ覽はかなき夢のよとはしるゝ

右勝

盛方朝臣

かすならぬ身をうき草と思へともなそよと共に沈む成らん

左歌世上のならひをなけき。ゆめのうちのまとひをさ

とれる。以其理しかるへし。

右歌しつむなるらんなどいへるすかたは。ことにゆう

にしもあらされと。身をうき草とをきて。なとしつむら

七番

左持

清輔朝臣

わかさかりやよいつ方へ行にけむしらぬ翁に身をば譲りて

右

實綱卿

いかなればわかひとつらの變るらん羨しきは秋のかりかね

この左右又ともによみ人によるへき歌なるへし。左心

おかしくはみゆるを。壯年之辭身去たれの人もおなし。

うらみしたふへきことなれと。さかりの時。殊爲_二聲華

容。或帶_二重職頭官。或列_二羽林蘭省。などて。ことにお

もひいてあらむ人の。わかさかりやよいつかたへなと
いへらん。いよゝおかしきこゆへきなり。されはさ
ためてさやうの人の御歌なるへし。いとおかし。右歌は

わかひとつらをいかなれはとあやしみて。うらやましきは秋のかりかねといへり。あきのかりのつらは。兄弟のついてあやまたすところは見えて侍れ。もしそのついてたかへたることなどの侍にや。しからは又いとおかし。これもよみ人おほつかなきほと。暫爲_レ持。

八番

左

俊惠法師

よの中をうみ渡りつゝ年へぬることはつもの神や助けん

右勝

實國卿

家の風我身の上にすゝしかれ神のしるしをあふくとならば
左うみわたりつゝといひて。ことはつものかみやた
すけむといへる。こゝろはおかしきを。うみわたりつゝ
といへることは。ことに庶幾せられすやきこゆらむ。
右神のしるしをあふくとならばといへる心おかしき
こゆ。以_レ右爲_レ勝。

九番

左

實房卿

いとふともなきもの故に世中の哀をさすかうちなけきつゝ

右勝

頼政朝臣

徒にとしもつもの浦におふる松そわかみのたくひ成けり
左歌ひとつのすかたなり。心もさることゝきこゆ。
右歌としもつものうらにおふるといひて。まつそわ
かみのなといへる。いとよろしくみゆ。よりて右のかち
とす。

十番

左勝

實定卿

數ふれは八歳經にけり哀れわか沈みし事はきのふと思ふに

右

俊成卿

徒にふりぬるみをも住吉のまつはさりともあはれ知らん
左歌たれの人のなにとならむとはへること侍らねと。
たゝちみる歌のおもて。心すかたみしくあはれに
も侍かな。まことによるつのこときのふけふとおほゆる
を。年つきのすぐること(き)のみこそは侍を。かそふ
れはやとせへにけりあはれわかといへるすかた。いと
しのひかたくこそ見え侍れ。

右歌かみのくかやうのこゝろつねのことに侍へし。下
の句又すこし心をやれる所あるやうにみえ侍れと。い
さゝかおもふ所ありて。判者愚老の拙歌に侍也、又依_レ例
不_レ加_レ判。たゝし神慮定在_レ左歟とそおほえ侍。

十一番

左

兵衛督

ね覺して浮世を思ひあはすれはまゝとるむ夢にかはらさり梟

右勝

通親朝臣

住の江のうきにおひたるしほれ若を波ひきたてよ神の恵に
左歌うきよを思ひあはすれはといへる。もしつゝきゆ
うにはみゆ。ことに身に思ふことなからん人は。たゝよ
のはかなきなどはかりを思はむ。しかあるへきことな
り。

右歌はすみのえのとをき。うきにおひたるなといへる。
このうらにことよれり。右のかちとすへし。

十二番

左勝

季經朝臣

ほのかにてあるかなきかに過るみや波まにまかふ蜚の漁火

右 隆 信

住よしの猶たのみこししるしありて歸る都に思ひ出もかな
左なみまにまかふあまのいさりひとへる。すかたこ
とはよろしく見ゆ。ほのかにてといへるや。いさりひ
のひとかたはいとおかし。人のよをすくるかたや。ほの
かならんこといか。

右うたさま。いてもかなといへるや。歸りなむするところ
にあることをこそ。おもひいてとはいふへけれ。かく
てはいとおひかなひてもおほえぬにや。又これはかへ
らんまゝになと思ふこゝろにや。それもこゝろみしか
きやうにきこゆ。左すかたよろしきにつきて。かつと申
へし。

十三番

左持

我もいかて世になからへて住吉の松の千とせの行末もみんな

右 政 平 親 重

たとへけん浪は我身にあらはれぬ漕行舟の跡はほかゝは
左いとありかたきこと思へるにやあらん。

右なにゝたとへむあさほらけといふ歌をおもひて。渭
濱の浪おもてにあらはれゆくことをなげきける心。お
かしくは見ゆ。ほかゝはといへるほさ。すこし荒涼にや
きこゆらん。たゝし左は祝言にこゝろさし。右はつねな
きことよれり。旨意雖懸隔勝劣可等同。

十四番

左持

經 正

みやゐして幾世へぬらん住吉の松吹風も神さひにけり

右 仲 綱

世中をいとふ心はさきたちていつまでとまるうき身なる覽
左右の述懐。左はたゝみや居して幾世へぬらんと思ふ
はかりを。おもふことにせるにや。

右はよの中をいとひなから。いつまでとまるへきにか
とのみおもへる。いつれをまさると申へしとは。思ふた
まへわかれと。おほん神にことかゝれるにつきて。左の
かちとや申へからん。

十五番

左 卿

わかぬ浦と思ふ計りを頼みにて宿も定めぬあまのこそうき

右 季 廣

住吉のまつことなくて徒に年はつもりのうらみをそする

左こゝろくるしくは聞えなから。まことにわかぬ浦と
おもはむも。行すゑたのみありぬへし。

右はとしはつもりのうらみはかりにて。まつことなき
は思ひしられ侍れは。右勝さ申へし。

十六番

左 廣 盛

世にすめと人しれぬ身やしほりする深山かくれの谷の下水

右 智經法師

あしからむ難波のことはかねてよりちかくて守れ住吉の神
この右のうた。あしからむなにはのことなとよそへな
から。もしつゝき。たゝものをいへるやうにやきこゆら
ん。

左の谷の下水は。いひなかれたるやうに見たまふれば。
爲レ勝。

十七番

左勝

大 輔

住吉のなこの濱へにあさりしてけふをしりぬるいかひをは

右

定 長

歎かしなよは定めなき事のみかうきをも夢と思ひなせかし

左歌心しかるへし。すかた又ひとつの躰なるへし。

右歌もひとつの俗にちかきすかたなれと。ことのみか

と思ひなせかしなといへる。なをむけにすてたること

葉なり。左をこそはかつと申へし。

十八番

左持

伊 綱

住吉のきしかたのよに引かへて花咲まつのみともならはや

右

季 定

たのみこし神のしるしに浮世をも住吉とたに思ひなりせは

此つかひの左右のことはつかひ。またたはふれことに

みゆ。なをはなのうたは。すこしも思ふへくや。おなし

ほとなるへし。

十九番

左勝

祐盛法師

やはらくる光を頼むしるしにはこむよの闇を照ささらめや

右

憲 盛

神に我たのみをかけてまつなれは住吉にこそ身をは宿さめ

左うたことにめつらしき心にはあらず。又もしつゝき

もやすらかにそ見ゆれと。心の思ふ所こそあはれに侍。

右歌たのみをかけてまつなれはなといへるは。おかし
きやうなれと。歌のたけ左なをすこしはまさるへくや。

左持

邦 輔

身のうさを忘れ草こそ岸におふれむへ住吉とあまも言けり

右

堀 河

世をわたる道をたかへてまふ哉何れの方に行かくれまし

左人わすれ草おふといふなりといふ歌をおもひて。身

のうさをとひきなしたる心。よろしといひつへし。

右かゝる歌のすかたにてはおかしきを。かの俊頼朝臣

の。わふるやまよにふるみちをふみたかへとよめるに

そ。きゝなれたるこゝちすれと。いつれのかたになとい

へるすゑのく。あはれにもきこゆ。持なとや申へからん。

二十一 番

左持

朝 宗

数ならぬ身こそ思へは嬉しけれ憂につけてそ世をも厭はん

右

懷 綱

長らへはかくてのみやははてんとて過にし方は慰みもしき

左身こそおもへはなといへる。もしつゝきゆうにみゆ。

右はてんとてとをけるほとそ。つよくきこゆれと。すき

にしかたはといへる心又よろし。よりて又持とす。

二十二 番

左

源 宗長

おひやらぬいはねの松はわれなれや久しくよゝに緑なる哉

右勝

藤原憲經

池水のいひいてすとも思ひかれふかきうれへを神はしる覽

左歌ひさしくよゝにといへる。心はよろしくきこゆるを。松のみひとりみとりなるかなといへる歌にそ。聞れたる心ちする。

右歌池水のいひいつなど。又常のことなれと。ふかきうれへを神は知らむといへる。こゝろこもりて少しまざるへくや。

二十三番

左勝

津の國の難波のことも芦のねのこのよはかくて枯果ねとや

右

素 覺

いかてなをまとふ浮世を背きなは誠の道をふみもたかへし

この左右うたのこゝろともにいとあはれにみえ侍にとりて。左歌なにはのこともあしのねのとをきて。このよはかくてかれはてねとやといへる心すかた。誠になに

二十四番

左持

なに事をまつとはなしに佳吉の神に心をかけぬまそなき

右

寂 超

いたつらにおひにける哉古の人のうへけんすきならなくに左歌まつとはなしにとなといへる。こゝろいとおかし

くきこゆるを。右歌人のうへけむすきならなくにと詠せらる。すかた又よろしくみゆ。よりて持とす。

二十五番

左勝

寂 念

あやなしたたふさにすゝをとりなから思ふ心のかつ亂る覽

右 佐

何事をまつとはなしになからへいつ佳吉と思ふへき身そ左歌おもふこゝろのかつみたるらんといへるすゑの句。いとよろしくこそ侍めれ。たゝしたふさにすゝをといへるこそ。すゝはこゑにいふななり。たゝことはにやきこゆらむ。

右歌いつすみよしとなとよそへたるば。おかしきやうなれと。をはりのことはいひすてたるやうにやあらん。左むねの句そ。おもふへくみゆれと。すゑのもしつゝき。いとおかし。かつとすへし。

そも／＼和歌のうらのみちは。ちひろのうみふかくして。その所々をはかることかたく。萬里の波はるかにして。そのはてをしることなし。いはんやしほちはるかにをくあみの。ひきひきなる人の心なれは。あまのうけふね。こゝろひとつにさたむることありかたくなある。この神風いせしまには。はまをきとなつくれと。なにはわたりにはあしとのみいひ。あつまのかたにはよしといふなるかことくに。おなしきうたなれとも。人の心より／＼になむあるうへに。たまのことにはにきすをましへ。いきこのなかにもこかねあることあるを。をしほ山のをしこめて。よしの河のよしとのみいひなかさ。このみちのをとるへゆかむことをなけきおもふあまりに。かくれてはみちをまもる神におそれ。あらはれてはみちをこのむともからにはゝかりなから。あさきことのいつみ。をろかなるこゝろのみつにまかせて。見ゆるところを。しるしあらはし侍る事をなむ。よるのころものかへす／＼

しくこそ見え侍るめれは。右歌は判者のつたなきことのはに侍りけりとは見たまへなから。作者をかくされて侍れは。しら川の關は名になれたる所なるを。しゐて申おとさんも。あやしくやとおもふたまふ。また左のうたもいとおかしく見ゆる上に。一番のつかひ。誠にはかりの關は。はゝかり多くおもふ給へて。持なとにやとさため申訖。

二番

左勝

前大納言實定卿
山おろしに浦つたひする紅葉哉いかゝはすへきすまの關守

右

備中權守重家卿

紅葉するふしの山風吹けらし錦をたゝむなみのせきもり
左歌浦つたひするとなき。すまの關守といへることろ。最おかしく侍るかな。山おろしといへる五文字も。ことによくおかれたりと見え侍れは。右の歌も姿こと葉きよけにはみゆるを。これは清見かせきにこそはと。おしはかられなから。歌のおもてには見え侍らねは。たゝ波の關といふせきのあるにやと。すこしおほつかなくやと侍しなり。よりて左を勝とす。

三番

左

權大納言隆季卿

右勝

清輔朝臣

逢坂の關のいはかとたゝきあけてこのはもてくる風の使は
なみの上に紅葉こきおろす清見かた山の高根に嵐吹らし
左の歌ふるまひ心はえおかしくは見ゆるを。うた合の歌にとりては。いかにとかや申侍しを。關のいはかとは。

良邊法師のひかことゝいひたりけることなりき。しかれともかの關のいはかと踏ならし山たち出るきりはらの駒といふ歌を。いはの廉といへる。巖門といふことば。つねのことなれは。あふ坂の關に。せきのいはかととよみたらむ。さらにとかあらしとおもふ給へて。そのことにおきては。さやうに申侍しなり。右もみちこきおろす清見かたといへる。すかたよろしくはみゆ。山の高ねといへるや。いつれの山にかと。おほつかなくきこゆらむとは申侍しか。歌のさまの歌あはせの歌とやおほえたらむとて。以て右爲勝。

四番

左勝

權大納言實房卿
きよみ瀉せきにとまらて行舟はあらしの誘ふこのは也けり

右

右中將實家卿

道もせに紅葉つもれる秋をさへとゝめてみゆるあふ坂の關
左歌心詞いとおかしく侍。たゝし一葉の舟なと云。つねのことなれと。清見かせきのあらき渚をすきゆく人。木のはを舟と見むことやいかにと。すこしうたかひ侍しかとも。けにあまのなかせる舟なと。みなよむことなれは。難におよふへからす。右歌もこゝろはおかしくみゆるを。あふ坂のせきやあきをとゝむることはかりは。いつこの關にてもありぬへからぬとおもふ給へて。すかたも猶いとおかしく侍れは。左を勝とす。

五番

左

左衛門督實國卿

をとほ山ぬきと散かふ紅葉はを關もる神や我物とみる

右勝

左京權大夫賴政朝臣

都にはまた青葉にてみしかとも紅葉ちりしく白川のせき
左歌をとほ山ぬさとちりかふとおきて。關もるかみや
なといへる。こゝろいとおかしくは見ゆるを。すゑの句
やすこしいかゝと申侍しにや。右歌はかの能因法師の
秋かせそ吹しら川の關といふ歌をきて。かやうによ
みいてん事ありかたは侍れと。なを上るの句の。かすみ
と共にたちしかとゝいへるやうには。いかてかはとは
おもふ給へなから。もみちのにしき立けん日かすの程
も。心ほそく思ひやられ侍うへに。人々もよろしきやう
に申侍しかは。右をもて勝としおはりぬ。

六番

左持

左大弁實綱卿

嵐ふくあふ坂山のもみちは、散つもるこそ關と見えけれ

右

右少將隆房朝臣

逢坂の關の紅葉のからにしき散らすは袖にかさねましやは
左右あふさかのすかた詞。ともにおかしくはみゆるに
とりて。左は關とみゆるといふことや。ちかく聞なれた
るらむと申侍し也。右はちらすは袖になといへるは。い
とおかしく。あふさかのから錦など。ことにあひよれる
事なきにとりては。いつくにてもありぬへきやとて。持
と申侍るなるへし。

七番

左勝

右中將實守朝臣

紅葉はを關もる神に手向おきてあふ坂山を過るこからし
右
右馬權頭隆信

不破の山もみち散かふ梢よりあらしをこさぬ關もりもかなナシイ

左歌關守神に手向おきてなといへる。心すかたといお
かしくみゆ。右歌もみち散かふ木すゑよりあらしをこ
さぬなといへる心。よろしくは聞ゆ。人々も左様に侍し
を。紅葉すてに散かはんによりては。あらしをこきてこ
となるかはとおほゆるうへに。ふはの山とをけるはし
めの句。心ゆかす思給へて。以て左爲勝とさため申侍し
なり。

八番

左

左少將脩範朝臣

山おろしに紅葉しくれは清見かた錦をかくる浪の關守

右勝

右少將通親朝臣

散かゝる紅葉のにしきうはきに衣の關をこゆる旅人
左歌きよみ瀉とをき。にしきをかくるなといへる。すか
たはよろしく見ゆるを。右もみちのにしきうはきに衣
のせきをなといへる心はえ。なをおかしきこゆれ
は。以て右爲勝。

九番

左持

散位盛方朝臣

見るからにとまらぬ人そなかりける散紅葉葉や不破の關守
右
勘解由次官親宗

紅葉はの皆くれなゐに散しけは名のみなりけりしら川の關
左すかたふるまひいとおかしくみゆ。これも不破の關
といへるや。ことによれることなからむ。右名のみなり
けりしら川のせきといへる心。いとおかしくはみゆる
を。みなことは。散しけはとをけるほととや。すこ

し耳にとまるらんとおもふたまへしうへに。一番のつかひに。いくはくもかはらすみゆるを。ことによるしきよし引申さんもいかゝとおほえしほとに。おなしほとや「にや」とさため侍しを。猶おもふたまふれは。白川のせきはまさるへくやとおほえ侍れと。すかたことはをなすらへて。持と定申けるにや。

十番

左勝

散位季廣

からにしき立かさねてもみゆるかな衣の關にちれる紅葉は

右

伊豆守仲綱

あふさかの關のを川の色つけは梢さひしきをとはやま哉
左歌八番の右の歌に。いくはくかはらさるへし。これも
おかしくは聞ゆ。右歌落葉なことはあらはさすして。
題をまはせる心は。おかしくみゆるほとに。題の歌はま
はす文字の侍るなり。この題の落は。たゝあらはによ
むへき也。關のをかはの色つき。音羽山のこすゑさひし
からんはかりは。猶おほつかなくやとて。左爲勝。

一番

左持

按察使

なれにけりくたす筏のこす棹にたちもさわかぬあちの村とり

右

皇太后宮大夫

君か代をのとかなりとや水鳥も玉の汀につはさしくらむ
左歌くたすいかたのこ「にや」す棹になといへることは。
いひしりていとおかしく社侍れ。右歌またみつからの
あやしの歌と見侍しかは。左勝と申侍しを。人々祝のこ
ころあり。勝へしなと侍しかは。さらは持なとにやと定

申侍にき。但瑤池なといふことこそあれ。見きはやいか
かといふことの侍しを。よみ人をかくされたるゆへに。
くはしくもえ申侍らざりしなり。瑤池玉砌などは。詩に
も常の事となり。みきは。やまと詞なれば。本文はなに
かは侍らむ。是は水のきはといふことなり。又玉といふ
事は。河をもほむる時のことなれば。みきりとても侍へ
かりしをといひつれば。ことはもとみつもちかゝ
らむため。やまとことはにつきて。おまへの汀につはさ
をしかせて侍しはかりなり。歌もことなる事なきを。祝
ことによりて。持とまかり成しこそ。かたはらいたく侍
しか。

二番

左

前大納言

水鳥にうきねの床をならふれははなれもやらす立むなく也

右勝

新三位

池水を宿の汀にたゝへもて手かひにそするあちの村鳥
左歌うきねの床をならふれはなといへる姿。いひなれ
てよろしくは見ゆ。右歌たゝへもてと置。あちの村鳥な
といへる詞。ことにえんには見えねと。題のこゝろいみ
しう近馴てきこゆ。人々もおなしきやうに侍しうへ。左
のうきねの床も。舟なとにこそおしはかられ侍なから。
すこしおほつかなくやと思ふ給へて。右爲勝とさため
侍しにや。

三番

左持

藤大納言

を舟こく人のあたりに馴に鳥をしのうきれもおとろかぬ迄

右

清輔朝臣

鴛鳥のはかせも近くみなるゝはわかもとゆひの霜を拂ふか
左歌をしのうきねもおとろかぬまでといへる。心すか
たいとおかしくみゆ。右のもとゆひの霜心ほそく。ちか
く馴たる心なとは侍るを。をし鳥のかうへの霜と羽を
かはせるや。無下にうちとけてきこゆらんと。人々申侍
しうへ。すこしかといへるおはりのことは。やまと歌と
も覺さらむとは。おもふたまへなから。左歌も句のはし
めと。をし鳥のをの字いかゝと見たまへてなを持とす。

四番

左

權大納言

を舟漕ともろにもなをたゝしとやつなてをくるゝ鴨の村鳥

右勝

三位中將

汀にてをしの羽吹をふくからにうは毛の霜を袖にかけつる
左つなてをくゝるなといへる。心すかたいとおかし。右
歌うは毛の霜を袖にかけつるなといへる詞つかひ。又
えんに侍は。いみしくおもひわつらひ侍しを。すこしの
理をも。勝負あるへきやうに侍れは。左は心はいとおか
しくみゆるな。ともろといへるわたりや。少しいかにそ
とおもふ給へて。をしのはふきを勝に定侍しなり。

五番

左

左衛門督

こやの池の玉もかるおにみなれてやをしの毛衣立も離れぬ

右勝

頼政朝臣

子を思ふ鴛の浮すのゆられきて捨しとすれやみ隠れもせぬ
左歌心すかた最おかしく見ゆる。をし毛衣は古き歌

あはせには。つるの毛衣とこそいへ。をしには詠すと難

したる事なりと申人侍しかと。そのこと葉ふるく。つる
の毛衣としふともとよみ置たるにこそあれ。おほかた
鳥は毛を衣とするものなれは。かの文選のおふむの賦
にも。みとりの衣あをき衣のたくひなとこそ作たれ。ま
た文にかもめを作にも。毛衣といへり。ふすまの中に鴛
鷺のふすまといふこともあれは。をし毛衣とよめら
む。更に咎あらしと思ふ給ふて。毛衣におきては。難あ
るましきよし申侍き。右歌に鴛のうきすのゆられきて
といへる。心ことはわりなく求いてゝ。いとめつらしく
みゆるに。子をおもふといへる五文字。ことはりとあは
れにきこえ侍しかは。右の勝としおほりぬ。

六番

左勝

左大辨

舟とむる入江にすたく鴨とりはおなし汀にうきねをそする

右

隆房朝臣

岸近み芦まの水にうきねして手飼ひになつくをし鴨とり
左右ともに。おかしくはみゆるを。いさゝかの故を申侍
に。ひたりは舟のあるを。おなしうきねにとりては。少
まさるへくやとて。左爲勝。

七番

左

實守朝臣

高瀬舟同じ芦まにとまる夜はつかはぬをしも共ねをやる

右勝

隆信

すみなるゝ手飼の鴛やこれな覽たちゐるむらにたゝぬ番は
左の心詞おかしくは見ゆ。右もすかたこゝろはよろし

きを。立ゐるむらにといへるや。むれゐる鳥のとも。むれたるたつのともいふこそあれ。むれとつかひたる事。きゝつかすありけむ。心よろしきやうに聞えて侍しかは。右のかちにやとさため侍しなり。

八番

左持

脩範朝臣

たかせ舟のほる汀にゐる鴨はこすのつなてにも騒かさり鬼

右

通親朝臣

めなれてや鴨のうきねも驚かぬあしまをわけて舟は巡れと左こすつなてにもといへるもしつかひ。右のかものうきねもおとるかぬといひて。あしまをわけてなといへる。こゝろ言葉。ともにおなし侍れは。持としおはりぬ。

九番

左持

盛方朝臣

波まくら浮れの床に立よれば袖をそかはす鷺の毛ころも

右

親宗

池水ををのか羽風に打たゝきむれぬる鳥に手かひをそする左袖をそかはすなといへる。すかたよろしくは見ゆるをうきねの床やすこしおほつかなき様なり。毛衣のことは前に申畢。右のをのか羽かせにうちたゝきなとは。けにさることゝおかしくは聞えなから。またさすかにことなるよせなきにやとて。又持とす。

十番

左

季廣

日をへつゝ馴にけらしなあし鴨の上毛の霜をはらふ計に

右勝

仲綱

袖川の筏になるゝあしかもは立てもさきに遠くやはゐる左歌もことなるとかなくは見ゆれとも。右の袖川といひて。たちでもさきにとをくやはゐるといへるこゝろ。けにさこそはとおかしきこゆ。右勝とすへし。

一番

左

按察使

あはし共かねていひせは中々に空しき床にまたてねなまし

右勝

皇太后宮大夫

思ひきやしちの端かきかきつめて百夜も同じまるねせんとは左歌むなしき床にまたてねなましなといへるわたり。心ほそくおほえて。おかしく思給へしを。右歌も様姿よろしきよし。人々定られしかは。をさへ侍るもあやしくやとて。右の勝にまかりなりしなるへし。

二番

左持

前大納言

契きなみち芝の露分よとはまきの戸よりはかへすへしやは

右

新三位

頼めこしけふを待たにありつるをこはいかにする心變りそ左右すかた言葉えんには侍るを。みち芝のつゆわけよとはとよみあけ侍しかは。まきの戸よりはのはの字ともや耳にとまるらんと申侍しなり。右歌はことはをいたはらず。題の中をわたりて侍れと。歌しなかつたむことはいかゝはとて爲し持畢。後にうけたまはれは。左歌正本には分よとてと侍りけるものを。

三番

左

藤大納言

流れきていはものうちによる舟のねたくも波にさかのほる哉

右勝

清輔朝臣

神かけていひし契を引かふるいつきの袖のゆふくれのそら
左歌すかたこと葉。かゝるかたの歌ひとおもてはおか
しく侍るを。いはもの中なにかとおとろく人も
侍りき。ふる歌などにはえ見をよひ侍らす。右うたすか
たよろしくはきこゆるを。ゆふくれのそらとてはてた
るや。すその残る心地すらむとはおもふたまへなから。
また云すてたるすかたも。さてありぬへくやとて。右の
勝になし侍しなり。

四番

左

權大納言

今やさは消果ぬへき露の命たのめしことのはにそかゝりし

右勝

三位中將

わひつゝは偽にたにたのめよと思ひし事をこよひこりぬる
この左右。ともにおかしきこえ侍るを。右歌の心けに
さもあることに聞え侍しかは。いますこしのことをも
ちて。以_レ右爲_レ勝。

五番

左持

左衛門督

小夜衣きて重ねよと契しをかへしてもさは夢にみよとや

右

頼政朝臣

いかにこは下もの紐をときかけて思ひかへつゝ又結びぬる
左の夢に見よとやといへる末の句のすかた。いとおか
しくきこえ侍りき。右歌臨期心にあまりさへちかくき

六番

左勝

左大辨

こえ侍し。ひとくも委しきやうに聞え侍し上に。とき
かけてといへるほとも。けにおかしくやと思給へて。や
やもせは右のかちになりぬへく侍しを。左方なかはほ
ころひあらはれて。持にきたむへきよし侍しこそ。いと
おかしく興ありて侍しか。しつかに見給へれば。えん有
かたは。まことに左の勝とも申すべく侍けれと。なを持
と見たる事共の侍るなり。

右

隆房朝臣

いかなれは人を汀によすれ共きしうつなみの立かへるらむ
左の末の句。いとおかしき見ゆ。右の人をみきはになと
置。きしうつ浪のなといへるすかたこと葉。またおかし
くは見ゆるを。違約心や。左は今少しまさるらむとて。
爲_レ勝畢。

七番

左勝

實守朝臣

つるに又かはりはつともいたつらに契し程の言の葉もかな

右

隆信

頼めつゝあはぬ例は世にもあれとけふの暮迄さや契りつる
左のちきりしほとのことのはもかなといへる。さるこ
とと聞えて。すかたよろしくみゆ。右の上句あはぬため
しは世にもあれとなといへるは。よろしくはみゆるを。
末のさやちきりつるといへるほとは。よせある字のあ
らまほしきにや。かくいへはさやつかのまになとよそ

八番

ふること。日ころおほく侍る。左の勝とす。

左持

脩範朝臣

飛鳥川ふち瀬にあらぬ中なれと時のふ頼めてけふ變りぬる

右

通親朝臣

今暫し空たのめしにもなくさまで思ひ絶ぬるよひの玉章

左歌あすか川によせて。きのふたのめてなといへるす

かた心おかしくきこゆるを。右のそらたのめにもなく

さまでとをきて。思ひたえぬるよひの玉つさといへる

末の句。ことによるしく侍るなり。但左もかみしも相叶

たり。仍持とすへし。

九番

左持

盛方朝臣

柚川の浅からすこそ契りしかなとこのくれを引たかふらむ

右

親 宗

歸りぬと今になりては何かいはん思ひ定めて頼めましかは

左すかた詞おかしくいひつゝけ侍。そま河このくれな

とやいひならはしたることならんと申侍しを。右歌の

末はおかしきこゆ。上の句やいかにそ思ふ給ふるに。

左歌もさすかにさしてそのかたともなけれと。なをよ

しあるやうにもやとて。可勝哉と申侍しなり。

十番

左持

季 廣

照月のおほろけならす契しはそらたのめ共けふこそはしれ

右

仲 綱

このくれをたのめしいもか玉章のもしはかり社今も變らね

左歌すかた詞いとおもしろく。歌あはせの歌といひつへし。右歌心いとおかしく。文字はかりこそ今もかはらねといへる。いまのことは尤よろしくきこゆ。但かれ是をかよはしなすらへて。爲持了。

左方

右方

公通卿持二負一 俊成卿勝一持二

實定卿勝一負一持一 重家卿勝一負一持一

隆季卿持一負二 清輔朝臣勝二持一

實房卿勝一負二 實定卿勝二持一

實國卿持一負二 賴政朝臣勝二持一

實綱卿勝二負一 隆房朝臣持一負二

實守卿勝二負一 隆 信勝一負二

脩範朝臣持二負一 通親朝臣勝一持二

盛方朝臣持二勝一 親 宗持二負一

季 廣持一勝一負一 仲 綱勝一負一持一

右建春門院歌合得一本按合了

群書類從卷第一百八十七

和歌部四十二歌合八

廣田社歌合承安二年十月十七日

題

社頭雪

海上眺望

述懷

作者

左

按察使公通

前權大納言實定

大皇太后宮小侍從

權大納言實國

觀蓮左京大夫教長入道

參河内侍

俊惠法師

左兵衛督成範

左近衛中將實家

前齋宮大輔

左近衛中將實宗

左近衛中將賴實

左京大夫脩範

右

太宰大貳重家

右京權大夫賴政

權大納言實房

源師光

左大辨實綱

宰相中將實守

皇太后宮大夫俊成

盛方

登蓮法師

大皇太后宮亮經盛

左馬權頭隆信

皇后宮亮季經

寂念法師

神祇伯顯廣王

賀茂縣主政平

賀茂縣主重保

資隆

廣季

親重

季廣

顯綱

伊豆守仲綱

季定

皇后宮權大進邦輔

懷綱

懷能

智經

阿闍梨性阿

前齋宮中納言

判者

皇太后宮大夫俊成

道因法師

憲盛

通清

左兵衛佐經正

廣言

朝宗

伊綱

隆親

大炊御門右大臣家佐

刑部權大輔廣盛

安心

祐盛法師

憲綱

經平

淨緣法師

素覺

一番 社頭雪

左勝

按察使公通

ゆふしての風に亂るゝなとさえて庭しるたへに雪を積れる

右

太宰大貳重家

あさまたき雪降りける廣前に跡ふみつければ神やいさめむ
左歌風に亂るゝ音さえてなといへる姿。うたあはせの
歌とおほえて。いとおかしくこそ侍るなれ。右歌心こと
はいひかなへられて。社頭雪はかやうにみてはと見え
侍るを。上下の句の初に同じ文字ある事は。重き難には
あらねと。天徳四年の内裏歌合にも。判者とかめ申され
たることに侍れは。左うるはしく難なく侍らんにとり
ては。聊のこともいかゝはとて。以_レ左爲_レ勝。

二番

左持

前權大納言實定

何ことに身をも惜まて白雪の神のいかきをこえんとすらむ

右

右京權大夫賴政

しめのうちに夜をとをす哉下消ぬかしらの雪を打拂ひつゝ
左これは雪のいみしく深くふりて。いかきをもこえぬ
へき心なるへしとはみえ侍れと。心雪よりも深く。義王
よりもかたくして。愚老の判者をよひかたくそ侍る。右
かしらの雪をうちかはらひつゝといへる心。いとあはれ
には侍るを。これはまことの雪やすくなからんとそ見
え侍れと。した消ぬとをけるなるへし。社頭に通夜せる
こゝろもおかしく侍れと。左雪心もふかく侍れは。勝劣
きためかたくて。持と申侍るへし。

三番

左

大皇太后宮小侍從

解るまも積るもえこそ見えわかね豊みてくらにかゝる白雪

右勝

權大納言實房

山あるもてすれる衣にふる雪はかさす櫻のちるかとそみる
左白妙のみてくらに雪をかけて。解るもつもるも分か
たからむ。いとおかしくは侍るを。右のすれる衣に雪を
おひて。かさしの花にまかへられて侍る心姿。いとめつ
らしく艶に侍るうへに。左にはさきにも侍る句の初の
文字も。毛をふくにやと見え侍れは。以_レ右爲_レ勝。

四番

左勝

權大納言實國

をしなへて雪のしらゆふかけてけりいづれ櫛の梢なるらん

右

源師光

常よりもけふこん人をあはれとや積れる雪に神も見るらむ
左歌雪のしらゆふかけてけりといへる心すかた。誠に
おかしく。よまゝほしきさまにも侍るかな。右歌けふこ
ん人をあはれとやとよまれたる詞つゝき。いひしりて
いとおかしく。是も見え侍れと。猶左歌風躰足_レ蹉_レ歟。依
勝と申侍へし。

五番

左

觀蓮

櫛葉もかくるにきての色々に皆白妙に雪そふりつむ

右勝

左大辨實綱

しめの内にふるしら雪の消ぬまは其いろならぬ朱の玉垣
左題の心に叶ひ。歌のすかたたくみにして。いとおかし
く社侍るを。聊覺束なき事を侍るめる。かくるにきての

色々にとよまれたるにきては。古き文にも。種麻を以てあをにきてとし。穀木をもつて白にきてとするとかや。柳はの色にあをしとはきこえず。雪のふりつむに白しとは見えぬるを。其外ににきての色。いろ／＼にあまた有へしとおほえ侍らぬは。ひかことにや侍らむ。右ふる雪のきえぬまは。その色ならぬ朱のたまかきといへる。心おかしきことなる難なし。正説をうけたまはりひらかんほと。先以_レ右爲_レ勝。

六番

左

三河内侍

柳はのかをとめくれは降雪にやそうち人の袖やさゆらむ

右勝

宰相中將實守

雪ふかきおまへの濱に風ふけは松のうれこすおきつしら波

左歌八十氏人のそてやさゆらむといへる。心論いとおかしきこえ侍るを。かのさかきはの香をかくはしみとめくれはといへる神樂の歌に。残りすくなくや侍らん。右歌おまへのはまに風をふかせて松のうれこす沖つしらなみといへる歌のすかた。雪のおもかけ。すてに嫉妬のこゝろおこり侍るにや。よりてまた右の勝とす。

七番

左持

俊恵法師

しめの内に神さひにけりはふりこか頭の雪そ降かさねつゝ

右

皇太后宮大夫俊成

いさきよき光にまかふ塵なれやおまへのはまにつもる白雪
左歌神さひにけりと置。かしらの雪そふり重ねつゝと。
心いとおかしきこえ侍るめれ。右姿こと葉ことなる事

侍らぬうへ。判者のうたに侍り。任_レ例不_レ加_レ判。

八番

左勝

左兵衛督成範

雪ふれば神のしるしや是ならんしらゆふかけぬ柳葉そなき

右

盛方

神垣やあとたれそめし庭なれは雪も爰にそあまくたりける

左歌うるはしくくさりて。させる科なく侍り。右はあとなれそめし庭なれは雪も爰にそなといへる。こゝろおかしきは侍るを。そめし天降るなとや。おなし心なる詞に侍らん。ふかき難にはあらねと。左うるはしく侍れは。勝と申へくや。

九番

左持

左近衛中將實家

ありし秋のすみのえに見し月の色をけふ神垣にうつす雪哉

右

登蓮法師

雪ふれば朱の玉垣をしなへてひまなくかくるしらにきて哉

左すみのえに見し月の色をけふ神かきにうつすゆきかなといへる。兩社の間月と雪との色かよへるこゝろ。いとおかしき侍り。右朱のたまかきをしなへてと置。ひまなくかくるなといへる詞つゝき。いひしりてつよくきこえ侍り。左はおかしき。右はうるはしく。歌のすかた相似すといへとも。かれこれをなそらふるに。なを持とす。

十番

左

前齋宮大輔

しめのうちの松吹すます風の音も埋るはかりにふれる白雪

右勝

大皇太后宮亮經盛

しら雪はまたえも見えず降に鬼いつこなるらむあけの玉垣
左松ふきすますといひ。埋るはかりになとよめるけし
き。ふかくおもへる事とは見え侍り。右とたえも見えず
ふりにけりといへる詞。所の名をひける心にとりて。い
とおかしき上に。左の吹すますは。猶あまりなること葉
にやあらん。又以_レ右爲_レ勝。

十一番

左勝

左近衛中將實宗

日にそへてふり積りつゝ瑞籬にひさしく雪もきえぬなり鬼
右 左馬權頭隆信

降にけり年の數のみと思ひしに雪さへつもあるあけの玉かき
左歌日頃ふりつもる雪を。瑞籬によせて久しく消えす
といへる心姿いとおかしこそ侍けれ。右歌こと葉つ
かひなとあしくは侍らぬを。たまかきのとしつもある覽
こそ。いづれのやしるもさこそは侍ることなれと。ふる
の社なとをや。分てかくはいふへからんとおほえ侍れ
は。以_レ左爲_レ勝。

十二番

左持

左近衛中將賴實

さゆるよのふるしら雪に埋れてあけの玉かき色かへてけり
右 皇后宮亮季經

神とる雪のしらゆふ取してゝ空さへ神をまつるなりけり
左すかたこと葉いひなれて。文字つゝきなおかしく
も侍るかな。右これは空さへと侍るにや。是は心姿興あ
りては侍るを。とりしてゝといへるは。さるや空のしわ

さならは。ほとゝをきやうにてとそおほえ侍れと。ふか
き難にはあらぬうへに。空さへ神をなといへるすかた
も。猶おかしく侍れは。持とや申へからむ。

十三番

左持

左京大夫脩範

しめの内に積るとならは白雪のきえすもあらなん神の驗しに
右 寂念法師

ふる雪を天つおとめや手向らんしらゆふかくと見ゆる榊葉
左右いづれも優美にして。ことなるとかなし。可_レ爲_レ持。
十四番

左

神祇伯顯廣王

よみまつるやまことのは妙なれは神の心の雪そつもれる
右勝 道因法師

神とる武庫の山風さえゝてやしるもしろくゆきふりに鬼
左歌こゝろもめつらしく。神の慮の雪つもるらんも。か
やうの愚判のことはをく人侍る迄は。ほいある心ちな
んし侍れ。但右歌の武庫のやま風さえゝてといへる
姿心。上下あひかなひてよろしく聞え侍れは。猶右勝と
は申侍りぬ。

十五番

左持

賀茂縣主政平

神はにふりつむ雪のしらゆふに神のこゝろは先とけぬらん
右 憲盛

あとたれしとたえの神やこれならんおまへの濱の雪の村消
左右ともに。歌の心こと葉はおかしく侍るを。雪はまた
をのゝ心とけたるほとに侍るめれは。持さや申へか

らん。

十六番

左

禰はも雪の下にてきねはすく音にそ神のすみかをはしる

右勝

賀茂縣主重保
通 清

やおとめの立まふ庭に雪ふれはみな白妙のそてかとそ見る

左うたは。禰はも雪の下にてといふ。をとにそ神のなと

いへる。こゝろおかしく侍を中の五文字やすこし俗に

近く侍らん。右うたはみなしろ妙のなといへるは。珍し

きことにあらねと。やおとめの袖はいろ／＼ならんに。

みな白妙のそての色にみゆらんこゝろ。よろしく聞ゆ。

以右勝と申へきなり。

十七番

左持

資 隆

祝子かいはふ禰のしらゆふに四手かけそふるけさの雪かも

右

左兵衛佐經正

雪みては神もさこそは思ふらんあとふみつけしみつの弘前

左のしてかけそふるといふ。右の神もさこそなといへ

る。こゝろはいつれも興ありて見え侍るを。左のけさの

雪かも。右の雪みてはなと侍るほと。猶少し思ふへくや

とも侍れは。持と申へし。

十八番

左勝

廣 季

天くたる其神よりやふりくらむ雪つもれりとみゆる玉垣

右

廣 言

人はいさわれとはふまし神かきやひろたの濱にふれる白雪

左そのかみよりやふりくらんさいへるこゝろ詞。いひ
しりてこそきこえ侍れ。右も神かきやひろ田のはまに
とよめるすかたはよろしく見え侍れと。猶左歌もとす
ゑあひかなへり。よりて勝とす。

十九番

左持

親 重

雪ふかみ朱の玉戸もうつもれて心あてにそ手向をはする

右

朝 宗

ふみわけて人はとめきぬ禰はの香をこそ雪の埋まさりけれ

左の朱の玉戸雪にうつもれて。心あてに手向したる心。

右の香をこそ雪のといへるすかた。ともによりしく見

ゆれは。持と申すへし。

二十番

左勝

季 廣

ゆきふれは松の花さくしめのうちは神の慮やはるめきぬ覽

右

伊 綱

しめの内に立まふきねも心せよおまへの雪にあとも社つけ

左右させる難なく。優には侍るにとりて。左松のはなを

さかせて神のこゝろや春めきぬらんといへる。いひし

りてきこゆ。以左可爲勝。

廿一番

左持

顯 綱

ふりつもる雪の下消たるひして玉ぬきかくるしめのしら雪

右

隆 親

〔ゆふかくるこゝちこそすれ白妙に雪降つもるあけの玉垣〕

左歌のこゝろはおかしく見ゆ。しめの白雪や。つねにき

こえぬことのありつきて侍らん。右ことなるとかなく
ゆうに侍るを。また句のはしめ。猶めとまるにや。持と
申へし。

廿二番

左持

伊豆守仲綱

けさみればきねかまろねの跡なれやいかきの内の雪の村消

右

大炊御門右大臣家佐

けさみれば濱の南の宮つくりあらためてけり夜はの白雪
左右のけさみれは。いづれも雪のけしきめつらしく見
え侍り。きねか丸寐はまことにさみてはと。歌のすかた
もみゆ。濱のみなみの宮つくりは。また清けに侍り。よ
りてまた爲持。

廿三番

左

季 定

雪つもるみちわけ初る人をこそ神もあはれと思ひますらめ

右持

刑部権大輔廣盛

磯ちかき神の御室にふる雪や海にしられぬなみの白ゆふ
左歌この頃あまたみゆるすちには侍れと。すかた優に
して。おもひますらめといへる末の句。心こもりて。い
ひしれる歌とは見えたり。右歌いそちかき神の御室の
雪を海にしられぬなみのしらゆふといへる。おかしく
きこえ侍れは。猶右のかちと申へくや。

廿四番

左持

皇后宮權大進邦輔

神かきやしらゆふかけて降雪やあまつみそらの手向なる覽

右

安 心

神かきや濱まつかえも色かへてうらめつらしきけさの初雪
左右いづれもいひなれて優には見え侍るにとりて。う
らめつらしきけさの初雪は。秋の初かせなとに聞なれ
たるこゝちし侍れは。左のあまつみそらの手向は。立ま
さるとや申へからん。

廿五番

左持

懷 綱

降雪のゆふしてかくる村すゝきみてくらしろに手直てそ行

右

祐盛法師

神垣の雪つもるをは押なへてふるのやしろと人やいふらん
左歌姿心めつらしく見ゆ。むら薄さおもひかけぬ手向
くさなれと。みてくらしろになといへるけしき。うたよ
みのしわさなといひつへし。又村すゝきみてくらしろ
もかゝる物かたりの侍るなるへし。右歌神かきのゆき
つもるをはといへる。こゝろ詞よろしいひつへし。よ
りて爲持。

二十六番

左

懷 能

神かきやおまへの濱の松かうれをふゝきにあらふ雪の白波

右持

憲 綱

降もあへす庭火の前にとけし神のこゝろも雪としれとや
左まつかうれをふゝきに洗ふなといへる。かけあらん
とよめる歌なるへし。右ふりもあへすとをきて。神のこ
ころも雪としれとやといへる。おかしくきこえ侍る。右
の勝と申へし。

廿七番

左勝

智經

玉垣のうち人とはつらし降雪をふまゝく惜と神こそはみれ

右

經平

庭の雪はおまへの濱におもなれて梢を神やめつらしとみる
左めつらしきさまにはあらねと。優に侍るめる。右おま
への濱のいさきよき雪にしもおとろかぬ。心はいとお
かしくも侍るを。梢をといへるや。松なといはてはいか
かと覺え侍れは。左とかなきに付て可勝にや。

廿八番

左持

阿闍梨性阿

祝子かさす櫛はにふる雪をちりてみたるゝ幣かとそ見る

右

淨縁法師

たとふへきかたこそなけれ廣まへの濱松かえにふれる白雪
左はめつらしく。右はおもしろく。姿はかはれと。歌の
ほとおなし。持と申へし。

廿九番

左勝

前齋宮中納言

神かきの櫛はことにゆふかけてふるしら雪をなれ手向する

右

素覺

雪のいろをきねや重ねてしらけたるお前の濱はそえて及はね
左歌ふるしら雪をなれ手向するといへる心。いとおか
しくこそきこえ侍れ。右歌はかの神まつる卯月に咲る
といへる古ことおもひ出られて。是はひとつのすかた
には侍れと。猶歌の難相似。以左可爲勝。

左勝

按察使公通

一番 海上眺望

左勝

天津空雲ゐや海の果ならんこき行舟の入と見ゆるは

右

權大納言實房

朝ほらけあしやの沖を行舟のよそめは鴨のゐるかと思

大貳重家

右

波間よりほのみとりにそ見えわたるこや住よしの松の村立
左歌あしやの沖を行舟のなといへる。すかたおかしく
も侍哉。右歌ほのみとりにそ見えわたるといひて。こや
住よしの松のむら立と侍る心。亦いとよろしく聞え侍
るを。かしこにみゆることを。こやとよみて侍らんや。
かれやとそいはまほしく覺え侍る。左なな芦やのおき
の舟を鴨のゐるかと思かへられ侍らんこゝろは。まさ
るへくやと見え侍る。いかゝ。

二番

左持

前權大納言實定

武庫の海をなきたる朝にみわたせは眉も亂れぬあはの嶋山

右

賴政朝臣

和田つ海を空にまかへて行舟も雪のたえまのせとに入ぬ
左詞をいたはらすしてまたさひたる姿。ひとつの舁に
侍るめり。眉もみたれぬあはの嶋やまといへる。彼黛色
遍臨着海上といひ。龍門翠黛眉相對なといへる詩。おも
ひいてられて。幽玄にこそ見え侍れ。右また空にまかへ
てゆく舟もといへる心。ふかくかすめる心ちして。雲の
絶間のせとに入ぬらんほとも。愚なるこゝろに及かた
くして不分明。よりて爲持。

三番

左勝

小侍從

天津空雲ゐや海の果ならんこき行舟の入と見ゆるは

右

權大納言實房

和田のはら波ちたゆたふ雲まよりほの見えわたる淡ち嶋山

左歌こゝろ姿よろしくこそ見え侍れ。右歌また波ちたゆたふ雲間よりといへるすかた詞。いづれもいとおかしく思ひみたれ侍るを。あはち嶋やまと侍るや。上の句の末にては。少ちかくやきこえ侍らん。よりて左の。雲ゐやうみのといへるは。猶増り侍るへからむ。

四番

左

權大納言實國

松浦ふねみえ行ほとはそれなから只都へのきゝそたえぬる

右勝

師光

朝なきの鹽ちはるかに出にけりかもめにまかふ沖のつり舟

左のまつら舟見えゆくほとはそれなから。都へのきゝたえぬらんほと。心ほそくは侍るを。右のしほちはるかにいてにけりといへる。姿よろしく聞えて。眺望のころなをまされるにや。

五番

左勝

觀蓮

なみの上に浮ふこのはと見ゆるかな漕はなれ行朱のそほ舟

右

左大弁實綱

うす雲のかゝる浪ちを見わたせはまた色とらぬゑしま也梟左歌なみの上にうかふこのはなといふは。きゝなれたることに侍れと。朱のそほ舟は。木のはも色あるこゝちして。おかしく見え侍り。右歌なみち雲へたてゝ。繪嶋はまたいとらすみゆらむ心。よるへありて聞え侍れと。猶左は聊まされるにやとおほえ侍れは。左のかちと申侍るへし。

六番

左

三河内侍

和田の原おきつ風吹ゆふなきにあるかなきかとみゆる釣舟

右勝

宰相中將實守

なこの海に立とし見えぬをし鴨やとをさかり行あまの友舟左文字つゝき詞つかひは。おかしく侍るを。右のあまの友ふねをしかもと見ゆらん。心おかし。友といふ文字いひしりてみえ侍るに。左のおきつかせふくらんゆふ浪は。なを叶はすやと見え侍れは。右の勝と可申にや。

七番

左勝

俊恵法師

雲のなみ分行ふねのきえぬるは天の川原にこきやつけつる

右

皇太后宮大夫俊成

和田の原こきはなれぬる舟路には心もえ社つなかさりけれ左歌天川原にこきやつけつるといへる。彼張博望之到

于漢。侵三万里之濤。といふ句のこゝろをとられて侍り。いとおかしくこそ侍れ。右歌は愚老歌に侍るへし。

さのみ判者の威をかりて。とかをあらはさす侍らむ。神慮の恐れあるへし。心つなかつといへるはかりは。眺望のこゝろさためて少く侍らんかし。左歌の心。誠に萬里の浪おもひやられて。はるかにこそ覺え侍れ。よりて以

八番

左勝

左兵衛督成範

おきつなみあまの川にや立のほるこき行舟の空にみゆるは

右

盛方

こきいてゝみをさ海原みわたせは雲ゐのきしにかゝる白雲
左是も前のつかひの。左のかたの心にかよへるへし。天
の川にや立のほるといへる心。おかしくは見え侍り。そ
らに見ゆると侍るそ。上に見ゆらむやうに聞ゆれと。な
みのまの空にひとつにみゆる心なるへし。右雲井のき
しやさしたる心ちし侍れと。これも心はおなしすち成
へし。みをさうなはらなといへるすかた。幽玄の躰に見
え侍ければ。持と申へし。

九番

左持

宰相中將實家

けふこそは都の方の山のはも見えずなるおの沖にいてぬれ
右 登蓮法師

なかもやる舟路はあともなかりけり恨やふかき松浦さよ姫

左歌都のかたの山のはも見えずなるおのといへる。何
となく心ほそきこゝちして。歌の姿もめつらしくこそ
侍れ。右舟路はあともなかりけりとをける文字つゝき。
最よろしくこそ聞え侍れ。うらみや深き松浦さよ姫と
いへるや。うちこしはなれたる心ちと。よく思ひとけは。
詞幽に心こもりて。猶おかしく侍るへし。持と申へきに
や。

十番

左

大 輔

いつかたへ浦わたりするむら鳥の立かとみれば雲にきえ行

右勝

從三位經盛

沖つなみ立ゐる程そしられけるあはの嶋山見えすみえすみ
左歌すかたは幽にみえ侍り。村とりといへるや千鳥鷗

なとならば。さまで遠からすや侍らん。舟なとも鳥かと
見るほとならば。雲にきえんもいと少便や侍らまし。右
歌させる難なくてうほうの心あり。勝と申侍るへし。

十一番

左持

左近中將實宗

はりまかたすまの晴間に見わたせは雲ゐに浪の立かとそ思

右

左馬權頭隆信

朝なきに御まへの沖を漕出てそ雲をは海のものとしりぬる
左すまのはれまにと置。雲ゐのなみになといへる。心す
かたいひしれる歌と見えて。いとおかしくこそ侍れ。右
うたも。雲をは海のなといへるけしき。よまんと思へる
うたとみえ侍れば。持と申すへきにや侍らん。

十二番

左勝

右近中將賴實

はる／＼と御前の沖を見わたせは雲ゐにまかふ海人の釣舟
右 皇后宮亮季經

沖へ行われをもとになかむらん霞わたれる遠のうら人
左歌文字つゝきうるはしく。下りて雲ゐにまかふあま
の釣ふねといへる末の句も。いとよろしき歌とこそき
こえ侍れ。右歌はこゝろありておかしくは聞え侍るを。
沖へゆく我をもと侍るや。舟ならて行とは。いかゝ覺え
侍らん。歌さまはおかしくも侍れと。歌あはせの時は。
姿をさきとし難を除く事あれば。尙左の勝にやと見え
侍るなり。

十三番

左

左京大夫脩範

雲晴てよものしまへを見つる哉あまのを舟の波まくらして

右勝

寂念

芦の葉も霜かれにけり難波かた玉もかり舟行かよふ見ゆ
左歌けしきこゝろほそく。すかたもいとおかしく見え
侍るを。あまのをふねに浪まくらしてといへる。夜のう
たならば。月ありてそ雲もはれまほしく侍る。いかゝ。
右は終りの句のいひとちめたるほとに。ほいすくなき
やうに侍れと。霜かれにけりなにはかたなど。珍しから
ぬ事なれと。さひても侍れは。難なきにつきて。右可勝
にや侍らん。

十四番

左

顯廣王

見わたせはおまへの沖のなまより幽にまかふあまの釣舟

右勝

道因

眺めやる心をそふるゑしまかな波ちははてもなしと社きけ
左ははしめつかたに。御まへの沖を見わたせはと侍り
つるうたの。文字つゝき少しかはりて。是ははしめの五
文字のことはなれたるやうに侍るにや。右はなかめや
ると置て。なみちは果もなしとこそきけといひすてた
る。すかた最おかしく。心もあはれにこそ見え侍れは。
亦以て右爲勝。

十五番

左

賀茂政平

山のはも見えぬなみちは月も日も海よりいてゝ海に入り

右勝

憲盛

ほのみゆるかたや敷つの浦ならん浪まに浮ふまつの村たち

左歌山のはも見えぬなみちにとおもひよれるこゝろ。

いとおかしく侍り。なみよりいてゝなみにこそいれと
いへるも。こゝろかはりたるにや。右歌一番のうたにや。
またこの心侍りつれと。かたや敷津の浦ならんといへ
るすかた。最よろしくこそ見え侍れ。左は風情あり。右
はすかたおかしく思ひわつらひ侍れと。なを浪まにう
かふといへる末の句。おかしく聞ふれは。右の勝と申侍
りぬ。

十六番

左持

賀茂重保

沖つ海やしほちに空のまかふ哉雲まやなみの立かくらん

右

通清

いつかたや行共みえぬあまをふね雲の浪まに果はかくれぬ
左右ともに。眺望の心はかりにして。優にみえ侍り。依

而爲持。

十七番

左持

資隆

波の上にすたく鳥かと思ゆる哉とをさかり行室のともふね

右

左兵衛佐經正

こき出てあれやゑしまと見渡せは波にけたるゝ松のむら立
左歌ことにめつらしきふしにはあらねと。室のともふ
ねのすたく鳥かとみゆらん心。おかしく見ゆ。右歌なみ
にけたるゝまつの村たちなといへる姿ことは。めつら
しくみえ侍れは。いづれもとりにて持と申へし。

十八番

左持

廣季

見渡せはおきの鹽ちに雲とちて空か海かとわきそかねつる

右 廣 言

わたのはら雲井はるかにこき出て夕日にまかふ朱のそほ舟
左はこと葉ふり姿さひて。よろしき歌といひつへし。右
は朱のそほ舟夕日の空にまかへたるこゝろ。おかしく
見ゆ。題の心はおなし。歌のすかたはとりくなり。
よりてまた持とす。

十九番

左持 親 重

はるくさ嶋つたひする藻刈舟やかて雲のなみに消ぬる

右 朝 宗

和田のはら遙に出る海人舟はくものなみをも分る也けり
左のもかり舟。右のつりするあま。なみに消。雲をわけ
たる。詞はかりそかはりて侍れと。題の心歌のほと同し
く見ゆ。なをまた持とす。

二十番

左持 季 廣

嶋かくれ見えみ見えすみ行舟のはては雲井に消そしにける

右 伊 綱

はるくとなみちこき行舟よりも風に先たつかこの聲かな
左歌すかた心はかすかに侍り。末の句のことはつゝき
そいかにそや。さらてもと聞え侍る。右歌は心めつらし
く。詞おかしく侍るを。かこのこゑのさきたゝんこと。
眺望の爲はそのよしなくや侍らん。いつれまさらむこ
とはいかゝとて。また前のことく云々。

廿一番

左持 顯 綱

和田の原なみにをりぬるしら雲の晴れはそらに汀なりけり

右 隆 親

遙々とおきつしほちを見わたせは雲井に消るあまの釣舟
左右ともに。題の心さきくも侍り。同心なるにとりて。
ひたりは汀なりけるといへるや。あまりさへてきこ
ゆ。右はまたおきつしほちにといひ。雲にまかふを。
是は消るとよまれたることそ。かはりて侍りける。これ
はさらてもありぬへけれと。難には及はず。猶持とすへ
し。

廿二番

左勝 仲 綱

海はらや雲はるかに漕舟を浮木にのれる人かとそみる

右 佐

おほつかな行か歸るかあまを舟見えみ見えすみ浪隠れして
左のうきゝにのれる。是亦蜀部靈拈張鸞か漢に昇しか
とうたかへる成へし。心おかしく侍るめり。人かとそ見
るといへるや。少さへたるやうにきこゆれと。唯張鸞
かうきゝにやといへる成へし。右歌はことなる難なと
は侍らねと。唯云ひわたしたる心ちして。無下にさせる
ふしなくや侍らん。依て左の勝と申へきにや。

廿三番

左持 季 定

漕はなれしほちを行はあはち嶋かくるゝまてと詠つる哉

右 廣 盛

浪こしにやへのしほちを見わたせは海人の友ふね数そ消行

左歌すかたはよろしとみえ侍るを。下の句や。かくるゝ迄もかへり見しはやといへる名歌の句いて侍れは。いかゝと聞え侍る也。歌は古歌一二句なとは常のことなれと。さくらちるなとをくことは。はゝかるへく侍る也。右歌もうたさまおかしくけ侍るを。なみこしにと置ては。其嶋此山なとそあらまほしき。やへのしほちも波路なれは。おなし事のやうにや侍らん。是もつねの例に持とすへし。

廿四番

左

和田のはら浪ちはるかに行舟のやゝ見るまゝに雲に消ぬる

右勝

邦 輔
安 心

もしほやくけふり立らし見わたせは薄雲まかふ淡路しま山
左すかたは優に侍めり。雲にきゆるこゝろ。今はあまりにめなれ侍りて。とかく申やりかたくなりてはへる。右このうす雲は。煙たつらしと置て。うす雲まかふといへる。よろしくみえ侍り。以て右かちと申へし。

廿五番

左勝

詠こし天津雲ぬはなた舟のこき行ききにありける物を

右

懷 綱
祐 盛

白雲に續くしほ路をなかむれはいつれを雲とえ社見わかね
左右いつれもよろしき歌とは見えなから。右はあまた見え侍る。歌とも雲と浪とにまつはれて。おもひわけかたく侍る上に。つゝくしほちをといへる。聞よくもあらぬにや。左はなた舟また優にしもあらねと。なかめこし

天津雲井はなといへるこゝろ。よろしく見え侍れは。左の勝と申侍りぬ。

廿六番

左持

懷 能

なこのうみのしほちはるかに詠れは雲たちまじる沖つ白浪

右

憲 綱

海人をふね千里のなみに漕ちれは釣のこゝろやひとつ成覽
左さき／＼のおなし心に侍るにとりて。末の句。雲ゐにまかふおきつしらなみといへる。詞花集の歌に。たち交るはかりやかはれり。「右は珍らしきさまには侍るを。釣の心。眺望には用なくや侍」らん。また波を千里ともいふは。つねのことなれと。海のおもてを千里とよまむことは。少し先達ゆるさゝるやうにそおほえ侍れと。おもき難にはあらし。但歌のほと持なるへし。

廿七番

左

智 經

沖つ洲に潮やみつらんあさりする芦まの田鶴の立騒くめる

右勝

經 平

わたの原すまのなみちを見渡せは浦つたひして月も宿れる
このつかひの歌。左右ともによろしくはみえ侍るを。二首の末のことはに。左はさくめるとをき。右は宿れるといへる。ともに木にとまるこゝちそし侍れと。猶右の須磨のなみちを見わたせはといへる。姿優にきこゆ。仍て右の勝と申へし。

廿八番

左持

性 阿

廣田よりあかしを越して眺むればふしまか磯にさはく白浪

右 淨縁

あれやこの海士の住てふ浦ならんたくもの煙空にしろしも
左心ことはおかしくは侍るを。廣田よりとをかれたる
はしめの句。あまりたしかなるこゝちやすらん。末のふ
しまか磯にさはくしら波も。なとさはくそきこゆる。右
歌下句のたくものけふり空にしろしといへるは。古
き姿に侍るを。上句にあれやこのとをけるや。おなし歌
のすかたとも覺侍らす。ふかき難にはあらねと。たかひ
にかやうの事の見え侍れば。持と申へきにや。

廿九番

左 中納言

武庫の浦の沖のうけ舟近づけはともさそふなり海士の呼聲

右勝 素覺

武庫が崎うらより遠にこき行はこしかたははや霞けらしな
左歌こゝろおかしくは侍るを、眺望の心やすくなくて。
あまの友さそふ詞やすみ侍らん。右歌は末のけら
しな。いかにそきこえ侍れと。浦より遠になといへるわ
たり。よろしくや侍らん。依右之勝と申侍るへし。

一番 述懐

左 按察使公通

幾とせに春にしられて成ぬらん老木に花はいつかさくへき

右勝 大貳重家

うきなからいとひは果し後の世も是に増らん物ならなくに
左右の歌。いづれもさる事ときこえて。とり／＼におか
しく侍る。但左歌いくとせにと置て。末にいつか咲へき

と侍るや。いづれの字おなし心に侍らん。もし然らは右
歌させる難なし。勝と申へきにや。

二番

左 實定

さりととも松をたのみて月日のみすきの早くも老ぬへき哉

右勝 頼政

思へ唯神にもあらぬえひすたに知なるものを物のあはれは
左歌まつをたのみてなといへるすかた。最おかしく侍
り。松杉なといへるや。これかれにかゝりたるやうに侍
らん。右歌はことかはり。あらぬ姿のこと葉つかひなと
もおかしくこそきこえ侍れ。これは同「同じ」巷の郢曲の中
に。えひすたにものゝ哀なりとうたふ歌の侍るなるへ
し。かれをひきて。神にもあらぬえひすたにといへるう
たの姿。いさおかしく聞え侍るなり。但詞少俗に近くや
侍らん。されと神の御名もかゝりて侍れば。以て右勝と
申へし。

三番

左持 小侍従

君か代にあふせ嬉しき石清水すむにかひあるなけれ共かな

右 實房

とに角に哀むかしにあらませはと思ふことのみ數積りつゝ
左君かよにあふせうれしき石しみつとよまれたるかた
かたに。いかてか歌に負侍らん。右こゝろこもりて。何
となく哀にもきこえ侍るものかな。但左歌勝負はゝか
りあり。持なとにや侍らん。

四番

左勝 實 國

あまくたる神の恵のしるしあらは星のくらゐも猶のほり南

右 師 光

行末にかゝらん身共しらすして我たらちねの生したてけん

左天降とをき。星のくらゐもなと侍る風情。いとおかし
くも侍るかな。右ことはの花をかさらす。ことのはに見
せて。直々といひくたされて侍れと。けにさることゝき
こえて。あひなくよそのたもとまでしほるゝ心ちなん
し侍り。但兩首の意趣懸隔なるうへに。左すかたなをお
かし。仍爲勝。

五番

左持 觀 蓮

此世には數ならずとも九品わくるはちすの身とも成りなむ

右 實 綱

くらゐ山のほれはくたる吾身哉もかみ川こく舟ならなくに

左は蓮臺の有(宿イ)縁うたかひなく。右は棘路の昇進た
のみおほく。現當雖異。後憑已同。依爲持。

六番

左勝 三河内侍

をしなへて心ひろ田の神ならはかゝる囊身を恵まさらめや

右 實 守

けふ結ふちきりは終に夢さめん後の世までもたのもしき哉

左歌こゝろ廣田の神ならはといへる。まことのうき身
のためと。たのもしく覺え侍り。右歌けふのやまこと
のはのちきりは。長夜の夢覺んよまでのたのみとなる
らんこと。まことにしかあるへき事なり。但左猶當社を

七番

左持 俊 惠

なにしおはゝ西てふ神を頼み置んそなたを終に願ふ身なれ

右 俊 成

千早振神に手向ることのははこん世の道のしるへともなれ
左歌にしてふ神をたのみ置んといへる。すかたおかし
く。こゝろ哀にこそ侍れ。右歌は身しつみよはひくれぬ
るものゝ。述懷の題にあふことは。愁をのへ胸をやすむ
へきたよりには侍れと。身の愁のこと。今は中々にまか
りなりて。申にもをよはす侍れは。たゞけふのこのの葉
の手向によりて。かへして當來世々の轉法輪の縁とせ
んとばかりを。おもふ給へ侍るを。左はすかたといとおか
しく侍れと。心さし同じすちなるさまに見え侍るに付
て。持をや乞へく侍らんとそおもふ給へ侍る。

八番

左持 成 範

ふたつなき法のおしへを背つゝいく度六のみちにまといぬ

右 盛 方

哀てふ人もなき身をうしとても我さへいかゝ厭ひはつへき
左歌法のおしへをそむきつゝといへる姿。いとおかし
くそ侍るめれ。右歌かやうの心なる歌は。少きゝなれた
るやうには侍れと。われさへいかゝなといへるすかた。
これもいと哀にきこえて。いつれともおもひわけかた
く侍れは。なをまた持と申へきにや。

九番

左持

實家

昔よりめくみ廣田の神ならはさりとも秋のこゝろしるらむ

右

登蓮

いつ迄と吾世のほとを頼みつゝはかなくす月日成らん

左歌めくみひろたのなといへるこゝろ。あまた見え侍

るめる中に。秋の心をよせられて侍るは。いとおかし

こそ侍るなれ。宜下將愁字一作秋心といへる詩のこゝ

ろなるへし。右歌こと葉にはなをもとめ。文に玉をか

らされとも。ことはつゝき文字すくなに聞えて。よろ

しくこそ見え侍れ。誠之至深者其詞无詞。文之偏質者其

躰少躰といひて。是ひとつのすかたに侍るへし。左は

さり共あきのこゝろといへる。心哀れにきこゆ。右は

なくすくす月日なるらんとよめる。姿叶躰。仍亦爲持。

十番

左勝

大輔

身のほとと思ふさかりはいはれねとしる覽ものを神の慮に

右

經盛

ねき事をわきて哀とおもひなん神のめくみはあまねけれ共

左歌ことは外にあらはさされとも。心内にこもりて優

に聞え侍り。右うたもさることなりと聞えて。難なくは

侍れと。左猶思ふはかりはなといへる。姿よろしくみえ

侍り。仍左のかちと申侍へし。

十一番

左持

實宗

吾君の長閑き御代につかへても神のめくみを頼むとをしれ

右

隆信

白濱のまさこの數にあらぬ身もめくみ廣田の名をたのむ哉

左歌外者聖朝の事。内者神徳を仰く。まことにしかある

へきことと聞えて。いとおかしこそ侍れ。是難題のう

たの躰なるへし。ことのとゝのほりたゝしく。世をほめ

て神に告るといへる。まことにかくこそ侍らめとみえ

たれ。右歌ことなる事はなれとも。御前の濱の眞砂に

吾身をよそへて。神のめくみをたのめるこゝろ。程につ

けておなしや侍らむとて。持と申侍るへし。

十二番

左勝

頼實

けふまてはかくて暮しつ行末をめくみ廣田の神にまかせむ

右

季經

厭ひつゝ捨もやられぬうき身哉あやしたれか惜むる覽

左歌かくてくらしつ行末をといひて。めくみ廣田の神

にまかせんと侍る。文字つゝきいとおかしも侍るか

な。右歌いとひつゝ捨もやられぬうき身かなといひを

きて。あやしやたれかとすつらて侍るこゝろ。またいと

あはれにこそ見え侍れ。このつかひまことにおもひみ

たれ侍りぬ。たゝし左歌。神をかけ奉られたる上に。歌

のこゝろ行末遠く見え侍り。よりてなを以て左爲勝。

十三番

左勝

脩範

徒にうき世もなかは過るまでをくりむかふる果そゆかしき

右

寂念

ね覺してものを悲しき昔見し人はこの世にあるそすくなき

左歌うき世も半ずくるまでといへるわたり。よろしく

こそきこえ侍れ。右歌はすかたさひて心ほそく。けにさることやと聞え侍るを。かなしきとをき。あるそすくなきといへる。そのをきの字おなしさまにそ聞え侍る。歌あはせにはさるへきこと成へし。左は末の床しきといふことはや。少しいかにそおほえ侍れと。あれは餘りのこと也。以レ左勝と申へし。

十四番

左

顯廣王

昔よりちかひ廣田の神なれは祈るいのりもなるをとそきく

右

道因

住のえに武庫のうら風立そひて二度神のめくみをそ待左右のうた。いみしくおかしくこそ見え侍れ。左のちかひ廣田の神なれはとをきて。祈るいのりもなるをとそきくといへる。此たひの歌あはせに。かならずあるへかりけることかなとこそ聞え侍れ。右またふたゝひ神のめくみをそまつといへる。心すかたまことに哀に見え侍れは。此番の勝負は。神慮にまかすへし。仍不レ加ニ愚判ニ了。

十五番

左持

賀茂政平

なからへて世にある事は津の國の生田の杜の名に社有けれ

右

憲盛

數ふれは八十年さかひたらちねのかけにかくれて身社老ぬれ左歌すかた詞つかひはおかしく見え侍り。名にこそ有けれといへるこゝろそ。いともこゝろえられ侍らねと。おほ心は見えて侍るへし。右歌ことによそへたる事な

とそ見え侍らねと。歌の心あはれに見え侍り。左歌も生田のもりなと侍れは。尙持と申へし。

十六番

左驛

賀茂重保

いつまてか朽木の花に身をなして心のはるを待へかるらん

右

道清

世をわたる橋をたつねてつのにのなからへ行と神は知覽左心姿おかしくこそ見え侍れ。右もなからへゆくと神は知らんといへる。心はあはれに侍るを。はしめつかたの詞や。なをくちきの花に身をなしてといへるは。よろしく聞え侍らん。依左の勝とす。

十七番

左持

資隆

西にのみはこふ心のしるしをはそなたに今は神に祈らん

右

經正

むらさきのゆかりの袖はなりはてし吾のみ朱の色そ變らぬ左西方の運心をそなたの神にいのり。右は紫のそての中にあけの色を愁へられて侍る。ひとつは哀にひとつはめつらし。ことのこゝろたかへりといへとも。うたのほとおかしくみゆ。仍爲レ持。

十八番

左

廣季

位山高根の雲をよそに見てかゝる身とたに知られぬさうき

右驛

廣言

いかにせん八竝ならぬ水無頼川さすかに世には住渡りつゝ左歌かゝる身とたになといへる。姿いともよろしくこ

そみえ侍れ。但たかねの雲やすこしあまりに聞ゆらむ。
されと諸道につけて道をきはめ。いへをおこすものを
も。たかねの雲ととかはいはさらんや。右歌の水無頼
川はこゝろ詞かなひておかしくもみゆ。勝と申へし。

十九番

左持

親重

いかにせん頼みし水のたえぬれは身を浮草のよる方そなき

右

朝宗

數ならぬ心にたにもいとはれて置所なき身とそなりぬる
左右のうた。心すかたとりくにして。優に聞ゆ。持と
すへし。

二十番

左持

季廣

歎かぬもなけくも夢を見るたひに驚きながら驚かぬかな

右

伊綱

かこつへき方もなき身の愁をはこゝろ廣田の神そしるらん

左歌よろしと聞え侍り。中の五文字や。少しさへて聞
ゆらん。右歌上句におもひあまれる心見えて。いと哀に
こそ侍れ。終の句の知らむといへるや。なを思はまほし
く侍らむ。又持と申へし。

廿一番

左持

顯綱

うきに猶せめてもおしむ此世かな背く心のかゝらましかは

右

隆親

つの國の難波のことも憂身には芹の枯はをよそにやはみる
左歌心文字つかひいとおかしく。しるてもおしむとや

いはまほしく侍らん。右すかた詞優に聞えて。させると
かなし。仍勝負わかちかたし。亦爲持。

廿二番

左

仲綱

天降る神にとはゝやなそもかくをりてのほらぬ雲の梯

右勝

佐

ひとすしに頼てかくるゆふたすきなかき愁を神やしる覽
左歌すかた心はおかしく侍るを。あまくたると置て。ま
たをりてのほらぬといへるや。おなしことのやうに侍
らん。右のゆふたすきは。めつらしき事にあらねと。さ
せる難なし。勝と申へきにや。

廿三番

左勝

季定

なけきあまり山に入とも身のうさの先さきたちて我を待覽

右

廣盛

くらゐ山立ものほらぬ身にあれはうらやまれけり峯の白雲
左うた。我を待らむといへる心。いとおかしくこそ侍れ。
右歌末の句なとよろしくは侍るを。み文字やまひに侍
り。これはおもき科にはあらねと。少の疵をもとめてこ
そは。勝負をしるし侍らめとて。しるてもとめ侍る也。

依左勝と申へし。

廿四番

左持

邦輔

うきながら身をは流石に捨てて過たぬ世を恨みてそふる

右

安心

世をすくふえひすの神の誓にはもらさし物を數ならぬみも

左身をはきすかになといへるすかた。おかしくみえ侍れ。右歌はすくふころ少しかひたるやうにぞ聞え侍れと。えひすの神をかけたてまつりて。歌にまくへきにあらす。持なとにや侍らむ。

廿五番

左

徒にとしはみそちにあまりても身は數ならぬ歎をそする

右勝

懷 綱 祐 盛

數ならぬ言のはみては嬉しけれうき身も人にしろめと思へは左歌ころ詞おかしくは見え侍り。壯年の時は潘岳かよはひにをよふも。さこそはおほゆることに侍れと。あれをうらやむ人もおほく侍らんかし。右歌はうき身も人といへるころ。おかしくこそ侍るなれ。かの能因法師をいふ詞に。心花山のあとをねかひて。こと葉人にしられたりといへることを思ふに。心おこりに侍るへし。歌もけによろしく聞ゆ。右の勝と申へし。

廿六番

左持

懷 能

うしとてもこはたか爲にともすれは吾身をいとふ心なる覽

右

憲 綱

かくてのみ朽はか下に埋もるゝ此身は神よあはれならすや左歌の心ことはつかひおかしくみえ侍り。右くち葉か下に埋もり。此身は神よなといへるすかた。またわりなく見ゆ。仍爲レ持。

廿七番

左持

智 經

よの中に置所なく思ふ身は廣田の神をたのむはかりそ

右

經 平

鳥のゐし昔にかへれ勝間田のいけるかひなき身をも歎かん左歌心すかた優にこそみえ侍れ。右歌のむかしにかへれかつまたのと云ることはこそ。いと哀に侍れ。是は勝とも申侍るへきを。左うるはしく侍るうへに。末の句のことは。歌にまくへきにあらす。また持とす。

廿八番

左持

性 阿

名にしおへは頼そかくる西の宮そなたにわれを導けやとて

右

淨 緣

葛城やすかのはしのき入ぬ共うき名は猶や世にとまりなん左は初の七番のつかひにや侍る歌の。詞つゝきいさゝかかはれるに侍めり。右はすかのはしのきなといへるすかた。幽玄にこそ聞え侍れ。但いづれも心のおもむき哀に見ゆ。尙また持と申侍へし。

廿九番

左勝

中 納言

水底に吾身は沈みはてぬれはうき名を流すせゝそかはらぬ

右

素 覺

花さかぬ吾老木には年をへて身のなるさまを怪しかりける左歌水底にしつめる心。哀にこそみえ侍れ。濱の南の神感さためて侍らんや。右歌の老木の身のあやしくなる事。けにさることゝはおもひしらるれと。なを左の我身はしつみはてぬれはといへる。哀ふかくすかたおかし。よりて爲レ持。

しきしまや道はたかへす思へとも人こそわかぬ神やしる覽

承安二年十月十七日加判之。如レ令馳レ筆不レ能ニ沈思。後見雖レ有レ恥。仍恐ニ神慮ニ也。

三井寺新羅社歌合 承安三年八月十五夜

題

遙見山花

古郷郭公

湖上月

野宿雪

談合友戀

作者

左

中納言君法性寺石嗣法禪房

阿闍梨蓮忠三乃聖護院住

阿闍梨證兼丹後守爲盛息

肥後君明智

藏人君賢辰

常陸公道禪

帥君信親

佐君良敏

講師

佐公良敏

講師

藏人公賢辰

判者

從三位行皇太后宮大夫俊成卿

一番 遙見山花

左勝

よしの山木々のこするにゐる雲は花の盛のよそめなりけり

中納言君

右

少輔君三井寺南院執行房住教智律師房

阿闍梨泰覺泰尋法橋息

阿闍梨親實大臣伊實息

大進君智退

讃岐君觀宗

出羽公長照

少將君智經俊忠息

淡路君忠勝

右

少輔君

みよしのゝ水わけ山のたかねよりこす白波や花のゆふはへ

左歌すかた心優に侍めり。但木々の梢にといへるや。雲

も各別ならんやうにきこゆらん。右歌みつわけ山のさ

置て。こすしら波にまかへたる。心はおかしきを。末に

花のゆふはへといへるや。ついてなくきこゆらん。左の

木々のこする。深きなんにあらず。勝と申へし。

二番

左

阿闍梨蓮忠

よそめには雲にまかひぬ山櫻あらぬかそかは行て社みめ

右勝

阿闍梨泰覺

白雲にひとつに見ゆる山さくらいつくか花のきはめ成らむ

左歌さまおかしくはみゆ。第四句にそかはといへるこ

とはや。すこし不足ならん。それかあらぬかなとそ。ふ

るくも詠るかし。右のいつくかはなのきはめならんと

いへる。すかたいとおかし。はるかにきはもなくあら

む。かの白毫の光の萬八千世界をてらしゝ心ちして。は

るかにきこゆ。右爲勝。

三番

左持

阿闍梨證兼

都いてゝゆかは山ちに日やくれんよそめの花にあかぬ東雲

右

阿闍梨親實

すか原や伏見の里に駒とめてをはつせ山の花をみるかな

左歌はるかといふ字を詠る。すかたおかしきを。あかぬ

しのゝめとむすはせるほと。すこしついてなきやうに

侍らん。右歌かの後撰集にふし見のくれを見わたせば

といふ歌をそ。きゝすこせるにやあらん。ちかくあるところ歌あはせにも。かやうなる歌侍しにや。仍すかたまさりて事ふりたり。准_レ之爲_レ持。

四番

左持

明 智

雲のゐるをちの高根の櫻はな咲もさかぬもわかれさりけり

右

智 暹

遅くとき花やさくらんよしの山處さためぬやへのしら雲

左のさくさかぬといひ。右の遅くときといへる。風脉已等。雲望忽同によりて。爲_レ持。

五番

左持

賢 辰

春かせにかつちりぬらしさくら花かゝりもやらぬ嶺の白雲

右

觀 宗

たくひなき匂ひなれ共よそにては雲に見まかふ山櫻哉

左は春風且零落。峯雲不_レ懸_レ遠といへる。心はことなる事なけれど。すかたいとおかし。右は花匂無_ニ比類。雲色猶相混といへる。心はおかしきを。見まかふといふことは。すこしたえずやあらむ。左右雖_レ有_ニ得失。勝負已不_ニ分明。なをまた持なるへし。

六番

左

道 禪

みよし野の花はよのまに咲にけり峰に朝ゐるやへの白雲

右持

長 照

梓弓はるかに見ゆる白雲はいるさの山のさくらなりけり左のうた。末の句のことはつゝきなど。いとよろしくは

きこえ侍るを。上にみよしのとをき。下に峯といへる。句のはしめ文字同は舊歌合にも。少しとかめたることなるへし。右歌遙の字をさへてよまれたるそ。落るところなきこゝちすれと。あつさ弓とをき。いるさの山なと侍る。めつらしきことにはあらぬと。また云しれるに似たり。左吹毛なりといへ共。見ゆる所あるによりて。以_レ右爲_レ勝。

七番

左持

信 親

よそにのみ雲とそ見まし山さくら匂ひを送る風なかりせは

右

智 經

あさ霞はれぬと見れば立かはる雲は高根のさくら成けりこの番。兩首共にいへるすかた。よろしくは覺え侍れと。

猶左の。にほひををくるといへる。かの春の山へはとをけれとゝいふふることと思ひ出られて。にほひそへる心ちす。左の勝と申へし。

八番

左

良 敏

よそにたゞ眺めをやらん山櫻ちかきは花のおらまほしさに

右持

忠 勝

咲にけりたかまの山の櫻はなおなし梢にはれぬしら雲左題をよめる心はおかしきこゆれと。はなのもととはおらまほしとて。よそにてやみなん。あひなくやあらむ。

右おなし木す原にといへる姿こそ。峰のしらくもはつねのことなれと。たかまの山はことに侍るにや。よりて以_レ右爲_レ勝。

一番 故郷郭公

左持

なには瀉あさこき行は時鳥聲をたかつの宮に鳴也

右

少輔公

故さとのみかきの原のほととぎす聲は昔にへたてさりけり

左歌詞存ニ古風。近代入ニ幽玄。但郭公高聲。強非ニ其庶幾一

歟。右歌すかた心よろしくは見え侍るを。かの石上ふる

きみやこのほととぎすといへる素性が歌に。通すきて

や侍らむ。但是はみかきかはらとをきて。昔にへたてす

といへるこそ。物上手のしわざと見え侍れ。されと古き

二番

左持

蓮 忠

ほととぎす過かてになく故郷をいかてか人の住あらしけん

右

泰 覺

古を思ひいて、やほととぎす聲をたかつの宮になく覽

此つかひ。ともにゆうにこそ侍れ。各ふるさとおもへ

るこゝろ。かの箕子之作ニ麥秀詩。周大夫之成ニ黍離章。

みなこの心なるへし。高津宮も古なおもひ出やといひ

ては。今少しよくきこゆなるへし。いつれも。何となく

三番

左

證 兼

こゑはかり昔といひしことのはに露もたかはぬ旅の空かな

右勝

親 實

けふこゝに初ねをそきく時鳥なきふると人はいへとも

左のうたから。聲はかりこそむかしなりけれといへる

歌を。本歌とせるなるへし。かゝる様も侍事なれと。歌

あはせの時は。猶あまりかすかにやあらむ。右歌はつね

をそきくとおきて。鳴ふる里と人はいへ共といへる。い

とおかし。右の勝と申へし。

四番

左持

明 智

すたきけむひとをやしのふ時鳥あれ行里に猶きなくなり

右

智 暹

あれ果るたかつの宮の子規なにはのこともかなしとやなく

左右兩首。心同詞優也。但不ニ委細。故爲レ持レ之。

五番

左勝

賢 辰

里はあれて人はふりにし哀をもしりかほになく時鳥かな

右

觀 宗

浅ちふのかきほにすたく蜀魂なれも言やおもひいつらむ

左歌かの庭もまかきもといへる歌を本歌とせる。心は

おかしくは見ゆ。但古今の本歌の五七句を。そのまゝに

をかんことや。歌あはせのときはなを思唯あるへく侍

らむ。右歌郭公をすたくとよめること。きゝなれすやあ

らん。あさちふのかきほもいかゝ。猶左の勝とや申へか

六番

左勝

道 禪

故さとの花たちはなに時鳥むかしをしのふ聲きこゆなり

右

長 照

すむ人もなき故里にほととぎす昔をしのふ音をやなくらん
二首のほととぎす。共にわかれをしのふる。心すかたま
たおなしくいうにみゆるを。左は花たちはなと置るに。
句ひくはゝりてきこゆ。仍又左爲勝。

七番

左勝

信

親

すみなれし里はみしよにあらね共山時鳥こゑはふりせす

右

智

經

あれにける宿の梢にほととぎすたれをあるしと名乗行らん
左歌郷里跡已變。山鳥聲獨新といへる。こゝろすかた
うに見ゆ。右歌やとのこすゑになといへるはよろしき
を。名乗はあるしにやばとそきこゆる。左のかちなるへ
し。

八番

左勝

良

敏

すむ人もなき故郷の郭公たれとかたらふ聲にかあるらん
右 忠 勝

あれ果て人もすさめぬ故郷に誰とかたらふほととぎすそは
左右のほととぎすたれとかたらふといへる。心はおな
しきを。猶左はこと葉つかひ少しばまされるなるへし。
かやうのことは。いくはくかはれることやはなといふ
人ありぬへきことなれと。かの法花の弟子品文にや。天
見人人見天と釋せるを。人天交接兩得相見といひ
つれば。いますこしめてたくきこゆる様に。詞心もすこ
しきよくなりぬれば。勝負いてくる事に侍る也。仍左
の勝とす。

一番

左勝

湖上月

中納言君

夜もすから志賀の浦和に月すめは水も結はぬ氷しにけり

右

少輔公

見わたせばめも遙かなる水海にみちてもすめる夜はの月哉
左歌ことなるとかなく。優に侍めり。右歌みちてもすめ
るなといへる末の句は。いとおかしきを。めもはるかな
るなといへるそ。目のことはや。歌合の時の歌にはいか
かと聞え侍らむ。左の勝なるへし。

二番

左持

蓮 忠

月きよみしかの浦人沖にいてゝ舟はたたく袖そくれぬる

右

泰 覺

すはの海やすからさゆる月影をかちわたりする氷とそみる
左はしかのうらに釣漁の舟をのそみ。右はすはの海に
かちわたりのこほりかとうたかへる。心とことることな
れと。歌のしなおなし。持と見えたり。

三番

左持

證 兼

さゝなみやしかの浦わに風すみて宿れる月ものときかり鬼

右

親 實

月影のあふみの海にみちぬればふたもおほはぬ鏡とそみる
左歌すかたはよろしくみゆ。かせ澄てといへるや。月す
みて風はのとかなりとやあるへからむとそきこゆる。
右歌心こと葉おかしきはきこゆるを。鏡匣あまりにこ
たいにやあらむ。尙また持とすへきにや。

四番

左持

明智

秋のよは余古の入えに澄月をさえぬつらゝと思ひける哉

右

智暹

夜もすかしかつの浦による玉や波ちはるかに照す月かけ

左右ともに。姿心おかしきはきこえ侍。但左さえぬつら

らといへる。月をもさゆとそいはまほしき。されと是は。

ことにさむからぬ心なるへし。右は波ちはるかにとい

へる。姿はよろしきを。夜もすから玉のよらむことやい

かゝ。かの孟嘗君か(尹)浦にかへりしたまもひとつ也。

是もまた持とす。

五番

左

賢辰

鴉の海くにつみかみの浦かけて波ちもさやに照す月かけ

右勝

觀宗

唐さきやしかの浦わに月すめははるかにうたふ沖の釣舟

此兩首。とかくにおかしく社見え侍れ。古風躰。猶故實。

いひしりて見ゆ。右はことなくいひくたしたるさまな

から。新羅の御まへより眺望しくたしたらむ。さこそは

侍らめと。見るやうに侍うへに。棹歌一曲釣漁翁といへ

る詩の心とおほえて。心ほそきこゆ。右はいさゝかは

まさり侍らむ。

六番

左持

道禪

唐崎やえかたの波やあやの上にうつしてそみる秋のよの月

右

長照

月清み汀の波のをとせすは氷れるしかの浦と見てまし

左えかたのなみのなといへるけしき。最おかしうふる

まへる歌なるへし。右ことなる事はなけれとも。こほれ

るしかのなといへる末の句も。よろしくきこゆ。とりと

りなるによりて。亦持とす。

七番

左勝

信親

おほそらとひとつにすめる湖のなみちより社月はいてけれ

右

智經

さゝ波やひらの高ねに月すめはしかつの沖に雪を消えせぬ

波ちよりこそといへるは。姿心いとよろし。但月いてゝ

後や澄むへからんとそきこゆれと。空も湖も。かれてす

まんことなとか。しかつのおきは月をすませて。比良の

高根にや雪はつもるへからむとそ聞ゆれと。おきにも

雪のきえぬかと思えんも。またいかゝは。猶左のひとつ

にすめるといへる。姿すこしは増り侍らん。

八番

左持

良敏

くまもなき月は氷と見えなからさゝ波よする志賀の辛崎

右

忠勝

から崎や月影やとすあきのよは心もなみのうへにこそすめ

左さゝ波によするなどは。常にきゝなれたることなれ

と。月はこほりなといへる姿の優に侍るめり。右月影や

とすなといへるは。少しあたらしきやうなれと。こゝろ

もなみのといへる末の句は。またよろし。是をはからふ

に。猶持なるへし。

一番 野宿雪

左持

中納言君

雪深き草のまくらを結ふかな秋もはなゆへ旅ねせし野に

右

少輔公

野へもせに雪降に鬼むへしこそ尾花かりしく床はさえけれ

左歌あきのたひねそ題の外のこと。よしなけれとえんにはきこゆ。右歌おはななとかりしけらむ旅のいほに。床さえことに雪ふるとしらさんやはとそきこゆれと。歌さまは。これもいふなるへし。持とす。

二番

左持

蓮忠

眞柴かりいほさしやとる宮城野にきたけを寒き雪降にけり

右

泰覺

あはつのに眞柴おりかけ庵してわかふす床に雪そ降しく
左右のましはのいほり。宮城のあはつの所名〔已同。科無ニ差別ニ猶爲ノ持。〕

三番

左持

證兼

雪ふかき枯のゝ野への旅ねこそ哀をそふるかきりなりけれ

右

親實

かりそめと思ひしのへの草の庵に雪も日数もつもりぬる哉
左のかれ野の旅ね。あはれもけにさることゝきこゆ。右の雪も日数もといへることそ。見侍し心ちすれと。さしておほえ侍らす。かゝることなくは。歌さまはおかしかるへし。但雪つむとも。野邊廬に日数をさへつまんこと。いかゝ。左の枯野の野へ。させるふしはなけれと。あは

四番

左

明智

いほりさす野へのしら雪積りつゝ草のまくらに花咲にけり

右持

智暹

道見えす雪降にけり踏わけて行人をまで野ちの朝立
兩首の風跡。雖爲ニ同科。左の草まぐらの花。少しついでなくやあらむ。右は猶旅宿之徒類。則ニ前達之行人。さもあることゝ聞ゆ。右の勝なるへし。

五番

左持

賢辰

かりてふく野原のをかや雪つみて庵にわつらふ草まぐら哉

右

觀宗

山おろしにゐなのさゝ原吹雪してねさめかちなる雪の下伏
左すかたは優に見ゆ。庵にわつらふといへるまでに。歌の心はきこえぬるを。かさねて草まぐらかなといへる事。重疊してやきこゆらん。右上の句のふるまひ。草なとのこゝちすらむ。ねさめかちなるも事愚にや。まところみかたくこそ侍らめ。但歌のほと持と見えたり。

六番

左

道禪

いとゝしく旅ねの床の狹筵に雪降つもる野原しのはら

右持

長照

霜かれの小かやかりしき旅ねする野へさへさえて雪降に鬼
左歌いとゝさむきたひねの床に。野原しのはらゆきつむといへるなるへしとはみゆれと。狹筵に雪積るやう

にそ見え侍る。さらは野原しのはらよしなくや。右歌は
野へさへさえてといへる。日かすゆく心やあらまほし
からむ。但右すこしは勝へし。

七番

左持

信 親

夜もすから雪のうはきは重ぬれとさえ社勝れ野への旅ねは

右

智 經

あたに社のへのかり庵は結びつれ思はぬよはの雪のうはふき
左右爲_レ躰。共飭_二其花_一。頗忘_二其實_一歟。雪のうはき。雪の
うはふき。其こゝろまた相似。仍可_レ爲_レ持矣。

八番

左勝

良 敏

庵さす野へのをかやの隙を荒み白むと見れば雪にそ有ける

右

忠 勝

ぬは玉のよはの白雪心せよまはらにさせる野路のいほりを
此つかひ。共にことなるとかなし。いうに侍めるにとり
て。猶左いますこしよろしくきこゆ。勝と申へし。

一番

左

中納言公

散さしと神に誓ひし妹かうへも君はかりにはえ社へたてぬ

右勝

少輔公

白雲のへたてぬ中といひなから空おそろしき戀をきかする
左歌ことなるもしはなれとも。亦させるとかなし。右
空おそろしきや何事そときこゆれと。白雲のへたてぬ
なといへるところ。心よせありて見ゆ。右勝なるへし。

二番

左持

蓮 忠

身をつめはけにさり共や思ふとて戀するとちそ語らはれける

右

泰 覺

君に吾人のつらさを語るまにうき身の程をしられぬる哉

三番

左

證 兼

戀ゆへに語りあはする諸人のこゝろ／＼そおもひしらるゝ

右勝

親 實

あふ事のかたきを君となけくかなかねたつ程の契と思へは
左歌以_レ及_二諸人之風聞_一。比爲_二廣座之露顯_一歟。戀の歌の
常のならひにあらすやあらむ。依_レ之圖_レ之。契談燒_二心
懷_一。其理可_レ然。仍以_レ右爲_レ勝。

四番

左持

明 智

慰むるかたなからまし我戀はへたてぬ中のなき身なりせは

右

智 暹

妹かこといひてなくきむ人もなき人いかにして日を暮す覽
左なしといふところ兩所あり。右殊成難なしといへ共。
歌にかたんことかたくや。猶持なるへし。

五番

左持

賢 辰

いかにそことゝふ人に語る哉戀のやまひのつきしおこりを

右

觀 宗

思ふとちあらましことにしつる哉君にあひみん夜はの契を
左戀の初の病のおこり。右のあひ見む時のあらましこ

と。いつれもこゝろなきにあらす。持とす。

六番 左持 道 禪

吾戀のゆかりにもあらぬ人にさへ君か事のみいふやなになる

右 長 照

へたてなく語り合するかひありて君に逢ふへき戀路をしへよ

兩首の戀。勝負又不明。おほかたは。戀のうたに君と

よむことは。その人にむかひ其人におくるときよむな

るへし。他人に談する時。君字頗荒涼なるにや。是も猶

又持なり。

七番

左 信 親

思ひかねたのむ中とて語れ共あふへき道をいはゝ社あらめ

右勝 智 經

君ならて誰にかいはん吾妹子かうきもつらきしる人をしる

左依爲憑中。雖談殆以可遇路。不指といへる。お

かしきこゆ。右稱芳友爲君。以戀主謂吾妹。こ

ころ又いひしりて見ゆ。但右の末の句。かの友則を本と

せるこゝろ。尙よろしきにや。少しは勝なるへし。

八番

左勝 良 敏

あひみねは我とはいはす君たにも戀しぬへしと又語りせよ

右 忠 勝

戀しさをいひ慰むる人なくは今までいきてなけかさらまし

左歌のまたかたり。友たんかうといはん題のこゝろは。かやうにこそはと。おかしくきこゆ。右ことなるとかは

なければとも。又させるふしなきにたり。よりて以左勝とす。

判者歌

和歌の浦の波に朽ても年へすは新羅の神にしられましやは

先日所給預之歌合。如形加判詞。所進覽也。日來

雖有種種病疾。且難背君命。且依恐神慮。相扶講

功候也。抑近來和語好道家處。多以蜂起。然而自陳事不

驚思給之處。於今度歌合者。殊感與不少者也。三密瑜

伽之壇傍。暫詠柿下之風。一乘止觀之窓前。遙望湖上

之月。即參詣新羅社之廣前。各講誦豐葦原之舊跡。以

更爲分此勝劣。誤被召取愚判。一爲恐一爲悅者歟。

以拙身之虛名。及衆徒之高聞。已可爲今生名譽後世

資糧也。但愚判之趣定不叶衆心候歟。此條聊畏申之

由。可然之樣可下令披露給候也。頓首敬白。

十一月五日 石藏法橋御房

謹上 皇太后宮大夫俊成

右大臣家歌合安元元年十月十日

題

落葉

初雪

曉戀

歌人

左

右

大貳卿

女房丹後領行女

季經朝臣

女房皇嘉門院別當局

經家朝臣

隆信朝臣

基輔

季廣

俊惠法師

右大臣兼實公

判者

清輔朝臣

一番落葉

左勝

大貳卿

右

賴政朝臣

木からしの吹にし日より立田川もみちになれる浪の音哉
ちらしても猶ふく風はいくたひか楢のかしはをかへし行覽
左歌あしくも侍らす。右歌もあしからねと。かみおろし

二番

左勝

女房丹後

右

寂念法師

ちりぬれは紅葉の色に埋もれて谷のむしろにしく物をなき
よしの川もみち流れて岩かうへにくれなる深き浪を越ける
左歌さてもありなん。谷のむしろにしくなといへるも。
便ありて聞ゆ。右歌は古今集に。もみち葉のなかれてと
まるみなとには紅ふかき波やたつらんと云歌侍り。お
なしこと、聞ゆれは。これも左勝にこそは。

三番

左勝

季經朝臣

右

賴輔朝臣

炭竈のあたりに積るもみち葉はこかれし色を深く見えける
板間ふく木のはの音をあやなくももる時雨かと思ひける哉
左歌一興そ有し。右歌板まふくとある五文字。おひたゝ
しくや。良暹法師か。板間よりもりくる月の影みれはや
とはあらしてすむへかりけりとよめるはよき歌を。大
宮禪師懷圓は。歌の五文字と童女のあしからとは。まづ
なたらかなるへしとこそいへれ。板間おひたゝし。貫之
か。あれたる宿の板間よりとよめるは。腰句にかきはさ
めたれはこそ。くせとも聞えねとそ申ける。けにあるこ
となり。いはんやさせる事なからん歌を。もる時雨もす
てにもりきたる心地すれは。かたゝ心ゆかす。可爲
左勝。

四番

左勝

女房 皇嘉門院別當局

一村も枝に木のはのとまらねは庭をそ秋のかた見とはみる

右

小侍 從

もみちちる小川のなみの立たひにきれくになる唐錦かな

右歌もみち散をかはの波といへる。便なき心地に。なを山なとの事あらまほしき。きれくになるといへるも。おひたゝしきやうなれは。左勝とや申へからん。

五番

左持

經家朝臣

庭の面に風に波よるもみちははさらす錦をまぐかとそ見る

右

行 頼

思ひやれ庭のこのはを踏分てとふ人もなきやとのさひしき

左歌句のすゑ。詞の終ににもし侍り。是はふるくもよからぬ事にそ申たるかし。又錦をたゝんなとこそいへ。卷と侍るもいかゝと覺侍り。右歌すかた心ともにあしく

もはへらねと。もみちはそはの事にて。たゝ淋しきことをのみのへられたれは。歌合などにはいかゝとおほゆ

れは。持なとにてや侍るへからん。

六番

左持

隆信朝臣

ちりしをもあはれと聞しもみちはを又うら返す風わたる也

右

仲 綱

散かゝる紅葉か下にふす鹿のうへはなつ毛の心地こそすれ

左歌させる事なくや。うらかへすなと侍るもいかにそや聞ゆ。右歌心はたくみなるやうなれと。夏毛もひとへ

に紅にやは侍るへからん。おひたゝしく聞ゆれは。何とも申かたし。

七番

左勝

基 輔

もみちちる清瀧川をきてみれは錦をつまぬ筏しもなき

右

尹 明

時雨する音はすれとも横の屋のもらぬはおつる木葉なり鬼

左歌清瀧川そよしなく聞ゆれと。すかたはあしくもなし。右歌初句にしくれするといひて。次の句に音はすれともといへる。病にてこそ侍らめとみゆれは。左勝に侍るめり。

八番

左

季 廣

さほ川に峯のもみちを吹かけて波も錦のころもきてけり

右勝

資 忠

紅葉ちる山よりかへる賤の男は誰ためこれるにしき成らん

右歌心は侍るを。紅葉の散かゝりたるよしそあらまほしき。左うたもあしくもなきを。風といふことなくや吹と侍る。いかなると右の方人申されしかは。庭のはなも

との梢に吹かへせちらすのみやは心なるへきといふ歌もなくやはと申しかと。猶人々。歌合はことかはることなりといひとをり申されしかは。右勝に定め申てき。

九番

左

俊恵法師

しなか鳥猪なのしは山吹風におろす紅葉そこやの八重ふき

右勝

道因法師

紅葉ゆへふたゝひつらきあらし哉又庭をさへ拂ふへしやは
左歌おほつかなき事多し。ひとつはしなかな鳥のゐなの
しは山は。ふるき歌の二句なり。いと名歌ならぬはよめ
ることあれと。これは名歌にはへり。就中歌合にはいか
か侍るへからん。するにこやの八重ふきとあるも。なを
花などによせては。やへ葺ともいひてん。もみちはたよ
りなく聞ゆ。又こやの池のやへ葺とそあるへき。かたか
た心得られ侍らす。右歌は心こと葉あしくもあらねは。
勝にこそ侍らめ。

十番

左勝

右大臣

横の屋にたえす音なふ木のはこそ時雨ぬよはの時雨成けれ

右

清輔

閑の上におりくそく村時雨かはける音や木のは成らん

左歌心おかしこと葉清らか也。時雨ぬよはのしくれ
なりけれの句。さはやかにて。相摸御の歌と覺えたり。右
歌わかことなれはにや。させる難はなしと思ひ給ふを。
かはける音こゝろえす。濡たる音いかなるそなと申さ
るゝ人ありし。わりなく侍り。資通大貳歌合に。良勢法
師の歌にも。風にかはける聲きこゆなりとこそよめれ。
但左歌こよなくて。右はまけ侍りぬるにこそ。

一番

左勝

女房別當

めつらしと神もみるらん榊葉に白ゆふかくる今朝のはつ雪

右

小侍從

めつらしく我は待みるはつ雪をいとひやすらん小野の里人

左歌めつらしからぬ心なれとも。よくつゝけられたり。
右歌まち見るといへる詞。いとしもなし。又古歌にきふ
きをこふるをのゝ炭やきと讀るは。冬の來るをはうれ
しき事におもへるにこそ。初雪を厭へしとはおほへす。
大かた歌からも。劣り侍るにや。

二番

左勝

季經朝臣

いつしかと冬のしるしに見ゆる哉雪降にけるみわの杉村

右

頼輔朝臣

木の間もる月の影にも似たる哉はたらにふれる夜半の初雪

左右共に。ふるき心にはへるを。左はすかた歌めきたれ
は。可_レ爲_レ勝歟。

三番

左

女房丹後

けさよりは消んことをそ思ふへき待えて見つる庭の白雪

右勝

寂念法師

霜かれの眞萩か枝そめつらしき遠里をのゝけさしはつ雪

左歌ことなる事なし。右歌まはきかはら。とをさと小野
なといへるあたり。いひなれて聞ゆれば。可_レ勝にこそ。

四番

左勝

經家朝臣

吉野山あをねかみねも白妙にふりそうつめるけさの初雪

右

行頼

いつしかと越路のかたをけさみれば比良の高ねに初雪を降

左歌させる難はへらす。右歌こし路の方をみわたして
ひらの雪をみたる。おほつかなし。彼山はあふみの國と

こそしりて侍れ。こしちに又かくいふ山の有にや。この
ひらならは。あふみちとはいひてん。僻事と聞ゆれは。
左勝に侍り。

五番

左勝

隆信朝臣

さむしろの俄にさゆるあやしさに起てこそみれよはの初雪

右

仲綱

淋しさは兼て降にし山里にならはしかほのけさの初雪

左歌にはかにさゆるそいかゝとおほゆれと。右歌のな
らはしかほのとはへる。なの意よりは。さにてこそは侍
らめとそ見ゆる。

六番

左持

俊恵法師

めつらしく又も見よとや吉野山さくらか枝にふれる白雪

右

道因法師

待つて雪みるけさは故郷のすみ馴しさへめつらしき哉

左歌はめつらしくまたもみよとやと讀るは。春花を見
よとおもひて侍るにや。いとさも聞えずそ。雪をいへる
心地しはへり。心さしうちにあること葉外に顯れす
なとは。かやうの事にや。右歌からはあしからぬを。初
雪のこゝろやなからん。まちつけてといへるにて。初雪
とおもひかたし。いづれもおほつかなき所あれば。持
なにてや侍らん。

七番

左

季廣

霜かれとみしほともなく浅茅生に初雪ふりぬいとゝ淋しも

右勝

資忠

花咲し秋におとらす見ゆる哉枯野かうへにふれるはつ雪
左右ともに。あしくもなきうちに。右は今すこしよしひ
たれは。勝にてや侍るらん。

八番

左

右大臣

初雪のふれるあしたの旅人はみな白菅の小笠をそきる

右勝

清輔朝臣

おしねかる賤のすかきも白妙にはらひもあへず積る初雪
左右歌。同様にきこえ侍るを。田は秋こそかる物にてあ
るを。雪ふらん時はいかゝなと申人ありしかとも。それ
は僻事なり。十月にかかる所おほかりし。おしねといふは。
遅きいねなれば。かけあひてこそと申し侍れ。右勝にこ
そと御氣色侍りき。

九番

左勝

基輔

めつらしや今朝はつ雪に宮城のゝ萩のふるえに花咲にけり

右

尹明

今日よりは谷の岩道雪ふりて跡たえぬへき深山邊の里
左歌萩のはなは白くやはさく。雪におもひまかふへか
らすと。人々申されしかと。雪は花に似たる物なれば。
色までの事はあまりにや。又萬葉集には白萩なともよ
めは。強に咎にはあらし。歌からあしからず。右は谷の
岩道など。なき事にはあらねと。聞つかぬ心地すれはと
て。左勝と申てき。

十番

左勝

大貳卿

朝またき大内山を見わたせは今日そみゆきのはしめ也ける

右

頼政朝臣

降雪にかへらぬ色の狩衣けふやはしめてぬれんとすらん
左歌いとよくよまれたり。心しめつらし。右歌かへらぬ
色のかり衣けふやはしめてかへらんすらんとそいふへ
き。濡むとすらんといへるは。かきあはぬこゝちす。又
はしめて狩衣のぬるゝにて。初雪のこゝる侍りなんや。
雪はとくもふりにけん。たゝかりする事の今日はしめ
たるにもあらんと聞ゆ。かたゝ左歌にをとりてや。

一番 曉戀

左

右大臣

うつゝにも別し鐘のこゑなれば逢と見るよの夢も覺けり

右勝

清輔朝臣

獨ねの戀のけふりやほのゝと明ゆく山の峯のよこ雲
右歌はまされるさまに。人々申されしとおほえはへる
は。僻事にや。

二番

左

俊惠法師

見ぬもうしみてもわりなし夢故に物を思はぬ曉も哉

右勝

道因法師

誰とねて君きぬゝに成ねらんかたしきてこそ我は明すに
左歌夢ゆへに物をおもはぬ曉そなきとそいはまほしき。
あかつきもかなといへる。打開たる。かきあはぬやうに
や。右あしくも侍らす。たゝかたしきてこそとあるそ。
何をかたしきけるにかとおほゆれと。あまりの事なり。

三番

左

大貳卿

をのつから逢とはいはすあはぬよも明ゆく計戀しきはなし

右勝

頼政朝臣

鐘の音を獨ぬるよもいとへたゝ逢てふ夢を打さましつゝ
左あはぬ夜のあけゆかんは。いかに悲しかるへき。ひと
り寝のよのなかきをこそ。なけく事にははへれ。されは
道綱母の歌にも。ひとりぬる夜のおくるまはいかに久
しき物とかはしるところよめれ。右すかたはあしくも
聞えず。逢てふ夢そ心ゆかす侍る。あふとみる夢とこそ
いふへけれ。逢てふ夢は心えねとも。ふかき咎にもあら
ねは。猶右勝へきにこそ。

四番

左勝

女 房井後

戀あかす我をはしらて君は今たれと別を惜かぬらん

右

寂念法師

詠わひ君待わひて月日のみすきの板戸の明くれの空
右なかめかねとまちける。かくいふへしも聞えず。大
かた五句きれゝにて。又いひとちめたる所もなし。左
もさせることなけれとも。こゝろはきにこそとみゆめ
れは。勝もし侍りなん。

五番

左勝

季經朝臣

わか戀る人はとてそ明ぬなるまたれぬ鐘の音はすれとも

右

頼輔朝臣

鳥の音にいとゝ涙のおほつかかな今宵もあはて明ぬと思ふに
いづれもおなしさまにみ給ふを。左はすこしおもひよ
せるやうに。人々申されしかは。勝にこそ侍るめれ。

六番

左持

經家朝臣

戀しつゝ獨ふせやにましりきてとふらふものは有明の月

右

行 頼

さらぬたにねさめ露けき曉にしのひし人をおもひ出つる
左歌月はいかにとふらひけるにか。おほつかなし。戀の
なくさむ心にや。月見ては人こひしと社申めれ。右あか
つきは人をおもひ出てそ露けかるへき。さらぬたにと
いへる。心えられず。いづれとも申かたくそ。

七番

左

隆信朝臣

思ひ寢の夢にもしはしなくさめてそれさへ鳥の驚かす哉

右勝

仲 綱

夢の中におき別ぬる曉はうつりかたにもとまらさりけり
左させる事なし。右おきわかれぬるといへるわたりそ
よからねと。末よく聞え侍れは。勝にはへるめり。

八番

左持

基 輔

あかなくに別し程の鳥のねはそれよと聞もうらめしき哉

右

尹 明

東雲のあくるをのみそ歎かまし逢みて歸る空とおもはゝ
左右。おなしほとなり。

九番

左

季 廣

詠やる山のはのみか待かぬるこゝろのうちも明くれそす

右勝

資 忠

明ぬとてきぬゝになる空さへそかはさぬ袖は美まれぬる
右はこゝろはへまさりてや。

十番

左持

女 房別當

鳥のねも我もかはらぬ曉にかへりし人のかけそ戀しき

右

小侍從

思ひきや歎て過し年月にけきの別のまさるへしとは
左歌月あらまほし。右歌は後朝のうたにこそ侍るめれ。
曉の戀はなを分別すへき事なり。さはあるへきことな
し。右は題の心なければ。おなしほととの事に侍るめり。

大略伺御氣色。所付勝負也。當座付勝負。翌日書
判詞。其後所付作者也。

兼不存歌合之儀。只爲比興臨期隱作者合之。最
密事也。就中未入其境之輩。且爲練習詠之。努々不
可披露。若貽後代者。必可招耻辱者也。早可破
却之。以前兩度會。又以同前。

安元元年十月廿九日書寫之

群書類從卷第一百八十八

和歌部四十三歌合九

別雷社歌合

治承二年戊戌三月十五日己酉。天晴。今日於別雷社廣庭。有歌合事。是則當社神主重保之結構也。歌人六十人。分三左右一番之。

題

霞 花 述懷

作者

左

中宮大夫隆季
藤大納言實國
左兵衛督成範
權中納言實綱
宮内卿永範
左京大夫脩範
法印靜賢
刑部卿賴輔朝臣
左少將有房朝臣
前民部少輔盛方朝臣

權大納言實房
左衛門督時忠
源中納言雅賴
右宰相中將實守
太皇太后宮權大夫經盛
皇太后宮大夫入道釋阿
前權律師範玄
右少將隆房朝臣
前右衛門佐忠度朝臣
前右馬權頭隆信朝臣

右少將公時朝臣

成家

兼綱

廣言

僧寂念

右

觀連

登連

通親

師光

成仲宿禰

顯家

季經

僧道因

經正

僧顯昭

定家

公衡

智將

民部少輔定宗

季廣

敦仲

親盛

佐

二條院讚岐

俊惠

公重

前齋院大輔

資隆

賴政

經家

親宗

僧寂蓮

仲綱

伊綱

前齋院備前

僧勝命

僧祐盛

沙彌行念

沙彌安性
重保

判者

入道三品釋阿

一番 霞

左勝

隆 季

神かきや櫛にかくるしめを又いかにたなひく霞なるらん

右

觀 蓮

朝霞をしほの山にたちにけりいはねとしるし春のけしきは

左の歌。櫛にかくるしめを又いかにたな引といへる心。

よろしくこそ侍るめれ。右の歌心おかしくはみえ侍る

を。小鹽の山は。たゝ大原やをしほの山なとよめるこそ。

えんには聞え侍るを。さらては山の名も口おしくや。よ

りて左を勝とすへし。

二番

左

實 房

むら雲の絶まの空やうつるらんまたらに見ゆる朝霞かな

右勝

讃 岐

はる霞わけ行まゝに尾上なる松のみとりそ色まさりぬる

左村雲の空かすみにつりて。霞の色またらなる心は。

いとおかしく侍る。右春霞さけるはしめの句や。今す

こし思ふへからんとみえ侍れと。分行まゝに松のみと

り色まさらむ心姿。ゆうには侍るにや。右の勝なるへし。

三番

左持

實 國

霞しく志賀のわたりをみ渡せはいつれかひらの高ねなる覽

右

登 蓮

八重ふかく野もせの霞立にけりいつくか室の八嶋なるらん

左右の霞。ひらの高ね。室の八嶋。いつれいつくかとい

へる心姿。定め申かたし。いつれも名高き所なるうへに。

歌の姿共におかしく。かみの句も。とりくなるへし。

仍持とす。

四番

左持

時 忠

をしほ山こ松か原のかすめるははや大原に春はきにけり

右

俊 惠

しめはへてしつのあらまぐ小山田の春のかこひは霞なり梟

左のをしほ山の霞。おかしく社思ひやられ侍ればや。大

原にといへるわたりや。かのせれうの里わたりのおほ

はらにやと聞え侍らん。是はおほ原にこそ侍るめれ。右

春のかこひといへる。つよきやうには侍るを。しめはへ

てとをき。賤のあらまくなといへる姿。かの田夫の花の

かけにやすめらん心地して。かたらん事かたし。是をな

すらへて。又持とすへし。

五番

左持

成 範

いつしかとをとほの山のかすめるは春をこめてや立渡る覽

右

通 親

はる霞立はこむれと櫛葉の香をかくはしみかくれさりけり

左の歌姿詞ゆうには侍らめと。春をこめてやといへる

心や。心得ても侍らさらん。右の歌詞つゝきことにやす

らかにほくたれと。霞の中は櫛のかくれさらん心。おか

しく聞ゆ。猶又持とす。

六番

左

雅 頼

いつしかと春めく人もゆかしきに立こめてける朝かすみ哉

右

公 重

をくら山霞にこめてみえねともとなせの瀧の聲は聞ゆる

左やすらかにいひ下して。ことなるとかなきなるへし。

右深き心はなれと。をくら山霞にこめてなといへる

七番

左持

實 綱

けさ見れは霞にくもる鏡山はるゝはみかくこゝちこそすれ

右

師 光

みかりせしもす野の原の朝霞その草くきやいつく成らん

左歌詞實文花あひかねておかしくはみえ侍らめと。但

霞に曇るとをきながら。はれぬるを歌の表として。鏡山

を賞せぬやうにみえ侍らん。右歌姿柿本の風を傳へて。

言葉を藤のうら葉にかけたり。但霞は春のうちにてた

にあらは。早晚心にあるへけれと。此題は猶春の初なら

むや宜からん。此歌くれの春なとやいかゝ。左右ともに

宜しき歌の。いさゝかの疑あるによりて持とす。

八番

左持

實 守

きのふまで雪降つみし御吉野の春知かほにけさはかすめる

右

大 輔

霞たつこせの春野のたま椿つらねもあへすみえみ見えすみ

左めつらしきふしにあらねと。こと葉つゝきことなる

とかなく。優に侍るへし。右巨勢の春野のなといへる

姿。ことに庶幾せられさる。言葉にはみえ侍れと。彼つら

つら椿つらゝに見れともあかすこせの春野はとかや

いへる萬葉集の歌を思へる成へし。ひとへに古風を存

せるうへに。霞のたえまゝ。つらねもあへぬ心とゝめ

て見ゆ。よりて又持とす。

九番

左持

永 範

さほ姫の霞の衣をりてけり遊ぶ糸ゆふたてぬきにして

右

成 仲

なにはかた霞たな引春のよは澳こく船の見えみえすみ

左霞にあそふ糸ゆふたてぬきにしてといへる心。彼當

天遊織碧羅綾といふ句も思ひ出られて。さほ姫の句

たくみならむ。思ひやられておかしく侍り。右難波の浦

の霞に沖こく船のなといへるすかたも。心あらん人に

見せはやといひけん程もおもひやられて。一かたにし

もおほえ侍らねは。猶又持とす。

十番

左勝

經 盛

神山のこすゑにかゝる夕霞これこそ春の手向なりけれ

右

資 隆

春霞あめかしたにそみちにける神の恵もかくそ有ける

左の歌山のとをきを。梢にかゝる夕霞といへる文字つ

つき。いひしりてこそみえ侍れ。右の歌神の恵もなとい

へる。心はゆうにはへり。かすみやあまりならむとそ見

え侍る。左を勝とす。

十一番

左勝

脩 範

やへ霞さやの中山たちこめて遠近人やみちたとるらん

右

顯 家

かつらきや高まの山のしら雲に春はかすみそ立かへてける

左首尾相叶て心詞よろしくこそ侍れ。右春は霞そなと

いへる。姿はおかしく侍るを。たかまの山の嶺の雲。春

は立すならむ事。おほつかなくこそ。よりて左を勝とす。

十二番

左

釋 阿

そまくたし霞たな引春くれは雪けの水も聲あはすなり

右勝

賴 政

かすみをや烟とみらん武藏野のつまもこまれる雉子なく也

右歌かのむさし野はけふはなやきそといへる歌を本と

して。つまもこまれる雉子なくなりといへる心はへに

こそおほえはへれ。上の句も。素性か花とやみらんしら

雪のといへる歌とおほえて。いとおかしく侍り。左は初

にそまくたしとをけるや。にはかなる心ちして。ゆうに

しも聞えず。以て右爲勝。

十三番

左持

靜 賢

神かきのあたりをはらふ春風にたちものかぬは霞成けり

右

季 經

さらぬたにあたにもみえぬ玉垣にかさねてこむる八重霞哉

左神垣の春風。そのあたりにほらひ。右の玉垣は霞かき

ねて宿衛せり。兩首の姿心。をの／＼おかしく見ゆ。持とすへし。

十四番

左持

範 玄

かみ山はかすみにけらし櫛葉のかをとめつゝや春は行へき

右

經 家

いつしかときほの山へにかけてけり霞の衣たつと見しまに

左の歌。かをとめつゝやといへる末の句は。ゆうに侍る

めり。けらしとをけるや。かなひてしも聞えさらむ。右の

歌さほの山へに霞かくなといへる。心は常の事なれと。

末の句など宜見ゆ。但左の霞は神山にことかゝれり。猶

持とす。

十五番

左

賴 輔

朝またきかもの川瀬をみ渡せは霞の底に埋れに鳧

右勝

道 因

行末をたちのくけきの霞こそなか／＼道のしるへ成けれ

左歌よろしく聞え侍り。霞にうつもるなとよむ事。いつ

こも同じ事にはあれと。賀茂の河瀬などは。さは見えす

しもや侍らん。右の歌旅行かすみ立のくやうにみゆら

む。さる事也。心ありて聞ゆ。すこしはまさり侍るにや。

十六番

左持

隆 房

神山の霧はいくへへたつともあけの玉垣なやはかくるゝ

右

親 宗

わきも子か袖ふる山もみえぬかな霞の衣たちしこむれは

左歌霞はいくへなといへる姿。いとおかしくこそ侍るめれ。なやはかくるゝの詞や。いかゝと聞ゆらん。右歌袖ふる山もなといへる。心すかたいひしりてみえはへり。但社頭の歌。猶持とすへし。

十七番

左

有房

見たせはあかしもすまも霞していつれ成らんをのか浦々

右勝

經正

吉野山消あへぬ雪をこめつれは霞そ冬のへたて成ける

左あかしも須磨もとをきて。をのか浦々といへる心。おかしくは侍らめと。かすみしてといへること葉。ふるくもよめらむを。えこそ見及び侍らね。時雨して夕立して雪してなとは。聞なれてもはへりぬ。いかゝ。右霞のへたてなる心は。つねなる事なれと。心ありても見ゆ。左に申ところ有。仍右の勝とす。

十八番

左持

忠度

朝霞ふかくしたてはその原やいつらよそにもみえし簾木

右

寂蓮

よしの山雪には残る瀧つせもはるは霞にうつもれにけり左の歌。その原霞によせて。いつらよそにもなといへる所。おかしく侍り。右の歌詞に珍しき事ははへらねと。上下あひかなひて。歌の姿宜しく侍るなるへし。但左は本歌あるやう也。持とすへし。

十九番

左持

盛方

すまの沖の霞の衣たちぬれはいつれか浦とみえまかひぬる

顯昭

右

朝かすみ消行まゝに高砂の松のみとりのふかくなるかな左のすまのおきの霞。いつれか浦なといへる心姿。おかしくこそ侍るめれ。はての句。いさゝか心のゆかぬやうにやはへるへからむ。右の歌始つかた侍りつる歌に。いさゝかの詞とものかはれるなるへし。是は消行まゝにといへるか。いかにそ聞ゆるにやあらん。左右ゆうに侍るへし。又持とす。

二十番

左持

隆信

山高みかすみの中にきてみれはいてし都を又こめてけり

右

仲綱

やまひめやさらすかひなく思ふらん霞にこもる布引のたき左いてし宮古を又こめてけりなといへる心姿。よく侍るめり。右の歌姿いとおかしくは侍るを。霞にこもるといへるや。布引の瀧すこしほいなく侍らん。持とすへし。

二十一番

左持

公時

見船山そこともみえぬ霞にておちくる瀧の音のみをする

右

定家

神山の春のかすみやひとしらに哀をかくるしるし成らん左歌落くる瀧のなといへるすかた。いとおかしく社はへるめれ。みふね山いつこにても侍りぬへからむ。右歌神山の霞もあはれをかくるしるしにやといへる心。よしなきにあらず。但左なにとなく。歌しなおかしくみえ

侍り。右歌又神山に事よれり。猶持とす。

二十二番

左持

定宗

いつしかと焼てし野への霞をば又おもひたつ煙とそ見る。

右

伊綱

かつらきやくめちの橋のゆふ霞春はいつくかと絶なるらん
左の歌心姿おかしきやうに侍るを。又思ひたつ煙。さら
てもや聞ゆ。右の歌かつらきやといへる。歌めきてはへ
るを。くめちの橋はわたさんとはしめしはかりにてと
たえにやをよひけん。夕霞わきていへるを。なしなへて
もいか。左右おなしほと的事なるへし。

二十三番

左

成家

朝霞かすみの中の梅枝に驚きゐるはるの山さと

右勝

公衡

あさまたきたるみの澳をみ渡せは霞を渡る淡路嶋山
左歌すかた心よろしくははへるなるへし。たゝし驚梅
かえなとにわたれるにや。歌あはせにはいか。はれの
歌は人に見せあはすへく侍る事也。右この澳の名すこ
しさらすともやと見え侍れと。淡路嶋の霞は。眺望の心
いとおかしく。霞の歌はかやうにこそとみえ侍れは。右
の勝にこそ。

二十四番

左持

季廣

明くれの空かと思へは朝日さす山ちもみえず霞むなりけり

右

備前

はる霞たては煙もまかひつゝいつれかふしの高根なるらん

左右の霞。左は空を賞し右は高名なり。いつれもすこし

あまりにやあらん。尤持とす。

二十五番

左持

兼綱

うとからぬいもせの山の中は只かすみ計そへたてなりける

右

智將

信濃路やみさかをのほる旅人は霞をこゆる心ち社すれ
左の歌いもせの山の霞は。おかしといひつへし。只とい
へる言葉は。うちまかせぬやうなれと。此歌にとりては。
あしくも聞えず。へたてなりけるなとやいか。右のた
ひ人は。おも影有て優にみゆるを。霞をこゆるといへる
心は。さかしきやうなるから。物にくせむ心地やすら
ん。但左も俗に近き心あり。猶持とすへし。

二十六番

左勝

敦仲

山のはに一むらかゝるうす雲はたな引そむる霞なりけり

右

勝命

いつくとも立くる春をしらぬ哉大方そらの霞わたれは
左歌一むらかゝるうす雲と見ゆらむ。宜しく聞ゆ。右歌
おほかた空なといへる心もおかしく侍れと。左の霞は
いますすこしたちまされるにや。

二十七番

左持

廣言

神山は霞にけらし今朝みれはいつらみとりの松のむら立

右

祐盛

はる霞八重のしほちに棚引はそことも見えすおきつ 嶋山

左歌おかしくもはへるを。けらしといへること葉や。末

の句のいつらみとりのなといへる。姿は不_ニ相似_一も侍

らん。右歌そことも見えすおきつしま山といへる。すか

たは宜しく侍るにや。但猶持とす。

二十八番

左

親 盛

下の帯に細たに河はなりにけり霞をきたるきひの中山

右勝

安 性

武藏野に朝なくきゝす聲すなり霞の中につまやこもれる

左歌よろしく侍り。はしめの句や。たゝしたの帯にとり

て侍りなんを。右歌は十二番のつらにや侍りつる歌の。

おなし心に侍るめり。是は霞の中につまやこもれると

いへる。すかたおかしく侍るを。さきの歌はけふりとや

みゆらむといふにこそ。かの本歌にかなひたれ。是は只

霞につまのこもれるを尋わひたるとそ聞ゆる。たゝし

左の歌。心はおかしきやうなるを。きひの中山の歌を思

ひたらむ姿。こていにやあらむ。武藏野の歌も。姿につ

きて少しはまさるにや。

二十九番

左

寂 念

きゝすなく聲はへたてす春霞あたのおほ野の曙の空

右勝

行 念

神やまにたなひくけさの霞こそいかきの外の隔て成けれ

左歌末の句よろしく聞え侍り。聲はへたてすなといへ

る心や。常の事ならむ。右いかきの外のなといへる心お

三十番

左勝

佐

さひしきをとふ人そなき山深み立よる嶺の霞ならては

右

重 保

松山のみとりへたつるはる霞今ひとしほの色をかくすな

左右の歌。心姿とりくに見ゆ。左は姿ゆうにして。立

よる峯の霞ならてはといへるも心ほそく聞ゆ。右はみ

とりへたつる春霞なといひて。今一しほのといへる。お

かしく侍るを。末の句にかくすなといひはてたるにや。

少藝なる心地し侍らむ。左歌猶宜侍るにや。よりて勝と

申へし。

一番 花

左

隆 季

おほつかな花なき里のさと人は春の心やのとけかるらん

右勝

觀 蓮

散ぬとていかゝかへらん山さくらあかぬ名残の花の木陰は

左歌春の心はのとけからましといへる歌の。上句はか

りかはれるなるへし。かゝる様にとりては。おかしくも

はへれと。あまりにやあらむ。右歌花の陰ばといひはて

たる程そ。ゆうにしも聞えれとも。花の散なん木の下に。

猶名残をこひたる心。よろしきにやあらむ。よりて右の

勝と申へきにや。

二番

左持

實 房

さくらはな散なんのちの姿をはかばかりみせよ嶺の白雲

右

讚 鼓

咲そめてわか世にちらぬ花ならばあかぬ心の程はみてまし
左右ともに。姿詞いとおかしくこそ侍るめれ。但左はか
はかりみせよといへらむやいか。雲は花の前後おな
しくや侍らん。右は我世の言葉。たれもよむことには侍
れと。歌合の時はいかにそや。用意あるへくみえ侍る也。
持とすへし。

三番

左持

實 國

神かきやみしめのうちの櫻花あらし風にはあたらし物を

右

登 蓮

年毎にそむる心のしるしあらはいかなる色に花のさかまし
左の歌みしめの内のはなあらし風にはなといへる心お
かしく侍り。右の歌いかなる色に花のさかましといへ
る姿いとおかし。つねの花の色には染まさるにやと見
え侍れと。みしめの内のはなはあたらす侍れは。持と
申へし。

四番

左

時 忠

一年をさなから春になしはてゝたえす櫻をみるよしもかな

右持

俊 惠

雲かゝる高ねの櫻ちりぬれはるせきをこゆる天の川なみ
左彼和泉式部か。をしなへて春は櫻になしはてゝちる
てふ事をなけかすもかなといへる歌にかよひて。さな
から春にと置。たえす櫻をなといへる心。おかしくこそ
侍れ。右の歌さまはいとおかしく侍るなるへし。但るせ

きをこゆるといへるにや。山のたかねそみせきとみむ
事。いかゝとおほえはへらん。高陽院家の歌合に。雲井
にみゆる瀧のしらいとなといへる歌こそ。誠にさるこ
とゝおかしくは侍れ。されとこれもかれもたけあらむ
とよめる歌に侍るめり。右のあまの河浪。すこしはたち
まさるにや侍らん。

五番

左持

成 範

おしめともかひなかりけり櫻花風にのみこそ誘はれてゆけ

右

通 親

神垣にしめゆふ花はもろ人のおもひひらくるかさし成けり
左歌姿詞よろしくこそ侍るめれ。花をおしみかねて。い
かゝはせんと思ひけるやうにそきこえはへる。右歌お
もひひらくるなといへるあたり。えんなること葉にし
もあらねと。しめゆふ花をろかならす見ゆ。持と申へし。

左持

雅 頼

みよし野の山のあなたに散花を吹こす風の便にそみる

右

公 重

あかすのみ思ふ櫻のはなかとて心にかゝる嶺のしらくも
左右の花。いづれも木の本にてみるにはあらねとも。左
は風のたよりにて見るなといへり。右は嶺のしら雲。詞
を心にかけたるやうには聞えはへり。あひなくやあら
ん。花かとなといへるも。心すくなき心地す。左の勝
なるへきにや。

七番

左

實綱

ときはなる松のあたりの櫻はな散なん山の名をやたつへき

右勝

師光

吉野山さかぬ雲にしるき哉おのへの櫻はなさかりとは
左歌すかたこと葉おかしく侍り。但これはときはの山
にや侍らむ。ふるくはときはの山は吹風のともいひ。よ
その紅葉を風そかしけるなとやうにいへるや。宜しく
聞え侍らむ。山の名をたむ事いか。右歌さかぬ雲
といへるけしきよろしく。なへての世も風しつかなる
心地す。仍右の勝とす。

八番

左持

實守

たに風の吹上にさける花みれは雲立のほる高圓の山

右

大輔

吉の山このした月夜なくはこそ花みて暮す日をもいそかめ
左雲たちのほるといへる末の句。いとよろしく見え侍
り。ふきあけにさけるといへるや。吹上の濱などのやう
なる處のあらむやうにきこゆらむ。右のこの下月夜な
くはこそといへる姿。又ゆうにこそはへれ。日をもいそ
かめといへるわたりや。少し事たらぬやうに聞え侍ら
ん。持と申へし。

九番

左持

永範

心ありて花にはうつれ鶯のはふれに散もおしき句ひを
右
成仲

左の歌はなにはうつれといひ。はふれにちるもなとい
へる姿。いひしりてみえ侍り。右歌梢こそりてなといへ
る心。よろしく見え侍れは。是も勝負難知。仍持とす。

十番

左

經盛

吉野山みねにたなひく白雲の絶まやをそき櫻なるらん

右勝

資隆

神山の榊にましろさくらはなときはの色にならへとそ思ふ
左よしの山嶺の白雲なとほ。めなれたる詞に侍れと。た
えまやをそきなといへる心。おかしく侍るめり。右の歌
ときはの色にならふといふ事も。常の言葉にあれと。榊
にましろらむ櫻は。めつらしくもおもひなされて。右の
勝とす。

十一番

左持

脩範

日にみかき風にたなひく花よりも光や増る朱の玉かき

右

顯家

櫻花うつゝはかりにちるとみは夢には風をうらみさくらまし
左歌日にみかき風にたなひく花に。朱の玉垣光そふら
む心いとおかしく。光やといふやの字や。見すして思ひ
やれる心地すらむ。右の歌はかの貫之か夢のうちに
花そちりけるといへる歌をおもへるなるへし。夢には
風をなといへるすかた。ゆうに侍るめり。持とすへし。

十二番

左勝

釋阿

身にしめしその神山のさくらはな雪降ぬれとかはらさり鬼

右

頼 政

風ふかはかりかくれよ櫻花さかぬまもさそ枝にこもりし
左判者の愚僧の歌なるへし。誠に雪ふりにける事とも
にこそ侍るめれ。昔の春。當社の花のさかりに。久しく
まうて侍し事のわすれすのみはへるを。述懐せるはか
りなり。右の歌はかへりかくれよとをき。さかぬまもさ
そなといへる心姿。誠におかしく侍り。但すこし俗にち
かくや侍らん。是はかの競馬はことさら勝負を興する
も。澁さる躰(羅イ)にこそ侍るめれ。左の歌老鷲馬なから
となるへきにや侍らん。

十三番

左勝

靜 賢

神山に花のしらゆふ懸てけりこやさほ姫の手向なるらん

右

季 經

今よりはたかねへ行むつくは山このもかのもに花もみえ鳧
左の歌。花のしらゆふかけてけりといへる姿宜しくこ
そ侍るめれ。右たかねへゆかんといへる。このもかのも
の花みん心。おかしくは見え侍り。但なを神山のはなき
よけに侍り。左を勝とすへし。

十四番

左持

範 玄

みわたせばはなの波こす心ちしていつれのみねも末の松山

右

經 家

をとに聞ならの宮古の花みれは散積りても八重そかさなる
左右ともにゆうちには見え侍り。左はすゑの松山。たゝ浪
にはあらて。花の波こす所にてあらんやうに聞ゆらむ。

右ははなみれはといへるわたりや。すこしおもはまほ
しく見ゆらん。持とすへきにや。

十五番

左勝

頼 輔

春風も心してふけしめの内はにほひことなる花とこそみれ

右

道 因

み吉野のみふねの山の櫻はなとしはつめとも色はかはらす
左のうた。しめのうちの櫻。春風もまことに心すらんと
おほえて。よろしくこそ侍るめれ。右歌雪をよめらんや
うに聞ゆ。左勝と申へし。

十六番

左勝

隆 房

はることによす花櫻いかなれはこゝろに深くそむる成らん

右

親 宗

山櫻なぬかといふにちりはてゝなこりとゝむる嶺の白雲
左薄花櫻いかなれはといひて。心にふかくとうたかへ
る心。おかしくみえ侍る。右名残とゝむるなといへる心
すかたいとよろしく侍るを。七日といふにといへるや。
ことなるよせなきやうに侍らん。薄花さくら。少し詞ま
されるなるへし。

十七番

左持

有 房

散花のかたみとすへき春さへにのこり少くなりも行哉

右

經 正

散そうき思へは風もつらからす花を分ても吹はこそあらめ
左右ともにゆちに侍るへし。かたみとすへき春さへな

といへる心。すこしあはれにこそ聞え侍れ。花をわきてもなといへる姿。文字つかひいとおかしきこえて。思ひわかれす。持とすへきにや。

左

忠 度

木のもとをやかて住かとなさしとて思ひ顔にや花は散らん

右勝

寂 蓮

風ふけは峯にわかるゝ山さくら色のみならず雲かと思見る左歌やかてすみかとなさしとてといへる。えんにこそ侍るめれ。右歌嶺にわかるゝなといへる言葉つゝきよろしく侍るにや。右はすこしはまさり侍らむ。神慮おそるゝによりて。いさゝかの事も。思ところをわかちへる也。

十九番

左持

盛 方

吉野山みねのあらしの吹まゝにむら消わたる花の白雪

右

顯 昭

さくら咲おりにしなれは初瀬山たゝひとさかり越る白浪

左のよし野山。右の初瀬山。歌のすかたはともにおかしく侍る。村消わたる白雪とたゝひとさかり越る浪など。見ゆはかりにて。ことにははなをおもへる心は。なきやうにや侍らん。よりて持とす。

二十番

左持

隆 信

たつねつる花咲にけりみよしのゝたかきの山にかゝる白雲

右

仲 綱

こほれ出て匂ふものから白雲にそらくれする山さくら哉左歌みよし野のたかきの山など。めつらしきことにはあらねと。よろしきやうにみえ侍り。右歌そらくれするなといへるすかたおかしく見ゆ。左右とりくなり。よりて持とすへし。

二十一番

左勝

公 時

年をへておなし櫻のはなの色を染ます物は心成けり

右

定 家

さくらにはな又たちならふ物そなき誰まかひけん嶺の白雪左おなしさくらの花の色を染ますものはといへる心姿。いとおかしくも侍るかな。右誰まかへけんみねの白雪といへる心も。よろしきにやと見えはへれと。左歌なをめつらしくも見え侍れは。勝へきにや侍らむ。

二十二番

左持

定 宗

櫻花やかてかへさぬ春風にことしもこりすさはれんとや

右

伊 綱

いとせはちらて櫻の匂ひつゝ花さかぬまの七日なりせは左は姿ふるまひわりなく見えて。いとおかしく社侍るめれ。右は花さかぬまの七日なりせはといへる心。又やうにみえ侍り。仍持とすへし。

二十三番

左勝

成 家

花さかり賀茂の瑞籬きてみれは吉野の山も名にこそ有けれ

右

公 衡

花さかり四方の山へにあくかれて春は心の身にそはぬ哉
左右の花さかり。ともに宜しく見え侍るにとりても。右
はなを春は心のなといへるわたり。いとおかしくおほ
え侍るを。あくかれなから花のもとにしもむかはぬ心
にやとそ見え侍る上に。左の歌まことに社の花をめて
たる事や。もし勝とも申へからむ。

二十四番

左勝

季 廣

おしむにはとまらぬはなのしたかへは浦山しきは春の山風

右

備 前

さくとまち散とてなけく春は只はなに心を盡す成けり
左歌うらやましきははるの山風といへるすかた優にこ
そ侍るめれ。右の歌心姿よろしくは侍るな。かやうの心
の歌つねの事なるにやあらむ。左勝と申へくや。

二十五番

左勝

兼 綱

入ぬれはそこともしらす中々にのきてそ花はみるへ鷹ける

右

智 將

惜みつゝ折てかへらはあちきなく風にまかすと花や恨みん
左のきてそ花はなといへる。すかたおかしくこそ見え
侍るめれ。上の句の心みやまの中なときも侍りなん。右
おしみつゝといへるを。風にまかすとはなや恨みんと
おもひなから。かへりこんほとや本意なく侍らむ。素性
法師は暮なはなけの花の陰かはとこそよみて侍るめれ。
のきてそ花はなといへる。なを姿少はまさされるにや。

二十六番

左 敦 仲

右勝 勝 命

風たにも吹てのとけき春ならは折手にのみや花はちらまし
かきりありて露ときえなん世なり共花に心や残し置へき
左折手にのみやといへる。姿いとおかし。但吹風も枝を
ならささらむ春の花を。折手にのみちらさん事いか。右
は露と消なん世なりとも花に心や残しをかんといへ
る。心よろしきにやあらん。以て右爲勝。

二十七番

左勝

廣 言

梢まで花のしらゆふかけてけり神も嬉しと春を見るらし

右

祐 盛

山櫻雪の色とそうはふともふるならひをはつたへさら南
左歌花のしらゆふは。これもよろしく見ゆ見ゆるしな
とも。歌からあるさまなるへし。右歌ふるならひをはと
いへる。おかしくは聞ゆるを。はいかいの跡にそみゆ
る。左勝へきにこそ。

二十八番

左勝

親 盛

あかすみる花はかりたに散さすは匂ひを風に惜みやはする

右

安 性

尋ねつる花みるほさもいかにこは春の心はのとけくもなき
左歌のすかたおかしといひつへし。匂ひをとてもおし
まさらん事やいか。右詞つかひおかしからんとは思
へり。春の心はのとけくもなきといへる末の句。はるの
心はのとけからましといへる本歌に。殊外に聞え侍る

めり。業平朝臣もうれたくやおもふらんとおほえ侍し。
以_レ左可_レ爲_レ勝。

二十九番

左勝

寂念

神山をあふきてみれば白雲のたつは櫻の梢なりけり

右

行念

やま櫻こすゑをはらふ風吹ははなのちりたつ敷をやせん
左歌姿詞よろしくこそ侍るめれ。あふきてといへる言
葉そ。ゆうにしもあらぬ事なれと。神山をあふきてとつ
つけたるは。あしくも聞えず。右の花のちりたつといへ
る事あるやうにて。ことなる心なきなるへし。左歌はま
さり侍りなん。

三十番

左

佐

はるも又たちかへるへき年あらは二度花の咲よしもかな

右勝

重保

きよめすなしめの宮人散つもる花にましはる神もますらん
左歌ふたゝひ花のなといへる姿。いとよろしくこそ侍
れ。上句もかの春くはゝれるとしたにもといへる歌の
心地おほえ。おかしくは侍るを。ことしも冬の立春のよ
しなとなくは。心得かたくやあらん。右歌しめの宮人な
といへる。文字つかひ姿いとおかしくみゆ。初の五文字
や。此春はかりあさきよめすなといへるには。にぬやう
にきこえ侍らん。但歌さまなど。社頭の歌とおほえて。い
とおかしく侍り。以_レ右可_レ爲_レ勝。

一番
述懐

左勝

隆季

とにかくに浮世を夢としりなから扱も厭はぬ我やなになる

右

観蓮

數ふれば身は七十をへぬれともまたみとり子の心地社すれ
左歌きてもいとはぬなといへる心。いとおかしくあは
れにこそ侍るめれ。右歌身は七十といへるほどおかし
く聞えて。末の句いふかしく侍るを。またみとり子のと
いへるや。少し幼少のすきたるこゝちすらん。左の勝と
すへし。

二番

左勝

實房

ひとは又おなし祈をいのるともたゝしき道を神はこととはれ

右

讃岐

いはてのみ頼みそ渡るよそなから御手洗川の音にたてねと
左。存_ニ故實之風_一叶_ニ雅頌之時_一。彼毛詩に。然_ニは頌者美_ニ
盛德之形容_一。以_ニ其成功_一告_ニ於神明_一者也といへる。此心
なるへし。右みたらし川のをとなてねといへる。歌
さまはおかしく侍るを。よそなからたのみわたらむも
ほいなくやあらむ。以_レ左爲_レ勝。

三番

左勝

實國

こしがたも今行末もならのはのひろき恵をたのむ計そ

右

登蓮

此よにも猶おとろかぬこゝろ哉いつをかきれる夢路なる覽
左歌以往未來などのひろき恵をたのむ心。おかしく見
え侍り。右歌はいつをかきれるなといへる姿。いとよろ

しくみゆ。左は社壇の廣惠をたのみ。右は佛道の照曠な
る事をなけり。すかたとりなり。よりて爲持。

四番

左勝

時 忠

千早振神のめくみに影なひく位のやまにのほる身になせ

右

俊 惠

見たらしや清き流れにいくしたて心の垢をいかてすかん

左神の恵にかけなひくとをける。文字續きおかしくこ
そ侍れ。右はみたらし河に心のあかをあらはん事。さら

て有ぬへくや。心性水澄なは業障の垢あらはれぬへし。
みたらし川のなかれにも無便やあらむ。以左爲勝。

五番

左

成 範

ひろまへに植てし種の朽せずは思ふ事なき身とそなるへき

右勝

通 親

みかさ山嶺つゝきなる跡をみて登らむ道のしるへせよ神

左歌心おかしくこそ侍るめれ。但うへけん種や少おほ
つかなく聞え侍らん。右歌末の句の神の字ぞ。いかにそ

やきこえ侍るやうなれとも。歌はさのみそ侍るへき。累
葉數代の峯つゝき。のほらん道のなといへる。尤しかる

へし。右の勝とや申へからん。

六番

左勝

雅 頼

子を思ふ道をそ祈るすへらきにつかふる跡をたかへさら南

右

公 重

うき身には老にけるこそかなしけれ若くは頼む事もあらまし

左つかふるあとをいへる心姿。よろしく聞え侍り。心の
やみはけにすてかたき事に侍るへし。右かの順か年わ
かくはなければつかへすとかける。思ひいてられて。さ
る事とは聞え侍れと。わかしくはたのむといへる姿。無下
にかたき事にこそ見え侍れ。左の勝とすへし。

七番

左勝

實 綱

黒かみに霜のおくまでよにふれと心とけたる春のなき哉

右

師 光

をのつから神の恵を待えずはなに心をかけてすきまし

左歌霜のをくまで心とけたるなといへる姿。おかしく
こそ侍れ。右の歌さる事と聞えて。あはれにこそ見え侍

るを。詞にことなるよそふるところなくやあらん。左の
勝と申へきにや。

八番

左勝

實 守

くらゐ山花をまつこそ久しけれ春の都にとしをへしかと

右

大 輔

みたらしや清き流れに渡すらん數にはもれしみくつなり共

左歌花をまつこそひさしけれといひて。春の宮古に年
をへしかといへる心姿。まことに宜しくも侍るかな。

右歌思ふ心ゆうには侍れと。位に心うつりて。汀のみく
つ思ひわかす侍るなるへし。仍以左爲勝。

九番

左持

永 範

思ひきや百ちふたゝひ参りをきてみしなの國の極むへしとは

右 成 仲

八十まで神の恵のたまはまねは後の世もなをたのもしきかな
左歌意趣よろしくこそ侍るめれ。今生世隨_ニ昇進_ニ掃望彌
不_レ盡者也。しかるにみしなの國のきはむへしとはとい
へる。心實正直之儀也。定神感歎。右歌八句之尊齡雖_レ傾。
七社之壇無_レ翫。今生之宿緣已爾。後世之引導何疑はん。
たのもしきなといへる。尤可_レ然歟。但左のまいりをきて
といへる。いさゝか俗に近く。右のたまはまねはとをける。
ことなるよせなくやあらん。しかれとも。かの判子之
中。驚馬有_ニ驥之一毛_一。不_レ可_レ得_レ爲_レ驥。龍有_ニ蛇之一鱗_一。
不_レ可_レ得_レ爲_レ蛇。大徳可_レ以掩_ニ小瑕_一。小火爲_レ能潤_ニ枯旱_一。
といへるかことく。いさゝかの不足なりとも。大意をの
をのよろしきによりて。持とすへし。

十番

左 經 盛

よろこひのしけき社と聞つれは一かたならすたのもしき哉
右 資 隆

みたらしの清き流にすゝかれて心のおかはのこらさらなん
左よろこひのしけきみやしろの句は。いとおかしくき
こゆ。右歌あかの事さきに申畢。以_レ左爲_レ勝。

十一番

左 脩 範

たくひなく深き心をくみてしれ頼をかくるかも 河浪
右 顯 家

わか身にもうき世あらしたのむ哉かもの川水すまん限は
左たのみをかくる賀茂の河浪といへる姿。いひなかし

てよろしく見え侍り。但右は河なみ川水。しみてふかさ
あさゝ尋侍らむもばゝかりおほし。れいの持とすへし。

十二番 左 釋 阿

たちかへり捨てし身にもいのる哉子を思ふ道は神も知らむ
右 賴 政

上はかみ下はしもとそ祈るへき我ねかはるゝこゝの品をは
左歌思ひを捨て桑門に入なから。猶心のやみは晴かた
くして。かきねて和光のところをたのめるなるへし。右
歌ひとへに往生の望なり。尤なり。宿因にまかせて。雖_ニ
下品_一足ぬと思ふ事に侍るを。上には上輩に列せんこと
を祈。下には下品に生せん事を好み願はん事やいかゝ。
勝負不_ニ分明_一。神慮にまかすへし。

十三番

左 靜 賢

ことに出ていはゝかしこしいはて只頼む心は神にまかせん
右 季 經

うき世には底のみくつと成ぬとも頓て沈むなかも 河水
左いはゝかしこしいはてたゝといへるすかた。おかし
くこそ侍れ。右底のみくつとなりぬともといひ。やかて
しつむなといへる心。又宜く見ゆ。猶持とすへくや。

十四番

左 範 玄

つもりて心をけかすちりひちも御手洗川に濯かさらめや
右 經 家

わかたのむ其神山のかひあらはなとか榮行時もなからん

さき／＼もすゝく歌ともみえ侍りつる中に。歌合のちりひちは。さても侍りなん。つもりゐてなといへる五文字。あしからず聞ゆなるへし。右歌なとかさかゆくなどいへるも。さる事とみゆ。又持となるへきにや。

十五番

左持

数ならて老ぬとなにか歎くへき三のたのしひある身なり鬼

右

道因

むかし我いつきの宮につかへしを神も哀とおもひ出すや左榮期か三樂の心。よろしくこそ侍るめれ。怨不背者不退性也。傷不達者不知命也。こそいひて侍るめれ。三のたのしひある身なりけりといへる。可謂知運命矣。右は在昔のいつきの宮の奉公をおもひて。今日當社の述懐にいたせり。兩首の心さし共によるしく見ゆ。仍爲持。

十六番

左

隆房

今よりは秋の小鹿のふた毛をもわか元結のよそにやはみる

右勝

親宗

すへらきを千世の春とそ祈ます我行末に花や咲とて左者思朝々二毛之齡。右者祈聖代千載之春。歌品雖等。意趣依祝心。以右爲勝。

十七番

左持

有房

人なみにゆられありきの果は只沈むみくつの身とや成なん

右

經正

むかしより思ふ心にある物をみたらし川にくみてしらなむ左歌浪にゆられて。はてはしつむなといへる心おかしく侍り。右歌又思心有てみえ侍れは。持とすへし。

十八番

左持

忠度

ひたすらに祈るにあらず恨かね背きはつへき世共しらせよ

右

寂蓮

世間のうきは今こそ嬉しけれ思しらすはいとはさらまし左の歌の心さし。いと宜しく見え侍り。右もことなるよせ有てはみえ侍られと。歌の姿文字つゝきゆうに侍るなるへし。仍持とすへし。

十九番

左勝

盛方

ひろせ河底のみくつも流れつゝ我よりは猶しつまさりけり

右

顯昭

ねきかくるしるしたかへて我方に神よりいたの名を頼む哉左歌我よりはなをといへる。心姿ゆうにこそ侍るめれ。中の五文字や。今少し思へからむ。右歌珍しきやうには侍るを。初の句より神よりいたのなといへる姿。不被庶幾や侍らん。左猶勝に侍り。

二十番

左持

隆信

みたらしの水の水上世にすまはきのみはかくて沈はてしな

右

仲綱

神もみよ思ふ事なき人たにもたつことやすきしめの内かは左みたらし川によせて。世にすまはなといへるすかた。

心ありてきこゆ。右たつことやすきなといへるすかた。
おかしくみゆ。持なるへし。

二十一番

左持

公時

二葉より頼みそわたるもろかつら傳りきたる跡はたかはし

右

定家

ふかゝらぬ汀に跡をかきとめてみたらし河をたのむ計そ

左

備前

心姿。おかしくこそ侍るめれ。右みたらし川をたのむゆ

へに。

ふかからぬことのはをかきとむらん。思心なきに

あらず。老の心なんみたれて。勝負不分明。よりて猶持

二十二番

左持

定宗

さりとともと頼む心になくさむはかつく神のしるし成けり

右

伊綱

さりと共と賀茂の河なみはやくより頼をかくるしるしみせ南

左右ともに。さりとともといへる心姿など。おかしく聞え

なから。させる詞のよせなく聞ゆ。右はかもの川波によ

せたる心はおかしきを。終の句のこと葉いさゝかをと

れるなるへし。なそらふるに。又持とすへきにや。

二十三番

左持

成家

山あるの袖ふる神はかさなりぬいつか嬉しきことを包まん

右

公衡

ゆく末はたゝすの神にまかせ置て昔の跡を踏もたかへし

左の歌山藍の袖にうれしきをつゝまん事。さもある事
には見え侍るなるへし。右の歌組の神にまかせをきて
といへる。かれましたかるへし。ともに神慮を期せり。
よりて持とすへし。

二十四番

左

季廣

さりとともと神の誓ひを頼むこそ沈む歎のたえま成けれ

右勝

備前

千年まつ若葉のふちの榮をも頼めは神に禰宜そかけつる

左心はゆうなるへし。しつむなけきのなといへるや。さ

せる詞のよせなく侍らん。右ちとせまつわか葉のふち

は。ねきかくること葉もことよりては聞ゆ。以て右爲勝。

二十五番

左

兼綱

おもふ事かなはてやまはうき身ゆへ又雲分むことを悲しき

右勝

智將

我たのむ心のほとをみたらしの水の水上くみてしらなん

左の歌は姿ゆうに侍り。但雲の言葉さてもや有へから

ん。かやうの事はかつは作者により。折にしたかふへき

也。右歌心の底をみたらしのとをけるは。おかしく見

ゆ。すゑに又。汲てしらなんといへるや。ことかきなる

やうならん。但猶右勝へし。

二十六番

左持

敦仲

たのみこし其神山のしるし有て榮行道の程を知はや

右

勝命

いまはとていそく心をほにあげて彼岸ちかく行船もかな
左その神山いかゞさかゆく事なからんと聞ゆ。右か
の岸をねかへる心あはれに見ゆ。こゝろ詞とり／＼な
り。持とすへし。

二十七番

左持

廣言

世に住て御手洗川を頼む身は嬉しき瀬にもあはさらめやは

右

祐盛

やはらくる月の桂の光にはこむよの闇もなにかまよはん

左の歌世にすみとをき。うれしき瀬にもなと。たのも
しく聞ゆ。右の歌すかたよろしきやうにはみえ侍り。但
やはらくる光。こんよのやみなといへる事。すみよしの
社の歌合にや見侍し心ちえする。ひかおほえにや侍る
らん。よりて勝負申かたし。

二十八番

左持

親盛

さりともと世を待ほとに身につもる年計こそ人に劣らね

右

安性

我ためは後のうき世をわたさなん又雲わけむ神の名もおし
左よをまつほとになといへるや。かの有明の月の光を
まつほとにといへるには似す聞ゆらん。をとらねとい
ひはてたるも。散々なる心地やすらん。右後のうきよを
といへる。ゆうなるへし。河なとやあらまほしからむ。
後の句はさてもありぬへきよし。さきに申をはりぬ。歌
さまおなしほとなるへし。

二十九番

左勝

寂念

右

行念

いはすとも神はしるらんみてくらにしても頼をかくる心を
左右の歌いつれも心はゆうには侍るを。右みてくらに
してもなといへる姿。俗にちかくやあらん。左の心の月
をなといへる姿。宜しきにや侍らん。勝と申へきにや。

三十番

左

佐

右勝

重保

ちはやふる御手洗河のあふせには浪立まさるうたかたも哉
すへらきの願ひを空にみて玉へ分いかつちの神ならは神
左のうたみたらし河に。おもひをのふるに。浪立まさる
うたかたもかなといへる。しきしまの道を濫々おもへ
る。こゝろさしふかゝらねと。ゆうにはきこゆ。右の歌
祈精するには。聖主萬年之榮かけたてまつるとは。下
社上社之恵。心こと葉かた／＼かけまくかしこし。願を
空になといへる。尤祝言。是叶三神慮一歟。仍爲勝。

右別雷社歌合以流布印本校合了

廿二番歌合治承二年八月

題

閑庭秋來

長精進戀

作者

左

賴輔

宗因

仲遠

右

有房

州覺

侍從殿

判者

亮公 顯昭

美濃

良賢

中納言殿

因幡

六條殿

伊經

爲廣 辨殿

親盛

匡範

廣玄

維光

定宗

道清

一番

左

萩の葉にあきの初風音す也人めまれなる深山への里

右勝

人も見ぬまかきの萩に吹風は秋のけしきを誰に告らん

左右ともにやさしう侍るに。左の歌は庭といふ事やお

ほつかなら侍らん。右は人も見ぬといへるはしめの詞

そ。心よからねと。庭の心あるによりて。右まさり侍る

へきにや。又云。左右ともにやさしく侍。初よりいひな

かされて。姿おかし。右は秋のけしきをたれにつくらん

たと侍。心ありてとりく。勝劣申かたきにや。

頼 輔

有 房

二番

左

草しけみ入くる人もなき宿に朝露しろし秋はきにけり

右勝

あききぬと驚く人もなき宿にしらせかほなる萩の上かせ

左歌は朝露しろしなといへるわたり。いひしれる心ち

して侍り。いりてなといひて。末にきにけりと侍。おな

し心にや。曾丹か我せこかきまさぬよひのあき風はこ

ぬ人よりもうらめしきかなとよめるは。すくれたる歌

なれば歌合にはいかてかとかめす侍るへき。右可爲

三番

左勝

人ならばかゝらさまし庭の面に秋はくれとも猶そ閑しき

右

主なくて閑しき宿の庭のおもにあきをとつるゝ萩の上風

右は秋をとつるゝといへるつゝきや。心よからす侍ら

ん。左勝へし。又左の歌まことにさる事と聞え侍て。心

有ては侍るを。秋はくれともと有そ。秋はくるにつけて

いとゝさひしさのまさるなと侍るは。今すこしかかなひ

てやときこゆれと。右はしつかさもすきて。ぬしなくて

なと侍る。如何かとはゝかり有やうにて。左はまさるへ

四番

左持

まくすはふ蓬か宿をかき分て秋はきたりと告る風かな

道 清

維 光

六 條 殿

定 宗

伊 經

右 爲 廣

蓬生となり行庭をかき分て物あはれなるあきはきにけり
心詞おなしほとか。左はいまま葛はふ露はかりはふる
まひて。右の物あはれなるよりはまさり侍るへきに。す
こし庭の心をくれたれは。ひとしとは申侍也。又云。と
もにおなしさまにやさしく聞ゆるにとりて。右はすこ
しいひなれて聞え侍り。

五番

左持 宗 因

をのつからとふ人もなき我宿のさひしきさふる秋はきに鳧
右 州 覺

さらぬたに拂はぬ庭の閑しきに一葉を散す秋風そ吹
ともにあしくも侍らぬにとりて。右ははらはぬ庭のさ
ひしきといひ。木葉ちらす秋は今少したよりあるへき
に。一葉ちらすと侍こと葉つかひ。すこし心よからす。
一葉つゝ散なといへるよりは。秋は只一葉のみちるか
ともいひつへければ。なそらへて持とす。

陳狀に云。一葉と申事は。朗詠集に立穂題に。一葉落庭
と申題にて。詩を作たる事の候也。その心歟。然は秋日
初て一葉落はしめ候歟。又云左なたらかによみ下され
て侍るに。右一葉をならす風こそ。此題にはさこそよま
るへかりけれと聞えて。いとおかしくはへれ。左人なと
も。秋のきたる心には。早臨一葉將老程とつくりて。
詩にもかよひて。ことに興有心地し侍れは。右の勝にや
侍らん。

六番

左持 親 盛

きり／＼すともなふ秋はきにけらし蓬の庭の閑しかりしも
右 中納言殿

音もせて霧はかりふる庭の面に誰を尾花のまねきたつらん
右の歌は霧はかりふるといへるに。たしかに人すま
とも聞えねは。閑の字いかゝと覺え侍る。大かたは人の
すまぬをのみしつかとは申へきにあらす。閑居と云は
人あれとかやうによみ侍るへきにや。以て右勝とすへき
にや。又云。左歌。蓬の庭には蜚のとも侍つるほと。た
くに聞ゆるにとりて。少し秋の蜚をともなはん様にそ
聞え侍れと。さまであまりのなんに侍り。右はまねき
立らんと侍ほと。今少したちをととりてや。

七番

左持 匡 範

くる人もなき庭もせの糸すゝき初秋風になひく夕くれ
右 因 幡

みち絶て野もせとあれし庭の面に秋の哀は尋きにけり
おなしほとと申へし。又云。右の歌殊の外にやさしくあ
はれにこそ見え侍れ。

八番

左持 廣 言

あれはてゝ問人もなき宿なれと庭の淺茅に秋はきにけり
右 辨 殿

家主なき籬の萩に吹風はたれに知する秋のけしきそ
是もかちまけ申難くや。又云。左いとやさしく侍り。右は
あるしなきと侍るにや。初も申侍るにや。閑の心にはあ

るしなしなと侍る。へちの事にこそ侍らめ。

九番

左持

仲 遠

日をへつゝ蓬しけれ庭の面に明くる物は秋のはつ風

右

侍從殿

いにし秋のきてやかへれる故郷に人なき庭の萩のにしきは

右ふる里の錦の心は興あるにや。されは故郷にといひ

て。人なき庭のなと侍る程。よくもかなへりとも覺侍ら

ねは。左右なすらへて持と申へき也。又云。左なんもな

く。やさしけに侍り。右はいにし秋は萩の錦もなかりけ

十番

左持

仲 頼

きりゝす庭の淺茅にしるへして哀をそふる秋そきにける

右

美濃殿

日を経つゝ問人もなき庭の面に立にけらしなあきのはつ風

これも持にて侍るへし。又云。左葦の秋のしるへなとす

る事の侍るにや。かやうの事ふるくもよみけるは。きり

きりすやしるへなるらむなとやうにこそ侍るめれ。右

十一番

左

親 基

むしの聲まかく聞は艸ふかき庭こそ秋のなさけ成けれ

右

良 賢

とふ人もなき故郷に萩風のそよいかにして秋はきぬらん

左は心詞ともにまさりて侍らんに。萩風を少しこはく

聞え侍る。萩の上風。おきの葉風。萩ふく風なとこそよ

みなして侍れ。かやうの事はことよりはつきにて。ふる

き跡を追へき事になん。萩風さるへき歌にあらは。勝侍

るへし。しからすは持と定むへしと申侍らぬにて。此道

の勝れたる事はしらせ給ふへし。

陳。後拾遺抄秋上。藤原長能歌。萩風もやゝふきそむる

聲すなりあはれ秋こそふかくなるらし。

又云。左虫の聲によりて草深き庭のなさけとおほえん

事。さもさ聞えておかしく侍るを。秋のくる心にやすく

なく侍らん。右は又秋はたしかにきたりとよまれて侍

れと。歌すかたをとりてや侍らん。

一番

左持

頼 輔

こひしさに心すむ身は石清水みとせこもりも解かたきかな

右

有 房

かく計り通ふ心をいつさなくいもゐのしめに引なへたてそ

右歌あしからす。左歌なかりさうしんとは申なから。

三とせこもりといへる。いとよからねと。やむことなき

御神にことよせたれは。ひとしめておなし程と申へき

にこそ。又左歌戀しさに心すむとよまれたる。さも有事

なれと。いかにそや聞え侍にや。月をも見。世中の無常

をもおもひなとせんには。今少しすみもやせむ。戀にも

すむおりも侍なん。又みたれん事はおほくや侍らむ。さ

れと石清水にたより有てよまれたるにこそ。右いもゐ

のしめに引なへたてそと侍る。たれかひきへたつるに

か。さうしんは人のをしてさする事なとにやは侍る。こ

れも見ゆる所を申に侍るはかりなれは。いつれもさまたの難には侍らねは。おなし事にや。

二番

左持

維光

日數ふるいかいもゐはあきのよの長き恨の基なりけり

右

六條殿

いく百日いもゐのしめを引かさね戀せしといふ道にしつ覽

左歌秋の夜のなかり恨。此歌の中におもひかけぬ心地し侍る。右のいくもゝかは。うちいひてられたるも。いかにそや聞ゆれと。又持歌。又云。左とり立たる難は侍らねと。又ことなる事も侍らす。右詞もいひなれて。心もおかしくは侍るを。此題の心はたゝさうしんの月と戀をする身てこそ侍らむと思給ふるに。戀せしといふみそきのれうのさうしんと侍るぞ。いかゝと見ゆれと。それまては餘の難に侍る。いかさまにも右は勝りて侍らん。

三番

左勝

定宗

月日は心きよくてすくせとも涙の落る事そわりなき

右

伊經

さのみやはみよの佛にことよせて逢みぬ夜半の數をかそへん
右のみよの佛にことよすらん程。たしかにもさうしともいひあらはされぬ心ちなんし侍る。左はむけにたゝことなれと。歌合にはかつ事も侍なん。又云。此左右いつれも長精進の心たしかにも聞え侍らぬにや。

四番

左持

道清

右

爲廣

いつとなく清き衣を身にきつゝ神にそいのる妹かつらさを
此題は久しくきよさは侍るあいた。逢へき人にあはぬ心にてや侍るへき。つらからん人にあはんといのらんは。題のほいに不叶や。又ともかうも人の心々によるへきにや。何様にも同様歟。又云。左右共に十三番の右歌に申侍る。おなし心によまれたれは。いよゝゝさのみ申へきに侍らす。左は今すこしきゝ所有てや侍らん。右もあしくはなれとも。始の句なとをとりて見え侍り。

五番

左

宗因

あふ事を祈るみしめは日數へて□しるしもなきに成ぬる

右勝

州覺

しめの内に百夜をかきる丸ねして果は戀にそ日數へにける
左歌の心。さきに申侍ぬ。右勝侍るへし。又云此左歌又れいの心に侍るめり。その難さのみ申へきならねは。同心にとりて。この歌よくこそよまれて侍けれ。右歌もあしくは侍らぬに。はては戀にそと侍る。いかなれはとも心えかたく侍れは。左勝にや。

六番

左持

親盛

いはた川せこりに身をはすゝけとも戀に心をけかしつる哉
右
中納言殿

流れあはん程をたにいへ石清水いもゐの日數いまいくか共

とリ／＼にその心侍るめれは。持と申侍るへし。又云。左歌恐れ有心ちそし侍れと。又さもなとか侍らさらむ。右なかれ逢むほとをたにいつとて。石清水にひきよせられたる。さもと聞ゆれとも。勝へきほとには侍らす。持と申へし。

七番

左勝

匡範

戀しなは神の名たに成ぬへし百かもまたて御しめあけてん

右

因幡

百夜まで引しめ繩に思ひしれしちのまろねのつもる數をは
左むすひゐのみしめあけてんといへる詞。やまご歌の
つねのことはつかひとはおほえ侍らねと。右のしちの
丸ねといふ事は。たしかにも見えぬ事にて侍る上に。し
ちのはしかきとこそ申ならはしたれ。まろねといふ事
は。ちか頃ある女歌よみ詠て侍し後より。みなか様にの
みよまれ侍る也。いかにも右勝へし。又云左もゝかもま
たてみしめあけん事。むけに不重にそきこゆれと。又そ
れも神のなたてにならん事を思ひよられたる心なきに
あらず。右百日さうしんに。しちの丸ねの數。同じ日數
にと思はれたるは。さもと侍る事なれと。いかやうにお
もひしるへきにか。まろねの數つもるよしにや。いかさ
まにも左はまさり侍らん。

八番

左持

廣言

しめの内に清き衣をみとせ迄戀の涙にあらひはてつる

右

辨殿

いさきよきもゝかのしめの内なから絶ぬは袖の雪なりけり
三年百日のいもゐ。久しきはたとへなけれ。共にいはれ
侍めれは。とリ／＼とこそは申侍らめ。又云。左右共に
同心に侍るめり。さうしんの日數は。左ことのほかに久
しく侍れは。題の心になふへきにては侍れと。あらひ
はてつるなと侍るいかにそや。よみおほせられても聞
え侍らす。右歌こそ。此戀の歌とものの中に。題の心にか
なひてよく侍れ。勝侍なん。

九番

左勝

仲遠

千早振かもの社にもゝ夜ねて戀かねぬとは妹は知しな

右

侍從

ひろまへに丸ねは三とせ過ぬれと待わひていも新枕すな
右まち侘ていもといへることはよろしからず。よき人
ののかたは有に似たり。左可勝。又云。左はあまりや
すらかにて。いかに申へしとおほえ侍らす。右ひろま
へ。さ讀事なれと。いかにそや聞え侍れと。今少し思ふ
所侍るや。いつれもかちまけ申ほとには侍らす。

十番

左勝

仲頼

曳しめの日數へぬれはつゝみあへて清き衣の袖そぬれぬる

右

美濃殿

百夜までゐかきの内に丸ねして戀の病を我かつきぬる
右うた。なにとなくうちきくに。ゐかきの内にて病つか
ん程。いかにそや聞え侍。左勝へし。又云。左歌はことの
外にまさりて侍り。題の心にもかなひて聞ゆ。右我かつ

きぬると侍。いかにそや聞ゆ。左の勝にや。
十一番

左持

いくとせも君ならてはと思ふまに清き衣をぬかてやみぬる

右

親 基
良 賢

三歳まで思ひたちにしきよ衣かさねぬつまに袖そしほるゝ

此ほど殊にみたり心地あしき事侍りて。つかひことに
勝まけたしかにも見とき侍らぬうへ。――てのつか

ひなとは。をのゝも定させ給へし。又云左はまさりて
きこえ侍り。

右大臣家歌合 治承三年十月十八日

題

霞

花

郭公

月

紅葉
述懷

歌人

左方

女房兼實公

皇太后宮大夫入道

季經朝臣

隆信朝臣

行賴朝臣

師光

良清

俊惠

寂蓮

別當局皇嘉門院女房

右方

大貳入道

源三位顯政

經家朝臣

基輔朝臣

資隆朝臣

仲綱

資忠

顯昭

道因

丹後右府女房

判者 皇太后宮大夫入道

一番 霞

左持

山高み嶺のかけちを見渡せは岩もかすみにつつもれにけり
皇太后宮大夫入道

右

立わたる春の霞もわかれぬは烟になるゝしほかまのうら
大貳入道

左歌山（の）霞岩をうつめるはかりなん。ことなる事み
え侍らす。右歌しほかまの浦は。すこしいふせきやうに

や侍らん。彼浦は松のかけ波の氣色。眺望かきりなき所にそ侍るなる。されはいせ物語にも。我御門六十餘國の中に。鹽かまの浦に似たる所なかりけりとそ書侍める。霞もわかれす煙になるゝ所はかりいはるゝは。浦もほいなくや侍らん。左の歌よろしきにはあらねと。一番の左なるによりて。勝と定申。

二番

左勝

女房

霞しく春のしほちをみ渡せはみとりを分る沖つ白浪

右

源三位

東路を朝たち行は葛飾やまゝのつき橋かすみわたれり
左歌いとおかしくこそみえ侍れ。春の霞蒼海の上にひ
き渡るさま。朝みとり色をそへたるに。沖つ白浪立わけ
たらんほと。おもかけおほえ侍れ。右歌かつしかやとい
へる。彼まゝの繼橋やますかよはんといへる萬葉集の
歌を思て。東路の霞おもひやられて。心ほそく覺侍れと
歌の姿はしゐてことならぬ成へし。猶みとりをわくる
おきつ白浪は。たちまさりて侍る。

裏書 あのをとせすゆかんこまはかつしかの下總國歌
なみのつき橋やますかよはん

三番

左持

寂蓮

たちかへりくる年波や越ぬらん霞かゝれる末の松やま

右

仲綱

みつしほにかくれぬ沖のはなれ石霞にしつむはるの明ほの
左末の松山にとしをこし波をかくる事。常のことなる
やうに侍れと。姿詞優に侍るなるへし。右心も珍しく侍

るを。はなれ石やことに見所あるものには侍らさむ。
すゑの松山は。おかしき所のめなれたるさまに侍る。は
なれ石。かとありてめつらし。ことなる事なきにやと
て。これをなすらへて持と申へし。

四番

左持

女房

みな人の我ものかほにおもふかな花こそぬしは定さりけれ

右

大貳入道

はるの内はよし野の山の嶺ならぬ心も花に成にけるかな
左歌旨趣珍重。事理叶へり。但上五七句の聊俗にちかく
や侍らん。右吉野の山の峯ならぬなど。おかしく侍る
を。心も花にといへるや。あたなる櫻のはな心になれな
んと聞え侍る。歌の心は花より外の他事なくなむある
といへるなるへし。左歌下句殊によろし。右は上句おか
しく侍り。爲持。

五番

左持

隆信朝臣

世をいとふすみかと聞と春に逢はなも咲けりみよしのゝ山

右

道因法師

わかやとの花をや風にゆつらましぬしとなりなは惜む計に
左右兩首。ともに心詞おかしくは侍るを。左はみよしの
の山を。世をいとふ栖とはかりはきゝをきて。春花咲所
としることの遅かりけるにやとそきゝ侍る。右花をや
風にゆつらましとまておもひよれ。春は花を惜む心も
ふかく侍るを。ゆつらましとをきて。主と成なはいへ
る詞や。すこしけなるやうに侍らん。ともに勝負不分

六番 明。仍爲_レ持。

左勝

たつねきて花みぬ人やおもふらんよし野の奥を深き物とは

右

寂蓮 顯昭

あやしさに尋て花と知ぬれはよそめ嬉しき嶺のしら雲
左歌言葉に花とをきよし野の山の深きあさゝをいへら
んやうにこそ聞ゆれと。花をたつねて身は心さしの深

きゆへに。吉野山もふかうすなと覺ゆると侍めり。右歌
たつねて花と知ぬれはと侍るにはあらさりけりと聞ゆ
るほとに。よそめ嬉しきといへる花は。まことの雲もあ
りけるにや。上下たかひたるやうにきこゆ。あやしさに
と置る初の句も。優にしもあらぬにや。左よろしきに似
たり。可_レ勝。

七番 郭公

左持

すきぬるかよはのね覺のほとゝきす聲は枕に有心地して

右

皇太后宮大夫入道 資隆朝臣

ほとゝきす過る聲をやとゝむると雲路にいかて關をすへまし
郭公の歌に。雲路に關をすへましかはといへる心。ちか
うもきゝなれはへる。聲をやとゝむなといへるは。いま
すこし有かたくやとそ聞ゆ。姿はおかしくこそ侍れ。左
歌宜しからすこそ侍らめ。且は依_レ例不能_二勝負_一云々。

八番

左勝

行頼朝臣

ほとゝきすなき行方をたつねれは花橋のもとにきにけり

右

基輔朝臣

忍ひねに里なれそむる郭公聞ぬかほにて又なのらせん
左ほとゝきすに花橋なとは珍敷心はあらねとも。姿詞
ことなる事なく。優に侍るめり。右心はおかしく。里な
れそむるなとゝいへるわたりも優には侍るを。ほとゝ
きすにきかぬかほにて又なのらせんことそ。いかゝと
覺侍る。左可_レ勝。

九番

左持

隆信朝臣

雲はるゝ三笠の山の月影はさしのほるよりさやけかりけり
右 女房丹後

久方のあまの河より流きてなをしも水にとる月かな
左心詞あひかなひて侍り。三笠の山の月さしのほるな
とそ目馴て覺る。右なをしも水にとる末の句。ことに
宜みえ侍るを。中の五文字のをしはれまほしく聞え侍
るなり。左はことなる難なく。右ば末おかしく。持とす
へし。

裏書 法性寺入道殿(忠通)内大臣の時歌合に。題山月。
神のます三笠の山の月影はゆふかけてしもさしのはる哉

十番

左持

女房別當

照月のすかたはかりはおもなれて影珍らしき秋の空かな
右 道因法師

かきり有ていらむ月をもいかゝせん山端迄は曇らすもかな
左姿はかりはおもなれてといへる。月の姿なとは。さき
さきいひなれて。おほえすや侍らん。末句は優に侍る。
右上の句は落月にやと見え侍。末の句は東峰に出るよ

り西山にかたふくまでくもらすもかなと。たゞ大かたの事と聞え。當時月あかきには見え侍らす。但歌姿はよろしく侍れは。是も又爲侍持。

十一番

左

俊恵法師

照月のすむへき夜半に成ぬれは雲も心は有けるものを
右勝 源三位

をちかたやあさつま山に照月の光をよするしかの浦なみ
左歌雲心なしとあるを。雲も心はありける物をといへる。心はおかしくこそ侍れ。すむへき夜半に成ぬれはといへるなり。八月十五夜九月十三夜なとにや侍らん。是はことに名をえたる夜な。その外は曇りてのみあらんやうにや聞え侍らん。すむへき秋にといへらは。ひろく侍るましとそみえ侍る。右歌をちかたやとをきて。光をよするしかの浦浪といへる末の句。面影おほえて。いと宜しく侍めれ。あさつま山はふるくもよめる所にはあれと。ことにこひねかふへしとはみえ侍らねと。なをしかのうら浪の光をよせたる心。おかしく見え侍り。仍以右爲勝。

十二番

左持

紅葉

俊恵法師

日をへつゝしくるまゝに立田山まつのみとりの残行かな
右 資隆朝臣

秋くれは千種にそむるいとか山吹なみたりそ木からしの風
左歌心有ては見え侍り。しくるまゝに立田山といへるに。紅葉さためであるらんとは。をしはかられ侍れと。

詞に紅葉の侍らぬこそ。歌合にはいかゝと覺え侍れ。松の緑の残り行かなといへる行の字も。しくるまゝにの詞にいひあはせて。思なとはみえ侍れと。ゆくの詞や松の緑の言葉にかなはず侍らんと覺え侍る上に。津守國基歌云。紅葉するかつらの山にすみよしの松のみひとりみとりなるかなといへる歌に。末の句いくはくかはらずや侍らん。右歌千草にそむるいとか山は。心いとすくて宜しく侍るに。吹なちらしそ山おろしの風といへる。古今の歌に。吹なみたりそ木枯の風。文字のをきやうかはる所すくなくや侍らん。兩首ともにめつらしきにはあらさるにやと覺侍れは。持と申侍へし。

十三番

左持

良 清

たつた山時雨ふりにしむかしより梢を秋を忘れさりける

右

基輔朝臣

面影にとまるはかひもなかりけり梢に散ぬもみちともかな
左歌こそ何ともえ心得侍らねと。もし時雨ふりをけるならの葉の名におふ宮のふることそれといへる歌をおもひて。奈良の御時立田の山の紅葉御らんしけることなとをや。おもへる人にや侍らん。木すゑそ秋を忘さりけるなといへるも。ふもとさまなとは。いかになりけるにかとこそ聞え侍る。これも紅葉をはまはしてよめるにや侍らん。右歌さまふるまひはおかしく侍るを。面影にとまるはかひもなし。梢をちらぬ紅葉ともかなといへる事も。をろかなる事とこそおほえ侍る。左は歌のたけあるやうにて。聞知るに及はす侍るほど。是もお

なしほとゝ申へきにや侍らん。

十四番

左持

皇太后宮大夫入道

時雨行そらたにあるをもみち葉の秋はくれぬと色にみす覽

右

大貳入道

あきふかみ岩かきまゆみ紅葉して錦をかこふ太山へのさと
左ひとへに秋暮ぬる事をおしみて紅葉をしも賞せさる
にや侍らん。右いはかきまゆみとをきて。錦をかこふな
といへる。彼石季倫か家に。五重の錦障たてたりけんな
と思ひやられて。姿おかしく見え侍り。但うへに岩かき
とをきて。末にかこふといへる。おなし事にや侍らん。
かこふはこと葉のやうにははへれとも。かこふといふ
もかきなるへし。されはむかし切韻を見侍しに。拵。籬
なり。以柴壅也とそ申たりしやうに覺侍る。仍勝負不
分明。最下愚老已迷是非。兩方吟明士定決離雄。左
歌くれの言葉二所あり。しかれと時雨は雨の名なり。あ
きくれぬは夕也。仍病にあらず。

十五番 雪

左持

皇太后宮大夫入道

たつぬへき友こそなけれ山かけや雪と月とを獨みれとも

右

道因法師

朝戸あけて外の雪をも詠やらん心の行はあとしつかねは
左歌心は山居の雪をみて。彼王子猷か山陰の雪夜戴安
道をおもへる事を。いへるにやとはみえはへれと。歌の
面に雪の事すくなくや侍らん。右歌は雪の歌と覺て。姿
もおかしく侍る。外の雪をもといへるやすこし荒涼に

聞え侍らんとそおほえ侍る。勝負之條。是もさきの番に
おなしきによりて。不_レ加_レ判耳。

十六番

左持

俊恵法師

うちはらふ衣手さえぬ久方のしらつき山の雪のあけほの

右

顯昭法師

浪かくるとしまか崎のはま嶽しつえは雪も積らさりけり
左歌旅宿雪などそおほえ侍と。雪の曙といへる文字遣
ひ。おかしく侍るめり。しらつき山や。しゐて庶幾せら
れす侍らむ。萬葉集などの歌。殊に優なる事を。歌合に
はとり出へき事とこそ。ふるくも申て侍るめれ。此山久
かたにはいかゝをきて侍らんや。此しらつきは若槻の
木にてもや侍らん。少しおほつかなくみえ侍れとも。今
は大かたものゝおほえす侍る也。いかにひかことゝも
申たりと。人の見候はんすらん。右歌。としまか崎の濱
嶽。これも歌のふるまひはおかしく侍るを。浪かくるし
つえに雪のふらぬことはり。見所なくや侍らん。末につ
もらんをは。お花ともうたかひ。濱にしけるを月と見ん
や。雪の歌のほいに侍へからんとそおほえ侍る。雪の明
ほのは猶おかしくもやみえ侍らんとて。以_レ左爲_レ勝。

十七番

左持

寂蓮

ふりそむるけきたに人のまたれつる深山の里の雪の夕暮

右

大貳入道

たひ人ははれまなしと思ふらんたかきの山の雪の明ほの
み山の里の雪は。今朝たに人のなといへる心よるしく

侍るにや。たかきの山の雪は。歌のたけありて優に侍るへし。此たかきの山も吉野の山にこそ侍れ。旅人などのつねにすることは。いとなくや侍らんと覺え侍るうへに。雪の夕くれ。少しさひて思ひやられ侍れは。又左のかたへつきや侍らん。

十八番 祝

左持

女房別當

君か代の末をはるかに三笠山さしなからこそ神にまかすれ

右

大貳入道

數しらぬためしは何と人とは。君か御世とそいふへかりける左歌はいはひの心ふかく侍りぬへれと。さしなからといふこと葉。かすあるものをきて。むれたるといへるは。さなからといふにはかなふへきにや侍らむ。右歌すかたもおかしく。祝の心も侍りぬれは。持と申侍るへし。

十九番

左

季經朝臣

君か代をいかにかそへん世中に數にたるへき物しなけれは

右勝

源三位

住吉の神もしるらめよる浪の數かきりなき君か御代をは數にたるへき物しなけれはといへる。誠に峯の松濱の眞砂を盡すとも。數ある物はしることも有ぬへけれは。祝の心かきりなく聞ゆ。但いかそへんとをきて。かすにたるへきといへる。同事にこそ侍るめれ。住の江の波にかけて君か世の數によせたる心は優なるへし。おなし事なきによりて。以_レ右爲_レ勝。

二十番

戀 左持

皇太后宮大夫入道

あふ事は身をかへてとも待へきによゝを隔てん程を悲しき

右

女房丹後

おもひねの夢になくさむ戀なれは逢ねと暮の空を待るゝ

左歌物ふかき心地しておかしきさまにもみえ侍るへし。

右歌あはねとくれの空を待るゝといへる。けちかきさまして。戀の歌とおほえてこそ。但勝負不能_ニ定申_ニ歟。

二十一番

左勝

季經朝臣

思ひ出るその慰めも有なまし逢みて後のつらさなりせは

右

顯昭法師

よそにみる人はかくしも厭はぬをうき身は戀に顯はれに鬼

左の歌戀の心もさることゝ聞えて。姿も優に侍るめり。

右姿はおかしきやうに侍るを。うき身は戀にといへる。

少心をそくしれりけるにやと聞ゆらん。以_レ左爲_レ勝。

二十二番

左勝

俊恵法師

我戀はいまは限とゆふまくれおき吹風のをとつれて行

右

道因法師

くれなゐに涙の色のなら行をいくしほ迄と君にとはゝや左秋の夕まくれの野風なといはん題の歌にやとそ見ゆれと。おもひいりたるやうには侍るへし。右紅に涙の色なるといふは。常の事にてこそ侍れと。いくしほまでと君にとはゝやといへる末の句。よろしく侍るめり。但左も猶心有てみ侍れは。爲_レ勝。

二十三番

左勝

女房

行かよふ心に人のなるればや逢見ぬさきそこひしかるらん

右

經家朝臣

つらきをもうきをもしらぬ心にはなをかはとて戀しかる賢

左歌おもひつゝへにける年をしるへにてといへる歌の

心にかよひて。是は逢見ぬ先に戀しかるらむといへる。

すかたおかしくこそ侍るめれ。右歌うきをも知ぬなと

いへる。歌めきて聞侍るを。末の句やあまりさへ心もな

からさらん心地して侍らむ。仍以左爲勝。

二十四番 旅

左

隆信朝臣

たひねするむろの荳田のかり枕鳴も立めりあけぬこのよは

右勝

源三位

宮古へは今もことつけやるへきにうつつの山へに逢事そなき

左むろのかり田に鳴立なとそ。ちかき歌に侍りしかと。

をき所かはりて侍ぬれは。姿おかしく侍めり。末の句の

あけぬこの夜はとをけるそ。此頃常に見ゆる心地して。

さまたてなき事の例のことく覺侍り。右うつつの山へにと

いへる。ことによそへなとなけれ共。彼宇津の山への

うつゝにもと云る歌を思へる心。よろしくこそ覺え侍

れ。左歌はふるまひたるやうにて。耳にとまる所あり。

二十五番

左

季經朝臣

朝夕におも影さらぬ宮古かな心や先にたちかへるらん

右勝

資忠

たひねする庵をすくるむら時雨名殘迄こそ袖はぬれけれ

左右ともに殊なる事なく。優には侍るに取て。右のなこ

りまで袖はぬれけれといへる。いと宜しく聞ゆ。右勝侍

るへし。

二十六番

左

俊恵法師

妹しるやは山しげ山越くらし木の葉かたしき明しつるよを

右勝

顯昭法師

遠さかるまゝに都の忍はれてかさなる山のうらめしきかな

左歌いもしるらめやとをける舊歌のふるまひ。いさお

かしく侍るを。はやましげ山と置て。この葉かたしくと

いへる。字重なりてこそ侍るめれ。しからすはよく侍れ

と。歌合にはまさるへき。木のはかたしきといへる。こ

のはゝいかゝかたしくとはいふへからんとそ覺侍る。

右歌まゝに都そといへる。彼小夜ふくる儘に汀や氷る

らむといへる歌を。こひねかへるにやあらん。是はとを

さかるまゝにみやこのといふ句。よろしきにあらざる

へし。但かさなる山のといへる末の句も。たひの心ゆう

に聞ゆ。同事なれとも以右爲勝。

二十七番

左勝

女房

日を経つゝ都しのふの浦さひて浪より外のをとつれもなし

右

仲綱

宮城野の木下露をうちはらひこ萩かたしきあかしつる哉

左歌すかた心おかしくこそ侍めれ。浦さひてといへる。

少しいかにそや聞ゆらん。右歌ことなる事侍らす。左歌
なみよりほかのなといへる姿。猶よろしく侍るめり。以
レ左爲勝。二十八番 逃懷

左持

皇太后宮大夫入道

かきつめて思ふも悲しもしほ草沈みはてにしな社おしけれ
右 資隆朝臣

はなれ駒行もかへるもおとろかぬ心こそ猶うらやまれけれ

左歌もしほ草かきつむなとこそ。事ふりて覺侍る。右歌
放駒珍敷侍るへし。歌躰不相似。懸隔之上。判者愚詠。

依レ例不能ニ勝負。

二十九番

左勝

師 光

今は唯いけらぬ物に身をなしてむまれぬ後の世にもふる哉
右 資 忠

うきなからなを驚かぬわかみかな夢路に迷ふ心地のみして

左歌心ふかく姿おかしく。いとよろしくこそ侍れ。右歌
なをおとろかぬとをき。夢路にまよふなといへる心は

おかしくは侍るを。かやうの夢の心つねにみなれたる
さまに申侍らん。左猶めつらしく見え侍る。爲勝。

三十番

左持

女 房

ね覺して思ひつらぬる身のうきの敷にそふとや鳴の羽かき
右 仲 綱

更にける我よのほとはもとゆひの霜をみてこそ驚かれぬれ
左歌敷にそふとやといへる姿よろしくこそ見え侍れ。

右歌ふけにけるわか身のほとゝをきて。霜をみてこそ
といへる。始終相かなひ言葉たくみにして見え侍れは。
兩首の姿心とり／＼にして。楚忽之斟酌かた／＼みた
れはへれば。持と定申。

大夫入道

和歌の浦になを立かへる老の浪しけき玉藻にまよひぬる哉
返し 右 府

老の波ひかりをよする和歌の浦の月に玉もゝみかゝれに鬼

雖ニ荒本至極。旅宿之徒然之餘。寫留之畢。

寛正二年七月十八日

常縁在判

同四曆癸未六月十八日。以ニ後本ニ寫畢。

道端之

右此本。以ニ叡勝院本ニ寫留之ニ畢。
享祿二年十一月十一日

右二部以奈佐勝鼻藏本一校了

群書類從卷第百八十九

和歌部四十四 歌合十

若宮社歌合 建久二年三月三日

題

山居聞鶯

松間梅花

寄祝言戀

作者

正三位行權中納言兼右兵衛督藤原朝臣兼光

從三位行右京大夫藤原朝臣季能

從三位藤原朝臣季經

正四位下行右京權大夫藤原朝臣隆信

正四位下行左京大夫藤原朝臣顯家

正四位下行左近衛權中將兼備中權介藤原朝臣兼宗

正四位下行左近衛權少將藤原朝臣隆保

散位從四位下藤原朝臣有家前少納言

散位從四位下藤原朝臣伊經前中務權少輔

前播磨守從五位上藤原朝臣隆親

前飛騨守從五位上中原朝臣有安

前大和守從五位上源朝臣光行

散位從五位下藤原朝臣季定

散位從五位下鴨縣主長明

散位從五位下菅原朝臣是忠

筑後守從五位下源朝臣仲賴

從五位下大和守大江朝臣公景

正六位上行雅樂少允紀朝臣康宗

正六位上行木工少允惟宗朝臣光成

正六位上行左衛門少尉中原朝臣清重

法印靜賢

法橋宗圓

法橋季嚴

阿闍梨顯昭

阿闍梨成全

僧覺盛

僧覺綱

沙彌性照

沙彌安性

前齋院尾張

右大臣家佐

侍從

判者

阿闍梨顯昭

一番 山居聞鶯

左勝 正二位行權中納言兼右兵衛督藤原朝臣兼光

鶯のはつ音もきゝつ山里をもの淋しともはるはおもはし

右 阿闍梨顯昭

心ありてふるすを近み家居せしかひあれとなく谷の鶯

左歌心詞あひかねて宜侍り。右歌させるとかはみえ侍

らねと。詞くたけてや侍らん。以レ左爲レ勝。

二番

左勝 從三位行右京大夫藤原朝臣季能

鶯のなき行かたにしたふ哉なれぬる谷のともとおもへは

右 正四位下行右京權大夫藤原朝臣隆信

わか宿は谷のふるすを隣にてふかくみにしむうくひすの聲

左歌上下句なひやかによみくたされて侍めり。右歌た

にのふるすとなりにてなとたくみにては侍れと。ふ

かくみにしむなと心ゆかすや侍らん。なを左勝侍へし。

三番

左 從三位藤原朝臣季經

山里のはるのなさけやこれならん霞にしつむ鶯のこゑ

右勝 法印靜賢

たにふかき宿の梢はうくひすの古巢なからも里なれにけり

左歌かすみにしつまん鶯のこゑの。山さとのなさけと

きこえん事。おもかけありて身にしみ侍れと。右歌のふ

るすなからさとなれにける。今すこしめつらしくや侍

らんとしたまふれは。以レ右爲レ勝。

四番

左持 正四位下行左京大夫藤原朝臣顯家

春きてそそとももの谷の鶯もともにすみかと音にはあらはす

右 正四位下行左近衛權中將兼備中權介藤原朝臣兼宗

たに深く宿のすまゐはうくひすの聲よりほかに聞人そなき

左歌そともといふことは。日本紀にみえたることはへ

れと。これも心はたかひ侍らぬに。下句やすらかにしも

いひくたされす侍らん。右歌きゝなれたるさまにや侍

らんとはおもふたまふれと。さしてはおほえ侍らねは

心詞をひとしめて。持と可三定申一歟。

五番

左勝 正四位下行左近衛權少將藤原朝臣隆保

まつかきやかやかりふきの宿なれはたにの鶯こゑは思はす

右 前播磨守從五位上藤原朝臣隆親

今しはしあさいせさせて鶯のこゑをよとこへをくるたに風

左歌まつかきやかやかりふきのやとなといへる。おかし

くも聞ゆる物から。またみゝたちて。かしかましきかた

もや侍らん。右歌はふるくたけちかくよとこねはせ

し鶯の鳴こゑきけはあさみせられすとよめる事をよみ

うつされてよしあれと。めもおそろかす侍うへに。かれ

はねやのまへに竹のある所にね侍りて。とことはから

れて侍にや。さやうのおりにかなひたる風情と。歌合と

はにぬ事にや侍らん。鶯のため本意なくや。左ばあやに

くにうくひすをもてなされて侍めれは。左可レ勝侍らん。

六番

左勝 散位從四位下藤原朝臣有家

鶯はたにのふるすを忍ふらしやまかたつける宿にしもなく

右 法橋季嚴

深山へのたにのこほりもうち解て春しりかほに鶯そなく

左心もおかしく。上下句の詞もみなふるき跡を思ひて。宜きこえ侍めり。右も。すゑの句は聞え侍に。み山へのたにの氷と侍「るのみ」の三字脱なる歟にて。山居の心うすくや侍らん。いまの世には吹毛の難のみおほく侍は。よにしたかはても。いかゝはと思ふたまへて。以

左爲勝。

七番

左持

淋しきは冬にかはらぬ山里にはるめく物はうくひすの聲

右

散位從四位下藤原朝臣伊網前大和守從五位上源朝臣光行

鶯のこゑもみちをそとちてける雪は消にしみ山へのさと左歌こゑはとみゆる所もなく。なひやかにて。歌あはせのふるまひによまれて侍めり。右歌もおかしく聞こえ侍めり。遠(憂)司徒之家雪路應遷と作れる心はせも思いてられて。なさけふかき心地し侍れは。持とことはり申へし。

八番

左持

かきねなるひとむらすゝに宿かりて聲ならすなりたにの鶯

右

法橋宗圓

たに深きかけちをしむるすまゐには聞のしたにも鶯そ鳴左かきねなるひとむらすゝになといひしりてこそ聞え侍めれ。萬葉には一むらはきとよみ。古今にはひとむらすゝきと侍めるを。とりなされたるにこそ。いさゝむらたけなとよみをきける心はせも思しられ侍るを。右た

にのかけにいへゐするは。山里の常の事なれと。かけちをしむるすまゐと侍。いかゝと聞ゆるうへに。ねやの下に鶯のなかつ事も。あやしきこえ侍。孫姫式に繡蝶病などあけたるは。かゝる事にやと思たまふれば。左勝侍へし。

九番

左持

まといする山の高根に聞ゆなりたによりいつる鶯の聲

右

阿闍梨成全

鶯にそまたつこともわすられて我も谷より出ぬへきかな左まといする山の高根にきこゆとはかりにては。題の心とたかひてや侍へき。あまりの事にや。右そま人によせて山居をあらはさん事は。さもありぬへし。たにのうくひすに心をかけんには。かならずしも我はたによりいてすとも侍らなんや。今すこしことはたらす侍にや。なすらへて持と申へきか。

十番

左持

をのつから問人もなし鶯のふるすにかよふ聲はかりして

右

侍從

たに近きすまゐならすは鶯のすたつ初音をいかてきかまし彼是ともにすへらかによみくたされて。させる疵となるへきこともみえねは。又おなしほとゝや申へからむ。

十一番

左持

谷ふかくいふせきやとも鶯のいてたちかたの初音をそきく散位從五位下菅原朝臣是忠

右

筑後守從五位下源朝臣仲頼
すまゐる山のかひにはうくひすの都へいつる初音をそ聞
左右ともに。えたるところえぬ所はへるめり。左のたに
ふかくいふせき宿とはへるよりは。右のすまゐる山の
のかひにはさあるは。なたらかに聞えはへるに。右の宮
古へいつるはつねは。きふふしたるさまなるに。左の
いてたちかたの初音は。今少し心あるさまなれは。心詞
をなすらへて。これもひとしと申へし。

十二番

左持

從五位下守大和守大江朝臣公景
鶯のはつ音にあかていりしより思はぬ谷のすまゐをそする

右

沙彌安性

八重うつむ霞のそこのしはの庵にたにの鶯こゑかよふなり
左右ともに。こと葉つかひもいひしられてはへるうへ
に。こゝろはへり。よろしくみえはへるめれは。ともに
すへらかにて。また持にてはへるへし。

十三番

左

正六位上行雅樂允紀朝臣康宗
山家のはきのふるえをつたへともまたうらわかき鶯のこゑ

右勝

正六位上行左衛門少尉中原朝臣清重
寂しさもわすられぬへし鶯のまつをとつるゝ深山への里

左歌はきのふるえをつたはせて。またうらわかきとは
へる。わりなくは聞ゆれと。右のまつをとつるゝみ山へ
のきとは。歌すかたまさきてや侍らん。右のかちなるへ
し。

十四番

左持

正六位上行奎少允惟宗朝臣光成
霞たにはれぬ住ゐのあやしきにことゝふものや鶯のこゑ

右

僧覺綱

ねりそゆふはたのかきねに鶯のきなく枝をはしのきしほ覽
左歌かすみたにはれぬすまゐとはかりにて。かならず
しも山居は聞えずや侍へき。山里とよみたるも山はちか
けれとなをひろくはへり。里もたなかものへの家ぬも。
やまさとはこもりはへるなり。山居は一定やまにす
むへきて侍もいかゝ。右歌ははたのかきねさへるは
山はたのいへぬは。うたかひなき山居にては侍に。鶯の
きなく枝をしのきしほらんと侍は。いかによまれたる
にか。しのくと申事は。のそくには侍らす。浪をしのく
雲を凌ぐなと申も。おかしましはる心とこそみえてはへ
めれ。されは萬葉集には。こらかてをまきもく山にはる
されはこのはしのきて霞たなひくとよむも。またおく
山のすかのはしのきふるゆきのけなははたをしあめの
ふりこく〔萬葉には消者將惜雨莫零行年〕とよめるも
のそくにはあらず。しかはあれと左の山居も右の凌。各
存たまふよしはへるらん。をしてさかく申かたし。

十五番

左

右大臣家佐
鶯のこゑにこゝろはとゝむるをかへる山てふな社つられ

右勝

沙彌性照

人とはぬ吉野の奥もうくひすの聲になくさむ春のつれ／＼
左歌にかへる山てふなこそおしけれとよまれたるは。
こしちに聞ゆるやまにや。我をのみおもひつるかのこ

しならは。かへるの山はまとはさらましと。ふるくもよ
めり。又山人のかへさにや。いかさまにも山路のこゝろ
にてそ待へき。右歌は吉野のおく。まことに春のつれつ
れも。なくさめかたかるへし。ふるき歌にも。みよしの
の山のかなたに家もかなよのうきときのかくれかにせ
んと侍。思ひいてられはへめり。題おほつかなきにつき
て。左のまけなるへし。

十六番

左

前齋院尾張

深山へのすみかはかすみこむれともかくれすきくは鶯の聲

右勝

僧覺盛

柴のいほに古巢ならへし鶯のけさか都へいつとつけつる
左歌こゝろはありてきこひ侍に。すみかはかすみこむ
れさもとあるつゝきや。こゝろよからすはへるらん。か
くれすきくなとはへるも。たゝことはにやかよひ侍ら
ん。右はふるすならへしといひをきて。けさかみやこへ
なんと。したはしけなるけしきも。あはれふかく侍れ
は。爲勝。

一番

松間梅花

左勝

兼光卿

そなれ松むめかえかきす木のまより雪ふきまはす春の山風

右

阿闍梨顯昭

たのむかけありとや松を思はまし枝さし交す梅しちらすは
左歌そなれまつの梅かえをかさして。廻雪の袖とみえ
んこと。たくみにこそきこえ侍めれ。右たのむかけなく
もみちりけりなと侍古歌の。ふしはかりを思ひつる

にや。あなつらはしくはへるめり。そなれまつははるか
にたちまさり侍らん。

二番

左勝

季能卿

梅かえのにほひをほかへやしとや縁をおほふ松のむら立

右

隆信朝臣

枝かはす松のちよをや重ぬらんやへに限らすさける梅かえ
左心こと葉ともにおかしくみえ侍めり。梅の匂ひをち
らさしとて。松の縁をおほはんこと。いとめつらしく聞
えはへるにや。右まつのちよをかさねんことはたくみ
なるに。八重にかきらすといへるそ。あなかちにきこえ
侍。八は陰數のかきりなれは。あまるをもたらぬをも。
をしなへてやつとこそはよみならはしてはへめれは。
かきらすと申侍はことあたらしくや侍へき。いかさま
にも。左は心詞めつらしくければ。勝と定申へし。

三番

左勝

季經卿

常盤なる松にまされる梅花よはひにかへよをのかにほひを

右

法印靜賢

えたかはす梅のありかはこゝそとや松風にほふ春の明ほの
左まつのよはひに梅のにほひかへんこと。まことによ
まほしき風情に侍けれ。いとくめつらしく侍めり。
右歌まつ風のむめのありかををつけんこともおかしけれ
と。いますこしきゝなれたるかたやはへるらんと。おも
ふたまふれは。又以左爲勝。

四番

左勝

なみたてる松の緑はつゝめともなをもれ出てさける梅かえ

右

顯家朝臣
兼宗朝臣

梅のはなえたをかはして咲ぬれは松ふくかせそ匂ひなり鬼
左詞つかひは。菅家萬葉集にいりて侍かや。あさみとり
のへの霞はつゝめともこほれて匂ふはなさくらかなと
いへる歌のすかたを。こひねかはれなから。松のあひた
といふことをは。よみおほせられてこそ侍めれ。右歌も
おかしけれと。つねのこゝろにてやはへるらむと思ふ
たまふれは。以_レ左爲_レ勝。

五番

左

隆保朝臣

松山のこまよりみゆる白雪の色にまかへるむめのはな哉

右勝

隆親朝臣

枝かはす梅のよそめを袖のうへに思ひしらする嶺のまつ風
左まつ山と侍。みちのくのすゑの松山にても。さぬきの
まつ山にてもはへるには。白雪よりは白浪をかけてやた
より侍へからむ。古歌には君ををきてあたし心をわか
もたはすゑの松山なみもこえなむと侍めり。又松山の
まつのうら風ふきよせはひろひてしのへこひわすれか
いとよめり。白雪にみえんことは。いつれのまつにもた
かひ侍らしや。たゞしこれはあまりのことなり。やまと
歌の心はさためあるへからず。右の歌こそ。心ありてみ
え侍めれ。梅のよそめを袖のうへにおもひしらするほ
と。心にもしみぬへし。爲_レ勝。

六番

左持

枝かはす梅さきぬれや吹風の匂ひあやしき松のむらたち

右

有家朝臣
季 殿

松風もことにそ春はなつかしき枝さしかはす梅のにほひに
左歌松のむら立杉のむらたちなといふこと。何事とな
くよまゝほしきこと葉に侍を。にほひあやしきなど。い
といとこのものしくはへめり。右歌はあなかにちにつきめ
るけしきは侍ねと。たゞありにてとかなし。松風もこと
にそなと侍も。松風入琴といふこゝろにや。なさけふか
くはへれは。持とや申へき。

七番

左

伊經朝臣

咲まさるむめの匂ひは春なからあきとおほゆる松のした哉

右勝

光 行

ときはなる松もや春を知ぬらん木のまの梅の風のたよりに
左心はたくみに侍に第四句や。いますこしおもはるへ
くや侍らん。秋とおほゆると侍ならは。まされるまし。
相摸詠にも。したもみちひとはつゝ木のもとにあきと
おほゆる蟬のこゑかなとよめり。おほかたも詩歌は一文
字と。むかしの人も申されけるは。かゝる事にや。右歌
ふるくは。ときはなる松のみとりもはるくれは今一し
ほの色まさりけりとこそよみて侍に。木のまの梅のか
せのたよりにときはの松のはるをしらむもさもとおほ
え侍り。左は第四句いひおとされて侍るにつきて。右勝
侍へし。

八番

左勝

有 安

枝かはす梅のにほひをさそひきていとゝみにしむ峯の松風

右

宗 圓

かせ吹は雨のをとする松にしも枝さしそふるむめの花かさ

左歌優に聞え侍めり。右歌上句は簫瑟催心學雨辰といふこゝろを思ひ下句はあをやきをかたいとによりてうくひすのぬふてふかさやむめのはなかさといふこゝろとは。いはぬにさきたちて侍に。いさゝかかたふかれ侍にとは。まつにしもとある第三句は。いかにをかれて侍にか。笠は雨にきりものなれは。要になひてこそは侍を。まつにしもといふは。あしかるへき心かとうたかはれ侍で。いつかたにもたしかにきかする心はあらまほしくや。おほめかるゝこともなければ。以左爲勝。

九番

左

散位季定

枝かはす梅のにほひやかほるらん松吹かせのなつかしき哉

右勝

成 全

枝かはす梅の句ひと思はすはあやしかるへき松のかせかなこの兩首。はしめに枝かはすとをかれたるこそ。松風の句ひによせられたる。たゝおなし事にて。とかくおもひわくへくは侍らねと。なか／＼おなし色なるにつけて。いささかこきうすきもみえやすきことなれは。すこしのしるしを申へきにや。左は常のことなれとも。句ひやかほるらんとはへるおなしこゝろにや。こと詞にてあらまほし。ふくかせのなつかしきも。右のあやしかるへきと思はせたるには。をとりてや侍らんとぞ。おもふた

十番

まふる。以右爲勝。

左勝

長 明

枝かはす梅の句ひにをのつから松ふく風も春めきに鳧

右

侍 從

梅かかをさそはぬ時の音とてもみにしまさりし松の風かは左右歌。こゝろもこと葉もあらぬさまにて。をとりまさりわきまへかたく侍り。むかし長能道濟か。鷹狩の歌あひたゝかひけんも。かくやと思ひあはせられ侍。道濟か歌は。ぬれ／＼もなをかり行むはしたかのうは羽の雪をうちはらひつゝ。これはのさひにてあやまつことなし。この左の歌に似たり。長能歌はあられふるかたのみのゝ狩衣ぬれぬやとかす人しなれは。これはわりなれといさゝかあやまりありぬへし。此右歌の梅か香をさそふとはかりにて松間といふこゝろをくれたるかとし。彼四條亞相の評定になすらへて。左可勝歟。

十一番

左

是 忠

消のこるゆきかさのみそみ山への松にまされるむめの初花

右勝

仲 頼

梅かかをみとりの枝にうつしもて我ものかほに匂ふまつ風左歌すゑのまつにまされる梅のはつはなとをかれたるはよろしきに。雪かとのみそみ山へのとつゝけられたるは。みゆるといふ心にや。ふるくかゝるためしなきにはあらねと。歌合などにはなをことあさくや。右歌いますこしたしかにや聞え侍らん。みとりのえたにうつし

もて我ものかほになと侍。みところ有心地つかまつれは。以^レ右爲^レ勝。

十二番

左勝

公景

松風はきかまほしきを枝かはす梅のさかりはいとはるゝ哉

右

沙彌安性

なつかしみうす紅にさく梅の色もてはやす松のむら立
左歌よろしくこそ聞え侍めれ。こもはすくなにつよからぬものから。おもへるところ残らずいひとをされて侍めり。右歌はしめの句になつかしみとをかれたるも。す原にわたりてあひかなへりとも聞え侍らぬうへに。花もみちにつけて。ときは木を色もてはやすとよめる。わきもこかものすそよりおちたることなれば。左勝侍へし。

十三番

左持

康宗

末の松なみのこゆるとみえつるはたえまの梅の句ひ成けり

右

清重

藤なみのなと思ひけんたかさこの松には梅もさきかゝり鳧左さきのつかひに。まつやまにかけては浪をこす心や侍へきと申つるいきとをりは。此歌にこそとけ侍ぬれ。たゝし八條大相國六條のあまのはしたてにて歌合したまひけるに。徳大寺左府のよみ給へる。はなさかりすゑの(松殿)山かせふけはうすくれなゐの波ぞ立けると侍歌をは。六條修理大夫判者にて。むかしもいまもよみきたるところをさしすきて。ばなもよみこぬすゑの松山。

ことにおもひかけすとそこはり給ける。けにとおほゆることなり。かくは侍れと。和歌のいまやうすかたをみるに。くにの風俗をもたつねす。歌枕のありさまをもしらす。いまはいかなる野にも山にも。はなをきかせ月をもてあそふことになり侍にたれば。みよしの。をはつせもかひなく。あかしきらしなもうらみをのこしつへし。夏にこそさきかゝりけれ藤のはなまつにとのみも思ひけるかなといふ歌の心を。ひきちかへられて侍にや。ひとはしのなきけはあれと。勝とは申すへくもあらねは。持と定侍へし。

十四番

左

光成

枝かはす松のしるしに梅のはな色をもかなもときは也せは

右勝

覺綱

梅かえの句はさきせはひたすらに松に花なく春かともみん左歌は金葉集に。松間さくらといふ題に。このはるはのとかに句へさくらはな枝さしかはすまつのしるしにとよめる歌の心にこそ侍めれ。右はよろしく聞え侍れは。勝と申へし。

十五番

左勝

佐

みれとあかす梅のにほひの紅に松のみとりのひとへ重ねて

右

沙彌性照

消やらぬ松の雪かとみえつるやよのまに咲るむめのはつ花左歌むめのにほひのくれなゐに松のみとりのひとへかさねん事さもとみえて。心にふかくしめ侍り。もしをむ

なのよみたまへるにや。むかしの伊勢御などよみのこ
されたりけるにか。右歌もきえやらぬ松のゆきとはへ
るも。み山にはまつ雪たに消なくにとよめる歌おも
ひあはせらるれと。こすゑの雪を梅ともさくらともみ
るは。つねのことなれば。くれなるの梅は。匂ひもふか
くや侍らん。

十六番

左

前齋院尾張

ふくたひに春はあたりそなつかしき梅さきましる松原の風

右持

覺盛

さしかはす梅のたちえは色榮てまつかせかほる夕ぐれの空
左歌ふるくより。こやの松はら。あふの松はらなとよみ
つるは。きゝよくはへるに。まつはらの風とちめられ
たるこそ。むけのたゝことはときこえはへれ。右おなし
まつかせにとりて。これは心もおかしく。こと葉もつき
つきしくふるまはれたれば。かちと申へし。

一番

左持

兼光卿

契りつるしら玉つはきはかゆ共かはせる枝の久しかれとは

右

顯昭

いほとせも千年もたえし君と我ありなれかはに影を並へて
左歌上句は椿葉之影再改ともつくり。白玉つはきやち
よともよまれたるあとを追て。祝言のこゝろたしかに
侍めり。下句は長恨歌のく。在地頗爲連理枝といふ
こゝろにて。戀のこゝろさしもふかくはへるめり。但第
三句のはかゆともとはへる詞や。頗心ゆかすはへるら

ん。是非盡理之難只猪磨金山之謂也。右歌所詠のありな
れかは。日本紀よりいてたり。雖非倭國之風俗已爲
新羅之名所評定之處請爲同科矣。

二番

左

季能卿

諸共に千世までとこそいはれけれかえんとはせし命なれ共

右持

隆信朝臣

同じくはすむへきちよの數となれひとよもかゝつたつる錦木
左は古歌に。いのちやはなにそも(は歟)露のあたもの
をあふにしかへはおしからなくといふこゝろをは。
さるへきさまにとりなされてはへめれと。かへむとは
せしといへるや。詞ゆか(心ゆか歟)すきこえはへらむ。
右歌はにしき木はちつかになりぬ。いまこそはひとに
しられぬねやのうちみめとある古歌を思ひて。千世の
かすとなれとよまれたるは。おかしくはへるに。ひと
よもかゝすと侍そ。あやしくおもふたまふる。かのにし
きゝよるたつとはえうけたまはらす。しちのはしかき
と申ことそ。もゝ夜かゝすふしけりとは申すめれ。さは
あれと。えひすかふるまひしりかたくはへるうへに。心
おかしければ。右可勝歟。

三番

左持

季經卿

雲かゝる高根にちりのなるほとをあひみて後の契りとも哉

右

法印靜賢

岩の上の松のよはひもみてしかなねかたき中の末を思へは
左は君か代はちよにひとたひある塵のしら雲かゝる山

となるまでといふ歌を。よろしくとりなされてはへめり。右は種しあれはいはにもまつはおひにけりこひをしこひはあはさらめやはといふことを思ひて。ねかたきなかのすゑなとなかめられて侍にこそ。さもにふるきあとにつきて。あたらしき心はせをあらはされたれは。是をかつかれをまくと申かたきつかひにこそはへめれ。

四番

左

顯家朝臣

逢せをはやわたらなん千年まですむへきものを中川の水

右勝

兼宗朝臣

いかにして長き契りを結はんとけぬにつけてまつ思ふ哉
左歌なか川の氷によせて。あふせをすゝめ。ちよをかねて久しくすむへきよしは。おとこをんなのなからひ。かへるあしたの玉章に。かきなかしたることのはにやはへるらん。さりとてこの歌を。いそのかみふることゝさため申にはあらず。右歌すくれたるふしあまりの心はみえ侍らねと。させるとかはみえはへらねは。中々かちとも申はへりぬへし。

五番

左勝

隆保朝臣

千世をへてすまゝくほしき思ひかは逢事浪に袖そぬれぬる

右

隆親

忘るなよあひみ初なはちよ迄もかけ竝へんといひし言のは
左この歌も。ふるき心はみえれと。思ひかはによせて。ふかきうらみはいひとをされたれは。あしくも侍ら

す。右もあしからぬに。あひそめなはいへるわたりや。とゝこほりたる心地し侍らん。仍以左爲勝。

六番

左

有家朝臣

我君のみよのかすとて錦木をちつかまてにもたてんとそ思

右勝

法橋季嚴

ちよ迄とせめては君をいのる哉あひもやすると心なかに
左歌二番の右歌の心にや。わか君のちよのかすこそ。いはまほしけれと。すゑのちつかとをかれぬれは。たゝ御代のかすと侍にこそ。いかさまにも千とせをはねかはれてはへるにこそ。たゝしちつかまてたてんとねかはれたるは。いそきあはんとおもはねは。こひの心や少く侍るらん。右はすかたもなひやかに。心もさもときこゆれは。可勝侍一歟。

七番

左

伊經朝臣

君か世をかそふるはまのまさこにも餘るは人のつらさ成鳧

右勝

光行

思ひたつ戀地のすゑのとをさこそ千年の坂にいる心地すれ
左は古今にわたつ海の濱のまさこをかそへつゝ君かいのち「ちとせ。古今」のありかすにせん。又云。ありそうみのはまのまさことたのめしはわするゝことのかすにそ有ける。此歌ともの心をいてすや侍らん。またすゑは近ころ侍し歌にや。ひまもなく涙をつゝむ袖になをあまるは人のつらさなりけり。右はこひちのすゑを千年の坂によせられたる。たくみにこそ侍めれ。花山僧正の

千とせの敷もこえぬへらなりとよみをかれたるを。おもひよらさりけるも。それましくこそおもふたまへらるれ。こひちとや(云の誤敷)ことは泥と申す文字なれはにや。ふるくはみなおりたつとよみ。袖ぬらすなとよみきたれるを。今のよの人々は。おほやうこひのみちといふ心にのみよまれて。ふるき心をはわすれてのみ侍はいかゝといきとをり侍けれと。ふるき歌にさやうによみたることも。をのつから侍は。作者もおさなくよまれたるにや。かちと申侍へし。

八番

左

有 安

色かへぬたけのよな／＼はらへ共かはくまもなき袖の露哉

右

宗 圓

さもこそは末遙かなるみよならめかひなき戀に年をへよとや
左歌さまは宜けれと。色かへぬたけとはかりにては。いはひのこと葉とも申かたくや。久しき契をもいひあはせてそかなひ侍るへき。右歌はたしかに題の心にかなへり。爲_レ勝。

九番

左

季 定

君と吾あひみて後の久しきはな／＼のこの／＼よにあはん迄

右

成 全

男山まつよりしてそたのもしきすみて久しく逢んと思へは
左な／＼のこの世にあはんと侍は。七世孫にあはむとにこそ。久しき契にこそ。右歌おとこ山松よりしてそとよまれたるは。男をまつにや。古今にもさのみこそよ

十番

左

長 明

我君の千世のみかけに住乍らはかなき戀にみをやかへてむ

右

侍 從

たつのゐる濱のまさこに比ふれば袖しの浦は波そかけそふ
左歌題こゝろはたしかによまれて侍めり。右歌はたつのゐるはまの眞砂のかすよりも久しくみゆる君かみよかなといふ歌をおもひてよまれたるにや。此いはひのことはとあるは。ふるき祝ひの歌のこと葉といふには。よもはへらし。いまの歌にも。いはひの心をかけてこそよみ侍けれ。此歌はたつのゐるはまのまさこに我こひをくらへて侍れは。本意たかひてや侍らん。うけたまはりきたむるほとは。しはらく以_レ左爲_レ勝。

十一番

左

是 忠

萬代もちとせのあきもさもあらはあれ只一時のあふ事も哉
右
仲 頼
久しくはつらさも變る折やあると君かやちよを誰も過さん

左歌さることゝきこえ侍めり。右歌もこゝろも侍めれ
と。共に久しくなからへは。つらさやかはるといふ歌は。
近頃きこえ侍き。寄祝戀といふ題に。としへなん後はあ
はれやかくるとて人をも身をも千世といのりつと侍し
かは。同じ心にこそ。以レ左爲勝。

十二番

左勝

公景

逢みてののちは千年もすくす共つれなき事の程へすもかな

右

安性

羽衣のまれになつてふいはほこそつれなき人の心なりけれ
左歌さもときこえ侍り。右歌は君かよは天のはころも
まれにきてなつともつきぬいはほならんといふ歌を
思はれたるにや。是は梵天以三朱衣拂盡四十里磐石
爲二劫一といふ經説をよめるなり。されは經文はかり
をおもひて。まれになつてふいはほといは。祝言にあ
らず。かの祝歌を思ひたらは。さも侍ぬへし。たゞし霓
裳羽衣といふことは侍れと。天人の衣を。たゞはころも
とはかりにてはいかゝとそ聞ゆる。女の名なとにつく
るは別事也。いかさまにも左おかしければ。爲勝。

十三番

左勝

康宗

あたらしき春のあしたはわきもこにむつひの月とまつ祝ふ哉

右

清重

つられと千世とそ祝ふ長らへは思ひ返りて逢もみるやと
左歌萬葉集云。むつきたちはるのきたらはかくしこそ
梅をおりつゝたのしきをつめといひ侍り。むつきはむ

つひ月也。その名をおもひていはれたる。さも侍ぬへ
し。右歌はさきに申つる歌にことふり侍ぬ。なかにも諸
共に千世ふへくはこそよからめ。人はかりいのらはわ
かみのいかゝと云ことゝも侍き。あまり事なれと。けに
ときこゆることなり。左可勝歟。

十四番

左持

光成

訪よりは逢みて千世とかねこさに祝ひこめつゝむす玉章

右

覺綱

逢みてはちとせのなかつふからにいとゝ心の急かるゝ哉
左の千世といはひこむる玉章も。右のちとせの中とき
きていそくこゝろも。ともにさもときこゆれば。持と申
へきなり。

十五番

左

佐

逢事のちとせをへても有ならは何かためしのまつか久しき

右勝

性照

君か代のためしにひきし吳竹のひとよも妹に逢よしもかな
左心はさよなとみえ侍れと。こと葉きたかに聞え侍ら
ず。末の松かひさしきとあるも心ゆき侍らす。こしのあ
るならはと侍もよろしからず。右はふるき歌のふるま
ひにて心にくゝこそ聞え侍めれ。よしのかは岩なみた
かく行水のはやくそ人をおもひそめてし。今のよには
かゝる躰はたえて侍に。よみおこされて侍こそ。むかし
にかへりぬる心地して。我身ひとつのよろこひと思ふ
たまふれ。以レ右爲勝。

十六番

左持

尾張

命あらは逢夜やあると千年とそつらき人さへ祝はれにける
右 覺盛

ちよまてと契りし中に思ひきやつらき心も久しかれとは
左たひ／＼聞え侍つる心にこそ侍めれ。右おもへる心
ことはあらはれて。よろしくみえ侍れと。左もあしか
らねは。持とさため申へし。

しきしまのやまと歌は。やくもたつ出雲のことわきよりお
こりて。今の世までそつたはりける。やすみしるおほ君も
もてあそひたまひ。千早ふる神々もめてたまへり。其中に歌
合のはしめは。元慶の御代より出きて。あのおと代々をへて
たゆることなし。そも／＼此みやしろのいはれ玉ふよし
をたつぬれは。おとこ山のしけきみかけを。はなのみやこに
まねひつたへ。いはし水の清きなかれを。たえせぬみなもと
にうつしと／＼められにけりと。ところのありさまを思ふに。
たゝことはにはあらざりけらし。きたにのそめは。はこやの
松あたらしくとなりをしめ玉ひて。とかへりひらくるはな
の色さかりにほひ。にしにむかへは。ちよにひとたひすめ
るみつのかになかれて。いけるいろくつをはなつかはせか
とおほめかる。あけの玉かきは。光をやはらくるしるしにか
なひ。みつのひろまへは。塵にまじはる跡をあらはせり。こゝ
にいまふた／＼ろなき思ひをはこひて。いやまひかしこま
りたてまつり給うらのおさいてきませり。はしめにはよつ
のうみにしはたつなみをしつめて。おほきふたつのくらゐ

にのほり。後にはこゝのへのかきまもりになはりて。み
かき山のたかき木末にそよ給にける。むかし久方のあめ
よりくたれるつかひ神の。いさをきためられぬためしも。思
ひあはせられてなん。しかるあいたやまと歌のなにをへる
あかたのさきのかみ。このみちをひろむるあまりに。人のや
しろには。みなうたあはせあり。このみやにしも。なとかそ
のあそひなかるへきといふかも。なげうらみて。あめのした
のうた人をすゝめて。そのうるはしきことのはをあつめら
れたり。をとろのみちをふみ。よもきのしまにあそひ玉ふま
うちきみたちをはしめて。あきゆふにかたをならふるとも
から。おきふしに心をおなくするたはれおにいたるまで。
をのかしな／＼なさけをかけたり。そのほかに。家をいてた
る世すて人は。むらさきのうはきこけのつゝりをもえらは
す。色をこのむたをやめは。はなのもすそしめしはの色をも
わくことなし。かゝる時しもあれ。このみやにさねとつかさ
とれるまめ人いませりくらゐはのりのはしをわたり。なさ
けは歌のみちにかけられたり。このことをうけよるこひて。
たまのみきりにかたわれの月のみまし。茶のまゝをはへ。はな
のかけにたゝまくおしきまとゐをすゝめらる。其うへに思
ひのかけをあふき。ことはのいつみをわかされたり。ときは
やよひの月のはしめ。みつにあたれるよきかけなり。くれな
ゐのもゝはにしきをさらし。みとりのそらは花にゑゝり。か
ら人も船をうかへてあそひ。わか國にもたにみつに浮はな
をなかせり。まことにけふのあそひめつらしきかな。むへな
るかな。しかるに顯昭法師。おく山のみたに／＼としへたるま
かり木の身なれば。花さく春のゆくゑをもしらす。みや木ひ

久戀

左

片岡禰宜加茂重政

勝二
持一
負一

二百八十三

沙彌性照

興福寺權別當法印範玄

皇太后宮大夫入道釋阿

右

殷富門院大輔

沙彌生蓮師光

中宮讃岐

二條院三河内侍

關白家丹後

右近衛少將藤原成家朝臣

阿闍梨顯昭

沙彌寂蓮

右大臣法眼實快

僧祐盛

左近衛權少將藤原定家朝臣

散位藤原伊綱

左衛門權佐藤原朝經

前越中守藤原家隆

皇太后宮亮藤原有經

左少辨藤原資實

前播磨守藤原隆親

侍從藤原實宣

僧靜綠

前大和守源光行

沙彌見佛

右京權大夫藤原隆信朝臣

勝二 持一 負二

勝二 持一 負二

無勝 持四 負一

勝一 持二 負二

勝二 負三

勝二 持二 負一

勝一 持一 負三

勝二 持一 負二

勝一 負四

勝一 持二 負二

勝二 持二 負一

勝二 持一 負二

勝二 持一 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

勝一 持二 負二

少納言法印靜賢

判者

皇太后宮大夫入道釋阿

一番 山花

左勝

春はたゝ名をたにいはいしかへる山峯の櫻にこゝろさまりて

右

やま櫻たつね行まはくれなゐの霞のまよりみゆる白雲

左歌心詞おかしくこそみえ侍れ。右歌紅の霞にしら雲

とみゆらむ心はゆへあるを。紅霞は詩などにはつくる

事なれと。今紅とをける。少いかにそ聞ゆるうへに。間

の字二所に有。ふたまははゝかるへきや。以て左勝とす

へし。

二番

左勝

三笠山みねの朝日に櫻はなさしてそしるき萬代のはる

右

よしの山咲ちる花に住人のあはれやいととおもひしるらん

左は嶺の朝日に萬代の春をしるしといひ。右は山の櫻

に世のあはれをいとゝしるといへる。心とりゝなり

といへとも。左祝の心なるうへに。三笠山とをかれた

る。勝と申へし。是勝は先例なり。

三番

いつのまに花の白雪積るらんかふろにみえし山のいたゝき

勝一 無持 負四

民部卿經房

殷富門院大輔

權中納言親宗

沙彌生蓮

左衛門督隆房

右勝

中宮讃岐

風かほる花のあたりにきてみれば雲もまかはすみ吉のゝ山
左歌山かふろになるなといふ事は有うへに。いつの間
に雪つもるらんなどもおかしくは侍れと。戯ことなる
やうにそ侍へき。右歌風かほるとをけるより。姿詞優な
るへし。勝とすへし。

四番

左勝

權中納言兼光

春日なる三笠の山の櫻はないく萬代のかさしなるらむ

右

二條院三河内侍

老ぬれはのほる山路のくるしきに心をひくは櫻なりけり

此右歌尙齒會などの歌ならは。よろしかるへくや。左は
二番の左歌に心おなし。又かちとす。

五番

左

參議公時

これをみよ嵐のやまの岩かねに一もと匂ふはなのゆふはへ

右勝

關白家丹後

花かとも驚ろく人やなかるらん雲になれたるをはつせの山

左歌風脉おかしきさまに見侍り。但あらしの山にしか
ある花の侍にや。右歌下句なと宜く侍れは。右爲勝。

六番

左勝

參議公繼

花ゆへは春の山邊にさきたちてまつわれ誘ふ我こゝろかな

右

右近少將成家

たちなるゝ雲居の花を思はすはよしのゝおくに春や暮さん
先我誘ふ我心かなといへる下句なと。殊おかしくみえ

侍り。左勝とすへし。

七番

左勝

正三位季能

春風に梢ははれて吉野山はなの雲しく岩のかけ道

右

阿闍梨顯昭

白雲にまかふとならば山さくら春にかきらぬ匂ひともかな

左歌ひとへに散はてたる歌に侍れと。花のくもしくな
といへる。姿よろしくみゆ。右歌花をおしめる心は優な
るを。末句少不足にや侍らん。左歌さま勝り侍らむ。

八番

左勝

從三位季經

さかぬまは花かとみえし白雲にまたまかひぬる山さくら哉

右

沙彌寂蓮

たつね入山下風のかほりきてはなに成行嶺のしらくも

左白雲に花をまかふことはふりにたることを。めつ
らしきやうにいひなして侍へし。右はなに成行らん心
は宜きを。近くか様なる事承はりし心地すれと。心は
かはれるなるへし。但左は花と櫻を兩所にをき。右は山
と嶺と上下にあり。ともにふかき難にはあらされと。勝
負不分明にや。

九番

左勝

從三位經家

みよしのゝたかきの山のはな盛ならふ物なき色と社みれ

右

法眼實快

高圓の尾上のさくら咲ぬれは音さへつらきみねの松かせ
たかきの山の花さかり。ならふ物なき心さしありて侍

へし。たかまとはことなる事侍らねと。音さへつらきな
といへる宜侍れは。是も勝負不分明へし。

十番

左勝

左京大夫顯家

あさからすたつぬる人の心をはよしのゝ奥の花やみるらむ

右

僧祐盛

花みれはうきを忘るゝ春ことに山つくり 劍神そ嬉しき

左歌優にこそ侍めれ。右歌上句はこともなく侍るを。下

句余りのふることおもへるやうにや侍らむ。左まさる
と申へくや。

十一番

左持

左近中將兼宗

新千 白雲とあたにもいはし山櫻よそにみるなの立もこそすれ

右

左近少將定家

吉野山幾代へたてゝ櫻はななを白雲の色にみゆらん

左心詞はおかしくみえ侍り。右も姿宜からさるにあら
す。持とすへし。

十二番

左

右京大夫隆保

よそめには霞こむれと山人のなれるものとや花をみるらん

右勝

散位伊綱

遠近のはなもみるへくいも瀬山かすみの衣申なへたてそ

左歌山人は幽隠の賢者も侍らむなれとも。いはむこと
いかい。右歌は婦山なりとも。衣不隠覽事餘にやとは

おほえ侍れと。をちこちの花をみむためにいへる。さも
侍りなん。少はまさるへくや。

十三番

左持

右中弁定經

筑波根の此面かのもの花さかり匂ふ雲地になる心かな

右

左衛門權佐朝經

櫻はな梢をさして尋入ぬかへる山路を誰にとはまし

左このもかのものに匂ふ覽花になれ。右かへる山路を誰
に問ましといへる心。ともに宜侍へし。持とすへし。

十四番

左

散位有家

朝またき霞にもるゝ花の色のおゆかしきはみよしのゝ山

右勝

前越前守家隆

よしの山花は匂ひにこほれ落て袖にしらぬ嶺の春風

左霞にもるゝなといへるはおかしきを。奥ゆかしとい
ふ事常のことになりたるにや。右風舛ば宜を。余情の

過たるにや。淺心及かたくそ侍と。袖にしらぬなとい
へる。姿なをよろしかるへし。可勝や。

十五番

左勝

散位定宗

よしの山朝ある雲のしかすかにめなれぬ色や櫻なるらむ

右

皇太后宮亮有經

春毎にあかぬ櫻の花ゆへに吉野の山を住家とそする

左歌心姿は優なるを。中々五文字やいかにそ聞ゆらん。

右歌歌合の歌とはみえなから。又やすらかにや侍らん。
左なをしかなからまさり侍らんかし。

十六番

左

權右中弁宗隆

ことはりも過てみゆるは花盛よしのゝやまのあけほのゝ空
右勝 左少弁資實

いにしへのよしの御幸も跡ふりて花のな高きみよしのゝ山
花の盛のよしの山の曙。けに斷過て侍らむと。おかしく
聞え侍を。代々のみゆきもあとふりてといへる心。殊に
宜侍るにや。右まさると中へくや。

十七番

左持

谷風のはなふきたむる岩間より流れ出るやゆきの下水
前播磨守隆親

右

匂ひくる山下風にしるものを花になきなをたつるしら雲
左右心姿おかしくは侍を。左はひとへに落花なり。右は

山下風に匂へる心は宜を。花になき名なといへるや過
言ならん。なすらへて持とすへし。

十八番

左

つく／＼と思ひかへせは花盛さらぬよそ目は嶺のしら雲
中務大輔保季

右勝

常盤木のこすゑの空の村雲や青根か嶺の櫻なるらん
侍従實宣

左心詞わりなくはみえ侍る。右青根か嶺の櫻は。ことふ
りたるやうには侍れと。梢の空の村雲といへる。姿まさ
りてや侍らん。

十九番

左

よしの山花の圓居のあとなれや木の下かけの雪のむら消
攝津守長俊

右勝

僧靜縁

高砂のおのへの花に夜をこめて雲にふしたる明ほのゝ空
左歌花の圓居の跡おかしくは思ひやられ侍り。右の歌
尾上のはなに夜を籠てといへる。又宜しく侍を。ふした
るの詞や如何にぞ聞え侍れと。左散はてにける雪の村
消もいかゝとて。明ほのゝ空勝ると申へくや。

二十番

左

吉野山みねの梢にかゝるには雲さへ花にうつろひにけり
片岡禰宜重政

右勝

前大和守光行

よしの山花ゆへ結ふたひの庵をなかしとなしやはて南
左かゝるにはといへるわたりそ。いかにぞ聞ゆれと。雲
さへ花に抔いへるは。優にも侍へし。右花を思へる上に。

ことなるとかなく侍れは。右の勝とす。

廿一番

左勝

櫻はなちり初しまてみし程になぬかになりぬしかの山越
沙彌性照

右

沙彌見佛

あらぬまを詠あへぬに程もなく日をさへ暮す山さくら哉
左右ともに。下句は優に聞ゆるを。左はみるほとにとや

いふへからむ。しの字にては少ことたかへるにや。但右
は日をさへ暮すといへり。左は七日になりぬといへれ
は。心指まさるへくや。

廿二番

左勝

よしの山ふもとの櫻おしむまにまたてやおくの花はちる覽
興福寺權別當法印範玄

右

右京權大夫隆信

あかなくなを尋ても山櫻こゝろわくへきはなのかけかは
 兩方の歌。ともに上に櫻とをき。下に花といへるは。か
 かる例も侍へし。但歌の心もともにおなしきを。右は詞
 つかひたゝならす聞ゆれと。あかなくなにとをける。末に
 相叶てしも聞えず。左はまたてやおくのなといへる姿
 も。優なるへし。勝とすへし。

廿三番

左持

皇太后宮大夫入道釋阿

風かほる春のにしきにまかふ哉花ちるころの志賀の山こえ

右

少納言法印靜賢

三輪の山杉の青葉は時過て花こそ春のしるし成けれ
 左歌しかの山越は春の花ふりにたる事なるうへに。ま
 かふらむ心も。たとふ思ふ玉ふる程に。愚なる身つ
 からの歌に侍けり。大形は歌合には。いやしくも爲三判
 否ものは。歌人の數には入さるは先例なり。又ふむこ
 とある時も。其番には判を加へすなとそ申ならはした
 る。但右歌三輪の山とをかれたるより。此所はもとより
 杉のみとりも心にそみ。えむなる事に覺え侍れはにや。
 杉たてる門もをして。右まさるとそ申さまほしく侍れ
 と。判者の例にことよせて。しはし心にくゝやとて。志
 賀の山越をとれりとも。申さためすなりぬるなるへし。

一番

左

民部卿

待けりとなれも心やかよふらし初音きかする郭公かな

右持

大輔

時鳥うの花かけにたひ立てかたらひ初る聲きこゆ也

兩方の時鳥。初めたる心はともにおかしく侍を。左は古
 風近俗頗相交たる様にや侍らむ。右はうのはなかけに
 たひたちてなと。偏に近來の躰。あしからす聞ゆ。右の
 勝と申へくや。

二番

左持

平中納言

しはの戸に初音きかすは時鳥侍し太時のなをやおくまし

右

生蓮

めつらしくけふ待えたる子規こそかたらひし聲にそ有ける
 左歌柴の戸とをき。待しみ山といへる。兩首にや侍らん。
 右歌事理ありては聞ゆるを。侍えたるといへる詞不三庶
 幾こにや。下句も似無餘情にや。左まちしのことは、
 いかにそ聞ゆれと。歌さまさると申へし。

三番

左持

左衛門督

いつかたへ山時鳥すきぬらんよにしのふ音を我にもらして

右

讚岐

ほとゝきす太山かくれを出やうちそゝく暮を待けん
 左初たる心おかしく聞ゆ。我にもらしてなとや餘たし
 かに侍らん。右雨打そゝくなといへるは。艶にみえ侍る
 を。はしめの心やすくなく侍らんととて。持とすへき
 や。

四番

左

藤中納言

子規はつ音をこよひ聞つるもなれかなたてと人や思はん

右持

三河内侍

いつか我こゝろやすまん時鳥きゝ初てこそなをまたれけれ
左歌初ての心有ては聞ゆるを。述懐の心あまりにや侍
らむ。右歌か様の心つねのことに侍れと。子規を思へる
心に似たり。右まさるへし。

五番

左勝

藤宰相中將

たくふへき物なかりけり時鳥また里なれぬ小夜のはつ聲

右

丹後

おほつかなこれは初音か子規雲路にまよふたそかれの聲
兩方の時鳥。また里なれぬ小夜の初聲。雲路にまよふた
そかれのこゑ。幾程の勝負なく思ふ玉ふる程に。右歌上
に初音といひ。末に黄昏の聲とをかれて侍けり。以て左
勝とすへきや。

六番

左勝

右近衛權中將

此里にしはしかたらへ郭公ほかの初音はけふならずとも

右

成家朝臣

かみ山を夜半にやきつる子規うつきのいみをさせは鳴也
左歌外の初音はといへる姿心。いとおかしくこそ侍れ。
右歌始たる心は。是もあしからす聞えなから。下句など
餘たしかなるやうに侍にや。以て左可なり勝。

七番

左

前右京大夫

うつゝとも夢ともわかす時鳥はつ聲なのるふかきよの空

右勝

顯昭

尋つるしるしと思へは郭公初音をきくは心なりけり

深き夜の空の初音。夢現とわかれさらむ事おかしく聞
ゆるを。初音なのるらんや。いかになのかと。少お
ほえ侍らん。初音を聞は心なり鬼といへる事。理なへる
にや。右の勝と可なり申にや。

八番

左

前宮内卿

春かけてきのふやいてし時鳥いつしかきゝつ明ほのゝそら

右勝

寂蓮

あくかれし人の心もほとゝきす里なれそむるよ半の一こゑ
左歌初たる心はおかしきを。春かけて昨日や出しとい
へる。山なとならてはいつくより出とか聞ゆらむ。彼天
徳歌合兼盛歌にも。太山出て夜半にやきつるなといへ
るこそ。おかしくも侍れ。右歌あくかれけん人の心も里
なれ初らん。優に侍にや。右勝にや侍らん。

九番

左勝

六條三位

明はまつ尋てきかんほとゝきすれ覺の床に告て過なり

右

右大臣法眼

明はまつ人に語らむほとゝきすう月たつ日のしのゝめの聲
兩方の明はまつ。左は尋て聞むといひ。右は人に語らむ
といへる。いく程の勝負にはあらされと。唯人に語らん
よりは。尋ん心さしまさるへくや。

十番

左

顯家朝臣

しる人もさらになしとや時鳥かたらひ初る聲きこゆらむ

右勝

祐盛

夏來ぬと忍ひにつくる郭公春のおしさを慰めよとや

左歌上下の心相叶てしも聞えさるにや。右歌優ならさるにあらず。勝にや侍らむ。

十一番

左勝

兼宗朝臣

めつらしき初音なれとも子規あかぬ名残は恨みられ鬼

右

定家朝臣

かはらすも待いつるかな時鳥月にほのめく去年のふる聲

左歌合の歌と覺え侍。右かはらすも待出つる哉なといへる姿。宜は侍れと。去年もことしも月にしもほのめき

けむ事覺束なくや。以て左勝とすへし。

十二番

左持

隆保朝臣

世にふれはけふそ又きく時鳥去年かたらひしなれか忍ひ音

右

伊綱

山ふかく尋ぬ

(る腹臥)

口人か郭公ふる集なからの聲はきかしな

左歌上句いかなるへきにかと聞ゆるを。末ことなる事なくや。右歌優には侍るを。鶯の歌にやと覺え侍る。な

すらへて持と申へくや。

十三番

左勝

定綱朝臣

郭公また打とけぬ一聲もうの花かけに尋てそきく

右

朝經

ほとゝきす夜半の旅ねの初こゑを都の人は聞すや有らん

兩方の子規。ともに優には聞ゆるを。夜半の旅ねは時鳥たつねけるにや。慥ならず侍を。左は卯花かけに尋てそ

きくといへる。まさると申へし。

十四番

左

有家朝臣

さてもなを夢かね覺の郭公なれぬ名残はうつゝともなし

右勝

家隆

時鳥まつよかさなる雲路より初音にかへる去年のふるこゑ

左歌夢かね覺の怀いへる心は宜を。初の五文字やいかてもありぬへく。徒にをける様にや侍覽。右歌初音にか

へるといへる心最おかし。可レ爲レ勝。

十五番

左持

定宗朝臣

待かぬる人なかりせは郭公はつ音聞つといかてしらまし

右

有經

なつ衣たつよりきては時鳥思ひのまゝに初音をそきく

待かぬる人なかりせはといへる。我身の事にや。末の句叶ひてしも不聞にや。夏衣たつより迄はといへるも。下句また思はすにや侍らん。持と可レ申なるへし。

十六番

左勝

宗隆朝臣

ほとゝきす語らひ初る一聲の名残しも社なをまたれけれ

右

資實

おほかたの初音ならめと郭公わか身にあまる心地こそすれ

左歌名残しもこそといへる。少聞なれたるやうに侍れと姿宜侍へし。右歌世間にをきての初音ならめと。我身に餘るといへる。義實相兼ては侍れと。左は歌さま宜侍

にや。勝とすへくや。

十七番

左

爲季

郭公はつ音聞つとかたらすはなにゆへ人に浦山れまし

右勝

隆親

きゝつともきてもねられし時鳥初音に限るとしゝなければ

兩方ともに優にはみえ侍るを。右歌初音に限るといへるすかた。猶宜しきに似たり。勝とすへし。

十八番

左持

保季

思ひねの夢にはなれき時鳥うつゝはこれそはつ音なり梟

右

實宣

深山邊の家ゐならずは郭公人より先にいかてきかまし

左歌姿心おかしくは侍るを。夢にはなれきといへるや。そて打かはしなとやうにや。きゝなされ侍らん。右歌こ

となくはいひくたして。歌合にはまさるとも申へく侍れと。左尙現はこれそなといへる。ちからいれるやうに

聞え侍れば。持と申へくや。

十九番

左勝

長俊

時鳥人の心をさそひてはまた里なれぬしるへにやする

右

静縁

誰もまた聞すといはゝいとゝしく嬉しかるへきほとゝきす哉

左右の歌。をのゝ心ありてはみえ侍るを。左時鳥人の心を誘ひてしるへにせん事。餘りにや有む。右は人ことに

子規やきゝけると尋問て後。いとゝ嬉しかるへしといへる事。たいゝ鋪や侍らん。左おほつかなき所は侍

れと。心さしまされるにや。

廿番

左

重政

いつしかと聲ならすなり時鳥きのふかへりし春にちかひて

右勝

光行

子規さとなれ初る一こゑにあまたこたふる山ひこもかな

左歌春にちかひてなといへる。さまでならぬ詞を。ちかき世常に聞やうに侍れと。初たる心は有へし。右歌あまたこたふる山ひこもかなといへる心宜。勝と申へきや。

廿一番

左持

性照

今日かふる衣手にこそつゝみつれいつしかきゝつ山子規

右

見佛

おしみつる花の袂の匂ひをも忘れねと鳴ほとゝきすかな

兩方の子規左はかふる衣の袖に聲をつゝみ。右はおしめる花の袂をも鳴音にわすれたる心。ともにおかしからさるにあらず。持とすへし。

廿二番

左勝

興福寺權別當法印

思ひ寐の夢にきゝつる初聲にかはらすなのる山郭公

右

隆信朝臣

なをきなけ尋そきつる子規里なれぬ音のきかまほしさに

左の子規は。夢にも聞うつゝにも聞けり。右はなをきなけとをける文字つかひ。たゝならすはみえなから。末の句の心も〔は歟〕また聞ぬやうにきこゆ。先例もきける

をは。まさると申ことにや。

廿三番

左

皇太后宮大夫入道

なにたてる時の鳥とやいつしかとう月きぬとて初音なく覽

右勝

少納言法印

郭公はつ音きかする嬉しさをつゝみとめつる衣手のもり

右歌衣手の森に初音きける嬉しさをつゝみとめたる心。

いとおかしく社侍めれ。左歌はなと「を歟」常のこと時

鳥とこそよむへけれ。時の鳥殊不可_レ庶幾_レ事也。雖_レ爲_レ判者。歌この番にをきては。をして以_レ右勝とすへし。

一番 曉月

左持

民部卿

あはれさは昔もかくや有明の月はおしまぬ人はあらしを

右

大輔

なにたてる秋もかひなしあたら夜の月を残して明るしのゝめ

左歌昔もかくやあり明のといへるわたりは。おかしく

侍を。初五もしと末句と。少不_レ相叶_レや聞え侍覽。右歌

下句は宜聞え侍るを。秋もかひなしといへる。しかるへ

からす聞ゆ。兩方ともにおほつかなき所侍れは。持と申

へくや。

二番

左

平中納言

月おつる有明の空のあはれさを思ひしりけになく鳥の聲

右勝

生蓮

有明の月は雲井のよそなれときぬゝになる心地こそすれ

左右の有明。ともに曉の心おかしくは侍を。左思ひしり

けにといふ詞。頗けなるにや侍らん。右は月は雲ゐのと

三番

左

左衛門督

秋はたゝ鳴の羽音の過るまで月すむ夜半の敷をこそかけ

右勝

讃岐

新古 おほかたにあきのね覺の露けくはまた誰袖に有明の月

左歌鳴の羽音のすくる迄敷かくらん。心宜侍な。右歌秋

のね覺の露けくはとをきて。又たか袖にといへる。心殊

にふかくも侍る哉。猶右可_レ爲_レ勝。

四番

左勝

藤中納言

有明の月のひかりはみやつこのいそく衣やたとらさるらむ

右

三河内侍

晝とのみ照月影になく鳥はをのか八聲に夜をや知らん

左有明の月のさ「ひ歟」かりは宮つこのいそく衣なとい

へる。少おほつかなく侍程に。是は毛詩といふふみにみ

玉へしにやとそ覺え侍る。曉の心に引よせられたる。い

とおかしくみえ侍れ。右をのか八聲によをや知らんと

いへる。木綿付鳥は本よりよなしれるにや。事たかひて

や侍らん。左勝とすへくや。

五番

左

藤宰相中將

わく霜に月のひかりやまかふらん尾上の鐘の聲きこゆなり

右勝

丹後

月はなをいらて有明の山のはもさそあらましに恨めしき哉

左歌 豐嶺鐘の心にや。かの鐘は曉の霜にこたへてなる
へし。是はたゝ月の光をしもにまかへてなると侍れは。
曉としも聞えずや侍らん。右歌 さそあらましにといへ
る心。いとおかしく侍るうへに。左歌 上下の句の始の字
おなし。以レ右勝とすへし。

六番

左勝

右近衛權中將
みても猶あかぬ名残を思ふまに月にも鳥の音こそつられ

右

成家朝臣

時もととき空のけしきもたくひなし秋の半の明かたの月
左月にも鳥のなといへる姿。優にみえ侍り。中の五もし
のまにといへる程そ。今少思ふへくやとみえ侍れと。と
かには及さるへし。右三五夜の明かた。下句は宜侍を。
初の句ときも時といへる。事有けにて。こと成事なかる
へし。以レ左爲レ勝。

七番

左持

前右京大夫

かさこしや更ぬる月に霜置て雲のそこより鐘ひゝくなり

右

顯昭

山の端をなにいとひけん月影のいらぬに明る空もありけり
左歌 姿詞ひとつの風舩相叶てみえ侍り。右歌 山のはい
とふ心そ。常のことに侍れと。下句やすらかにいひくた
して。姿も優に侍めれは。なすらへて持とすへし。

八番

左

前宮内卿

またれつる其よひのまを月影のあかて明行程になきはや

右勝

寂蓮

今ははや月も名残を思ふらんひかりことなる明かたのそら
左その宵の間をといひ。ほとになきはやといへる。近俗
なからとかなく侍るへし。右は今ははやとをき。光こと
なるなといへる心宜しく侍にや。勝と可レ申哉。

九番

左勝

六條三位

あくる夜の名残やおしき白露に光をやとす山のはの月

右

右大臣法眼

なかむれは心も消ぬ故郷の軒端にかゝる有明の月
左歌 なこりやおしきといひ。光をやとすなといへる。心
姿おかしく社侍めれ。右歌 軒はにかゝるらん有明の月
も。心優には侍るを。心もきゆらむや。いかにそ侍らん。
左少はまさるへくや。

十番

左

顯家朝臣

終夜あはれ催す月影にたえてや鳥も聲にたつらん

右勝

祐盛

ひるとのみかたふく月を詠れはかねも入相のこゝち社すれ
左たえてや鳥もなといへる姿は。おかしくみゆるを。鳥
の音は。曉やみにもみな鳴ことにてや侍らん。右鐘も入
相のといへる心よろしきにや侍らん。以レ右爲レ勝。

十一番

左

兼宗朝臣

有明の月のひかりのさやけきはやとす草葉の露や置そふ

右勝

定家朝臣

明方は月もなこりやおしむらんを光そふ袖のうへかな
兩方の月の歌。やとす草葉のといひ。月も名残やなとい
へる。姿心ともに優には侍を。右尙光そふといへる下句
宜侍にや。聊まさるへくや侍らん。

十二番

左持

夜を送りおしむ心のふかけれは雲井に残る月を猶見ん

右

伊 綱

今こむといふ人もなき秋のよに詠そあかす有明の月
左歌雲井に残る月影を猶みんといへる心。何となく哀
こもりて侍にや。右歌いひし計に長月のといふ歌を思
ひて。詠そあかすといへる心。又優にみゆ。依て持とす
へし。

十三番

左

定經朝臣

岩ねふみ月に山邊を越行は關路の鳥の聲しきるなり

右勝

朝 經

草枕あけぬる鐘のをとす也名残おしくもすめる月かな
左ひとつの風舩なるへし。函谷關に鶏なくなどの句も
おほえて。おかしくも聞ゆるを。右名残おしくもすめる
月哉といへる。何となく艶にみえ侍れは。まさるとや申
へからむ。

十四番

左勝

有家朝臣

道しはの露わけぬ袖も打しめり月にも鳥の音こそつられ
右 家 隆

なかむれは千里の秋も雲消て月にこもれる有明のそら
左歌月にも鳥のといへる。さきの六番左にや侍つるに
おなしきを。これは露わけぬ袖もといへり。右歌月にこ
もれるといへる。心あまりては聞ゆれと。左歌合のうた
歌箭驚といひつへし。勝に侍へし。

十五番

左

定宗朝臣

今更に明ぬる鐘の聲せてもよるとみえつる月のかけかは

右勝

有 經

ひるとのみ思ひはつへき月影をあらはしかほに鳴そ羽かく
左右ともに。月を晝にまかへたる心同じきを。左は詞つ
かひわりなからむとはみえたり。右はうるはしくいひ
くたせるうへに。鳴そ羽かくといへる末の句優なるに
や。すこしはまさると申へくや。

十六番

左持

宗隆朝臣

詠むれは月はこのれる有明の空に心をつくしつるかな

右

資 實

山のはにかたふく月や秋のよの明行空の名残なるらん
左歌月はこのれるといひ。空に心をつくしつるかなと
いへる。心姿宜侍るな。右歌明行空のなこり成らんとい
へる。また艶にも侍れは。かた／＼心うつりて。よき持
とすへし。

十七番

左持

爲 季

みわたせはこほりしきつの浦さひて浪間に消る有明の月

右

隆親

たゝ今の鳴の羽音にしられ鳧月かけ明るあきのよの空
左心姿宜はみゆるを。有明の月は浪の上にもなをのこ
さまほしかりける事にや。右始の五字あまりにやあら
んときこゆれと。末の句おかしからさるにあらず。とも
に勝とは申かたし。又持とすへくや。

十八番

左勝

保季

あくるまで露のやとりやおしからむ浅茅かするに残る月影
右 實宣

鳥の音も月さへわたる心地して尙有明にしく物そなき
左歌露のやとりや惜からんと云て。浅茅か末にのこる
月影といへる。妖艶荆臺の夢に入し姿にことならさる
にや。右の歌も優にはみえ侍れと。以左勝とすへし。

十九番

左持

長俊

有明の月もてあそふ岩まより光をちらす波のはなかな
右 靜縁

軒ちかきまかきの竹の音さえて時しも秋のあり明の空
左右兩首。左は岩間の浪の上に月光をもてあそひ。右は
竹葉の風前に秋の空を感じる。共に優にはみえなから。
浪の花竹風を思ひて。月の詞すくなくやあらん。持とす
へくや。

二十番

左持

重政

照月をなをななめむ明わたるかたをはこめよ山のはの雲

右

光行

松の戸に獨なめしむかしさへ思ひしらるゝあり明の月
左歌かたをはこめよなといへる末句。おかしからさる
にあらず。上句の尙も詠むといへるもの字そ。ふるくも
よまさるにはあらねと。不可庶幾や。猶とて有ぬへ
きを。詞のたらさる時もの字を添つれば。凡氣に聞ゆる
也。右歌昔思ひ知るゝといへる。是は文集の陵園妾を思
へるなるへし。但松門曉到月徘徊とそいへれば。松の門
とそみえたり。されと松の戸といはんも。ふかき難には
あらさるへし。左の猶も右の松戸又持とや可申哉。

廿一番

左

性照

月をみる有明の空の鳥の音は獨ぬるよもうらめしきかな
右勝 見佛

露もろきをのゝ篠原風ふきてやとりもあへぬ有明の月
左歌さま優にはみゆ。獨ぬるよも鳥の音うらめしなと
いふ心そ。常のことなるへき。右露もろきをきて。や
とりもあへぬ有明の月といへる。宜こそ侍めれ。以右
爲勝。

廿二番

左持

權別當法印

難波湯鹽ひになれば芹間より玉もをなかつ有明の月
右 隆信朝臣

あかて入し夜なゝよりもつらき哉月を残して明る山のは
左歌玉もをなかつといへる。風舂たかく見所おほく社
侍れ。右の歌又下の句に月をのこして明る山の端と云

る。心いとおかし。左右とり／＼にして勝負不分明。依て持とすへし。

廿三番

左

今もなをなくさめかね、の月あり明かたの更科のさと

右

少納言法印

清見かた有明の月をみぬ人の心をとめよなみのせきもり
兩方月歌。さらしなの里清見か關ともにそ名高き所なる
上に。左愚老の比丘か歌なるへし。例に仍て不_レ加_レ判。

一番 深雪

左勝

民部卿

常盤山ふたはの松とみえつるは雪降つもる木末なり梟

右

大輔

朝またきすとの竹かきよをこめて降つむ雪に明そ煩ふ
左常盤山の瑞雪及ニ數尺。みとりの梢二葉にみえたる心。
いとおかしくこそ侍めれ。右歌すとの竹垣夜をこめた
る雪の朝扉あけわつらへる。心は故なきにあらされと。
常盤山と賤の屋と眺望の懸隔なるにや。以_レ左勝とすへ
し。

二番

左勝

平中納言

雲わけし谷の木末も降雪のそこにのみなる天のかこ山

右

生蓮

あとたゆる雪のあしたにかき分て心の行はこしのしら山
左右兩首。天のかこ山越のしら根。昇降雖_レ不_レ異。左雲
分しとをき。あまのかこ山といへる。よせ有て聞ゆるを。

右は思ひやれる越のしらやまは雪深き所なれは。今みる所の雪はたゝ跡たえたる計也。左谷の梢もそこに成らん。ふかきもまさると申へきや。

三番

左勝

左衛門督

夜を寒みこしの山風さえ／＼て積るかうへにつもるしら雪

右

讃岐

しはしこそ人も待しか山里はいたくなとちそ雪のかよひ路
左歌つもるか上にといへる。心姿おかしくきこゆ。右歌
姿はよろしく侍を。上下の句の心相かなはぬやうに聞
え侍るにや。左可_レ勝や侍らん。

四番

左勝

藤中納言

春過は道ふみ分る人やあると降つむ雪を誰忍ふらむ

右

三河内侍

降つもるしはしは今そ聞ゆなる三輪山ひ／＼く杉の雪折
左袁司徒か家の雪おもひやられて。おかしく侍へし。右
しるしは今そといへる。心はおかしきを。三わ山ひ／＼く
覽雪折や餘りなるらん。但雪はふかゝるへし。持なとに
て侍れかし。

五番

左勝

藤宰相中將

たつぬれは降つむ雪の下にこそ越のさと人聲あはすなれ

右

丹後

さり共となか／＼人そまたれける道ふり埋む雪の明ほの
左右兩首の下にこしの里人を尋ね。曙の空に人をまて

る心。とりくにおかしくみえ侍り。猶又持とすへし。

六番

左

右近衛權中將

子日せし春の野邊ともみゆる哉雪ふり埋む松の木末は

右勝

成家朝臣

しをりせし柴の梢を踏分て山路の雪のほとを知らない

左歌心姿優にはみえ侍り。右歌しはの梢に山路の雪のふかさをしれる心。宜く侍るにや。少はまきるともや可

レ申侍らむ。

七番

左勝

前右京大夫

降雪の軒かくほとになりぬれば尾上につゝく窓の通路

右

顯昭

雪ふれはあしのうら葉に浪越て渚もわかぬなはのつふらえ

左雪深う。心はおかしく侍るを。山の奥とも越の里ともなくて。是程の雪あまりにやあらむ。右芹のうらはに波こえてなとは優に侍るを。末の句こそ。少おとろかれ

侍れ。かゝる姿に成ぬれば。初より一鉢なるこそ。ゆるす事に侍れ。左のつゝくの詞そ。いかにそ聞ゆれと。猶

以レ左爲レ勝。

八番

左持

前宮内卿

尋常の雪にそ人もまたれける庭に跡なき深山への里

右

寂蓮

我もまぢ人をも問む道そなき雪のあしたの小野の山里
兩方の雪。姿詞はともに優に侍る。左よのつねの雪にそ

人もといへる。いかほととの雪にかと聞ゆるを。庭に跡なきは常の事にや。右又人をもとはむ道そなきといへるも。雪の朝の小野の山里。いくほととの事にあらすや。山さとほともおなし程にやとて。持にてや侍らん。

九番

左

六條三位

降ゆきのちへに百重に積りゐて白妙なれやみてくらのしま

右勝

右大臣法眼

ふる雪にましはるうれもおれふして道分かぬる冬の山さと
左上句はことありけにて。みてくらのしま。ことに事なくや侍らん。右の山里道分かぬると云る。宜や侍らん。

勝と可レ申哉。

十番

左勝

顯家朝臣

ましはもてはかなくさかふ賤のやの隔もみえす埋むしら雪

右

祐盛

氷室山谷かくうつむ白ゆきの夏まで消ぬたくひなりせは

左歌はかなくさかふと云るわたりよろしく聞えけり。
右歌ひむろ山。殊なる事なきにや。以レ左勝とすへし。

十一番

左持

兼宗朝臣

ふる雪にとたえもみえす成ぬれば渡しはてたる久米の岩橋

右

定家朝臣

しのひすむ心もたえす山かけや軒端にかゝる松の雪おれ
左右の雪。ともに深く侍へし。かつらき山の雪岩はしわ
たしはてたる。心おかしくみえ侍るに。右の山陰。まつ

の雪おれに忍すむらん心も。ふかきすしも侍らしとて。
持と可_レ申や。

十二番

左_勝

隆保朝臣

年へたる松のみとりも埋れて谷の心に似たる雪かな

右

伊_綱

ふりつもる雪に梢の残れるや下打過し大荒木の森

左歌谷の心に似たる雪哉といへる。姿詞優に侍へし。右

歌大荒水のもりは。ひくしめもひさしきことにたとへ。

下草もからすなとこそいひならはしたれ。駒うち過る

みちとしけん事やいか_レ。以_レ左勝とすへし。

十三番

左_勝

定經朝臣

かよふ人あらはみせまし年は暮雪はさかりのみよしの_レ山

右

朝_經

行さきの枝をりはいかにこし方の跡さへみえず降る白雪

兩方の歌。姿詞ともにおかしく社侍めれ。左は年はくれ

雪はさかりといひ。右は柴折はいかにこしかたのなと

いへる。文字つかひ艶には侍るを。跡さへみえずといへ

るよりは。三吉野の山ふかくや侍らむ。左尙少は可_レ勝

や。

十四番

左

有家朝臣

日數ふる雪踏分てとは_レ社人のなさけもふかしとはみめ

右_勝

家_隆

埋れて梢にかはる深山路もまた跡たえぬ雪くれの空

左歌雪ふみわけてとは_レこそなといへる姿は優に侍へ
し。右歌梢にかはる深山路もといひて。また跡たえぬと
いへる心。尙宜聞ゆ。右まさるにや侍らん。

十五番

左_勝

定宗朝臣

ふり積る雪に籬は山なれとくる人たえてかひなかり鬼

右

有_經

降雪に小野の山路は埋れて通ひし人も跡まかふなり

左雪にまかきはなといへる姿優なるへし。右殊成とか

なくはみゆれと。また常のことにや。左宜に似たり。勝

と申へし。

十六番

左

宗隆朝臣

から人のむかしの門の淋しさも雪にはかくや跡たえにけん

右_勝

資_實

妻木とる岩のかけ路も跡たえて降つむ雪や冬の山守

左歌から人のむかしの門といへる。是も桑門陶閑を思

ひやれる心。おかしくは侍へし。右うた降つむ雪や冬の

山守といへる。やまとはき_レちかくして。今少は右

勝と申へきや。

十七番

左_勝

爲_季

雪ふれはすその_レ原の跡たえてからぬ眞柴もみえずなり行

右

隆_親

をくれる人は跡をや尋ぬ覽もとこし駒のゆきのかよひ路

左からぬ眞柴もといへる。おかしく聞ゆ。右も姿詞は優

なるへし。もとこし駒といふ事は。齊桓公北孤行を綱せし時。雪天に失_ニ前路。管仲放_ニ老馬。其跡にしたかひし也。是よりいふ事也。常の雪の通ひ路なとにをくるゝ人尋ぬなと。いふへくやあらさらん。左無事にみゆる。勝とすへきや。

十八番

左

なくさめし枯野も雪に埋もれて吹くる風のをとつれもなし

右勝

實宣

吳竹のよをへて積る雪なれば今朝はおれふす音もきこえず
兩方の雪。左は枯野に寄。右はおれふす竹につけて。音せぬ事をいへる心はおなしきを。徒に吹來るかせをい

十九番

左

長俊

旅人は煙を里のしるへにて雪の下なる宿をかるかな

右勝

靜縁

信樂のおくいかならんと山たに道まよふまでふれるしら雪
左歌煙をさとの指南にてといへる姿は優なるを。上に里といひ下に宿といへる。さるへしとそさきくも申侍めり。右歌しからきの奥いかならんといへる。よろしく聞ゆ。以_レ右爲_レ勝。

二十番

左勝

重政

紅葉せし梢に袖をかくる迄たつたの山は雪ふりに鳧

右

光行

宮木引民のかよひち絶にけりいつみの袖の雪の明ほの

左立田の山雪の梢に紅葉をおもひ出され「たる」。おかしからざるにあらず。右いつみの袖の雪民の通路たゆらむ事は宜を。雪の明ほのとしもいへることやいか。明ほのといふ事を。今のよの人の常によむ事になりたるは。ことに優のこと侍にや。春の明ほのなとこそ。そこにおかしき物にはいひならはしたれ。雪はあしたこそおかしくはみゆるものなれ。近く俊恵法師と申もの。しらつき山の雪の曙とよめりし後。よろしかりけるにや。人のかく申なりたるなり。其時も老僧ゆるさす申て侍りき。よりて以_レ左勝とすへし。

廿一番

左

性照

夜とともにたえぬ煙もみえぬ迄雪ふりつもるふしのなる澤

右勝

見佛

まきのやのひまよりつもる白雪に梢をうつむ程そしらるゝ
左歌富士の山は。さ月の晦日にも雪いとしろしとこそ。伊勢物語にも申たれは。まして冬の雪はさ社侍らめ。但ふしのなる澤とてはてたるこそ。いひさしたるやうにみえ侍れ。右歌まきのやのひまもる雪に。梢をうつむ程をしるらむ心。宜や侍らん。以_レ右爲_レ勝。

廿二番

左

權別當法印

日をへつゝ梢は雪にうつもれて春より先にさく花もなし

右勝

隆信朝臣

けさみれば梢も庭もひとつにて雪のそこなるみよしのゝ里

左右の梢の雪。日をへつゝといひ。今朝みれはといへる。
心はおなしけれど。雪のそなるみよしのゝさと。宜や
聞ゆらん。右の勝と可申や。

廿三番

左

皇太后宮大夫入道

ほのみゆる梢はそれか初瀬山雪のあしたのふたもとの杉
右 少納言法印

降雪に宿はさなからうつもれて名はあらはれぬ白川のさと
白河のさとの雪。名にあらはれむ心おかしくこそ侍る
めれ。但依例而不加判。

一番 久戀

左持

民部卿

いかなれは人の心はかはらぬにわか黒かみのしろくなる覽

右

大輔

今そしる戀のやまひに年ふるは物思へていけるなりけり
左歌心おかしく聞え侍り。右歌戀のわつらひにとしふ
るよし。いかにそ聞ゆれと。物思へとてといへる。心ふ
かゝるへし。持にてや侍らん。

二番

左

平中納言

御狩する裾野の松にゐる鷹の千とせや戀の恨なるらん
右勝 生 蓮

なにせんに思ひそめけん逢事を松にとしふる鶴の毛衣
みかりするすそのゝ松。姿ことはいとおかしく侍るを。
ゐる鷹のとをかれたるや。松の千年にへたゝりて聞え
侍らん。松にとしふるといへるは。文字つゝき宜や侍ら

三番 ん。

左持

左衛門督

忍ひつゝ戀わたるまに朽にけりなからの橋を又や作らむ
右 讚 岐

新古

跡たえて淺茅か末に成にけり頼めし宿の庭のしら露
左歌長柄の橋をまたや作らむといへる姿心。ことに宜
も侍る哉と思ふ給ふるほとに。右歌又淺茅か末に成に
けりとをき。頼めしやとの庭のしら露といへる。心詞あ
はれに。苔の袖にさへ露かゝる心地し侍れは。いづれを
まさるとも申分かつくなん。

四番

左勝

藤中納言

戀路には長柄の橋のあらは社年へぬるみのたくひにもせめ
右 三河内侍

年をへてかゝる戀にもたへければはかなからぬは命なり鬼
此はかなからぬはといへる下句は。おかしくも侍れと。
左の長柄の橋のあらはこそといへる姿。猶宜みえ侍れ
は。以左勝とす。

五番

左勝

藤宰相中將

歎きつゝさもあらぬとしを重ねきて片敷袖そ空しかりける
右 丹 後

つれもなき人の心も年月のかはるに付てかはらましかは
左歌上句は何さなく心詞に籠りて。下句にかたしく袖
そむなしかりけるといへる。姿心ふかくも侍るかな。右

六番

歌かはるに付てかはらましかはといへる。又おかしく
はみえ侍れと。左なを思ひましたるにや侍らむ。勝と可
レ申や。

左勝

右近衛權中將

右

成家朝臣

よしさらは恨もはてし岩におふる松のためしも有と社きけ
よそなから幾年すきぬ逢事を松も老ぬる高砂のきし
兩首の久しき心。ともに松によせたるにとりて。高砂の
岸よそに過たるも。さもある事には侍れと。左歌松のた
めしもありとこそきけといへる姿心。ことにおかしく
みゆ。可レ勝とや。

七番

左持

前右京大夫

右

顯昭

逢てのみ過ぬる程の久しきに思ひくらへてまつ暮もかな
年をへてつらきにこりぬねき事のしるはいつか三輪の杉原
左歌させる其餘情とはなけれとも。心詞とかなくいひ
くたして。歌合の歌とみえたり。右もいとおかしきを。
ねきことのと置る中の五字。不レ可ニ庶幾ニや。なすら
へて持とすへくや。

八番

左勝

前宮内卿

侘ぬれは過る月日そなつかしきつらきもふかき契と思へは
寂蓮

恨侘なを年ふとも哀わかいつ迄とたに思はましかは

九番

左つらきもふかきなといへる。戀の心ふかく侍へし。右
あはれ我とをける。末に相叶てしもきこえさるにや。以
レ左勝とすへし。

左

六條三位

右勝

右大臣法眼

涙ゆへ朽ぬる袖をかそふれはかさなる年のほとそしらるゝ
つれもなき君に心をつくしきていつ迄か世に生の松はら
左歌朽ぬる袖をかそへて。かさなるとしをしれる心。あ
はれなきにあらず。右歌心をつくしいきの松原なとい
ふは。常の事なるやうに聞ゆれと。いつ迄かよになとい
へる。姿まさると可レ申や。

十番

左持

顯家朝臣

右

祐盛

あふ事を命にかへは四十あまり我なからへてあらむ物かは
涙ゆへくつる袂をぬきかふる數も千度にあまりぬるかな
左命にかへは四十餘なといへる。心詞あまりにたしか
にや侍らん。右涙ゆへぬきかふる袂千度にすきにけん。
戀の心ことの外にはおほえ侍れと。朽るといへる詞も。
いかにそ聞え。袖の數もあまりにやあらんとて。持とす
へし。

十一番

左勝

兼宗朝臣

戀初て久しき中といはれなはそれも契のなかにやあらぬ
右 定家朝臣

すきにけりたのめてうへし姫小松梢のかせになけきそふ迄
左歌これも契のなといへる。心ふかく社侍れ。右歌木す
ゐの風になけきそふ迄といへる。姿はよろしきにした
れとも。〔左の字脱敷〕尙心ふかくきこゆ。まさると可

レ申哉。

十二番

左勝

隆保朝臣

あはてのみ年をふるのゝ草はなる露とも消ぬ身をそ恨る

右

伊 綱

としへたる中とそ今はいはれまし空たのめせぬ心なりせは
左のふるのゝ草の露優に侍るへし。右下の句なとかれ
これにや聞ゆらん。以レ左勝とす。

十三番

左勝

定經朝臣

我戀はいはてふるやの忍草としに添ても茂りぬるかな
右 朝 經

なけきつゝあはても年の積りゐて果は命にまかせつる哉

左歌忍草しける比聞なれたることにそ侍れと。姿詞い
と宜見え侍り。右歌下句の詞つかひ。なをおかしくはみ
ゆるを。つもりゐてとをけるほとそ。今少思ふへくやと
聞ゆ。左勝と申へし。

十四番

左勝

有家朝臣

かくしつゝいく百夜にか成ぬ覽數かき侘ぬしちのはしかき

右

家 隆

獨ねのなみたかたしき床ふりて幾度袖をくたしかふらん

左數かき侘ぬといへる。心姿宜侍るへし。右泪かたしく
なとはおかしく侍を。袖くたしかふる心。さきにも聞え
侍りつるやうに覺え侍れはにや。左のしちのはしかき。
まさるにや侍らん。

十五番

左勝

定宗朝臣

いつとなく同じときはのなけきにてあふ事松も久しかり鳧

右

有 經

つれなくてやゝ年月の積りなは戀やうきみの終りなるへき
左歌おなしときはのといひて。あふ事まつといへる。心
宜こそ侍めれ。右歌戀やうきみのといへる。優に侍る
を。漸のことはや。久しき心もすくなき様に侍らむ。以
レ左可レ爲レ勝。

十六番

左勝

宗隆朝臣

年ふれと戀はをはりもなかり鳧思ひ初しは初め成しを

右

資 實

わか戀はふしの高ねのたくひ哉いつれの世よりもえ初め
左戀はをはりもなかりけりといひはしめけん。思ひそ
めしはなといへる。いとおかしく聞ゆ。右いつれのよゝ
りなといへる。ふかくもみえ侍るを。中の五字や。今少
おもふへくと聞え侍るにや。左勝と可レ申哉。

十七番

左勝

爲 季

つれなさもさのみやはとて待程に年も數もつもりぬる哉

右

隆 親

思へたゝ君も岩木の心かはいくとせ過しつらさとかしる
兩方の戀。左はとしもなけきもといひ。右はいくとせす
きしつらさとかしるといへる。ともにいとおかしく侍
れは。仍持とすへし。

十八番

左勝

保季

すゑの松浪のしたにも年はへぬぬるとも朽ぬ袂なりせは

右

實宣

つれなさを思ひも絶ていく年か我戀草のしけり増らん

左歌末の松山の浪によせて。ぬるとも朽ぬなといへる。
心姿おかしくみゆ。右歌戀の心は久しなから。戀草のよ

せなく侍らん。尙末の松山まさると可レ申哉。

十九番

左勝

長俊

戀しさに残す心はなけれともあはて年ふるなやとゝめん

右

靜縁

うちなけき暮ぬる年をかそへても頓てつらさの程をしる哉

左右の戀。あはて年ふるといひ。頓てつらさのといへ
る。心はいくほととの勝負なきを。右うちなけきとをける

五字ことなる事なくや。左少は可レ勝や。

二十番

左

重政

歎きつゝ年へぬるみをしたひきて戀さへ鳩の杖はつきけり

右勝

光行

逢まてとおしむにのふる齡哉なみたの末や菊のした水

左歌戀の鳩の杖つける事。思ひかけぬ風情にやあらむ。

右歌泪のすゑや菊のした水といへる。いと宜しくも侍
哉。以レ右勝とすへし。

廿一番

左勝

性照

つれなしときくの長濱なからへて心つくしの物をこそ思へ

右

見佛

つれなさや思ひなをると待程に心のほかの老はきにけり

左右の久しき戀心は。ともに優には侍を。左きくの長濱
なからへてといへる。又おかしく聞ゆ。この番も菊の歌
まさるへし。

廿二番

左

權別當法印

しほたれて磯に年ふる海人よりもあはぬ恨そ久しかりける

右勝

隆信朝臣

二葉よりそめし心を命にて松は色こそとしふりにけれ

左磯にしふるあまよりもといへる。あはぬうらみの
ひさしき心おかしくも侍れと。右松は色こそといへる。
よろしかるへし。以レ右爲レ勝。

廿三番

左

皇太后宮大夫入道

ふりに梟としまのあまの濱ひさし浪間に立もよらまし物を

右

少納言法印

むかしより心つくしに年はへぬ今はしらせよあふのまつ原

左歌はまひさしといへり。彼浪間よりみゆるこしまの
はまひさき久しくなりぬ君にあはすしてといふ歌は。

萬葉集にも宜き本と申にも。多は久木とそ書て侍を。鄂

曲などにうたふ歌に。はまひさしとうたふにつきて。歌繪などにあまの家などを書いて久しとかく也。されはひさきそ正説には有へき。但はまひさきは。久しくなりて朽もうせにけん。あまのしほやなどのひさしは。今もこしまにも有ものなり。一説につきてことさらによめるなるへし。又萬葉集にも楸とはかゝす。久木とかけける也。少は覺束なきことなるへし。右歌心つくしに年はへぬといひて。あふのまつ原とよまれたり。いと宜しくこそ待めれ。左歌は古事取すくしてもみえ侍れと。是も判者に事よせて不_レ加_レ判。夫是非定は。作者の釋義にあるへし。

敷しまややまと歌の道にをきて。津の國のよしあしをさたむる事は。あまつ乙女のなつらむ石よりもかたく。わたの原浪のそこよりもはかりかたし。いはんや愚老をや。たゝこの道にたつさひて。あら玉のとしつめれるといふ計に有時は千はや振神のみやしるに事をよせ。あし曳の名にかこちて。此事をさためさする事。はまの眞砂の數あまたに罷成しかは。未_レ得爲_レ得未_レ證爲_レ證のつみも。此世後の世よしなきに。から國のことのをのなかくたちつることゝなりて。まかり過にしを。今の代には三笠の山峯の松風しつかにして。やまとみことの道ふかく尋給ふにより。もゝちの歌をさへつかひむすひて。をとりまさりしるしさため奉れなとおほせ玉ふにより。老の浪立かへり。入えのもくつをもかすまへ給ふかしこさに。立てしこともさらにかくして。をろか成ことのはをのみ。申ちらすことに成にけり。折ふしもいま。中のもの申すたみのつかさのかみ。此道を翫ひ。ふるき跡をもおこして。いつゝの題をわかち。あまたの人をすゝめて。あまたつかひ

の歌の薙をのへられたる事あるを。もとよりこゑをしり。袖をむすふ心さしのうへに。いさゝかむらさきのいろのゆへもありとにや。武藏野の草の中にもましはるへきよしあるを。いなはの山のいなひかたさに。花ならぬこと葉をましへ。おほえぬ事をしりかほにしるし申なるへし。大形は歌は必しも。繪の處のものゝ色々のにの數をつくし。つくもつかさのたくみのさまゝきのみちをえりすへたる様のみ。よむにあらさる事なり。たゝよみもあけ。うちもなかつたに。體にもおかしくも聞ゆるすかたのあるなるへし。たとへは在中將業平朝臣の月やあらぬといひ。紀氏の貫之雪に濁る山の井のなといへるやうに。よむへきなるへし。老比丘今は九十にちかつきて。草はの露と消むこと。あすを待へきにもあらされは。且は此たひ計もやとて。あまのもくつのことおほく。ふするの床のみたれたる事をしるしをくするへし。歌のよろしきを宜とするすも。人に心をよするにはあらさ。又とかむへきをとかとあらはすも。氣をふく心にはあらさるなり。その事をはかくいふにこそ。かゝる事をはしかいふなりけり。をのゝのちを心へ。とまらぬあとをみても。道をしらむ人は思ひわかむため。よしともしるし。とかともあらはすなり。すへて歌の薙にば。かけまくもかしこき住吉の御神もてらしのそみ玉ひ。道を守る人丸の卿のなきたまも。かよひかけるわさなれは。なをき道を思ひ。よこさまたる事をはしるささる物なり。先々もかやうの事の心は。申いてまほしなから。たかまの山のたかきおほせのときは。はゝかりのせきのはゝかりをなし。たつのくちふむとらのおのをそれにより。思ひてむなしくまかりするを。いまこのことのついでに。おもふ所をもあらはしつるならし。

もしほ草かきをく跡のきえさらは

あはれはかけよ和歌のうらなみ

群書類從卷第百九十

和歌部四十五 歌合十一

御室撰歌合 正治二年二月五日當座

題

春

夏

秋

冬

雜

作者

御作 守常法親王

權中納言藤原隆房

左近衛權中將藤原兼宗

前宮内卿藤原季經

右京權大夫藤原隆信

左近衛權少將藤原定家

阿闍梨顯昭

阿闍梨覺延

沙彌生蓮

判者

入道皇太后宮大夫俊成後日付造判詞

一番 春

左

御作

谷かけははるめきやらすかせえて消れは氷る雪の下水

右

入道左大臣

墨染の袖にはふれし梅花あらぬにほひにかよひもそする
すみ染の袖に「は」ふれしと侍より。まことに世をいと
へる人のつかうまつり出られたりと。よそまでも老の
なさけ催れ侍れとも。消れは氷る雪の下水もおもしろ
く侍て。一番左最以可_レ爲_レ勝者歟。

二番

左

權中納言隆房卿

よし野山みねをはなれぬ白雲のきゆるや花のねにかへる覽

右勝

中宮權大夫公繼卿

吉野山かよはぬ程のみちならは雲とや花をおもひはてまし
左右ともに吉野山の風情。花の根にかへる。雲にまかへ
る。いづれも是非辨へかたくして。勝負(ガイ)みえわかす
侍る。持にこそと申侍しな。右方歌人に雲とや花をおも
ひはてまし。今少立まさり(て)侍るなど。方引申され
て勝侍ぬ。

三番

左勝

右イ
左近衛權中將兼宗卿

おしきかな猶みる人や稀ならん吉野のおくの花のさかりを

右

入道皇太后宮大夫俊成

むめかかも身にしむころは昔にて人こそとはね春のよの月

此番。右歌者愚老か詠にて侍けり。月やあらぬ春やむか

しの春ならぬ。在中將のふる事を。わつかにひろひあつ

めたる計にて。我力入たるふしもなく侍れは。吉野の奥

の花さかりやさしと申侍て。以左爲勝。

四番

左勝

前宮内卿季經

にほひくる梅のあたりに吹風はつらき物からなつかしき哉

右

權律師賢清

春もなを霞のそこに成にけり冬籠せしみやまへの里

冬こもりせし深山へのきとは。長高く聞ゆるよし申侍

りしを。梅のにほひふくかせはつらきものからなつか

しき詞も心も花實をかねて。幽玄にこそ侍らめと仰下

されしかは。勝の字を付侍りき。

五番

左

右京權大夫藤原隆信

朝戸あけて春たつ空をなかむれは思ひもあへぬ鶯の聲

右勝

前中務權大輔藤原有家

かすみ行おほろ月夜の有明にほのかにかほる梅のした風

あさ戸明ておもひもあへぬ鶯の聲を聞侍らんは。めつ

らしからぬ風情。あまり耳なれて侍るうへ。霞ゆくとを

きて。おほろ月夜の有明にとひいて。ほのかにかほると

いへるまで。おかしくおもしろく侍れは。尤勝にて侍る

へきよし申侍しかは。中宮權大夫藤原朝臣申されてい

はく。上句にておほろと置て。下句にほのかにとある

は。例の舛の句にて侍るとも。同心の病にてや侍らまし

と申されしかは。人々もさほとにや侍らんと申されし

に。愚老か申侍しは。臚とほのかと。更に同情の病に侍

らしを。天徳の歌合にも。中務か歌におほろよの月

を歸鴈名殘おしきにほのかにも見む。とよみてありし

それも持にこそなされ侍しか。同病の沙汰なくやと申

侍しかは。まことにいにしへもさたなく侍るうへは。今

更さたありかたしとて。勝になされ侍りき。

六番

左

隆信朝臣

よしさらはさても心をなくさめよ花ちる峯にのこる白雲

右勝

大輔有家

春のうちはそのことかきらぬなかも近花にせかるゝ白川の里

右花にせかるゝ白河の里は。勝侍へしなと申侍て。勝字

を付侍き。

七番

左勝

左近衛少將定家

うくひすはなけともいまた古郷の雪の下草春をやはしる

右

上總介家隆

しけき野と詠し秋のあともなしかすめる空の萩の焼原

故郷の雪の下草もうらめつらしく。しけき野のかすめ

る空の萩の焼原も。いとやさしく侍れは。持にこそと各

申され侍りき。

八番

左持

定家朝臣

ゆく春よわかるゝ方も白雲のいつれの空をそれとたに見ん

右

家隆朝臣

花ちりてはては物うき驚も恨かねたる春のあけほの

此番。勝劣いかゝ。なかゝよそよりさたの侍しと申侍

しかは。左右の暮春。何も雌雄難決して。勝負見えすと申侍しかは。爲持。

九番

左勝

阿闍梨顯昭

春風のなさけならては櫻花さかぬ宿までにはほはましやは

右

阿闍梨禪性

いつしかと花まつ比のなかめにはさそあらしの嶺の白雲

さそあらしの嶺の白雲は。立まさりたる様にこそと申侍しかは。有家申云。此句は去年の仙洞の御百首につ

かうまつれりし句なりと申侍しかは。けにゝさる歌有と仰出されしうへば。左勝に定申侍ぬ。

十番

左勝

覺延阿闍梨

うき事もあらしとおもふ三吉野のおくにも花の散をみる哉

右

勝蓮阿闍梨

花の枝をおりゝ毎の心こそうきをわするゝ世とは成ぬれ

右あまりにおきなかましくて。竹馬に策の心地すれは。劣と申ぬ。左はことに宜侍り。

十一番

左持

生蓮

なくさめし遠のなかめも絶にけり霞にこもるみ山へのさと

右

寂蓮

春風やさそひはてつと思ふらん花にもとまる梅のほひを

かすみにこもる深山邊も。心うつりておかしく。花にもとまるむめの匂もみ所あり。やさしき持にこそ侍るめ

れ。

十二番

左持

生蓮

身はすてつ今は此世に花ならてなにゝ心をとゝめおくへき

右

寂蓮

かへるかり雲の浪路にかす消て友をはなるゝあまの釣舟

左は身をすてつより。述懐の心やさしく。右は春のけし

き。かへるかりにもよほされて優にや。爲持。

十三番

左持

御作

石はしる音さへ涼し水無瀬河なみにや夏の立はなるらん

右

入道左大臣

是はかり世をそむきぬるしとてけふ立かえぬ墨染の袖

右世をいとへるとり所の意趣も。まことに此色にあらはれて侍けりとおかしくて。勝と申(き)むとし侍るを。

作者云。左もおかし。さらは持を申うけられ侍りき。

十四番

左持

隆房卿

ゆふされは秋の姿をうつしもて月をそむすふ松かけの水

右

公繼卿

出にけり月や都のしるへにて夜半にもきつる山ほとゝきす

左右。たくみにおかしくて持とす。

十五番

左

兼宗卿

夏衣ひとへにかふる袂にも花のにほひをとゝめましかは

右勝

俊成卿

にほひくる花たちはなの袖の香に涙露けきうたゝねの夢

左同類ありとて。負になすへしと。各定申侍き。

十六番

左勝

兼宗卿

むすふ手に夏の日敷そわすれゆく秋やすむらん山の井の水

右

俊成卿

このまゝに後の世までも時鳥かたらひなるゝ友となりてよ

右はよしなき人のみるへきものならねは爲負。

十七番

左

季經卿

夏深きをかやか原の夕すゝみ秋にさきたつかせの音かな

右勝

賢清

たちのほるたゝひと村のうき雲のよもにみちくる夕立の空

右下句こそいま少しおもひ入ぬさまに侍れとも。いさ

さかなたらかなるやうなり。左は秋にさきたつかせ。宮

内卿女房かふるくつかうまつれる下句とて。爲負。

十八番

左持

隆信朝臣

花の色にそめし衣よまてしはしかすみの袖は立かはるとも

右

有家朝臣

山のはも霞の衣立かへて今朝はひとへに嶺のしら雲

左右の霞衣。いづれもとりに云しりて侍は。愚意迷

雌雄之篇品。短慮忘ニ優劣之奥極。暫可爲持歟。

十九番

左

定家朝臣

ゆふ立の杉の下かせうちそよき夏をはよそに三輪の山本

右勝

家隆朝臣

夏衣はるにおくれてさく花のかをたに匂へおなしかたみに

夏ころも春におくれてと。つゝけつかうまつれるほさ

珍。かをたににほへ同じ形見さたてるまで。やさしく侍

れは。左とかくのきたに及はず。右以爲勝。

廿番

左持

顯昭

さみたれにもとの心やかはるらん野中の清水くむ人もなし

右

禪性

花の色にそめぬ袂は夏くれさ衣かへうきうらみやはする

左珍しからず。右は宜やうなれとも。さきに入道左大臣

のつかうまつり出られたる風情なりとて爲侍。

廿一番

左

覺延

古郷のあとをたつねて分くれはあはれも深くしける夏草

右勝

勝蓮

郭公をのかなかく音をいかなれば人のめつてふ物となすらん

右俗に近き様には侍れとも。云しれる風情なりとて。爲

勝。

廿二番

左

生蓮

けふといへはよと野に生るあやめ草枕にたれも引むすふ覽

右勝

寂蓮

山かけに岩もる水のいつはりを秋きにけりとたのみける哉
左珍しき様に侍れとも。右岩もる水のいつはりを秋き
にけりとたとつゝけ侍ふし。やさしくて殊興有之旨。各
被_レ申侍き。仍被_レ免_二勝字_一畢。

廿三番 秋

左勝

御作

七夕に心をかしてあちきなくあかぬ別のよそにくるしき

右

入道左大臣

鹿の音にむかしの袖はぬれしかと老のね覺の程はなかりき
老のねさめの鹿の音にもよほされ侍らんやう。やさし
きふしにて。いとありかたくは侍れとも。左たなはたに
心をかしてあかぬ別のよそにくるしき風情。むかしよ
り多く七夕歌見侍れとも。かゝる風情いつこに残れり
けると。やさしくみえ侍は。何かの子細に及侍らす。左
を勝と申せり。

廿四番

左勝

御作

あさゆけはくすの葉分に袖ぬれて露所せき深草の里

右

俊成卿

植置し萩のさかりをみつる哉おもふにかなふ事もありけり

左いとやさしく侍るめり。右は花の傍に深山木のさま
なれは。如何たちならひ侍らん。

廿五番

左勝

御作

野邊ならはしからむ鹿にかこたまし我を散ぬる庭の秋萩

右

釋阿

秋の野よいか心を分よさて千種の花に鹿の鳴らむ
左はいつこの姿よりもやさしく。染_二風情於一入再入紅。
瑩_二露詞於千顆萬顆之珠_一。姿を見れば曉の月雲のよそに
ほのめき。意をとへは秋の鷹霧の中にまよひなし。かゝ
るめてたき御番に。愚老さのみ推參つかうまつりて。重
て面目なきをおそれ侍りぬ。

廿六番

左持

御作

身にかへていさゝは秋を惜みみんさらてもろき露の命を

右

有家

さとはあれて人は出にし深草の野原のくれにうつら鳴也
是も左。たくひなくめてたきさまに侍て。耳をやしなふ
薬となれるを。右もいとやさしく。里はあれてといへる
より。野原のくれにうつらなく聲までも。きゝたかくお
かし。右の勝にこそと被_二仰出_一侍しかとも。作者頻に
さしもの事に侍らすと侍しかは。爲_レ持。

廿七番

左持

隆房卿

きり／＼す恨むる聲そよりはりぬる過行秋のこゝろつよさに

右

公繼卿

なひけともやかて野風の過ぬれは獨露けき女郎花かな

廿八番

左勝

兼宗卿

雲間よりほのかにみゆる夕月夜いつるを人にしられきり鬼

右

釋 阿

月をおもふふかき心を照し見よをはらん雲も我まとはする
左こそやさしく侍。右側のあさましきふしなれは。かた
ひき申へきふしなかり。

廿九番

左持

季經卿

萩の葉に風のおとせぬゆふされば秋ともなれは淋しかり鳧

右

賢 清

としにありて稀にたのむる一夜たに猶更にけり星あひの空
萩の夕風も。珍しからすなからやさしく。としに一夜の
七夕も。ふるきふしなからとかなし。仍持と申侍りぬ。

卅番

左

隆信朝臣

萩のをとに鹿の音そへて秋萩のかせより外にとふ人もなし

右勝

有家朝臣

萩の葉のそよきのことくなければとも露こそおつれ秋の初風
左右の萩。おなしふしなるを。右の下句猶やさしき様な
りとして爲勝。

卅一番

左持

隆信朝臣

昔みし跡とも見えすあれはてゝうつらなく野や深草の里

右

有家朝臣

秋は來ぬ鹿は尾上に聲たてつ夜半のね覺をとふ人はなし
左右ともに。やさしくおかしきさまに侍れは。いつれを
とりわくへきにあらねは。宜爲勝持。

卅二番

左勝

顯 昭

右

有家朝臣

波かくる清見か關の岩枕こゝにて月はみるへかりけり
宿ことにいそきそあかすから衣空吹かせや夜さむなるらん
から衣空吹かせ。たくみにつきて侍れとも。清見か關の
岩枕こゝにて月はみるへかりけりと。みることに云し
りて。やさしくおかしく侍れは。尤爲勝。

卅三番

左

定家朝臣

里はあれて時そともなき庭のおもに本あらの小萩花咲に鳧

右勝

家隆朝臣

あり明の月待やとの袖の上に人たのめなるよひのいな妻
左とかなくつかうまつり出て侍るを。右有明の月まつ
やとの袖の上に人たのめなるとをきて。よひの稻妻と
いひはてたる。誠にやさしくおかしき姿詞にて侍れは。

きたにおよはず。以右爲勝。

卅四番

左

定家朝臣

たれも聞さそやならひの秋の夜といひても悲しきを鹿の聲

右勝

家隆朝臣

秋は今いくかもあらし夕くれのなかめは残せ峯のこからし
左三句きゝにくき様なりとこそ。人もみ給らめ。右いと
やさしく侍る。爲勝。

卅五番

左勝

顯 昭

打辭て同し野へには出つれとかさしの花はをのかさまノ

右 禪 性

やよいかに招きよせては花薄こそそ共なく露のこほるゝ
左は今少し勝と云へきさまにや侍らん。

廿六番

左持 顯 昭

秋の夜は月と草葉の白露とひかりくらへにいつれかたまし
右 禪 性

秋といへはいつしか夜こそ長くなれぬに明しは昨日と思ふに
左右ともに以。たはふれ歌の姿なるへし。光くらへも優
の詞ならず。なかくなれも俗にちかし。共以不_レ可_レ有_レ異歟。

廿七番

左持 顯 昭

くれぬれと旅ゆく人や此頃は月にうかれてたゝよひの關
右 禪 性

あなし吹なたの汐路に月さえて村雲はしる有明の空
これも共に義勢ありと。ことゝしく名所ともひき出
されて侍れは。爲_レ持歟。

廿八番

左 覺 延

けふのみとおもはぬ秋のくれにたに心をそめぬ袖の色かは
右勝 勝 蓮

ねぬ夜のみつもりの浦の里人や月に衣をうちあかすらん
右歌宜おかしく侍るめり。

廿九番

左持 生 蓮

ことはりや秋の初風さむけきにかさね染けむ天の羽ころも
右 寂 蓮

萩の葉にまちかき夜半の風よりも雲にさえたる初鴈の聲
雲にさえたる初鴈の聲。きゝ高く鳴まさりて侍るを。あ
まのほころもひき出したれは。よろしき持とこそ仰出
され侍りき。

四十番 冬

左 御 作

ふる雪をいとふとよそに見えしとて山分衣はらはてそゆく
右勝 入道左大臣

冬かれの野へのけしきを詠むれは秋は哀のはしめ也けり
左よりしく侍れとも。右ことにやさしければ。此番いか
にも右勝にて侍るへきなりと。被_二仰出_一畢。

四十一番

左 隆房卿

冬かれの野へのけしきを詠むれは秋みし花の傍もなし
右勝 公繼卿

冬枯は草木のみかは袖さへに物おもふ身はうちしくれつゝ
右歌よろし。左は上句さなから入道左大臣の歌なり。無
念とて負畢。

四十二番

左 兼宗卿

たつねきてとふ人もなき庭の雪にあはれなりける鳥の跡哉
右勝 釋 阿

ひとりみる池の氷にすむ月のやかて袖にもうつりぬるかな
左よろしきを。右もとかなし勝なるへしなと。ひとく

かたひき申されて。被_レ免_二勝字_一畢。

四十三番

左勝

季經卿

いもせやま中は吉野の川の瀬にむすふ氷や契なるらん

右

賢清

雪をとふ人有けりとみゆはかり我とや庭に跡をつけまし

我とや庭に跡をつけまし。雪の興尤ふかく。おもしろ

く侍るを。いもせやま中はよし野のと置いて。結ふ氷やち

きりなるらんと侍ること。たくひなくおかしく侍ると。

各申あひて。勝になされ侍りき。

四十四番

左持

隆信朝臣

冬きぬとしるしはかりを見せかほに氷れはとくる山河の水

右

有家朝臣

水鳥のうは毛の霜を打はらふは風ややかてさえまさるらん

左右共以無_二得失_一可_レ爲_レ持之旨被_レ申。いかゝ侍るへか

りつらんとこそ見給ふれ。

四十五番

左持

定家朝臣

あらたまの年の幾とせ暮ぬらんおもふ思ひの面かはりせて

右

家隆朝臣

みし秋の月より後もなくさます雪の朝のおはすての山

左あらたまのとしのいくとせとつゝけかさねて。おも

ふ思ひの面かはりせぬ。かさね句さしも咎あるへきにて

は侍らす。一の姿にては侍れとも。かしこまじやと申出

し侍しを。何のとかゝ有へからん。やさしくこそ侍れと。

口々に申され侍りき。右もおかしく見え侍れは。又只爲_レ持。

四十六番

左勝

顯昭

水鳥の青葉のやまは名のみして雪にそ白き朝明の嶺

右

禪性

浮世にはきえもはてなて埋火の下にこかれて何いけるらん

左は長ありて高情なりと見え侍り。右は詞碎て下劣な

りと聞ゆ。しかあれはさきの青葉の山たちのほり侍る

へし。

四十七番

左勝

覺延

秋はすき冬はたち來る道芝に露と霜とや置かはるらん

右

勝蓮

數ならぬ我身のみそとおもひしに山路も雪にふりやはつ覽

右の歌。下句こそかへす。心得かたく見え侍る。山路

の雪のふりはてにけるとやあるへからん。山路も雪に

ふりやはつらん。みしらぬこゝちし侍れは。さしてすく

れたるとり所は侍らねとも。以_レ難負に定むれは。難な

きによりて。左勝侍りき。

四十八番

左

生蓮

霜さひてをとるへはつる翁草何をまちてか猶いけるらん

右勝

寂蓮

山風の音さへうとくなりけり松をへたつる峯のしら雪

みねのしら雪。何とやらんすへかねたる詞にては侍れ

とも。松をへたつる峯やさしく侍れは。以_レ右爲_レ勝。

四十九番 雜

左勝 釋 阿

君か代は高野の山の岩の室あけん朝の法にあふまて

右

隆信朝臣

出る日に光さしそふ君か代は千よへむこともかきりなき哉
右出る日に光をならへる御代のけしきも。いと目出度つ
からまつれるを。勝になさるへきよし申出侍しかば。左
慈尊之出世。三會之下曉。於_レ身意_{（誓イ）}。祝_レ清何事過_レ之。
高野之岩廟。尤可_レ被_ニ賞翫_一之旨。再三被_ニ仰出_一。愚蒙之
幸歟。かしこくそかひくしく。岩の室つかうまつり出
て侍けると。一惶一喜。有_レ興有_レ感。尤面目とこそおほ
え侍しか。

五十番

左持

有家朝臣

照すらん道かはるとも萬代に法のあるしとみもすその月

右

定家朝臣

君か代は高野の山にすむ月の待らん空に光そふまて
左右ともに。やさしく優美に見え侍るを。右高野又可_レ
被_ニ賞翫_一之旨。左方作者申侍しを。今愚詠につかうま
つり出て侍りつるに。人ませし侍らす。さのみ高野勝な
らむもけしからすと。あらそひ申出て侍りしかは。不便
なりとこそ仰侍しかとも。なすらへて持に申定侍ぬ。老
耄の是非をわきまへぬにや。相似侍らんと覺てこそ侍
りし。

五十一番

左勝

御 作

右

入道左大臣

なからへて世に住かひはなけれとも憂にかへたる命也けり
人なみに家をは出ぬさても猶まことの道をしらて社あらめ
左右共以。やさしくいみしき姿に見え侍れとも。うきに
かへたる命の。わりなくやさしきと申侍りき。

五十二番

左持

兼宗卿

世をすつる心は猶もなかりけり憂をうしとは思ひしれとも

右

釋 阿

戀しさもかなしき中に悲しきはあはれをかけし白川の浪
左うきをうしとはおもひしれともとつかうまつれる。
いとやさしく侍れは。勝に定め申さんとつかうまつれ
るを。かなしき中に悲しきはあはれをかけし白河のな
みも。こゝろとまりておかしくこそと。面々に申侍し
かは。さらば持にまれなされ侍れかしと申侍しは。深
山木ののをれかふしのいやしきもしらぬは。いかにひ
かむなるへきと。能因法師かつかうまつれりしにおも
ひあはせられ。おかしくや侍らんとこそ。おほえ侍りし
か。

五十三番

左持

賢 清

四十迄おほくの年はつもれとも猶數ならぬ身をいかゝせん

右

隆信朝臣

いかにこは背きもやらぬ世成らむ人やは惜む身やはすゝまぬ
左はなひやかに。童部のかふし句よりなたらかにして。

いとやさしく侍り。右はこまやかにしていひしれり。得失いまた見わき侍らす。紅葉の色にまとひ侍りぬれは。暫爲_レ持。

五十四番

左持

有家朝臣

大かたは世をも恨みし蟹のかるもにすむ虫の名こそつらけれ

右

定家朝臣

明日しらぬけふの命のくるまに此世をのみ先なく哉
左右共やさしく。よろしき様にやつかうまつれり。乍_レ去
さのみ勝負なきも。よしあししらぬに似たり。しるて人
人申されよやと申侍しかとも。いづれもやさしく侍る
有_レ興にこそと申されて。感_二兩方之_一。無_二一決之_一難。

五十五番

左

家隆朝臣

先たてし心もはてはあしひきの山のあなたにきゆる 白雲

右勝

顯昭

しはしたに嬉しき袖につまはや憂におつるもおなし泪を
各左右之雌雄いかにと尋申侍しかは。何もいとおかし
くいひしりて。優美なりと感申されしかは愚老申てき。
さのみ迷_二是非之理勝負之_一定。後見もけしからすこそ。
此つかひいかにも。毛を吹て疵をもとめ出侍らんと申侍
りしかは。尤しかるへしと仰侍りしかは。左はいひしれ
る姿いとやさしく侍れとも。右もとかなく優美なり。さ
りなから。左山家に心をおもひ入て侍るは。よしあるさ
まなるを。やかて心かはりせり。右は一筋にうきを歎
て。同姿をうれしなきのなみたもるさま。おかしく思は

れたるは。山のあなたに入てこゝろかはりせるよりも。
今すこし切にこそ侍らめと申侍しかは。けにもよく毛
を吹まはしてもとめ出たりと仰有しかは。以_レ右爲_レ勝。

五十六番

左

公繼卿

數ならてありへし人をもとかしと見しよりも猶憂身也けり

右勝

禪性

何事にいままで捨ぬうき世そと我心にもわれそとひつる
左も心有て聞え侍れとも。右の我こゝろにもわれを問
つるは。けにもさる事侍りとおかしく。道理きはまりて
きこえ侍れは。以_レ右爲_レ勝。

五十七番

左

覺延

うき世そと思ひしらすは中々にいとはぬ身をも恨さらまし

右勝

勝蓮

いとひてもかひなかりけり苔の袖そむる心のいつか有へき
左右共に。世をはのかれなから心の道に深く入らぬ由。
同様なから。苔の袖そむる心のつゝけたるは。今すこし
たちまさりて。歌めきたるにや。

五十八番

左勝

隆房卿

恨めしの我身のさまや苔の袖かりそめにたに思ひたゝぬは

右

季經卿

身をもなと思ふ心のなかる覽後の世をさていかにせよとて
右やさしく侍りなから。左苔の袖かりそめにたに思た
たゝぬはとつゝける句つゝき。やすらかに侍れは。左の

仙洞十人歌合 正治二年九月十二日

勝と申定き。
五十九番

左持

賢 清

徒にはかなく過る月日かな後の世までもうかるへき身を

右

寂 蓮

跡たえて花はかりさく山里に鳥の音さへもとたえにけり

左は述懐の色ふかく。右はあらぬさまの山家のけしき。

述懐になされたるも。かすかにこゝろすみければ。準て

可_レ爲_レ持之旨。各被_レ申侍しを。右方の作者。此歌は一す

ちに山家をつかうまつり。述懐の題にそむけり。負にな

されよとや申請侍しかは。さらはさにてもと申侍しを。

六十番

左持

生 蓮

右

寂 蓮

長らへていけるをいかにもとかまし浮身の程をよそに思は

うしとのみ厭ふさへ社哀なれあるものとやは身を思ふへき

此番。左右ともに以。殊やさしくつかふまつれり。宜き

持と被_レ定歟。

右正治二年二月五日御室撰歌合以流布印本校合

題

神祇

若草

落花

菖蒲

時鳥

浦月

山嵐

曉雪

水鳥

庭松

作者

女房

内大臣

隆信朝臣

家隆朝臣

前座主

講師

讀者

判者

定家

寂蓮

一番

神祇

左勝

左近少將藤原定家

君をまもる天照神のしるしあれば光さしそふ秋のよの月

右

みぬ世まで心そすめる神風やみもすそ川の曉の聲

左頗有所おもふにや。右末の聲字。似_レ無_ニ其要。可_レ爲_ニ

左勝一歟。

上總介藤原家隆

二番

左勝

今も又さしそふ千代の朝日まで天照神の光なるへし

侍從藤原雅經

左勝

右

沙彌寂蓮

思ふよりいともかしこし神風やみもすそ川の廣き流は

左心あるさまなり。右ひろきなかれ。其故なくや。

三番

左持

左大臣

神風や御裳濯川にちきり置し流のすゑは北の藤なみ

右

内大臣

かけまくもみれは畏こし石清水きみか流のひとつすへらき

左右勝劣難定歟。

四番

左勝

前座主

君を祈る心の色を人とはゝ糺の宮のあけの玉垣

右

散位藤原隆信

兼てより和歌の浦路に跡たれて君をや待し玉つ嶋姫

右の歌。させる難なくはへれと。左は今少し心もふかく。

めつらしきさまにみえ侍り。

五番

左持

女房

日影にもむかし忘れす神風やみもすそ川のさゝ浪の聲

右

權大納言忠良

雲のうへにあまてる影を移しても猶もますみの鏡なり鬼

左天の岩戸のむかし。おもひ出られて。聞えて「此三字

除くへき歟」みもすそ川のさゝ波。そのよせ優に聞えは

へり。右もまたおもふ心ありて。あしからす侍り。

六番

左

内大臣

若草

行末の秋の哀をみせかほにうら緑なるさいたつま哉

右勝

權大納言

萌出る艸葉はあきの色なれと詠に秋の花はこもれる

いづれも秋をかけてよめるによりて。左はみとりにてあきを見せんこと。いかゝ侍らん。

七番

左持

左大臣

春かせの吹にし日よりみよしのゝゆきまの艸そ色かはり行

右

前座主

霜かれの野へのあしてのすみかきを色とり初る春の若草

左はむけにおもへる所なく。右はたはふれことのやうにや侍らん。

八番

左

家隆朝臣

春はまた人めはかるゝ山里のけしきもしらぬ庭の若草

右勝

雅經

高砂のをのへの雪はきえやらて先みとりなる野への一しほ

右はみやまには松の雪たにといへる歌。思ひそへられて。心のこもれるさまに見え侍り。尤可爲勝歟。

九番

左勝

隆信朝臣

秋の色は霧のまかきにしほれきて霞にめくむ萩の焼原

右

寂蓮

春雨にひはりの床も顯れてくもるはかりの見えぬ頃哉

右の歌。若艸むけに荒涼にはへり。左もさせる要なくはみえ侍れと。右には勝りてや侍らん。

十番

左勝

女房

春きても積りし雪は消やられて村々あをし野への若草

右

定家朝臣

うち驛き春のみ空も縁にて風にしらるゝ野への若草

右もあしからねと。左の村々あをしといへる。めつらしく侍り。

十一番

左

家隆朝臣

あすも猶きえすはありとも櫻花降たにそはん庭の雪かは

右勝

女房

み吉野は春のあらしやわたるらん道もさりあへす花の白雪

左右ともに古歌をおもひてよめる中に。右はさかひに

十二番

左持

寂蓮

麓をそかへりては今尋ぬへき風に花咲みよしのゝ山

右

前座主

散にけり心も空に櫻かり花にはる風やかたをの鷹

左歌風に花さくといへる。さたかに心えかたくや。逐々風

潜開ともいひ。十日花開ともいへる。華は風にひらくる

物なれは。たゝ麓のさくら風の風にひらけたるとも心え

十三番

左持

定家朝臣

せる難はなかるへし。持なとにや。

我きつる方にも見えす櫻はな散のまかひの春の山風

右

權大納言

みよしのゝ花の白ゆき降まゝに梢の雲を拂ふやま風

左右ともによろしくはへり。

十四番

左

左大臣

あたらよのなかめし花に風吹は月を残して晴る白雲

右勝

雅經

花さそふ名残を雲に吹とめてしはしは匂へ春の山風

左歌の月。させる要なくや。右心こと葉めつらしく聞え侍り。

十五番

左勝

隆信朝臣

散さしと惜し花はそれなから見るになくさむ庭の面哉

右

内大臣

ちりつもる花を梢に吹よせよつらき春風おもひかへさん

左させる咎なく見え侍り。右こそゑに吹よせよといひかたくや。

十六番

左勝

定家朝臣

手なれつゝすゝむ岩ねの菖蒲草けふは枕に又や結はん

右

女房

夕風は花橋にかほりきてのきはの菖蒲露も定めす

左心あるさまに聞え侍り。右はむすひ句とはくしくや。

十七番

左勝

家隆朝臣

かりそめの軒の菖蒲の時しあれば五月の空に匂ひとそなる

右

左大臣

けふといへは袖も枕もあやめ草かけてそ結ふななき契を

左歌よろしくこそ見えはへれ。右はさせることなかるへし。

十八番

左勝

權大納言

長きねを久しき宿にふきそへて菖蒲や君か千代にひかれん

右

内大臣

千年へん宿のしるしに菖蒲草今一ひさしふきそへんとや

近きよに。ひとひさしきすといふ歌侍るにや。かれは草庵のこゝろにて侍るやうに見ゆこ（こ字衍歟）れはさも

と聞ゆ。これは久しきよしにや。けにともきこえず。左させることなけれとも。右にはまさり侍らん。

十九番

左持

寂蓮

故郷の隅もかはらて草枕むすふはけふの菖蒲成けり

右

雅經

けふこゝにむすふ淀野のあやめ草是もなれぬる枕成けり

左右ともに。させる事なしといへとも。又させる難もし。

廿番

左持

前座主

月影を五月のものになかむれは菖蒲そ軒の光成ける

右

隆信朝臣

涼しくも袂に通ふ匂ひ哉軒のあやめを風や吹らん

左歌あやめをひかりといはんこと。あまりにやはへらん。右はさせる咎なきにや。なすらへて可レ爲レ持。

廿一番 郭公

左

前座主

さり共とこゝにやまたん時鳥木のまろとのゝたそかれの聲

右勝

定家朝臣

待あかすきよの中山なか／＼に一聲つらきほとゝきすかな

左はちか比少々聞えはへる風情なれとも。これはつゝきあしからす見え侍り。又未聞時鳥のうたは。ふるき歌

合には。本意なきやうに沙汰はへるにや。右すかた詞いひしりたるさまに聞ゆ。

廿二番

左

寂蓮

尋いる山路しくれて時鳥ひと聲こゆる峯の白雲

右勝

女房

時鳥いつちいくたのもりならん聲の名残を雲にのこして

一こゑこゆる。やうありけにてやうもなきにや。いつちいくたのなと侍るは。あしからす社きこえはへれ。

廿三番

左

左大臣

をちかへり軒はにきなけ時鳥花橋に雨そゝくなり

右勝

權大納言

時鳥また宵の間の一聲に名残の空は東雲のつき

左歌常のことにはへり。右歌なく一こゑにといへる歌おもひ出られて。おかしくこそはへれ。

廿四番

左勝

家隆朝臣

尋こししらぬ旅ねは里なれて山郭公一聲そきく

右

内大臣

聞てきといさいつはりに時鳥初音になるゝ人にいはれむ

左あしからす聞え侍り。右はつねにいかゝなれはへる

へき。すてに短慮迷て見え侍るなり。

廿五番

左勝

隆信朝臣

けふもなを山路くれなは時鳥いかにたつねん一聲の空

右

雅經

尋こし垣ねわたりの時鳥花橋に聲うつるらん

左させる難なきにや。右かきねわたり。よろしく聞えず

やはへらん。

廿六番

左

女房

秋の月浪路も遠く影さえて心さへにや須磨の浦風

右勝

前座主

消はてぬ須磨のもしほの夕煙月にうれしき秋のうら風

すまのもしほの夕けふり。心こと葉殊宜侍り。左のうら

かせには立まさるへくや。

廿七番

左勝

權大納言

よさの浦や波に有明の影さえて月の氷をみかくまつ風

右

定家朝臣

淡路嶋月のかけもてゆふたすきかけてかさせるすまの浦浪

廿八番

左持

寂蓮

清見潟我こゝろより關すへていくよの月を三保のうら波

右

左大臣

月影や波をむすはぬうす氷しきつのうらによする舟人

左右ともに。いくほと勝劣なくや。

廿九番

左勝

家隆朝臣

誰里に山のはまてと詠むらんあかしのうらに有明の月

右

雅經

哀なをあかしのうらの秋の月すめともなれる波のうへ哉

左歌心こと葉さかひにいれるさまなり。殊よろしくこ

そはへれ。右無二指事。

三十番

左

内大臣

田子の浦晝にかはらて月すめは夢みるめなしねの蜚はら

右勝

隆信朝臣

外としもあかしの名をはしらかし月に心を須磨の浦人

海人をあまはらとは申てんや。夢みるめなしも。きゝに

くゝ侍り。右無二異儀。

三十一番

左持

女房

薄もみち猶色まされ三室山あらしにつたふ秋の時雨に

右

左大臣

うち時雨よもの木のはは色つきて深山の嵐秋を告也

左よろしくはへり。右もさせる咎なくは。持なとにや。

三十二番

左勝

雅經

吹まよふ四もの嵐の秋のこゑしくるともなき山廻り哉

右

定家朝臣

秋のあらし一葉も惜め三室山ゆるす時雨の染盡すまで

左歌ことにおかしくこそ聞えはへれ。右の歌ゆるすし

くれ。あまり心こもりて。愚意難_レ及。

三十三番

左勝

前座主

秋は又花に紅葉をそめかへて嵐にこゆるしかの山越

右

内大臣

心からつと紅葉をちらしはてゝ梢さひしき峯の嵐そ

左花にもみちを。よろしく侍り。右歌一篇見るへき所な

きうへに。中五文字ことたらすはへり。可_レ爲_二左勝_一。

三十四番

左持

權大納言

立田山梢のあらし秋くれてかはらぬ松に聲しくる也

右

寂蓮

嵐をや峯のこのははさそふらし散は枕に音聞ゆなり

いづれもあしからず。持なとにや。

三十五番

左勝

家隆朝臣

吹しほる峯の草木のいかならん袖たにたへぬ秋の嵐に

右

隆信朝臣

山陰や音しつかなる嵐こそはけしきよりも身にはしみけれ

あらしをしつかなるとよめる。證歌やはへらん。はるの

かせなとやとおほえはへるとよ。

三十六番

左勝

權大納言

ひましらむ窓のあけかた詠れは横雲さゆる峯の初雪

右

内大臣

朝戸あけてとをちの里を詠れは雪のしたにそ鳥も鳴なる

左は優に侍り。右歌とをちの里なと。眺望むねとして聞

えはへるほとにとりもなくなるこそ。上下ことにたか

ひてきこえはへれ。

三十七番

左勝

家隆朝臣

鐘の音に今や明ぬと詠むれは猶雲深し峯の白雪

右

左大臣

終夜かきなる雲のたえまより月をむかふる峯の白雪

ななくも深しなといへる。ことによりしくこそみえは

へれ。

三十八番

左勝

定家朝臣

明ぬるか梢をれふす松か根のもとより白き雪の山端

右

女房

なかむれは曇もやらす風さえて雪より空の有明の月

左まつかねのもとよりなと。おもしろきさまに聞ゆ。右

は難もなく侍れと。なを左めつらしくや。

三十九番

左

雅經

月は今くもりはてぬと詠れは雪のひかりも有明の空

右勝

前座主

秋よりも冬は名残そまさりける月入ぬれは雪の有明

くもり果ぬるや。あまりに侍らん。入ぬれは雪の有明。
めつらしきさまなり。

四十番

左持

寂蓮

降雪に柴の庵もうつもれて明ゆく鐘の聲の村消

右

隆信朝臣

まち／＼てくもるうれしき初雪に心をわくる有明の月

雪に鐘のこゑのむらきえんこと。おほつかなくはへれ
と。めつらしきさまなり。こゝろをわくるなどは。常の
ことにはへれと。とかなければ持なとにや。

四十一番

左

女房

水鳥

月さゆるゑしまか磯も波かけてこをおもふ鳩の有明

右勝

家隆朝臣

いて／＼くる衣手寒き河かせに思ひかねたるをしのこゑ／＼

右の五文字そ。なにとなきやうにおほえはへれと。妹か
りゆけはなとおもひいてられて。よろしくきこゆ。勝ば
へらん。

四十二番

左持

前座主

鴨のゐるゑしまか磯のおきの石は浪より外のすみか成けり

右

權大納言

浪のよる鳩のうきすは風さえてむすふ氷やとまり成らん

左右同科にや。

四十三番

左

左大臣

さゆる夜にむれゐる鳥の音なれや氷のうへに浪を聞哉

右勝

定家朝臣

薄氷ゐるをし鳥のいろ／＼にうち出る波の花そうつろふ

右めつらしきさまに侍り。

四十四番

左勝

寂蓮

波まくら氷にさはくをし鳥やおもひ定ぬうき寝成らん

右

内大臣

羽うちするあたりにたつる小波やかて下毛に移すをし鳥

羽うちするといへる。もしたけと侍るも。みなきゝよか
らす。左初七句(五字イ)つゝきそ。いかにおほえはへれと。
いかてか右にはまさらてはへらん。

四十五番

左持

雅經

あしかもの浮寝よいかに波まくらたのむ入江のまのゝ浦風

右

隆信朝臣

さゆる夜は芦の葉隠れうき寝して朝日にいつるあちの村鳥

いつれもあしからすばへり。

四十六番

左持

内大臣

庭松
二葉よりはこやの山のみきりなる玉松かえは光さしそふ

右

雅經

誰ゆへに詠めわひぬる夕とて己やととふ軒のまつ風
右心すかたあしからす侍り。左結句にいひきりたるや
うにはへれと。玉まつかえ。萬葉集をおもへるなるへ
し。これもよろしくはへり。

四十七番

左持

左大臣

庭の石もいはとなるへき君か代に生そふ松の種を籠れる
右 隆信朝臣

聲たつる山へは遠き庭までも萬代かけて松かせそふく
山邊はとをきといへる。よろしくもきこえず。庭の石も
のに勝へき様もせぬなるへし。

四十八番

左持

寂蓮

あしたつの年ふる庭をなかむれは軒をこめたる松かせそ吹
右 定家朝臣

枝かはす玉のみきりの松の風いく千代君に契りそふらん
左はやうありけに侍れと。又させることなくや。右何に
枝をかはすにか。いつれまさと申かたし。

四十九番

左

家隆朝臣

萬代と玉しく庭の松かえを春の光ものとかにそさす
右 前座主

千代經へき光そひゆくしとて玉敷庭に松の村立
左萬代と玉敷といへる。つゝきてもおほえす。又結ひ句
よろしからす。右歌は難なく侍り。

五十番

左

女房

是もさす久しき宿のしるしとて軒はにすくる松の下風
右勝 權大納言
河竹のなかれ久しき雲井迄ちよ吹かはせ宿の松風
千代吹かはせよろしく侍り。

御子左大納言爲遠卿以自筆之本一書以寫之了。

至徳二年十一月七日

左少將藤原雅俊

右正治二年九月十二日仙洞十人歌合以奈佐勝臯本校合

群書類從卷第百九十一

和歌部四十六歌合十二

老若五十首歌合建仁元年二月

左方老

右方若

權大納言忠良

女房後鳥羽院

前權僧正慈圓

左大臣良經

左近權少將定家

宮内局

上總介家隆

越前

沙彌寂蓮

左近少將雅經

題

春 夏 秋 冬 雜 各十首

一番 春

左持

權大納言忠良

よしの山明ゆくみねのしら雲やけさ立そむる春の初花

右

女房

春はいま冬をこめてや立ぬらん霞にもるゝ峯の松かせ

二番

左持

前權僧正慈圓

君か代の春のためしは佳吉の松にかゝれる霞成けり

右

左大臣

けさよりは都の山もかすみぬと櫻につけよ春の初かせ

左

定家朝臣

にほのうみやけふよりはるに相坂の山もかすみて浦風ぞ吹

右勝

宮内卿

かきくらしなをふる里の雪のうちに跡社みえね春は來に鬼

四番

左勝

家隆朝臣

天原霞てかへるあら玉のとしこそ春のはしめ成けれ

右

越前

萬代を光にこめてあさ日山のとかに霞む初春の空

五番

左

沙彌寂蓮

音羽山雪ふるそらのかすめるやこそとしの相坂の關

右勝

雅經

武隈の松にや音を立そめてけさはみやこの春の初かせ

六番

左

權大納言

朝ほらけ霞にあまる鶯の聲の匂ひは梅のしたかせ

右勝

左大臣

いにしへの子日の御ゆき跡しあればふりぬる松や君を待覽

七番

左勝

前權僧正

うくひすのはつねの松をひくのへに春をかされて立霞かな

右

宮内卿

見渡せは冬たに霞む住よしの遠さとをのゝ春の此頃

八番

左

定家

しろたへの袖かと思ふわかな摘みかきのはらの梅の初花

右勝

越前

春たてはきしうつ波は長閑にて霞そかゝるすみよしの松

九番

左勝

家隆

氷とく春の山かせ吹ぬらしいはねをとむる瀧のふるころ

右

雅經

雪きえぬひらやまおろし猶さえて霞に氷るしかの浦かせ

十番

左

寂蓮

谷ふかき霞の窓は明やらて雲にいさよふうくひすのころ

右勝

女房

朝かすみたてる山邊そなをさゆるこのめも春の雪は降つゝ

十一番

左持

權大納言

埋もれて雪の下なる若なこそうき身をつみて袖はぬれけれ

右

宮内卿

難波かた霞の間よりほのみえて波にかけろふ春の三か月

左勝

前權僧正

神かせやかけても春に成にけり波につのくむいせの濱おき

右

越前

八千世迄君かねのひをまつなれば野へにそ多く引残しつる

十三番

左

定家

今はとて鶯さそひ吹かせに霞も匂ふ春のあけほの

右勝

雅經

鶯の聲やはかすむ春とても月そ朧の在明のそら

十四番

左

家隆

春たちて雪は花とそ散まよふわかな摘野も道まよふかに

右勝

女房

和田の原遠のかすみの春の色にやそ嶋かけて歸るかりかね

十五番

左

寂蓮

ぬしは誰梅の立枝はしらねとも袖になれたる春かせそ吹

右勝

左大臣

冬かれの梢に残る去年の雪はことしの花の初め成けり

十六番

左勝

權大納言

山のはもいつくと見えぬ大そらの霞にやとる春のよの月

右

越前

うくひすの初音はきゝつ我宿の花こそ今は立居またるれ
十七番

左勝

前權僧正

朝霞梅の匂ひを袖にしめてたなひく山に春かせそふく

右

雅經

花はなをかせまつほともある物を枝にたまらぬ春の淡雪
十八番

左

定家

心あてにわくともわかし梅花散かふ里の春の淡ゆき

右勝

女房

むさしのゝきゝすよいかに子を思ふ煙の暗に聲迷ふなり
十九番

左

家隆

花の香も谷の戸出る山かせにあくかれそむる鶯のこゑ
右勝

左大臣

かすみよりつゝみかねたる梅かかの臘月夜に誰さそふらむ
廿番

左勝

寂蓮

山ふかくなを分いれは尋つる花はみやこのこすゑなりけり

右

宮内卿

鶯をさそひていつる春かせも花を思へはのこるうらみを
廿一番

左勝

權大納言

木のもとに旅ね夜ふかき苔の上の花の枕に春かせそ吹
右

雅經

さらすとして匂はぬ梅のあたりかは風もあやなし春のよの暗

廿二番

左

前權僧正

けふ迄はいとはしからぬけしきかな花待みねに春の山かせ

右勝

女房

都人そこともしらす打むれて花に宿かる志賀の山越
右勝

左勝

定家

梓弓いそへの小松春といへはかはらぬ色も色まさりけり

右

左大臣

かつらきや高間の山の雪まより空にそ霞む鶯の聲
廿四番

左勝

家隆

百敷の大宮人の袖の香にかさねて匂へのへの梅かえ

右

宮内卿

一しほも色やはまさる春かすみかすめるほと松のむら立
廿五番

左勝(持イ)

寂蓮

咲ぬれは雲と雪とに埋れて花にはうとしみよしの山

右

越前

梅かえを窓吹かせや過つらん春のねさめにかほる手枕
廿六番

左

權大納言

小初瀬の梢の空の花盛雲よりかほる山おろしのかせ

右勝

女房

花匂ふ霞のそらななかわれはおほろけならぬ春の夜の月
廿七番

左勝

寂蓮

花匂ふ霞のそらななかわれはおほろけならぬ春の夜の月

右勝

寂蓮

花匂ふ霞のそらななかわれはおほろけならぬ春の夜の月

左勝

寂蓮

左

前權僧正

(の殿歌)

人のすむやまとははなの國なれやみよしのゝ山小初せ山

右勝

左大臣

明石湯かすみてかへる鴈かねも嶋かくれゆく春のあけほの

廿八番

左持

定家

もゝちとり聲ものとかに霞む日に花とはしるし四方の白雲

右

宮内卿

風わたる柳のいとに春かけてむすほゝれたるうくひすの聲

廿九番

左勝

家隆

ことつてん詠もたえぬかへる鴈道行ふりの春雨のそら

右

越前

あさみとり糸よりかくる青柳の梢を結ふ遠の山かせ

卅番

左勝

寂蓮

山のはもうす紅の花さかり雲にまかはぬ春の明ほの

右

雅經

心あらん人ともいはし津の國の難波の春の明ほのゝそら

卅一番

左

權大納言

浅茅原はる雨すかるわか葉より緑をうつす玉そこほるゝ

右勝

左大臣

梓弓おして春雨をやまたになはしる水は今や引らむ

卅二番

左

前權僧正

末の松山も霞のたえ間より花の浪こす春は來にけり

右

宮内卿

袖ひちてあしたのわたにつむせりをしたひてあかる薄氷哉

卅三番

左勝

定家

千世までの大宮人のかさしとや雲ゐの櫻匂ひそめけん

右

越前

春の色またあさしとやのへみれはつのくみやらぬ萩の燒原

卅四番

左持

家隆

花見つゝけふも暮しづ足曳の山鳥のをのななき日影に

右

雅經

雪やこれ雲やあらぬとうつりきて待えたる花に春かせそ吹

卅五番

左

寂蓮

ふけぬなりさてさは人もとはしとや朧月夜の花にまかせて

右勝

女房

あたら夜のまやのあまりになかむれは櫻にくもる有明の月

卅六番

左

權大納言

かへる鴈雲のいくへをかき分て行末とをく思ひ立らむ

右勝

宮内卿

春雨のふるとは空に見えねともさすかにきけは軒の玉水

卅七番

左

前權僧正

面影や花より後も残るらむめかれぬものは心なりけり

右勝

越前

故郷にいかなる花の匂ふらむよしの^{を捨てイ}春にかへるかりかね
卅八番

左

定家

春かすみかさなる山を尋ねとも都にしかし花の錦は
右勝

雅經

色は雲匂ひはかせに成はて^{にけリイ}をのれともなき山さくらかな
卅九番

左勝

家隆

櫻花夢かうつゝかしら雲の絶てつれなき^{ねイ}峯のはるかせ
右

女房

花故に志賀のはな園けふみれはむかしをかけて春風そふく
四十番

左

寂蓮

水くきの跡をや人に忍ふらむ霞の袖につゝむかりかね
右勝

左大臣

いつまてか雲を雲とて詠けむ櫻たなひくみよしの^ミ山
四十一番

左勝

權大納言

折にあへはこれもさすかに哀也小田のかはつの夕暮の聲
右

越前

此春もよもの山へにあくかれぬ花のあるしに宿をまかせて
四十二番

左持

前權僧正

をのか波に同じ末葉そしほれぬる藤咲たこのうらめしのよや
右

雅經

尋きて花にくらせる木の間より待としもなき山のはの月
四十三番

左

定家

春やいかに月も在明に霞つゝ梢の花にはのしらゆき
右勝

女房

わきてこのよし野の花の惜かななへてそつらき春の山かせ
四十四番

左持

家隆

あたら夜の哀はしるやよふこ鳥月と花との在明のそら
右

右

左大臣

かせふけはをのか雲よりをのか雪を散してみする山櫻かな
四十五番

左持

寂蓮

暮て行春のみなとはしられとも霞に落るうちのは舟
右

右

宮内卿

花は^{モイ}散惜みし人も今はとて思ひ立ぬる春の木のもと
四十六番

左

權大納言

詠れは哀もけふに限りいまはとかすむ春のゆふくれ
右勝

雅經

名残までおもふこゝろやのこるらむ花より後の春の暮かた
四十七番

左持

前權僧正

はつせ山なかめそかねてつきぬへき春の別れの鐘を残して
右

女房

思ふ共あけなむ空はいかゝせむ夜の間はおしめ春つくる鐘

四十八番

左

定家

としのうちの二月三月程もなくなれても馴ぬ花のおもかけ

右勝

左大臣

花の色は彌生の空に移ひて月そつれなき有明のやま

四十九番

左持

家隆

花散て後さへやすき詠かはいつの人まに春のくるらむ

右

宮内卿

おしむなり井手のわたりの里人は蛙に春の暮をまかせて

五十番

左勝

寂蓮

晴やらぬ眺めは春の物なれと時はやよひのくるゝけふしも

右

越前

よしの河瀧つ岩ねのふちのはな手折てゆかん波はかくとも

五十一番

夏

左

權大納言

櫻色の春の袂を立かへてふたゝひ花の名残をそおもふ

右勝

女房

見渡せば名残はしはし霞めとも春にはあらぬ空の曙

五十二番

左

前權僧正

へたつなる卯花かきのこなたにて驚しのふほとゝきすかな

右勝

左大臣

きのふまでかすみし物を津の國の難波わたりの夏の明ほの

五十三番

左勝

定家

櫻色の袖もひとへにかはるまでうつりにけりな過る月日は

右

宮内卿

花ゆへはいとふにはへて夏衣たつかとすればかせすきむ也

五十四番

左勝

家隆

夏衣たつことやすきかけもなしなを花思ふ庭のこすゑに

右

越前

しら雲のたつのとよそに見えつるや卯花さけるをのゝ故郷

五十五番

左

寂蓮

散ぬともなにおしみけむうの花の垣ねも春の色ならぬかは

右勝

雅經

たちのこる霞の袖のうすみとりこれもやけふの習ひ成らむ

五十六番

左

權大納言

忍ひあまる心よいかにほとゝきす卯花かけのさよの一聲

右勝

左大臣

里人のうの花かこふ山陰に月と雪とのむかしをそとふ

五十七番

左持

前權僧正

ほとゝきす思ひや出る忍ひねを啼てたちにしうの花の宿

右

宮内卿

ほとゝきすまつに心も更にけりなこりとめよ明るひと聲

五十八番

左持

定家

春暮ていくかもあらぬを山陰に葉末かたよりなひく下草

右

越前

ひきつれて花のさかりはこし物を春より後はとふ人もなし

五十九番

左勝

家隆

ほとゝきすまつとけしまにわか宿の池の藤なみ移ひにけり

右

雅經

わきて猶まつをはしるやほとゝきす一聲きくもねぬよ也鬼

六十番

左

寂蓮

さみたれの雲より下に空晴て縁は軒のあやめ也けり

右勝

女房

久堅の月のかつらにあふひ草かけてそたのむかもの河浪

六十一番

左勝

權大納言

こゝろあれやしはしまたれて郭公更行月に哀そふ也

右

宮内卿

賤かふくあやめのすゑを便にて宿をならふる軒のさゝかに

六十二番

左持

前權僧正

郭公みあれのしめに引こめて外にけかさぬ聲をきかはや

右

越前

暮ぬとて千町のさなへとりゝに急くそしるき田子の諸聲

六十三番

左勝

定家

神まつる卯月待出てさく花の枝もとををにかくるしらゆふ

右

雅經

泊瀬山入あひのかねの音までもうちしめりたる五月雨の頃

六十四番

左持

家隆

うの花のかきねにきてもほとゝきすなを白雲の夕暮のこゑ

右

女房

郭公くもるこよひの村雨にまたしき聲や世にふりぬらん

六十五番

左

寂蓮

卯のはなの咲る垣ねの雨のよは月の影もるのきの玉水

右勝

左大臣

郭公啼よはいはすなかね夜もなめそあかねのきの橘

六十六番

左持

權大納言

たえゝにうす雲かくれ星見えてなを晴やらす五月雨の空

右

越前

なそやかく心をくたく郭公待につけてもきくにづけても

六十七番

左勝

前權僧正

軒の雨の雫にそしる郭公啼やさつきのあやめ草さは

右

雅經

大かたはうちぬる程も夏の夜をさてもいつより明しかぬ覺

六十八番

左勝

定家

遙かなる初音は夢かほとゝきす雲のたゝちはうつゝなれ共

右

女房

あやめ草いはかき沼のねをたえてけふは袂の匂ひとそなる
六十九番

左

家 隆

村雨の風にそなひくあふひ草むかふ日影もうすくもりつゝ

右勝

左大臣

五月山雨に雨そふ夕かせに雲よりしたを過るしらくも

七十番

左持

寂 蓮

今そこれまちし五月をほとゝきすなを思へとや忍ひねの空

右

宮内卿

橋の匂ひにかへてほとゝきす花ちらせとはちきりやはせし

七十一番

左勝

權大納言

棟さく外面の木かけ露散て五月雨はるゝ風わたるなり

右

雅 經

山かけや袂涼しき夕風に聲をはきかし蟬のはころも

七十二番

左持

前權僧正

五月やみみしかき夜半のうたゝねに花立花の袖に涼しき

右

女 房

ほとゝきすのきの立花匂ふかにえや忍はれぬおちかへる聲

七十三番

左

定 家

さみたれの月はつれなき太山よりひとりもいつる郭公かな

右勝

左大臣

なをさりに袖のあやめをかたしきて枕も夢も結ふともなし

七十四番

左勝

家 隆

夏もなを月やあらぬと眺むればむかしにかほる軒の立はな

右

宮内卿

柚人のとらぬまきさへなかる也にふの河瀬のさみたれの頃

七十五番

左持

寂 蓮

夜をかさね心にいれてほとゝきす初音あかぬ名残なりける

右

越 前

さらてたにむかしを忍ふ夕暮に花立はなにかせそふくなる

七十六番

左

權大納言

身にあまる思ひやなにそ夏虫の水にもきえずもえわたる覽

右勝

女 房

郭公おもひもわかぬ一こゑにあげぬるかたはしのゝめの月

七十七番

左持

前權僧正

五月雨にゆきて尋ねんかつまたの池もや今はおきつしら浪

右

左大臣

うかひ舟下すとなせのみなれさほさしも程なく明る夜は哉

七十八番

左持

定 家

ことほりやうちふすほともなつの夜はゆふつけ鳥の曉のこゑ

右

宮内卿

五月雨によもの梢もみかくれて軒をあらそふにわたすみ哉

七十九番

左勝

家 隆

つもりゆく雲もゆるさぬ山のはも明^るれはしるき五月雨の空

右

越 前

眞菰刈るたこのもすそもくちぬへしまつのみまきの五月雨の比

八十番

左持

寂 蓮

あたら夜の月にのみ^かやはほとゝきす啼て過なる五月雨の空

右

雅 經

野への色も茂りにけりな大荒木の梢につゝく杜の下草

八十一番

左

權大納言

夏の夜はすゝむほとなく明ぬれは清水も夢も結はさりけり

右勝

左 大臣

尋きてこゝには夏もあらし山木かくれにこそ秋は有けれ

八十二番

左持

前權僧正

なかめをは照日のかげやへたつらん春秋もなき夏姿かな

右

宮内卿

山里のそとにたつる蚊遣火は夏さへたえぬ煙なりけり

八十三番

左

定 家

夏の日を道ゆきつかれいなむしろなひく柳にすゝむ河かせ

右勝

越 前

ふすほともなく一聲にあくる夜の名残そ深きしのゝめの空

八十四番

左持

家 隆

夕暮の雲のはたてにみたれつゝ思ひもしるく行螢かな

右

雅 經

秋のの千草花を待ほとやしはしやとれるさゆりはの露

八十五番

左

寂 蓮

結ふ手のあとのみにこる山の井のあかぬ心を袖にまかせて

右勝

女 房

夏の月しはしみる夜もあらは社くもらはくもれ山のはの空

八十六番

左勝

權大納言

松かせに夏の日數を忘れ草涼しくなひくすみよしのきし

右

宮内卿

おそくとくおつる鷄舟の箭火に淵せもよそにしられぬる哉

八十七番

左勝

前權僧正

結ふ手に影みたれゆく山のゐのあかても月のかたふきに鳧

右

越 前

咲にけり深き夏野の草村のしけみにましるさゆりはの花

八十八番

左持

定 家

かけ宿す水のしらなみ立かへりむすへとあかぬ夏のよの月

右

雅 經

大江山木かけもとをく成にけりいくのゝ末の夕立の空

八十九番

左

家 隆

出やらぬ初音をきゝし深山邊に里なれかへるほとゝきす哉

右勝

女房

郭公雲のはつかにきこゆ也よとのわたりの村雨のそら
九十番

左持

寂蓮

夜もすから草のはらやく夏虫のもえても人の袖ぬらすらん

右

左大臣

螢飛のさはに茂るあしのねのよな／＼下にかよふ秋かせ
九十一番

左勝

權大納言

夏ふかみ夜な／＼秋やたつた河くるれは涼し岩なみのこゑ

右

越前

むら雨の過る晴間の夕つくひ濡色まさるとこ夏の花
九十二番

左

前權僧正

いほりさす野澤の夏の夕涼みもの所せき秋にそ有ける

右勝

雅經

夏むしの光をやとす末葉より淺茅色つくのへの夕暮
九十三番

左

定家

山めぐりそれかと思ふ下紅葉うちちる暮の夕立の雲

右勝

女房

秋やちかき賤か垣ねの草むらに何ともしらぬ虫の聲かな
九十四番

左

家隆

夕かけて風そ涼しき神山の梢にのこるならの葉かしは
右勝

左大臣

ほとゝきすなくねも稀に成まゝにやゝかけ涼し山のはの月
九十五番

左勝

寂蓮

夏ふかき杜の梢の空蟬のはにをく露は秋のゆふくれ

右

宮内卿

雲はるゝ山井の水に影見えて底より出る夏のよの月
九十六番

左

權大納言

夕暮や松ふくかせにさそはれて梢のをとに秋は來にけり

右勝

雅經

けふといへは御被になひく袖ながら秋風たちぬせゝの河波
九十七番

左

前權僧正

夕暮は野中の松の下陰に秋かせさそふひくらしの聲

右勝

女房

夏もまたおしまか磯のかち枕うきねの波に秋かせそ吹
九十八番

左

定家

夏はつるあふきに露ををき初てみそきに涼しかもの河かせ

右勝

左大臣

とこ夏の花に玉敷夕暮をしらてや鹿の秋を待らむ
九十九番

左勝

家隆

さくらあさのをふの下草いかならんみそきに成ぬ六月の空
右

宮内卿

百番

左勝

寂蓮

思ひあまりなる共なき虫の音のしのに籠れる野への夕風暮イ

右

越前

夏草の葉末に結ふ夕露に秋おもほゆるもりの下かせ

百一番 秋

左

權大納言

みそきしてねぬに明ぬるしのゝめの袂にしるき秋かせそ吹

右勝

女房

秋たちてけふみるのはら風涼しやゝたなはたに衣かせ山

百二番

左

前權僧正

秋はきぬなぬかはまたし七夕のあさ引糸のふしや侘らむ

右勝

左大臣

秋を秋と思ひ入てそなかめつる雲のはたての夕暮のそら

百三番

左

定家

秋かせよそゝや萩の葉こたふとも忘れぬ心我身やすめて

右勝

宮内卿

萩の葉にやゝ秋かせは吹すきぬ野中の庵をとふ人はなし

百四番

左

家隆

さひしきのなかめはわきつ夕日さすをかへの松の秋の初風

右勝

越前

はらふらんまくらそみゆる夕ま暮雲の塵なき星合のそら

百五番

左

寂蓮

秋はきぬとはかりこそはななめつれ籬のくれに萩の下露

右勝

雅經

昨日までよそに忍ひし下萩の末葉の露に秋かせそふく

百六番

左勝

權大納言

けさのまに心をいかにつくせとや残りおほかる秋の初かせ

右

左大臣

うつゝなく野へのしのやに一夜ひとりイねて袂ならはす萩の下露

百七番

左

前權僧正

みか月のほのめく空に秋をこめてそゝろに渡る山のはの雲

右勝

宮内卿

風わたるおはなな末にすめはとて月の影さへなひく野へ哉

百八番

左勝

定家

夕月よいるのゝ尾はなほのゝと風にそつたふ棹鹿の聲

右

越前

はかなくも雲のよそにそ思ひける泪は袖にはつかりの聲

百九番

左持

家隆

うちもねすあくるそつらき山陰にひとり詠る萩の下露

右

雅經

秋は猶風にこたふる暮よりも萩の上葉のむらさめの聲

百十番

左持

寂蓮

啼わたる雲ののかりよ心せよこぬ人たのむ秋かせの比

右 女房

萩のはに秋かせふきぬともすれはかはらぬ月の影ぞ涼しき

左持 權大納言

ひこ星の雲の衣の袖ぬれてけさや戀路に立かへるらん

右 宮内卿

中々に秋のあはれは暮よりも雨おとつるゝふかきよのそら

左持 前權僧正

秋ことにぬれてかさぬる袂かな月さゆる夜のかりの涙に

右 越前

思ひやれ夜ふかき空の鴈金に涙つらなる秋のねさめを

左持 定家

玉くしけ二見の浦の秋の月明まくつらきあたらの空

右 雅經

秋そかしかへらはこそはと思へとも雲路の鴈の遠さかる聲

左 家隆

藤はかまなひくまかきの夕くれに空さへ匂ふ秋のむら雨

右持 女房

秋風は身にしむ物と萩の葉に吹よりこそは習ひ初しか

左 寂蓮

里わかすみるへき月の影なれとあかぬこゝろはを捨の山

右持 左大臣

しら露のたのめかおきし人はこて霧のまかきに松虫の聲

左持 權大納言

初かりはかへりし春の聲ながら秋の哀をかきつらねけり

右 越前

しら露の玉まぐ葛にかせさえてうら悲しくも澄る月かな

左持 前權僧正

夕されはうつらになてしむる野の夜半の思ひは鳴の羽かき

右 雅經

谷ふかき軒端をこむる朝霧のはるゝとすれは暮方のそら

左 定家

秋の夜は月のかつらも山のはもあらしに晴て雲もまかはす

右持 女房

住吉の松に秋かせ小夜ふけてうらよりおちに月そさやけき

左 家隆

立そむる秋霧のうへに鳴かりの聲ほのかなるいさよひの月

右持 左大臣

たか秋のねさめとはむとわかす共たゝ我か爲の小男鹿の聲

左持 寂蓮

たれとなく戀しかるへきこよひかな月影いとへ棹鹿の聲

右 宮内卿

隈もなき月をはいかゝみよしのゝたのむの鴈ユイのよると啼覽
百廿一番

左持

權大納言

つれなしやかくてもへけりみ山への松の嵐にをしか鳴よを

右

雅經

宿はあれぬ庭は蓬にうつもれぬ露うちはらひとふ人はなし
百廿二番

左

前權僧正

ひきかへて今宵の月はみゆるかな山立いつる駒のゆかりに

右勝

女房

萩の葉にをくしら露の玉ゆらもきゝ忍ふへき秋の風かは
百廿三番

左

定家

秋をへてむかしは遠き大空に我身ひとつのものと月かけ

右勝

左大臣

露のうへに鴈の涙ををきてみんしはしな吹そ萩の夕かせ
百廿四番

左

家隆

里はあれて鹿そ啼なる菅原や伏見の野への秋の夕くれ

右勝

宮内卿

思ふさへくもらぬ夜半のなかめかな姨捨山のいにしへの空
百廿五番

左勝

寂蓮

村雨の露もまたひぬ槇の葉に霧立のほる秋の夕暮

右

越前

いつくにもさこそは月を眺む共とかく人の袖はしほれし

百廿六番

左

權大納言

夕ま暮なかむるまゝに露なれてたもとに秋の哀をそしる

右勝

女房

秋の色はまた一しほのもみち葉に心してふけ山おろしの風
百廿七番

左持

前權僧正

秋をへて月をなかむる身となれりいそちのやみを何歎らん

右

左大臣

雲はみなはらひはてたる秋かせを松にのこして月をみる哉
百廿八番

左勝

定家

露落るならの葉あらく吹風に涙あらそふ秋の夕くれ

右

宮内卿

きゝもあへすぬるゝね覺の袂哉かねて思ひし虫の音にしも
百廿九番

左勝

家隆

久堅の月のかつらやまかふらむ縁にすめる秋のそらかな

右

越前

いつよりも慰めかたき今宵かな哀はのこせ山のはの月
百三十番

左

寂蓮

いさこゝにしくるとならは立田山ふもとの庵の秋の末まで

右勝

雅經

たへてやはおもひ有ともいかゝせむ葎の宿の秋の夕暮
百卅一番

左

權大納言

露結ふよもの木のははつれなくて月にそ秋の色はみえける

右勝

左大臣

さむしろにひとりね覺の夜半の月敷忍ふへき秋のそらかは

百廿二番

左勝

前權僧正

聲たてゝ啼といふ鹿にことゝはん秋や悲しき妻や戀しき

右

宮内卿

宿からのあはれといひていてぬともいつれの里も秋の夕暮

百廿三番

左

定家

初雁のたよりもする秋風にこととひかねて衣うつこゑ

右勝

越前

よさの海うきねにかよふ鹿の音は波よりけに袖そ濡れぬる

百廿四番

左

家隆

うき雲は月やは拂ふさらしなやは捨山のみねの秋かせ

右勝

雅經

を山田の稻葉の風はほのかにて庵もるひたのさよ深きこゑ

百廿五番

左

寂蓮

かきくもり時雨も今はすか原や伏見の外山色かはるまで

右勝

女房

秋やとき時雨やをそき御室山染ぬ梢にあらし吹也

百廿六番

左持

權大納言

鹽かまやうらの松かせ音さえて波に月すむ有明のそら

右

宮内卿

ちらぬより木の葉に通ふねさめ哉かせに村たつ秋のよの雨

百廿七番

左勝

前權僧正

玉章のかきあはせたるしらへかなかりの琴ちに過る松かせ

右

越前

淺茅生の露ふく風につけつゝもまつこほるゝは涙也けり

百廿八番

左

定家

たをやめの袖の紅葉かあすか風いたつらにふく霧の遠かた

右勝

雅經

拂ひかねさこそは露のしけからめ宿るか月の袖のせはきに

百廿九番

左

家隆

松虫の聲はつれなき故郷の庭の木のはに秋かせそふく

右勝

女房

暮てゆく秋の名残は大あらきの杜のこすゑに有明の月

百四十番

左持

寂蓮

さひしさを誰忍へとか小倉山秋の麓に小鹿なく也

右

左大臣

月残るふるさと人の淺茅生にわすれす秋の衣うつなり

百四十一番

左勝

權大納言

虫の音も秋の末葉にかはてゝ霜にさえ行庭のかやはら

右

越前

山里よいかにせよとかましら鳴あらしにたにもたへぬ涙を
百四十二番

左

前權僧正

秋の風は萩のうは葉に立そめて木のはの色に吹かはりぬる

右勝

雅經

今こむと契らぬ妻を長月の有明の月にさをしかのこゑ
百四十三番

左

定家

山姫のぬさのおひかせ吹かさねちひろの海に秋のもみち葉

右勝

女房

なか月や秋の末葉に霜をけば野はらの小萩かれまくもおし
百四十四番

左

家隆

やゝ寒きいく田の杜の秋かせにたへぬ里人衣うつなり

右勝

左大臣

見わたせば松に紅葉をこきませて山こそ秋の錦なりけれ
百四十五番

左

寂蓮

山かせに峯のこの葉は旅たちぬ獨やすまん岡のへのいほ

右勝

宮内卿

立田山みねのあらしを時雨にて河瀬の波も色付にけり
百四十六番

左

權大納言

紅葉する木末に秋は成はてゝ嵐とともにいそきたつ也

右勝

雅經

袖のうへにたれ忍へとか行秋の名残かほなる野への夕露
百四十七番

左持

前權僧正

哀にも袖より外はおともせず秋くるゝ日のよひの時雨は

右

女房

尋見よいかなる關のせき守かつれなくくるゝ秋をとゝむる
百四十八番

左

定家

物ことに忘れかたみの別にてそをたに後とくるゝ秋かな

右勝

左大臣

草も木もおのか色々あらためて霜に成ゆく長月の末
百四十九番

左勝

家隆

暮はつる秋こそやかてしらせけれあふ人からのよはの習ひを

右

宮内卿

秋ふかし虫の音よはるね覺には物こそいはね絶ぬ泪を
百五十番

左

寂蓮

いつまてか鶉の床に待をらむたのみし秋もふか草のさと

右勝

越前

おしと思ふ心ははてもなき物を秋はけふこそ限成けれ
百五十一番

左

權大納言

村雲のはれのゝみねを詠れは梢にしるき初しくれかな

右勝

女房

津の國のをやもあらはに霜かれてやへふく軒に時雨ふる也

百五十二番

左

前權僧正

から錦残る時雨の初雪はしろ地におれるこゝちこそすれ

右勝

左大臣

秋かせにあへす散にしなら柴のむなしき枝に時雨ふる也

百五十三番

左

定家

月日のみ杉の葉しくれ吹あらし冬にも成ぬ色はかはらて

右勝

宮内卿

から錦秋のかたみや立田山散あへぬ枝にあらし吹なり

百五十四番

左

家隆

しろたへの菊のみけさは有明の冬に移ふ庭の月かけ

右勝

越前

きのふにも野への景色はかはらねと秋にはあらぬ村時雨哉

百五十五番

左持

寂蓮

いまはとやしのたの杜の初時雨めつらしからぬ千枝の雪を

右

雅經

今よりの宿をはかれす人はとへ庭のけしきは霜にあるとも

百五十六番

左

權大納言

立田山紅葉ちりしく夕暮のあらしをわけてとふ人もかな

右勝

左大臣

ふしなれし芦の丸屋も霜かれてうちもあらはに宿る月かな

百五十七番

左持

前權僧正

神無月槇の板屋のうたゝねに時雨せぬ夜もこのは散なり

右

宮内卿

時雨つる木の下露は音信て山路の末に雲そ成ゆく

百五十八番

左勝

定家

神無月時雨てきたるかさゝきのはねに霜をきさゆるよの袖

右

越前

露をたにいとひしのへの蚕こよひの霜にいかてたふらん

百五十九番

左

家隆

時雨つゝ残る紅葉の色もおし梢にかへれな月かのそら

右勝

雅經

木のはふくあらしそ今は音羽山みね立ならす鹿の音はなし

百六十番

左

寂蓮

時雨つる夕日の色も袖さえて山陰さひし菊のむら露

右勝

女房

このころは小夜の時雨もきゝわかすこの葉になるゝみ山への里

百六十一番

左持

權大納言

うらかるゝ野への草葉の霜とけて朝日にかへる秋のしら露

右

宮内卿

秋といへはしらぬ色の身にしむと深山おろしよ烈し刈覽

百六十二番

左勝

前權僧正

あけは先木のはに袖をくらふへし夜半の時雨よ夜はの泪よ

右 越前

散にけり山はこけちの錦にて紅葉をあらふ谷の岩水

左 定家

冬枯て青葉もみえぬ村すゝき風のならひはうちなひきつゝ

右勝 雅經

秋の色をはらひはてゝや久堅の月のかつらに木枯のかせ

左 家隆

霜こほる柴のさ枝やうるふらん煙をしめる山のへの里

右勝 女房

冬になをかさねて空の風さえて時雨にかはる峯の白雪

左勝 寂蓮

たえゝに里わく月の光哉時雨ををくる夜半のむらくも

右 左大臣

あらしく梢に波の音はして松の下水うすこほりせり

左勝 權大納言

冬かれの萩の上葉に風さやき霜をはらひて霰ふるなり

右 越前

とふ人のなきにつけてもみよし野の山の奥までみゆる白雪

左 前權僧正

おなし影を庭と池とにさしかへて霜も氷も冬のよの月

かけとめし露のやとりを思ひ出て霜に跡とふあさちふの月

右勝 雅經

外山よりむら雲なひき吹かせに霰よこきる冬の夕暮

左 定家

常盤なる松の緑をふきかねてむなしき枝にかへる木からし

左 家隆

すみかまのみねの煙にくもきりて雪氣に成ぬ大原の里

右勝 左大臣

水上やたえゝこほる岩間より清瀧川に残るしらなみ

左 寂蓮

さまゝにたえぬ木のはの音よりも思ひいれたる松の風哉

右 宮内卿

みしま江の玉江の芦は霜かれて風の音さへ色かはるなり

左 權大納言

ふし侘ぬ吉野の里の山おろしに霰くたくる夜半のさむしろ

右勝 雅經

けきみれは岩間をくゝる山河のよとむさもなき薄氷哉

左 前權僧正

世中のはれ行空に降霜のうき身はかりそをき所なき

右勝 女房

なかむれは浪こす山の末の松こす糸にやとる冬のよの月
百七十三番

左 定 家

さえさをる風の上なる夕つくよあたる光に霜そちりくる

右 左大臣

月そすむたれかはこゝにきの國や吹上の千鳥獨啼なり

左 左

家 隆

あすか川かつ氷つゝかつらきの山のはしろく雪降にけり

右 宮内卿

かち人の汀をつたふ音さえて氷にぬれぬえにこそ有けれ

左 左

寂 蓮

山かせにくもりもあへぬむら時雨名残は月の影よりそふる

右 越 前

冬こもる草の庵の柴の戸にこととふ物は木枯のかせ

左 左

權大納言

つま木とる谷のかよひちうちらはらひ分そ銘ぬる柴の雪おれ

右 女 房

から崎や氷に波の音たえてみきはにのこる小夜の松風

左 左

前權僧正

けきは又かさねて冬をみつるかな枯野の上につれる白雪

右 右

左 大臣

櫛の戸をあさけの袖にかせさえて初雪おつる峯のしら雲

百七十八番

左 定 家

大淀の松によりくる波かせをうらみてかへる友千鳥かな

右 宮内卿

庵ちかき麓の松の梢より哀を分る山おろしのかせ

百七十九番

左 家 隆

みやまより落くる水は氷ゐて秋のかきりの色はとまらず

右 越 前

むへしこそねさめの床も氷けれ雪の花咲窓の梅かえ

左 左

寂 蓮

山のはに雪けの雲のかゝるより麓のいははとふへかりけり

右 雅 經

有明の月にむれたるこゑながら千鳥なみよる興津沙かせ

百八十一番

左 權大納言

いかにいはむ言の葉もなし雪の上に月すむ夜半の更科の里

右 左 大臣

朝妻やをちのと山に出る日の氷をみかくしかのからさき

百八十二番

左 前權僧正

鹿の音をうきねのをしの聲にかへて我も生田のをのゝ草伏

右 宮内卿

深山には松の葉白く降雪にすそのゝ原はむら雨のそら

百八十三番

左

定家

ななめつゝよわたる月にをく霜の過て跡なきひとゝせの空

右勝

越前

をしなへて松にも花そ咲にけるかすかの山の雪の明ほの

百八十四番

左持

家隆

冬の夜の有明の月もしほの山さしいての磯に千鳥鳴也

右

雅經

夕されは雪もふりにし宿なれや庭も籬も跡たゆるまで

百八十五番

左

寂蓮

はやき瀬の波にまかせてよるひをは結びとゝめぬ氷也けり

右勝

女房

高砂の松吹かせそむもれゆくおのへの雪や降まさるらむ

百八十六番

左持

權大納言

山たかみ千里はおなし麓にてななめにたとる雪の明ほの

右

宮内卿

人とはぬ都の外をいつなれて跡なき庭の雪とみるらむ

百八十七番

左持

前權僧正

千鳥啼さほの河原〔の〕霧晴て友まとはさぬ有明の月

右

越前

いとゝしくしらぬ山路そまとひぬるねに行鳥の聲を聞にも

百八十八番

左

定家

神さひていはふみむろのとしふりて猶ゆふかくる松の白雪

右勝

雅經

大かたは哀もしらぬものゝふも八十うち河の冬の明ほの

左

家隆

久堅の雪にましりて咲花の匂ひもさひし冬の山里

右勝

女房

須磨の浦にことそ共なき煙哉雪のあしたの海士のもしほ火

左持

寂蓮

降雪に軒はの松もうつもれて音せぬかせもさえまさるなり

右

左大臣

山人のたきすきみたるしるしはの跡さへしめる雪の夕暮

左

權大納言

有明の月かけさえて鹽みてはいりぬる磯に千鳥啼也

右勝

越前

吹かよふみねの嵐は音もせてさひしさまさる雪の下おれ

左勝

前權僧正

君をのみ思ふこゝろは大原や世にすみかまの煙にもみよ

右

雅經

はかなしやさてもいく夜かゆく水に敷かき侘る鶯の獨ね

左勝

定家

春しらぬたくひをとへは三笠山此ころふかき雪の埋木

左勝

定家

左勝

定家

右 女 房

冬ふかみ外山の嵐さえくすそ野のまさき霰ふるなり
百九十四番

左 家 隆

花をまつ春もとなり成にけり故郷ちかきみよしの山
右勝

吳竹の葉末にすかるしら雪も夜ころへぬれは氷とそなる
百九十五番

左持 寂 蓮

いほりさす麓は雲に道たえぬなをしもいかに峯のしら雪
右

人またはいかにとばましきよ千鳥河かせきむみ冬の明ほの
百九十六番

左 權大納言

年くるゝ雪けのそらのうす雲や明なは春の霞成へき
右勝

月をのみめてしつもりのこよひにて年こそ人の老と成もの
百九十七番

左勝 前權僧正

椎柴のしはしうき身の世に住てうち詠れは年の暮ぬる
右

西の海のあら磯波によりたけの夜に成ぬ冬の日數も（本ノマ）
百九十八番（判欠）

左 定 家

日も暮ぬことしもけふに成にけり霞を雪になかめなしつゝ
右

左大臣

よしの山花より雪になかめきて雪より花もちかつきにけり
百九十九番

左 家 隆

なかめつゝ涙そくもる行としもつもれは袖に有明の月
右勝

色ならはわきそかねまし炭竈の煙につゝく峯の白くも
二百番

左勝 寂 蓮

ひとりのみなかむるやとはとし暮てふるき梢に松風そふく
右

波たかし浮寝の床の笛やかたこゝろして吹山おろしのかせ
二百一番

左 權大納言

頼もしなみもすそ河にやとりきて天てる影の底にすむなる
右勝

心をは天てる神にかけまくもかしこき光くもりなき世に
二百二番

左 前權僧正

四方の海の治まれる世のしるし哉なきたる朝の海士の釣舟
右勝

わか國は天照神の末なれは日のもととしもいふにそ有ける
二百三番

左 定 家

久堅のあまてる月日のとかなる君のみかけを頼むはかりそ
右勝

いかてかく代々の子日にもれ過て野中の松の年ふりにけむ
宮内卿

二百四番

左持

家 隆

空はれて波もしつかに住吉の松にそ見えし御代の行末

右

越 前

神かせや山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日そなき

左持

寂 蓮

久堅のあまの岩戸を明そめし光は君かこゝろ也けり

右

雅 經

君か代のためしはこれか四方の海の波を治むる和歌の浦風

二百六番

左持

權大納言

行末やなをもつもりの浦風にいくとし波のよらんとすらむ

右勝(本のマ)

左 大臣

昔よりみくにつたはる法の水なかれてすめるよつの海かな

二百七番

左勝

前權僧正

和歌の浦のあし間のたつの聲す也昔のしほやさしてきぬ覽

右

宮内卿

竹の葉に風ふきよはる夕暮の物の哀は秋としもなし

二百八番

左

定 家

秋津嶋外まで波はしつかにてむかしにかへるやまとことの葉

右勝

越 前

思ふこといつか成へきいすゝ河頼みをかけて年はふりにき

二百九番

左持

家 隆

忘れしな君に契し友千とりみくまのかはにすまむかきりは

右

雅 經

影やとす露のみしけく成はてゝ草にやつるゝふるさとの月

二百十番

左

寂 蓮

吳竹をやとのまかきに植しより吹くるかせも友とこそなれ

右勝

女 房

淡路嶋ふきまよふすまの浦風にいくよの千鳥聲かよふなり

二百十一番

左

權大納言

玉津嶋なみに光をやはらけて心とよせよ和歌の浦なみ

右勝

宮内卿

水無月のてる日もしらす降雪にいつもさえたるふしの山風

二百十二番

左勝

前權僧正

すまの關夢をとをさぬ波の音を思ひもよらて宿をかりける

右

越 前

數ならぬ心は神にたくへてきあまねき影にすまむと思へは

二百十三番

左

定 家

仰けともこたへぬ空の青緑むなしくはてぬ行末もかな

右勝

雅 經

すみなるゝ同し木の間に影落て軒はに近き山のはの月

二百十四番

左勝

家 隆

和歌の浦を光にこめしみゆきより神や玉藻をみかきそふ覽

右 女 房

おしめともつれなく明ぬ夜半の月名残を山のはには残して

左 寂 蓮

をしなへて梢吹しく山かせにひとりしなのる松のなとかな

右 左 大臣

民もみな君に心をつくは山しけきめくみの雨うるふ世に

二百十六番

左 權大納言

あら磯のもくつの床の梶まくら袖より外の波になれぬる

右 越 前

住よしの浦吹かせのしきなみに哀はかけよ岸のひめまつ

二百十七番

左 前權僧正

うみ山とものゝ哀を思ふにはいそもたかねもたゝ松のかせ

右 雅 經

ならはすにすまはやすまむおのつから雲より遠の山のかけ庵

二百十八番

左 定 家

わか友とみかきの竹もあはれしれよゝ迄なれぬ色も變らて

右 女 房

とひもこぬ人の心も三輪の山しるしの杉の名こそ惜けれ

二百十九番

左 家 隆

もろこしの空もひとつに雲きえてたれか三笠の山のはの月

右 左 大臣

此ころ關の戸さゝす成はてゝ道ある世にそたちかへるへき

二百廿番 左 持 寂 蓮

白雲の絶間にみゆるみやま路を頼むこととは打なめつゝ

右 宮内卿

出かはる月日はかりをしるへにて行衛さたむる波の音かな

二百廿一番

左 權大納言

浅ちふや結ふ枕の露しけみまたかたしかぬ袖もしほれて

右 雅 經

瀧の音松のあらしを枕にてむすはぬ夢のむすはゝれつゝ

二百廿二番

左 前權僧正

心すむ限り成けりいその上ふるき都のありあけの月

右 女 房

なかむれば松の木陰にほのゝとあくるもつらき浦嶋の月

二百廿三番

左 定 家

歎かすもあらさりし身のそのかみを羨む計りしつみぬる哉

右 左 大臣

かゝる世に契有てそ逢坂の小河の末は君にまかせむ

二百廿四番

左 家 隆

あけは又越へき山の峯なれや空行月の末のしら雲

右 宮内卿

いつくより通ひけりとも見えぬ哉里をはなれて奥に住いほ
二百廿五番

左

寂蓮

柴のいほは嵐のまゝに住なして窓より内に雨そゝくなり

右勝

越前

身のうさは過にし方になしはてゝ神のしるしをみわの山本

二百廿六番

左

權大納言

松浦湯なきたる沖を見わたせはもろこしまてにつゝく白浪

右勝

女房

濱ひさし波のまにゝ眺むれはみゆる小嶋に有明の月

二百廿七番

左勝

前權僧正

思ふ事をなととふ人のなかる覽あふけは空に月そさやけき

右

左大臣

世中を有にまかせて過るかなこたへぬ空をうちなかめつゝ

二百廿八番

左勝

定家

身をすれば人をも身をも恨みねとくちにし袖の乾く間そなき

右

宮内卿

暮かゝる野路の旅人分過て露のみやとるすゝのしの原

二百廿九番

左

家隆

こよろきの磯立ならしよる浪のよるへも見えず夕闇の空

右勝

越前

神さひて哀いく代に成ぬらん波になれたるあさくまの宮

二百卅番

左

寂蓮

待人のをとせぬよりもつらきかなとはてを過よ峯の松風

右勝

雅經

ふかき夜によもの嵐は音たえて野中にたてる松のひとつと

二百卅一番

左

權大納言

我宿は横の木かくれ枝しけみ月もさしこぬ谷の細道

右勝

左大臣

しるや君ほしをいたゝく年ふりてわか世の月も影たけに鳧

二百卅二番

左勝

前權僧正

花ならてたゝ柴の戸をさして思ふ心のおくもみよしの山

右

越前

尋けん人の心そみわの山いく世を杉の梢なりとも

二百卅三番

左

定家

十年餘り三とせはふりぬよるの霜をき迷ふ袖に春を隔てゝ

右勝

越前

あはれなる草の枕のかりねかな夜はのけしきも峯の嵐も

二百卅四番

左勝

家隆

明わたるをしまの松の梢より雲にはなるゝあまの釣舟

右

雅經

波よする磯屋か下のかち枕なれたるあまもぬれぬ袖かは
二百卅五番

左持

かりそめに關もる夜半のね覺まで袖にふれたる須磨の浦風

右

寂蓮

吳竹のふしも定めすねもいらす鶏のなくまで月をこそみれ

左持

二
百
廿
六
番

權大納言

めに近く人をみきかぬ事こそあれ山里とても住はうき世を

右

宮内卿

初瀬山さそふ嵐やいかならんたえくになる入相の鐘

二
百
廿
七
番

左持

前權僧正

君か代に逢坂山をこえゆけはせきたる身共ならさうめやは

右

越前

夜もすから窓うつ雨に夢覺てことそともなく濡る袖かな

二
百
廿
八
番

左

わか頼む心のそこをでらし見よみもすそ河にやとる月影

右勝

雅經

波のうへもなめは限有物を心のはてそ行衛しられぬ

二
百
廿
九
番

左

家隆

あし曳の山のあなたの山のはを心つよくも出る月かな

右勝

女房

言とはんたれかは爰に隅田河名にしおふ鳥は有やなしやと

二
百
四
十
番

左

月をのみおしみし方をなかむれば都の山も山のあなたに

寂蓮

右勝

いくとせの花と月とになれくて心の色を人にみすらむ

二
百
四
十
一
番

左持

權大納言

道もなくおつる木の葉はまとふらし都の空やいつかたの雲

右

越前

一たひもにしに心をかけつれはいるもうれしき山のはの月

二
百
四
十
二
番

左勝

前權僧正

花と月と思ひわたして行心これもさとりのはしめ成らん

右

雅經

故郷のけふの面かけさそひこと月にそ契るさよの中山

二
百
四
十
三
番

左

定家

春日野や下もえわたる思ひ草君のめくみを空に待かな

右勝

女房

都人さひしき宿の松かせに月をはみるかたとにとへかし

二
百
四
十
四
番

左

家隆

ふみわけん物とも見えす朝ほらけ竹の葉山の霧の下露

右勝

左大臣

代々をへて君が御代をや松のかせ残るかひ有佳吉のきし

二
百
四
十
五
番

左

寂蓮

芦田鶴もとしへぬること哀なれ我世ふけるの浦に鳴なり

宮内卿

おもひこしいなはの山の峯にしもたのめぬ松の嵐をそきく

右勝

二百四十六番

左

權大納言

水清みにこらぬ御代のためしには嶋の外まで名になかる也

右勝

雅經

朝露にきつゝもなれぬ旅衣はるゝぬれむ袖をしそ思ふ

二百四十七番

左持

前權僧正

神のます木のもと涼し朝夕に君かねかひをみつゝの濱かせ

右

女房

住よしの松はいく代とこととへは岸うつ波そ磯にこたふる

二百四十八番

左勝(持イ)

定家

曇りなき日吉の宮の夕たすきかけし思ひのいつかはるへき

右

左大臣

和歌の浦の芦へのたつのさしなから千年をかけて遊ぶ比哉

二百四十九番

左持

家隆

いつもかくさひしき物か津の國の芦屋の里の秋の夕暮

右

宮内卿

千世までや松をはともに思ふらむなを末遠き君かよはひを

二百五十番

左勝

寂蓮

まよひこし昔の跡は男山道ある時に哀ともみよ

右

越前

波のみかとまやの下のうき枕もりきて月も袖ぬらしけり

右老若歌合以醍醐大納言冬基卿自筆本按合了

新宮撰歌合 建仁元年 作者隱名褒貶

題

霞隔遠樹

羈中見花

雨後杜鵑

松下晚涼

山家秋月

湖上曉霧

風吹寒草

雪似白雲

逢不遇戀

寄神祇祝

作者

左方

左大臣良經

内大臣通親

權中納言公繼

釋阿

越前

散位隆信

左近衛中將通具

散位有家

散位保季

上總介家隆

寂蓮

散位鳴長明

散位賀茂季保

右方

御製

前權僧正慈圓

權大納言忠良

權中納言兼宗

參議公經

大宰大貳範光

宮内卿

讚岐

丹後

左近衛權中將定家

左近衛權少將雅經

左兵衛佐具親

左馬助家長

講師

左方

左近衛中將通具

右方

參議公繼

講師

左方

上總介家隆

右方

左近衛權少將雅經

判者 釋阿

一番 霞隔遠樹

左持

内大臣

もえいつる梢は嶺の草葉にて野邊のけむりと立霞かな

右

女房

浦の松の色やまさると春みれは霞そたてるしかのから崎

左歌を右方に申云。岑の梢を草葉とみて。野邊のけふりとかすみまかへたる心。上下たかひてや開(ゆ)る。左

方陳申云。誠にみねを野邊とみるにはあらず。眺望のころには。詩などにも常にいひならへる事也。右の歌を左方特申旨なし。

判者申云。左歌右難申旨もわるき難にはあらず。右歌姿心ことににおもしろし。但かつは一番の左の歌なれば。持とすへし。

二番

左持

左大臣

なかもこしおきつ波間の濱ひさき久しくみせぬ春かすみ哉

右

参議公經

たかせさす六田の淀の柳原みとりもふかくかすみ春かな

左歌を右申云。上に詠こしとをきて。下にみせぬといへる。同心の病かいかん。右歌を左申云。たかせさす六田

のよとは。いつことおもへるにか。六田の淀とは。吉野川とこそ。萬葉集にもみえたれ。柳原六田のよとに。證

歌の侍るにやおほつかなし。右陳云。六田の淀の柳。古歌に讀ならはして侍にや。猶證歌を申へしと申。

三番

左

寂蓮

末とをき松のみとりも埋もれてかすみそ波にうきしまか原

右勝

左近衛權少將定家

みつしほにかくれぬ磯の松の葉もみらく少なく霞むはる哉

右云。末とをきとをけるよりすへて聞よからぬにや。右歌を左申云。松の葉こそあまりにくはしくきこゆれ。

判者申云。みらくなといへる詞。わるき事なれと。宜も聞えねと。すゑとをきといへるにはまさるへくや。

四番

左持 蜀中見花

寂蓮

旅の空いくよの雲にふしなれて思ひもわかぬ花のゆふかけ

右 霞隔遠樹

慈圓

みよし野の山のはふかし朝かすみこむる梢を雲にまかせて

左歌を右申云。ことなる難なし。剩頗宜歟の由申。右歌左又申旨なし。

判者申云。歌のすかた艶には聞(ゆ)れと。殊花を思ふ心すくなきや。右も又あさかすみ。こひねかはれぬさまに

侍り。持とすへし。

五番

左勝 蜀中見花

左大臣

けふも又櫻にやとをかり衣きつゝなれゆく春のやまかせ

右 霞隔遠樹

雅經

からにしき秋のかたみと立かへてはるは霞の衣てのもり

左歌を〔右〕殊申旨なし。右歌左申云。はるの霞の歌に。から錦秋のかたみとをける。よしなくや。判者以^レ左爲^レ勝。

六番

左持 蜀中見花

有家

みやこより吹こん風のをとつれも花にはつらき山路也けり

右

宮内卿

ふるさとのたより思はぬなめ哉花ちる比のうつ^レの山こえて
左歌右申云。吹こんといへるかせのをとつれ。耳にたちて聞〔ゆ〕るにや。右歌左申云。なめかなといへる。な
かむれはなとこそ。ふるくも讀ならはして侍れ。な
めと云ものゝ有やうにや聞ゆらん。

判者申云。宇津の山越伊勢物語にも。つたかえてしけり
てなとこそ申たれ。花には讀ならばさすや侍らん。右
方人。當時櫻おほく咲たる由陳申せとも。なめことに
心ゆかすて。持とす。

七番

左 雨後時鳥

通具

むらさめのはるゝ雲間に時鳥月かけちきるさよの一聲

右持 蜀中見花

雅經

岩ねふみかさなる山を分すてゝ花もいく重のあとのしら雲
左歌右方申云。月かけ契るとは。いかにちきれるにか。

右歌左難なきか宜由を申。判者右もて勝とす。

八番

左持 雨後郭公

内大臣

ほとゝきす聲は晴間にをとつれてしつくをのこす軒の立花

右 蜀中見花

慈圓

よもぬれし片野のみのゝかり衣花の雪にはやとからすとも
左歌右申云。五月雨のはれままと云るは。又もふりぬへき
にや。雨の後の心にはいかゝ。左申云。はれままと云事
は。雨後の事常の事也。右歌左申云。旅の心少にや。又交
野に櫻なと。ことに聞えすや侍らん。判者。左歌晴間し
つくなとも雨としも聞ぬにや。右歌たえて櫻のなと讀
るも。かたのゝかたにかりせし時の歌なり。歌のさまも
優に聞〔ゆ〕れは。勝とさためらるゝを。左をかたのゝか
り。日數もつもらず。たゝひとへにきはめたる旅の遊戲
は。蜀中の題には不^レ叶やと申を。右方申云。晴間といへ
る計にて。雨の後に用む事如何侍へき。すへてまの字
は。よろすの事のあひたにいひならはしたれは。雨やみ
ぬる心はなしと申によりて。又持とす。

九番

左持 雨後杜宇

左大臣

五月雨をいとふとなしに時鳥人にまたれて月をまつらむ

右 蜀中見花

女房

風ふけは花は波とそこえまかふ分こし旅のすゑのまつ山
左右さもに申旨なし。判者。ともにおもしろく聞侍り。
左の月をまつ心。右花の波。ともにすてかたく侍とて。
持とす。

十番 雨後時鳥

左

有家

ほとゝきす待よひなから村雨のはるれはあくる雲に鳴なり

右持

讃岐

さみたれの雲まの月の晴行をしはしまちけるほとゝきす哉
右歌殊に宜也。左不_レ及_ニ沙汰。可_レ勝。判者同以_レ右爲_レ勝。

十一番 松下晩涼

左持

散位怪信

立よれば夕浪涼し住吉の松を秋風ふかぬものゆへ

右

大宰大貳範光

秋やときかせや涼しき松かけのおもひもわかぬ夕まくれ哉

左右申狀。又如_レ先。判者。左の夕浪涼しなと。宜聞_レゆ_レるにや。仍持とす。

十二番

左勝

山家秋月

通 具

さゝの庵露をく床のこけむしろしく物もなき秋のよの月

右 松下晩涼

公 經

友さそふ片山かけの夕涼み松ふく風にひくらしの聲

判者申云。友さそふといへる。すゑにもさせるゆへなきにや。左歌優にきこゆ。可_レ爲_レ勝。

十三番

左勝

山家秋月

左大臣

時しもあれ故郷人はおともせて深山の月に秋風そふく

右 松下晩涼

慈 圓

木末より夕かせおつる松かねは秋まつ夏のなこりなりけり

判者申云。右歌雖_レ無_ニ指難。左猶宜によりて爲_レ勝。

十四番

左

湖上曉霧

公 繼

にはてるや浪路はるかに霧こめてやとりかれたる有明の月

右勝

松下晩涼

丹 後

涼しさを松の木かけに先たてゝまたこぬ秋の夕くれの空
左申云。右歌尤宜。況以承伏。

判者申云。左歌雖_レ無_ニ指難。右歌宜。仍爲_レ勝。

十五番

左持

湖上曉霧

内大臣

あけぬるか霧のたえまにみほかさき漕はなれゆく遠の浮舟

右 松下晩涼

兼 宗

夕まくれ秋のけしきを先たてゝ袂にかよふ松のしたかせ

判者云。をちの浮ふね。いかにそきこゆれとも。右もことなる事なければ。爲_レ持。

十六番

左

湖上曉霧

〔名 欠〕

しかの興やいつくを霧のへたつらん浪よりいつる有明の月

右勝 山家秋月

慈 圓

かけきよき月よりおつる袖の雨の雲は秋のよ軒は山のは

右申云。左歌は只望_ニ秋月。曉の隔なし。題の心如何。左無_ニ申旨。判者云。右歌。心詞尤宜有_レ興。仍爲_レ勝。

十七番

左

嵐吹寒草

内大臣

秋はてしあはれは猶そのこりける花もあらしの野邊の夕暮

右勝 山家秋月

定 家

都人さらても松の木のみより心つくしの月そもりくる

判者云。右爲_レ勝。

十八番

左

嵐吹寒草

釋 阿

をさゝ原夜半のあらしは拂へとも葉分の霜は猶むすひけり

右勝 山家秋月

女房

柴の戸やさしもさひしき深山への月ふく風にさほしかの聲

右申云。をさゝ原は色かはらぬものなれは。枯たる草にあらずや。左申云。さゝは草也。冬は寒ければ寒草にな

とよまさらん。判者云。右歌あな面白。右勝と定申。

左持 風吹寒草

保季

山おろしに枯野のまくす打なひき霜に恨やむすひ果らん

右 山家秋月

雅經

よそにみし雲よりおくに宿しめて梢におつる山のはの月
右申云。くすのはのうらみ。かれはてぬ折にや讀へからむ。判者云。いづれも無殊事。爲持。

廿番

左 風吹寒草

越前

更に又秋にもかへすあらし哉霜かれはつる萩の下葉を

右勝 湖上曉霧

〔名關〕

うすきりの汀をこむる有明は月にうらあるしかのから崎

右申云。萩の下葉を秋にもかへすとは。いかに讀るにか。

左申云。あはれを又かへす也。判者云。うす霧。少耳にたとも。歌のさまよろし。仍爲勝。

廿一番

左 風吹寒草

左大臣

木の葉散て後はむなしき外山より枯野の草にあらしおつなり

右勝 湖上曉霧

女房

しかの浦やにほてる沖に霧こめて秋もおほろの在明の月
左右未申先に。判者。右歌殊心肝にそむ。左又優なりと

いへとも。猶以右爲勝よし申也。

廿二番

左勝 雪似白雲

内大臣

雪ならは月とともにや眺めやらんはらひなはてそ嶺の白雲

右 湖上曉霧

右馬助家長

にほの浦やうら傳ひゆく霧のまにたえはる有明の月
右歌人々云。去年の御製に似たり。仍左爲勝之由。判者申。

廿三番

左持 雪似白雲

寂蓮

あらし吹みねにつれなき白雲のたつかとみれば松の雪おれ

右 風吹寒草

定家

あさちふやのこる葉末の冬の霜をきところなくふく嵐哉
左右。たかひに宜由申之。判者。ことに優也。可爲持。

廿四番

左 雪似白雲

釋阿

故郷はさゆる雲とやみよし野のよしの、おくの峯のしら雪

右勝 風吹寒草

範光

萩原やいまはうれはに吹かへてあらしになりぬ野への秋風
左歌宜由。人々これを申といへとも。判者以右爲勝。

廿五番

左 雪似白雲

季保

よそにては雪ともえこそ白雲のかはらぬ色をみよしの、山

右勝 風吹寒草

女房

草のはら露のやとりを吹からにあらしにこほる道しはの霜
不及左。右之心爲勝之由。判者申之。

廿六番

左勝 寄神祇祝

内大臣

君か代のちとせのかけやうつるらん天てる光わくる鏡に

右 嵐吹寒草

權大納言忠良

〔萩原や霜をく色はかはれとも嵐を秋のなこりとそ思ふ

判者以レ左爲レ勝。

二十七番

左勝 寄神祇祝

左大臣

君か代のしるしとこれを宮川の峯の杉原色もかはらす

右 雪似白雲

定家

冬のあしたよしの山白雪も嶺にふりにし雲かと思ふ

判者。左爲レ勝。

廿八番

左 遇不逢戀

越前

くやしさにまつる泪をせきかねて空なる名をや袖に残さん

右勝 雪似白雲

女房

雪やこれはらふたかまの山風につれなく雲の峯にのこれる

左歌不レ及ニ沙汰。右歌可レ爲レ勝之由。判者申レ之。

廿九番

左勝 逢不遇戀

釋阿

泊瀬河又みんとこそたのみしか思ふもつらしふたもとの杉

右 寄神祇祝

宮内卿

數しらぬ君かよはひは神かせやみもすそ川のせいのしき浪

判者。以レ右勝とすへき由申を。左右ともに左を可レ爲

レ勝之由申請也。

三十番

左 遇不逢戀

家隆

いまこんの契は夢かしきたへのまぐらの上にあり明の月

右勝 寄神祇祝

女房

神風や八重のさかきは重ねてもみもすそ川の末そはるけき

右歌祝によりて可レ勝之由。判者申レ之。

三十一番

左 遇不逢戀

長明

なかれてと何思ひけんかち人の渡れとぬれぬあふせ計りは

右勝 寄神祇祝

慈圓

君か代をよるつ代とこそかそふらめ七の社の三のひかりは

以レ右勝之由。判者左右ともに申レ之。

三十二番

左持 遇不逢戀

寂蓮

うらみわひまたし今はの身なれとも思ひなれぬる夕暮の空

右

丹後

わすれしのことのはいかに成ぬらんたのめし暮は秋風そ吹

左右互に宜由を申。判者。兩首ともに心優也。勝負定申

に不レ及。

三十三番

左勝

内大臣

逢みしは昔かたりのうつゝにてそのかね事を夢になせとや

右

定家

人心ほとは雲ゐの月はかりわすれぬ袖のなみたとふらむ

判者云。左右宜聞れと猶左はまさる成へし。

三十四番

左勝

左大臣

しはし社こぬ夜あまたと數へても猶山のはの月をまちしか

右 具 親

中々に又たのまるゝ世なりけりかゝるへしとは契やはせし
右方申云。古歌宜といへとも。題におゐては。左歌尤可

勝歟。判者同之。

三十五番

左 權中納言公繼

たえぬるはわか心ともいひつへし涙をとほゝいかゝ答へむ

右勝 公 經

あはれなる心のやみのゆかり共みしよの夢を誰かたのまん
右歌ことに可勝之由。左右たかひに申之。判者同之。

三十六番

左勝 通 具

ちきりきやあかぬ別に露をきし曉はかりかたみなれとは

右 宮内卿

恨みてもぬるゝ袖かななき名のみをしまか磯の蟹ならね共
左申云。あふてあはぬ戀のこゝろおほつかなし。

判者云。以左可爲勝。

群書類從卷第百九十二

和歌部四十七歌合十三

影供歌合建仁元年八月三日

題

初秋曉露

關路秋風

旅月開鹿

故鄉虫

初戀

久戀

作者

左方

女房後鳥羽院

左大臣正二位藤原朝臣(良經)

內大臣正二位兼行右近衛中將皇太子傳源朝臣(通親)

前權僧正慈圓

正二位行權大納言藤原朝臣忠良

參議正三位行左近衛中將藤原朝臣公經

從三位行式部大輔藤原朝臣光範

女房小侍從

女房讚岐

女房丹後

沙彌寂信

正四位下行左近衛中將源朝臣通具

散位從四位上藤原朝臣保季

從五位下行右馬助源朝臣家長

從五位上行隼人正大江朝臣公景

散位從五位下鴨縣主長明

散位從五位下賀茂縣主季保

正六位上行左兵衛少尉藤原朝臣秀能

右方

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介藤原朝臣定家

從五位上守左近衛權少將藤原朝臣雅經

沙彌寂蓮

散位正四位下藤原朝臣有家

女房越前

女房宮內卿

從三位藤原朝臣範季

散位正四位下藤原朝臣隆信

沙彌釋阿

法印靜賢

沙彌生蓮

正五位下行右近衛權少將藤原朝臣良平

從五位下守左兵衛佐源朝臣具親
僧慶印

正六位上行左兵衛少尉藤原朝臣景賴

正六位上行右衛門少尉藤原朝臣季景

散位從五位下中原朝臣宗安

武者所正六位上平朝臣景光

讀師

左大臣

講師

左近衛權少將定家

判者

沙彌釋阿

但於「判者歌」者衆議。

一番 初秋曉露

左勝

きのふまでかゝる露とや野へに置秋きにけりな曉のかせ

右

女房
定家

夏と秋と行かふ空や明ぬらむかたへもしらぬ道芝の露

二番

左勝

秋のきていくかもあらぬに萩原や曉つゆの袖になれぬる

右

左大臣
雅經

なつと秋と行かふ風や吹ぬらし露ちりそむるしのゝめの道

三番

左勝

内大臣

秋きてはいくかもへぬに白露の置てわひしきのゝめの空

右

沙彌寂蓮

きぬゝの恨はしらぬ袂まで露をはつゆと秋はきにけり

四番

左勝

前權僧正

秋きても月はまたしき袖の上に露はかりこそ有明のそら

右

有家朝臣

秋はきぬ露は草葉に置初てゆふへしらるゝしのゝめの空

五番

左

忠良卿

あけぬなりけふより秋と詠むれは萩の下葉にしのゝめの露

右

女房越前

眞野の浦や曉かけて吹風にまた秋なれぬ露の萩はら

六番

左持

公經卿

から衣すそのゝ露におきぬれて明ほのまよふはつ秋の空

右

女房宮内卿

露ならはかくしもいかゝ曉のむら雲あやしはつ秋の空

七番

左持

光範卿

風の音におとろくのみか曉の露のをくにも秋はきにけり

右

範季卿

鳥なけは立ていくのゝあさちふに露をき初る時はきにけり

八番

女房小侍從

しのゝめの風にあはれをさきたてゝこれや秋くる道芝の露

右 隆信朝臣

秋きぬとまた白露のをきもあへす風に玉ちるのへの明ほの

九番

左 女房讃岐

夜をこめてさゝわくる袖に置露や秋の涙のはしめ成らん

右 沙彌釋阿

秋きぬと枕につくるかれのをとにやかてもかゝる袖の露哉

十番

左 女房丹後

秋は猶ゆふへの空と聞しかとたつ曉そつゆはをさける

右 法印靜賢

秋きぬとかねもさかする篠目に朝ちるつゆもけしきこと也

十一番

左 沙彌寂信

秋立てあかつきことのしら露やきみか三千世の數にをくらん

右 沙彌生蓮

秋きぬと詠めもあへぬ風のをとにやかて露をく曉の空

十二番

左 通具

曉はなみたや露にかさぬらん秋やは深き小のゝしのはら

右 良平朝臣

葛の葉のうらめつらしく吹風にをけはかつ散しのゝめの露

十三番

左 保季朝臣

秋來ぬとおもひもあへぬねさめより袖にいさよふ篠目の露

右 具親

明やらぬとともに露をすかのねの長くもよはの成にける哉

十四番

左 家長

草のはら秋の日かすはあさちふの露の底より鳴立にけり

右 僧慶印

秋風も袖にしらるゝ明ほのに露なれそむる庭の萩原

十五番

左 公景

秋やくる露やまかふとたとりてもまことはしるき東雲の空

右 景頼

きのふこそ夏くれたけのよをこめて秋にや露の結ひ初らん

十六番

左 長明

秋きてもいくよかはふるしのゝめや岡へに白き玉さゝの露

右 季景

涼しさはかたへ過ぬる秋風に明るもしらぬ萩の下露

十七番

左 季保

うちつけに秋の哀を白露のいつならしけん篠目の空

右 宗安

明ゆくは秋きにけりとしら露にをき分れぬる夏の面影

十八番

左 秀能

眞葛原露吹はらふしのゝめの風うらめしき秋はきにけり

右 景光

秋はまた結ふ日敷もあさちふにいつしか深きしのゝめの空
一番 關路秋風

左勝

女房

夏たにも月は秋なる清みかた波ふく風の此ころのこゑ

右

定家

宿とはん人にもかくや須磨の浦關吹こゆる秋の初かせ

二番

左勝

左大臣

人すまぬふはの關屋の板廂あれにし後はたゝ秋の風

右

雅經

さひしきはこゝにとゝめつ清見潟關もる波に秋風そふく

三番

左勝

内大臣

風の音やみにしむはかり聞ゆらん心つくしのもしの關もり

右

寂蓮

春やまたあふ坂こえん秋風にけふ立かへるしら川の關

四番

左勝

前權僧正

清見潟せきもる浪の秋の聲これや都の萩の上かせ

右

有家

白河の關の秋風立かへりいつふるさとに雪のゆふくれ

五番

左

忠良

きよみかた秋のあはれはとめてけり關守波にふしの山風

右勝

越前

關もりのまたひとへなる衣てにいたくなふきそすまの秋風

六番

左持

公經

木すゑふく風より秋の色ちりて紅葉をわくる白河の關

右

宮内卿

都へはしくれんころとたのめとや秋風ふきぬしら河の關

七番

左持

光範

みちのくの衣の關に秋やたつゆふこへくれは袂すゝしも

右

範季

山おろし紅葉をさそふ夕されは錦ふみうきしら河の關

八番(判夕)

左

小侍從

吹すくるすまの浦風うらむなよ秋のけしきはとゝめ置とも

右

隆信

都出てかさなる山の秋風にむかしのあとをしら河のせき

九番

左

讚岐

春のくる道とそきゝし相坂の關にも秋の風は吹けり

右勝

釋阿

時しもあれ秋の旅ねをすまの關身にしむ風のかへる白波

十番

左

丹後

霞わけ都立けんいにしへのあとおもほゆるしら河の關

右勝

靜賢

誰かまたふしの秋風みにしみて清見か關を月にこゆらむ
十一番

左 勝

寂 信

やとりつる衣の關をけき立は袂すゝしき秋かせそふく

右

生 蓮

秋風は衣の關にたちにけり月日もしらぬひなの長路は

十二番

左 持

通 具

浦かよふ秋風さひしすまの關吹こす浪のをとにつけても

右

良 平

すゝか山關こえならす道すからみねの木のはに秋風そ吹

十三番

左

保 季

相坂やいまは夜寒の山風をわらやのところに誰しのふらん

右 勝

具 親

あふ坂の山吹こゆる秋風も聲をとゝむる關のすきむら

十四番

左 勝

家 長

秋風のふきくるかたやそれならん都の空もしら河のせき

右

慶 印

さひしさを誰にかたらむ秋風にひとり關もるあしからの山

十五番

左 勝

公 景

しら河の關の秋風立ぬなり都のかすみ月日へたてゝ

右

景 頼

春霞ともに立けん旅人のい口し風ふくしら河の關

十六番

左

長 明

むかしたれわひて住けん逢坂の關の秋風袂すゝしも

右 勝

季 景

秋はなをすまの關路の夕まくれ浦吹風の浪の音まで

十七番(詞欠)

左

季 保

かへるさの色はこすゑに契りをかし秋風立ぬ逢坂の關

右

宗 安

人こそあれ風は過ゆく浦路哉清見か關の秋の夕くれ

十八番

左 勝

秀 能

音羽山峯の木の葉やかはるらむ關路すゝしく秋風そふく

右

景 光

あはれ春かすみしものを相坂やせき路の杉に秋かせそ吹

一番

旅月開鹿

夜をかさね月に朝たつ旅衣きつゝなれゆく小男鹿の聲

左 勝

女 房

野への鹿そふるなくねは我ひとりいてし都も月は見るとも

二番

左 勝

左 大臣

わするなよかりねに月をみやきのゝ枕そ近きさをしかの聲

右

雅 經

草むすぶ露の枕に袖しきて月にしかなく小夜のなか山

三番

左 勝

内 大臣

よをこめてたつへきのへの名殘こそ鹿の音ながら有明の月

右

寂 蓮

都人月はへたてぬおもかけにならはぬものはきをしかの聲
四番

左勝

前權僧正

草まくらなみたもよほす鹿の音や今宵の月もくもるなる覽

右

有家

秋の空なをいひしらぬ旅ね哉よわたる月にきをしかの聲

五番

左勝

忠 良

まはらなるしはのかり庵に月もりて枕に近きさを鹿の聲

右

越 前

月寒み野への鹿の音身にじみてころも片しき旅ねをそする

六番

左

公 經

男鹿なくは山のしけり分くれて月に友とふ手枕の露

右勝

宮内卿

月影はきつゝもなれぬ旅衣すそのくばらかさをしかの聲

七番

左持

光 範

月のすむさゝ浪山に一夜ねてしかのなくねを枕にそきく

右

範 季

草枕かり庵てらす月のみかつまよふしかの聲もわりなし

八番

左持

小侍從

をかやふくたひねの床にもりくるは月や友なふさを鹿の聲

右

隆 信

月みてはなくさみぬへき旅ねにも猶袖ぬらすさをしかの聲
九番

左

讚 岐

草枕鹿のねそはぬ月にたになくさめかねしさらしなの山

右勝

釋 阿

船とむるあかしの月の有明に浦より遠のさほしかのこゑ

十番

左勝

丹 後

松かねのまくらに鹿の聲はして木の間の月を袖に見るかな

右

靜 賢

いかにせん月は隈なき旅の庵におほろに鹿の聲を聞かする

十一番

左持

寂 信

今宵たれ秋の野山に旅ねして月をなかめて鹿を聞聞

右

生 蓮

草まくらつけのゝ野への月影にむかしおほゆるさを鹿の聲

十二番

左

通 具

旅の空我とともになる月影に嵐もしかの聲送るなり

右勝

良 平

したひゆく我をも友に哀とや鹿なくみねに月残るらん

十三番

左持

保 季

月をみて都をいてしあらましにおもひしまゝの小男鹿の聲

右

具 親

おもひしりぬのへはすみかの鹿のねに草の枕の有明の月

十四番

左勝

家 長

月のすむあまの河原に宿かれはかたのゝ鹿も哀そふ也

右

慶 印

露むすふ旅ねの床にもる月を袖にうらむるさほしかの聲

十五番

左持

公 景

篠原や旅ねの月にふしわひて幾夜か鹿の聲恨らむ

右

景 頼

月影にいせのはま萩敷そめし昔もかくや鹿の鳴らん

十六番

左勝

長 明

草枕哀を袖にさき立て月にやとかれさほしかのこゑ

右

季 景

庵むすふ小のゝ篠原月さひてたへぬあまりに鹿の音する

十七番

左

季 保

鹿のねをすそのゝ原に先てゝ山路を送る有明の月

右勝

宗 安

月は猶都もすみき草枕かりにもきゝし鹿の聲かは

十八番〔判欠〕

左

秀 能

草枕月はくもらぬ袖の雨やすそのによはるさを鹿の聲

右

景 光

よもすから野への枕にすむ月のあはれをそふるさを鹿の聲

一番 故郷虫

左勝

女 房

飛鳥のあすかの宮のきり／＼す月やむかしの秋になく也

右

定 家

むかしへをしのふる里の淺茅生に今もや人を松虫の聲

二番

左勝

左大臣

高圓の尾上の宮の秋萩をたれきてみよと松むしの聲

右

雅 經

あれぬとて鳴かまかきのきり／＼すをのれ淋しき蓬生の宿

三番

左

内大臣

虫のねそかはらぬ秋の恨にてすみすてゝける淺茅生のさと

右

寂 蓮

住なれし宿はむかしのあさち原誰としりてか松虫の聲

四番

左勝

前權僧正

故里の秋の夢ちの關もりはみかきかはらの松虫のこゑ

右

有 家

あれぬなりたか住すてし宿なれやまかきの野への虫の聲々

五番

左

忠 良

いく夜へて虫のねしけくあれぬらんむくらの宿の秋の夕暮

右勝

越 前

たれきけとあれたる宿の蓬生に聲ふりたてゝ鈴むしの聲

六番

左勝

公 經

秋をへて幾夜もしらぬ故里に昔おほゆる松虫の聲
右 宮内卿
故郷の庭にてしりぬ虫のねをおもはん宿は草にまかせて
七番

左持 光 範

故郷のかきほはやかて虫のねの聲々しけき野へにそ有ける
右 範 季

つたへくる人もよりこぬ故郷にこゑの絶せぬきり／＼す哉
八番(判各)

左 小侍從

昔わかすみしわたりを尋ぬれはこたへ顔なるきり／＼す哉

右 隆 信

はかなしや誰に契りを深草の野となる里に松虫の聲
九番

左 讚 岐

我ひとりあるし顔にて故郷に人まつむしの鳴明すらん

右勝 釋 阿

むかしたにまかきものらと成し跡にたれまつ虫の今も鳴覽
十番

左持 丹 後

故郷の庵をは野へとなしはてゝ虫の音のみやあるし成らん

右 靜 賢

故郷は庭のむくらのほとよりも猶しけみなる虫の聲哉
十一番(判各)

左 寂 信

秋の夜は猶長岡の故郷に昔をしのふ鈴むしのこゑ

右 生 蓮
故郷の野らと成ぬる籬まで猶ぬし有と松虫のこゑ
十二番

左 通 具

あれにけり昔のかへのきり／＼すよもきか杣に聲を残れる
右勝 良 平

いにしへの高津の宮の跡ふりて虫の音のみそ秋を忘れぬ
十三番

左持 保 季

志賀の宮昔なからのきり／＼す誰手枕の跡おもふらん
右 具 親

跡もなき蓬か杣の庭の面にむかしにならふ松虫の聲
十四番

左 家 長

たかうへし一むらすゝき道絶て虫の音しけきのへと成らん
右勝 慶 印

さりとてまたのましものを故郷にこれやならひの松虫の聲
十五番

左持 公 景

かり人はのへとなるはかり住すてゝふりゆく里の鈴虫の聲
右 景 頼

あれはつる宿のあさちにふりせぬはむくらか下の鈴虫の聲
十六番

左持 長 明

住すてゝ人めかれにし浅茅生にたかならはせる松むしの聲
右 季 景

きて見れは思ひし宿のかたみかと庭のよもきに虫の聲のみ
十七番

左持

季保

故郷は野原の庭のものとみて猶心ある松むしのこゑ

右

宗安

宿はあれて庭はのへなる故郷にあるしとなりて虫の飽らん
十八番

左勝

秀能

今こんと契るともなき故郷に長き夜すから松虫のこゑ

右

景光

くちにけるまかきの跡に音つれて獨ときはの松虫の聲

一番

初戀

左持

女房

ならばすよ秋なれはとてをくか露かたしく袖の打しめる迄

右

定家

我戀はけふ初時雨もるやまにかはる下葉の秋のひとしほ

二番

左持

左大臣

すまの蜚のもしほの烟たちまちにむせふ思ひを問人のなき

右

雅經

けふよりや人に心をおきつ浪かけてもしらぬ袖の浦風

三番

左持

内大臣

習はねはまたしらね共これやさは怪しかるへき詠め成らん

右

寂蓮

けふこそはほのかに人をみしま江の芹の浦はの打萎れつゝ

四番

左勝

前權僧正

行末をおもふもかなしやかてさは涙にくもる秋のみかつき

右

有家

いつしかとふかきためしは紅の初花そめの一しほをみよ

五番

左

忠良

しらさりし戀に涙をかけそめてならはぬ袖をしほりそへぬる

右勝

越前

我戀はあさかの沼の花かつみかつゝ袖のしほれそめぬる

六番

左

公經

きのふまでよそに詠めし浦人のしほたれ衣袖もほしあへす

右勝

宮内卿

またしらぬ詠めは今宵いつか又ものや思ふと人にとはれん

七番

左持

光範

さゝれ石のなかの思ひを打いてゝ仄かにけふしらせ初ぬる

右

範季

獨ぬることはえならぬ物なれやあはせぬ胸をこかし初ぬる

八番

左

小侍從

物おもへは涙の色はかはるかと思ひになれたる人にとはゝや

右勝

隆信

しるへとて風のたよりをたのめとも猶跡もなき波の上かな

九番

左 讚 岐

右 釋 阿

しらせてもかひなかり鳧何せんに思ひ返さて色に出にけん
覺束なはつとやたしのかたかへりかりはのをのゝ戀の行末
十番

左 持 丹 後

右 靜 賢

いつよりか思合せんよひのいめに見えしは我そゝれ共
思ひかねけふふみそむるあ 〔 〕 いつれの誰かあふ坂の關
十一番

左 勝 寂 信

右 生 蓮

ほのかにもいがてしらせん逢夜迄うかひにくたす篝火の影
身に包むかひもあらしをよしさらは漏してをみんなの心も
十二番

左 勝 通 具

右 良 平

戀くさいつ花そめの袖の露いかになれてか色かはるらん
きのふ迄かくやは袖のしほれにしあやしや露の處せきまで
十三番

左 持 保 季

右 具 親

しらさりし歎きやこれと思ふよりうちぬる宵のたゝならぬ哉
人しれぬ思ひといふやこれならん我みよりこそ恨み初ぬれ
十四番

左 持 定 家

今日よりは烟をよそに思ふかは戀せしすまの蜚のもしほひ
慶 印

せかしたゝたえぬおもひの涙川いつしか袖は色かはるとも
十五番

左 持 公 景

右 景 頼

きえわたる雪まにみゆる初草のけふよりもえて物や思はん
おもひあまりけふふみそむる丸木橋わたる計の契りとも哉
十六番 〔 〕

左 長 明

春日のゝ雪も 〔 〕 かなおほえぬ袖の 〔 〕 の露

右 季 景

戀草の種まきそむる程もなくいつしか袖にむすふ露哉
十七番

左 季 保

右 宗 安

いかにせんおもひ立てもから衣なれぬにあらふ袖の玉水
見そめつるけさよりしける戀草にいつしか深き袖の白露
十八番

左 勝 秀 能

右 景 光

人しれぬ涙はけふそ初しくれいつしか袖の色に出にける
またしらぬ戀路とおもふやすらひに中々まよふ我心かな
一番 久戀

左 勝 女 房

今こんといひしはかりを頼みにていく長月をすくしきぬ覽

右 定家

宿りせぬくらふの山は夢路にてまと思ひの年そふりぬる
二番

左勝 左大臣

難波人いかなるえにか朽果んあふ事なみに身をつくしつゝ
右 雅經

年月はむなしき空に移りきてふるきなかめになれぬ
三番

左勝 内大臣

あちきなしこの [] こむ世のはてよいか []

右 寂蓮

みるめなきまくらの [] としふるあまも []

四番 左勝 前權僧正

戀しなて年も遙にみくまのゝ浦のはまゆふかさねきにけり
右 有家

しるらめやいつより袖のぬれそめてけふ徒に朽はてぬらん
五番

左勝 忠良

いくかへり涙しくるゝ秋をへてたえぬなきの色を染らん
右 越前

夏引の手ひきの糸の年へてもたえぬ思ひにむすほゝれつゝ
六番

左勝 公經

まちわひて三年も過る床の上に猶かはらぬは涙なりけり

右 宮内卿

住吉の千木のかたそきはすして久しきためし我をよにみよ
七番

左 光範

逢ことを今やゝとまつ山のまつにてのみや世をはつくさむ

右 範季

昔よりいもゆへ袖をしほりつゝみつはくむにもやゝ勝り鬼

八番 左 小侍從

いつまでとつらからさりし昔よりやすむまもなき我心哉

右勝 隆信

[] ことはむかしにあらはれて [] なみたの袖 []

九番 左 讚岐

契りおきしその [] 袖に我ななくちやはてなん

右 釋阿

[] 契りしものをいはのまつつる集くふ迄成にける哉

十番 左勝 丹後

百夜ともしちのまろねは頼めけりいつ我戀の限りなるらん

右 靜賢

おもひきやわかか浦にてみし人に老の浪まで袖ぬれんとは

十一番 左勝 寂信

頼めをけ今いくとせをまてとたに命をかけんその言のはに

右 生蓮

つゝいつの井つゝにかけし昔よりみつはくむまて思ふ心を

頼めをけ今いくとせをまてとたに命をかけんその言のはに

右 生蓮

つゝいつの井つゝにかけし昔よりみつはくむまて思ふ心を

頼めをけ今いくとせをまてとたに命をかけんその言のはに

右 生蓮

十二番

左勝

通 具

年をへて涙のみをにしつめともくちぬは戀の心なりけり

右

良 平

人心うきたのもりに引しめの幾年かけて朽はてぬらん

十三番

左持

保 季

年ふれはたのめ[]たえてむなしき庭に萩の上かせ

右

具 親

恨みてもかゝるおもひに[]つれなしとやは人はいふへき

左勝

家 長

くらへこしふりわけ髪のならへてもといひそめし[]

右

慶 印

年をへて[]しきたへの枕もうとくなりやはてなん

左勝

公 景

住吉のきしの姫松それならて幾世か袖に浪をかくらん

右

景 頼

いかゝせんとしふる戀を[]やそせの波の袖に[]

左持

長 明

岩の上のたねは[]おもふ[]

右

季 景

いくとせも[]さはさらすとして數ならぬとは思ひやはなき

十七番

左勝

季 保

涙のみふるの神杉いく世へてつらきしるしの猶のこるらん

右

宗 安

月影のたくひともなき我戀もつもれは人の老となりけり

左持

秀 能

[]おもひそめても[]

右

景 光

[]

撰歌合建仁元年八月十五夜

題

月多秋友

月前松風

月下擣衣

海邊秋月

湖上月明

古寺殘月

深山曉月

野月露涼

田家見月

河月似氷

作者

左

女房

左大臣正二位臣藤原朝臣

沙彌釋阿

俊成卿女

宮内卿

越前

丹後

散位正四位下臣藤原朝臣有家

沙彌寂蓮

從五位下行右馬助臣源朝臣家長

散位從五位下臣鴨縣主長明

正六位上行左兵衛尉臣藤原朝臣秀能

右

内大臣正二位兼行右近衛大將皇太子傳臣源朝臣

前權僧正慈圓

正二位行權大納言臣藤原朝臣忠良

參議正三位行左近衛權中將越前權守臣藤原朝臣公經

小侍從

讚岐

散位正四位下臣藤原朝臣隆信

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家

正四位下行左近衛權中將臣源朝臣通具

散位正四位下臣藤原朝臣保秀

從五位上守左近衛權少將臣藤原朝臣雅經

從五位下守左兵衛佐臣源朝臣具親

從五位上行準人正臣大江朝臣公景

講師

講師

判者

沙彌釋阿

一番 月多秋友

左勝

左大臣

月ならて誰かはしらむ君か代に秋のこよひのいくめぐり共

右

讚岐

今宵より千代のかけをそ數へつるて月なみの秋の半に

左右歌讀申訖。

判者。左勝之由申之。

二番 題同

左勝

寂蓮

高砂の松もむかしに成ぬへし猶ゆく末は秋の夜の月

右

前權僧正

君か代のかげにかくれぬ秋なれば月に千歳を契らましやは

右方兼申左歌宜之由。判者同爲勝。

三番 題同

左勝

女房

ゆく末の千歳の秋はいくめぐりなれても夜半の月を眺めん

右

雅經

いく秋を空に契て君か代にすさむかきりのあり明の月

左。千とせの秋いくめぐりの月。高振神妙之思。已希

古今之間。仍爲勝。

四番 題同

左

有家朝臣

君か代の契りおもへはひさかたや月の都のゆくすゑのあき

右勝

内大臣

行すゑを猶久方の秋の月なにかはうはの空たのめなる

左歌右方殊無申旨。

右歌左方。猶久方の月。近比きこえしうへに。すゑの句

すこし戀の歌にかよへる所や侍るらんと申せと。右方

の二句なとはさりあふへきにあらすと。判者戀心にか

よへるも。中々にめつらしきすかた侍りとて。勝と定申

了。

五番 題同

左勝

宮内卿

行末もいく代の秋の友なれやなれてもあかぬ山のはの月

右

公經卿

年を経ておなし雲井にいくめぐり變らぬ秋の月をみるらん

判者。右歌ともの心すこしおほつかなくやとて。以左

爲勝。

六番

左勝

女房

庭のまつ木のまもりくる月影に心つくしの秋風そふく

右

權大納言

雲るにてなれし月にや契をきてはこやの山の萬代の秋

右の下句この間侍し歌也と。左方申之。判者以左爲

勝。

七番

左勝

左大臣

秋の夜のひかりもこゑもひとつにて月のかつらに松風そ吹

右

隆信朝臣

君ならてたれかちきらん秋の月ともにすむへき萬代のかけ

左は歌のすかたたかく。右は祝の心ふかしとて。爲持。

八番

左勝

釋阿

月の影しきつの浦のまつかせにむすふ氷をよする浪哉

右

内大臣

これやこの月をみとりのまつか枝に秋吹風の身にもしむ色

判者以右爲勝。但左歌ことによりしくきこゆ。可勝

之由。左右共定申。

九番

左勝

宮内卿

月すめは空もみとりにおなし色の松をしらす嶺の秋かせ

右

通具朝臣

をとこそあらめ泪もいかにしくるらん月に冴たる峯の松風

判者以左爲勝。

十番 題同

左勝

俊成卿女

月にたにあくかれはつる秋の夜の心のこさぬまつの風かな

右

具親

くもりなく山のはまてとはらふ也月より西の峯のまつかせ

右の月より西。此ころあまたきこゆるうへに。左の心の

こさぬ松の風。ことよろしく侍は。可爲勝之由。判

者申之。

十一番 題同

左勝

寂蓮

月は猶もらぬ木のまも住吉の松をつくして秋かせそ吹

右

保季朝臣

はる／＼と波より松にかへり來て月にこたふるよきの浦風

よきのうらかせ。住吉の松にをよひかたしとて。以爲勝。

爲勝。

十二番 題同

左勝

鴨長明

なかむれはちゝに物思ふ月にまた我身ひとつの嶺の松風

右

小侍從

すみよしの月はしきつの浦波に松ふく風も神さひにけり

松ふく風の神さひにける心。誠によみふりて侍るうへ

に。我か身ひとつのみの松風。めつらしとて。以爲左勝。

爲勝。

十三番

左勝

左月下擣衣
右月前松風

宮内卿

まゝとろまで詠めよとてのすさみ哉麻のさころも月にうつ聲

右

前權僧正

秋は月つきすむ夜半は松の風いかに詠めていかにしのはむ

右の松のかせもいふに侍れと。なかもよとてのすさみ

なとをける。あさのさ衣月にうつ聲。身にしみて聞ゆと

て。左をもちて爲勝。

十四番 月下擣衣

左勝

女房

あさちふの月ふく風に秋たけてふる里人は衣うつなり

右

定家朝臣

秋かせによさむの衣うちわひぬふけゆく月のをちの山もと

右歌よはくきこゆるうへに。左の歌ことよろし。より

て爲勝。

十五番 題同

左勝

左大臣

さとはあれて月やあらぬと恨みても誰あさちふに衣うつ覽

右

通具朝臣

さよふけてさらては色もこゑもなしたゝ月影に衣うつさと

左歌殊によろし。仍爲勝。

十六番

左勝

俊成卿女

波のうへはちさとのほかに雲さえて月影かよふ秋のしほ風

右

讚岐

すか原やふしみの里も秋の夜は月におきゐて衣うつ也

又以爲左勝。

十七番 題同

左勝

越前

きのくにや秋さへ霜をおきつかせ吹あけの月の有明の空

左勝 鴨長明

かりにこん人のためとやてる月に衣うつらむ深草のさと

右 讃岐

吹上の月。なすらへならすおかしきこゆきて。又勝とす。

松嶋やしまのあまも心あらは月にや今宵袖ぬらすらん
左歌殊によろし。仍爲勝。

十八番 題同

左勝

宮内卿

心あるをしまのあまのたもと哉月やとれとはぬれぬ物から

右

内大臣

君ゆへに恨むるつちの音はしていかなる里の月を見るらん
月やとれとはぬれぬものから。又かきりなくおかしと
て。勝とす。

十九番 海邊秋月

左持

釋阿

たとへてもいはんかたなし明石かた秋の中の波のうへの月

右

小侍從

おきつ風ふけるの浦による浪のよるとも見えす秋のよの月
又々可爲持。判者申之。

廿番 題同

左持

丹後

わすれしな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月は見るとも

右

雅經

秋は今宵浦はあかしの波の上にかゝる月をはいつか眺めむ
あかしの波かゝるなど。より所なきにはあらねと。こと
浦にすむ。めつらしくおかしとて。持と定申。

廿一番 題同

廿二番 題同

左

藤原秀能

あまのやくもしほの煙我からに時しもわかすおほるなる月

右勝

内大臣

あま人も月に心のあれはこそなたかき秋をまつか浦嶋
左の月のおほるなるはかり。歌のさまをしらす。右かち
とすへきよし。これを申。

廿三番 湖上月明

左勝

丹後

よもすから浦こく船は跡もなし月を残れるしかのからさき

右

内大臣

夜もすからひらの山風うみふけは月もてよする志賀の小波
うみふけはなど。こたいなるさまに侍れとも。めつらし
き所なければ。猶以左爲勝。

廿四番 題同

左勝

女房

からさきやにほの水うみ水の面に照る月なみを秋風そ吹

右

讃岐

をちかたや雲もへたてぬ志賀の浦の波と空とにすめる月影
にほの水うみの水のおも。めつらしとて左爲勝。

廿五番 題同

左 釋 阿

右勝 前權僧正

にほてるや月の氷はしかの浦に猶さゝ波のかすは見えけり
しかの浦にわきてや月のやとらん曇らぬ神の跡を尋ねて

廿六番 左古寺殘月 右湖上月明

左勝 釋 阿

又たくひあらしの山のふもと寺杉のいほりにありあけの月
右 雅 經

からさきや秋のこよひをなかわれは照る月浪にうら風そ吹
右のてる月なみ。さきの左歌にむけにをとりてきこゆ
とて。また左をもて爲勝。

廿七番 左勝 題同

左勝 藤原秀能

はつせ山あかつきかけていつる月やかて木のまに有明の空
右 具 親

月きよみ波のよそなるうき雲も行ふあとなきしかの浦かせ
左歌又宜。仍爲勝。

廿八番 古寺殘月

左 宮内卿

秋は猶おほつかなしや初瀬山このうれもとにのこるよの月
右 公經卿

れ覺とふかねよりおしきなめ哉をはつせ山の有明の月
左のこのうれもと。ことにきゝならはす侍れと。右又め
つらしき心侍らねは。なすらへて爲勝持。

廿九番 題同

左勝 鴨長明

右 具 親

はつせ山かねのひゝきにおとるけはすみける月の入方の空
これやこの残るひかりの影ならんたかのゝ山の有明のつき
をのゝ申ていはく。左歌かねのひゝき。入かたの月。
猶夜ふかくは。殘月の心いかゝ侍らん。又陳云。遊子猶
行殘月なといふも。たゝ曉月也。曉月殘月。その心こと
にわくへからぬにや。猶歌のさまよろしとて。勝とすへ
きよし。判者はを申。

卅番 深山曉月

左 女 房

すみなれてたれ我やとゝ眺むらんよしのゝおくに有明の月
右勝 前權僧正

よし野山月はたかねにかたふきてあらしにのこる鐘の一聲
左深山たゝおもひやるはかりなり。おなしくはわれす
みてみんやまさるへく侍らんと定申。

卅一番 題同

左勝 左大臣

深からぬとやまの庵のね覺たにさそな木の間の月は淋しき
右 雅 經

人はこてまきのはわけの月そもるみやまの秋の有明の頃
左右ことなる事なし。仍爲勝持。

卅二番 題同

左勝 宮内卿

まちえても明やらぬ夜の月は猶道たとゝしみやま木の陰
右 權大納言

よし野山すゝふきみたる秋風にたれしのへとて有明の月
みちたとくし。すゝ吹みたる。ことにいふにしもきこ
えず。仍爲レ持。

卅三番 題同

左持

俊成卿女

秋のよのふかきあはれをとゝめけりよしのゝ月の有明の空

右

内大臣

あはれなり鳥もとせぬ山なれば明もしらす秋のよの月

又ことなる事なし。持とすへきよし定申。

卅四番

左勝

有家朝臣

はなをのみおしみなれたるみよし野の梢におつる有明の月

右

内大臣

しら露にあふきををきつゝ草の原おほる月夜も秋隈なほに

右歌幽玄の事に思ひよりて侍れと。左うるはしく。よろ

しき歌也とて。爲レ勝。

卅五番

左勝

鴨長明

よもすからひとりみやまのま木のはに曇るもすめる有明の月

右

定家朝臣

をきあかす野へのかり庵の袖の露已か住家に月さへそゆく

左歌ひとりみ山のま木の葉にくもるもすめるなど。も

ともよろし。仍爲レ勝。

卅六番

左勝

野月露涼

女房

月すめは露を霜かとみやきのゝ萩原は猶あきのかせ

我とたにやとりかねたる秋風の野原の露に有明の月
右やとりかねたるは。春影供歌合の中に。湖上霧の歌に
侍しにや。宮城野の秋風いとおもしろく聞ゆとて。以レ左
爲レ勝。

右

卅七番

左勝

題同

秋の野のしのに露をくすゝの庵はすゝろに月もぬるゝ貌なる

右

左大臣

草枕月すむのへのしら露にまたひとへなるたひころも哉

右

前権僧正

しのに露をく。よろしく聞ゆ。仍左爲レ勝。

卅八番

左勝

題同

あさち分やとる月さへ影さむき露ふかくさの野への秋風

右

俊成卿女

袖のうへにふけゆく月の影なからつゆ吹むすふ野への秋風

右歌

よろしくきこゆれと。左歌又をとらすおかしとて。

爲レ持。

卅九番

左勝

題同

わくるたに寒けき野への白露によかれすやとる秋のよの月

右

越前

月やとる床は草葉のかり枕をきあへぬ露にのへの秋風

よかれすやとる。殊によろし。よりて爲レ勝。

四十番

左勝

左野月露涼
右田家良月

藤原秀能

おき原や露を秋風吹からに袂をならすありあけの月

右 隆信朝臣

かと田ふく風のあはれをよそとて月より外に訪人もなし

つゆをあきかせといへるわたり。又尤可_レ爲_レ勝。

四十一番 田家見月

左勝 女房

宿近き山田かりいほのいなむしろたれしきなれて月をみる覽

右 通具朝臣

鹿のねは馴にけらしな小田の庵に露なきあかし月はもれ共

山田かりいほのいなむしろ。しく物なくおかしきこ
ゆとて。又爲_レ勝。

四十二番 題同

左 藤原秀能

わき田もるとこの秋風吹そめてかりねさひしき山のへの月

右勝 定家朝臣

さをしかの妻とふを田に霜をきて月影さむしをかのへの宿

右柿本古風を思へり。山の邊の夜月にまさと定申。

四十三番 題同

左勝 左大臣

秋の雲しくとはみれといなむしろ伏見の里は月のみぞすむ

右 具親

いつれとも思ひきためぬれ覺哉いなはの風に秋の月かけ

左歌秋浮_{（釋イ）}雲をなせる心。海邊月歌。すかた詞もいと
おかしとて。勝と定申。

四十四番 題同

左勝 俊成卿女

稻葉ふく風にまかせてすむ庵は月そまことにもり明しける

右 前權僧正

かりのくる伏見のを田に夢さめてねぬ夜の庵に月をみる哉

左歌又優也。仍爲_レ勝。

四十五番 左河月似氷
右田家見月

左勝 左大臣

これも又神代はきかす立田河月の氷に水くゝるなり

右 内大臣

いなむしろかり田の庵に月すめはしき忍ふへき袖の露かは

月の氷に水くゝる心おかしく聞ゆるうへに。いなむし
ろかり田とつゝけたる。いかゝとて。以_レ左爲_レ勝。

四十六番 河月似氷

左 釋阿

千鳥なく河かせさむみ月さえて氷は秋のものにそ有ける

右勝 前權僧正

よしの川月をやとして行水はをとばかりこそ凍らさりけれ

左の氷は秋のといへる。思へる所なし。仍以_レ右爲_レ勝。

四十七番 題同

左勝 越前

月影はこほりと見えてよしの川岩こすなみに秋風そふく

右 雅經

月影やいかにさえゆく薄氷なみはたつたの秋の川かせ

いかにさえゆくうす氷。くたけて聞ゆ。よりて左勝とす。

四十八番 題同 寂蓮

月きよみこほりはてたるやま川のせゝにつれなき水の白浪

右

通具朝臣

月のすむ河せのなみはさむからて冬にしられぬ氷のにけり

又以左爲勝。

四十九番 題同

左勝

家 長

網代木にいさよふ波のをとはして月影こぼるうちの河かせ

右

保季朝臣

いは間には浪はさすかにたつた川月はまことの氷ならねは

右いは間にはなみはきえにくきにや。以左爲勝。

五十番 題同

左勝

俊成卿女

おほ井川るせきにかよふ波のをとは凍らてこぼる川の影哉

右

定家朝臣

すみわたる月かけ清みみなせ川むすはぬ水を氷りとそみる

こほらてこぼる。ことよろし。又以左爲勝。

影供歌合建仁二年五月廿六日

題

曉聞郭公

松風暮涼

遇不會戀

作者

左

左馬頭藤原親定

左大臣

内大臣

前權僧正慈圓

權大納言藤原忠良

前權中納言藤原隆房

權中納言藤原公繼

參議藤原公經

右中將源通光

沙彌釋阿

俊成卿女

散位藤原隆信

右馬助源家長

講師

講師

衆議判

一番 曉聞郭公

左勝

右

權中納言藤原兼宗

參議源通具

女房宮内卿

女房伯耆

女房越前

散位藤原有家

左近衛權少將藤原定家

散位藤原保季

上總介藤原家隆

左兵衛佐源具親

沙彌寂蓮

散位鴨長明

左兵衛少尉藤原秀能

内大臣

横雲のたな引山の郭公なく一聲にしらみ出ぬる

右 越前

うちつけに物かなしきはほととぎす雲間にまよふ曉のころ

二番

左勝 權大納言藤原忠良

時鳥夜半にまたれて有明のねられぬ月に雲路行聲

右 左兵衛佐源具親

郭公雲のいつくもあり明のつきせぬ聲の名残なるらん

三番

左勝 左馬頭藤原親定

今こんとたのめやをきしほととぎす月そ待いつる有明の聲

右 散位有家

ほととぎす雲のいつくに有明の

四番

左勝 前權僧正

尋ねつるかひも有明の郭公月にたひねの雲になくなり

右 左近衛權少將藤原定家

郭公なく一聲のしのゝめに月のゆくゑもあかぬ空かな

五番

左勝 左大臣

月にゆくせきの旅人出ぬらし山に友なふほととぎすかな

右 上總介藤原家隆

今はとやをちかへり鳴ほととぎすをのか五月も有明の山

六番

左持 前中納言藤原隆房

明はてはいたくな啼そ郭公またておきぬる人もこそきけ

右 女房伯者

五月雨に明やらぬ空のほととぎすかさなる雲の空に鳴也

七番

左持 參議藤原公經

郭公なく程なくて有明の雲のいつくに聲うつるらむ

右 參議源通具

郭公よはも名残や忍ふらんを明やらぬ一聲のそら

八番

左持 權中納言藤原公繼

明るまの雲の外にぞ聞ゆなるまた里なれぬ山ほととぎす

右 權中納言藤原兼宗

またれつる心のほととぎす郭公見よとや來なく明かたの空

九番

左勝 俊成卿女

ほととぎす鳴行なみたのこしけりわかたまくらの方の空

右 沙彌寂蓮

時鳥有明の月の入かたに山のはいつる夜半のこゑ

十番

左勝 左近中將源通光

ほととぎすあかぬ名残も有明の月をはなれて遠さかる聲

右 散位藤原保季

有明の月こそ雲の空ならめ聲もおほろのほととぎす哉

十一番

左勝 沙彌釋阿

あはれいかゝおりしもきつる郭公雲間の月の有明の空

右 女房宮内卿

郭公名残はさてもおもほえてあかていく野のあかつきの聲
十二番

左勝

右馬助源家長

郭公なくや五月をかそふれは今いくよかは有明のこゑ

右

左兵衛尉藤原秀能

五月山おりはへてなけ郭公夏もふけ行ありあけの空
十三番

左持

散位藤原隆信

またよひの月そ待つるほとゝきすなく一聲に有明のそら

右

散位鴨長明

せきすへぬならひはなそや夏のよの山ほとゝきす入方の月
一番

左

親 定

夏山のしかにつけこせ松の風尾上にいまは秋の夕くれ

右

有家朝臣

高砂のおのへの暮になかむれは秋風いそく松のむら立
二番

左持

左大臣

松にふく風になかるゝたたつた川木葉はかりや秋の夕暮

右

家隆朝臣

暮行は風は秋なるふるさに色こそ見えね松の下草
三番

左持

内大臣

たゝならぬ夕まくれ哉思ふにも松ふく風の音は身にしむ

右

越 前

すゝしさはいつくと風のわかねとも野中の松の夕暮の聲

四番

左勝

前權僧正

山かけやむすふ岩井の水の面に秋の浪たつ松の夕風

右

定家朝臣

暮ぬるか夏の空さへをしほ山松よりつたふ風の下かけ
五番

左勝

權大納言

柴の戸にさすやこのまの夕つくひ影も涼しき軒の松風

右

具 親

木のまより風も涼しく成ぬるか月のみいまはもりの下かせ
六番

左持

隆房卿

山をいつる月のかつらにかよふらしたもとなるゝ松の下風

右

伯 耆

今さらに夏やなからん一聲の秋にそかよふ松の夕風
七番

左持

公繼卿

木末よる日影やにしに成ぬらん涼しさまさる松の風哉

右

兼宗卿

松風はことのねにこそきこゆなれ秋にもかよふ夕間暮かな
八番

左

公經卿

たかさこの尾上の松の夕すゝみしかなきぬへき風の音哉

右勝

通具朝臣

月をこそかはらすすめとまつ山の松よりこえて秋風そふく
九番

左勝

通光朝臣

夕まくれ秋とやは今はまつの風すゝしくかよふ蟬の羽ころも

右

保季朝臣

さらねとも夕波すゝしまたきより秋となつけそ磯の松風

十番

左勝

釋阿

夕かせの枝しつかなる松かけにかねてしらるゝ千代の秋哉

右

宮内卿

夕附日さすや梢をよそにみて山かけすゝし庭の松かせ

十一番

左勝

俊成卿女

大かたにきかまし風の夕さへわか身ひとつの松の音哉

右

寂蓮

さをしかや猶秋まてと忍ふらん夕はいまも松にふくかせ

十二番

左勝

隆信朝臣

ゆふまくれ岩井の水は結はねと夏なきとしの松風の聲

右

鴨長明

風もよし夕日をさへて松たてる夏をいとはゝ佳のえの濱

十三番

左勝

家長

松風にこたふおのへの鐘の聲すゝしくひゝく入相の空

右

藤原秀能

月すめはいまた夏なる夕すゝみ秋とも吹か松の下かせ

一番

遇不會戀

左勝

左大臣

これまでもさそな昔のならひ哉待夜いまはのかたしきの袖

右

家隆朝臣

忘れしの行末かはるけふまでもあればあふ夜を猶頼みつゝ

二番

左勝

親定

わすらるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月は出にけり

右

有家朝臣

いはさりき頼めてとはぬ夜なゝをこれは情そ後忍へとは

三番

左持

前權僧正

枯はつるうつゝこそあらめいかにせん夢も冬野の浅茅原哉

右

定家朝臣

我戀は雪ふりうつむ小菰原うつるふ露をうらみし物を

四番

左持

公繼卿

忘れしとたのめし事と頼むやと見えんことさへ今は悔しき

右

兼宗卿

逢みての後こそ人もつられければ唯我からのねをのみそなく

五番

左持

内大臣

忘るなよ忘れしところ契りしをたか偽りになせとかは思ふ

右

越前

今こんといひし計に夜比へてむなしき床に有明の月

六番

左持

釋阿

浅ましやかへてしやまは山城のゐての玉水何むすひけん

右

宮内卿

たれとまた別れもやらてなむ覽月も出ぬとおしみし物を
七番（判欠）

左

權大納言

ふみ分し庭はあさちに跡たえてはらひし夜半の露は袂に

右

具親

せめてかく物思へとのあまりにや忘るなとたに契り置けん
八番

左持

俊成卿女

夢かとも見し面影も契りしも忘れすなからうつゝならねば

右

寂蓮

里はあれぬ空しき床のあたりまで身はならはしの秋風そ吹
九番

左勝

隆房卿

見すもあらずみもせぬ程の詠めたにさこそ昔は日を暮しけれ
右

伯耆

なからふとまたしもあばし世中のいきて歎かぬ我身なり共
十番

左持

通光朝臣

かたみとてまなくもちるかしかすかに馴しなこりの袖の白露
右

保季朝臣

かたみとてほのふみ分し跡もなし今はむかしの庭の萩原
十一番

左勝

隆信朝臣

中々にとまるにつけてつらき哉わすれかたみの袖のうつり香
右

鴨長明

待なれしなこりはかりのうたゝねに面かけ誘ふ玉たれの月
十二番

左勝

公經

中々にあふ道芝のかれはては行てにかゝる物はおもはし
右

通具朝臣

みわの山たれ頼めけん忘れられてふるの神杉しるしたになし
十三番（判欠）

左

家長

年もへぬわれや行けん君やこしそのかよひちは若生にけり
右

藤原秀能

つらかりし名残やさてもやみなゝん袖のせはきにふる泪哉

水無瀬釣殿當座六首歌合建仁二年六月

作者

藤原朝臣定家

藤原朝臣親定 後鳥羽院御作名

判者

藤原親定

一番 河上夏月

左

定家朝臣

たかせ舟下す夜川のみなれさをとりあへすあくる頃の月影

右

親定

いかたしのうきね秋なる夏の月きよ瀧川にかけなかるなり

左の歌。くたす夜川のみなれ棹。とりあへすあくらん頃の

の誠に名残おほかるへし。右の歌さしたる事なしとい

へとも。しはらく持なとにや侍へき。

二番 海邊見螢

左

定家

すまのうらもしほの枕とふ螢かりれの夢路わふと告こせ

右

親定

津の國のあしやの里に飛螢たか住かたのあまのいさり火

左の歌行平のちうなこん。もしほたれ侘げんすまの浦。

誠に面影も有心地して。有かたく侍るうへに。秋風吹と

かりに告こせなといへる。古歌思ひ出られ。結句なとこ

とにやさしく侍り。右の歌詞めつらしからさる上に。初

の五文字ことさらこひねかふへくもなかるへし。

三番 山家松風

左

定家

松風や外山をこむるかきねより夏のこなたにかよふ秋かせ

右

親定

柴の戸をあさけの夏の衣手に秋をともなふ松の一こゑ

左の歌夏のこなたにかよふ秋風。めつらしく侍れとも。

またあなちには聞えず。右の歌夕なとや。松風ともな

ふへき柴の戸をあさけの衣。頗よせなきに似たるをや。

四番

初戀

左

定家

春やときとはかりきし鶯のはつ音をわれとけふやなか南

右

親定

おほかたのゆふへは里のなかめより色付そむる袖の一しほ

左の歌初戀の心珍らしく侍へし。右の歌上句少しさも

やきこえて侍れと。いかさまめつらしからす。左少勝。

五番

忍戀

左

定家

夏草のましろしけみにきえね露をきとめて人の色を社みれ

右

親定

歎きあまり物やおもふと我とへは先しる袖のぬれて答ふる

左の歌ましろしけみにきえね露といへるわたり。返々

おかしくこそ侍れ。爲勝。

六番

久戀

左

定家

幾世へぬ袖振山のみつかきにたへぬ思ひのしめをかけつと

右

親定

思ひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕ぐれの空

右の歌。無指事。又さしたるとかなくは。一番なとは可

勝歟。

群書類從卷第百九十三

和歌部四十八歌合十四

水無瀬殿戀十五首歌合建仁二年九月十三夜

題

春戀

夏戀

秋戀

冬戀

曉戀

暮戀

蜀中戀

山家戀

古郷戀

旅泊戀

關路戀

海邊戀

河邊戀

寄雨戀

寄風戀

作者

左馬頭藤原親定後昌羽院

左大臣良經

前大僧正慧圓

權中納言公繼

俊成卿女

宮内卿

大藏卿藤原有家

左近衛權少將藤原定家

上總介藤原家隆

左近衛權少將藤原雅經

讀師

家隆朝臣

講師

定家朝臣

判者

皇太后宮大夫入道釋阿

當座付二勝負二追加二判詞一

一番

春戀

左勝
驚の水れる涙とけぬれと猶我袖はむすほれつゝ
左大臣

右

俊成卿女

おもかけの霞める月そやとりける春やむかしの袖の涙に
左歌は雪のうちに春はきにけり驚のといへる歌をとり。
右歌は月やあらぬ春やむかしのといふ歌の心也。とも
にえんにはみえ侍るを。左なを我袖はむすほれつゝと
いへるすかた。殊によりしく見え侍れは。以左爲勝。

二番

左勝

親定

月残る彌生の山の霞む夜をよしとつけよまたすしもあらず

右

宮内卿

さても又慰やとてなかむへきそなたの空も薄かすみつゝ
右の歌。さても又とをけるより。すかたおかしくはみえ
侍るをうす霞つゝといへる末の句や。舊くもいひならは
しても聞えずや侍らん。左彌生の山のかすむ夜をなと
いへる心すかたいみしく見え侍り。もとも勝とすへし。

三番

左持

有家朝臣

夢にたにみぬ夜な／＼を恨みきて衣はる雨しほれてそふる

右

雅 經

人しれすをさへてむせふひまことに涙打いつる袖の春かせ
左衣春雨しほれてそふるといへる詞。よせおほく見え
侍り。右又彼とくる氷のひまことにといへる歌の心を。
戀に引なして。涙打いつる袖の春かせといへる。左はよ
せおほく。右はえんにみゆ。仍なすらへて持とすへし。

四番

左勝

定家朝臣

忘れめや花にたちまよふ春霞それかと計見えし明ほの

右

家隆朝臣

恨みても心つからのおもひ哉うつろふ花に春のゆふくれ
左はそれかと計見えし明ほの。右はうつろふはなにはる
の夕くれとよめる。すかた心ともによろしくは見え侍
るを。勝負此つかひは時の衆儀にや侍らんと申を。左の
勝と定られ侍し也。

五番

左勝

前大僧正

戀もせてなかめましかはいかならん花の梢におほる月夜を

右

權中納言

思ひきや匂ひを送る梅かえの移りかをのみにしめんとは
左なかめましかはいかならんとをきて。花の梢に臘月夜
をといへる。心すかたいみしくおかしく見え侍り。右お
もひきやとをきて末に何とせんとはなといへる事。常の
事にやと人々申され侍りしかは。左をもて勝と定申侍
りし也。

六番 夏戀

左勝

親 定

さてもいかに岩かき沼のあやめ草あやめもしらぬ袖の玉水

右

俊成卿女

はかなしや夢も程なき夏の夜のねさめ計の忘れかたみは
寢覺はかりの忘れかたみはさいへるも。優ならざるに
はあらず侍るにや。しかあれとも。さてもいかにとをき
て。あやめもしらぬ袖の玉水といへる。物のあやめしる
はかりの者の。いかゝよろしからすとは思ひ侍るへき。
以て左爲勝。

七番

左

宮内卿

みに餘る思ひをさても夏虫のわれひとりとや色にいつへき

右勝

有家朝臣

忍ひあまりなくや五月のあま雲のよそにてのみや山郭公
左はみにあまるといひ。右は忍ひあまりといへるこゝ
ろは。ともにゆうならざるにはあらず侍るを。左は我ひ
とりとや色に出へきといひ。右はよそにてのみや山ほ
とゝきすといへる文字つゝき。すこしはまさるへきに
や侍らん。

八番

左持

權中納言

よそにては軒の橋かほる夜にむかし語りをしふとやみむ
右
きかし只人待山の郭公我もうちつけのさよの一こゝ
左歌心かすかには侍れと。すかた詞ゆうに侍るを。右歌

雅 經

始にきかしたゝといへるは。あまりなるやうに侍れと。
末の句など。今すこし心有て聞え侍るにや。なそらへて
持とすへし。

九番

左勝

左大臣

草ふかき夏野分行きをしかの音にこそたてね露そこほるゝ

右

家隆朝臣

時そとや夜半の螢をなかむらんとへかし人のしたの思ひを
左歌よそへいふすかた詞。誠におかしくこそ見え侍れ。
右歌とへかし人の下の思ひをといへる。またよろしく
は侍るを。句のはしめのとの字。ふかき難には侍らね
と。歌合には只なるよりは耳にたつやうに侍るうへに。
なを左の音にこそたてね露そこほるゝ。もとも勝へき
にや侍らん。

十番

左持

前大僧正

夢にたにかさねそかぬる夏衣かへすとすれは明るしのゝめ

右

定家朝臣

郭公空につたへよ戀わひてなくや五月のあやめわかすと
左かへすとすれは明る東雲。まことにおかしく見え侍る
を。右空につたへよ戀わひてなくや五月のなといへる。
文字つゝき。あしからす侍るにやとて。れいのをのゝ
ため申侍りて。持にまかりなりにし也。

十一番

左

親定

よしやさは頼めぬ宿の庭に生るまつとなつて秋の夕かせ

右勝

前大僧正

野への露は色もなくてやこほれつる袖よりすぐる萩の上風
左歌よしやさはといへるより。待となつて秋の夕か
せ。心詞まことにおかしくは見え侍るを。右歌又色もな
くてやといひ。袖より過る萩のうはかせ。いみしくおか
しく侍るを。猶勝負中へきよし侍しかは。左劣るへしと
は覺え侍らすなから。右の勝へきにや侍らんと。めつら
しからん爲に。殊更に申侍りし也。まことにかたはらい
たくこそ侍りしか。

十二番

左

權中納言

わか心いかにかすへききらぬたに秋の思ひはかなしき物を
右勝

右勝

定家朝臣

今宵しも月やはあらぬ大かたの秋はならひを人そつれなき
兩首ともに秋のおもひに堪さる心はおなしきを。左は
潘岳か秋興賦の心にも侍らん。悲しきものをといへ
るや。やすらかならんと聞ゆるを。右は心猶あるさまに
やと聞え侍りしかは。勝になり侍りし也。

十三番

左持

俊成卿女

なき渡る雲の鴈の涙さへ露をく袖の夜半のかたしき
右

右

雅經

なめしや心つくしの秋の月露のかことも袖ふかきころ
左雲の鴈の涙さへなといへる。心すかたよろしくは
侍るを。右又露のかことも袖ふかきころといへる末の
句など。おかしく侍れは。持とすへきにや。

十四番

左

左大臣

せく袖に涙の色やあまるらんなかむるまゝの萩の上の露

右勝

有家朝臣

物思はてたゝおほかたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を

兩首の心すかた。ともにいとおかしく見え侍るを。しゐ

て委細に申へきむね侍りしかは。左せく袖にと侍るや。

末に萩の上の露と侍るに。しゐてかなはずやと申侍り

し。右はたゝおほかたの露にたにといひて。ぬるれはぬ

るゝ秋の袂をといへる。よろしくや侍らんさて。勝にな

されしにや侍らん。

十五番

左

宮内卿

物思ふたもとはいはす鹿のねはたゝおほかたのね覺なり梟

右勝

家隆朝臣

思ひ入身は深草の秋の露たのめし末やこからしの風

左歌心すかたや〔さ〕しくは見え侍るを。右歌みは深草の

秋の露といひ。たのめし末やこからしのかせといへる

心。なをよろしく侍らんとて。勝になり侍りし也。

十六番

左

左大臣

芦鴨のはらふ翅に置霜のきえかへりてもいく世へぬらん

右勝

雅經

霜ははや布留の中道中々にかれなて人を何したふらん

左歌心ことはよろしく。とかなく侍りけるを。右ふるの

中道中々になといひ。かれなて人といへる。すかたお

かしくやとて。勝にまかりなりにしを。けさしつかにみ

給へ侍れは。冬草ともあさちさもなく。只中道かれな

てといへる。いかゝと申へくやさ見え侍れとも。勝に定

り侍りにけり。

十七番

左勝

宮内卿

落つもる涙の露はさよ衣さらても袖にみえけるものを

右

有家朝臣

しはしこそよそにみきはの薄氷とけてはやまし結ほるゝ共

左さらても袖になといへる。すかたふるまひ。まことに

勝に侍りけり。

十八番

左勝

親定

うつり行まかきの菊と折々はなれこしころの秋をこふらし

右

權中納言

冬の夜は幾度ばかり寢覺すといふもまところむひまやかな覽

左歌。まかきの菊も折々はなとよせおほく侍り。すかた

まことに有かたのみみ覺侍るを。右歌増基法師か歌の心

もおかしく侍るを。上の句残りなくなりて見え侍る上

に。戀の心もすくなくや侍らんとて。右の負になり侍り

にし。

十九番

左勝

前大僧正

いたつらに千鳥鳴なる河風におもひかねても行かたそなき

右

家隆朝臣

戀をのみ営のねしのきふる雪の消たにやらす山もしのゝに

左おもひかねてもゆくかたそなき。いみしくおかしく
みえ侍るを。右すかのねしのき降雪のといへるは。よろ
しく侍るを。末の句山もしのゝにや。ふるき詞に侍れ
と。しゐて庶幾すへからすや侍らんとて。左かち侍りし
なり。

二十番

左勝

俊成卿女

かよひこし宿の道柴かれゝに跡なき霜のむすほれつゝ

右

定家朝臣

床の霜枕の氷消倦ぬむすひもをかぬ人のちきりに
左歌心すかたよろしく侍るへし。右歌も床の霜枕の氷
なといひて。むすひもをかぬといへるもゆうには侍れ
と。左猶よろしく侍れは勝になりき。

廿一番

左勝 曉戀

左勝

家隆朝臣

忘れすいまはの心つくはねの峯のあらしに有明の月

右

雅經

涙さへ鳴の羽かきかきもあへす君かこぬ夜のあかつきの空
左はいまはの心つくはねのといへる心よろしく。右は
しきのはねかきかきもあへすといへる。彼君かこぬよは
我そ數かくといへる歌をおもへるも。ゆうには侍れと。
左の峯の嵐に有明の月。猶まさり侍るへし。

廿二番

左勝

親定

白露のをきてわひしき別れをも逢にそかこつ有明の月

右

有家朝臣

またこんといひて別れしなこりのみなかむる月に有明の空
左は逢にかこつ有明の月。右はなかむる月に有明の空。
いくほとのことには侍らぬを。上の句こそ殊外に侍りけ
れは。右彼今こんといひし計に長月のといへるはいみ
しく侍るを。又こんといへるは事の外に劣てそ聞え侍
るなり。左しら露のをきてわひしきなど。勝侍るへし。

廿三番

左勝

前大僧正

たのめつる夜半もいまはの袖の雨に月さへ曇る有明の空

右

俊成卿女

おしみかね別れしよりも數々におもふかたみの曉の空
此右の歌。すかた詞いとよろしく侍るを。左夜半もいま
はの袖の雨とをきて。月さへくもる有明の空こそ。上下
始終ことによろしく聞え侍れ。仍勝に定申侍りしなり。

廿四番

左

宮内卿

今はたゝかせやはらはんうき人の通ひ絶にし庭の朝霜

右勝

定家朝臣

俯もまつ夜むなしき別れにてつれなくみゆる有明のそら
左の歌心すかたゆうに侍るを。うき人のといへるや。近
ころも人よみて侍りしかと。いかにそよはきやうにや
聞え侍るを。右の歌よろしくや侍らんとおもひ給ひし
を。有明の空計にて。月なきやいかにときたの侍りしを。

作者やかて此本歌も月は侍らぬなりと申侍りしかは。
まことにさこそ侍りけれとて。勝になり侍りしなり。

廿五番

左

左大臣

もりあかす水のしら玉今はとてたゆむもしらぬ袖のうへ哉

右勝

權中納言

明るまを何恨みけむ逢事のなこりも今は戀しき物を

左水のしら玉いまはとてといひ。たゆむもしらぬなと

いへる心おかしく侍るを。右末の句やすらかに侍るへ

廿六番

慕戀

左勝

親定

いかにせんこぬ夜あまたの袖の露に月をのみまつ夕暮の空

右

定家朝臣

なかめつゝまたはた思ふ雲の色をたか夕暮と君たのむらん

左歌こぬ夜あまたの袖の露に月をのみまつ夕暮の空と

廿七番

いへる。いみしく侍りて。勝になり侍る。

左

宮内卿

今こんと只なをさりの言葉をまつとはなくて夕暮の空

右勝

雅經

あちきなくそへし心のかへりこてゆくらんかたの夕暮の空

雨方のゆふくれの空。心すかたともによろしくこそ侍

りけれ。待とはなくてといひしより。ゆくらんかたのと

いへる。いさゝか心のまさりて見え侍れは。右の勝にな

廿八番

り侍るにこそ。

左勝

左大臣

何ゆへと思ひもいりぬ夕たに待出し物を山のはの月

右

前大僧正

いかにせむ侍へしとたに思よらて暮行鐘に打しほれつゝ

左まち出しものを山のはの月と侍るを。右侍へしとた

におもひよらてといひて。暮行かねにといへる文字つ

つき。これもいみしく侍れと。左のやまのはの月。なを

廿九番

左勝

俊成卿女

身にそしむ人なき床の夕まくれ涙の露をはらふ秋風

右

家隆朝臣

今はたゝまたれしあとの夕暮の曇るはかりそかたみ也ける

左人なき床のゆふまくれといひ。涙の露をはらふ秋風

よろしく侍るを。右曇るはかりそかたみなりけるとい

三十番

左

權中納言

萩の葉に風うちそゝく夕くれや人を戀しと思ひそめけん

右勝

有家朝臣

おもふ事みにしみまさるななめ哉雲のはたての空のあき風

左萩のはに風うちそよくといひ。人を戀しとおもひそ

めけんといへる。やすらかに聞え侍り。右雲のはたての

空の秋風は。かのおまつ空なる人をこふる身は(とは)いと

いへる歌を思へる成へし。雲のはたても。つよきやうに

三十一番

蜀中戀

左

定家朝臣

君ならぬ木のはもつらし旅衣はらひもあへす露こほれつゝ

右勝

家隆朝臣

篠原やしらぬ野中のかり枕松もひとりのあきかせの聲

左歌木のはもつらし旅衣といへる。すかたよろしく侍れと。右歌まつもひとりの秋風の聲といへる。今すこし心こもれるやうにやとて。勝に申侍しや。

三十二番

左

有家朝臣

武藏野やひとり思ひにむせふ哉きつゝなれにし妻も籠らて

右勝

雅經

草枕むすひきためんかたしらすならはぬ野への夢の通ひち

左はむさし野やとをき。つまもこもらてといへる。けふはなやきその歌の心にやと聞え侍るに。ひとり思ひにむせふ哉といへる。すこしきゝわけす侍るにや。右はたたならはぬ野への夢のかよひちといへる。ゆうにきこえしかは。右を勝のよし申侍りし。

三十三番

左勝

親定

君ももしなかもやすらん旅衣朝たつ月をそらにまかへて

右

左大臣

うつ山うつゝかなしき道たえて夢に都の人はわすれす

左の歌朝たつ月を空にまかへてと侍る心すかた。源氏物語の花のえんの歌なと思ひ出られて。いみしくえんにみえ侍り。右の歌はうつ山うつゝかなしきなと侍る。此ころうつ山あまた聞え侍るにや。左勝侍るへし。

三十四番

左勝

權中納言

我妹子か家路にかへる心かなかさなる山をしゐてすくれは

右

俊成卿女

わすれしの契り結ひし枕さへあらぬかりねの夢そはかなき左羈中の心はたしかに侍るへし。右はわすれしの契りむすひし枕さへといへる。ゆうには侍るにや。左猶かさなる山をしゐて過なといへる。さまさへたしかに侍るにやとて。左勝にしるし侍るにや。

三十五番

左勝

前大僧正

薦の色に袖をあらそふ旅ねはうつゝもかなし宇津の山こえ

右

宮内卿

廻りあはん程なはいつといふへきそ便りたになし宇津の山越左右の宇津の山こえ。おなしくは侍れと。左は薦の色あるやうにみえ侍り。右はたよりたになしといへるはかりは。ことなる事なきにやとて。左の勝とす。

三十六番

左勝

俊成卿女

人とはぬころたにつらき山里の松に心のあきかせのこゑ

右

家隆朝臣

わすらるゝ人めはつゐにかれにけり誰山里の冬とまつらん

左比たにつらき山里のといへる心よろしく侍るへし。右人めも草もといへる歌を思へるにやとはみゆれと。いといひおほせられても聞えさるにやとて。左の勝になり侍りき。

三十七番

左勝

左大臣

山かつの麻のさころもおさをあらみあはて月日や杉ふける庵

右

定家朝臣

風吹はさもあらぬ峯の松もうし戀せん人は都にをすめ

左あはて月日や杉ふける庵。ことのほかにまさりて。勝に申侍りき。

三十八番

左勝

親定

身をしれは思ひもよらて杉の庵に猶さりともと松風そふく

右

有家朝臣

おもひわひ涙ふりそふ嶺の庵にかたしく雲やうちしくる覽

左歌杉の庵になをさりとともと松風そふく。おかしくは聞え侍るを。右の歌かたしく雲のうちしくるらんほと。

いかゝときこゆ。もとも左をもて勝とす。

三十九番

左勝

前大僧正

山陰や山鳥の尾のなかきよを我ひとりかもあかしかねつゝ

右

雅經

君しるや都もよそに嶺の雲はれぬ思ひになかめわひつゝ

左山鳥の尾のなかき夜を我ひとりかもなと侍るすかた高く聞ゆるな。右君しるやとをけるは。及かたきこゆ。

四十番

左持

權中納言

ひとりふすまのすきまの雨そゝき落る涙の数そへんとや

右

宮内卿

物思はぬ人はたへける山里に我身ひとつの秋のゆふくれ

左まやはかりにては山家の心なくや。右末の句。こそその

百首のうちに。有家朝臣の歌をなそらへて持たるへし。

四十一番

故郷戀

左勝

親定

里はあれぬ尾上の宮のをのつから待こし宵も昔なりけり

右

左大臣

末までと契りてとはぬ故里にむかしかたりのまつ風そふく

左尾上の宮のをのつから。ことに珍らしくみえ侍る也。

右末の句よろしく侍れとも。猶左をもて勝とす。

四十二番

左持

有家朝臣

あた人の心よりまつあれそめて庭もまかきも野への秋かせ

右

家隆朝臣

さゝ波や志賀の古郷いくかへりわすれかたみの袖ぬらす覽

左歌あた人の心よりあれそむらん。いかゝ。右歌も志賀

の古郷に袖ぬらすらんもいかゝ。可_レ爲_レ持。

四十三番

左持

前大僧正

色にみよ袖にしくれの故里のみかきか原の秋のおもひは

右

俊成卿女

飛鳥のあすかのさとに秋ふけぬ出にし人は音つれもせて

左歌みかきか原の秋の思ひ。よろしく侍るへし。右飛鳥

のとをける。ことゝしくや聞え侍らん。秋更ぬといへ

るよろしく聞ゆるによりて。又持とすへくや。

四十四番

左

權中納言

まかきには鹿もなれきて妻とふをきくに袂そいと露けき

右持

宮内卿

契りしもあらずなりけり面影はありしなからの渡りなれ共
左まかきには鹿もなれきてといへる心。とかなく侍る
を。少俗の詞けにや侍らん。右ありしなからのわたりな
れともといへる。ことなる事なく侍れは。勝へくこそ侍
らめ。

四十五番

左持

定家朝臣

つれなきを待とせしまの春の草かれぬ心のふる里の霜
雅 經

右

人ふるす里をも何かいとふへき我身ひとつのうき名也けり
左まつとせしまの春の草なとはおかしかるへきを。か
れぬ心のなと。いかゝいへるにか。こゝろえす侍る也。
右里をいとひてこしかともといへる。歌の心にやとはみ
え侍れとも。愚意及かたくのみ侍れは。持とすへくや。

四十六番

左持

旅泊戀

都をも心のはてもゆくゑなき芦やの沖のうきねなりとも
右 宮内卿

いまはとてあかて出にし曙にみなのみなとも月そかはらぬ
右あかて出にし。すこし心かすかなるにやときこえ侍
るを。左芦屋の沖も。さまできこえられて侍らねは。持
となんかし。

四十七番

左持

權中納言

しるらめや風のたよりをまち俅て袖に波たつ梶まくらすと

右

定家朝臣

わすれぬは浪路の月に愁ては身をうしまとにとまる舟人
左かちまくらすととはて侍る。いかゝなと侍りしを。右
の身をうしまとも。さまでも侍らぬにやとて。又持と定
侍りしなるへし。

四十八番

左持

親定

おもふ人をうきねの夢にみなと川さむる袂にのこるおも影
右 有家朝臣

おもひねの夢路に人をみなと川さむれはもとの浮ねなり鬼
左右の湊川。さむれはもとのといへるも。よろしくはき
〔脱〕え侍れと。左のさむる袂に残るおも影。いみしく
おかしく侍れは。以て左爲勝。

四十九番

左

前大僧正

ふねとむるむしあけの磯の松の風たか夢路にか又かよふ覽
右持 家隆朝臣

うき枕なみに波しく袖のうへに月そかさなるなれしおも影
左たか夢路にか又通ふらんも。心おかしく侍るを。右波
になみしくといひて。月そ重るなといへる。よろしくや
とて。勝になり侍しなり。

五十番

左持

左大臣

まてとしものめぬ磯のかち枕虫あけの波のねぬよとふ也
右 雅 經

片しきの袖もうきねの浪枕ひとりあかしのうらめしの身や
左右の上の句は。ともによろしくきこえ侍るを。右の下
の句うらめしの身や。ことの外よはくみえ侍り。左虫明
の浪のねぬ夜とふ也。もとも勝に侍るなり。

五十一番 關路戀

左勝

前大僧正

東路やひとり旅ねの日數へて涙せきあへぬあしからの關
右 權中納言

いかて云んかく社有けれ關守もいつら勿來のなを答へけん
左歌とがなくみえ侍り。右歌いかていはんなど。珍らし
きやうには侍れと。こゝろえす侍れは。左勝に定め申侍
しなり。

五十二番

左持

家隆朝臣

わすらるゝうきなもすゝけ清見かた關の岩こす波の月影
右 雅經

みし人のおも影とめよ清見かた袖に關もるなみのかよひち
左右の清見かた。ともによろしくき様にはみえ侍るを。左
のうきなもすゝけ。いかにそや聞え侍る。なみのかよひ
ちは。すこしまさるへくやとはみえ侍れと。持に付侍に
けり。

五十三番

左勝

俊成卿女

相坂の木綿付鳥よなれをしそ哀と思ひねに鳴てこし
右 宮内卿

たえはつる人やはつらき心からなさへうらめし相坂の關

兩首の相坂。いくほととの勝劣有かたきやうに侍れと。ふ
るき心も故なきにあらす侍れは。左の勝にこそ侍らめ。

五十四番

左勝

左大臣

右

有家朝臣

我戀やこのよを關と鈴鹿川すゝろに袖のかくはしほれし
誰も又關もれとやは清見かたみせはや袖のなみの月影
左歌のこよひを關とすゝか河は。珍らしくこそ侍れ。右
の歌。みせはや袖のなと儼によろしく侍るを。上句いか
にそや聞え侍れは。左のかちたるへき也。

五十五番

左勝

親定

戀をのみすまの關屋の板ひさしきして袖とも波はわかしを
右 定家朝臣

すまの浦や波におも影立そひて關ふきこゆる風そかなしき
左右の須磨の關。左はさして袖ともなと珍らしく侍る。
右は關吹こゆるなどは。よろしく侍るへきを。風そかな
しき。あまりにやと聞え侍るうへに。左誠にえんにみえ
侍。尤可_レ爲_レ勝。

五十六番

左

海邊戀

俊成卿女

契りしを我みひとつに松嶋やをしまの浪の音はかりして
右勝 有家朝臣

松嶋や戀せぬあまのぬれ衣ぬれてもしはしほさぬ物かは
兩方又松嶋也。左我みひとつにといへるもよろしきを。
右戀せぬあまのぬれ衣と侍る。いたくたちまさるにこ

そ。

五十七番

左勝

親 定

いかにせん思ひありその忘れ貝かひもなききに波よする袖

右

宮内卿

友とみて伊勢雄のあまに宿からん物思ふみは袖もかはかす

左思ひありそのとをきて。かひも渚に浪よする袖。いと

おかしくこそ侍れ。右友とみてといへる。ことなること

五十八番

左勝

左大臣

打忘れにもすむ虫はよそにしてすまの餘りに恨みかねつゝ

右

雅 經

契りきなきてやは頼む末の松まつにいくよの波はこえつゝ

右まつにいくよの波はこえつゝといへる。えんに侍る

を。左猶心ふかく侍るにや。仍勝と付侍し也。

五十九番

左持

前大僧正

心あるいせをの海士のぬれ衣ほすへき波の折をしらはや

右

定家朝臣

別れのみを嶋の海士の袖ぬれて又はみるめをいつか刈へき

左右いく程の勝劣なく侍るとて。持に定侍しなるへし。

六十番

左

權中納言

磯なつむいせのあまの袖をたくひとみらんこそ悲しき

右勝

家隆朝臣

藻鹽たれひるまもなきをわくらはにとへともまたしすまの波風

左の歌類ひと見らんなど。古今の歌の詞。出くへしとも

みえ侍らぬにや。右の歌とへともまたしすまの波(うら)い

かせ。尤勝に侍るへし。

六十一番

左勝

河邊戀

左大臣

泊瀬川ゐてこす波の岩の上にをのれくたけて人そ強面き

右

定家朝臣

なとり川わたれはつらし朽果る袖のためしのせゝの埋れ木

左の歌はつせ川ゐてこす波のなど。萬葉集を引てまた

えんにもみえ侍るを。右の歌なとり河せゝの埋木。事舊

て侍るへし。左歌可勝侍らん。

六十二番

親 定

我袂きて山河の瀬になひく玉もかりそめにかはくまそなき

右

俊成卿女

なかれての契りをよそに水無瀬川かけはなれ行水のしら波

左きて山河のせになひくをきて。玉もかりそめにな

と侍る文字つゝき。まことにみ所おほくこそみえ侍れ。

右のみなせ川。ことなるとかなくは侍れと。左尤かちに

侍るへし。

六十三番

宮内卿

飛鳥川契りしことはむかしにてかはるなのみやせに残る覽

右

雅 經

篠のくまひのくま河にぬるゝ袖ほきてや人の面かけもみん

右さゝのくまひのくま川。ふるき心。よろしくはみえ侍るを。左あすか川かはるなのみやせに残るらんといへる。心殊によろしく侍れは。尤勝たるへし。

六十四番

左勝

權中納言

しらすりつみはすゑまつる御稔河神さへうけぬ思ひせんとは

右

家隆朝臣

千鳥なく河へのちはら風さえてあはてそかへる有明のそら

月イ

左みはすゑまつるみそき川などいへる。故ありてこそみえ侍れ。右有明の空は。つねのことなからよろしく侍るを。河へのちはらなど。ゆうにしもあらさるにや侍らん。左神さへうけぬなどいへる。勝にや侍らん。

六十五番

左勝

前大僧正

ともすれはなき名立たの河波にけにぬれ衣をしほりつる哉

右

有家朝臣

音羽川せき入る水の瀬をあさみたえ行人の心をそみる

右本歌の心上下の句。いくほともかはらす侍るにや。左立田川はめつらしきさまにみえ侍れは。勝としるし侍りしなり。

六十六番

寄雨戀

左

權中納言

雨ふれは軒の雫のかす／＼に思ひみたれてはるゝまそなき

右勝

俊成卿女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計りを待とせしまに左歌雨ふれはとをけるより。末の句まで。雨のよせ有て

はきこえ侍るを。右の歌時雨は袖に秋かけてなといへる文字つゝき。えんに侍るにや。仍爲勝。

六十七番

左

有家朝臣

あれまもる雨も涙もふるまゝにえならぬ床に水たまりつゝ

右勝

定家朝臣

ゆくゑなき宿はととへは涙のみさのゝわたりのむらさめの空

左えならぬ床は我床にや侍らん。右佐野のわたりのむらさめの空。ふるからすはよろしくも侍るへし。勝の字付侍りにけり。

六十八番

左勝

親定

おもふことそなたの空となけれとも伊駒の山のため夕暮

右

雅經

なめわひたえぬ涙や雨とふるしくゝ空にまかふ夜の袖

左歌そなたの空となけれともなといへる。誠におかしくこそみえ侍れ。右歌たえぬ涙や雨とふるなといへる。えんにはみえ侍れと。猶左の雨の夕くれ。あはれおほくこもりてみえ侍り。勝の字しかるへく侍るへし。

六十九番

左勝

前大僧正

はれぬ雨の曇りそめけん雲やなに戀よりたてし烟なりけり

右

宮内卿

年へたる思ひはいとゝふかきよの窓うつ雨も音しのふなり

左雲や何(か)にとをきて。戀よりたてしけふなりけりといへるすかた。めつらしくもおかしくもみえ侍り。

右は上陽人などの心きこそは侍らめ。左なを勝たるへし。

七十番

左勝

左大臣

こぬ人を待夜乍らの軒の雨に月をよそにてわひつゝやねん

右

家隆朝臣

わひつゝもうちやはねぬる宵の雨にやかて更行鐘の音かな

左右の歌ふるき心ともにて侍を。左月をよそにて侘つ

つやねんといへる心。殊によろしく侍るへし。仍勝に付

へし。

七十一番

寄風戀

左勝

宮内卿

きくやいかにうはの空なる風たにも松に音する習ひ有とは

右

有家朝臣

打なひく草葉にもろき露のまも涙ほしあへぬ袖の秋風

右袖の秋風。えんにみえ侍るを。左心こと葉始終なをよ

ろしく侍るにや。仍かちとすへし。

七十二番

左

權中納言

ひとりのみ富士の山風やむこなく戀をなとてかするか成覽

右勝

家隆朝臣

いかにせん身はならはしの物とても軒端の松に秋風そふく

左富士の山風やむこなく戀をするかなと。めつらしく

こそ侍るめれ。右身はならはしのものともといひ。ち

かきものよめり。

みおよは

す侍りけり。いかにも右勝に侍へし。

七十三番

左勝

親定

わくらはにとひこし比におもなれてこそあらましの庭の松風

右

前大僧正

いかにせんなくさむやとてむすふ庵に猶松風のみねに吹也

右の歌なを松風の峯にふくなりといへる心すかた。い

とよろしくは侍れと。左歌わくらはにとをき。さそ(ミイ)

あらましのなと侍るは。又及かたく侍るへし。仍爲勝。

七十四番

左

左大臣

萩原や余所に聞こし秋の風もの思ふくれは我身ひとつに

右勝

俊成卿女

きえかへり露そみたるゝ下萩の末こそ風はとふにつけても

左歌よそにきゝこし秋の風といひ。物思ふくれは我身ひ

とつにさいへる心。ことによろしくも。えんにも覺侍る

を。右歌末こそ風はとふにつけてもといへる。又よろし

くは侍るへし。是は狭衣と申物語の歌の心に侍るへし。

左も劣るへきには侍らねと。右勝の字付侍りしなり。愚

老か面目にも侍るへし。

七十五番

左

定家朝臣

自妙の袖のわかれに露落て身にしむいろの秋風そふく

右勝

雅經

今はたゝこぬ夜あまたの小夜更てまたしと思ふに松風の聲

左歌身にしむ色の秋風そふくといへる。よろしからさ

るにはあらさるへし。右歌またしと思ふに松風の聲と

いへる。まことにおかしかるへし。仍勝に定り侍りにけり。

親定	勝十四	負一
左大臣良經	勝九	負六
前大僧正慈圓	勝九	持三
權中納言公繼	勝三	持三
俊成卿女	勝五	持四
宮内卿	勝四	持二
大藏卿有家	勝四	持二
左近衛權中將定家	勝四	持四
上總介藤原家隆	勝六	持三
左近衛權少將雅經	勝四	持五
右水無瀬殿戀十五首歌合以一古寫本校合		負六

水無瀬櫻宮十五番歌合建仁二年九月廿九日

題

春戀 夏戀 秋戀 冬戀 曉戀

羈中戀 暮戀 山家戀 故鄉戀 旅泊戀

關路戀 海邊戀 河邊戀 寄雨戀 寄風戀

作者

女房 左大臣正二位藤原朝臣

前大僧正慈圓

皇太后宮大夫俊成女

宮内卿

正四位下左近衛中將藤原定家

正四位下藤原有家

正四位下上總介藤原家隆

藤原雅經朝臣

判者

釋阿

一番

左持

春戀

俊成卿女

おも影の霞める月そやとりける春やむかしの袖の涙に

右 同 定家朝臣

わすれめや花に立まよふ春霞それかとはかりみえし明ほの

左右ともに霞。左は春やむかしの夜半の月になひき。右

はそれかとばかり見えし明ほのゝ花に立まよふによりて。いつれまされるとも定かたし。

二番

左 夏戀

左大臣

草深き夏野分行きをしかのねにこそたてね露をこほるゝ

右 故郷戀

女 房

里はあれぬ尾上の宮のをのつから待こし宵も昔なりけり
左の歌やさしきさまに侍れとも。又あなかちにめつらしきにはあらず。右の歌はさせることなしといへとも。
すくれたるとかなし。いさゝかまさり侍りなむ。

三番

左 秋戀

女 房

よしやたゝ憑めぬ宿の庭に生るまつとなつけそ秋の夕かせ
右 同 有家朝臣

物おもはてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を
左の歌。たゝ憑めぬ宿にまつといふ名をおしめる計なり。しかれともしはらくみればすくれたる難なしと申侍るへき歟。右は大かたの秋にたになりぬれは。いかなる色の風もみにしむものなるを。とひ入てなかむれば。袖の露秋ことに色深くそ侍らん。

四番

左 秋戀

家隆朝臣

思ひいるみは深草の秋の露たのめし末やこからしの風
右 冬戀 俊成卿女

かよひこし宿の道芝かれゝに跡なき霜のむすほほれつゝ
左右ともに。返々おもしろき様に侍れとも。左のたのめ

し末や木枯。猶さひしくや侍らん。

五番 左 冬戀

宮内卿

落つもる涙の数はさよ衣さらても袖に見えにけるかな
右 同 定家朝臣

床の霜枕の水きえ飽ぬむすひもをかぬ人のちきりに
左はよろしく。右はめつらしきによりて。持とす。

六番

左 曉戀

慈 圓

憑めつる夜半もいまはの袖の上に月さへ曇る有明の空
右 蜀中戀 雅經朝臣

草枕むすひ定めんかたしらすならはぬ野への夢のかよひち
左の歌珍らしき様に侍とも。右もやさしき様なり。

七番

左 暮戀

女 房

いかにせんこぬよあまたの袖の露に月をのみまつ夕暮の空
右 同 左大臣

何ゆへとおもひもいれぬ夕たに待出し物を山のはの月
左右ともに難なしといへとも。待出し夕の山のはの月。さしのほるへきにや侍らん。

八番

左 山家戀

左大臣

山かつの麻のさ衣をさをあらみあはて月日やすきふける庵
右 寄風戀 有家朝臣

打なひく草葉にもろき露のまも涙ほしあへぬ袖の秋かせ
左は麻のさ衣をさをあらみなといへることは。よろし

きさまなり。右は草葉にもろき露のまもなど。やさしく侍れとも。左歌におよひかたし。

九番

左持 秋戀

慈 圓

野への露は色もなくてやこほれつる袖よりすへる萩の上風

右 關路戀

左大臣

我戀やこの世を關と鈴鹿川そゝろに袖のかくはしほれし

左の歌は。色もなくてやこほれつるなどいへること。

よろしき様なり。右も珍しくは侍れとも。なを左はすくれてや侍らん。

十番

左 旅泊戀

家隆朝臣

うき枕浪になみしく袖のうへに月そかさぬるなれし俤

右持 海邊戀

左大臣

打忘れもにすむ虫はよそにしてすまのあまりに恨かけつゝ

左の歌は 上下ともによろしき様なり。右はねを社なか

め人はうらみしといへる歌の心。かへすゝもおもしろく侍り。左もすてかたしといへとも。右はなをまさる

へし。

十一番

左持 河邊戀

左大臣

はつせ河あてこす波の岩の上にをのれ碎けて人そつれなき

右 寄雨戀

女 房

思ふことそなたの空となけれともいこまの山の雨の夕くれ

左の歌。流るゝ水尾のせをはやみといふ歌の心おもひ入て。岩うつ浪のをのれのみといふ心なり。尤よろしか

るへし。右の歌のこと葉をよひかたしといへとも。させるとかなければ。持とやいふへからん。

十二番

左 寄雨戀

慈 圓

はれぬ雨の曇りそめけむ空やなに戀よりたてし煙なるらん

右持 同

俊成卿女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計りを待とせしまに

左の歌心珍らしく侍り。右殊にやさしきさまなり。勝負定かたしといへとも。猶袖にかゝらんしくれ。色ふかくや侍らん。

十三番

左持 山家戀

慈 圓

山陰ややま鳥の尾のななきよを我ひとりかも明しかねつゝ

右 寄風戀

雅經朝臣

今はたゝこぬ夜あまたにさ夜更てまたしと思ふに松風の聲

左のうたは。山鳥の尾のしたり尾のといふうたのこゝろなり。右はまたしと思ふそまつにまされるといふう

たのこゝろなり。この兩方。ともに本歌をさすなり。しかれとも。猶左はたけたかきさまなり。

十四番

左持 寄風戀

宮内卿

聞やいかにうはの空なる風たにもまつに音する習ひ有とは

右 同

定家朝臣

白妙の袖のわかれに露落てみにしむ色の秋風そ吹

左右ともによろしく侍り。左はまつ夜むなしくあけなんとすることをそらにうれへ。右は袖のわかれにをけ

る露を秋かせにかこつによりて。いつれまされるとも定めかたし。

十五番

左持

寄風戀

女房

わくらはにとひこし頃に思ひ馴てさそあらましの庭の松風

右

同

俊成卿女

消かへり露そみたるゝ下萩の末こすかせのとふにつけても

左はまつによそへてもおもひをのへ。右は萩のうはか

せみにしみてなをうらみふかくや侍らん。左右ともに

難々定。よつて持とす。

八幡若宮撰歌合建仁三年七月十五日

題

初秋風

野徑月

故郷霧

海邊雁

霧中暮

山家松

作者

女房

攝政左大臣

前大僧正慈圓

大納言藤原朝臣忠良

權中納言藤原朝臣公繼

權中納言藤原朝臣家經

沙彌釋阿

俊成卿女

女房宮内卿

大藏卿藤原朝臣有家

左近衛權少將藤原朝臣國通

右近衛權少將藤原朝臣雅經

左兵衛佐源朝臣具親

散位鴨縣主長明

左兵衛尉藤原秀能

一番

左勝 初秋風

我妹子か袖ふきかへす秋風のまたうらなれぬ涙とふらん

右

公

繼

女房

から衣すそのゝ風や立ぬらし袖にさきたつあきのしら露

左歌またうらなれぬなみたとふらん。すかたまことにおかしく侍るかな。右歌袖にさきたつといへる。こゝろす

かたいみしくえんに侍るに。おほかた歌合の例として。一番のうた。左を勝とし。右すこしつよき時。持とする

よし申こと侍へし。しかれともこれには侍らす。右歌もたゝうちおとれると申ほとにはすきて侍り。左又いみしくおかしくみえ侍れは。其儀には侍らす。勝と申侍へし。

二番

左勝

攝政左大臣

やわた山にしにあらしの秋ふけは河波しろきよとの明ほの

右

宮内卿

六月やてる日にいとふ衣手もみになつかしき秋のはつかせ

左歌西にあらしの秋ふけはといひ。河浪しろきなといへる。いみしくおかしくこそ侍れ。右歌身になつかしき秋のはつかせ。えんにおかしく侍るを。六月やとをける。

少いかゝとみえ侍れは。左彌まさり侍るへし。

三番

左

俊成卿女

あかつきの露も枕の露なれて心にふかき秋のはつかせ

右勝

女房

さひしさは秋のさか野ののへの露月にこととふ千世の細道

左歌心にふかき秋のはつかせ。よろしく侍る哉。右歌秋のさか野ののへの露とをき。月にこととふと侍る。心す

かたありかたくいみしく侍り。仍以右爲勝。

四番

左勝

俊成卿女

なめ行ほとば雲井の月影をしるへにわくるむさしのの露

右

長明

かはらすよいはてこしよにとひなれて

左歌しるへにわくるむさしのの露とをき。右いはてこ

しよにとひなれてといへる心。えんにみえ侍るを。右かはらすよいへる五文字や。しるて庶幾せられすや侍らん。仍左まさるへくや。

五番

左

釋阿

露ふかきみやきか原をしほれ行月すむ袖に萩か花すり

右勝

故郷霧

慈圓

なにはより吹こす風になひくめりたかつのうらの秋の朝霧

右歌離波より吹こすといひ。たかつのうらなと。よろしく侍うへ。左文字うちまかせたらん。みくるしけにきこえ侍り。尤右かちとすへくや。

六番

左勝

有家

荒にけるあとをも誰かみかの原くにのみやこの秋霧のうち

右

秀能

花にたにとはてくれにし故郷のしかのみやこの秋の夕きり

左あとをもたれかみかの原といへる。心おかしくみえ侍るを。右歌故郷のとをさしかの都のとをけるや。こと

かさなりて侍らん。猶左秋きりのうちも。たけまさりて侍らん。

七番

左

俊成卿女

右勝

海邊雁

攝政左大臣

やゝふるき尾上の宮の秋の霧いく世むかしをへたてきぬ覽
しら雲に翅しほれし鴈かねのおりゐる磯になみやひまなき
左歌 おのへのみやのきりいくよ昔をといへる。心よろ
しく侍り。右しら雲に翅しほれしといひ。おりゐる磯の
なとも。ともにおかしくみえ侍る。左やゝふるきといへ
る五文字や。さまで聞えず侍らん。仍勝とすへし。

八番

左持

慈圓

右

家經

ほの／＼としまかくれ行かり金の遠さかりなほあまの釣舟
うらつたふうらよりをちに飛かりの雲にきえ行あとの白波
左ほの／＼とをかれ嶋かくれなとは。ふることにやと
みえ侍るを。とほさかりなほあまの釣舟。心まことにお
かしくこそみえ侍れ。右歌うらつたふうらよりをちな
といへる心えんにこそ侍れ。勝負趣不分明と申へくや。

九番

左

釋阿

今そしる秋は南にゐる鴈はあかしの沖の月になくなり
こしの海^{右勝}のあとなきかたの波の上に風をたよりの初鴈^{雅經}の聲
左歌明石の浦の沖になきけるこしこばうちまかせても
おほえ侍らぬ上に。かせをたよりのなといへる。おかし
くきこえ侍れは。以^レ右爲^レ勝。

十番

左持

俊成卿女

右

蜀中墓

秀能

松嶋やをしまのうらになく鴈の涙にぬらすあまの袖かな
故郷にかよはゝつけよ秋の風ゆふへの空になかめかねつも
左歌をしまのうらのかり金。いみしくみえ侍るを。右歌
かよはゝつけよなといへる。心いみしくみえ侍り。持と
申へくや。

十一番

左勝

慈圓

まちわひぬ今いくかまで東路やそなたの空に山のはの月
まくらとていつくの草に契るらん行をかきりの野への夕暮

右

長明

左歌そなたの空に山のはの月。いとありかたくこそ侍
れ。右歌行をかきりといへるわたり。いとよろしく侍れ
と。猶いつれの草にといへる。山のはの月には及かたく
侍らん。以^レ左爲^レ勝。

十二番

左勝

忠良

草むすふかりほの床の秋の袖露やはぬらすゆふくれのそら
しはしたにかて都をわすれまし秋の夕のしほかまのうら
左歌心すかたいとおかしくこそ侍れ。右歌秋の夕のし
ほかまの浦。ふることに侍るうへ。なにとも聞わかぬや
うに侍らん。以^レ左勝とす。

十三番

左

攝政

故里をいのちあらはとまつら川かへるひとをしゆふなみの空

右勝

山家松

女

房

みやこ人とはぬほとをもおもひしれみしよりのちの庭の松風
左歌松浦河。かのさるまろかふるき跡まで思ひ出られ
て侍り。かへる日となしといへるすかた。いみしくおか
しく侍るを。右歌又みしよりのちの庭の松風。ひさしさ
のほといみしくおかしくみえ侍れは。松浦川のむかし
のいかゝと覺え侍れは。猶右勝と申へくや。

十四番

左持

國

通

あらし吹まきのお山の松の風たへすや心うちのさとひと

右

具

親

つれもなき友とはたのむみねの松猶聲たつる秋かせそふく

左右歌。姿ともにいうにして。勝負不分明。持と申へし。

十五番

左持

釋

阿

いまはとてつま木こるへき宿の松千世をは君と猶いのる哉

右

山ふかくのかれはてたる身にし猶心をさそふまつの風哉

右のかれはてたるといひ。心をさそふ松かせなといへ
るすかた。よろしくみえ侍る。左の歌はつま木こるへき
もことふりて侍るを。宿の松とをける。さゝへて侍るや
うに聞え侍れは。劣ると申へきを。祝の歌にことをよせ
て侍りぬる。ことにこれも持と申へくや。

群書類從卷第百九十四

和歌部四十九 歌合十五

北野宮歌合 元久元年十一月十一日當座

題

時雨

忍戀

羈旅

作者

御製

攝政從一位行左大臣藤原朝臣

參議正三位行左衛門督源朝臣通具

女房下野

正四位下行左衛門〔近衛〕權中將藤原朝臣定家

大藏卿正四位下藤原朝臣有家

從四位下行前下總介藤原朝臣家隆

左近衛權少將正五位下藤原朝臣雅經

從五位下行右馬助源朝臣家長

正六位上行左衛門少尉藤原朝臣秀能

講師

讀師

衆議判

一番

時雨
左勝

御製

つきそ今もる山みちの夕しくれ残るしたはも嵐ふくなり

右

定家朝臣

この程は木の葉もしらぬ櫛の屋を霜をへたてゝとふ時雨哉

しもをへたつらむ。いかゝ。左尤宜。爲勝。

二番

左持

左衛門督

披のやにもるは時雨とまよふまでぬれぬかたしく夜半のさ衣

右

雅經

なかめあひ我身よにふる夕時雨くもりな果を空もうきころ

左ぬれぬかたしく。右の我身世にふる。ともにゑんにき

こゆ。仍爲持。

三番

左勝

攝政

村雲にをくれさきたつ夜半の月しらす時雨のいくめぐり共

右

定家朝臣

雲さはく山人いまや袖ぬらすあらしもみえてしくれ降ころ

右あらしに見えてこゝろえられす。むら雲にをくれさ

きたつ月。ことによろし。爲_レ勝。

四番

左

女房

夕まくれしくるゝ空を眺むればひとやりならぬ袖のうへ哉

右勝

有家朝臣

木葉ちるむへ山かせのあらしより時雨になりぬ峯のうき雲

左ことなることなし。右むへ山風なといへる。たくみに

きこゆ。爲_レ勝。

五番

左持

家長

峯は雪麓はしくれみよしのゝおなし雲よりふりわかる也

右

藤原秀能

吹はらふ風にわかるゝうき雲のしくるゝ袖に月そやとれる

おなし雲より。かせにわかるゝなといへる。共によろし。

爲_レ持。

六番

左勝

左衛門督

さしも猶ゑやはいふきの下草の跡なき霜におもひきえなん

右

下野

したむせふ思ひのけふり立いては鹽やく浦のあまと答へん

右の歌もいにはきこゆれと。左のあとなき霜におも

ひきえなむなといへる。尤よろし。爲_レ勝。

七番

左勝

御製

我戀は横のした葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいてめや

右

雅經

われなからうちねぬほととの關守に夢もゆるさぬよひの通路
夢もゆるさぬも。心なきにあらされとも。左歌猶可_レ爲_レ勝。

八番

左持

攝政

もらしわひ氷にとつる谷河のくむ人なしにゆきなやみつゝ

右

家隆朝臣

谷河の氷につけてしのふるをなをうきものは松のゆふかせ

谷川氷ともによろし。爲_レ持。

九番

左持

有家朝臣

なれきぬる枕の下のあまもなをえそしら波の打もいてねは

右

藤原秀能

山河のいしまの水のもらしかねした行みちはしる人もなし

ともにさせる難なし。爲_レ持。

十番

左勝

定家朝臣

わすられぬときはの山の秋の風なをつれなけれ露消ぬとも

右

家長

夜と共に雲もへたてよふしのねのくゆる煙を空にまかへむ

雲もへたてよといへる。いにはきこゆるを。むろのや

しまにやともかなこひのけふりをそらにまかへむと。

ちかきうたにかよへるにや。以_レ左爲_レ勝。

十一番

左勝

羈旅

御製

さひしさをいつよりなれてなかむ覽またみぬ山の秋の夕暮

右

左衛門督

月とともに秋はすみこし山おろしおくに木葉は道やまとはむ
右鳳凰池上月をおもへる。心ありときこゆれと。左のま
たみぬ山の秋のゆふ暮。すくれてよろし。仍爲_レ勝。

十二番

左

下野

なかもこし月そへたつる宮こいてゝ幾重の山の峰の白雲

右勝

家長

^{新古今}けふは又しらぬ野原にゆきくれぬいつれの山か月はいつ覽

左はいうにはきこゆれと。いつれの山かなといへる。な
を勝とすへし。

〔十三番十四番欠〕

十五番

左勝

家隆朝臣

^{新古今}ふる里にきゝし嵐のこゑもにす忘れぬ人をさよの中山

右

藤原秀能

たひ衣霜にかさぬる足曳の山のいはねを吹あらしかな

右の歌もよろしくきこゆれと。左なを勝とすへし。

卿相待臣歌合建永元年七月廿五日

題

朝草花

海邊月

蜀中暮

作者

左方

御製 勝二持一

内大臣 負二勝一

前大僧正慈圓 勝二持一

前大納言藤原忠良 持二負一

左衛門督源通光 勝負持

中納言藤原公經 勝三

權中納言源通具 勝二負一

參議藤原良平 勝一持二

正三位藤原季能 勝二持一

俊成卿女 勝一負二

右方

宮内卿藤原家隆 持一負二

大藏卿藤原有家 勝二負一

左近權中將藤原定家 勝二持一

越前 勝一持二

左衛門尉藤原秀能 負勝持

右近權少將源具親 負三

丹後 負二勝一

散位藤原保季 負一持二

小比叡禰宜祝部成茂 負二持一

左近權少將藤原雅經 勝二負一

講師

讀師

右左

判衆議

詞宸筆 後日被下之

一番 朝草花

左勝

御製

よこ雲のたなひく山のをかへなるすゝきも白く吹あらし哉

右

我袖はけさもほしあへす飛鳥河ゆきゝの岡の萩のしら露

左右より難申侍し様々。よくもおほえ侍らす。おもひい

てゝ判の詞かきつくへきよし。人々申あひ侍れは。おろ

おろ書付侍也。

左歌しろきすゝき。あしたの風にしかありぬへしなと。

さた侍りしにや。

右歌ゆきゝの岡の萩。めつらしきさまなれとも。又無

指事として。左の勝になり侍にき。

二番

左

内大臣

ななき夜をあかせる袖はいまたひすお花か露そ秋風は吹

右勝

大藏卿藤原有家

小萩原おれぬはかりの朝露にぬれぬ袖ほす野邊の秋風

左方に。申むねなし。

右方に。いまたひすといへるきゝよからす。仍以右爲

三番

左勝

左勝

朝露よあらましかはの秋にあひて誰袖うつす萩の上葉そ

右

左近權中將藤原定家

あさな／＼した葉もよほす萩のはにかりの涙そ色にいて行

右方に。頗宜之由申之。

左方に。又やさしきさまなるよし申せとも。あらましか

はの秋。おもへる所あり。仍爲左勝。

四番

左勝

前大納言藤原忠良

里はあれて笹は野への小はき原朝たつ鹿もこゝになかなむ

右

越前

野らと成し昔の跡に藤はかまそれかとはかりにほふ朝露

左方より難申ていはく。つらといへるきゝにくし。

右方より又申云。こゝになかなむといへる鹿そのよう

なし。左方陳申。題の心あるうへ。鹿さかにあらす。

五番

左勝

左衛門督源通光

明ぬとて野へより山に入鹿のあと吹をくる萩のうは風

右

左衛門尉藤原秀能

眞萩原なにゝ恨を結びをかんうつろひゆかは今朝のあさ霜

右方よろしきよし申之。

左方頗やさしきさまなるに。けきのあさ霜無要歟之由

難申之。

六番

左勝

中納言藤原公經

朝嵐の色に萩ふくをみなへし消あへぬ露の花にこほるゝ

右

右近權少將源具親

さをしかのいる野の薄ほのくくと明ぬるかよの峰のうす霧

左方より。上句きゝなれたるよし申之。

右方無三申旨。

七番

左勝

權中納言源通具

朝露も花のえことにかはりけり鴈の涙の色やわくらん

右

丹後

嵐ふくあしたの原の秋はきは露のこるへき物とやは見し

右方申云。花のえ一定草花歟。もし春の花にかへるかり

の涙と心えんもとかあるへからす。秋といふこと大切也。

左方陳申。色などある涙は。うちまかせてはこゝろある

へし。鴈のなみたの色やわくらんなとは。おほく秋にひ

けり。そのうへに右歌あやしのものなり。左花のえこと

になと。いなるよし申之。

八番

左勝

參議藤原良平

小萩はら今朝をく露の數々にむかし戀しき袖そうつろふ

右

散位藤原保季

なく鴈のよはの涙かかた岡のあしたのはらの萩のした露

右方きして申むねなし。

左方申。すへてきゝよからす。

九番

左勝

正三位藤原季能

朝つゆの玉まぐ葛に風過てうらみそめたるあたしのゝ原

右

小比叡禰宜祝部成茂

ほしもあへす露消かへり女郎花誰に名殘の今朝のしほれそ

左方申云。けきのしほれそ。きゝにくし。

右方より。させる申旨なし。

十番

左勝

俊成卿女

あはぬよの涙やむすふ萩の露篠わけし袖の色はしられと

右

左近權少將藤原雅經

このまよりさすや岡への朝日影うつろふ露ににほふ萩原

右方より申云。頗うなり。

左方申。右もやさしきさまなれとも。猶あはぬよの涙色

ふかき歟。

十一番

海邊月

もろこしの山人今はおしむ覽まつらかおきのあけかたの月

右

家隆朝臣

秋のよの月やをしまの天の原明かたちかきおきの釣舟

左方より申。月やをしまの天のはら。尤めつらし。勝へ

きよし申侍き。しかるに持にて侍ける。おほきなるふし

む也。

十二番

左勝

内大臣

有明の月吹はらふ浦かせにけふりつれなきあまのもしほ火

右

有家朝臣

おほかたに物を思へとするかなる月はきよみかうらの秋風
左方申ていはく。おほかたにといへる五文字。そのこと
となし。右方申旨なきなり。

十三番

左持

前大僧正

和歌の浦に月の出しほのさすまゝによる鳴つるの聲そ悲しき
右 定家朝臣

もしほくむ袖の月影をのつからよそにあかさぬすまの浦人
左右兩方尤宜之由。各申之。

十四番

左持

前大納言

浦つたふ月はあかしの空はれて浪にあきふく須磨のしほ風
右 越前

秋をへてとしもつものりの浦風に曇らぬ月をいくよかはみむ
兩方ともにかたひきちからなきよし申之。其上 右方よ
り名所あまりおほかり。一所にてあらむに難あるへか
らす。又當時一定いつくにて詠たるそとたつね申とも。

作者當坐になきによりて陳申にをよはす。右方又右歌
祝言にいうせらるへきよし申。左方申云。右歌末句。頗
祝歌とみえさるよし申。

十五番

左

左衛門督

月やとるもしほの袖を人とはゝわふとこたへよすまの浦浪
右 藤原秀能

あかしがた色なき人の袖をみよすゝるに月もやとる物かは
左右兩方よろしきよし各申之。猶右末句殊優也。仍可勝

之由定申。

十六番

左持

中納言

なかもやる心いつくにかよふ覽もろこしまてもすまの月影
右 具親

月の秋は名のみそ夜のも鹽草かくかきたえてみる夢もなし
左方に申。もしほ草せんなし。かくかきいつれにてもひ
とつにて侍なん。右方に申。もろこしすまよりとをし。
左に陳云。とをきこゝろこそは。秋月の本意に侍へけれ。

十七番

左持

權中納言

なかむれは涙そこゆる袖のうらの月やはつらき秋のしほ風
右 丹後

ほしやらぬ小嶋の蜚の袖迄もやとりやすらんあたら夜の月
左方に申云。はしめに秋といふ事もなくて。あたら夜の
月。頗春の歌にて。よかりぬへし。右方無二申旨一。

十八番

左持

參議

あさりするをしまのあまのぬれ衣みなれそなれて宿る月哉
右 保季朝臣

里わかぬなきけは月のならひにて心なきあまの袖にすむ覽
左方申云。わか方なからみなれそなれてといへる。上日
のものゝ官なとなりたるおりそ。かゝる事はきくやう
に侍。いまた和歌の詞にきかす。すへてよろしからすと
申。右方申云。又右歌言不足のよし申。仍不能勝負也。

十九番

左勝

正三位

ひとりみる袖こそあまに通ひけれをしまか磯に月や更ぬる

右

祝部成茂

あまさかるよもの浦風雲すきて波間の月にやまとしまみゆ

右方より申云。あまにかよひけれといへる。聞よからす。

左方申云。作者にあらす。惣てきよよからす。

廿番

左

俊成卿女

人はたゝ浪のよるゝとはすとも月にあかし秋のうら風

右勝

雅經朝臣

里のあまの袖にくたけぬ影をみん岩うつ波のあら磯の月

左方申云。末句めつらしきさまなり。右方申云。末句さ

せることなし。

廿一番

左勝

御製

をくるへき月たに山をまた出ぬに夕のあらし袖にしほれぬ

右

家隆朝臣

獨すむとはかりきゝて宿かれは入相のかねにのこる山かせ

右方より。よろしき由申之。

廿二番

左

内大臣

踏なれぬ山の岩ねのゆふまよひをとやしるへの谷河の水

右勝

有家朝臣

都人たのめぬ物をまつち山ゆふこえかねてひとりかもねん

左方に申云。殊よろしきさまなるに。むすひ句あまりふ

るめかし。しかれともよろしきよし申之。右方に申云。

ゆふまよひきゝ馴す。

廿三番

左勝

前大僧正

思ひねの今朝の袂もまたひぬに又くれかゝるうつの山もと

右

定家朝臣

たのめての末のはら野の黄昏とはれぬ風に露こほれつゝ

右方宜之由申之。

廿四番

左

前大納言

都おもふ涙はたひのものなれと雲よりみねの夕暮の空

右勝

越前

今日も又夕ある雲にやとりぬと都へつけようつの山風

右方。涙はたひの物なれとゝいへる。むけにきこゆ。

廿五番

左持

左衛門督

暮は又いつくに宿をかりのなく峯にわかるゝ袖の秋霧

右

藤原秀能

草まぐら夕のそらな人とはゝなきてもつけよ初雁のこゑ

廿六番

左勝

中納言

くれぬとや我より先にとまるらん生野の末にあふ人のなき

右

具親

かゝれとて秋しもたつか旅衣かさねてしけき道のゆふ露

右方申云。めつらしきさまなり。

廿七番

左

權中納言

宿かれは露しく床のいはまぐらゆるさぬ松の風の音かな

都をはあまつ空共きかさりきなになかむらん雲のはたてを

右勝

丹後

右方申云。ゆるさぬ松のかせ。なにをゆるさぬそ。左方陳云。ゆめをゆるさぬ也。重申。しからは夢尤大切也。左方申云。右歌本歌の雲のはたては。あまつそらなる人をこふる心なり。此歌あまつそらをこひさるにたり。如何。

廿八番

左持

參議

をちこちもしらぬ山路に宿とへは松にこたふる秋の夕かせ

右

保季

移りゆく山より山にけふ暮ぬはてはしかなく野へのかり庵左方に申云。はては鹿なく。不足云といふへし。右方に申云。末句又むけにめつらしからぬうへに。きよからす。

廿九番

左持

正三位

露におきて露にやとりぬ道のへの草にしほる旅ころも哉

右

祝部成茂

み山ゆく秋の涙の夕しくれあらそふものかまきの下葉も

右方申云。上句ことありけなるに。末さまやすらか也。

左方申云。右歌は上句たに事ありけなし。

三十番

左

俊成卿女

故郷も秋は夕をかたみにてかせのみをくる小野の篠原

右勝

雅經

いたつらにたつや淺間の夕煙さとひかぬるをちこちの山

兩方殊よろしき歟と申之。しかれともたつやあさまのといへること尤めつらし。可勝と各申之。

鴨御祖社歌合建永二年三月七日

題

山家朝霞

湖邊夕花

社頭述懷

作者

左

御製

前大僧正慈圓

正二位行權大納言源朝臣通光

大藏卿正四位下藤原朝臣有家

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定家

從五位下守左近衛權少將源朝臣具親

右

從二位行權中納言源朝臣通具

俊成卿女

女房丹後

宮内卿正四位下藤原朝臣家隆

從四位下行左近衛權少將藤原朝臣雅經

正六位上行左衛門少尉藤原朝臣秀能

講師

大藏卿正四位下藤原朝臣有家

讀師

正二位行權大納言源朝臣通光

一番 山家朝霞

左

御製

檣の戸やつれなくあけし名残とて袖よりつらき朝かすみ哉

右 俊成卿女
明ぬるか霞なをまよふ谷の戸にふるすおほゆる鶯のこゑ
二番

左 慈圓僧正
都にもわかかたをかの朝かすみへたつる色の袖にうつれる
右 通具卿

人はこす霞はとつる松の戸にあすかねぬよのなにかあく覽
三番

左 通光卿
山かけのかすみの衣ほころひて春風さむきあさあけの袖
右 丹 後

やとちに深くやみゆる朝かすみ冬のなこりのしはの煙を
四番

左 有家朝臣
たつねてもけさは霞のそことたに誰かみやまのおくの庵を
右 雅經朝臣

宮古人とふともけさはしら雲の八重たつ山のなをかすみ行
五番

左 定家朝臣
明わたる峰のしはやのよそめたにわすらるはかり霞む頃哉
右 家隆朝臣

あさ露のをのへの山のたま柳さかひもとをくかすむ春かな
六番

左 具 親
朝かすみたつなたまきを友とみて春もとはれぬ谷の通ひち
右 秀 能

けさはしも霞もふかしおく山とたのめし人にうらみ残すな
七番

左 御 製
けふはくれぬあすは麓のゆきてみむなからの山の嵐吹めり
右 俊成卿女

花の色もうつりもゆくかさゝ浪やなからの山の春のゆふ暮
八番

左 慈 圓
からさきや志賀に散花色そこきひよしの山にいもひさす程
右 通具卿

なかむれは花よりほかの色もなし夕なみつゝく志賀の浦風
九番

左 通光卿
にほてるや夕日をこめてひく網のさゝ浪白くよるさくら哉
右 丹 後

暮ゆけととまりさためぬつり船の花にそやとる志賀の辛崎
十番

左 有家朝臣
志賀の山もるや梢の夕つく日ちりかひくもる花の下かせ
右 雅經朝臣

浦かけてちりかふ花のさゝ浪や志賀のゆふ風山に吹らし
十一番

十二番

左

具親

志賀のうみ入日うつるふ水の面は散てもまかふ花のうき雲

右

秀能

とまやかたゆふへの浪に袖ぬれて花こそかほれ志賀の辛崎

十三番

社頭述懐

左

御製

御集

みつ垣や我世のはしめ契をきしその言のはを神やうけゝむ

右

俊成卿女

君かためいのりをきけん萬代のはるとも神そ空にしるらん

十四番

左

慈圓

守るらん法のためにもみそきせむかたなひきなる塵拂ふと

右

通具卿

ふりにけりなくよの末を哀とも誰かはくまんかもの水かき

賀茂別雷社歌合

題

海邊歸雁

暮山春雨

社頭夜風

作者

左

御製

前大僧正慈圓

從二位行權中納言源朝臣通具

大藏卿正四位下藤原朝臣有家

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定家

從四位下行左近衛權少將藤原朝臣雅經

右

正二位行權大納言源朝臣通光

俊成卿女

女房丹後

宮内卿正四位下藤原朝臣家隆

右近衛權少將正五位下源朝臣具親

正六位上行左衛門少尉藤原朝臣秀能

講師

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣定家

讀師

正二位行中納言源朝臣通光

一番

海邊歸雁

左

御製

難波かたすきこし春に又やあふとはかなく歸る鴈ぞ鳴なる

右 通光卿

わたのはら鹽路かすみて行鴈のつはさにかゝるおきつ白浪
二番

左 慈圓

難波かた春のあしまをたつ鴈のなみたに契る秋の初露
右 俊成卿女

雲井より秋風わけし鴈金の歸るなみちは霞なりけり
三番

左 通具卿

馴てしもよゝの秋風こしの海のかへるなみたに鴈ぞ鳴なる
右 丹後

今はとて鳴てや鴈も歸らんにはのうらの明ほのゝ空
四番

左 有家朝臣

秋の空きり飛わけてこしの海の浪にかすみて歸る鴈かね
右 家隆朝臣

しほらん春の波路をゆく鴈のつはさ吹ほせやへのしほ風
五番

左 定家朝臣

浦にたくもしほの烟立わかれ霞のなみにかへる鴈かれ
右 秀能

難波江のはるへしたひて歸れ鴈またうら若き芹のなたてに
六番

左 雅經朝臣

歸る鴈遠さかり行すゑの松まつに名残の浪はかけつゝ
右 具親

遠さかる雲の鴈の名残まてかすめるつらきなには江の月
七番 暮山春雨

左 御製

三芳野や春雨きをひちる花を今日もくれぬときそふ山風
右 通光卿

あふ坂の杉の木間をもる雨のしづくにやとる春の山人
八番

左 慈圓

我袖よぬれてやとかるならひかなしくれし山の春の夕くれ
右 俊成卿女

あめそゝく花の雫はぬれつゝも露を〔本ノマシ〕とはてかへる山人
九番

左 通具卿

春とてもたれかみ山の楨の葉にとふもさひしき夕暮の雨
右 丹後

いはねふみ歸る山人いかゝする春さめそゝくたそかれの空
十番

左 有家朝臣

御吉野や花にくらせる山の奥に雨はふりきぬ道ふかくして
右 家隆朝臣

これも又いそくか秋のたつた山木のみ春雨降くらしつゝ
十一番

左 定家朝臣

けふの日もむなしき山にすきの葉の下吹かせになひく春雨
右 秀能

春雨にぬれたる花のしほれても歸るはつらき山のゆふ暮

十二番

左

雅經朝臣

霜かれのなる草木のめもはるに雨降くらすきさらきの山

右

具親

かすみたにふかき山路となかめつる峯にゆふゐる春雨の雲
十三番 社頭夜風

左

御製

和歌の浦たむくる夜半の風にこそ猶此みちに神もなひかめ

右

通光卿

さかきとるやそうち人の袖のうへにかをとめてふく春夜の風
十四番

左

慈圓

いかにせん神も思はし人もいはす夜吹風をしてにきけとは

右

俊成卿女

鐘の音もほのかにふけぬ神山の花のほかまでさそふ嵐に
十五番

左

通具

かすむ夜の月をあかすやみたらしのきよき河せを洗ふ春風

右

丹後

かも山の月のかつらの木間より神さひわたるみたらしの風
十六番

左

有家朝臣

見すしらぬその神山の神代まてかよふ夢ちをとふあらし哉

右

家隆朝臣

雲わけて君を八千代とまもるらし風靜なる神山の月
十七番

左

定家朝臣

神かきやして吹風のよをかさね誰かは君の千世を祈らん

右

秀能

さかきとるしてに嵐の音さえて袖にもあくる春夜の月
十八番

左

雅經朝臣

馴そめしその神山の夜半の嵐ちらぬたのみをまつにつく也

右

具親

かも山や仰ける御代のためしとやのとけき風に雲もなき月

歌合建曆三年八月十二日

題

作者

女房

正二位權大納言藤原良平

從三位藤原朝臣範範

從四位上行播磨守藤原朝臣範基

從四位上行丹後守藤原朝臣範宗

正五位下行左近衛權少將兼近江權介藤原爲家

從五位上行侍從藤原朝臣光家

正六位上行左衛門權少尉藤原朝臣康光

正六位上行左兵衛權少尉藤原朝臣永光

志女遊婦

上歌合

一番

左 音羽山

ふく風の音羽の山は色つけと人のこゝろの秋そつれなき

右 宮城野

このころの秋のゆふ露袖ならておほかたにやは宮城のゝ原

七番

左 長柄橋

わすれしと契りなからの橋はしら袖よりさきに朽はてに梟

右 明日香川

爲家

池 杜 原 江 河 橋 浦 關 野 山

いきて社あすをもまため飛鳥川淡ともけふはきえぬへき身を
八番

左 憚關

頼範卿

露はいかに色やはそむると思ふより涙も袖にはゝかりの關

右 布留高橋

範宗朝臣

身に秋のきても哀をしらすなり袖にしくれのふるの高はし

十一番

左 生野

權大納言藤原朝臣

いつまてか誰もいく野の草のはらなにそは露のあたの命を

右 眞野繼橋

範宗朝臣

袖の露さやく霜夜は消かへりたえまをなけくまのゝ繼橋

中歌合

八番

左 八橋

範宗朝臣

唐衣きつゝなれにしやつはしの隔てゝうつる花の名そろき

右 三嶋江

光家

みしまえや霜置まよふ芹のはのかれなは人の心とやみむ

十番

左 石瀬山

女房

我こひは人にもいまたいはせやま下行水のうちしのひつゝ

右 久米道橋

範宗朝臣

夜もすから契りし事のたえ行やくめちの橋のかつらきの山

十二番

左 万々繼橋

範宗朝臣

ひとめ見しまゝのつき橋道たえてやますも物を思ふ比かな

右 龍田川

爲家

徒にあやなき名のみたつた河わたらてはてむ物そかなしき
十四番

左 度絶橋 範宗朝臣

逢ことはいかにとたえのはしならん風のみ渡る床のさむしろ

右 生田杜 藤原永光

津の國のいくたのもりに色やなきよそなる袖を過る 秋風

下歌合

三番

左 廣澤池 志女遊婦

たのめこし人こそ秋のめぐりきてむかしを忍ふひろ澤の月

右 濱名橋 範宗朝臣

とをさかる人の心のあさきりにはまなの橋も行まよひつゝ

九番

左 佐野船橋 範宗朝臣

あつまちや行末かけてさのみやはさのゝ舟橋さして頼まむ

右 信夫原 藤康光

誰こゝに忍ふか原のをみなへしひとりしほれて秋を待らん

十二番

左 武藏野 權大納言

草のはらむかしの露やかゝりけむ妻も籠らす秋のむさし野

右 宇治橋 範宗朝臣

我そ思ふたれかはうちの橋柱いさよふ浪のよそのよなく

歌合建曆三年九月十三夜

題

江上月 旅宿戀

作者

左方

女房

權大納言藤原良平

侍從藤原朝臣定家

左近權中將藤原朝臣雅經

左近權少將藤原朝臣爲家

講師

講師

一番 江上月

左 女房

玉江こくあしかり小舟あとみえて水の秋とや月もすむ覽

右 家衡卿

風そよく苜の葉わたる夜半の月たれみしま江に渡るなる蘭

二番

左 權大納言

難波江や苜の葉分にひとりゐてみるしるしなきな月

左 しめゆふ

苜のやのなたの入江の月をみてぬるゝかあまの袖のうら浪

三番

左

定家卿

なには江に咲やこの花しろ妙の秋なき浪をてらす月影

右

家隆朝臣

みふねこくほり江の水も底すみて玉しく月の影そさえる

四番

左

雅經朝臣

秋はなをことしの空も津の國のなにはかはらすみ嶋江の月

右

俊成卿女

すみのえの波に秋風吹よせてたまゆらなひく月の影かな

五番

左

爲家

住の江のきしの松かせ吹まゝになみさへはなの秋の夜の月

右

光家

秋風の苜のうら葉を吹わけて玉江の水にやとる月かけ

六番

旅宿戀

左

女房

思ひつゝ獨たひねの夢にたにみゆとは見えぬ人の面かけ

右

家衡卿

いたつらにひとりなめし夜半の雲さても重なる旅の空哉

七番

左

大納言

から衣たひねなれきて久かたの秋の露しも袖にくちぬる

右

志女遊婦

をのつから頼む夢路に跡たえてぬれとねられぬさよの中山

八番

左

定家卿

とゝめおきし袖の中にや玉くしけふたみの浦は夢も結はす

右

家隆朝臣

逢事はたゆひの浦の旅まくらこかれそあかす夜半のも鹽火

九番

左

雅經朝臣

都にはかこちかねにし我袖にあまるもしらす野への夕つゆ

右

俊成卿女

面かけのしたはぬたひの夢覺てあはれ都の露は物かは

十番

左

爲家

梯をいくへの雲にさそひきてかたしく山の床のあき風

右

光家

戀しともえやはいはねの草枕むすひかをきし跡の契を

十一番

暮山松

左

女房

秋の色はとやまの松の夕しくれつれなき名のみ猶やふり南

右

家衡卿

夕されにさひしかれとも高砂の松をおのへに秋かせそふく

十二番

左

大納言

松の葉はもみちぬ秋のゆふたすきたむけの山を月にまかせて

右

しめゆふ

たれこゝに岩のかけちを跡たえてあらしやくれの松風の聲

十三番

左

定家卿

秋はいぬ夕日かくれの峯の松よるの木のはの後もあひみん

右

家隆朝臣

高砂のおのへの松の夕しくれかくてふり行身をやつくさん
十四番

左

雅經朝臣

今よりの夕ゐる雲やさそふらんしくれをならす峯の松かせ

右

俊成卿女

山ふかき秋にやかこつ夕暮を松にとてのみふかぬあらしも
十五番

左

爲家

夕つくひうつろふ山の松の葉はいつともわかす色をつれなき

右

光家

から錦たつたの山の夕霧になをいろふかき峯のまつかせ

仙洞歌合 建曆三年閏九月十九日

題

深山月

寒野虫

寄風雜

作者

左方

女房興徳院

勝三

大藏卿藤原朝臣有家

勝三

從三位藤原朝臣家衡

持三

宮内卿藤原朝臣家隆

勝負持

丹後守藤原朝臣範宗

勝二持一

散位藤原朝臣行能

負勝持

右方

左近衛權中將藤原朝臣雅經

負三

侍從藤原朝臣定家

負三

左近衛權中將藤原朝臣經通

持三

俊成卿女

負勝持

左近衛權中將藤原朝臣爲家

負二持一

侍從藤原朝臣光家

勝負持

判者

侍從藤原朝臣定家

講師

讀師

一番

深山月

左方

女

房

月の色も山のはさむしみよしのふる里人やころもうつ覽
右 雅經朝臣

しくれ行色こそしらねしからきの外山のおくも秋のよの月
左歌其躰高其詞覽也。可謂花實相兼。右歌すかた又い
うなるさまには侍を。しからきのとやまは。ことに深山
ときこえずや侍らん。又おくといはんためならは。外山
のことはさせる要なきにや侍らん。以左爲勝。

二番

左勝

大藏卿

秋のよと月やはかけて契置しかつらき山のくめの岩はし
右 侍 從

しらかしの露をく山も道しあれば枝にも葉にも月そ伴なふ
左上句愚意いとしも心え侍らねとも。すかたはいうに
侍へし。右しらかしの露をく山とつゝけたる。ふること
なとも侍らぬを。ことありかほにきこえ侍らは。そのこ
となくや。道あるみよの月かけ。山のおくまてくもり
なかるへき心を思けるに。こと葉のたらぬにそ侍へき。
以左爲勝。

三番

左勝

從三位

あまのはらさゆる光をしもとゆふてる月影のかつらき山
右 經通朝臣

なかも侘ぬひと夜をたにもみよしのや故郷うとき山端の月
左しもとゆふかつらき山の中にてる月影とをけるにや。
あたらしきこえ侍らん。さゆる光をしもとゆふとそ
へたるには侍めれと。俊頼朝臣歌にてる月のたひねの

床やしもとゆふかつらき山の谷河の水。ちかく家隆朝
臣。色かはるいまや木のはのうへにをくしもとゆふへ
のかつらき山。又きのふけふもかやうの心きこえ侍
しにや。この比しもとゆふかつらき山いたく耳なれて
侍れと。右歌も又ことなる事侍らねは。爲持。

四番

左勝

家隆朝臣

月影もすめはすみけり白雲のたえすたなく峯のこからし
右 俊成卿女

鳥の音も木のはもしらぬみ山分て月はわすれす涙もるそて
左右ともに。よろしくはみえ侍を。しら雲のたえすたな
ひく山によせて。月影もすめはすみけりとをける心。誠
にたくみにおもしろく侍れは。左勝と申へくや侍らん。

五番

左勝

範宗朝臣

嵐ふくみ山の庵のひまをあらみ月をあるしととふ人もかな
右 爲家

しら雲のかゝるみ山の月にたにとへかし人の秋のおもひを
左下句いうに侍へし。右秋の月のひかりにむかひて。し
ら雲のかゝるといへる。事たかひてきこえ侍れは。以
左爲勝。

六番

左

行能

君か千世を空にみやまの松のえの變らぬ月もいつとわき鬼
右勝 光家
あをやきのかつらき山に雲消てななき夜わたる月そ久しき

左歌君か代なといふとも。千世も八千世もきこえ侍なん物な。このはしめの六文字すこしきゝなれすや侍らん。又松かえ梅かえは。つれにかの字をそきゝなれて侍。花のえなとはいひなれて侍へし。ふかき難にはあらず。右めつらしきふしもみえ侍らす。又させるとかもなき程に。いさゝかまさり侍へくや。以て右爲勝。

七番

左勝

寒野虫

女房

浅ちふや床は草葉のきり／＼す鳴音もかるゝ野への初霜

右

雅經朝臣

きり／＼す鳴音もよはの初霜に野への浅茅や先かはるらん左の床は草葉とをきて。なく音もかるゝと侍。心ことはかのひとりぬるといへる本歌にはおほくまさりて。まことにありかたくこそきこえ侍めれ。右もすかたことはゝいなるさまにはへるを。ちか比露のぬき夜はの山風この比はたつたのにしき心してふけ。此歌もし作者見をよはす侍にても。今はめつらしからすみえ侍れは。以て左爲勝。

八番

左勝

大藏卿

すたきこし野もせの虫よ秋たけて我たに残るしたの思ひを

右

侍從

ゆく秋のすゑのゝ木のはあさな／＼そむれは弱る虫の聲々行秋のすゑのゝおもかけしほるらん。草葉の露霜をはをきて。木のはをしもいひたてたる。たかひて侍うへに。色といふもしもなくてそめたるも。ことはりなく侍らん。これたゝ尤風情つきて。白紙をのかるゝはかりの

九番

左勝

從三位

をのか秋をおしむか夜半のきり／＼す枯野の草の露に鳴也

右

經通朝臣

よはるかは音に鳴かれぬ蛭をのかすむのゝ霜のふりはも左はことなることなく。右はおもふところありけに侍れと。ことはやすらかならず聞え侍れは。同程には侍らん。

十番

左

家隆朝臣

野へは今虫の音たゆむ初霜に聲ものこさすうつ衣かな

右勝

俊成卿女

うらむなり今は嵐をまつ虫もかれのゝ露にきゝわふるねにむしのねたゆむはつ霜に聲ものこさすといへる歌のさま。いとよろしくは侍を。音とこそとは。なを同心にやあるへき。又ことに擣衣をよめるにや侍へき。おほかたのすかたことはは。まことにいうにきこえ侍れと。題の心。右はうるはしきにつきて。勝と申へくや。

十一番

左勝

範宗朝臣

長月やすゑのゝ原の色よりもなをかれまさる虫の聲哉

右

爲家

初霜のをくのゝ小篠うらみてもをのれ枯行松むしのこそ左歌心ことはかなひて。よろしくこそ侍めれ。右歌をくのゝをさゝといへる。きゝなれぬやうには侍れと。たゝはつ霜のをくよしをよめるにそ侍へき。末のゝ原は猶いひしりてみえ侍れは。以て左爲勝。

十二番

左勝

行能

虫の音もつきせぬ御代をたのむらし露は夜寒の野への松虫風イ

右

光家

すゝ虫の聲はいとゝやよはの霜ふるのゝをさゝたへぬ嵐に
虫の聲夜半の霜のこと。七番の右の歌のおなし心に侍
へし。すゝむしのふりたることも。めつらしからす侍れ
は。つきせぬ御代なと祝言に侍めれ。勝侍へし。

十三番

左勝

女房

寄風雜

龍田河なかれも行か紅葉々のちらぬかけをも風にまかせて

右

雅經朝臣

つくはねのこのもかのもの嵐にも君か御かけを猶や頼まん

左心すかたいとよろしくは侍を。秋の歌にやすこしき

きなされ侍らん。右歌のさまもいうに。心もあはれに侍

るを。つくはねのこのもかのもの君か御かけ三句をき所。

たゝかけはあれとますかけはなしといふ二句はかりや

かはりて侍らん。古歌を本とすれと。三句おなし所にを

かは。あたらしき歌のこゝろいくはくならずとかや。そ

のかみ老父申旨侍き。猶以左爲勝。

十四番

左勝

大藏卿

長月のかきなる雲のかよひちに行末とをき秋風そふく

右

侍從

飛鳥川今はふるさと吹風の身はいたつらに秋そかなしき

左かさなる雲によせて閨月をそへたる。心たくみに詞

いひしりて。いとよろしく侍うへに。右いたつらにふり

はつる身かなしめるよりほかに。心詞のおかしき所も

侍らねは。返々以左爲勝。

十五番

左持

從三位

そよやいかに幾よに成ぬ神風やいせの濱萩とはゝこたへよ

右

經通朝臣

いく千世と思ひもわかぬ秋かせにをのれそなる住吉の松

伊勢の濱萩のいくよ。住吉の松の幾千世。左とはゝ。右

なる。いくはくのをとりまさりみえ侍らぬにや。

十六番

左持

家隆朝臣

我よはひ君のやちよにふく風の契かそへよ和歌のうら浪

右

俊成卿女

なかき夜の夢をもさませ露ふかきさゝの庵のしたは吹かせ

この兩首。又よろしき持に侍へし。

十七番

左持

範宗朝臣

しるへせよ我言のはに吹風もきこゆはかりにすみよしの松

右

爲家

山おろしによその木葉は散はてゝ松にはたえぬ夕しくれ哉

此番も猶いくはくの勝負みえ侍らす。右歌たゝ山風と

て侍なん。

十八番

左持

行能

風たゝぬ御代のしるへはしら浪の岩うつ聲もなきなり梟

右

光家

行末もたのみそわたる天津風のときき御代の雲のかけはし

兩首の御代風しつかなる心。又おなしさまにみえ侍め

れは。しゐてわきまへ申かたくや侍らむ。

群書類從卷第百九十五

和歌部五十歌合十六

禁裡歌合建保二年七月二日當座

一番 初秋露

左持

女房

萩原やすゑはの露もしらせけりうき身ひとつの秋の夕暮

右

家衡卿

さやかにもしらぬ計の秋風にうらめつらしき袖の白露

二番

左持

頼範卿

風のみかいつしか萩のうへに又秋しりかほにをける白つゆ

右

範基朝臣

昨日けふまた秋淺き萩のはにいつしか露のやとり馴たる

三番

左持

經通朝臣

秋きぬとまた夕風も音せぬにあやしや袖に露そこととふ

右

範宗朝臣

みそきせしゐくしに秋や立ぬらんかへれは深し道芝の露

四番

左持

保季朝臣

秋とたにまた大かたはしら露の萩のはならず程もへにけり

右

兼隆

今朝みれは野原のくさの露そをく袖より外も秋はきにけり

五番

左持

藤原康光

里わかす秋はきにけり白露の萩のうは葉に月や澄らん

右

菅原淳頼

ふか艸のあれにし里をけふみれは野原の露に秋はきにけり

六番

野草花

左

藤原康光

秋とみしきのふの暮のいかならんあさけの袖の萩か花すり

右持

家衡卿

宮城野やはつ花摺の秋の色にいつしかうつる心なりけり

七番

左持

保季朝臣

昨日みし野への夏艸いつのまにもとあらの萩にをしめ鳴覽

右

菅原淳頼

みやきのゝ野へのけしきの色に出て小萩かはらに秋風そ吹

八番

左持

宮城野や千種の秋の唐にしきかはらぬ露も色そかはれる

右

兼隆

染わたす萩の錦の花さかりたゝましくしき野への色かな

左

頼範朝臣

つなかぬ駒も心せよ野への小萩の花さかりなり

右勝

範基朝臣

秋きぬとけさはいはれの野へとてや尾花か末に風もほのめく

左勝

女房

萩か花咲らんをのゝ朝露にぬるゝはかりの袖の色哉

右

範基朝臣

宮城のゝ露をたひねにかたしけは袂にうつる萩か花すり

左勝

女房

夕山風

右

範基朝臣

艸葉にはあたにおもひし夕露を衣手ならす秋の山風

左勝

頼範朝臣

夕つくひ入さの山の秋風に袂すゝしき日くらしの聲

右

兼隆

けふも又入相の鐘にかよひきて初瀬のひばら風すきむ也

左勝

經通卿

詠めわひぬ秋風今はたつ田山夕ゐる雲もかつ時雨つゝ

菅原淳頼

袖の露も泪もいかにしくるらん秋は夕の山おろしのかせ

左

保季朝臣

猶ふかき夕は空や寒からむ外山のまさ木あき風そ吹

右勝

家衡卿

いつしかとかはるか秋の夕ま暮すゝみに來つゝなれし山風

左持

藤原康光

村時雨も山陰の夕かせにもろき木葉の色そうつろふ

右

範基朝臣

つま木こる片山陰の夕すゝみ袖に吹まく萩のうはかせ

左持

藤原康光

さやけさも誰か又みん村しくれはれぬる雲の跡の月影

右

範基朝臣

村雨のはれ行すゑの雲間より出るも澄る秋の夜の月

左持

保季朝臣

誰里のあさちに露のこほるらん村雨すきぬ月の行ゑに

右

範基朝臣

なかめすや一村すくる夕立のはれのゝ跡の山端の月

左持

經通卿

村雨の雲も残らぬ山のはに待いつる月の秋の夕くれ

右

家衡卿

雨雲のよそに晴ゆく夜半の月さしのほる影の氷る玉水

頼範朝臣

村雨は通りにけりな浅茅生の露にわりなく月をやとして

右勝

菅原淳頼

夕暮は雲もとまらず村雨の空とも見えす澄る月かな

左勝

女房

秋の雨の宵の村くも跡きえてはらふ嵐に残る月かな

右

兼隆

時雨つる雲ふく風をたよりにて千里にすめる秋のよの月

廿一番

蜀中戀

左(判冬)

女房

いのちやはあたの太野の艸枕はかなき夢もおしからぬ身を

右

菅原淳頼

月影にちきりて出し面かけを忘れすしのふ古さとのそら

廿二番

左勝

頼範朝臣

ぬるゝをは山ちの露にことよせてかこつ方なき袖の色哉

右

家衡卿

旅の空いつまれなれし夕暮にわきても物を思ふなるらん

廿三番

左持

經通卿

春ことにかはらず歸る雁かねは霞のうちに道やしるらむ

右

名朝

立わたる霞の末の山端のはつかにみえて歸るかりかね

廿四番

左(判冬)

範宗朝臣

此ころは秋をしのたの杜にきて月の露ちるそての面影

右

以下關

歌合建保二年八月十六日

題

秋風

秋露

秋月

秋雨

秋雁

秋虫

秋鹿

秋花

秋水

秋霜

秋視

秋旅

秋戀

秋懷

秋雉

作者

女房順德院

僧正行意

權大納言源朝臣通具

參議藤原朝臣定家

大藏卿藤原朝臣有家

宮内卿藤原朝臣家隆

左近衛權中將藤原朝臣雅經

丹後守藤原朝臣範宗

侍從藤原朝臣光家

皇太后宮大夫俊成卿女

講師

講師

判者 參議藤原朝臣定家

一番 秋風

左勝

定家卿

おさまれる民の艸葉をみせかほになひく田面の秋の初風

右

有家卿

しらさりついつはた秋のきにけらし深く身にしむ風の音哉

左の歌民の草葉かせになひき。稻葉の雲をなせる心は

かりにて。更によろしきふしも侍らぬにや。右の歌たけ

あるさまに侍れと。一番の左。治世にことよりて侍れは。

爲レ勝。

二番

左勝

女房

よや寒き衣手うすし片敷のまたひとへなる秋の初風

右

俊成卿女

萩のはにそよく哀は吹過て心にのこる秋かせのこゑ

左かたしきのまたひとへなる侍る。詞姿えんにおかしく聞えはへるを初五文字そ。あきの初風にほすこし

過てやときこえ侍る。右そよく哀なと申事。ふるきうた

には見え侍らす。吹すきて心にのこるなと。申さまほし

きこと葉にははへらねは。以_レ左爲_レ勝。

三番

左持

家隆朝臣

狹筵に人をはたれとたのまねとくるゝ夜ことに秋風そ吹

右

雅經朝臣

今よりの萩の下葉もいかならんまついねかての秋風そ吹

人をばたれと頼ねとくるゝ夜ことにといへる。尤よろ

しく聞えはへるを。まついねかての秋風もをとるへく

も侍らねは。ことによるしき持にやはへらん。

四番

左勝

僧正

うちなひき正木のかつら秋やくる外山にかはるけきの初風

右

通具卿

露はけに袖も置あへす萩のはやしのに秋ふく夕暮の風

あられ降らしといふ本歌をおもひて。正木のかつら秋

やくるとをき。外山にかはるなと侍る。ありかたくみえ

はへれは。しのに秋ふくも心あるさまに侍れと。猶以_レ左

爲_レ勝。

五番

左勝

範宗朝臣

彦星の妻待秋のよひの間は風のみわたる鵲のはし

右

光家

うつり行艸葉につけて吹風の色はさやかにみえぬ秋かな

左歌尤宜。仍爲_レ勝。

六番

左勝

家隆朝臣

乙女子か袖ふる山の玉かつらみたれてなひく秋のしら露

右

通具卿

矢田の野の色つく淺茅をしなへて白くも露を吹嵐かな

左歌をとめ子か袖ふる山に玉かつらみたれてなひく。

心もめつらしく。姿も及ひかたきさまにはへるへし。か

やうなるをや秀歌と申へく侍らん。右歌もやたの野に

淺茅いろつくといへる。ふるき心たくみにいひくたさ

れて侍れと。此左のうたは。なをいてきかたきさまにや

侍らん。

七番

左勝

僧正

秋きぬと風にのみやは驚かんひろはぬ袖に玉もはかなし

右

光家

木間より色つく影にうつりきて袂にそむる秋の夕露

左ひろはぬ袖に玉もはかなしと侍。露の詞まことにあ

さやかに面白くみえ侍るうへに。右このまよりいろつ

くかけ。なにの影ともきこえねは。殊以_レ左爲_レ勝。

八番

左持

女房

小山田のかりほの庵のことはに我衣手は秋の白つゆ

右

範宗朝臣

秋きぬときそな草葉のしほるらん袖たにかゝる露の手枕

左右の露のこと葉艶なるさまにて。姿もおなし程にやはへらん。

九番

左

定家卿

袖ぬらす忍ふもちすりたかためか亂てもろき宮城のゝ露

右勝

雅經朝臣

音そよく萩のはよりも秋風の人にしらるゝ袖の夕露

左のしのふもちすり。古きみたれをき所もかはらす。めつらしき所侍らねは。右させるとかなくて。勝侍るへし。

十番

左勝

有家卿

夕されは野もせにみかく白露のたまれはかてにあき風そ吹

右

俊成卿女

ことはりの露と計はなくさめとぬれそふ袖にもよほすも秋

左たまれはかてにこそ。いと有かたく宜きこえはへるめれ。右もよほすも秋といへる。きゝなれぬこと葉にや侍らん。尤以左爲勝。

十一番

左勝

雅經朝臣

大かたは我身ひとつの秋としも嵐にはるゝ山端の月

右

女房

天津空道もやとりも白雲のあくるもしらて月をみる哉

左いとよろしくいひくたされて侍うへに。右の道もや

とりもしら雲のとはへる。愚意わきまへ知かたく侍れは。左勝とや申へく侍らん。

十二番

左勝

通具卿

秋はまたうきをも袖につゝみ息なれぬる月の露のかことに

右

範宗朝臣

夕より雲をはらひし秋風のともに更行山のはの月

左うきをも袖になといへる。おもひ入て侍にや。右もこころあるさまにはみえはへれと。共に更ゆくといはゝ。

山のは遠くや侍らん。なを以左爲勝。

十三番

左勝

家隆朝臣

あくかれて宿をは出ぬ此里も我衣手は月にぬれつゝ

右

定家卿

いつはとはわかぬ常盤の山人も空におとろく月の影哉

左歌ゆうなるさまに侍れは尤爲勝。

十四番

左勝

僧正

鵲のちかふる橋のおもひはをよわたる月のいかてもるらん

右

俊成卿女

君と秋と月とひかりと萬代の契りは空に曇りなくみゆ

左をよひかたきやうの姿こと葉にはへるうへに。右君

と秋と月。ことは心えられて侍るを。此外光とわけて申ならへん事。いかゝはへらん。心えられ侍らねは。以左

爲レ勝。

十五番

左勝

有家卿

月みても我世はすてに久堅のあまねく照せ秋の心を

右

光家

久堅の清きみ空の秋風に月も光をみかきそふらし

左すかたも宜。心もさる事と。あはれにきこえはへるう

へに。右みそらの月なとを下に置いて。清きといふこと葉

につけて侍る久かた。ことけりたかひてや侍らん。以

レ左爲レ勝。

十六番

左持

僧正

いとほしな月待よひのあさちふにたえくそく秋の村雨

右

雅經朝臣

風すさふ桐の落葉に跡たえて窓ふかきよの秋の村雨

右歌空階雨滴落葉窓深なといへる古きこゝろ。何とな

くおもひいてられて。ゆへあるさまに侍れと。左の月ま

つよひの淺茅生も。又おもかけありて。えんに聞えはへ

れば。おなし程の事にや侍らん。

十七番

左

定家卿

花そめの衣の色もきたまらす野分になひく秋のむら雨

右勝

通具卿

人はこす拂はぬ軒のきりのはに音なふ雨の音そ淋しき

左衣の色もきたまらすといへる。其こと聞えずや侍

らん。右雨滴梧桐山館秋といへる景氣かよひはへるに

や。此雨のをとは。いとよろしく聞え侍れは。殊爲レ勝。

十八番

左勝

家隆朝臣

秋はまた軒はの木葉つれなくてきまもまかはぬ夜半の村雨

右

範宗朝臣

朝な一葉つちる杵原あきも時雨のもろき色哉

左ことなる事侍らねと。いひしりて聞え侍にや。右もゆ

うにははへるを。落葉冬にかきりて申をきたらんやう

にきこえ侍らん。猶きまもまかはぬなと。宜聞え侍れは。

爲レ勝。

十九番

左

女房

宮城野の木の下露やいかならん風に玉まく秋のむら雨

右勝

有家卿

日くらしのなく夕暮のうき雲に村雨そく森の下露

宮城野の木の下露。ゆうには聞え侍るを。なく夕暮の浮

雲も。やすらかにいひくたされて。景氣みる心地しては

へれば。爲レ勝。

廿番

左

光家

しほれぬや庭も籬も秋の色のふるとはつらき夜の村雨

右勝

俊成卿女

風まぜに窓うつ夜半の村雨のもらぬよりもる床の露哉

秋の色のふるとはつらきとつけたること葉。さらに

叶はすや聞え侍らん。無下にいふかひなくみえ侍れは。

もらぬよりもるも殊に聞よくは侍らねと。いろのふる

には何かは勝はへらさらん。

廿一番 秋雁

左

俊成卿女

松風の秋にはいとゝたえゝにふしみの夢のきゆる 鴈金

右勝

家隆朝臣

鴈かねの開ゆる空や明ぬらん枕にうすき窓の月影
伏見の夢。いたくありつきてやはへらむ。いつれの名所
にも。その夢はきゝならひ侍らす。題の雁金もかしこ
くましり侍にけり。枕にうすきこそ。いとおかしく聞え
侍れは。爲_レ勝。

廿二番

左勝

女房

誰ためにくる秋風のことつても涙そおつる初鴈の聲

右

通具卿

秋ふけぬ衣かりかね夜や寒きつはさにくもを重ねてそ鳴
右の衣かりかね雲をかさねたる心。おもひ入てたくみ
には聞えはへれと。左はことよろしく聞え侍れは。可_レ勝や侍らん。

廿三番

左

定家卿

此ころは鴈の涙やはつしほにいろわきそむる峯の松風

右勝

僧正

鴈かねのゆきゝを空に忍ふとて霞を霧にいくへ詠つ
左のかりの泪のあとばかりにて。松風の歌と申へくや
侍らん。右往來を空にしひ。かすみを霧になかめたる
心。誠にめつらしくおかしく侍れは尤爲_レ勝。

廿四番

左持

範宗朝臣

秋イ

山人も道たえぬらん鴈かねの友よひかはす峯の朝霧

右

有家卿

秋の鴈風にきほひて越路より誰をたのむの澤に鳴らん
左歌詞ゆうにははへるを。鴈かね峯の秋霧に友よひか
はせる心。鹿のこゑなどにおもひよそへられて。山とひ
越る雲井のつはさとしも聞えずや侍らん。右誰をたの
むの澤になかは。風にきほひてこし路の事。ことなるよ
うなくやはへるへき。爲_レ持。

廿五番

左勝

雅經朝臣

鳴わたる鴈の泪やしくるらん羽うちかはす村雲の空

右

光家

たつた山からくれなゐの降出て鳴や木末の秋の鴈かね
左こゝろこと葉はしめをはりかなひて。いと宜こそ侍
めれ。右梢の秋の鴈。さきにはへる同じさまの。是は今
すこし見ならはぬすまゐにや侍らん。たかみそきゆふ
つけ鳥なとをみたかえて侍るにや。かへすゝ以_レ左爲_レ勝。

廿六番

左持

秋虫

女房

秋の野の尾花吹ちる風のうへにありか定めぬ虫の聲哉

右

有家卿

秋の虫のはたをる野へのくれはとりあやしや袖に露亂つゝ
秋の野かせにありか定めぬ虫の聲。さこそは侍らめ。は

たをる野へにくれはとりのあや。ことはりは聞え侍れ
と。左は艶に右は事理かなひて侍れは。持とや申へく侍
らん。

廿七番

左勝

僧 正

くるゝより同しまかきのきりゝゝす近つく聲に夜や更ぬ覽

右

家隆朝臣

野や寒き夜半の枕のきりゝゝす我もとゆひも霜は置なり

おなしまかきながら。更て近つく虫のこゑ。面影いとお
かしく聞えはへれは。たれもいとひかね侍。霜の色はわ
さと負に申なし侍るへし。

廿八番

左勝

通具卿

露はつゆ鳴音はたてつ荳おもふか物をあきのよもきふ

右

光 家

秋は猶淺茅か原のをのれのみかれゆく虫の何を待らむ

おもふか物を秋の蓬生。優にはへれは勝侍るへし。

廿九番

左持

雅經朝臣

月影はいたらぬ里もなく虫の聲のかきりや深草の露

右

範宗朝臣

まつ虫のこゑをとひくる秋の野はたかふる里の庭の籬そ

兩首ともにさせる難侍らねは。同しほとこの事にや侍ら
ん。

三十番

左

定家卿

あるしから思ひたえにし蓬生に昔もよほすまつ虫のこゑ

右勝

俊成卿女

うつもれぬ軒はにつたふ虫の音に蓬かもとの宿の夕暮

おなしさまのよもきにははへれと。蓬も歌も右はたけ

勝りてや侍らん。

三十一番

左勝

女 房

三室山下草かけてなく鹿の聲よりしけき曉のつゆ

右

家隆朝臣

忍ひわひ思ひやかくる神なひの三室の山に鹿を鳴なる

兩首みむろ山。下艸かけて鳴鹿のとはへるは。今すこし

優にはへれは。勝と申へくや侍らん。

三十二番

左持

通具卿

昔おもふ三わの檜原や風くれて峯にをしかの聲送なり

右

雅經朝臣

おもひ入山にても又鳴鹿のなをうき時は秋の夕暮

猶うき時は秋の夕くれ。いと宜は聞えはへれと。むかし

おもふ三輪のひはらも心あるさまに侍れは。持にやは

へらん。

三十三番

左

光 家

色かはる床は淺茅生露霜に鹿も妻なき音をや鳴らん

右勝

有家卿

あさちふのをのか艸ふしうら枯て人やとはぬ小男鹿の聲

色かはる床。聞よからす。又鹿のつまなき。事ふりはへ

りき。をのか草ふしうらかれて。いと宜きこえ侍れは。
勝はへるへし。

三十四番

左勝

範宗朝臣

時こそあれいかに契りてきをしかの秋の夕の野へに鳴らん

右

俊成卿女

恨よとなれる契の鹿の音に夕もつらき霧のまかきに

鹿のちきり秋のゆふへ。おなしこゝろにははれと。左

はこと葉つゝきいひしりて宜聞え侍れは。爲勝。

三十五番

左勝

僧正

秋山のみねゆく鹿の友をなみ霧にまとへる夕暮の聲

右

定家卿

朝な／＼木葉うつろひ鳴鹿のことはりしるき秋の山かけ

右ことはりにくゝ侍れは。以左爲勝。

三十六番

左持

女房

袖の色は露のひまたにとゝまらて薄も萩も秋風そ吹

右

僧正

咲にけりうたの大野の小萩原つまふ鹿も今かなくらん

爾首ともに優にきこえはへれは。爲勝。

三十七番

左

定家卿

旅衣ひもとく花のいろ／＼に遠里小野のあたらし朝きり

右勝

俊成卿女

ぬれてほす袖こそあらぬ露の色はもとみし秋の萩か花摺

左花をおしむ心によりて。あたらし朝霧とつゝけたる。事
たかひてや聞え侍らん。右作者定てゆへ侍らん。優に侍
れは爲勝。

三十八番

左勝

通具卿

をしなへて移ろふ露にわきかねぬ花のえ毎に秋とをいはん

右

光家

小萩さく花すり衣うつろひぬねれてのちや袖の朝つゆ

右下句こそ心えはへらね。後しも朝露ならんこと。なに

と侍にか。左尾花か末を秋とをいはんといへる歌をお

もひて。花の枝ことにと侍。おかしく聞えはへれは。尤

爲勝。

三十九番

左

家隆朝臣

あかなくに野へにましりてけふ暮ぬ露の宿かせ本あらの萩

右勝

範宗朝臣

やとりつる月はかたみもとゝまらてあけゆく袖は萩か花摺

左いとおかしく侍れと。すこし聞なれて侍るへし。右月

はかたみもとゝまらて明ゆく袖とはへる。いと珍ら

しく優に聞え侍れは。爲勝。

四十番

左

有家卿

朝露に花の下ひもとけにしを又今さらに野への夕暮

右勝

雅經朝臣

秋風に咲ちるをのゝ露しけみ袖もとをゝにうつる萩原

左とけにしをのへと侍る。又心えわかれ侍らす。右袖も

とをうにうつる萩原といへる。よろしく聞えはへれは。

爲勝。

四十一番 秋水

左勝

僧 正

立田川うつる紅葉のちらぬまはわたれとにしき中や絶ける

右

範宗朝臣

ふみ分て誰かはとはん秋山の紅葉ふりしく谷の下みつ
わたれとにしきといへること葉。珍らしくおかしくみ

え侍れは。爲勝。

四十二番

左勝

家隆朝臣

山のはも時雨はまたき朝日影くれなゐにほふ瀧の白糸

右

有家卿

大井川しもはかつらの紅葉はもひとつあらしの山の秋風

大井川しもはかつら。あまりくはしくや侍らん。あさ日
影にほふらん瀧のしらいと。すこしは勝はへるへくや。

四十三番

左勝

通具卿

おもひこし生田の杜の秋風に川音すみぬ夜や更ぬらん

右

光 家

時雨つゝ木葉をさそふ水の面に浮ても秋のいなんとや思

うきても秋のいなんとやおもふ。よはくや侍らん。左河

音はたくみなるさまに聞えはへれは。爲勝。

四十四番

左

定 家卿

秋風のかつ吹はらふ谷の戸におもふもきよくすめる山水

右勝

音羽川關のあらしの影みえてたか色深き秋の瀧つせ

たか色深き秋のたきつせ。まことによるしく侍りぬ。尤

爲勝。

四十五番

左持

女 房

人くまぬ板井の清水里とをみむかしもいくよ秋そもりくる

右

俊成卿女

小倉山あらしやいそく大井河はやせの浪に秋の日數を
兩首下句。ともに心ゆかす聞えはへれは。爲勝持。

四十六番

左勝

女 房

もみち葉はふりみふらすみ置霜のさえ行松に秋風そ吹

右

光 家

初霜のをくらの山はうつろひぬ秋の木葉の色もかきりに
紅葉のふりみふらすみこそ。いと珍らしくおかしく聞

えはへれは。以左爲勝。

四十七番

左勝

僧 正

さをしかの妻とふ岡は霜かれてからぬさは田に残る秋風

右

俊成卿女

置まよふ影をかたしく袖の月の霜のまくらに秋風を吹

袖の月霜の枕。艶には聞え侍れと。ことなるこゝろは侍

らぬにや。妻とふ岡はしもかれてなといへるは。いと宜

侍れは。勝はへるへし。

四十八番

左

家隆朝臣

しらすけの眞野の萩原朝なをきまとはせる秋の初霜

右勝

雅經朝臣

よを寒み今はあらしの乙女子か袖ふる山の秋のはつ霜

左もさせる難なくいひしりては聞え侍るを。右の今は

あらしのをと女子かとをける。おなしはつ霜も。ことに

艶に聞えはへれは。爲勝。

四十九番

左

定家卿

秋の色に残るかたみの霜をたにをけかし艸はそれもとまらず

右勝

有家卿

霜白くをかか庵のさまくら一夜に秋の末はをそしる

左をけかし草は。輕々の詞に侍るへし。右さく枕ひとよ

の秋かせ(故)なきに侍らす。勝侍らん。

五十番

左持

通具卿

行あはぬ方のまよひに霜そをくにぬしまもりか麻のさ衣

右

範宗朝臣

山里は雪よりさきも住わひぬ初霜かれの長月の空

左は萬葉の古風をこひねかひ。右は九秋のくれを悲し

む。姿詞はかはりて侍れと。をのくおもへる所其難侍

らねは。左右相似たり。持にや侍らん。

五十一番

左持

有家卿

君か代にちの秋風吹そめてなひきにけらし野への草木も

右

僧正

君かへんよはひをかねて幾千代とかすかく鳴の羽音よ深し

兩首ともいはひのこゝろ。歌のさまいつれとも申かた

くはへれは。爲持。

五十二番

左持

定家卿

山水に老せぬ千代をせきとめてをのれうつるふ白菊の花

右

範宗朝臣

菊の花君かためには長月のこゝぬかことに千代そつむへき

左はことなる事なく。右もすこし平懷にや侍らん。是も

不分明。

五十三番

左

女房

行末をおもへはひさし乙女子か袖ふる山の秋のよの月

右勝

家隆朝臣

君か代のちとせも秋そ顯るゝ四方の時雨に残る松かえ

左もさせる難なくはへるを。右の四方のしくれに残

る松か枝。なをめにたちて。よろしくみえ侍は爲勝。

五十四番

左

光家

千代のかけ久しかれとそ松かえに猶吹むすへみよの秋風

右勝

通具卿

君か代はちの秋風まさかつら神の宮人いのりそめけん

左の千代のかけみよの秋かせ。祝の歌には。よの字あま

なよめるためしも侍めれと。なを其難なき右の歌。勝は

へるへきにや。

五十五番

左持

雅經朝臣

神風やみもすそ川の夕波に干とせの秋の聲はつきせし

右

俊成卿女

あめつちのひらけし神のみことより千歳の秋は我君のため
左は優に。右はちからいれたるさまにはへれは。又おな
し程とや申へく侍らん。

五十六番 秋旅

左

定家卿

ふる里は遠山鳥のおのへより霜をく鐘のなかきよの空

右勝

家隆朝臣

艸も木もあたる比の野山わけ契りし都程もはかなし

ふるさと遠山鳥。ことなる事侍らし。草も木もあたる
ころは。おかしく聞え侍れは。爲勝。

五十七番

左持

通具卿

都おもふ袖もかた／＼ほしあへすあへの嶋山露深くして

右

雅經朝臣

月よ猶さやの中山なか／＼になに面影の秋のふるさと

萬葉のあへの嶋山夕露にといひ。古今のさやの中山な
かなかといへる本歌のころ。何れもおもひ侍所は

へれは。勝負申かた／＼やはへらん。

五十八番

左持

女房

都をはよそにたに見んさゝのくまひのくま河の秋の夕暮

右

範宗朝臣

東路やこえ行山も色つきぬ都も今やうち時雨るらん

檜隈川の秋の夕くれ。艶に聞え侍るを。こえゆく山の色

つくをみて。宮古のしくれをおもへる心。ことにめつら
しく侍らねと。又優に侍れは。持にや侍らん。

五十九番

左

光家

うらみぬや旅ねの夢ば秋風にむすほはれたる故郷の空

右勝

僧正

歸りこん程をはいつとしら露のすかるなく野に秋風そ吹

左初五文字ころえはへらす。秋風ふる里もむすひに
くき物にや侍らん。白露のすかるなく野こそ。珍敷おも

しろく聞え侍れ。尤爲勝。

六十番

左持

有家卿

ふる里はしのふやいかに信夫山とはゝや秋の風のたよりに

右

俊成卿女

古郷の雲たにそれと跡もなし淺間の山の秋霧の空

左とはゝや秋の。すこし事淺くや侍らん。右の雲たにそ
れと。ことたらぬ心地しはへれは。同じ程にや侍らん。

六十一番

左勝

女房

わすれはや風はむかしの秋の露ありしにも似ぬ人の心を

右

定家卿

下むせふもしほの煙こかるとて秋やはみゆる人はうらみし

風はむかしの秋の露。艶におかしく聞えはへれは。爲

勝。

六十二番

左持

光家

きけはうし吹とな告そ白露の置て人まつ宵の秋風

右

俊成卿女

面影〔は〕契りしまゝのここの葉にまたしきくるゝ秋の色哉

ことなる事侍らす。勝負不分明。

六十三番

左持

通具卿

なかむれは空やはかはる今こんのまゝの繼橋月も恨めし

右

家隆朝臣

長してふ秋のよのまも徒にゆきては來ぬる夢のかよひ路

まゝのつきはしにかはらぬ月をうらみ。夢のかよひちに長き夜をおもへる心。いつれと申かたくや侍らぬ。

六十四番

左勝

僧正

東雲や別るゝ空のうき雲にのこすかたみの月もとまらす

右

雅經朝臣

風むすふ便もつらしみちのへの尾花かもとの露の下艸

左右ともに艶によるしく聞えはへるを。右は風むすすこしあたらしくきこえ侍れは。なを以て左爲勝。

六十五番

左

有家卿

すへてたゝ戀せぬ袖の露たにももろきならひの秋の夕かせ

右勝

範宗朝臣

かこつへき艸葉にあまる袂哉秋より外の色に出つゝ

左も優にはへれと。右はなをよろしく聞え侍れは。勝はへるへくや。

六十六番

秋懷

左持

女房

秋も秋月も雲ゐのそれなから昔を今におもひかねつゝ

右

雅經朝臣

しらさりしね覺も今はふかき秋の有明の月によを残しつゝ

左ことのゆへ侍らん。作者をうけたまはらては。わきまへ申かたくはへれ。右もやすらかに云くたして侍れは。勝負いつれと申かたくや侍らむ。

六十七番

左勝

僧正

今そしるあゆむ艸葉に捨をきし露の命は君かためとも

右

家隆朝臣

いつこにか身をは宿さん鴈のくる嶺にも晴ぬ思ひある頃

右の歌も。こゝろ姿いとよろしく聞え侍を。左のあゆむ草葉とをきて。露のいのちはといへる。猶みところ多くはへれは。爲勝。

六十八番

左勝

範宗朝臣

捨やらぬ身を秋風に年をへておつる涙の數そ添ゆく

右

俊成卿女

身をいとふ心をちきる古郷のまかきの花とさける朝かほ

左さる事ときこえて。あはれもふかくこそ聞なされはへれ。右も優にはへれと。こゝろをちきるなど。すこしくたけてきこえ侍れは。左爲勝。

六十九番

左

有家卿

誰かとはんたゝ徒にふりまさる身をしる雨の秋の夕くれ

右

定家卿

老か身はあはれ末野の草栢によるの思ひの長月の空

兩首共に舊老のうたにはへるめり。人すくななる尙齒會にや侍らん。としまさりて侍らむ作者勝侍るへし。

七十番

左勝

通具卿

ねさめとふさそなならひの風もうし秋も昔の秋ならぬ身に

右

光家

かれぬとも猶音にたてよ蛩なれも今はの秋の思ひを

右はなれも今はなといへる程。常の事の下からぬにやはへらん。左は優なるさまにいひななされ侍れは。勝侍るへし。

七十一番

秋雜

左

定家卿

わたつ海や秋なき花の波風も身にしむ頃の吹上の濱

右勝

範宗朝臣

鳴のたつ野澤の秋の夕まくれいつくとまる心なるらん

右の歌こそいとよろしく見えはへるめれ。仍爲勝。

七十二番

左持

女房

高砂の松にすむ月今よりの尾上の霜や光そふらん

右

僧正

吉野山こけに露をく岩かねに契ありければあまたひねぬ

高砂の霜のひかり。吉野の露の契。松にすみ。いはにふす。持に侍るへし。

七十三番

左持

通具卿

影清き蓬かほらの秋の月霜をてらさは捨すもあらなん

右

有家卿

人とはゝ柴のあみ戸をしあけていつか深山の秋をこたへん

左もし霜鬢のこゝろにや侍らん。思ふ所侍らん。右いつかみ山の秋をこたへんも。優に聞えはへれは。勝負不明。

七十四番

左勝

雅經朝臣

秋の色をかつはつらしとみ山木のこりす時雨も袖をかす覽

右

光家

吹まよふ梢そもろき秋風にこは世にしらぬ袖の露哉

左の歌いとよろしくこそはへるめれ。右歌大かたもその所ときこえ侍らぬうへに。こは世にしらぬといへる。みくるしく聞え侍れは。殊に以左爲勝。

七十五番

左勝

家隆朝臣

嵐ふくふるの神杉露おちて其代もしらぬ秋の夕暮

右

俊成卿女

苔ふかくやとるも悲し秋の月忘れぬ袖に露やをくらん

左その代もしらぬ。又ことによろしくはへるうへに。右のわすれぬ袖につゆやをくらんとはへる。すこし心えかたくや侍らん。おほつかなきまては侍らねと。猶すくれて聞え侍れは。勝侍るへし。

月卿雲客妬歌合建保二年九月盡日

題

河落葉

寄鳥戀

深山雨

作者

左

女房

權大納言藤原朝臣良平

從三位藤原朝臣家衡

右近衛權中將藤原朝臣家良

從三位藤原朝臣基良

右近衛權中將源朝臣通方

參議左近衛權中將藤原朝臣經通

兵衛内侍

七條院權大夫

俊成卿女

右

左近衛權中將藤原朝臣雅經

散位藤原行能

左近衛權中將藤原朝臣國通

宰相忠定朝臣

散位藤原朝臣保季

中宮大進藤原朝臣兼隆

左衛門權少尉藤原康光

文章生菅原淳賴

前播磨守藤原朝臣範基

侍從藤原光家

講師

讀師

判者

宮内卿藤原朝臣家隆

一番 河落葉

左勝

女房

故さとのさほの川水いかならむはゝその色は風ものこらす

右

雅經朝臣

神なひの山のあらしや立田川みつの秋のみ深きころかな

水の秋のいつくはあれとさほ河のはゝその紅葉身にそ

しみける。

二番

左持

權大納言

もみちはやよとますうかふ飛鳥川なかれて早き秋の日數に

右

行能

あすか河行せも深き紅葉々にきのふの波も色かはりけり

もみちはの流れて早き飛鳥河きのふもけふも分ぬ秋哉。

三番

左勝

從三位家衡

吹風のこゝにはみえぬ唐錦かは瀬のなみの立にまかせて

右

國通朝臣

秋の色のさそふ水あらはと思ひける紅葉を流すうち河波

唐錦山にはあらぬ色なから埋もれわたる宇治の川なみ。

四番

左

こからしの立田の紅葉もる共にさそへは誘ふ秋のかはなみ

右勝

忠定朝臣

見わたせばは秋かせなかる立田河ちるや三室の山の木のはに
木枯のさそへは誘ふ河なみの立田の紅葉見てをわたらん。

五番

左勝

從三位基良

たつた河なみにのこらぬ紅葉々を外山にしのお松かせの聲

右

保季朝臣

おほむ河わたらは錦あともおしこの頃はかり筏おろすな
大井川ひくかたもなき筏士のこのはにまかふ山おろしの風。

六番

左

右近衛中將通方

山おろし吹にし日より音羽河もみちによとむせゝの白なみ

右勝

兼隆

立田山あらしの空の夕時雨河せのなみの色もそめけり

嵐吹たつたの山の夕時雨さそな川せの色はそむらむ。

七番

左勝

宰相中將經通

梢には音もあらしの立田川なを秋ふかき水のいろかな

右

藤原康光

立田河うつる木のまの色なから秋をそ誘ふみつのはしら波

立田河うつるは知らぬかけもあれと音も嵐やこのは立

八番

左勝

兵衛内侍

山おろしの紅葉吹おろす立田河ゆくせに早き水のあきかな

右

菅原淳頼

吹まよふ嵐につけて行秋を河せにいそく嶺のもみち葉
立田河ゆくせに早き水の秋をいそく紅葉の色そかひなき。

九番

左勝

七條院權大夫

夜もすからしくるゝよはの嵐より木のはに埋む谷川の水

右

範基

唐にしき秋の色をや立田川このはいさよふせゝのはしらなみ
唐にしき秋たつ色はふりにけり木のはにかゝる谷河の水。

十番

左勝

俊成卿女

立田山梢の秋をなみにとめて紅むすふ瀬々のかはかせ

右

光家

まきもくの高根の雲や時雨ぬるあなしの河に木のは過也
卷向の高根の雲はしくる共深き河せのくれなるの水。

十一番

左勝

女房

けふも偕空しき空に飛鳥のあすかたとにも何を頼まん

右

雅經朝臣

待わひてこぬ夜むなしく明行はなみたにかすむ鳴の羽かき

鳴の立あかつきよりも飛鳥のあすかの里の夕くれの空。
十二番

左勝

權大納言

あふ坂の夕つけ鳥の聲たてゝ頼めぬ人のゆきゝをそまつ

右

行能

飛鳥のあとみし空に立けふりたえむ思ひのしるへはかなし

あふ坂の行きにとまる心哉空とふ鳥の跡をしらねは。

十三番

左

從三位家衡

物おもふ袖の涙のくれなるにふりつゝそなく山ほとゝきす

右勝

國通朝臣

たつのゐる芦邊の汐のいやましに袖ほすひまもなくそふる

たつのなく芦邊の汐やまさるらん深き涙の色はみゆ共。

十四番

左持

右近衛中將家良

なみたのみ鳴のはねかきかき侘てこぬよの數や袖の片しき

右

忠定朝臣

艸も木もうつろふ秋のみ山鳥獨やねなん霜しろき夜を

秋の色のおうつろふ山にぬる鳥の獨おき行しのゝめの霜。

十五番

左勝

從三位基良

うしや猶とを山鳥の獨のみ長きおもひにあかぬよのそて

右

保季朝臣

忘れしな人を恨みてなくなへにいなとな告そいなおほせ鳥

哀とは秋のかりほにみしかとも露もこほれぬ鳥の聲哉。

十六番

左勝

右近衛中將通方

思ひやる深き心は飛鳥の聲たにもせぬやまの夕くれ

右

兼隆

あふ事はかたのゝとたちかる鷹のそれで空しき思ひ也けり

箸たかのそれで空しき思ひより深きみ山の聲を尋ねん。

十七番

左

宰相中將經通

浅ちふや恨る袖の朝霧にたれ故とてかうつらなくらむ

右勝

藤原康光

しられしな深きえにすむ水鳥の下安からぬ思ひありとも

契りありて深きえにすむ水鳥のあたりの水にぬるゝ袖

哉。

十八番

左

兵衛内侍

侘つゝも小夜やふけるの浦千鳥なくれ跡なき袖の月哉

右勝

菅原淳頼

物おもへはよそにはきかす小夜千鳥恨みてかへる曉の聲

よそなから恨みや猶も増るらんおなし千鳥の曉のこゑ。

十九番

左持

七條院權大夫

にこり江に思ふ心は深けれと人こそしらねにほの下みち

右

範基朝臣

わか戀はつれなき波をかことにて通ふもくるし鳩のした道

人しれす通ふ心のくるしきやいづれもおなしにほの下

道。

二十番

左

はかなしや夢ちたえ行鳥の音になきて別れし人の面かけ

右勝

俊成卿女
光家

忍ふれ〔と〕あまる涙に鳩鳥のぬれつゝきつる跡やみゆらむ
人しれぬ袖のなみたを鳩鳥のぬれて絶ゆる跡そかなし
き。

二十一番

深山雨

左勝

女房

つれ／＼のなかも今はまさきちる太山の秋の村雨のそら

右

雅經朝臣

ふみまよひたつきもしらぬ山人の袖もしほりの雨の夕くれ

この頃の雨の夕暮聞なれてみ山のまさき色増りつゝ。

二十二番

左

權大納言

月にたにとはれん山としらさりししおりのおくの雨の夕暮

右勝

行能

山人の袖のみ色にふる雨のしつく空しきまきのあきかせ

たつぬへきしおりの奥も深けれと袖に色ふく槇の秋風。

二十三番

左勝

從三位家衡

堪てたれきくか嵐の吹まよふよしのゝおくの秋のむらさめ

右

國通朝臣

雲かゝる太山の奥の雨そゝき餘りになれてきひしくもなし

淋しきはあまりになれてしらすともよしのゝ奥の秋の

村雨。

二十四番

右持

よし野山寒き嵐の吹まゝに木のはこきませ打しくれつゝ

右

右近衛中將家長
忠定朝臣

うきなから我身世にふる時雨より秋いろ深き山のおく哉
思ひしれいづれも深き山のはにわかしくれの空に任
て。

二十五番

左勝

從三位基家

衣手はしくるゝ雨のふりはへてとはれぬ山の奥のかりいほ

右

保季朝臣

槇のはになれてもそまぬ村時雨いくよむなしき山をすく覽

槇のはにそまぬしくれはいかなれや山の奥こそ色増る
らむ。

二十六番

左持

右近衛中將通方

この比はもみちを染るしくれのみふるの山みち誰通ふらん

右

兼隆

あし曳の山はよしのゝ奥のいほ時雨るゝ空はとふ人もなし

めくり行秋のしくれも幾かへりふるの山道みよしのゝ
奥。

奥。

二十七番

左

宰相中將經通

村雲は風も吹あへすかつらきや高間の奥も時雨すくらし

右勝

藤原康光

しくれする色こそ見えぬ卷向のあなしの山に鹿はなくなり

卷向のあなしの山はつれもなく鹿のねそむる行しくれ

哉。

二十八番

左

兵衛内侍

外山たに淋しき頃の村雨に雲よりおくのあきのゆふくれ

右

菅原淳頼

楨の葉はさそなつれなき秋の比しらぬ山ちのゆふしくれ哉

村しくれ雲より奥の夕くれのさひしきやまを心にそと
ふ。

二十九番

左

七條院權大夫

けふも又露わけ衣ほしあへていく村さめかみくまのゝおく

右

範基朝臣

おほかたの淋しさのみはなかり鳧太山の雨の秋のゆふ暮

みくまのゝいく村雨の數よりも獨み山のゆふくれの庵

三十番

左

俊成卿女

そむれともつれなき楨の下葉もる時雨にあへぬ袖の色哉

右

光家

しおりこし山ちを埋む雲にまた木のは降そふ秋の村雨

袖の色に楨の雫もあらね共しおりも深き村雨の雲。

四十五番歌合 建保三年六月二日

題

春山朝

夕早苗

行路秋

曉時雨

松經年

作者

左方

御製

大僧正行意

權大納言源朝臣通光

權中納言兼左衛門督藤原朝臣忠信

參議左近衛中將藤原朝臣實氏

沙彌寂印

宮内卿藤原朝臣家隆

散位藤原行能

蔭孫高階家仲

右方

前大僧正慈圓

參議侍從藤原朝臣定家

左近衛中將藤原朝臣雅經

右近衛中將藤原朝臣家良

俊成卿女

丹後守藤原朝臣範宗

左衛門尉藤原朝臣秀能

備前守源家長

小比叡禰宜祝部宿禰成茂

判者

衆議

詞

宸筆後日被下之

一番 春山朝

左勝

御製

春のたつ霞のひかりほのくと空に明ゆく天のかくやま
右 前大僧正

朝霞ものおもふ人の袖の色にたへて住へき春の山かは

左方申云。右方より難をいたし侍らさんさきに申なり。霞の光詩などには聞なれたるやうにはへるを。歌に

はいまた承及はす。如何。右方申曰。歌には誠にきゝなれすはへれとも霞の光まことにたしかに侍るものなり。

しかれば難にあらず。左方又申曰。右方も物おもふ人のそての色。ことよろしきさまなり。左歌及ひかたし。

右方又申曰。猶左歌難なし。仍以左勝と被仰侍りき。

二番

左勝

僧正

朝朗とをき山への霞より野原にいつる鶯のこゑ

右

侍從藤原朝臣

このねぬる朝けの山の松風は霞をわけて花の香そする
右方申曰。左歌遠き山へのかすみ尤勝へきにや。左方申曰。朝あけの山のまつかせ花の香をさそひて霞をわけんに。殊にすてかたくな侍る。左は遠き山へのかすみ。

右はこのねぬる朝けのなといひて。ともに古歌をおもへり。なそらへて爲持。

三番

左

權大納言源朝臣

山姫の霞の袖や匂ふらん花にうつるふ横雲の空

右勝

雅經朝臣

いつも見し朝ある雲はそれなから

左右共に申曰。左歌させる難はへらねとも。右あさるる

雲はそれなからといへる。よろしきにや。仍爲勝。

四番

左勝

左衛門督藤原朝臣

曙や海山もひとつに霞む春は來にけり

右

右近中將藤原朝臣

花はみな散らても同し朝霞たな引山のおくのしら雲

左方申曰。右方上句ことありかほに侍る程に。すゑさま

させる事なく侍にや。右方申曰。左方難陳ひきかたう侍り。其うへ左うたこゝろあるさまに侍るにや。仍爲勝。

五番

左勝

左近中將藤原朝臣

朝霞たつ田の山を秋とはゝ花のしをりのかひやなからん

右

俊成卿女

櫻ちる四方の山かせ恨てもはらはぬ袖のはなの朝露
右方申曰。左歌心あるやうに侍るを。秋とはゝといへる
わたり。少しいかにそや聞え侍るにや。左方申曰。よもの
山あまりにおほえはへり。上句に櫻といひ。下句に花
とをける。題になきはなあまりにおほく侍る程に。朝の

こゝろ無下に多くいて來てはへるにや。秋とはゝといへる。かるき難にや侍なん。

左

沙彌寂印

花の色は枝にこもれる梢より朝日そ匂ふみよしのゝ山

右

範宗朝臣

大かたも春は臚の柴の戸にあくるも霞む山のはの月

左右共に申曰。左のうたも難なくはへるを。右歌春はおほろのといひ。明日もかすむとをける。今少しすゝみてはへるよし申侍りき。

七番

左持

家隆朝臣

よしの山峯のあさけの櫻花松の葉青き雪かとそみし

右

秀能

大かたの春の光ののとけきに霞に明る天のかく山
右方申曰。左歌まつ葉あをきといへる。尤めつらしく侍る。左方申曰。霞に明る天のかく山。ことに高く見え侍る。仍左右共に何れも不可負之由申之。

八番

左

行能

朝なゝたつ田の霞晴すのみ哀つきせぬ山の奥哉

右

家長

朝日影にほへる櫻くれなゐのうす花そめのかすむ山の端
左方申曰。立田のかすみはれすのみといへる。本歌の嶺のあさきりに。ことの外に立おとれるよし申之。

九番

左

高階家仲

横雲や峯に別て霞らん櫻そうすきみよしのゝ山

右

成茂

山霞むはるやわたりにて立田川けさは氷の中そたえ行

左右ともに申曰。兩方心を盡して案たる歌と見え侍る。しかはあれと。左の櫻を薄きといへる。聊まさるへきにや。

十番

左

御製

早苗とる山田のあせにせく水の濁るにも澄夕月夜哉

右

前大僧正

暮ぬといそく早苗の小山田に雨そほ降て郭公鳴

左方申曰。時鳥なくといへる。頗尋常のことに俳諧の躰に侍なり。右方申曰。左かつへきにや。左方又申曰。たゝ人の可詠歌にあらず。定有ニ其様歟。然して尙以左爲勝。

十一番

左持

僧正

早苗とる門田に露く夕風を昨日になして又やなかめん

右

侍從藤原朝臣

新玉の年ある御代の秋かけてとるや早苗にけふも暮しつ
右方申云。左風情尤可然はへり。左方申云。右の歌としある御代爲ニ祝言。仍以爲侍。

十二番

左持

權大納言源朝臣

さなへとる山田の田子の濡衣ほしあへすくるゝ夕つく日哉

右

雅經朝臣

里遠き田なかのもりの夕日影うつりもあへすとの早苗かな

左右申曰。歌の跡尤相似。不_レ可_レ有_二勝負_一。

十三番

左勝

左衛門督藤原朝臣

夕されは山田のさなへうちなひき音こそきかね 通_二ふ秋風_一

右

右近中將藤原朝臣家良

五月雨に小田のしめ縄ふりはへて長き日くらし早苗とる也

左方申曰。を田のしめ縄ふりはへてといへる。さたかに其心をえす。如何。右方無_二陳申旨_一。仍爲_レ勝。

十四番

左持

左近中將藤原朝臣實氏

さなへとる賤のをた巻いやしきも君をそ祈る 雨の夕暮

右

俊成卿女

くれぬとていそく早苗を取もあへす風たえ雲に過る村雨

左方申曰。風たえ雲に過る村雨。頗しくれの跡なり。但君をそ祈るといへる。あまりさしすきたるさまなり。お

なしことなれとも。世をいのるといはん心歟。右方申曰。時雨の難誠にさおほえ侍る。左歌君をそいのるといへ

る。其心強に不_レ違歟。左右ともに大略おなしほともの物にやはへらむ。

十五番

左持

沙彌寂印

さなへとる賤のをた巻秋やくる夕の風の音はたてねと

右

範宗朝臣

十七番

左

行能

右勝

家長

天の下を頼むのさなへ暮までとれと盡せぬ千代の数哉

右方申曰。千町のさなへ。頗以不足なり。左申云。ちまち強にふそくにあらす。但右の歌宜。仍爲_レ勝。

十八番

左持

高階家仲

小山田や賤か庵さす夕つく日袖にかけつゝ早苗とる也

右

成茂

立くらしきなへや民のいとまなみいそかすとても秋は待覽

左方申云。右歌いそかすとても秋はまつらむとをける。さまたなき跡にはへる物哉。なをなそらへて。持なとにや侍るへき。

十九番

左勝

御製

わけ行は其色となき太山木も秋は身にしむ風の音哉

右

前大僧正

まねかすはあたに過へき山路かは尾花みたるゝ秋の夕くれ

右方申曰。をはなのまねくことめつらしきことにあらす。左方申云。花のまねかきらん尤遺恨也。殊宜由。左

方強に申せとも。左猶勝へきよしきたありて。勝になり侍りにき。

廿番

左

僧正行意

わけいらは袂に露やみたれなん心し秋の艸葉ならねは
右勝 侍從藤原朝臣

うち渡す遠方のへの白露によもの本草の色かはる頃
右方申曰。左歌殊によろしくはへるを。心し秋のといへ
る。少し心えかたくはへり。左かた申云。ともに優に侍
れとも。遠方のへの露。いますこし色ふかくやなと沙汰
侍りき。

廿一番

左持 權大納言源朝臣
草枕ゆふかり衣ぬれにけり裾野の露も色かはり行
右 雅經朝臣

もみち葉もゆくゑ定めぬ秋風にしらぬ野山の道たとりつゝ
左右ともに申曰。左のゆふかり衣。右のしらぬ野山。と
もによろしく侍り。

廿二番

左勝 左衛門督藤原朝臣
草の原露もさなから夕霧の我袖こめて秋風そふく
右 右近中將藤原朝臣

常盤山いつはた秋としらさりし袖に見え行露の色哉
左方申曰。いつはたあきとしらさりしといへる。わかき
歌の中にきゝなれてや侍らん。右方申云。我袖こめてと
いへる。殊によろしくはへる。仍爲_レ勝。

廿三番

左 左近中將藤原朝臣
草の原いつくの秋に行かれてかりねの枕露に結はん
右勝 俊成卿女

虫のねも我身ひとつの秋風に露わけわふるをのゝしの原
左方申云。右歌こと葉つゝきやさしく侍り。右方申曰。
左歌させる難なし。兩方申曰。右すこし可_レ勝にや。

廿四番

左 沙彌寂印
高圓の野への秋はき行すりの道もとをゝに花咲にけり
右勝 範宗朝臣

秋はなを時雨ぬ袖も露霜に濡てゆきゝの岡の萩原
左方申云。ぬれて往來の岡のはき原。宜侍るにや。右方
申云。道もとをゝにといへる。又やさしく見えはへり。
左右ともに申曰。ゆきすりのといへる。すこしきゝよか
らす。仍以_レ右爲_レ勝。

廿五番

左持 家隆朝臣
玉鉾の道もととりも白露に風の吹しくをのゝしの原
右 秀能

旅衣なれすはしらし大かたの秋の哀はおもひこしかと
右方申云。風のふきしくといへる宜はへり。左方申曰。
秋の哀はおもひこしかと。又左の歌。古歌のこと葉をよ
くとりて見え侍り。右も又捨かたく侍るもの哉。仍爲_レ
持。

廿六番

左持 行能
けふは又山路やふかく成ぬらんきのふにかはるまきの秋風
右 家長
ふみならず道のこゝちをよそにして花にそまふ宮城のゝ秋

左右申曰。昨日にかはる山おろしのかせといへるちかき世の歌こと葉。其ころをもかへさる如何。又右のうた。みちのこゝちもありなる氣地李。近頃夢の心地なといへるは。その謂も侍ることにや。

廿七番

左

高階家仲

旅人の行かふ山の下もみち袖にみたる、秋風そふく

右勝

成茂

鹿のねも袖にこほる、玉鉾の道の木のはは我そ染行

左方申曰。鹿の音はいか様に袖にこほれ侍るにか。右方陳申云。袖にこほる、は露のこと也。道のこのはは我そ染ゆくなと。やさしく社はへれ。左の方又申云。まことに左歌も強のこと侍らす。た、一旦鹿の音の袖にこほる、やうに見え侍ることを。不審申はかりなり。

廿八番

左勝

御製

曉時雨

かたしきの衣手寒くしくれつ、有明の山にかゝる村雲

右

前大僧正

曉は空のけしきもたゝならて我袖のみは時雨さりけり

左方申曰。右歌ことによろしく侍り。おほろけのもの難澁侍るへし。右方申曰。左うた尙可勝。

廿九番

左

僧正

嵐山ころさへつらきね覺哉しくれにむせふあかつきのかね

右勝

侍從藤原朝臣

まとろまぬ須磨の關守明ぬとてたゆむ枕も打しくれつ、

左の歌ころさへつらき寢さめ哉といひ。右のうたたゆむ枕もうち時雨つゝとはへり。誠にいつれもおとりとも見え侍らす。ともにわきかたきよし申あひ侍るを。なをたゆむ枕のしくれ。まさるへきにやときためはへりき。

三十番

左持

權大納言源朝臣

鐘のねの時雨を送るまきの屋にもらて夢の覺る東雲

右

雅經朝臣

櫛の戸の明方としも驚かす寢覺ふりにし頃の時雨に左右ともに申曰。やさしきまになんはへり。仍爲持。

三十一番

左勝

左衛門督藤原朝臣

曉とうらみし人はかれはてゝうたて時雨る浅茅生の宿

右

右近中將藤原朝臣

しはし残る有明の月の山のはにまたき時雨のかき曇つ、左方申曰。右歌させることなく侍り。右方申云。うたて時雨る浅茅生の宿。尤よろし。仍爲勝。

三十二番

左持

左近中將藤原朝臣

風の音はみ山もさやに明る夜の時雨吹まく檐のはかしは

右

俊成卿女

涙さへいとしくるゝ浮雲に残るともなきしかの月かけ

兩方歌無異事。仍爲持。

三十三番

左勝

沙彌寂印

柴の庵また住なれぬ曙のこけの袂はしくれせずとも

右

範宗朝臣

立田山しくれは過ぬ曉のゆふつけ鳥やぬれて鳴らん

左方申曰。右歌たかみそきゆふつけとりとも。させるこ

となきにや侍らん。右方申云。左歌も誠に。住なれぬこ
けの袂あはれに侍り。仍爲_レ持。

三十四番

左持

家隆朝臣

曉や木のはも色はまさるらん時雨よ袖にしむ心地して

右

秀能

うき物とおもひなれたる曉の枕に過るはつ時雨かな

左方申曰。右歌誠に。おかしくはへり。しかはあれとも。

左歌木葉もいろはまさるらんといひて。時雨よ袖にし

む心地してとをける。いかてかまけ侍るへき。右方申曰。

まことにいつれやさしくそ見え侍る。たゞし右歌。曉は

かりうき物はなしといへる歌のこゝろ。捨かたく侍り。

三十五番

左持

行能

時雨ゆく嵐の山のやましたに木のはわけいる有明の月

右

家長

身にそしるみちあり明の初時雨わかぬ艸葉の色の深さを

左方申云。このは分入有明の月。めつらしくはへり。右

のかたも。心あるさまに見え侍れとも。左歌なをすゝみ

ておほえ侍。如何。右方申云。わかぬ艸葉といへる心詞。

うにはへるなり。いかて負る程の事はへるへき。仍爲

持。

三十六番

左持

高階家仲

村雲はまた過はてぬ外山より時雨にきほふ有明の月

右

成茂

鐘の音は秋のねさめに替らぬを猶色ふかくとふ時雨哉

左右ともに申云。よのつねの物なり。勝負難_レ定はへり。

三十七番

左持

御製

かたそきの行あひの霜の幾かへり契_レり結_レふ住よしの松_本

右

前大僧正

君か代の千歳にあまる末までも色かはらしと松のいふなる

左方申曰。左歌結けんけに聞なれて侍り。右歌尤めつら

しくはへり。右方申ていはく。右歌まつのいふなるとい

へる。無下にたゞありに侍り。左方も申曰。殊にたゞあ

り成さまにははへらす。右歌尤可_レ勝由申_レ之。然而猶左

可_レ勝之由。右方定申。仍爲_レ勝。

三十八番

僧正

身にかへて君の八千代を祈をくしるしは末の松のみそ見ん

右

侍從藤原朝臣

手向草露もいくよか契置し漬まつかえも色はかはらす

左右共に申云。左歌ことにこゝろある様にはへり。尤可

勝之由申_レ之。

三十九番

左持

權大納言源朝臣

神路山すゑも百枝の松の陰に天てるかけや契り初けん

右 雅經朝臣

いつ迄か松のしつえにこゆるきの磯ちにかゝる浪も恨めし
左右ともに申曰。左歌ことによろしく見えはへるを。右

又心こと葉尤やさしきよし各申。仍爲持。

四十番

左勝

左衛門督藤原朝臣

限なき時しも君にあふみなるしかのはま松いくよふりなん

右 右近中將藤原朝臣

住吉のきしの瑞籬神さひて其世もしらぬ松の色哉

左右共に申曰。左歌尤よろしく侍り。仍爲勝。

四十一番

左持

左近中將藤原朝臣

いにしへの人しもあらは高砂のまつを友とかいはまし物を

右 俊成卿女

おひ初て君かためしに住吉のまつも幾世と神もしるらん

左右ともに無差事一はへり。可爲持。

四十二番

左持

沙彌寂印

住吉のきし方よりも濱ひさし久しかるへき御代の松かな

右 範宗朝臣

限なく君を見るへきとしをへて猶末遠き住よしのまつ

兩方申狀同前。

四十三番

左持

家隆朝臣

神代よりいくよかへにし乙女子か袖ふる山のみつかきの松

右 秀能

思ふ事なとすみよしのまつかひも渚につらき年のへぬらん
左右申曰。様かはりなから其跡おなし。仍爲持。

四十四番

左持

行能

奥津なみきよる濱松年ふりて空しきねのみあらはれそゆく

右 家長

我君の齡をまつのかけひろみ下に隠て萬代やへむ

左右共に申曰。兩方歌同體なり。但空しきねのみあらは

れそ行といへる。いさゝかまさるへくやはへらん。右歌

又祝言のこゝろなり。仍爲持。

四十五番

左持

高階家仲

君か代にくらふの山の峯の松ふりにし色の千代は物かは

右 成茂

幾千代かなをすみのえの松の影君かためしの限なければ

左右ともに申云。おなし程のものに侍り。仍ひとしき由

つけ侍りにき。

本云

右之一冊。以實相院増運筆翰一令書寫之。再返校合畢。

月卿雲客妬歌合建保三年六月十一日當座

題

野外夏草

月色似秋

契經年戀

作者

左

女房

右

栗下覆勘右大辨藤原定高

左近權中將藤原雅經
散位藤原保季

丹後守藤原範宗

散位藤原行能

左近權中將藤原忠定

左衛門權少尉藤原康光

前播磨守藤原範基

讚岐守藤原資隆

講師

講師

衆議判

一番

左

野外夏草

女

房

露分る夏野の草のぬれ衣なるとはすれと色もかはらす

右

左近衛權中將藤原雅經

夏草

二番

のひとりも深いはしろの野邊のした草結ふ計に

左

栗下覆勘右大辨藤原定高

武藏野のはきや薄やほりたてゝ瓜やなすひや植てもたはや

右

散位藤原保季

かせやときまのゝ萩はら露をたにまたしらすけの同じ緑に

三番

左

岩代の野への夏くさしけれどゝ旅ねのまくら露むすふ迄

右

丹後守藤原範宗

今はさはあとなき野への庵哉くさたつ迄そ人もまたれし

四番

左

左近衛權中將藤原忠定

しのふよりこぬ秋をさへ知せけり末こす萩の野への夕かせ

右

左衛門權少尉藤原康光

人すまぬかた岡野への夏草は茂りにけりなおなしに

五番

左

前播磨守藤原範基

玉ほこの道の夏草秋かけてかつくはらふ袖のしらつゆ

右

讚岐守藤原資隆

われのみそ露のなさけもかけてける月に分行庭の蓬生

六番

月色似秋

左

左近權中將藤原忠定

秋の色を露につけてやかり枕しろくも袖にやとる月かな

右

散位藤原行能

つゆはまた萩の葉ならぬ風の色に月のみ秋の袖をしるかな

七番

左

女房

かせの音の身にしむ色もかはらねと月に幾度秋を待らん

右

栗下覆勘右大辨藤原定高

はたかねの小夜更かたに腹ふくれかせもすゝし月も秋也

八番

左

左近權中將藤原雅經
空の色は秋をもまたぬ久堅の月のかつらやまつもみゆらん

右

丹後守藤原範宗

九番

左

前播磨守藤原範基
なつの夜の月にも秋は通ひけりかならず萩に風ふかねとも

右

左衛門權少尉藤原康光

十番

左

散位藤原保季
をのつからこよひの空をみすしらて秋とか人の月を待らん

右

讃岐守藤原資隆

十一番

左

契經年戀
左近權中將藤原雅經

とし月はむなしき空の夕露にはてはちきりも朽ぬ袖哉

右

左衛門權少尉藤原康光

年へぬるその神山のゆふたすきかけて契し中やたえなん

左

女房

つれなくて幾秋風を契りきぬきさ山かけのまつとせしまに

右

丹後守藤原範宗

はまひさし久しく成ぬ恨ても末の松山なみもこえつゝ

左

前播磨守藤原範基

右

散位藤原保季

としをへてあはぬ契を菅原やひとりふしみのよその夕暮
あとたえて果は浅ちに成ぬともたのめし宿の昔わするな

左

左近權中將藤原忠定

たのめ置し言のはとても枯果る野なる草木も春はきにけり
たのめてもおなしみとりの杉の庵のあれたに果ぬ山の奥哉

右

讃岐守藤原資隆

十五番

左

栗下覆勘右大辨藤原定高

あはんと空證文にいく夜へて數年に成ぬこはいかにせん
徒にくちてや偕も山城のゐてのした帶むすほほれつゝ

右

散位藤原行能

群書類從卷第百九十六

和歌部五十一歌合十七

百番歌合建保四年閏六月九日

題

春 二首 夏 二首 秋 二首 冬 二首
戀 二首

作者

左

御製

正二位行權大納言源朝臣通光

正二位行權大納言藤原朝臣公經

從二位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣忠信

參議正三位左近衛權中將兼近江權守藤原朝臣實氏

從三位藤原朝臣家衡

從三位宮内卿藤原朝臣家隆

八條院高倉

兵衛内侍

藏人正六位上行左衛門權少尉藤原朝臣康光

右

右大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣

參議從三位行治部卿兼伊與權守藤原朝臣定家

二條院讃岐

女房越前

參議從三位行左近衛權中將備前權守藤原朝臣經通

前丹波守正四位下藤原朝臣知家

正四位下行右兵衛督兼伊與介藤原朝臣雅經

從四位上行丹後守藤原朝臣範宗

散位正五位下藤原朝臣行能

僧正行意

講師 治部卿藤原朝臣定家

判者 或本案議判後日付詞畢

一番 春

左持

降雪にいつれをはなとわきも子かおる袖にほふ春の梅かえ

右 治部卿定家

しるしらすわきてはまたす梅の花匂ふ春へはあたら夜の月

左右各講畢。可レ申ニ其難一のよし。頻に被レ仰。右方歌人等申云。左歌更に無ニ其難ニ上似ニ秀逸ニ歟。木ことに花そさきにけるといふうたの心をおもひて。いつれをむめとわきも子かたとをき。おる袖にほふはるの梅かえと侍。まことに殊勝のよし。皆悉申レ之。右歌あらぬさまの詞をたによまては。またすはともといへる。よりどころなき。わきてのことは殊露顯のよし申侍しを。依ニ別勅定ニ持の字をかゝれ侍にき。定貽ニ後代之疑ニ歟。

二番

左勝

權大納言通光

雲のゐる遠山ひめのはなかつら霞をかけて吹あらし哉

右

讚 岐

ふく風やたにも春と告つらん雪ふるすよりいつる鶯
右方歌人等申云。萬葉集にけふそわかせこ花かつらせよといふ歌侍にや。遠山花ををしなへて山姫の花かつらといはむこと。すこし本歌のあらまほしくや侍らん。左方ことはきゝよきにつきて。いひくたすとき。かやうの心常の言葉に侍へし。歌さまなをいひしりてよろしく侍よし申。右方谷にや春と告つらんといへる。こゝろあるよし右方申せと。左方猶よろしとて勝侍にき。

三番

左勝

權大納言公經

青柳の糸をみとりによりかけてあはすは春に何をそめまし

右

越 前

散ぬれとかたみはひさし梅の花とまるおもかけ袖のうつりか

糸をみとりによりかけてなと。いひしりて侍を。あはすはといふは。かた糸にてや。ことはり叶へきと。右方少少中人侍しかと。宮内卿藤原朝臣。右方下句頗輕々のよし難申。仍以レ左爲レ勝。

四番

左持

左衛門督忠信

君か代のもゝ木の梅の花なればあふへき春も限りしられす

右

左中將經通

春立とけふはいはとの神代よりあくれはかすむ天のかく山
右方申。君か代の百木の梅。ことはりかなふへきにや侍らん。家持卿追和太宰歌。みそのふのもゝ木のむめといへり。以て君か代のもゝきとよむへきにや。たゝし祝言のこゝろ。強に不レ及ニ難申。左方又。けふは岩戸の神代よりなといへる。宜よし申せは。持定申。

五番

左持

左中將實氏

山さくらうつろふ比はつゆなからこほれて匂ふ花の下かせ

右

知 家

玉ほこの道行ふりの春の雨にをのれしほれて鴈の鳴らむ
右方申云。左方よろしく聞え侍を。こほれてにほふや常に聞なれて侍らむ。左方道ゆきふりも。又同程の事と申て。爲レ持。

六番

左

從三位家衡

よしの川たきつ岩根のはやき春霞なかるゝ浪のはつ花

右勝

範 宗

花のかはありとやこゝに乙女子か袖ふる山にうくひすそ鳴

右方申云。瀧つ岩根の早春。詩の題には聞なれて。うたのことはには珍しくえ聞てや侍らむ。かすみなかるゝといひて浪の初花と侍も。かれこれいつれとなくや。宮内卿藤原朝臣。早春ことなる難には侍ましと。はなの香をありとやこゝにといひて。袖ふる山に鶯のなく心よろしく聞え侍るにや。此乙女はさきくおほくつかうまつれと。この花の香はいまだ思より侍らすと申て。かちに定めらる。

七番

左侍

高倉

鶯のふるすに誰かことつてし梅さく宿をわきてとへとは

右

右大臣

あを柳の春のけしきとたをやめのかさしの玉の露そみたるゝ

左右ともに優也。各申こ無下可ニ難申一事之由甲爲レ持。

八番

左

兵衛内侍

かすみゆくおほつかなさ詠てもたれのみ山の春の夕くれ

右侍

右兵衛督雅經

霞ゆくひかりは空にかけろふのもゆるのはらの夕暮

左右かすみ行。ともに優に侍を。おほつかなさといへる。すこし凡俗のことにはなり。かけろふのもゆる野原の。

殊にこゝろありてとて。

九番

左侍

左衛門尉康光

きのふ見し軒はの梅はちりにけり櫻にうつる庭の春風

右

行能

春かせに鶯さそふ花のかにほへる山をかへるかりかね
右方申云。軒端のむめきのふちりて。さくらにけふうつる春風。はなめつらしききのふけふ哉といふこゝろには。たかひて侍れと。強無下可ニ難申一事。鶯さそふ花の香にかりかねのゆきあふ山路も。こゝろなきには侍らねと。あまたことにかゝりて。殊なることなしとて。ともに持と定申。

十番

左

宮内卿家隆

あはれとは香にこそしのへ梅のはなたか袖なれし故郷の月

右侍

僧正行意

をのつからいそしのみゐやくもるらむおれる錦を春の山陰

左(右)方すゝみて。左歌常に聞なれたるよし申。右方いそしのみゐをはなのかゝみにくもらせて。にしきをは

るのやまかけと侍る。ことにたくみに及かたきさまなりとて。爲レ勝。

りとて。爲レ勝。

十一番

左侍

御製

春かせに散行かたやはれぬらん花よりにしの山端の月

右

治郎卿定家

咲はなは雪とのみこそ故郷をこゝろのまゝに風そ吹しく

花より西の山のはの月。左右歌人ともに詠吟聲満レ耳。

不レ申ニ是非。爲レ勝。

十二番

左侍

權大納言通光

山川にはるゆく水はよとめとも風にとまらぬ花のしら浪

右

讃岐

いにしへの春にも歸る心かな雲井の花に物わすれせて
雲井の花にも忘れせて。あはれに聞え侍れと。はる行
水はよとめさも風にとまらぬはなの白浪。殊秀逸のよ
し兩方ともに申。爲勝。

十三番

左勝

權大納言公經

恨へきかたこそなけれ春風のやとりさためぬ花の故郷

右

越前

こゝろある軒はのかせの匂ひ哉花ちるへくも吹ぬ物から
やとりさためぬはなのふる里。殊によろしきよし兩方
申て。左方の。右歌近年入新古今歌。月やとれとはぬ
れぬものから。相似よし各被申。仍以左爲勝。

十四番

左勝

左衛門督忠信

しかのあまた出ぬるあとも霞つゝ我すむ方の山端もなし

右

左中將信通

はるのきる霞のそてのうすみとりみたれて花の色そみえ行
右歌もえんにおかしく聞え侍れと。左殊よろし。猶勝へ
きよし。兩方ともに定申。

十五番

左持

左中將實氏

初瀬川はなのみなはのきえかてに春あらはるゝせゝの柵

右

前丹後守知家

さらてたにうつろふ花を山かつのしつ心なく春かせそふく

左右ともによろしきよし申て。爲勝持。

十六番

左

從三位家衡

かさこしや峯のこすゑの空はれて麓あまきる花の白雲

右勝

丹後守範宗

春のよのをほる月夜にちりつもり花の上にそしく影はなき

右方申曰。ふもとあまきるとて。はなのしら雪とや侍へ
き。天きるくもさためて侍らめと。當座證歌不覺悟。左
方又申不分明之由。右方右歌いかゝと申侍しを。左方。
無難可勝由申。

十七番

左

高倉

これならて何をこの世にしのはまし花にかすめる春の曙

右勝

右大臣

春きても雪とは花の降しきぬあすよりさきにとふ人もなし

左歌上句ことに思われす聞ゆとて。以右爲勝。

十八番

左持

兵衛内侍

はなの色はつきしとそ思ふ百敷や大宮人の千世のかさしに

右

右兵衛督雅經

みよし野のまきたつ雲の梢にははなとつれなき色を残れる

右歌宜のよし各申侍しを。百敷のはなのいろ盡せず。大
みや人の千代のかさしとならむ事。返々所庶幾一のよ
し申て。持とさため申侍にき。

十九番

左持

左衛門尉康光

葛城やたえすかゝれる白雲のよそにも見えぬ山櫻かな

右

散位行能

みよしのゝさくらうつろふ春毎にいくよの人の袖にほふ覽

左右とも無難上。各爲宜歌のよし。兩方申。爲持。

二十番

左勝

宮内卿家隆

泊瀬山うつろはんとや櫻はな色かはり行峯のしら雲

右

僧正行意

花さかぬ山邊はなしと詠めてもいくよの春を身にうれふ覽

左秀逸の鉢也。右歌こゝろ多ことはたくみなるへし。各

申之。爲勝。

二十一番

左勝

御製

五月雨の雲の晴まを待えても月みる程の夜半そすくなき

右

定家

郭公たかしのゝめを音にたてゝ山の雪にはねしほるらむ

左景色見るよふなりと。満座申之。爲勝。

二十二番

左勝

通光

かせ吹はみなはに驛くかりこものみたれてのほる淀の川舟

右

讃岐

ましかねてふくる枕に過ぬ也やま時鳥一こゑのやと

右方歌人少々申。かりこもはみなはになひかむことお

ほつかなくや侍らん。左方又難無申旨。歌鉢なを可勝

のよし各申。

二十三番

左勝

公經

時鳥なくや五月の雨雲のよそに成ゆく夕ぐれのこと

右

越前

ほとゝきすありかしらはや告やらむ卯花月夜つきよよし共

左方申云。右歌月夜重疊。聞よからす。左歌よろしきよ

し各定申。爲勝。

二十四番

左

忠信

小山田のさなへとるてのぬれ衣しほる程なき五月雨の空

右勝

經通

夏刈のあしふきわふる難波女のさみたれなから過る頃哉

左歌無難のよし右方申侍しを。右歌心詞尤宜稱美。可

謂秀逸のよし。兩方同心申之。仍爲勝。

二十五番

左勝

實氏

村雨に秋のつゆかる玉さゝのみちかき夜半は曉もなし

右

知家

あしのやの螢の繩たぐいさり火のそれかとばかり行螢哉

左歌又一同褒美。仍爲勝。右歌又無其難歟。

二十六番

左

家衡

郭公をのか五月のみしか夜は聲のうちにやあけんとすらむ

右勝

範宗

時鳥なくよの雨の程なきに花たちばなもうつろひにけり

左歌よみあけて侍し。よろしき歌にやとつけたまはり

しを。右方作者申云。上句はひとりしぬれはあかしかね

つもとといふ歌の上句只替ニ三字。下句はなく一こゑに明るしのゝめの同心。かはりたる事なし。又夕月よ小倉の山に鳴鹿のといふ歌の下句に似也。秀歌よまん事やすくや侍へきと申に。思ひ出し侍しかは。誠にさもや侍へきと申上侍き。右歌無難よし。左方被レ申侍しうへに。詞姿優に侍れは。勝に被レ定。

二十七番

左 高 倉

右 大 臣

夕まくれ花たちはなの匂はすはゆく郭公なのりしもせし
待よひの山ひとこゑよ時鳥うす雲まよふむら雨の空
左歌無ニ殊事。右可レ勝のよし各申。

二十八番

左 兵衛内侍

右 兵衛督雅經

なつ山のかけ行水にかさすまで雫も涼しならの下露
ほとゝきす鳴や五月の玉くしけふた聲きゝて明るよもかな
右うた。なくや五月の玉くしけとつゝけたる。さつきの
たまのこゝろは□ひしりて。殊に宜きよし。兩方ともに
申て。爲レ勝。

二十九番

左 衛門尉康光

右 行 能

ぬれつゝもきえせぬものは夏虫の草葉にもゆるよひの灯
うたゝねもふす程すゝし長き夜に螢みたれて秋そちかつく
右涼しきよからす。左きえせぬものえん也とて勝侍き。

三十番

左 家 隆

あかなくにやすらへそらの郭公なつくはゝれる年も稀なり
右 行 意

夕すゝみまさきのかつら吹風に外山をかけて秋やきぬらん
まさ木のかつらふく風もこゝろあるよしを。各申侍し
かと。夏くはゝれるとしも稀なり。閏月九日今日已レ之
爲レ證のよし各申。爲レ勝。

三十一番

左 御 製

御そき川なつのゆく瀬の水はやみ影もとまらぬ六月の空
右 定 家

夏はつるみそきにちかき河風のいは浪たかくかゝる白ゆふ
夏川のゆく瀬の水はやみ。誠にゆうひにきこえ侍よし。
返々侍しかと。持と被レ仰侍にき。

三十二番

左 通 光

かせになひくせゝの川なみ打さやきしらぬ露ちる夕立の空
右 讃 岐

橋に枝うつりするほとゝきすこゑ聞よりも珍しきかな
左せゝの川なみの本歌侍にや。當座不覺悟のよし。右の
方申出侍しかと。右枝うつりこのころの姿にあらずと
て。以レ左爲レ勝。

三十三番

左 公 經

住なるゝ時はなつみの河よとにやま蔭すゝしみよしのゝ里

右

越前

たちよれば涼しきのみか夏衣ころも忘れて松の下水
右のすゝしきのみか。聞にくしと。念人も言葉くはへ待
て。以_レ左爲_レ勝。

三十四番

左

忠信

石はしる瀧もとゝろにちる玉のひかり涼しき夏のよの月

右勝

經通

たかみそきしらゆふ浪の立田川曉かけてかよふ秋かせ
石はしるたきも。光すゝしくは聞え侍を。誰みそきしら
ゆふなみあかつきかけたる。殊に優にきこえ侍よし申
て。爲_レ勝。

三十五番

左

實氏

都いてゝ更にかそへるあふさかの山ほとゝきす關守やなき

右勝

知家

日くらしのなく山蔭はくれぬらんゆふひかゝれる峯の白雲
左歌もえんによろしく侍れと。右歌ことに可_レ謂_ニ秀逸_一
のよし各申て。爲_レ勝。

三十六番

左

家衡

秋ちかき月のかつらの川かみに螢とひかふかゝりの火の影
右勝

範宗

こたへねとたれとは見えぬたそかれや遠かた人の夕顔の花
左歌右方少々雖_レ出_ニ不_レ審_一。非_ニ殊難_一。右歌よろしきよし。

兩方ともに申て。爲_レ勝。

三十七番

左勝

高倉

立よればなつのよそなる柳かけこれよりにしや秋の通路
右

右大臣

玉銚や露のみちしは打なひきくもれはすゝむ夕立の空
左右同躰のよし。兩方ともに申す。

三十八番

左

兵衛内侍

秋ちかき常盤の山に吹風の色こそなけれ身にしみにけり
右勝

雅經

みつしほのからかの嶋に玉も刈あまゝもみえぬ五月雨の頃
左歌尤優にきこえ侍よし申出侍し。殊に玉藻かる雨ま
も見えぬさみたれ。猶可_レ勝のよし左右定申。

三十九番

左

康光

大澤の池の玉藻のみかくれにかはつ鳴なり五月雨の頃
右勝

行能

時鳥こえ聞小野の萩か枝をかりのなみたのいつかそむへき
左のかはつ無_ニ殊事_一。右ほとゝきすえむ也とて爲_レ勝。

四十番

左勝

家隆

秋たては蟬のおりばへ夏衣ひも夕くれは風を涼しき
右

行意

たまにぬく夕かけ草のしら露にまた秋とをし五月雨のそら
夕陰草のしら露も捨かたく聞え侍れと。せみのおりは
へなつころもめつらしくおかしとてかちと被_レ定。

四十一番 秋

左勝

御製

夕霧のまかきの秋のはなすゝき遠かたならぬ袖かとそ見る

右

定家

なをさりの小野の淺茅にをく露も草葉にあまる秋の夕くれ

夕きりのまかきの花すゝきおちかたならぬ袖みえん。

まことにめつらしき心に侍へし。ふるき歌に遠方人の

袖も見てましといへるは。見ところなくも侍ける也。兩

四十二番

左勝

通光

里わかすみにならすよの秋風に萩のはなから露そこほるゝ

右

讃岐

古郷はねやの板まに苔むして月さへもらす成にはる哉

さとわかすみにならすよの秋風。さる本文侍らんやう

にやなと申人侍しかと。右歌ふかき心なしとて。以て左

四十三番

左

公經

かり金の鳴つるなへに小倉山めにみぬ秋をそらに聞かな

右勝

越前

常盤なる山路はあきの外かとして詠むる暮もさをしかの聲

鴈かねの鳴つるなへにめに見えぬ秋をきかむこと。心

いふにおかしくは聞え侍るを。ときはの山を秋のほか

となかむること。又よろしとて。爲勝。

四十四番

左持 忠信

秋風に小田のかりほのかたよりに驟く末葉の露そいろつく

右

經通

袖にまた人しるらめや淺茅生の小野のしの原忍ふ秋風

左はかたよりに末はなひかん事。かりほのすかたかな

はすかと。右方申。をのゝ篠原ゆうには侍を。かの本歌

うち返したるさまにて。いくはくめつらしからすと。左

四十五番

左勝

實氏

もみちちる川せの霧のをのれのみうきて流れぬ秋の色哉

右

知家

天の川あきこく舟のみなれ棹そてのしつくの露と散らむ

秋こくふねのみなれきほも。させる難なく。よろしく侍

る。川瀬のきりの秋のいろ。猶ふかくおもひいたると

四十六番

左

家衡

あきの色は心よりこそ替りけれ身にしむ風のいかにそむ覽

右勝

範宗

秋の夜はとを山鳥のおのへまで月はひかりもへたてきり梟

左歌優なるやうにきこえ侍しを。右作者申。近ころ三輪

の社にて人々歌よみ侍けるに。土御門内大臣。秋といへ

は心の色もかはりけり何ゆへとしもおもひ定めねと。

此歌人多き侍き。右歌又よろしくつかうまつれるよ

し申て。爲勝。

四十七番

左勝

我庵は小倉の山の近ければうき世をしかとなかぬ日そなき

右

高 倉
右大臣

己か秋に行あひのわせをかりかねて鳴なるなへに露を置そふうき世をしかとなかぬ日そなき。すこし違懷にはよりて侍れと。かの山もとの秋のあはれ。人によりてふかゝるへきよし満座申。以_レ左爲_レ勝。

四十八番

左勝

秋たつと思はぬ空の風にたにまつは淋しきみ山への里

右

兵衛内侍
雅 經

越路より秋はいそかす鷹金は初もみち葉のおりもあふらしあきをいそかすかり金。殊によりしきよし申人々侍し。左歌猶持とさためられ侍にき。

四十九番

左勝

草枕ころもてさむき秋風にをけはかつ散への白露

右

康 光
行 能

山ふかき秋の夕へをきてみれば木のはしくれて鹿ぞ鳴なる右歌新古今に。山里の春の夕暮きてみれば入あひのかねに花そ散ける。同心なり。をけはかつちる野へのしら露。ゆうにつかうまつれりとて。勝と被_レ定。

五十番

左持

手向山もみちのにしきぬさはあれと猶月影のかゝる白ゆふ

家 隆

右

行 意

春日山やまたかからし秋霧のうへにそ鹿の聲は聞ゆるたむけ山紅葉のにしきに月影のかゝるしらゆふ。歌のたけ心詞。殊勝のよし沙汰侍しを。かすか山やま高からしとをきて。鹿のこゑ秋きりの上に聞ゆる心。又およひかたくたくみに聞え侍うへに。春日山のしか。歌合にまけましきよし定申侍にき。

五十一番

左持

宮城のゝしからむ萩やちりぬらんあらはれて鳴さを鹿の聲

右

御 製
定 家

を鹿なくは山の陰の深ければあらしまつまの月をすくなきあらはれてなくさをしかのこゑ。誠に本歌の心もめつらしく聞えて侍を。右歌よろしとて。爲_レ持。

五十二番

左勝

暮は又わかやとりかは旅人のかちのゝ原のはきの下露

右

通 光
讚 岐

もろ人の心のうちは春なから千とせの秋の月をこそ見れかちのゝ原。萩の下露。可_レ勝のよし定申。

五十三番

左持

たかそめし外山の峯のうす紅葉しくれぬききの秋の夕くれ

右

公 經
越 前

諸人の心は月にすみぬらし都のあきのふかき夜のそら時雨ぬききの秋の夕くれ。宜之由各申。宮古のあきの深

き夜のそらも。ゆうなりとて。持と被_レ定。
五十四番

左 忠 信

ひとりすむみ山の秋の風の音にをのれと残るきをしかの聲

右勝 經 通

これその我身にいとふ秋の霜つもれば人の袖の月影
左歌艶あるやうには侍を。をのれとのこるきをしかの
聲。短慮易_レ迷て。わきまへ侍らぬよし。左方人にとひ侍
しかは。分明にこたへも侍らす。我身にいとふ秋の霜つ
もれば人の袖の月かけといへる。晋室潘中郎之感秋之
詞。我朝在中將厭老之心。彼是によりて妖艶にきこえ侍
しかは。勝とさため侍にき。

五十五番

左勝 實 氏

うちわたす衣かりかね聲たてつ旅ねの霜や冴まさるらん

右 知 家

旅人のみのしろ衣をさをあらみまとをにうつる萩か花すり
みのしろころもまとをにうつるも。心おかしきこゆ
れと。衣かりかねこゑたて、旅ねの霜とおもへる心。な
をゆうにきこゆとて。爲_レ勝。

五十六番

左持 家 衡

夕暮はかりのつはさのおほひ羽をもりて降くる秋のむら雨

右 範 宗

都たに夜さむになりぬいかはかりこしの山人衣うつらむ
かりのつはさの霜も雪も。もりくる物になりにつれは。

其難は侍らねと。このおほひ羽。ことにえむにはきこえ
すや侍らん。右歌優にきこゆれと。ことは侍らすとて。
持に被_レ定。

五十七番

左勝 高 倉

いささらはこんよをかねて頼めをかむ限もしらぬ月の光に

右 右大臣

白妙の霜のころもを打わたすをちかた人や袖にしるらむ
霜の衣うちわたす。おかしく聞え侍を。かきりもしらぬ
月のひかり。心ふかしとて。勝と定申。

五十八番

左持 兵衛内侍

しくれつゝはけしくかはる山風にはれ行月も明方の空

右 雅 經

虫の音もいかに恨みてまくすはふ小野の淺茅の色かはり行
左右ともに宜よし。兩方同申。

五十九番

左持 康 光

ふしわひぬ秋のよなかき吳竹の小枝もりくるねやの月影

右 行 能

月かけも夜さむになりぬ今よりの寢覺を誰かとはんとす覽
左歌右方難なきよしを申。左方人。小枝もりくる不_二甘
心_一之由申。右歌左方又_レ不_レ加_レ難。下句思所なき山。右方
申_レ之。仍爲_レ持。

六十番

左 家 隆

賤のうつ衣かりかね聲さむみはね白妙に霜や置らむ

右 行意

限りあればよしの、奥に吹風は秋なればとて音もまさらず

左衣かり金ゆうには聞ゆれと。みよしの、奥のあき風。

たつね入てきかさらむ人こゝろおもひかたしとて。以

レ右爲レ勝。

六十一番 冬

左 御製

神無月あらしにまじる村雨に色こきたれて散木の葉かな

右 定家

よしさらはかたみも霜に折はてぬ今はあたる秋のしら菊

左殊勝秀逸之由。兩方共申。右講師頗停滯不レ讀之間。瑕

瑾彌現レ形。殘菊之芬芳厭口却之外意得之由。作者申レ之。

以レ左爲レ勝。

六十二番

左 通光

ちりはてゝ木の葉をとなき山川の氷のよそにゆくあらし哉

右 讃岐

神無月いつれもろさのまさる覽木々のこのはとふるき涙と

氷のよそに行嵐。いひしりてよろしく聞え侍よし各申。

木々の木のは。ふるき涙。きほひおつる。こゝろふかき

たくひは。あはれに聞なされ侍しかは。持と定申。

六十三番

左 公經

山川の紅葉のうへのうす氷このまもりこし月かとそみる

右 越前

霜ふかき難波のあしのしたはれてむれる鳥の跡を見え行

もみちのうへのうすこほり。宜之由各申。鳥のあと。殊

にみところなしとて。以レ左爲レ勝。

六十四番

左 忠信

時雨行ねやのひまたになきものをいかてか袖の色をそむ覽

右 經通

見るまゝに雲のはたてそかはり行山には秋も峯の木からし

左閨のひまなくは。何にかそむる色にやと申人々侍し

かと。華亭の時雨かならずもらすとも。涙にかはらむ袖

の色は。おりから人によりて。ゆへこそ侍らめと申人侍

き。右くものはたてのかはりゆく山には。秋も峯のこか

らし。又よろしきよし各申侍しかと。猶以レ左爲レ勝。

六十五番

左 實氏

秋の色もうつりにけりな村雲の山のはさらぬ時雨せしまに

右 知家

まかきなる竹の葉さやき置霜のよとこにさへや夢も結はす

左歌すかたこと葉宜は聞え侍を。右方すゝみて。あきの

うたに出したらん。無ニ分別一かと侍しかと。村雲の山の

はさらぬ時雨。ほとすきなん後は。冬までこそ侍らめと。

右より定侍しかは。さらてはよろしき歌なりとて勝侍

き。右うたもことなる難侍らさりしにや。

六十六番

左 家衡

冬きては結びもなれぬ初霜のおくてのはなは風さやくなり

右 範 宗

炭かまのけふりを雲に吹ませて雪のみしろき小野の山かせ
左歌季秋之月。霜初降寒氣總至。冬來なん後はましてむ
すひなれたる霜にや侍へきと。右方難申。左申云。前霜
強の非難とも。右煙を雲に吹ませたるをのゝ山風。景氣
おかしなと申人侍しかと。持に被_レ定侍にき。

六十七番

左勝 高 倉

旅衣すそ野の尾はな霜かれてやとりし秋の露をこふらし
右 右大臣

木枯も時雨もしらしいほえさす神なみ山の常盤木のかけ

左はことにえんに。右は心たくみなるよし。各申侍しを。
左なをゆうに聞ゆとて。勝侍にき。

六十八番

左持 兵衛内侍

夕暮は難波のあし火たきそへてこやもあらはに立煙かな

右 雅 經

白妙の衣吹ほすこからしのやかてしくるゝ天のかく山
左芦火焼そふる煙。右の衣吹ほす木からし。いつれとな

くよろしきつかひ也とて爲_レ持。

六十九番

左勝 康 光

山風に雪まのけふり打なひき冬こもりせる小野のすみかま
右 行 能

霜きゆる日かけに秋やかへるらむ枯野の草に露そかゝれる
左のゆき間の烟。よろしきよし各申。右も枯野の草にか

かれる露。心侍にやと申侍しかと。これほと心はうた
ことにありと。こゑ／＼聞えて。以_レ左爲_レ勝。

七十番

左 家 隆

朝ほらけさほの川霧冬かけてなくや千鳥の猶まよふらん
右勝 行 意

うち渡すおほ川のへの瀬をひろみをよはぬ聲に千鳥なく也
左歌よろしきよし沙汰侍しかとも。おほ川のへのせを
ひろみ。歌も及はぬこゑに侍しかは。右勝と申うけ侍き。

七十一番

左 御 製

道のくの野田のたま川みわたせはしほ風かけて氷る月かけ
右勝 定 家

みそら行月もまかし足引のよしのゝ里の雪のあさけに
みちのくの野田の玉川。誠に金玉に聞之由。右方申_レ之。

猶右可_レ勝のよし。左方に三沙汰。仍爲_レ勝。

七十二番

左勝 通 光

神無月しくれにけりなあらち山行向そてに色かはるまで
右 詩 岐

「物さひしきはしらねともきゆるはおしき庭の雪哉
あらち山の行向袖。いとよろしくきこえ侍るよし。兩方
申_レ之。爲_レ勝。

七十三番

左勝 公 經

つま木こる山路はいまやたえぬらむ里たに深き今朝の白雪

右 越 前

風さえて日影もりこぬ谷河にむすふこほりはいくへ成らん
さとたにふかきけさのしら雪。又殊に宜由申て。爲_レ勝。

七十四番

左勝 忠 信

深山川木のはかくれに行水のたえくのこる秋の色哉

右 經 通

うら風のはわけの霜や積るらむよなく_レ 芦の音そかれ行
左のみやま川。聞え侍るよし右方申。右のかれゆくあし
も優に侍と。ことにめつらしきふしは不_レ侍とて。以_レ左
爲_レ勝。

七十五番

左勝 實 氏

紅葉せし四方の山へはあれ果て月より外の秋を残りぬ

右 知 家

ふる雪の時ともわかぬふしの根はよその色にや冬を知らん
右歌もえんには侍と左うた殊宜。可_レ勝のよし各申_レ之。

七十六番

左勝 家 衡

いたつらにまつのかすゑしうつもれぬ誰ふみ分て峯の白雪

右 範 宗

山里はしつのをたまきいやしきも長き夜あかぬ雪の降つゝ

左歌難なきうへよろしきよし。右方申。右歌しつのをた
まきいやしきとつゝけ。又有_レ心之由。左の申。仍爲_レ持。

七十七番

左持 高 倉

この頃は雪をしるしとみわの山なみしろたへの杉のむら立

右 右大臣

しほくもり鹽風あらき岩のうへにつまき折たき誰あかす覽
左右共無_二指難_一。又無_二差事_一之由。爲_レ持。

七十八番

左 兵衛内侍

船人のかよふ浪路はあとたえてこほりそしかの浦つたひ行

右勝 雅 經

かり衣すそのもふかしはし鷹のとかへる山の峯の白ゆき
氷そ志賀のうらつたひゆく。殊宜之由兩方共申侍しを。
かりころもすそのもふかしとをきて。はし鷹のとかへ
る山など。猶まさりてや侍らむとて。右の勝をうけ侍に
き。

七十九番

左勝 康 光

ふる雪に庭のこのははうつもれて嵐そとをき冬の山里

右 行 能

雪しろき苅田の原をみわたせはあたに住こし庭そのこれる
右も指難は侍らさりしかとも。左嵐を遠きといへる。こ
とに優なるよし人々申て。爲_レ勝。

八十番

左勝 家 隆

草のはら枯にし人は音もせてあらぬ外山の松のゆきおれ

右 行 意

今朝よりはゆく瀬の水もあさもよひきの川上か氷しぬらん
右行せの水もあさもよひ。詞のつゝき宜聞え侍のよし。

右方申侍しを。左猶可_レ勝之よし被_ニ仰定_一侍にき。

八十一番 戀

左勝

御製

一すちにうきになしても頼まれすかはるにやすき人の心は

右

定家

逢事はしのふの衣あはれなとまれなる色にみたれそめけむ

左心殊可_レ然とて。爲_レ勝。

八十二番

左勝

通光

思ひあれはつれなき色もかはりけりえやは岩根の松の下露

右

讃岐

いかなれは涙の雨はひまなきにあふくま川のせたえしぬ覽

左心詞ゆうにおかしく聞え侍之由。各申。爲_レ勝。

八十三番

左

公經

身を秋の人の心はしら露のおくてのいなは風も吹あへす

右勝

越前

あた人をまつ夜更ゆく山のはに空たのめせぬ有明のそら

左歌よろしく聞え侍を。右歌又優なる様に侍るとて。爲_レ勝。

八十四番

左持

忠信

恨み飽まつとはなくて此よひの有明の月をなくくそみる

右

經通

うきものと思ひそ出る有明のつれなくみえし袖の別は

右歌ことに艶におかしく侍よし各申侍しを。左も同有

明の月。ことにわくへき處なしとて。爲_レ持。

八十五番

左持

實氏

うたゝねにつれなくみえし面影は夢としりても猶や恨みむ

右

知家

人めもる我かよひ路のしの薄いつとかまたむ秋のさかりを

左右いつれとなくゆうにきこゆとて。爲_レ持。

八十六番

左

家衡

我こひはをしまのあまの笛ひさし久しく成ぬ浪にしほれて

右勝

範宗

うきめのみおひて亂るゝ岩の上に種ある松のなを頼みつゝ

左わか戀はをしまのあまとつゝけたる。不_レ叶や侍らんと。右方申。右よろしき由。左方申て。爲_レ勝。

八十七番

左

高倉

かたしきの涙にぬるゝ小夜衣よしさばくちぬ人にしられて

右勝

右大臣

めのまへに風も吹あへすうつり行心の花もいろはみえけり

左歌殊に思入たるさまにも侍らぬにや。右うたえむに

おかしき様にきこえ侍よし各申て。爲_レ勝。

八十八番

左勝

兵衛内侍

なかゝにあはすは何をかた糸の思ひみたれぬ夕暮そなき

右

雅經

秋の田のわきほのかつらゆふかけて結ふ契はかりにたになし

右わさほのかつら。いひしりてことによろしく聞え侍るを。左のあはすは何をかた糸の。このたひもあまた聞え侍る中に。おもひみたれぬゆふ暮そなき。猶すくれたりとして。以_レ左爲_レ勝。

八十九番

左

康光

獨ふすよとのつき橋よとともに思ひそわたるまのゝ浦かせ

右勝

行能

夕くれの露には色もなかりきとまつ我袖を我そとかむる
右方申云。左ふし所いか、侍へき。ひとりふかすよとよ
まんとは思ひて侍る。たうちきくに。橋のうへに寐たるやうに成侍にや。右我そてをわかとかめたる。かとか
としなと沙汰侍て。勝侍にき。

九十番

左勝

家隆

しらさりき袖になかるゝ涙川うきて思ひのかゝりけるよを

右

行意

我そては朽木の袖にたつ民のたつきもしらす戀やわたらむ
くち木の袖にたみも。つよくは聞え侍を。袖になかるゝ
なみた川。えんにおかしとて。爲_レ勝。

九十一番

左

御製

よる浪をよはぬ浦の玉松のねにあらはれぬ色そつれなき

右勝

定家

來ぬ人をまつほの浦の夕風にやくやも鹽のみもこかれつゝ
をよはぬ浦の玉松。をよひかたく有かたく侍よし。右方

申侍しを。常にみゝなれ侍らぬまつほのうらに。勝の字を付られ侍にし。何故とも見え侍らす。

九十二番

左勝

通光

まつ嶋やわか身のかたにやく鹽のけふりの末をとふ人も哉

右

讃岐

うたかひしるもりの跡はそれなから人の心のあせにける哉
我身のかたに焼しほ。又宜よし人々申侍しうへに。右あ
とはとをく聞え侍しかは。以_レ左爲_レ勝。

九十三番

左持

公經

ぬきみたる涙の玉のをとめ子か袖に哀をかけてたにとへ

右

越前

わたつ海の涙のあはとうく袖やよるへもしらぬ蜚のすて舟
泪の玉のをとめ子も無_レ難之由各申侍しな。又なみたの
あはとうく袖ゆうなりとて。爲_レ持。

九十四番

左持

忠信

まきもくのあなしの川の川風になひく玉もの亂れてそ思ふ
右

右

經通

煙たにをよはぬ空にきえわひぬいかゝは須磨の蜚のも鹽火
左右共によろしきよし申。爲_レ持。

九十五番

左持

實氏

いかにせむ茂みにまじる花の色の人にしられぬ露の深さを
右

知家

とはれしはむかしかたりの夕暮に思ひもいれぬ萩のうは風
人々申云。いかにせんしけみとつゝけたる。なにのしけ
みとも聞えずと侍し。夏草にてこそは侍らめ。右もこと
なる事なしとて。爲_レ持。

九十六番

左

家 衡

いたつらにあはすは何をなく涙かけて頼まむ玉のをまなし

右勝

範 宗

いかにせむねをなく虫のから衣人もとかめぬ袖のなみたを

あはすは何を。猶ききくのやうにいと有へきよし。右
方申す。ねをなく虫のから衣。まことによりしく侍れは。

勝侍にき。

九十七番

左

高 倉

たつねこし伏見のさとの名のみして草の枕に夢もむすはす

右勝

右 大臣

浪まよりそむきにみゆるおくの嶋我をやなはの恨はてつる

左歌思ひいれぬさまなるよし各申。そむきにみゆるお
くの嶋の心。たくみにおかしく聞え侍よし申て。爲_レ勝。

九十八番

左勝

兵衛内侍

歸るさをしはしと鳴ぬ鳥の音にあくるもまたぬしのゝめの道

右

雅 經

をとほ川瀧つこゝろをせきかねてあふ坂山のなさへうらめし
瀧つ心をせきかねて。會坂山の名をさへうらみたる心。
ことに宜よし沙汰侍しを。かへるさをしはしとなかぬ

鳥の音。殊めつらしくおかしきよし兩方申て。爲_レ持。
九十九番

左持

康 光

涙川みをはやなからゆく水のあさき瀬もなき戀の道かな

右

行 能

いたつらに心のまつに吹風のをとにも人をきかす成行

左みをはやなから。本歌のこゝろに又よし。右方申侍し
を。左もことにことはり聞えて。申のへ侍らす。右下句
又無_レ殊事とて爲_レ持。

百番

左

家 隆

しら露の曉ことにくたかけのくたけてそ鳴あかぬ恨みに

右勝

行 意

志賀の蟹の興になつそふ燈火のうきにつれなき浪にきえ南
右歌いとよろしく侍うへに。くたかけいうならさるよ
し。左方すゝみて詞をそへられ侍にき。仍以_レ右爲_レ勝。

建保四年閏六月十二日書寫之。是爲_二清書_一下給。先同書寫
畢。九日夜依_レ召參内。勤_二講師_一畢。而十一日夕又相_二副判
詞_一下給。判詞治部卿筆也。書進之間於_レ傍令_レ書寫之。勝負字并
作者不_レ可_二書入_一之由被_二仰下_一。仍不_レ書。不齊。

同廿九日。以_二行能本_一書寫按合畢。

右百番歌合以古寫一本按合

歌合建保四年八月廿二日當座

題

朝紅葉

夕搗衣

深山霧

蜀中戀

海邊戀

作者

左

女房

經通卿

家宣朝臣

右

家衡卿

知家朝臣

行能

衆議判

隱名如恒。

一番

左勝

朝紅葉

女房

よこ雲はあけはなれゆく山のはにのこる紅葉も秋風そ吹

右

夜もすから時雨ふりけり柞原しつくもかはる杜の下草

左爲勝。

二番

左持

あさな／＼時雨の露に色そひて秋あらはなる神なひのもり

右

かくれぬのはつせの山のこもりえに朝露かけて移る紅葉は

三番 爲持。

左持

色まさるまさきのかつら朝露に外山のあきそなかは過ゆく

右

あかねさすやしほの岡の朝日かけうつろふ色は木葉成けり

兩首尋常也。仍爲持。

四番

左持

秋の色もまた朝露のをきそめて日影ことなる峯のみちは

右

朝日かけさすや岡へのうす紅葉ひとしほならず色やそふ覽

爲持。

五番

左持

色そきまた露おちぬ紅葉々はぬれて朝日のさすや岡へに

右

立田山しくれも夜半に過にけり淺茅のみみち色ことになる

持。

六番

左持

三室山もみちそめたる朝露のたえすかつちる嶺の秋かせ

右

柴の戸をあくるあさけの山のはに木葉うつろふ秋のむら雨

左右共無指事。仍爲持。

七番

左持

家宣

たつた山おなし梢の秋の色をもるゝひかりや朝日成らむ

右

信實

み渡せはまたひとしほは朝露に移るひあへぬ峯のもみち葉

左右共無指事。仍爲持。

八番

左

經兼

あさなゝ紅葉のにしき立田山いくしほ露のよはにそむ覽

右勝

範基

朝日かけ露もまたひぬもみち葉をその色なから吹あらし哉

右歌爲勝。

九番

左勝

資隆

露霜の色とる木々もかすみえて朝日いさよふ嶺のもみち葉

右

康光

けさみれはかりの涙をふりませて時雨に残る峯のもみち葉

左歌色とるきゝ。あしからす。仍左爲勝。

十番

左勝

女房

秋風もゆふへやさむく成ぬらんうちもすさまぬあさのさ衣

右

範宗

うちわたるたけたの原の夕嵐にまなくもひゝく槌の音哉

左歌優なり。右歌つちの音けしからす。仍左爲勝。

十一番

左

實氏

夜をさむみかつ置霜やまさる覽くるゝよりうつあさのさ衣

右勝

兵衛内侍

くるゝより夜さむの露もうちしほれ月になれゆく麻のさ衣

以右爲勝。

十二番

左

經通

はるかなる雲よりをちの夕まくれかせにつけてそ衣打なる

右勝

康光

ゆふ日さすおかへの庵にたれすみて秋きにけらし衣うつ覽

左歌有病。仍右爲勝。

十三番

左

頼範

夕つくひさすやなかへの松のはのかせさむけくも衣うつ也

右勝

家衡

夕くれはたか秋風を身にしめて夜さむの衣ひとりうつらん

左歌已是古歌也。以右爲勝。

十四番

左勝

保季

あけゆけは音もまとをに打絶し麻のさ衣くれをまちけり

右

信實

こととはて夕きりかくれすむ人も里をはしれと衣うつをと

右歌の始の五文字。心不叶。仍左爲勝。

十五番

左

經高

たか里の雲井に人をへたてつゝけふもくれぬと衣うつらん

右勝

雅清

聲さむみ夕風ふけは我せこかうらめつらしく衣うつ也

左様々しく。右無_ニ過失。仍以_レ右爲_レ勝。

十六番

左持

家宣

遠近のきぬたはそこわかねともおなししるへの秋の夕風

右

範基

穂かせの袖にすゝしきいさよひの月待ほともうつ衣哉

左歌きぬたはかりにては音ありかたくや。右又夕の心
いたくすきたりとて。爲_レ持。

十七番

左

經兼

夕風のふきくるまゝに淋しきにいたくな打そ賤のさころも

右勝

行能

わするなよいもかきなれしから衣たつたの山の秋の夕くれ

左歌其詞おなしとて。以_レ右爲_レ勝。

十八番

左

資隆

賤のめか秋の狭衣うつたへにけふもくれぬとこゑいそく覽

右勝

知家

うつともひとりはずらき夕暮を誰ためとしも衣うつらん

左歌うつたへ常事也。右歌又無_レ難とて爲_レ勝。

十九番

左勝

女房

楨のはのつれなき色もなかりけり秋の深山の夕霧のそら

右

家衡

霧ふかき深山のおくにたつ鹿のみちやまとへる聲を聞ゆる

左歌まさるか。仍爲_レ勝。

廿番

左持

實氏

こゑくるゝ山路も深き霧のうちにをさつて行秋のたひ人

右

知家

をはつせや峯のひ原に露おちて夕きりなひく秋の山かせ

左右無_レ難。仍爲_レ持。

廿一番

左持

經通

いつくとか□くひもわけむ山深み夕霧まよふ道のなかに

右

範宗

吹かせの千種の色もおのつから霧のたえまのみ山へのおく

左右共爲_レ持。

廿二番

左勝

頼範

友よはふ遠こち人の聲すなり今朝たちこむる霧の中やま

右

範基

朝きりのたつたの山を秋ゆけはそても草葉もおなし白露

右歌殊無_ニ正躰。左歌きりの中山不審難然以_レ左爲_レ勝。

廿三番

左持

保季

霧ふかきねやまををしむ鹿は猶おのれ鳴てや夜をのこす覽

右

康光

卷向の檜はらか末はそれなから霧にあけ行峯の月影

左右共無_ニ差難とて。爲_レ持。

廿四番

左持

經高

たか袖にわけてみるらむ葛城のたかまの奥の夕霧の空

右 行 能

みよし野や横たつ山の山人のおもひもいれぬそての秋きり

左右共爲レ持。

廿五番

左 持 家 宣

やまのはもあはれも深き夕霧に心そらなるむかしをそ思ふ

右 雅 清

まきのたつあとも小倉の山深みたつきもしらぬ霧こめて鳧

左右共爲レ持。

廿六番

左 持 經 兼

たつねいる山路もふかき夕霧に鹿の音さへに遠さかりぬる

右 兵衛内侍

み山へやはれぬなかもまさるらん雲よりおくの宿の朝霧

左右共無ニ差事とて。爲レ持。

廿七番

左 資 隆

山人もおのれしほれて歸るらむたつたの奥のきりの迷ひに

右 勝 信 實

すきわひぬ嶺の朝きりいくへともしらぬ庵のあとの山風

右歌を爲レ勝。

廿八番 羈中戀

左 持 女 房

かきりあれはおなし都の雲たにもへたてゝ遠き心ならひを

右 兵衛内侍

契こし程は雲井の夜半の月おなしかたみの空をわするな

左右共無ニ指事とて。爲レ持。

廿九番

左 頼 範

道すから都をこふる袖の上に涙とおつるこしのしら雪

右 勝 行 能

小篠原かりねの床の山風に一夜の契夢をたえつゝ

左歌こしの白雪。心を難レ得。仍右を爲レ勝。

三十番

左 勝 實 氏

しるといへは草の枕のかりにたいはてそあかす露はをけ共

右 家 衛

旅のそらふしの煙をなかめてもするかたもなき我身也けり

右歌するかたもなき。詞よはしとて。左爲レ勝。

三十一番

左 勝 經 通

旅ころもきつゝかれ行古郷の倂のみそ袖にのこれる

右 知 家

たひ衣あきのわかれの袖の露さるは夜さむの床の山風

右歌俊成卿のうたにいくほと無ニ相違とて。左を爲

レ勝。

三十二番

左 保 季

都をはぬれても出す旅ころもいく朝露の色かはるまで

右 勝 康 光

思ひねの草の枕のゆめちにもわすれすのこる人の面影

右歌尋常なりとて爲_レ勝。

三十三番 左持

かへりみるそなたのそらも白雲のかさなる峯に消つゝそ行

右 信 實

をのつから空ゆく月はめぐりきぬ程は雲井の夕たつれて

左右共無_二指事_一。仍爲_レ持。

三十四番 左

しのひあまる心の色ををきまよひ草の枕の露さなしつる

右勝 經 兼 範 宗

我そてよしのたの杜にくらふれば千枝の雫もぬるゝ數かは

右姿詞優なりとて爲_レ勝。

三十五番 左勝

草まくらむすふかひには大方のならひにあまる袖のしら露

右 資 隆 雅 清

旅衣くちやはてなん夏引のいとしも物をおもふなみたに

右歌。夏引のいとしもなしとて。左爲_レ勝。

三十六番 左

東路の忍ふはしめの關の名をこえても猶そすゑの松山

右勝 家 宣 範 基

玉鉾の道の草葉のかり枕露をかたみにいくよむすひつ

左歌やうゝしく。右歌無_レ難とて爲_レ勝。

三十七番 左持

海邊戀 女 房

消かへりうはの空なる煙たにことうら風はいふかひもなし

右 範 宗

かみしまやいそまの浦の月みてもねぬよの浪そ袖にかさなる

左右とも無_二指事_一とて爲_レ持。

三十八番 左持

くちねたゝかたみの浦の忘れ貝忘れぬものをあふしも哉

右 康 光 實 氏

播磨湯あまのかるもの我からや人にしられぬ身をくたく覽

左右共心詞ゆうにきこゆ。仍爲_レ持。

三十九番 左持

わひぬれば袖ほすひまも違なみ鹽くむ蜚の名にやふりなん

右 兵衛内侍 經 通

しるへせよわれもなくさの濱千鳥あとなき浪のよるの通路

左右共尋常にみゆ。爲_レ持。

四十番 左

鹽たれしはしめはことの數ならて蜚のも鹽火またこかる覽

右勝 保 季 雅 清

我戀はみるめもしらす伊勢嶋やしほひの方は風もつれなし

左歌やまひあり。仍右爲_レ勝。

四十一番 左持

いかにせむ思ひあかしの浦はより消かへりぬる蜚のも鹽火

右 信 實 經 兼

いせの海の蜚のたくなはくるゝ夜の長き思ひは秋そ悲しき

左右共させる事なしとて爲レ持。

四十二番

左持

家宣

もらすなよ袂に浪はかよふともあまたにつゝむ戀の行衛を

右

知家

をのつからありし計りの夢も見す猶うしまとのせとの鹽風

左右ことなる事なしとて。爲レ持。

四十三番

左持

資隆

たちそひしつらきかたみも増鏡みぬめの浦に絶やはてぬる

右

範基

よを絶て波にうきねをすまの蟹のかくやは袖の乾く時なき

左右ともわろしとて爲レ持。

四十四番

左勝

經高

逢事を猶まつ嶋のあまころもしほたれてのみ年やふりなむ

右

行能

思ひやるさかひやいつこ白浪のうちよるゝの夢をたにみす

うちよるゝきゝにくしとて左かちぬ。

四十五番

左

頼範

わすれなん思はしとすれはいとゝ又すまの關やの秋風の聲

右勝

家衡

いたつらに幾夜あかしのうら波にしほくむ蟹の獨ぬるらむ

左歌とるところなきによりて右爲レ勝。

右建保四年八月廿二日歌合以古寫本掟合

歌合建保四年八月廿四日當座

題

夕草花

古寺月

寒山雁

寄雨戀

寄石戀

寄夢戀

作者

左

女房

經高朝臣

家宣朝臣

行能

信實

資隆

藤康光

右

家衡卿

雅清朝臣

保季朝臣

知家朝臣

範基朝臣

範宗朝臣

兵衛内侍

講師

知家朝臣

衆議判隠名如レ恒

一番

左勝

夕草花

女房

みしまのや夕露おもく吹風にいろの千種の花そめのそて

右

兵衛内侍

旅人のおほかる野への女郎花あたる露ちる秋のゆふくれ

左右共雖レ無ミ指難。左歌の下句たちまさるへくや。仍爲

レ勝。

二番

左勝

經 高

宮城野やゆふ露をもく吹風にちらまくおしき秋萩の花

右

家 衡

さを鹿のなくねなからやうつらむ夕露かけて萩か花すり

右歌其詞首尾不_レ叶。仍左爲_レ勝。

三番

左持

家 宣

心せよ夕つゆしけしをみなへし思はぬ風になひきもやせん

右

範 基

日暮ぬとあたのおほのに宿かれはあるしかほなる女郎花哉

左右ともに無_ニ差事。仍爲_レ持。

四番

左勝

行 能

夕されは心やちゝにかはるらむ萩ふく風は色なかりけり

右

保 季

くれぬるか野への尾花を吹かせのなひくにつけて棹鹿の聲

左歌聊有_ニ其意。仍爲_レ勝。

五番

左勝

信 實

露もろき尾花かそてもたそかれの遠方のへに秋風そふく

右

知 家

夕露のおかへの萩のすり衣花のさかりをそてにみるらん

左歌尋常にみゆ。仍爲_レ勝。

六番

左勝

資 隆

咲まじる千種の花の色なから露吹なひく野への夕かせ

右

雅 清

ゆふまくれたつね入のゝ衣手に露にひもとく萩か花すり

左歌頗たちまさるか。仍爲_レ勝。

七番

左

康 光

たそかれをこたへぬ野への秋風にお花か末の露そこほるゝ

右勝

範 宗

花すゝきそて吹かはす秋かせに野原の露をわくる夕くれ

右歌袖ふきかはすの句得_レ鉢。仍爲_レ勝。

八番

左

康 光

わすれはやふるきあたとふ月をみて横川の水にすむ心哉

右勝

兵衛内侍

初瀬山月はくもらぬあらしより尾上の鐘の聲も残らす

右爲_レ勝。

九番

左勝

資 隆

はつせ山檜原にたてるうす霧のはるれはすめる秋のよの月

右

範 基

荒にける野寺の鐘の打たえてもとはなくて月そすみける

左爲_レ勝。

十番

左勝

信 實

初せ山峯のひはらの色なから秋をはあきとさゆる夜の月

右

保 季

あきかけていはねに霜をしき嶋や山遠くすむ小泊瀬の月

右歌秋かけての詞。なにとなし。仍左爲勝。

十一番

左持

行能

人すまぬ野寺の小さく世々ふりて尾上の松にくもる月影

右

家衡

荒はつる野寺の鐘はをともしすむよの月の影にまかせて

兩首無差事。仍爲勝。

十二番

左持

家宣

雲の色は猶山ふかき小泊瀬に月ゆへしもの鐘ひくくらむ

右

雅清

はつせ山檜原のかせにきをひつゝもりくるかねも明方の月

左右共無差事。仍爲勝。

十三番

左

經高

泊瀬山つきものとかにすむ空のあけまくつらき鐘のをと哉

右勝

知家

むかしおもふたかのゝ山の深きよに曉とをくすめる月かけ

左歌あけまく。きゝよからすうへ。右の歌殊秀逸なり。仍爲勝。

爲勝。

十四番

左

女房

をはつせやひはらか月は晴にけり入あひの鐘に秋風そふく

右勝

範宗

はつせ山杉の庵のひまよりも月にはみゆる秋のいろかな

右歌殊尋常也。仍爲勝。

十五番

左勝

女房

山ささの峯の木葉やちりぬらむ枕にちかき秋のかりかね

右

知家

なくかりの涙かつちる山かせに衣手うすきみちの空哉

左歌有景氣。仍爲勝。

十六番

左持

經高

あらし吹こゑはあらしの山のはにつはさもさむく鴈渡る也

右

雅清

かせさむみ雲もくらふの山のはに幾つらとたにわかぬ鴈金

兩首無差難。仍爲勝。

十七番

左持

家宣

山たかみさこそあらしの名なり共残るこのはかりの一行

右

範基

富士の山みねとひこえてゆくかりの翅の霜を吹あらし哉

右歌寒山餘りおひたゝし。左歌又なにとなし。仍爲勝。

十八番

左持

行能

鴈のなく山の秋かせ夜やさむき翅の月を霜にまかせて

右

兵衛内侍

むら時雨はれ行秋にとふかりのはかせもさむき山のはの月

兩首無差難。仍爲勝。

十九番

左勝

信實

萩のうへも霜にさえ行山風になみたや氷る秋のかり金

右

範宗

あき山にをく初霜の朝あらしに鷹のなくれもくたけてそ行
以左爲勝。

廿番

左勝

資隆

み山路やはれゆく月の影さえてかりのは風も夜さむ成らん

右

保季

山風のさえゆく夜はやいかならむこほらて落るかりの泪も

左歌いさゝかまさる。仍爲勝。

廿一番

左持

康光

いこま山更ゆく月にとふ鴈の翅にもろき秋のはつしも

右

家衡

天とふやをのかはかひをもる霜の寒き山への衣かりかね

左のもろきなにとなし。右又あまりしたゝめたり。ゆかしき所なし。仍爲持。

廿二番

寄雨戀

左

康光

たつぬへきそなたの空も雨雲のへたてゝ遠き戀の道哉

右勝

家衡

大かたのよにふる雨をなかもても袖の雫を人のとへかし

右歌詞艶なり。仍爲勝。

廿三番

左持

資隆

徒に嶺のあま雲よそなから身をしる袖をぬれてかひなき

右

雅清

思ひあまり世をふる雨の雫にもをとらすぬるゝ我袂哉
爲持。

廿四番

左持

信實

せきあえぬ雫は袖のよそならすさかみゆる峯の雨雲

右

知家

つらさには厭はしなからいかにして我身世にふる袖の村雨

爲持。

廿五番

左勝

行能

なき夜のくらき窓うつ秋の雨に雫もかはる袖の色哉

右

保季

きのふみぬ軒のしのふも露深しみなせる雨やけふはそふ覽

左聊まさる歟。

廿六番

左勝

家宣

むら時雨たもとの露の数そへてしはし涙そ人めつゝまぬ

右

範基

かく計り思ひたえてはなからましふる共雨にとたに頼ます

左の下七文字。きゝよからず。又右のとたにたのます。殊見苦歟。

廿七番

左持

經高

思ひわひぬ身をしる雨とかこちても契らぬそらの秋の夕暮

右

範宗

さても猶ねられぬ夜半の村雨にこぬ人まちし月そ戀しき
雨首爲_レ持。

廿八番

左勝

女 房

大方のなかにまきる袂かな軒の忍ふの秋のむらさめ

右

兵衛内侍

ふれはけにわかみにさても久方の雨の下にはしけき思ひを

左歌心詞えんにきこえ侍る。尤爲_レ勝。

廿九番

左勝

女 房

わたの原荒磯浪の岩のうへによせくる玉のくたけてそふる

右

範 宗

とことはに浪こす沖の離れ石にあはぬためしの名さへ恨めし

右歌無_レ差事_二之上。左あらいそ波たちまさるか。可_レ謂_二

秀逸。仍爲_レ勝。

卅番

左持

經 高

逢事はよゝにかたくとさゝれいしの苔むす迄に猶も待みむ

右

雅 清

心さしなからのはまのさゝれいしの數々にやは人を恨みん

爲_レ持。

卅一番

左持

家 宣

われのみや岩うつ浪のうらみかねくたけても猶立かへる覽

右

範 基

我袖は浪にしたかふさゝれ石のひかたきのみやたくひ成覽

左歌いはうつ波のをのれのみに恨かねたる。ことのほ
かなとりたり。右鹽ひにみえぬ沖のいしの心かはらす
といへとも。ことのほかに玄隔也。

卅二番

左勝

行 能

名とり川おもひにしつむ淵の石のいつあらはれむ契共なし

右

兵衛内侍

あふ事の浪うつおきの岩の上によらぬ玉藻の亂れかねつゝ

右歌近ころの歌の下句歟。仍以_レ左爲_レ勝。

卅三番

左

信 實

石はしる瀧つなみたの消かへりうきておもひの果そ悲しき

右勝

家 衡

なみた河みなはに沈む玉かしはくちぬためしは己のみかは

兩首雖_レ無_レ難。右聊まさる。仍爲_レ勝。

卅四番

左持

資 隆

逢事はまれにもかたきさゝれ石の巖とならん行ふしらせよ

右

保 季

まてとかや頼めしよるの契たにしらてやたえむ久米の岩橋

兩首不_レ足_レ言歟。

卅五番

左持

康 光

物思ふ色こそみえねいしま行水のこゝろはせくかたそなき

右

知 家

明石かた浦よりをちのはなれ石の獨りも浪に幾よぬれなむ

兩首猿程也。仍爲持。

卅六番 寄夢戀

左持

康光

我こひはあしもたゆますおもへとも人こそしらぬ夢の通路

右

知家

歎きわひねぬよの空に月日へて夢のかよひち跡やふりなん

右なにといふ心なし。左又あしもたゆますの句。あしも

やすめすに殊にをとりて見ゆ。

卅七番

左

資隆

頼めつる夢もむなしく明ぬとやきゝおとろけと鳥も鳴らむ

右勝

保季

なみた河いくよ淵せとしつみきて渡る名もなき夢の浮はし

右聊まさる。

卅八番

左

信實

をのつからさめさらましの夢もうしぬれはや人を頼む枕に

右勝

家衡

あたし世のはかなき夢の契たにむすはぬ人を思ひける哉

右歌尋常也。

卅九番

左持

行能

むは玉の夢にも人のみつのえのあくる恨ばたれもはかなし

右

兵衛内侍

あふとみし夢もなこりの泪さへしらぬ契にかゝるよひかな

兩首爲持。

四十番

左勝

家宣

うたゝねにしはし休らふ心にもいとゝそつらき夢の名残は

右

範基

なさけなく成行人の面影は夢にもつらきならひのみかは

右歌不得意。仍左爲勝。

四十一番

左持

經高

夢にたにありし名残を待わひぬね夜の月の袖に馴つゝ

右

雅清

うつゝこそ戀ちにいらめよを渡るとたえかちなる夢の浮橋

右歌聊惡氣也。左又惡氣也。仍爲持。

四十二番

左勝

女房

忘れ草露ふかき夜の夢ちにやかよへる袖のひるよしもなき

右

範宗

夢路にもあふよのかねはつらき哉なにを名残の現ならねと

此番兩首尋常也。而左歌聊得躰。仍爲勝。

右建保四年八月廿四日歌合以百花庵宗固本校合

群書類從卷第百九十七

和歌部五十二歌合十八

歌合建保五年四月廿日

題

羈旅郭公

河邊夏草

寄松述懷

作者

左

御製

參議正三位行左近衛權中將兼讚岐權守藤原朝臣實氏

參議從三位行左近衛權中將兼備前權守藤原朝臣經通

從三位藤原朝臣家衡

參議正三位行治部卿兼伊豫權守藤原朝臣定家

右

僧正行意

正四位下行丹後守藤原朝臣範宗

正四位下行左近衛權中將兼備中介藤原朝臣忠定

藏人正六位上行左衛門權少尉藤原朝臣康光

從三位行宮内卿藤原朝臣家隆

講師

讀師
判者

一番

左

羈旅郭公

御製

時鳥み山なからのはつこゑをこけの枕にあかつきそきく

右

僧正行意

これまでそ鳥の音もする時鳥あすはふものよその白雲

左

參議實氏

ちきりをかぬ涙そかよふ郭公誰も旅なる夜半のねさめに

右

丹後守範宗

明わたるみねの梯こえやらてきけはすき行ほとゝきすかな

左

參議經通

露分る山時鳥をのれまたなく音をそへて袖しほるらん

右

左近中將忠定

今夜ぬるは山かみねの雲路にも猶こゑ遠きほとゝきすかな

左

從三位家衡

旅の空行かふ山のほとゝきす都へたつる雲になくなり

右

左衛門尉康光

こえかねてけふもくらしつ時鳥なく山のはにいつる月かけ

五番

左

參議定家

郭公われも旅なりかち人の花たち花をそことおしへよ

右

宮内卿家隆

駒とむる野中の森は立にけり鳴や向の山ほとゝきす

六番

河邊夏草

左

御製

夏川や淺瀬になひくにこ草のにこらぬ水の色そ涼しき

右

僧正

茂りあふ草はみなからかけみえてをのれ浪こす野路の玉河

七番

左

實氏卿

河の瀬に夜わたる舟の此ころはかるやまこもの亂てそゆく

右

範宗朝臣

山河の岩もと小菅浪こえて木かけ涼しき夏の夕暮

八番

左

經通卿

からす共結はさらめやまこも草たかせのよとの枕はかりに

右

忠定朝臣

ふみ分ぬ谷の夏草しけるらし此ころほそき山河の水

九番

左

家衡卿

日數ふる淀のわたりの村雨にからぬまこもや末みたるらむ

右

藤原康光

浪こゆる河瀬に近きさゝのよのみしかく明る夢そはかなき

左

定家卿

夏草の道のへ深きおもひ川むすはぬ水のかけはなひかて

右

家隆卿

夏くれは玉嶋川にかかる草の浪もてゆへる色そ涼しき

十一番

寄松述懷

左

御製

今そしる北野の松の陰しけみあまるは神の惠なりけり

右

僧正

住吉の松をいはゝんためしには君の御代をそ引へかりける

十二番

左

實氏卿

あらはれよ松にそ君をとばかりに思そめてし行すゑの色

右

範宗朝臣

黒髪の霜より後も年ふりて松の位の山そはるけき

十三番

左

經通卿

身のうへを思ふね覺の深夜に涙くたくる松の風かな

右

忠定朝臣

おもふ事ちゝに心を木枯の松にくたけてすくる比かな

十四番

左

家衡卿

君か代の猶行末のみれの松おひぬる身こそたのみかたけれ

右

康光

萬代と分てそあふく玉松のおなしみとりを袖にかけつゝ
十五番

左

定家卿

花の下紅葉のよそにしほれつゝうき年ふかき松はふりにき
右

家隆卿

去年の春袖にほしてし松の露猶としあらは身をなしほりそ

右建保五年四月廿日歌合以村井敬義本校合了

右大將家歌合建保五年八月十五夜

題

虫聲驚夢

曉惜別戀

作者

左

右大將通光

藤原朝臣定家

右

大納言公經

藤原朝臣家隆

講師

讀者

判者

一番

虫聲驚夢

左持

鈴虫の聲ふるさとの秋の夜はむすふ夢さへおとろかれけり

右

公經

見る夢を枕のしたの虫の音におとろかされて有明の空

左歌むけにをさなく聞ゆ。右歌有明の空にはかにいて

きたり。暫此つかひ持に侍るへし。

二番

左持

慈圓

我さへに夢をのこしつきりくす蓬か袖に秋やふけぬる

右

行意

思ひねのあふ夢やふる虫の音はうさも哀もおなじかりけり
左歌初句をさなく聞ゆ。右歌思ねのあふ夢とつゝきた
るいかにそや侍。やふるおそろしく聞ゆ。左歌すこしは
まさり侍らし。

三番

左

定家

秋の夜の夢をそ覺すきり／＼す小萩かもとの曉のこゑ
右勝
草枕結びもはてぬ夢路よりうつゝにかへる松むしのこゑ
左歌すこしくたけて聞ゆ。右歌優也。可_レ爲_レ勝。

四番

左勝

雅經

夜もすから夢の枕のきり／＼す覺てもおなし音をのみそ鳴
右
きり／＼す語らふ聲は身にしみて夢もしとろの萱か下ふし
左歌初五文字でつゝにをかれたり。右歌優に聞え侍る
を。きり／＼のかたらひ。耳に立てきこえ侍れは。猶以
_レ左爲_レ勝。

五番

左持

通光

曉惜別戀

今はたゝかさねぬ妻となりなはや哀は袖の露もよしなし
右
公經

あけゆけは月も色ある心ちしてかへる空なきわか涙かな
左歌かへる朝の露うるさしとて。かさねぬ妻となりな
はやとねかはむ事あまりにや。又後朝の戀にて。曉の心

六番

左持

慈圓

みえす侍。右歌月も色ありと。何様にあるへきそや。下
句ふるめかし。此つかひ持に侍なん。

鐘の音は宵とも思なすへきをそゝやまことの鳥そ鳴なる

右

行意

待兼てあふ嬉しさはしりぬらん歸るあしたの袖を見せはや
左歌曉のかねを宵と思なさん事。まことしからすこそ
聞え侍れ。右歌あふうれしさは知ぬらんといいへる。心を
やりて侍。左は別の心なく。右は偏に後朝なり。なすら
へて持とす。

七番

左勝

定家

めくりあはむほとをもしらぬ別路は名残のみこそ有明の月
右
涙さへとまらさりけり曉のわかれはおしきこゝろなれとも
左歌尤優也。右歌心えぬさま也。左尤可_レ爲_レ勝。

左持

雅經

もろともにおしみかねぬる別かな涙の袖にありあけの月
右
秀能
あけぬとていそく別を消かへりおれはたもとの露を悲しき
兩首とも優にみえ侍。勝負所_レ難_レ定也。可_レ爲_レ侍。

右大將家歌合以古寫一本按合了

右大臣家歌合建保五年九月

題

夜深待月 故郷紅葉 河邊擣衣 行路見戀
山家夕戀 蜀中松風

作者

右大臣(道家) 參議左近衛中將實氏卿

參議治部卿定家卿

前丹波守知家卿

丹後守範宗朝臣

備前守家長

判者 衆議判

後日治部卿審判詞

右兵衛督雅經朝臣
中務權大輔信實
兵衛内侍

一番 夜深待月

左勝

右大臣

ふくる夜は惜みし月のまたれても山のは計りうき物はなし

右

治部卿

夜を重ねたゆまつひさに詠つる山のはおそき月を戀つゝ

(才歌)

左心も珍姿ことは殊宜由各申之。右もちかくあるさま
也なと。頻に定られ侍しかと。たゆますひさにといへ
る。殊きゝにくく侍へし。作者も優なりとは。よもおも
ひ侍らし。只風情つきても讀さらん事を申なんとかま
へたるにて侍らむ。尤左勝とされたため申侍にき。

二番

左勝

宰相中將

右

知家朝臣

長き夜の秋さへいたく更ぬらし待出る月のかはるおもかけ
大方の秋も更ゆく夜半の空待にもうき山のはの月
兩首いつれもいうにこそ侍るめれと。申いたし侍しに。
侍に物うきことは。いかによめるそと侍しかは。秋も更
行をおしむとて。月待心もをこたるにや侍らんと申侍
した。人々ものうくは月に志なくやと定申され侍しう
へは。左いと宜みえ侍れは。勝と定られ侍にき。

三番

左

宮内卿

あきかせに更ゆく星のかけさへに心もよほす月をまちつゝ

右勝

雅經朝臣

まち出てもいつかなかめん久堅のあまり深ぬる山のはの月
兩首又いと宜承由侍りき。更行星の影さへ心催すらん。
月待ほととの空のけしきも。まことにさこそ侍らめと。頻
に申侍しかと。いつかなかめん久方のあまり更ぬると
いへる詞つゝき。猶ことに宜とて。右可勝由申うけら
れ侍りき。

四番

左持

範宗朝臣

いてかての月待空も更ぬれはみしかくのこる曉そうき

右

兵衛内侍

有明になりゆく月のいてかては待よひ過て更る山のは
左右のいてかての月。同じ心に侍れは持と定申。

五番

左

信實

山のはの夕闇なからふくる夜の月をかことの空もつれなし

右勝

家長

こからしよ月吹をくれ秋の夜のなかは更ゆく山のあなたに

月をかこととは。いかにと侍しかと。特にことほり

も聞え侍らす。半ふけゆく山のあなた。いとおかしくこ

そ聞え侍れと申侍しを。あなたにといへるやいかゝな

と申侍りしを。あなたをこそいふへきと方人侍し。ま

ことさは侍へけと。月をかことおほつかなしと。右勝

に侍き。

六番

故郷紅葉

左持

範宗朝臣

露時雨いく夜をかけて染つらん尾上の宮の秋のもみち葉

右

信實

おひかはる梢もあらずふりにけり檜原の宮の秋のもみち葉

いく夜をかけて染つらん。梢もあらずふりにけり。尾上

の宮。ひ原の宮。いつれまざるけちめわきかたしとて。

爲レ侍。

七番

左

知家朝臣

人とはて秋の木の葉のふる郷に袖をはかれす吹風哉

右勝

兵衛内侍

もみちつゝうつろふよりもとふ人の秋はかきりの故郷の色

左の袖をはかれす。えんに宜聞え侍るよし申侍しほと

に。右もみちつゝうつろふよりもとをき。とふ人の秋は

かきりと侍る。ありかたよくおかしきこえ侍る由。同じ

心に定申。爲レ勝。

八番

左勝

宮内卿

故郷のみかきか原のはしもみち心とちらせ秋の木からし

右

家長

たをやめの袖は惜ますあすか風紅葉をよそにききて吹なん

右歌袖吹かへすあすか風と云歌をおもへる心。いひし

りてはきこえ侍れと。左の心とちらせ秋の木からし。す

くれて宜聞え侍れは。左のかちと定申侍りき。

九番

左持

宰相中將

荒果て時雨ふりをける里の名をよそにはからぬ秋の紅葉葉

右

治部卿

うつろひし昔の花の宮古とてのこる錦の色そしくるゝ

左時雨ふりをける里の名宜聞え侍由。頻に申侍しを。右

歌もみちと侍らぬいかゝと申をも。きゝいれられす。持

と定られ侍りにき。

十番

左持

右大臣

こまなめていさみかの原故郷のもみちは今も秋をしるらん

右

雅經朝臣

ならのはの名におふ宮も今更に時雨ふりそふ秋の色かな

左心詞優に侍るを。駒なへていさみにゆかん古郷はと

いへる古歌。只四文字かはりたり。不レ珍とおほせられ

て。ならの葉の名におふ宮。時雨ふりそふ秋の色。殊に

宜由沙汰侍しかと。猶持にや侍へからん。

十一番

河邊掃衣

左持

右

おちたきつしらゆふ浪に泊瀬めのおのかてつくりうつ衣哉

知家朝臣

泊瀬河ゆくせをはやき月日かなことしも秋のころも打也
左右の初瀬川。いくはくのかはりめ侍らねと。左はたく
みに。右はえんなるさまとりくみにみえ侍れは。宜持と
定め侍き。

十二番

左

宰相中將

里ちかくせく谷川も岩こえてうつや衣の音のさやけき

右勝

雅經朝臣

秋深きよしのゝ里の河かせに岩浪はやくうつころもかな
左の谷川岩こえて衣のをともさやけき。ことほりきこ
へておがしくみえ侍るを。吉野の里の河風岩浪はやく
うつよしの詞のつゝきいひしりて。殊よろしく侍れは。
かちとさため申侍りき。

十三番

左持

治部卿

こはた川こは誰かためのから衣ころも淋しき槌のをとかな

右

兵衛内侍

から衣いまやたつ田の河かせにきぬたのをとも打すさむ也
左めつらしからぬこはたかためよりも。末句無下に見
くるしく侍よし。たひく申出侍りしかと。右もことな
る事なしと申さるゝ人々侍しかと。槌のをと哉持や面
白侍るへからん。

十四番

左勝

右

宮内卿

霜さゆる河邊のさとに打衣千たひや千とりたひ家集聲そあらそふ
網代木にもみちのにしきかけすてゝ打や衣を横の鶴人
もみちの錦かけすてゝといへる。こゝろ詞いと宜く侍
るを。千たひや千とり。猶たくみにつよき所や侍らんと
見侍りしかは。勝へきよし侍りき。

十五番

左勝

範宗朝臣

長月のうちの河かせ寒からし横のしま人衣うつなり

右

家長

朝夕の零にくたす衣手をほさてはいかにうちの河長
左難なし。宜侍るへし。右擣衣の心なし。落題の由各申
されしを。いかにうちと云詞。打をすて侍にやと侍し
かと。宇治の河長にて。擣衣に用ひかたしとて。左勝侍
りき。

十六番

左持

雅經朝臣

思ひをくる心はかりは下おひの道はかたくゆきめくる共

右

兵衛内侍

難波なるみつと計りに過やらて袖にはよそのも鹽たれつゝ
下おひのみちは。かたく宜由侍りき。右歌も難波なる
みつとはかり。よそのもしほたれたる。心優に侍れは。
持と定申侍りき。

十七番

左持

知家朝臣

わきもこか入野のすゝきほのかにもそれかと迷ふ秋の夕霧

右

信 實

誰となくゆくてににこる山の井もあかねはしるき影を移れる
兩首共に宜つかひの由各申て。爲_レ持。

十八番

左持

治部卿

露そをくゐての下生さはかりも結はぬ野への草のゆかりに

右

家 長

頼みこし契はさてややまとちのゆくてにくみし井手の玉水

左詞のつゝきおほつかなく侍らん。ゐての下おひに露

置たりと聞ゆる。理かなひ侍らぬよし申侍き。同じ心を

思ひよりなから。右はつよく聞え侍るらんとみ侍しを。

むすはぬ野への草のゆかりいうなる由。宮内卿申うけ

られ侍りしかは。爲_レ持。

十九番

左持

宰相中將

いかにみんわけつる道の秋そともしれかし人の野への白露

右

範宗朝臣

しらざりきおつる泪の玉銚やみちのゆくての袖にみんとは

左いうなる由侍りき。右もことなる難侍らぬを。近き歌

ににたる事侍とかや申さるゝ人侍りき。そのうたも又

わすれ侍にけり。大方此比。露泪の玉ほこ。常めなれた

る由人々申て。左勝侍りき。

廿番

左持

右大臣

道のへの夕きりつもるさゝの葉の結びもあへす亂かねつゝ

右

宮内卿

しられしな忍ふの衣ゆきすりのひとめはかりに亂れわふ共
兩首共に。艶に宜きこえ侍れは爲_レ持。

廿一番

山家夕戀

左持

右大臣

侍人のむなしきゆかを拂ひつゝ身をしる山の夕暮そうき

右

兵衛内侍

頼めこしたかなをさりの夕ともわかぬなかめのみ山へのさと

兩首ともにいうなるよし。各被_レ申侍りき。右の末句少

よはくや侍らんと申旨侍りて。以_レ左爲_レ勝。

廿二番

左持

宰相中將

つれなきをたかゆふ霜にならひけんわかるる山の嶺の椎柴

右

信 實

うき人のまたれぬ宿もありやとて住山本の秋の夕くれ

このつかひ。又いと宜由申侍りき。またれぬやともあり

やととも。殊いうなりける由被_レ申人々侍しかと。つれ

なきをたか夕霜にとをける。嶺の椎柴。殊に深おもひい

れて。まことに宜みえ侍れは。勝負あり難や侍らん。

廿三番

左持

治部卿

泪せくやともは山にかくろひてあらはにこふる夕暮そなき

右

宮内卿

とはれしとさしてはすます松の門みはてむための秋の夕暮

右歌未きゝわき侍らぬさきに。左勝へき由。宮内卿定被_レ

申侍しかは。右の歌はうけたまはらてやみ侍りにき。

廿四番

左勝

知家朝臣

はしたかのと山の庵の夕くれをかりにもとたに契やはする

右

範宗朝臣

おもひやれこひせぬ人も住わひぬみ山の庵の秋の夕暮

左 姿詞まことに宜侍り。右歌はおもひやれみ山のいほ

の秋の夕暮。うたかひなきわか身のことゝ聞え侍るを。

戀せぬ人もすみわひぬといへるは。それも同じ人なら

は。戀の心なくや侍るへき。隣などの事ならば。そのよ

しもなしなと各申て。以左爲勝。

廿五番

左勝

雅經朝臣

よそにみし雲のはたての夕暮をのきはの山におもひ消つゝ

右

家長

夕つく夜むかひの岡の草かれにおもふ心も霜に朽つゝ

左 宜由各申。夕附夜むかひのおか。水無瀬殿歌合に侍る

由。宮内卿頻に申て。左かち侍にき。

廿六番

左勝

信實

とをさかる松のあなたの故郷をかへりもみよとふく嵐かな

右

兵衛内侍

たのめてもあけはいなはの嶺の松そなたの風に誰忍ふとて

松のあなた宜侍るうへに。いなはの岑このころいたく

耳なれたる由各申て。以左爲勝。

廿七番

左持

知家朝臣

ゆくまゝに木葉しくるゝ山路にも松はかはらぬ風のをと哉

右

家長

うつりゆくおなし嵐に聲たてゝ野路も山路もたゝ松の風

兩首ともに宜よし一同申。爲持。

左勝

治部卿

なれぬ夜の旅ねなやます松風にこのさと人や夢結らむ

右

雅經朝臣

けふへは又野中の松をともなへとをくる嵐そ遠さかりゆく

左 歌又させる故なく可勝之由さためられ侍し。是非を

わきまへ侍らす。

廿九番

左勝

宰相中將

みやこおもふ心も空のうき雲に身をわけて吹松の秋風

右

宮内卿

分きつる山はうらちにかはれともこれも久しき松のかせかな

此番も又ことに宜由各申き。左爲勝。

卅番

左

右大臣

あまの原日も夕しほのから衣はるゝきぬるうらの松風

右勝

範宗朝臣

をのつから恨ぬ神もあらしかしかへる野中の松の秋風

左いと宜聞え侍るを。唐衣日も夕くれの心。この比おほ

くめなれたるよし。仰られ侍りて。右勝と定られ侍りき。

右 右大臣家歌合以横田茂語藏本按合了

四十番歌合建保五年十月十九日

題

春雨

夏月

秋露

冬風

變戀

作者

左方

知家朝臣

宗平

藤原康光

大江康久

右方

範守朝臣

範經

源兼康

源康茂

講師

讀師

判者

御判

隱作者

一番 春雨

左持

冬かれのよものこのめも春雨に我身つれなき年やふりなん

右

知家

吉野山ふるさと寒く猶さえて雪氣になるか春の夜の雨

左歌述懷によりてよろしく侍るに。右歌させる難父侍

二番

左勝

詠ても日數ふり行春雨にまた解やらぬ花の下紐

右

爲家

淩姫の霞の衣しほるらむたなひく山の春雨の空

右も指難は侍らねとも。左は今少し艶なるさまにて。爲

勝。

三番

左

宗平

雨のうちもなくさむ色そなかりける花待山の春の夕暮

右勝

範經

春雨に花散ぬとや鶯の軒端の梅にぬれつゝそ鳴

左歌雨の中もなくさむ色と侍詞。何様のこゝろに侍る

にか。不審程。暫以右爲勝。

四番

左

家光

をしほ山花のみとりにはあらはれて常盤の色を松のむら雨

右勝

範綱

春雨のふる里匂ふ梅かえの花より落る軒の玉水

左下句うけられす侍うへ。右風情ある躰に侍れは。爲

勝。

五番

左勝

康光

この頃はそれともわかぬ春雨に軒端の梅の花そしほるゝ

右

兼康

をればまた花の錦もぬきやよはき糸よりかけて春雨そ降
左のそれともわかぬ春雨。何とも侍らす。勝ても侍らね
とも。右の五文字。うけられぬ事多侍にや。其上いとよ
りかくるは。多は柳にそきゝならひて侍。唯花錦斷の糸
あまりの芳心歟。仍て爲_レ負。

六番

左持

助連

春雨にまとの梅かえ散にけり色さへ匂ふ軒のたま水
右 範保

兩首爲_レ持。

七番

左持

康久

櫻かり猶とめゆかむ春雨にぬるらん花のかけをよそにて

右

康茂

冬枯のよものこのめも春雨にみとりの色にあらはれにけり
左のかけをよそにての詞。なにとなくや侍らむ。右歌末
の句のよはさも。勝へくも侍らねは。爲_レ持。

八番

左

御製

まきもくの檜原の山の朝曇り空もみとりに春雨そふる

右勝

〔名欠〕

春雨のふりゆく色と青柳の糸よりつゝく杜の下露
右歌無_レ難侍の上。左よりはまさり侍るへし。

九番

左

知家

夏月

をのつから秋のけしきを有明の空にまかへてすめる月影
右勝 範宗
月影をいかにちきりて郭公をのれも雲路よはに出らむ
兩首強の難も侍らす。又持となる事を侍らぬを。聊左の
秋のけしきをあり明のとつゝけられたるや。みゝにた
ち侍らむ。仍以_レ右爲_レ勝。

十番

左

爲家

夏の夜も雲のかよひち霜さえてたましく庭の月そさやけき
右勝 伊平

郭公かたらひすくる一聲にやかて明ゆく山のはの月
左もあしくは侍らねとも。右は今少し勝へし。

十一番

左持

宗平

夏の夜はまた宵とこそ思ひねの月も心に明る空かな
右 範經

螢とふ野澤の水にすむ月の光もうすき有明のそら
左おもひねの月とつゝけて侍。すこしこゝろゆかすや
侍らん。然る様ありけに侍うへ。右も指事はんへらねは。
爲_レ持。

十二番

左

家光

郭公たゝ一聲の雲間よりなこりにのこる有明の月
右勝 範綱

まつ宵はまたふけなくに有明の光そ出るなつの月影
左歌たゝ有明の月そのこれるといへる歌のこゝろ。お

なしことに侍るか。ことのほかにをとりて侍るにや。右
猿程に侍れは。爲勝。

十三番

左勝

康 光

夏衣かたしく夜半や明ぬらんうすき袂に残る月かけ

右

兼 康

郭公こゝろつくしのみ山出る月見ぬ人や秋をまつらん

左歌かやうのことはつゝきは。つねの事にも侍とも。

右こゝろつくしのみやまいつる。訶郷鎮西山かとおほ

ゆる躰に侍。尤うけられすきこゆるうへ。左ほとよりも。

やさしけに侍は。勝侍へし。

十四番

左持

助 連

山のはにまた宵かけて出つるにあとよりしらむ夏の夜の月

右

範 保

なつかりの苜のかりねのみしか夜によ渡る月の影そ少なき

左いてつるにのことは。如此事秀歌などには中々侍り

やすらむ。さらては少しよはくはへるにや。右歌もさせ

ることなく侍れは。爲持。

十五番

左

康 久

おしきかなむすはぬ霜を打はらひ袖よりしらむ夏の夜の月

右勝

康 茂

郭公たゝこゑの名残さえ空にそのこる有明の月

左歌はしめの五文字。様たゝ事とおほえ侍らす。たゝ

ゆゝしきこと葉にて侍らむ。聊留耳けして侍るを。右

歌例のたゝ有明の月そのこれるにて侍れとも勝へし。

十六番

左持

御 製

郭公なくこゑの程たにも月よりのちのあかつきそうき

右

内 侍

時鳥鳴こゑはしのゝめの月を残して明る山のは

左右共。めつらしきことも侍られは。なすらへて爲持。

十七番

秋露

左

知 家

今よりはここの葉ももろき秋風にかつ散るやまの楨の下露

右勝

範 宗

たか秋にうつろふ色のかはるらん露の玉まくすのうら風

右歌ゆうに侍る上。左かつ散ると侍るは。露の事にて侍

にや。こゝにてはかつの字心ゆかす侍れは。まけ侍るへ

し。

十八番

左持

爲 家

秋萩の咲やをかへの夕露を誰ため鹿のぬれてわくらむ

右

伊 平

秋の田のほなみにむすふ白露のたまゆらみゆる宵の稻妻

兩首ともに。常の事にては侍らむ。よろしき爲持。

十九番

左勝

宗 平

吹すさふ風より後のしら露も秋はかすそふ宮城野の原

右

範 經

をしなへて草のうへ吹秋風に野原の露や消わたるらん

又おなしほとのことにて侍るを。左すこしゆうにきこえ侍は。爲_レ勝。

廿番

左

家 光

たひ人のあきたつ野への小萩はらおもはぬ袖に秋のしら露

右勝

範 綱

末なひきはわけにむすふ白露の玉江のあしに秋風そ吹

左思はぬ袖とはいかなる袖にか。あはれわろく被_レ讀侍るものかな。右も五文字頗不_ニ落居_一見え侍れと。自_レ左はまさり侍へし。

廿一番

左勝

康 光

人とはぬ庭のかるかやおのれさへ亂てむすふ秋のしら露

右

兼 康

秋の月いたらぬ里のたにかけも下草かけて露は置つゝ

兩首持程の事か。但右の下草は。なにゝかけて侍るにか。如_レ此事ころによるへきことに侍る。仍以_レ左爲_レ勝。

廿二番

左持

助 連

秋風やあかつきかけて吹ぬらんあくれはもろき萩の下露

右

範 保

秋ふかく木末の色もなるまゝに草葉にあまる宮城野の露

左あかつきかけて吹風には。以の外遅くもろき萩の下露にて侍か。右も草葉の露。強に梢の色によるへきこともおほえ侍らす。如_レ此歌定聊勝劣侍る。然而爲_レ持。

廿三番

左持

康 久

道芝の露にそじるき草のはら誰に問ねと秋のけしきは

右

康 茂

宮城のや花のひもとく秋ことに千くさにみゆる露の色哉

左歌本歌のこゝろのさることにて。非_ニ指秀逸_一歟。右もまたよれる所なき見苦ものところそみえ侍れは。又爲_レ持。

廿四番

左

御 製

草のはらうつろふからに白露の秋を置いてや色まさり行

右勝

内 侍

しくらむ誰かみやまの秋の色に袖のみ染るまきのした露

左秋をきて時こそ有けれといふ歌のこゝろにて侍にや。こゝろゆかぬ躰に侍る上。右不_レ及_ニ左右_一可_レ爲_レ勝。

廿五番

左持

冬風

知 家

神無月空きたまらぬ村雲に時雨ほとふる峯の松風

右

範 宗

津の國の生田のあしのうら枯て風もあらはに冬のきぬらん

兩首共同科にて。

廿六番

左勝

爲 家

引かへてまた冬こもる氣色かな時雨をさそふ木からしの風

右

伊 平

山風のもみち吹おろす夕暮に曇らて出る冬の夜の月

右嵐のちのたかねより木の葉くもらて月やいつらんといへる歌のこゝろに侍るにや。然而優には侍を。左上

下にかなひて。尤可レ爲レ勝。

廿七番

左

ふしわひていくよに成ぬ笹の庵や霞吹まく峯の嵐に

右勝

宗平 範經

神無月しくれの後のこからしにぬれて散しく峯の紅葉は
左もあしうは侍らねとも。右は今すこし詞つゝきはま
さりて侍らん。

廿八番

左勝

家光

秋の色は麓のさとに散はてゝ木末むなしき山おろし〔の〕風

右

範綱

沖つ浪よる浦風やさえつ覽けさつらゝゐるしかのおほわた

右のおきつなみと置て。次句による浦風とひきはなれ

たる。中々無風情。よそへもきこえ侍らす。けさつらゝ

ゐる。又同前にて。左常の事にて侍らん。爲レ勝。

廿九番

左勝

康光

人目さへ冬はかれのゝ山風にそれともみえぬしもの下草

右

兼康

移り行木の葉のこらす吹風にめにはさやかに冬そみえける

右歌定作者の心には秀歌ともや思ひ侍らめと。なとや

らんにくゝ侍上。左冬はかれ野の山。風聲霜色叶ゝ冬景

氣。尤可レ爲レ勝。

卅番

左

助連

夕くれはなにはのあしも霜かれて吹程みえすやへのしほ風

右勝

範保

花のおりもみちの頃はさもあらはあれ雪の木末の峯の木枯

左の吹ほとばしるにやをよひ侍るへき。いかゝはみえ

侍るへき。歌にも有ほとのことこそとくと取なすこ

とは侍れ。これはあしくみえ侍り。右春花秋葉何浦の江

よりも。稍雪嶺嵐只言景氣しるき色は。左にも勝侍るへ

し。

卅一番

左勝

康久

秋の色をはらひはてゝはをのれもや淋しかるらん冬の山風

右

康茂

散る花の春にしられぬ梢まで雪吹まふこからしの風

左歌右よりはふるまはぬ躰に侍るも。中々勝にてや侍

らん。

卅二番

左

御製

紅葉葉をあるかなきかに吹捨て木末にたかき冬のこからし

右勝

内侍

千鳥鳴みきはの氷ふみわけて河風さむきうちの人

右歌不レ能レ左右。爲レ勝。

卅三番

左勝

知家

今さらに我さへかはる心かなまたぬ名をなかわひつゝ

右

範宗

かへり行人の心の色に見し山のこの葉はかはらさりけり

右も本歌心ゆうに侍れとも。左いひしりて侍れは。勝侍へし。

卅四番

左持

爲家

契りこしすゑの松山いたつらに袖さへかけて浪はこえつゝ

右

伊平

人の心うつりにけりな我やとの庭の浅茅生あともなきまで
兩首共よろしき爲_レ持。

卅五番

左

宗平

人心たのめてあはぬいつはりに涙の色のかはらましかは

右勝

範經

人心うらかれそむる言の葉に露の契りの何のこるらん

右歌今少し道理かなひて侍れは爲_レ勝。

卅六番

左

家光

人しれす心の花そかはりける我身ひとつは春を忍へと

右勝

範綱

いつはりとおたに思し夕暮もたのめしまてのかたみ也けり

左歌戀のこゝろともみえ侍らす。沈淪を愁たる人に聞

なされ侍るにや。右も殊事神妙侍れは爲_レ勝。

卅七番

左

康光

契りしは仇なりけりと思ふにもいとみすみうき浅茅生の宿

右

兼康

泪のみ我身しくれの袖のうへにかはる心の色も見えけり

左をせ女なとはさこそはと。いとおしく侍上。右ゆゝし
けにて。實無_二指事_一。見くるしき物にて侍歟。

卅八番

左

助連

同しくは思ひたえなん言の葉を入つてなういふにかへはや

右勝

範保

いかにせんあふには夢路たえぬれはつらき現に猶歸りつゝ
左歌いふにかへはや。以外平懷貞。まゝなるすかたも。
様により侍るへし。右尤爲_レ勝。

卅九番

左勝

康久

人はいさいく有明を隔つらん契し月のかけは忘れし

右

康茂

思ひきやたのめし暮の空しくてよるの心もかへすへしとは
右出齒大夫辨淵の詞。めつらしけなくや侍らん。左も無_二
指事_一侍とも。爲_レ勝。

四十番

左

御製

おもひそめし色こそ見えねたけくまの松も昔の秋の夕暮

右勝

内侍

うしとみし契りを夢_一覺るはかりのなくきめもなし

右下句殊によろしくみえ侍る上。左むけにおもふとこ

ろなきやうに侍歟。二首の詞非_二一口之論_一。以_レ右爲_レ勝。

右四十番歌合以古寫二本校合

歌合建保五年十一月四日

題

冬山霜 冬野霰 冬關月 冬川風
冬海雪 冬夕旅 冬夜戀

歌人

左方

御製

權大納言右近衛大將源朝臣通光
參議左近衛權中將藤原朝臣實氏
參議治部卿藤原朝臣定家
左近衛權中將藤原朝臣忠定
右兵衛督藤原朝臣雅經
中務權大輔藤原朝臣信實
兵衛内侍

右方

宮内卿藤原朝臣家隆 俊成卿女
丹後守藤原朝臣範宗 八條院高倉
前丹後守藤原朝臣知家
右大臣兼左近衛大將藤原朝臣(道隆)
左衛門權少尉藤原朝臣康光
權中納言兼左衛門督藤原朝臣忠信

講師 知家朝臣

判者 衆議 治部卿定家後日書詞畢

歌合

一番 冬山霜

左持

御製

敷嶋やみむろの山の岩こそけそれともみえず霜さゆる頃

右

宮内卿家隆卿

鵲のわたすやいつこ夕霜の雲井にしるき峯のかけはし

左たけ姿難_レ及。心詞相叶。まことの秀逸の跡。無_二比類_一

の由。満座各申。右常の宜歌に侍らは。更にきたに及ま

しく侍るを。雲井にしるき嶺のかけはし。又凡俗の思ひ

よるへきやうには侍らすと申出侍を。宮内卿藤原の朝

臣。左は萬葉古風。本歌も慥につよく侍へし。右は更に

ことなる事侍らぬ由。頻にうかゝひ申侍しかと。猶依_二

天氣_一爲_レ持。

二番

左持

左大將通光卿

朽のころ木葉すくなき山風にむすひきためぬ霜の下草

右

俊成卿女

そめし秋の露はあらしの山風に木のはの色をうつむ朝霜

兩首歌。左右作者各優なる由申侍りしを。左の初五文

字。理はたかふましき事にあ_レ侍_レれと。うち聞たる初

に。木の葉のうへとは聞えずや侍らん。長良の橋のはし

柱。つゝゐつのむかしの井筒なとなら。さも侍なん。

右も。同じ五文字もよまぬには侍らねと。なかく聞え侍

れは。ことなる至要なきにや侍らん。仍持と定申侍にき。

三番

左持

左中將實氏卿

みむろ山風にまよはぬ木葉哉こほれる霜のむすほはれつゝ

右 丹後守範宗朝臣

うつり行冬の日かすはつもれとも霜につれなき嶺の常盤木
左右耳にたつところなく。ともに優なる由。をのゝく申
て。無難持にて侍るへし。

四番

左勝

治部卿定家卿

冬の日もよそに暮行山かけに朝霜けたぬ松の下柴

右

高倉

神無月たつ田の山のやま姫もそめあへぬまに霜や置らむ
左歌大方の歌のさま。卑下微少の姿に侍うへ。立田山の
山姫いと宜きこえて侍由。頻に申出侍しを。宮内卿藤原
朝臣殊加詞。左可勝之由定申。

五番

左勝

左中將忠定朝臣

散るまてに山の木の葉を染捨てをのれや霜の置所なき

右

前丹後守知家朝臣

をく霜のみなれぬ色の初瀬山今朝はひ原そうすみとりなる
左右とも難なく。優に侍由。各申侍しうへに。左下句。猶
宜聞え侍由。聊申いたして侍しかは。勝に定られ侍にき。

六番

左

右兵衛督雅經朝臣

山かせにみむろの木のもる霜の下草かけて冬は來にけり

右勝

右大臣

夜をかさね山路の霜もしらかしの常盤の色そ冬なかりける
此つかひことに宜聞え侍る由。又各申侍しに。宮内卿。

いまの白かしの冬の色。昔の柿本の姿をのこせる由申
て。勝とさためられ侍にき。

七番

左勝

中務權大輔信實

菅の根もうつろひかはる冬の日に夕霜いそく山の下草

右

左衛門權少尉藤原康光

泊瀬山おのへの鐘や更ぬらんひ原にしるき夜半の初霜

兩首優に侍る由。末さまには各申侍しかと。右の初霜。

おほかたの霜の名に讀ならはして。冬のうたにも多く
侍れは。猶いかゝなと定られ侍て。左下句優なるにより
て。かち侍にき。

八番

左持

兵衛内侍

そめはてし木の葉のあとの立田山をのれ色なき嶺の朝霜

右

左衛門督忠信卿

足曳の山かつらかき散はてゝ霜のふりはに残る色かな

左歌其難侍らす。右のうた。山かつらかき。座に當て當
學老。左もともにおほえ侍らぬ由は申侍しかと。ちから
いれたるさまにやとて。なすらへて爲侍。

九番

左勝

御製

むさし野の草はみなから埋れて霰にのこるさゝのをと哉

右

家隆卿

やたののに霰ふりきぬあらち山あらしも寒く色かはるまて
左義實文章相兼て。珍重殊勝之由。各申也。右歌矢田野
の淺芽。今更にあられの色にかはれる心。珍面白もみえ

侍るを。わさとよめるに侍るめれと。あらし山あらしそ。
同字多侍ると申て。彌以左爲勝。

十番

左勝

通光卿

木枯にはらひはてたる宮城のの萩のふる枝にあられふる也

右

俊成卿女

濡侘ぬあはてこし夜の袖よりもさゝわくるのへに霞ふりつゝ

左無其難。右あられも消行まゝにぬるましきものには
侍らねと。秋の野にさゝわくる袖よりまさらん事かた

くやと。人々申侍て。以左爲勝。

十一番

左

實氏卿

露も又あられにかはる衣手にぬれぬ玉ちる小野のしの原

右勝

範宗朝臣

露をかぬかれ野の冬の白玉は風にみたるゝあられ成けり

左右宜由。末さまに申侍りしを。ぬれぬ玉といはん事。

あまりにかはきてや承旨侍し。理極て。以右爲勝。

十二番

左勝

定家卿

あまつ空たかぬく玉にをたえして霞みたるゝ野への篠原

右

高倉

あたし野のお花をしなみ吹風に霞もなひく空の浮雲

右いとおかしくみえ侍を。左可勝由。各定られ侍りき。

十三番

左持

忠定朝臣

枯野なる草の葉しほる山風に薄にたまる霞おつなり

右

知家朝臣

花すゝき枯野の草の袂にも玉ちるばかりふる霞かな

左のすゝきにたまるあられ。珍しくおかしく聞え侍り
しを。右の草の袂たまちはかりなといへる。殊宜とて

持と定申。

十四番

左持

雅經朝臣

うたの野や宿かり衣きゝすたつ羽音もさやに霞ふる也

右

右大臣

ぬれつゝもしぬてとかりの梓弓末の原野にの霞降らし

宿かり衣きゝすたつ。かやうに云つゝけたる歌のすか

た。あまりにくさりすくしたるも。頃日おほく聞え侍れ

と。これはわさと雉子よく侍由申侍しに。右またちから

侍らんと。各申て。爲勝持。

十五番

左持

信實

吹とめぬ風もよこ野のかたよりに降や霞のくたけてそ行

右

康光

風による野への玉きゝうちさやき今宵はいたく降霞哉

こよひはいたく降あられ。おさなく聞ゆとさた侍しに。

ふるやあられも。やすらかならずや侍へきと申て。又爲

勝持。

十六番

左持

兵衛内侍

なめゆく末野の原の霜かれにたまらぬ色は霞なりけり

右

忠信卿

しめし野の霞の玉にみかくれてうすみとりなる冬の下草
左のたまらぬ色。いと宜侍る由。各申。右のみかくれて。
水のあたりにやなへていひならはしたると申人々侍し
かと。俊頼朝臣。たまくしのはにみかくれてもすの草く
さめちならずとも申歌侍るよし申出し侍。左猶歌さま
いうなりとて。爲勝。

十七番 冬關月

左勝

御製

風さむみよはの衣のせきもりはねられぬまゝに月やみるらん

右

家隆卿

さゑのほる須磨のうらはの冬の月關はもしほの煙たになし
夜半の衣の關守。昔今たれもなとかくおもひより侍ら
さりけむと。各今更に遺恨をさへなし侍れは。左爲勝。

十八番

左勝

通光卿

神無月こほれる月の影みれはひとりはずまぬ不破の關守

右

俊成卿女

須磨の關浪風寒みさよ千鳥更行月に聲うらむ也

右下句。常にきゝなれたる由。各申て。以左爲勝。

十九番

左持

實氏卿

残りける月のひかりのおくもみつ雪にやとかる白川の關

右

範宗朝臣

嵐吹きよみか關の波のうへに時雨て晴る冬のよの月

左歌のこりける月のひかり。その故おほつかなきよし
難申。右歌姿宜難なき由はきた侍しかと。左の殘の詞。

當時のことを賞する時。かやうの事例おほく侍へし。明
月の景氣優に侍るよし申て。爲持。

廿番

左持

定家卿

忘れめやみかく氷はとちそへていつる關戸のあくる月かけ

右

高倉

降つもる雪をさながら照す月こよひなりけり白川の關
右の今夜成けり白川の關。いひしりて殊宜侍るうへに。
左の上句。題外の氷詞。くたけてきゝにくゝや侍らん。
又いつくの關とも聞えず侍出。頻に申侍しかと。當座の
勝負を定られ侍らす。實に後輩の不齊を殘し侍歟。

廿一番

左持

忠定朝臣

あふ坂は冬まであをき杉の葉に時雨もしらぬ月そうつるふ

右

知家朝臣

逢坂やかはらぬ杉の下かけに月は冬ともわかれさりけり

左右又優に無難由。各申〔す〕上に。逢坂の杉の葉の時雨
もしらぬ。冬ともわかれぬ。同じ様の事に侍れは。爲持。

廿二番

左持

雅經朝臣

清見かた月かけこほる冬のよにをのれたゆまぬ浪の關守

右

右大臣

月影のあらしをさむみ出るより衣の關の色にみえつゝ

此つかひ。又持に定られにき。

廿三番

左勝

信實

須磨のうらに秋をとゝめぬ關守のこる霜夜の月はみるらん

右 康光

あれにける不破のせきやの跡みえて月影わたる木枯の風

秋をとゝめぬ關守のこる霜夜の月をみる心宜とて。爲

勝。

廿四番

左持 兵衛内侍

須磨の關かよふ霜夜の友千鳥月にうらみて聲かへる也

右 忠信卿

風さゆる關のわらやの跡ふりて誰すむ聞に月やとるらむ

左は千鳥。させるめつらしけなく。右は誰かすむねや。

又よしなしとて。爲持。

廿五番 冬川風

左持 御製

山河の木のはのちの薄氷これもかけたる風のしからみ

右 家隆卿

立田川木のはの後のしからみも風のかけたる氷なりけり

兩首。木の葉ののちの。只同じ心に侍るを。これもかけた

る風のしからみは。風のかけたる氷成けりと云はてた

るに。殊外にきこえ侍る由申て。各勝と定申侍りしかと。

持字を被付侍ける。

廿六番

左持 通光卿

みなと川霜吹まよふ山かせにはねうちしほれ鳴千鳥哉

右 俊成卿女

はし姫のまつ夜むなしき床の霜はらふもさびしうちの川風

ともにさせる難なしとて。爲持。

廿七番

左持 實氏卿

宵のまはこほらぬ水にみし月も更てへたつるさほの川風

右 範宗朝臣

さゆる夜の松風わたる山川はこほれと浪の聲を聞ゆる

左の更てへたつる。おほつかなしと申人々侍しかと。氷

にやとれる月影。氷をへたつらん。理たかふましく侍れ

は。持と定申。

廿八番

左持 定家卿

山風の岩瀬吹こすをとほ川いそくみなわに暮るゝ年かな

右 高倉

山川にかけしもみちはあともなし氷にかふる風のしからみ

右又廿五番同心に侍れは。いと宜聞え侍由申侍しを。氷

にかふる。すこし耳にたつと申人侍て。持に定られ侍き。

廿九番

左持 忠定朝臣

水鳥のあをはやましる立田河浪染のこす嶺の木からし

右 知家朝臣

浪の上に氷あらそふ水鳥の鴨のかは風さゆる夜半かな

左。水鳥の青羽にもみちの浪そめのこせる心。み所あり

て見え侍を。右も。川かせ水鳥又同心優に侍れば。をの

をの持と定申。

卅番

左勝

雅經朝臣

このころは時雨も雪もふる郷に衣かけほすさほの川風
右 右大臣

吉野川きよきかうちの山風にこほらぬ瀧もよるはさえつゝ
右のきよき河内も。たけあるさまには侍れと。左の衣か
けほす。猶宜侍由各申。爲勝。

卅一番

左

信實

川の瀬に紅葉をくたすおひ風のしはしもかけぬ冬のしからみ

右勝

康光

吹風にみきはや遠く氷らむ川瀬の浪のをとそすくなき
追風冬のしからみ。風のよしにく侍て。右下句優に侍
れは。可勝由を申。

卅二番

左

兵衛内侍

月すめはむすふ氷もきよ瀧のせゝにたまらす河風そ吹

右勝

忠信卿

おもひ川たえす流るゝ水鳥のをのか羽風も嵐ふく頃
左ことなる事なく。させる難なし。右本歌の詞三句に及
て侍れと。下句殊宜聞ゆとて。勝と定られ侍りき。

卅三番

冬海雪

左

御製

風さむみ日かすもいたくふる雪に人やはおらんいせの濱荻

右勝

家隆卿

和田の原八十嶋しろく降雪のあまきる浪にまかふ釣舟
人やはおらんいせの濱荻。風雪の景氣。詞尤妖艶。有か
たく珍見え侍るを。釣舟のあまきる浪にまかひて。わた

の原八十嶋白き眺望。秀歌の姿又心にまかせてつかう
まつれる由申侍しを。右に可勝由天氣侍き。

卅四番

左持

家隆卿

あま衣ひも吹かへすしほ風にたまらてきゆる雪のしら浪

右

俊成卿女

さえわたる嶺の雲よりこしの海のそことも浪の雪の鹽風
朝な夕なにかつきするあまの衣。ひもゆふためしあり
かたくやと中人侍りき。嶺の雲よりこしの海。そことも
浪。まことにふりまかひては侍らめと。そこともみえわ
かれ侍らねは。持とさため申。

卅五番

左

實氏卿

雪つもる沖津嶋ねの小松原くたけし浪の色そかへらぬ

右勝

範宗朝臣

ふりしけとたまらぬ雪のなみの上に一むら積る浮しまの松
左させる難も聞え侍らす。右優なりと中人々侍りて。爲

勝。

卅六番

左

定家卿

住吉の浪にうつろふ松の雪ふらすはなにを花とかもみむ

右勝

高倉

さとのあまのさためぬやとも埋れぬよする渚の雪のしら浪
住吉の松。遠海のなみなきをはなとみすとも。その恨侍
らし。よする渚の雪の白浪。いとおかしく聞え侍れは。
右勝と定め申。

卅七番

左持

忠定朝臣

浪のうへにむら／＼雪を積りけるそれとはみえず蚤の釣舟

右

知家朝臣

あまのすむさとのゆくゑを恨ても知ぬはま路の雪の夕暮
釣舟の姿はみえず。浪のうへに雪のつもれる風情。妖艶
に珍みえ侍を。さとの行衛を恨てもしらぬ濱路といへ
る。詞のつゝき。えんに宜侍れは。持と定申。

卅八番

左持

雅經朝臣

里かよふあまのとまやの跡たえてたれとなくさの濱の白雪

右

右大臣

海原や釣する沖にふる雪のあまきる衣うちはらふらむ
たれとなくさの濱の白雪。いひしりて宜きこえ侍れと。
うな原や釣する沖。歌たけ侍る由各申て。無_ニ勝負_一。

卅九番

左持

信實

たこのあまの宿迄埋む富士の根の雪もひとつに冬は來に鬼

右

康光

あまの原雪ふりよする浦風にしほひのかたやさえ増るらん
左右共に優なる由申て。又爲_レ持。

四十番

左持

兵衛内侍

こきかへるたなゝし小舟みちもなし難波のあしの雪の下折

右

忠信卿

をしなへてたれかはとはん松嶋やいそへの山の雪の下おれ

難波のあしの雪の下おれ。いと宜きこえ侍る由。一同に
申て。爲_レ勝。

四十一番 冬夕旅

左持

御製

ぬれきつゝとふへき山の夕くれもおなし時雨の末の白雪

右

家隆卿

さえ暮すさやの中山なか／＼にこれより冬のおくもまさらし
ぬれきつゝとふへき山の夕くれ。時雨の雲めぐりあへ
る心。かきりなくおかしく聞え侍由。満座申侍しを(にイ)。
これより冬のおくもまさらし。殊勝之由天氣侍りて。右
の勝と被_レ仰侍しを。宮内卿懇切に持之由を申。

四十二番

左持

通光卿

かち人のぬれぬとたのむ宿なれや契らぬ雪の末の松のは

右

俊成卿女

はかなしやしは折くふる夕けふり宿とふ旅の空のしるへも
左のちきらぬ雪。おほつかなきよし。人々申て。右もこ
となる事なしとて。爲_レ持。

四十三番

左持

實氏卿

歸りみる空もそなたにさえくれて時雨ぬ山もしほれてそゆく
右 範宗朝臣

こえくれてたのむ山路の常盤木の下もはけしく吹嵐かな
左歌させる難なく侍しかとしくれぬ山もしほれてそゆ
く。可_レ勝の由定申。

四十四番

左勝

定家卿

引むすふ草もしも夜の故郷はくるゝ日ことに遠きかりつゝ

右

高倉

柴の庵の山風つらき冬の日をくれすはよそに見てすきなまし

右歌。心姿いとおかしくみえ侍るを。依ニ天氣。以レ左爲

勝。

四十五番

左

忠定朝臣

降くらし山路まよはす雪まより夕日はうすき遠のしら雲

右勝

知家朝臣

冬の日ゆくほともなき夕暮に猶里とをき武藏のの原

微陽の短晷雖レ無レ程。長途之遠望猶不レ盡。殊宜之由各

申也。爲レ勝。

四十六番

左

雅經朝臣

晴くもり時雨る空やくれぬらん日かけもいそくさやの中山

右勝

右大臣

夕暮の雪けの雲を吹風のめにみぬかたやあすの通路

日かけもいそくさやの中山。ことに宜聞え侍るを。吹風

のめにみぬ方。猶珍や侍らんと申人々侍りて。勝と被

レ定。

四十七番

左持

信定

折しけはかつ散る山のなら柴のなれぬ夕をふく嵐かな

右

康光

冬の空くるとはいそけ道芝のむすふ枕はいつくなりとも

なら柴のかれぬ夕。いひしりて優に侍れと。道芝に結ふ
枕も無レ難由申て。爲レ持。

四十八番

左勝

兵衛内侍

とひわふるけふりの末もはてそなき雪けの山の奥の夕くれ

右

忠信卿

草枕しのの衣の夕しくれいかなる色をわきて染むらん

けふりの末もはてそなき。優に宜由各申て。爲レ勝。

四十九番

左勝

御製

冬草のかれにしあとはかひもなし人の心のなき夜の霜

右

家隆卿

待人の庭の木のほも衣手もかれて朽ゆく夜なくの霜

右衣手庭の木葉。かれたるものはおほくみえ侍れと。左

冬草はかりにて。人のこゝろと侍る。おなし霜も深き色

ことにみえ侍れは。一同に申ニ左勝之由。

五十番

左持

通光卿

消わふる霜の衣をかへしても見るよまれなる夢の通ち

右

俊成卿女

忘れしの契は夢のかたみに涙のこぼる袖の月かけ

兩首ともに優に侍由。各申。可レ爲レ持。

五十一番

左

實氏卿

月も猶つれなき人のかけとめよ冬もこほらぬ袖の泪に

右勝

範宗朝臣

つらかりし人の心やかよふらん月もよかるゝ霜の冬草

左もすかた優に侍るを。右月もよかるゝ霜の冬草。猶深くおもひ入たりとて。爲_レ勝。

五十二番

左

定家卿

雪もよの鐘の音こそつれなけれとはるはかりの契やはまつ

右勝

高倉

なかし夜に衣かたしき臥わひぬまるとるむほとゝの泪ならねは鐘の音こそつれなけれ。むけにたゝ事にてこそ侍るめれ。雪もよも。きゝよからすや侍らん。右詞甚美麗にて。

凡又不可_レ停滯。尤可_レ勝由定申侍き。

五十三番

左勝

忠定朝臣

かたしきの袖ゆく水のうす氷思ひくたけていく夜ねぬらん

右

知家朝臣

中々にこぬ夜ふけ行櫓の戸をとほてもする時雨なりせはこぬ夜更行も。心あるやうには侍るを。袖ゆく水の氷くたけたる心。殊宜とて。爲_レ勝。

五十四番

左勝

雅經朝臣

涙せく袖の氷をかさねても夜半の契は結ひかねつゝ

右

右大臣

またしらぬ道の冬草ふみからしまつらん里にさよや更ぬる右も優に侍るを。左の袖の氷をかさねても夜半の契むすひかれたる心。猶すくれ侍由各申て。爲_レ勝。

五十五番

左

信實

右勝

康光

今更に人の心もたのまれすまたてやねなん寒き霜夜を

左吳竹のことなるふし侍らす。右優なるよし侍れは。勝と定申。

五十六番

左勝

兵衛内侍

右

忠信卿

なみた川袖ゆく水のこほるよりうきねの床の夢は結はすたつぬへき道たにつらき山鳥の尾上の霜にふしやわつらふ右の歌。ことなる難ならねと。左の詞姿ありかたくおかしくみえ侍れは。満座申_ニ可_レ勝之由_一。

延慶三年十一月二日書之。

判

右建保五年十一月四日歌合以古寫二本按合

歌合建保七年二月十一日當座卒爾

題

春風 春雨 春月 春雪 春野
春山 春水 春里 春戀 春祝

作者

御製 左 近權中將藤原朝臣爲家

右 近權少將藤原朝臣伊平

右

宮内少輔藤原光經 大膳亮藤原範綱

左衛門權少尉藤原康光

講師

讀者

判者

一番 春風

左勝

女房順徳院

やたの野の雪まの草の朝みとりなひかぬ色に春風そ吹

右

光經

朝日さす山の白雪消そめて霞にゆるき春の風かな

二番

左持

爲家朝臣

花の香をおのか匂に先立ていく木の梅を風さそふらん

右

(康光)

大かたはしるへともなき谷風にさそはれ出る鶯のこゑ
三番

左

伊平朝臣

青柳の糸もとをゝの春風にひとりみたれぬ朝霞哉

右勝

範綱

霞つゝ吹としもなき春風におのれこほれて匂ふ梅かえ

四番

春雨

左勝

女房

池水の汀の柳露ちりて浪にしくるゝ春のむら雨

右

光經

かきくらし木の目春雨ふる時はみとりにぬるゝ山の色かな

五番

左

爲家朝臣

をしなへて四方の木のもも春雨にまつあらはるゝ青柳の糸

右勝

康光

春雨にぬれてをおりん人しれす待し櫻の花の下陰

六番

左勝

伊平朝臣

山陰やつれなく残るあは雪も跡たえはつる春雨そふる

右

範綱

深山への木のもも今は春雨にぬれつゝもゆる野への若草

七番

春月

左持

女房

春はなを霞にけりな久堅の月のかつらも色かはるまで

右

光經

尋きてみる人やなき花咲ぬ朽木の柚の春の夜の月

八番

左持

爲家朝臣

松風も霞にむせふ高根よりほのかに出る春の夜の月

右

康光

香をとめておらはやおらむふかき夜の霞る月に匂ふ梅か枝

九番

左持

伊平朝臣

志賀のあまの鹽やく煙消ぬれと春はおほろの浪の上の月

右

範綱

武藏野やなかむる末の山のはに麓かすめる春の月影

十番

左持

女房

春日野の若菜もしろくふる雪に春の衣のぬれぬ日はなし

右

光經

雪降はみ山や寒きしからきの外山にいつる鶯のこゑ

十一番

左持

爲家朝臣

春日野やけふさへ雪もふりはへて袖白妙に若菜つむらし

右

康光

咲そむる花かとそ見るかたをかの小松か原にふれるあは雪

十二番

左持

伊平朝臣

百千鳥こゑは春めく空なからそれかと残る谷のうす雪

右

範綱

若菜つむ我ころも手も白妙の雪をまかへて打はらひつゝ

十三番

春野

左持

女房

誰しかも野へに心のあくかれてそこともいはぬ花を見る覽

右

光經

あさなぐきゝす鳴なりむさし野の霞のうちに妻やこもれる

十四番

左持

爲家朝臣

末とをき野たのすくろに立雁の行衛もかすむ春の空かな

右

康光

草枕またやむすはん春の日のかすみてくらす武藏のゝ原

十五番

左持

伊平朝臣

をく霜のいく重か下にかはてし野へも縁に春はきにけり

右

範綱

いつしかともえ出ぬらし春日野の飛火ののへの春の若草

十六番

左持

女房

白雲や花よりうへにかゝるらむ櫻そたかきかつらきの山

右

範綱

花なれや遠かた霞む山のほに月もへたてぬ春の白雲

十七番

左持

爲家朝臣

時わかぬ雪間もかすむ富士の山煙や春の色にみゆらん

右持

光經

吉野山さのみは花もなかりけり人たのめなる峯の白雲

十八番

左持

伊平朝臣

三よし野の山の白雲ふみ分て花になれぬる春そへにける

右勝

康 光

櫻さく春の山人やまにても花に心やあくかれぬらむ

十九番

春水

左勝

女 房

春の田の苗代水にせきかけて谷の小河は雪なかるなり

右

範 綱

谷川の岩間の氷かつとけて下行水のかけそうつるふ

二十番

左勝

爲家朝臣

さま／＼に小田の苗代いそくらし行方しけき山河の水

右

光 經

すみよしのあさゝはをのゝ忘水たえ／＼ならぬ春雨のころ

二十一番

左

伊平朝臣

春風に昔間の氷とけはてゝ野澤の水にかはつ鳴なり

右勝

康 光

やちとせをすむへき御代の始とていはひそそむる春の若水

二十二番

春里

左勝

女 房

山ふきの花のしからみかひもなしとまらぬ春のゐての里人

右

範 綱

いたつらに雪とそ花はふる里の吉野の山の春の梅かえ

二十三番

左勝

爲家朝臣

春きても雪けの雲のさむければ煙たゆまぬ大原のさと

もしほ焼けふりと人やなかむらん霞棚ひくあしのやの里

右

光 經

二十四番

左持

伊平朝臣

此頃はしほ焼あまもいとまあれや芦屋の里の春の日くらし

右

康 光

見わたせはあさけの煙打なひき霞めるかたや深草の里

二十五番

春戀

左勝

女 房

いふき山もゆる思のけふりをも霞めるころはしる人もなし

右

範 綱

夕されは軒端の梅の移香にぬしさたまらす打なかめつゝ

二十六番

左勝

爲家朝臣

はかなしや春の幾夜をまゝとて夢より外に猶たのみつゝ

右

光 經

春の目のなかき契りやすかのねの枯にし色に消るあは雪

二十七番

左勝

伊平朝臣

きえぬともしらしな人は谷ふかみ下行水の春のあは雪

右

康 光

をしなへてかすめる比のしほかまはいつれ思の煙なるらん

二十八番

春祝

左勝

女 房

神風やあまてるかけの春の日になかき契を猶むすふらし

右

範 綱

長き日の千とせのかすと今年より春くはゝれる君か御代哉
二十九番

左持

爲家朝臣

雲そなき春の朝日もさしはへて三笠の山のかけそのとき

右

光經

君そ見む常磐堅磐の色なから松と竹との萬代の春
三十番

左持

伊平朝臣

色かへぬときはの松の陰よりも君か千とせの春にあふころ

右

康光

幾度か折てかさゝむかきりなき雲井の松の春の初花

右建保七年二月十一日歌合以古寫一本校合

歌合建保七年二月十二日當座

題

深山春

夕歸鴈

水郷秋

朝野鹿

被知戀

曉更戀

作者

左

御製

右近衛權少將藤原朝臣伊平

左近衛權中將藤原朝臣爲家
兵衛内侍

右

中宮亮藤原朝臣範宗

宮内少輔藤原光經

左衛門少尉藤原康光

大膳亮藤原範綱

講師

讀師

判者

一番 深山春

左勝

女房

奥山の岩根の櫻いたつらに人もおしまぬ花やちるらん

右

範宗朝臣

白雲のたつきもしらぬ山櫻いつれの代よりまかひそめけん

二番

左勝

爲家朝臣

降つみし松の白雲猶きえて深山は春の色そつれなき

右

康光

春やときまた雪ふかき奥山の檜原にかすむ明かたの空
三番

左勝

伊平朝臣

白雲の消にし日より吉野山すゝの下草春をしるらし

右

範綱

春きぬとあくかれ出る深山へは去年みし花そしほり成けり
四番

左持

兵衛内侍

深山へやいつより花の散ぬらんまかひし雲の色そみたるゝ

右

光經

春霞たちにし日より青柳のかつらき山そみらく少き
五番

左持

女房

夕まくれ空もみとりに行雲のたえまにみゆる春のかり金

右

範宗朝臣

夕かすみわたるつはさの色までもみとりに歸る春の鴈かね
六番

左勝

爲家朝臣

歸るさのかりの羽風もうつもれぬ霞む末野の夕暮の空

右

康光

山たかみゆふぬる雲にかすみつゝ歸やかりの聲そすくなき
七番

左勝

伊平朝臣

山人も家路をいそぐ夕暮に尾上の雲をかへるかり金

右

範綱

遠さかる數さへ霞む春の日の夕ゐる雲にかへる鴈かね

八番
おほよとの松にもつらき夕へ哉見るめをよそに歸るかり金

右勝

光經

夕暮にいつくをさして歸る鴈霞のうへを遠さかるらん
九番

左勝

女房

山河の岩行浪のわきかへりしはしはよとむ秋のもみちは
風

風の音に宇治のはし姫分て猶秋やま袖に浪も立らん
十番

左

爲家朝臣

くるゝより月やとるへき氣色かな池のうき草秋風そふく
水

右

康光

水の音の行瀬もみえぬ秋きりにたえゝおとす宇治のはし姫
十一番

左持

伊平朝臣

朝日山みねの紅葉の色みえて浪も秋なるうちの里かな
立田

右

範綱

立田川木の葉なかるゝたえゝに浪には月の影そ色そふ
十二番

左

兵衛内侍

龍田河秋行水はよとまねと散らぬかけせく風のしからみ
秋霧

右勝

光經

秋霧のふかき夕にせり河の千世のふる道誰たとらん
十三番

朝野鹿

左持

女房

色かはる野路の萩原あさな／＼露分なるゝさをしかのこゑ

右

範宗朝臣

朝露に置もとまらてさをしかのいる野の薄秋風そふく

十四番

左持

爲家朝臣

秋萩の咲ちるをのゝ朝露にぬれてや鹿の妻をこふらん

右

康光

さをしかの涙ももろき朝露に妻こひわたるをのゝ篠原

十五番

左

伊平朝臣

朝露のおくのゝをのゝ小萩原かくろひて鳴さをしかのこゑ

右持

範綱

宮城野やしからむ萩の朝露に涙もぬれて鹿そ鳴なる

十六番

左

兵衛内侍

旅人のいる野の袖のあさ露による鳴鹿の涙をやをく

右持

光經

朝霧のふかき野原にたつ鹿のをのれとぬれて鳴ぬ日はなし

十七番

被知戀

左

女房

しられてもかひなくさの浦にほすみるめのよその袖にかけつゝ

右持

範宗朝臣

をのつから夢にみえけん面影をそれとはかりは今やしるらん

十八番

左持

爲家朝臣

いかにせんさのゝ中川中々に流てしたに思ひたえなて

右

康光

すくもたくむろのやしまの夕煙むせふ心を人にしらせよ

十九番

左持

伊平朝臣

思ひかねけふこそ人にしらすけのまのゝ萩原色にいてつゝ

右

範綱

いひそめし言の葉よりそ人もうき只われからの思ひ成けり

二十番

左持

兵衛内侍

せきあへぬ涙もさらぬ枕よりまたしる袖になをやかこたん

右

光經

たちにける我下もえの夕煙心にけたぬ時のまそなき

二十一番

左持

女房

思ふともしらてや人のなかむらん我のみぬるゝ有明の月

右

範宗朝臣

曉のね覺の袖のほとはかりうさもつらさも思ふものかは

二十二番

左持

爲家朝臣

曉は猶うしとてもいかゝせん逢みぬさきの別ならねは

右

康光

物おもふね覺の床にうちそへて猶うらめしき曉のそら

二十三番

左持

伊平朝臣

袖のうへにぬるゝかほなる影もうし別しまゝの有明の月

右

範綱

をのつからぬる夜明行鐘の音にむすひもはてぬ夢の面影

左

兵衛内侍

身にそへるうき面影の別よりこれをかたみの有明の月

右勝

光經

有明の月をその夜の形見にてなくさむほととの契たになし

右一帖。以ニ寫本ニ委加ニ一校ニ畢。

應永二十七年卯月日

前上總介

右建保七年二月十二日歌合以二本校合

群書類從卷第百九十八

和歌部五十三歌合十九

石清水若宮歌合寬喜四年三月廿五日

題

河上霞

暮山花

社述懷

作者

左方

正二位行權中納言藤原朝臣定家

正三位行權中納言藤原朝臣家光

參議正三位行右兵衛督兼伊豫守藤原朝臣爲家

正三位藤原朝臣家隆

正三位藤原朝臣知家

從三位藤原朝臣範宗

散位正四位下藤原朝臣行能

從四位上行右近衛權少將藤原朝臣伊成

從四位下行右近衛權少將兼因幡守藤原朝臣親氏

從四位下行右近衛權少將藤原朝臣賴氏

散位從四位下藤原朝臣顯氏

正五位下行治部權少輔兼春宮權大進藤原朝臣經光

正五位下中務權大輔藤原朝臣爲繼

右方

皇太后宮大夫俊成卿女

從四位下行權右中辨藤原朝臣光俊

正三位行兵部卿藤原朝臣成實

女房下野

前權大僧都法印大和尚位幸清

正四位下行左京權大夫藤原朝臣信實

法印大和尚位覺寬

日吉禰宜從四位上行大藏少輔祝部宿禰成茂

女房少將

前但馬守從四位上源朝臣家長

從四位下行右馬權頭源朝臣有長

法印大和尚位繼清

沙彌明教

女房但馬

太田祝賀茂縣主季保

法眼和尚位信忠

沙彌寂身

講師

中務權大輔爲繼

讀師

正三位知家

判者

權中納言定家

一番 河上霞

左

わたりする河瀬の霞立なれて藤なみかさす雲の上人

右勝

俊成卿女

橋姫の袖の朝霜なをさえてかすみ吹こすうちの河風

左歌。老老之狂言也。往年久積舞人之度數たらん。勅

使之行粧。時代雖隔。景氣未忘。依纔覺悟。愁以詠吟。

橋姫之袖霜尤妖艶之躰也。可爲勝。

二番

左持

河船のゆきゝの跡も白浪の音さへかすむ春のあけほの

右

權中納言定光

あすか河よとまぬ水も霞つゝ心有とやはるは見ゆらむ

左右ともに無殊難。可爲持歟。

三番

左持

右兵衛督爲家

新拾
行かへりみつのかは長さす棹のみなれし跡もかすむ春かな

右

兵部卿成實

立わたる霞の衣春きても浪風さむきよとの川長

兩首の河長おなしさまに侍れは。又持とす。

四番

左

正三位家隆

わたり船それともみえす朝ほらけみつ野をかけてかすむ河浪

右勝

女房下野

朝日影さすや霞の立田川かは水くゝるはるのくれなる

左よとのわたりの朝ほらけ。おもかけおかしくおもひ

やられ侍るへし。右曙後霞光を立田川の水くゝるよし。

風情よろしく侍れは。勝とす。

五番

左持

正三位知家

明わたる川瀬の浪に立煙やかてもふかくかすむ空かな

右

前權大僧都幸清

春霞うきてなかるゝ柴舟の跡さへみえぬ宇治の河浪

明わたる河浪けふりたてる心。歌によみならへること

には侍らねと。誠にみゆることなれば。おかしく聞なさ

れ侍るへし。柴舟の跡さへ見えぬも。所につけてははか

なけるものから。むかし今かはらぬ事のきまも。ゆへ

有ていうに聞え侍れは。可爲持歟。

六番

左

從三位範宗

春くれは霞の衣立田川あらへとぬれぬ浪そかけゝる

右勝

信 實

したさはく高瀬の川の浪間より霞むや袖のみなと成らん
兩首ともによろし。右は下句聊可_レ勝歟。

七番

左持

行能朝臣

あすか川行瀬の浪に春たちて昨日もけふもかすむふるさと
右 法印覺寛

春の色はそれともみえす立田河霞をくゝる瀬々の岩なみ
あすか河。たつた川ゆく瀬の浪。せゝの岩波。たちまさ
るけちめ。わかれすや侍らむ。

八番

左勝

伊成朝臣

かすむ日は消こそ渡れ谷川の氷し水の浪のはつはな
右 成茂宿禰

水上や岸の柳のふかみとり霞のみをのしるし成けり
右の歌みなかみ岸なといへるに。河の心は侍らめと。題
の字の中。山川田野のたくひは。かならず其字を歌の表
によみすゆへしと。昔ならひて侍れは。歌のさまも。い
うなるうへ。川字侍らねは。以_レ左かちとす。

九番

左持

親氏朝臣

秋よりも花のにしきの立田川霞わたれとなかそ絶せぬ
右 女房少將

春といへはかすみにけりな絶す行あすかの河の末みえぬ迄
左は風情を先として。詞少しくるしく。右は古き事をや
すらかにいひなかされて侍るに。姿はかはりなからお

なし程にや侍らむ。

十番

左

頼氏朝臣

朝またき霞のみをも白浪の瀧田の川をわたるかち人
右勝 家長朝臣

とをつ河をちかた人やまよふらん霞の間より袖そちかつく
霞のみをも白浪のことはいうに聞え侍れと。遠つ河の
遠かた人。姿非_二凡俗之跡_一。有_二拔群之氣_一。爲_レ勝。

十一番

左

顯氏朝臣

高せ船ゆきゝはみえす霞めとも聲はへたてぬ淀の川長
右勝 有長朝臣

さはた川霞の袖はそれなから下にふかめて春そ暮行
左させる難なく。又ことなる事なし。右本歌の心をおも
ひて。下にふかめてなといへる詞。よろしく聞え侍れは。
爲_レ勝。

十二番

左持

經 光

高せさす淀のわたりは道絶てまた夜深きに立霞かな
右 法印耀清

我身よにたつせそしらぬ飛鳥川霞は深き淵となれとも
右たつ瀬そしらぬ。述懷其ゆへ侍らめと。ふかく心得わ
かれ侍らねは。勝負又分明に申わき難し。

十三番

左勝

爲 繼

吉野川すくる岩なみ高けれとかすめる比は下くゝる也

右

あぢきなくイ

沙彌明教

あきなく浮て霞の思川なを晴やらて有世なりけり
右うきて霞の思ひ川。つゝへき詞とも覺侍らす。左こ
となる事なけれど。無_レ其失。爲_レ勝。

十四番

左勝

隆 祐

心あてにむかひの里やなかむらん霞をわたる淀の川船

右

女房但馬

ものゝふのやそうち川や霞む覽行ゑもみえすせゝの網代木
左おもかけ有てよろしく聞え侍るへし。右もさせるな
んは侍らねと。ひたりなをまさるへき歟。

十五番

左勝

源 家 清

遠近のゆきゝも遠くなるまゝに霞わかるゝよとの川船

右

賀茂季保

山風や霞ふきなかせ吉野川しらゆふ花の色そくもれる
左無_レ其難。右霞ふきなかせ。いひしれる詞にあらず。色
そくもれるも讀ならへる詞にあらず。初五文字のやの

字。たかひて聞ゆ。やの字なつかふことは。大原やを
しほの山。春やとき花や遅きと。此ふたつの詞に用ひ侍
る。吹なかせといはん上の句にはやの字如何。所謂不
知_レ歌趣_二者歟。以_レ左爲_レ勝。

十六番

左持

法印昭清

吉野川はやくも春やなかるらん音さへかすむせゝの岩浪

右

法眼信忠

きよくすむ水の心やみわ河の波も霞の衣たつらん

春や流るらむといふ詞。和漢きくとも覺侍らす。としを

はなかと詠し來る。但可_レ依_レ證歌。定忘却歟。水の心

きよくすまんによりて。浪の霞のころもたゝむも。惣不
得_レ心。不審。持たるへし。

十七番

左

大神式賢

をしなへて霞の衣たつた川春の色とや浪もをるらん

右勝

沙彌寂身

音羽川せきいれし人の心まてかすめは見えぬはるの曙
左歌。無_レ其難。右歌。於_二權中納言小野山庄伊勢所_一詠之

心歟。依_レ聽_二此道可_レ賞_二其源。昔能因下_レ車忽拜_二路頭
之結松。今微臣染_レ筆爭輕_二瀧瀬之餘流。仍爲_レ勝。

十八番

暮山花

左

定 家

たのみこしみ山の櫻けふやみる我身夕の春のひかりを
右勝

俊成卿女

月影もうつろふ花にかはる色の夕を春もみよし野の山

左歌。久仰_二宗廟之冥鑒。適浴_二聖朝之天恩。雖_レ恥_二老耄
之至極。猶喜_二信心之不_レ空。纔述_二其志。更非_二宜詞。右歌
可_レ謂_二妖艷之姿。足_二于握翫。爲_レ勝。

十九番

左

家 光

尋ても花の山邊はあかなくにいる日をかへす道をしらはや
右勝

光 俊

くれぬとて雲に一よの宿とへは花こそあるしみよしの山

左。惜_ニ虞淵之影。思_ニ魯陽之蹤。風情有_ニ其興。但右歌。姿詞殊得_ニ其骨。叶_ニ雅頌之躰。仍猶勝にきたむ。

二十番

左

爲家

まてしはし花下かけの夕つくひうつろふ雲にくるゝ山かせ

右勝

成實

櫻色の雲のはたての山風に花の錦のぬきやみたれむ

櫻色の雲のはたて。花の錦のぬき。詞の美色をかりてみところ多く侍れは。以_レ右かちとす。

二十一番

左勝

家隆

山のはも夕日のとけき白雲のにほふは春の花さかりかも

右

下野

けふも又とよらの鐘の入相に花にやとふかつらきの山

右の歌かつらきの寺鐘の聲。をしはかられ侍れと。左にほふは春の花さかりかも。高振_ニ神妙思_ニとは。此姿にや侍らむ。尤可_レ爲_レ勝。

二十二番

左勝

知家

なかしとは花まつ程や山櫻日をすかのねにくらしわひけむ

右

幸清

三吉野の里もとはゝや山さくら夕ある雲に色そうつろふ

右歌も。おもかけおかしく聞え侍れと。日をすかのねにくらしわひけむ。ことよろしく侍れは。爲_レ勝。

二十三番

左勝

範宗

山人の峯の櫻をおりそへてかへるかさしもにほふはる風

右

信實

ななき日そさかりは見ゆる山櫻夕ある迄の雲にまかへて山人のかへるかさし。始をはり叶ひてきこえる侍るにや。夕ある迄の雲にまかへても。おかしく聞え侍るを。盛はみゆる。あしかるへき詞にはあらねと。猶以_レ左爲_レ勝。

二十四番

左勝

行能

あすもこむ風しつかなる三吉野の山の櫻はけふくれぬとも

右

覺寛

櫻かり山路もくれぬさらすとてやとらさるへき花の陰かは風しつかなるみよし野のとをきて。山の櫻はけふくれぬともと侍る。殊催_ニ感歎之思_ニ。やとらさるへき花の陰も。おもふ所いうに侍れと。左得_ニ秀歌之躰。爲_レ勝。

二十五番

左

伊成

待人にははれぬ山の櫻花あたるなにや日をくらすらん

右勝

成茂

夕月夜ほのかにかゝる山のはのあかても花にやとりぬる哉

左としにまれなる人も待けりといふ歌の心には侍れと。

下の句。少しいひおほせられぬ所や侍らん。右心きゝわかれて侍れは。爲_レ勝。

二十六番

左持

親氏

櫻かりなを行山の遠けれはくるとも花にやはきためし

右

少將

尋みる花もなこりやしたふらんくるゝもしらす匂ふ山風
左右させる難なく侍れは。爲レ持。

左勝

頼氏

音羽山夕ゐる雲を吹風にさく程見ゆる花さくらかな

右

家長

いたつらに匂ふもつらし心なきいはきの山の花の夕はへ
左さくほと見ゆる。ことに宜しく聞れは。音羽山夕ゐる
雲。心なき岩木の山には。勝侍るへし。

二十八番

左

顯氏

いさやさは花咲山にやとしまして夕いそかむかたとくらさん
有勝

有長

吉野山暮なはなけの花はあれといつらは春のなかしてふ日は

左初五字。さまで難にては侍らねと。こひねかはれぬ詞
にや侍らむ。右くれなはなけの花はあれと。よろしく聞
え侍れは。爲レ勝。

二十九番

左勝

經光

此里は櫻そちかきみなせ山ほとはむかひの夕暮の空

右

耀清

越やらぬ心そしるき夕くれのまかきの山の花の下かけ

右心あるさまにおかしくは聞え侍るを。夕くれのまか
きの山本。歌の心ならはまことの山にあらす侍らむ。以
レ左爲レ勝。

三十番

左持

爲繼

山櫻たゝけふのまの風にたに夕や花のさかりすくらむ

右

明教

暮ぬとて花にもかへるともは有とよしみむ人は三吉野の山
けふの間の夕の風情よみたると。ほむる人も侍らん。あ
したの夕のほと。いたくはしくや。友有と。宜しき匂
には侍らねと。持にて侍なむ。

三十一番

左持

たかすけ

初瀬山夕日のちかくなるまゝに峯より花の色そうつろふ

右

但馬

なかめやる雲のはたても匂ふらんたかまの峯のはなの盛は
初瀬山の夕日。たかまの峯の雲。うつろひにほへる心。
いつれと申かたし。爲レ持。

三十二番

左持

家清

山陰のたそかれ時の花の色はおるまてなから雲とみえつゝ

右

季保

塵つもる櫻にうつむ山の井のあかてもくるゝ花の色かな
山かけのたそかれとき。山のゐのあかてくれぬる心。お
なしはなの色。又わきまへかたし。

三十三番

左勝

昭清

しはしとてたつこの本と思へとも花にくらしつしかの山越

右

信忠

よそにたつ高間の雲の色までも櫻になりぬ夕くれの空

たかまの雲。ことたらす。夕くれの空。平懷なり。しかの
山こえ勝侍るへし。

三十四番

左勝

式 賢

故郷はさもくれかたき春の日の花にすくなきみよしのゝ山

右

寂 身

櫻さく春にしなれは山のはに夕をそめぬ雲そかゝれる

さも暮かたき春の日の花にすくなきといへる。いとよ
ろしく聞ゆ。右も詞いうに侍るを。色の字なくてそむと
いへるいかゝ。以て左爲勝。

三十五番

左

社述懷

定 家

なかきよといたゝく雪も有ふれはあふく誓の惠なりけり

右勝

俊成卿女

たのみこし心にもすめ石清水むかしの袖の影やとすまで

以て右爲勝。

三十六番

左勝

家 光

なかきよをかねてそいのる石清水やとれる月のもとの光に

右

みつとし

男山さかゆく時のいかならむたゝよをわたる道そくるしき

左いはし水やとれる月のもとの光にと侍る。詞のつゝ
き。宜しくいひなかされて侍れは。爲勝。

三十七番

左持

爲 家

思ひやる契もふかし石清水みとせの花を外にかさゝて

あはれ我君にまかせてみつかきの久しく物を思はずもかな
兩首無き指勝劣一敷。

三十八番

左持

成さね

數ならてわか身はふりぬ男山老せぬみやも哀かけなん

右

家 隆

ひよしのや光をやとす石清水心をわけてたのみそめてき

老せぬ宮兩社和光。又難辨申。

三十九番

左

知 家

祈りこししるしあらはせ男山いはにも松のおふるためにしに

右勝

幸 清

たのみこしよのことはりは石清水神と君とに任せてそまつ

男山の岩にも松。よりとて有て宜しく侍るへし。右こ
とはりきはまりて聞え侍れは。猶爲勝。

四十番

左持

範 宗

神垣や照すひかりにたつちりのちかひもあたに頼やはする

右

のふさね

男山ゆくてふおいの櫛葉のかけたのまるゝ道をしらはや

兩首。又、ことに申わくへき所もなし。持とす。

四十一番

左

行 能

いたつらにかけし思ひそ朽ぬへき願ひをみつの杜のしめ繩

右勝

覺 寬

思ひやる契もふかし石清水みとせの花を外にかさゝて

たまくしの光をやとす石清水にこらぬ人の心くむなり
左詞姿うには侍れと。右たまくしの光をやとすい
し水。勝へき歌のさまにや侍らん。

四十二番

左持

伊成

いはし水おなし流に年を経ていのるおもひの末をしらはや

右

成茂

ゆふたすきたのみをかくる陰なれはなれぬ榊の色もなつかし

左右無差勝劣。

四十三番

左勝

親氏

君か代を祈れは神もなひくらむけふゆふしてにかくる心を

右

少將

みをうしとおもひも捨し神垣や祈るしるへの道はへたてす

左うたもさも爲勝。

四十四番

左

よりうち

後の世のやみをもてらせ八幡山神のふもその有明の月

右勝

家長

新後拾
やはた山神やきりけむ鳩の杖おいてさかくく道のためとて

左のうたも。いうには侍るへし。右のうた神やきりけん

は。ふるきことはなやはた山に寄て。鳩の杖ことにつよ

く聞え侍れは。勝と可申や。

四十五番

左持

あきうち

むかしよりきよき流の石清水にこらぬ御代をいかに守らん

右
君すめは濁らぬみよに石清水わかみくつたに沈ますもかな
いはし水にこらぬ御代。無其優劣二歟。

四十六番

左

つねみつ

やはた山猶神かきに祈みんおしかるへくもあらぬ身なれと

右勝

幸清

おとこ山春のめくみにもらすなよまつは久しき心なれとも

なを神垣に祈みんとをきて。下の句の心少し不_ニ相應_一

やはへらん。人子之禮。聽_ニ於無_レ聲。視_ニ於無_レ形。不_レ登_レ高。不_レ臨_レ深。尤惜まるへくや侍らん。右其理可_レ然。爲_レ勝。

勝。

四十七番

左持

ためつく

かさしこし花のかたみの岩清水ふりぬる春を哀とも見よ

右

明教

いつまてか世を慕ひけん男山あはれをかけよ苔のたもとに

かさしこし花のかたみ。いとひつる苔の袂。ともにいう

に聞え侍れは。爲持。

四十八番

左持

たかすけ

けふまてはつれなく過ぬ男山さか行時もしらぬものゆへ

右

但馬

いはし水すみにこれるをわきて思ふ神の誓のはつかしのみや

此つかひ。又ことなる得失見え侍らねは。爲_レ持。

四十九番

左勝

家 清

さりとちかひをたのむみや柱こと人よりも契くちめや

右

季 保

神は只人の心をいはし水すむも濁もあはれとや見る

神は只。非_ニ宜詞。人の心をいはしみつ。つゝきても聞え
す。以_レ左爲_レ勝。

五十番

左勝

昭 清

わか頼む神々ならはゆふたすき心にかくるしあらはせ

右

信 忠

すてぬ世をかりの姿の男山あふけはもとの君もみえけり

あふけはもとのきみとは。なにのみえけるにか。惣不
得_ニ其心。以_レ左爲_レ勝。

五十一番

左勝

式 賢

男山まつとせしまにふりにけりひとり老木の色もかはらて

右

寂 身

わかたのむ神のみ前の櫛葉にかけてそいのるしけき歎を

有歌無_ニ其難。たゝし櫛によせて。しけきなけきなど。め
つらしき事にはあらず。ひとり老木の色もかはらて。こ
とによろしく聞え侍れは。爲_レ勝。

光明峯寺攝政家歌合貞永元年七月

題

寄衣戀

寄鏡戀

寄弓戀

寄玉戀

寄枕戀

寄帶戀

寄糸戀

寄筵戀

寄船戀

寄網戀

作者

左方

權大納言基家

春宮權大夫良實

(光明峯寺攝政左大臣)

右衛門督爲家

前宮内卿家隆

兵部卿成實

資季朝臣

家長朝臣

賴氏朝臣

親季朝臣

知宗

中宮少將

判者

權中納言定家

一番

寄衣戀

左持

紅のこそめの衣たちそめて心の色をしらせつるかな

右

民部卿典侍

權大納言基家

右方

民部卿典侍

權中納言定家

信實朝臣

忠俊(爲院攝政左大臣)

隆祐

源家清

下野

中宮但馬

行能朝臣

兼康

正三位知家

經古

山姫のそめぬ衣もくれなるの色にいてゝや今はこひまし
左右各可レ申ニ所存ニ之由被レ仰。兩方共無難之由申。紅衣
之色大概同心歟。淺深難レ分之旨各申。

二番

左勝

戀衣若紫のいろに出て亂れそまさるしのふもち摺

右

春宮權大夫良實
權中納言定家

秋草の露分衣おきもせずねもせぬ袖はほすひまもなし

各又ニ難申。本歌夏草。推而詠ニ秋艸。無レ謂之由申レ之。

于時秋也。隨ニ時節ニ有ニ其興ニ之由被ニ宥仰。左尤若紫背ニ
故詞ニ衣摺也。尤可レ爲レ勝之由定申。

三番

左勝

右衛門督爲家

しら露の篠分わひし麻衣またうきふしの袖はかはかす

右

信實朝臣

すまの海士の鹽たれ衣くちねたゝほさぬ例のなさへ恨めし

兩方共不レ出ニ難詞。更有ニ感氣。家長朝臣申レ之。海人鹽

垂衣不レ乾之由。詞雖レ優心不レ珍。左麻衣之句。殊其興味
候歟。各同レ之。仍爲レ勝。

四番

左持

前宮内卿家隆

玉露
いかにして行てみたれむ陸奥の思ひ忍ふのころもへにけり

右

忠 俊

思ひしれむねにたくものした衣うへはつれなき煙なりとも

讀ニ上左歌ニ之間。ゆきてみたれんみちのくの。殊勝之由

滿座一同感歎。講師。右歌。胸にたくもの下衣うへはつ

れなき煙なりさも。妖艶珍重。左右共に可レ勝歌也。依相
合雖レ爲レ持。不レ可レ准レ常。持之由被レ定。

五番

左持

兵部卿成實

紅のはつしほいそく衣ての秋のなみたやしくれなるらん

右

隆 祐

から衣かさねぬよはの秋風はかへすにつけて夢をやはみる

左歌始終叶て。姿優也。右歌理きこえて。詞えんなり。又
可レ爲レ持之由定申。

六番

左

資季朝臣

續後撰
月草の花摺衣あたにのみ心の色のうつりゆくかな

右勝

源家清

から衣袖のなみたのはつ汐に思ひそめたる色をみせはや

左姿おかしく詞色ありて聞ゆるよし申侍しに。右又宜

しくつかまつれり。十首の初題に思ひそむるなといへ
るも。心侍るよし各申。爲レ勝。

七番

左持

家長朝臣

玉露
つゝみあまる袖の涙の泉川くちなんはては衣かせやま

右

行能朝臣

新後撰
衣かへすしるしの慰めもねられし迄の夢にそ有ける

左あまる涙の泉川くちなんはては衣かせ山。たくみに
思ひよれるよし申。右ねられしまでの夢にそ有ける。又
優なり。よて爲レ持。

八番

左

賴氏朝臣

をのつかからかへす衣の故ならて夢のたゝちにあひみつるかな

右勝

中宮但馬

物や思ふみのしろ衣うちしめり身をしる雨におとろかれつゝ

夢のたゝちにあひみむうへは。かへす衣のゆへ。其要な

くやと申人々侍りき。右又優に聞ゆ。仍爲勝。

九番

左

親季朝臣

あま人の浪かけ衣ほさてのみはては恨の名をや立なむ

右勝

下野

いかにせん忍ひくゝに袖ぬれて木かくれあへぬ蟬の羽衣

波かけ衣。させる難も侍らねと。又珍しき事にあらぬよ

し申。木かくれあへぬ蟬の羽衣。艶也とて。爲勝。

十番

左

知宗

我思ふかたには吹ぬ浦風にしほたれ衣いとゝぬれつゝ

右勝

兼康

遠さかる身はうつ蟬のなつ衣なれはまさらて秋風そ吹

左歌無下可難申旨。右歌なれはまさらて。殊勝なるよ

し定られて勝。

十一番

左

中宮少將

いかにせん衣かたしき今夜さへねられぬ床にねをのみをなく

右勝

正三位知家

新拾
からあるのやしほの衣ふかけれとあらぬ涙の色そまかはぬ

左いうにおかしきよし。各申。右のやしほのころもふか

けれとあらぬなみたのまかはさらなん。殊に宜しく聞

ゆとて。爲勝。

十二番

寄鏡戀

左

九條大納言

別れにし石井の水のます鏡あかぬかけさへなと濁るちむ

右勝

民部卿典侍

とゝめをきてさらぬ鏡の影にたに泪へたてゝえやはみえける

石井の水。跡あることのうへ。ことはり聞ゆるよし申侍

りき。涙へたてゝえやは見えける。めつらしきよし人々

申て。勝と定めらる。

十三番

左

春宮權大夫良實

あけて見ぬふたみの浦のます鏡あはぬ袂に浪やかくらん

右勝

京極中納言定家

新拾
行水の花のかゝみの影もうしあたる色のうつりやすさは

二見の浦のますかゝみ。姿詞殊によろしく侍るよし申

侍りしかとも。右歌下句輕忽卑賤に侍るを。依御氣色

爲勝。

十四番

左勝

右衛門督爲家

水草ある野守の鏡影たえてへたてし中はよそにたにみす

右

信實

うき旅の涙くもりてます鏡面影そはぬつらさをやみむ

右歌優に侍れと。うきたひの涙。すこしたしかにきこゆ

とて。左可勝之由被定。

十五番

左

家 隆

あきな／＼手にも取見すます鏡忘らるゝ身の影しうつれは

右勝

忠 俊

ちはやふる御室の鏡かけてなと戀しきかたを祈そめ劔

左の心。めつらしく興あるさまに侍れと。右始終けたかく及かたきさまに侍れは。爲レ勝。

十六番

左持

成 實

ます鏡見えはみつへき影たにもへたつる中を何したふらん

右

隆 祐

ます鏡くもらぬほととの涙にやかはるとたにも影はみえけん

おなしますかゝみ。歌のほとも無レ勝劣之由申。

十七番

左勝

資 季

てる月のますみの鏡くもらぬは我思ふ人の影はみえけり

右

家 清

鏡山影となる身の年をへて立よらはやはあはれともみん

てる月のますみの鏡。さら／＼しく聞ゆとて。勝へきよし申。右歌も思へる所は侍るへし。

十八番

左

家 長

ます鏡そこなる影をみてそ思ふしらぬ翁はさそいとふらん

右勝

行 能

續拾
ます鏡うつりし物をとばかりにとまらぬ影もかたみ成けり

左風情有ニ其興之由申人々侍りしかと。右艶にやさし

く聞ゆ。仍爲レ勝。

十九番

左勝

頼氏朝臣

なき戀る泪にくもれまゝ鏡忘らるゝには影をたにみす

右

中宮但馬

あた人の影もとまらぬます鏡なにをか今はかたみともみむ

左宜きよし被レ定て爲レ勝。右歌もいうに侍るへし。

廿番

左持

親季朝臣

ます鏡見ぬめの浦の名もしらすたか俤にかけて戀らん

右

下 野

うつりゆく人こそあらめます鏡我影さへに面かはりして

兩首難もなく。又ことなる事もなしとて。爲レ持。

二十一番

左勝

知 宗

さてもかくえこそかくては山鳥のはつおの鏡かけはなる共

右

兼 康

ます鏡うつれはかはるかたみかはわかみる影もあらずなり行

初尾の鏡。ちからみえ侍りしよし申人々侍りしかと。本歌ある事はさのみこそと宥られて。歌の優なるよし侍りて。爲レ勝。右のも歌其難聞え侍らす。

二十二番

左持

少 將

ます鏡わか身をしほる外に又なきてもいはむ俤そなき

右

正三位知家

かたみともあらはみつへき影をたにとめぬならひの増鏡かな

兩首無_ニ得失。可_レ爲_レ持之由定申。

廿三番 寄弓戀

左

大納言基家

契のみあたちのまゆみ色に出て今は時雨の末の秋かせ

右勝

民部卿典侍

新拾
人はいさあたちの眞弓をしかへし心の末もいかゝ頼まん

右方申云。左右おなしあたちの眞弓に侍れと。色に出て

時雨の染る心。檀の木に侍らは。弓の題には不_レ叶や侍

らむと。定家申云。安達のまゆみと。一句にをかるゝ上

は。弓なき難は侍るましくや。猶各申。はるともひくと

もつゝけてや。弓の心は侍らん。秋の色に染るはかりは。

いかゝ侍るへき。偏以_ニ時雨の染_レ葉之色_一難_レ用_ニ纖月之

當_レ心乃勢。是爲_ニ樹木之名_一。定違_ニ弓矢之疑_一殆_ニ者歟。

依_ニ此難_一。可_レ勝之由被_レ仰。

二十四番

左勝

春宮權大夫良實

みちのくのあたちのま弓末たはみいかなる方に猶なひく覽

右

京極中納言定家

狩人のひくや弓末のよるさへやたゆまぬ關のものにまとはん

あたちの眞弓すゑたはみ。歌のたけ及びひかたきよし申

て。以_レ左爲_レ勝。

廿五番

左勝

右衛門督爲家

玉璫
ひきとめよ有明の月の白ま弓かへるさいそく人の別路

右

信實朝臣

我かたによると契らぬ梓弓をしてはいかゝひとをたのまん

右歌無_ニ難申事。左有明の月のしらま弓。ひく人々侍りて。爲_レ勝。

二十六番

左

家隆

わか戀は吉野のおくの山人のさつかは眞弓ひけとよはらす

右勝

忠俊

たつか弓ひきのゝ草の葉末よりおきふし袖に露そこほるゝ

左詞たくみに。弓つよく聞え侍るよし申。右又ひきのゝ

草の葉すゑよりおきふし袖にと侍る。殊に宜しくはへ

るうへに。とつかは眞弓。つねによみならへる物にあら

す。耳とをきよし申人々侍りき。仍右勝。

二十七番

左

成實

梓弓おきふししけくまたれてもはてははかなく明るしのゝめ

右勝

隆祐

あつさ弓生田の川に身を捨てなをのみ惜む跡そはかなき

右歌無_ニ其難_一。いくたの川の弓。もとのこゝろおかしく

聞え侍りしかは。可_レ勝之由申。

二十八番

左勝

資季

つらさをは恨もはてす梓弓心よはくも猶こふるかな

右

源家清

人心あたちの眞弓頼ますよひくてあまたにかはる契は

昔よりよみならへる事なれと。人心といふ初の五文字。

今は好みよむましきよし被_ニ仰下_一。又弓にはひくてあま

たには理かなはず。左優なるよし。被_レ定_レ勝。

二十九番

左勝

家長朝臣

新後撰
つれなさのためしにひかは梓弓おもひよはらぬ心つよさを

右

行能朝臣

梓弓いるのゝ小篠むすひても世々の契のひくかたそなき

梓弓ひかん事は。理かなふへし。野へのをさゝむすへる
ほさ。その要なし。左の弓。つよく聞ゆ。可勝之由被定。

卅番

左

頼氏朝臣

猶たのめ梓の眞弓ひくにてもあらしよりこそしなひそむなれ

右勝

中宮但馬

思ひあれはとしのみとせの梓弓心よはさをよそにやはきく

しなひけむなと。艶ならず。としのみとせの梓弓。優に

おかしく侍るとて。爲勝。

三十一番

左

親季

ひき捨て手にたにとらぬ梓弓また我かたにかへりやはせん

右勝

下野

いさや又人のつらさも白ま弓ひくかたにこそ心よるらめ

左無難事。右宜之由申て。爲勝。

三十二番

左持

知宗

梓弓すゑ野の原の春の草かれぬ心の色をみせはや

右

兼康

色かはるあたちのま弓ひきかへし又はよりこん末も頼ます

雨首依無殊得失。爲持。

卅三番

左

中宮少將

思ふ事先ほに出て梓弓いるのゝ薄あき風そふく

右勝

正三位知家

さても又猶やうらみむ梓弓いてやと人を思ふものから

左優なるよし人々申。右いてやとの詞。おかしく侍るよ

し申て。爲勝。

三十四番

左持

權大納言基家

消かへり袖にくたくる泪ゆへ戀路にひるふ玉もはかなし

右

民部卿典侍

かひもなしとへとしら玉みたれつゝ答へ袖の露のかたみは

涙の玉。同心に侍れは。爲持。

三十五番

左持

春宮權大夫良實

黒髪のみたれてよはるねをそなく泪の玉のぬきもとゝめす

右

中納言定家

緒を絶しかさしの玉とみるはかり君にくたくる袖のしら露

左右とも。宜きの由各被申。仍爲持。

三十六番

左持

爲家

なけゝたゝみぬめの泪はては又よし玉のをもたえぬ計に

右

信實朝臣

白玉かなにそとまかふ袖もかなあまる涙のいろもしのはん

各無殊事之由申。爲持。

三十七番

左

前宮内卿家隆

いかゝせんぬしは誰とも白玉のとへと答へぬあたのかたみは

右勝

忠 俊

いせしまやおきつ白玉よそにのみなみたたくる袖の上哉

行能朝臣申。玉の題に。ぬしは誰ともといふ詞。可_レ有_二

思所_一哉。右又尤宜。爲_レ勝。

三十八番

左

兵部卿成實

しら玉かとはかりいひし行ふとて露をもあたに思ひやはする

右勝

隆 祐

人こゝろ世のうきよりもうきたひの袖にそひるふ瀧の白玉

左無_二殊得失_一。右世のうきよりもうきたひの袖にそひる

ふといへる。ことによるしく聞え侍しかは。人の心同前

にて侍しかとも。右可_レ勝にやはんへらむ。

三十九番

左

資季朝臣

戀わふる泪の玉にみつしほの袖しの浦はひるひまもなし

右勝

家 清

汐みては玉もひろはぬ袖のうら涙のかすを何にまかへん

右歌。優につかふまつれるよし申て。爲_レ勝。

四十番

左

家長朝臣

夜ひかる玉かと人をみてしより其倅にますかけそなき

右勝

行能朝臣

あはてふるあはをのすちにぬく玉の亂れてよはき泪なり鬼

よるひかる玉。めつらしき心に侍れさ。右艶におかしく

侍るのよし申。爲_レ勝。

四十一番

左

頼氏朝臣

人しれぬ秋の契のなかりせは玉のかさしはかへらさらまし

右勝

中宮但馬

あたたなつ心はかりは清けれと玉ならぬ身はけにそ悲しき

秋契十三年にと申侍りしは。驪山宮の七月七日の事に

やと申さるゝ人々侍るを。なかはをつみおりし玉のか

んさしは。かへる詞にかなはず侍らん。玉ならぬ身。

題にかなひて聞ゆ。仍爲_レ勝。

四十二番

左勝

親季朝臣

岩の上の瀧つしら玉いたつらに思ひくたけて戀やわたらん

右

下 野

いつまてか袖の瀧つせをろかなる泪の玉といひけたれけん

左右ともに優なるよし申侍て。爲_レ持。

四十三番

左

知 宗

玉のをのさしも短き末の世の一よはかりはあふかひもなし

右勝

兼 康

かつきせし浪の中にもしらさりき人をみぬめの袖の白玉

玉のをのさしも短き。不_レ可_レ然之由人々申上。右の歌よ

ろしくつかふまつれるよし被_レ定。爲_レ勝。

四十四番

左勝

少 將

いとゝ又なみたの露も落そひぬ玉のをなかく人をこふさて

右

はては又行別れつゝ玉のをのなき契は結はさりけり
玉の緒なかく。尤可_レ然之由各申。爲_レ勝。
四十五番 寄枕戀

左勝

大納言基家

せく袖のうらはのもしほかくとのみ枕の上を煙たえせぬ
典侍

右

涙もる枕や戀をしりぬらん定めかねてはうちもねぬ夜に
判詞落

判詞落

四十六番

左

春宮權大夫良實

時雨ゆく紅葉の下のかり枕あたる秋の色に戀つゝ
續拾

右勝

權中納言定家

忘るなよ三とせの後のにる枕きたむはかりの月日なりとも
續古

紅葉の下のかり枕。戀の心も色ふかくきこえ侍るを。優
なる所も侍らぬ新枕。依_ニ御氣色_一爲_レ勝。

四十七番

左勝

右衛門督爲家

新後撰
しきたへの床のみをなる泪川まくらなかれて見る夢もなし

右

信實朝臣

なをさりの枕はかりや残る覽いかにねし夜の夢のかたみに
右歌も。おかしく聞え侍るを。床のみをめつらしくや侍
るとて。爲_レ勝。

四十八番

左勝

前宮内卿家隆

よしさらはあふ瀬に見えよ名取川つけの枕のよゝの埋木
忠俊

右

歎わひきてふるほと思出にむすひもはてぬ夢の手枕
夢の手枕。妖艶之由各申。つけの枕のよゝの埋木。秀逸
之由依_レ仰。爲_レ勝。

四十九番

左持

兵部卿成實

さはかりにつもる泪をしきたへの枕そ戀のふちとなりぬる
隆祐

右

なにと又枕の塵をはらふらんこぬ夜のかすはつもる物から
枕そ戀の淵となりぬる。塵をはらふ數つもれる。ともに
宜之由申て。爲_レ持。

五十番

左持

資季朝臣

人しれすおつる涙の瀧まくら音にはたてす戀わたるかな
右

右

家清

うきながら獨やねなんわつつ海のあれゆく床の浪の枕に
涙の瀧枕。ことにおかしく聞え侍るを。うきながらひと
りやねなん。又捨かたきよし被_レ定。猶爲_レ持。

五十一番

左勝

家長朝臣

浪枕たかせのよとにさす棹のさてや戀路にしほれはつへき
右

右

行能朝臣

思ふ事ありとはかりはしらるともかゝる枕の露はもらさし
右歌難は聞え侍らねとも。めつらしくからぬにや。左高瀬
のよと。さてや戀路に。いひしれる歌と聞ゆとて。爲_レ勝。

思ふ事ありとはかりはしらるともかゝる枕の露はもらさし

五十二番

左

頼氏朝臣

袖の上の露をあやめてしきたへの枕の外は人やしるらん

右勝

中宮但馬

頼めねとたゝあらましのよひ／＼に枕の塵をうち拂ひつゝ

露をあやめて優ならずと申人有て。右勝。

五十三番

左勝

親季朝臣

涙川わたらぬ中になかる也ま／＼の下の淵となるまで

右

下野

草枕あたに結びし夢なれときもわすられすのこるおもかけ

左宜しくきこゆとて。爲勝。

五十四番

左勝

知宗

待人のこすけの枕あはれなとつらきえにしも結びそめけん

右

兼康

たち出るうき名は塵に埋れてはらはぬねやのつけの小枕

まつ人のこすけの枕。いひなれて聞ゆとて。爲勝。

五十五番

左

中宮少將

敷たへの枕たにせてみる夢はさむるところにもしる人そなき

右勝

正三位知家

にこり江に影みぬ水や塵つもる枕の下に涙なるらん

右歌宜し。爲勝。

五十六番

左持

寄帶戀

九條大納言基家

待わふる我なみたさへむすほゝれあひみる中にとけぬ下帶

右

民部卿典侍

かりそめに結びすてたる下帶をななき契となむや忍はん

兩首いうに侍るよし各申。爲持。

五十七番

左持

春宮權大夫良實

今そしるかことはかりに常陸帶とくともとけし心たゆまで

右

權中納言定家

いかゝせんうへはつれなき下帶の別れし道にめぐりあはずは

兩首爲持。

五十八番

左

右衛門督爲家

あさはたのしつかかり帶のあたにのみ又も結はぬ契也けり

右勝

信實朝臣

芦のやの賤はた帶のかりそめを結ふ契にたのみやはする

右歌いうに侍り。左初五文字耳遠く聞えはへるよし申

て。以右爲勝。

五十九番

左持

前宮内卿家隆

めぐりあはん契もしらぬひたち帶のひた道にのみ戀や渡らん

右

忠俊

紫のこそめの帶のかた結びとけてぬる夜の限しらせよ

紫のこそめのおひ。めつらしくおかしく侍しよし各申。

常陸帶のひた道も。餘情有て聞ゆとて。爲持。

六十番

左勝

兵部卿成實

戀をのみ賤はた帶のむかしよりたえぬ恨やむすひ置けん

右

隆祐

結ひをきし花田の帶のいく世經てあはぬにかへる色はみゆ覽

花田のおひ世々へん色いかに。左無_二其難_一。爲_レ勝。

六十一番

左持

資季朝臣

契をはいかなる帶に結びけんなれにし中も今は絶つゝ

右

源家清

心のみ花田の帶の一すちにうつろふ色はいふかひもなし

兩首無難のよし申て。爲_レ持。

六十二番

左

家長朝臣

戀をのみ賤はた帶の結ほゝれ心しとけはそれもとけなん

右勝

行能朝臣

足曳の山田にならすひたち帶のかりにもとけぬ契なりけり

山田にならす常陸帶。珍敷よし申て。爲_レ勝。

六十三番

左勝

頼氏朝臣

月草の花田の帶のとけそめて恨にかへるはてそかなしき

右

中宮但馬

むすひをきし契絶すは山城のゐての下帶めぐりあひなん

左優に聞ゆるよし各申て。爲_レ勝。

六十四番

左持

親季朝臣

山かつの賤はた帶のいくかへりとけてかひなき思ひそふらん

右

下野

石川やあはに契や結び置し花田の帶のうつりやすきは

左右無_二得失_一。爲_レ持。

六十五番

左持

知宗

契のみしつはた帶を結ひても猶したはるゝむかしなりけり

右

兼康

しらさりき賤はた帶のめぐりあはて結ほゝれたる契有とは

賤はた帶又同前。

六十六番

左持

中宮少將

さても又身をははなれぬ下帶の行わかるゝや契なるらん

右

正三位知家

古の契もいかに結びけむしつはたおひのとけぬ心は

又無_二申旨_一。不_レ能_二勝負_一。

六十七番

寄糸戀

左勝

大納言基家

あはぬ夜は亂れやわふるさゝかにの糸を限りに年をへにけり

右

民部卿典侍

多本歌不見

左の糸の詞のより所多く。宜しく侍るよし申て。爲_レ勝。

六十八番

左勝

春宮權大夫良實

さゝかにの手玉もゆらにひく糸のくるれに人をまたぬ夜そなき

右

京極中納言定家

夏ひきのいとしもなれし俤はたえてみしかき後そかなしき

左殊勝之由各申。仍爲勝。

六十九番

左勝

あふまての契もまたす夏引の手ひきの糸の戀のみたれは

右

信實朝臣

さらてたゝなるゝとまでも頼れすをのか手引の糸の亂れは
右歌。上三句いたつらに糸によれる詞侍らすと申。左爲

勝。

七十番

左勝

前宮内卿家隆

誰ために人のかた糸よりかけて我玉のをのたえむとすらん

右

忠俊

青柳の花田の糸のかたよりにあふよもしらぬ名こそつられ

人のかた糸よりかけて。殊によろしく聞え侍り。青柳の
はなたの糸も。まことにしたひよりて聞え侍れと。依

無殊仰。左爲勝。

七十一番

左勝

兵部卿成實

あはぬ夜のうきふしことにかた糸の此方彼方に物と思はん

右

隆祐

くるゝ日の契も今はかた糸のいかなるふしに中は絶けん

兩首。殊又無指勝劣一歟。

七十二番

左勝

資季朝臣

夏引の手ひきの糸の誰ゆへに絶ぬ思ひもみたれそめ

右

源家清

くりかへし哀はかけよかた糸のあはても絶ぬ命なさを

結番之歌。勝負雖大切。於無指得失。難決雌雄一歟。

七十三番

左

家長朝臣

あふ事は思ひもよらすかた糸の此方かなたに年はへにけり

右勝

行能朝臣

深き色の程をみよとやからあゐのちしほの糸の先みたれ筒

此題のかた糸。數多侍りて。後のふかき色の糸。めつら
しさにや。勝と侍りき。

七十四番

左

頼氏朝臣

いかせんあふ事しらぬ片糸のよるはすからに亂れ侘つゝ

右勝

中宮但馬

何と又うきふしなからあは糸のたえぬ契のむすほふるらん

あはいと勝へきよし。御定。

七十五番

左勝

親季朝臣

玉のをやかけて結はんかた糸のみたれてあはぬ人の心は

右

下野

中々に絶ぬもくるし夏引のいとふ心のほとは見えにき

兩首又無殊得失之由申。

七十六番

左

知宗

うつりにし人の心もかた糸のあはてやかくて此世へたてん

右勝

兼康

絶さらむ心もしらす白糸のあはをにむすふ中の契は

しら糸のあはをめつらしきよし申て。爲_レ勝。

七十七番

中宮少將

かゝりける契りもつらしかた糸のいかなる色に思ひそめ劍

右

正三位知家

かくしつゝいつ絶ばてん白糸のうきふししけく成まさりつゝ

右歌つゝの詞在_二句_一之由申。左又優なり。仍爲_レ勝。

七十八番

寄庭戀

左

大納言基家

うちかへし衣かたしくさむしろに人の心を見る夢もかな

右勝

民部卿典侍

玉翠

よしさらは涙の下にくちもせよ身さへなかるゝ床の小庭

七十九番

左持

春宮權大夫良實

續後撰

吳竹のふしみの里のすか庭ねにのみなきてひとりかもねん

右

京極中納言定家

東野の露のかりねのかや庭みゆらんきゝてしき忍ふとは

伏見里。殊勝の由一同雖_レ申。推而被_レ定_レ持。

八十番

左

右衛門督爲家

あふ事はかりほの小田のいな庭露たに袖のかはきやはする

右勝

信實朝臣

新拾

いたつらに暮せるよひのさ庭の夢を頼みてねんかたもなし

八十一番

左無_二指申事_一歟。右優美之由各申。爲_レ勝。

左勝

前宮内卿家隆

くちねたゝ人やあやめむあや庭程ふるまでもしき忍へとも

右

忠俊

はかなしや其夜の夢をかたみにてうつゝにつらき床の小庭

續古

人やあやめむあやむしろ。おかしく聞ゆ。右又妖艶之山

各申といへとも。依_レ仰左勝。

左勝

兵部卿成實

あや庭なみたの露のたてぬきに誰をりそめて敷忍ふらん

右

隆祐

思ひねの涙のかすにしきかへてしたにくち行床のさむしろ

右のさむしろなみたのかすにしきかへん事。其員繁多

にやはへらんと申て。左爲_レ勝。

八十三番

左

資季朝臣

新後撰

岩かねのこりしく山の苔むしろぬるよもなしに歎く比かな

右勝

源家清

こよひこそこぬもつられ獨ねの我さむしろに秋かせそ吹

右優に聞ゆるよし申て。爲_レ勝。

八十四番

左勝

家長朝臣

へたてなきすきまの風もをのつから猶さむしろのよはの手枕

右

行能朝臣

待夜のみむなしき床のあや庭くるれはこりす猶はらふかな

右あやむしろ。かならずしも求むへき事にはあらねと

も。一句もあやによれる詞なし。左人を戀たる心にはあ

らねとも。懇切之芳契おなし事也とて。左勝。

八十五番

左

頼氏朝臣

さむしろに獨ぬるよの夢もみつけにならはしの風は吹けり

右勝

中宮但馬

續後撰

一夜ねしかりそめふしのかや薙いまは涙をかさねてそしく

右優に聞ゆるうへ。左歌合にならはし不_レ甘心とて。右

爲_レ勝。

八十六番

左

親季朝臣

さても猶しき忍ふてふ稻薙河そひ柳浪はこすさも

右勝

下野

はらふへき袖さへくちぬいたつらに塵のみ積る床の小薙

左戀すくなしと申人侍りしかと。しき忍ふといはんに。

こもりぬへきよし侍りき。右させる理侍らねと。ふるま

ひたるやうありとて。爲_レ勝。

八十七番

左持

知宗

ひとりねの夜をさむしろの霜をたに置所なき心ともみよ

右

兼康

絶てなをまぢえんものか綾薙ほさぬ涙にをさへくちなは

無_レ殊勝劣。又爲_レ持。

八十八番

左持

中宮少將

うき物とさのみや塵のつもるらむぬる夜わするゝ床の小薙

右

正三位知家

涙もる床のさむしろうきなからうへはつれなく敷忍ひつゝ

此番。又ともに優なりとて。無_レ勝負。

八十九番

左持

寄船戀

大納言基家

袖の浦よする涙も色そへていとちしほのあけのそほ船

右

民部卿典侍

續後撰

濁江にうき身こかるゝも刈船はてはゆきゝの影たにもみす

左袖の浦よするなみたの色ならは。あけのそほ船かな

ふへしやなと申人々侍しにや。弁申侍らす。右歌又こと

なる事侍らねは。猶不_レ能_レ勝負。

九十番

左

奉宮權大夫良實

續後撰

あらたまの年のをなかくまつら船幾よになりぬ浪路へたてゝ

右勝

中納言定家

白妙の袖のうら浪よるゝはもろこし船やこきわたるらむ

年のをなかく松浦船。殊勝のよしみな一同申侍りしか

と。可_レ爲_レ右勝之由被_レ仰。

九十一番

左

右衛門督爲家

うき中の芦かりをふね漕まよひ猶おなしえに又よこかれん

右勝

信實朝臣

いかなりし風のしるへの浪のまに思はぬかたのあまの拾舟

うき中の芦かりをふね不_レ甘心之由申侍りき。右爲_レ勝。

九十二番

左

前宮内卿家隆

浪たかき人の心のあら磯はまかしけぬきよる舟そなき

右勝

忠 俊

縫絡撰
みるめなきしかつの蟹のいさり船君をはよそにこかれてそふる

人の心のあら磯まかちしけぬき。耳とをきよし申人侍
りしにや。君をはよそにこかれてそふる。無_レ限秀逸之
由申。仍爲_レ勝。

九十三番

左勝

兵部卿成實

またしらぬ浪路はるかにゆく船の風をたよりに戀や渡らん

右

隆 祐

芦しけき同しみなとに漕舟の月日はかりはさはらさりけり

左優に侍るうへに。右下旬。愚意不_レ通。不_レ能_ニ弁申_一。左

右又無_ニ申旨_一。左爲_レ勝。

九十四番

左勝

資季朝臣

漕_{質拾}いつるおきつ浪間のあま小船うらみし程に遠さかりつゝ

右

源家清

わすらるゝ身は捨舟のうかひ出てみるめの空も遠さかり筒

左歌宜之由被_レ申人々有て。爲_レ勝。

九十五番

左持

家長朝臣

恨めしなあふ事なみに漕船も待としきは寄るならひを

右

行能朝臣

風をいたみとまりもしらす行船のうきてはかなき身の契哉

兩方無_ニ本末_一。爲_レ持。

九十六番

左

頼氏朝臣

おきてゆくうきねの床の別路に契をくへきことの葉もなし

右勝

中宮俱馬

新拾
あま小船我をはよそにみくまの浦よりをちに遠さかりぬる

左歌無_レ船。仍右爲_レ勝。

九十七番

左

親季朝臣

玉江こく芦かりを船行なやみ身のうきからに又やさはらん

右勝

下 野

恨むれとゆきあふ道はかたゝ船さてもかひなき名こそつられ

かたゝ船。優に侍るよし申て。爲_レ勝。

九十八番

左持

知 宗

思川さしよす船のみなれさほ我手にとりていつくわたらん

右

兼 康

新千
いかにせん丹生の川浪よるかたも及はぬ船のうきななりせは

左珍敷姿也。右ちから有よし申て。爲_レ持。

九十九番

左

中宮少將

浪のうへは里のしるへにあらねとも恨なれたるあまの釣舟

右勝

正三位知家

みなといる蟹の小船の芦分に又このくれも待そわつらふ

左歌本歌の句のをき所かはらず。難にや侍るへきと申

て。右勝。

百番

左持

寄網戀

九條大納言基家

すまのあまの朝な夕なにひく網のかけても戀ぬ浪のまそなき

右

民部卿典侍

續後拾

しかのあまの網のうけなはうきながら絶ぬ恨は猶そくるしき

各申ニ無難之由。爲持。

百一番

左勝

春宮權大夫良實

あま人の手引の網のくるとあくともめかれぬ戀に袖やくちなん

右

京極中納言定家

人心あたる名のみたつ鴨の網のゆくてになとかゝるらむ

左の手引のあみのくるとあくとも。殊勝のよし各申。右

不尋常。尤以左爲勝。

百二番

左持

右衛門督爲家

長かれと何ひき懸てたのみ劔思はぬかたのあみのうはなは

右

信實

世とともに浪ちへたてゝ引網のたえぬ恨みはさてやくちなん

兩首無難事。爲持。

百三番

左持

前宮内卿家隆

いせの海たえぬ恨にひく網のめにあまりぬるわか汨かな

右

忠俊

續後拾

とし經ぬる網の手繩のうちはへて心ひとつをかけぬ日はなし

右殊宜之由各申。依仰爲持。

百四番

左

兵部卿成實

經古

戀すてふ袖しの浦にひく網のめにたまらぬは涙なりけり

右勝

隆祐

浦人のかたを定めて引網もくるしとのみや身をしほるらん

左歌讀説藤殊申ニ宜之由。行能朝臣申云。戀をのみすま

の浦はにひく網のめにもつ物は涙なりけり。ふるき名

歌也。老耄のうへ管見又忘却歟。何集誰人歌哉とて問

之。不健覺悟。如計本意事之由申。仍以右爲勝。

百五番

左持

資季朝臣

しかのあまの朝な夕なに引網のほすまもらす濡るゝ袖哉

右

源家清

數ならぬみほの浦はにをく網のうけひく人もなき思ひ哉

左右無難申事。又持。

百六番

左持

家長朝臣

ひく網のめならふ浦の人なみも身のうき方はかけはなれにき

右

行能朝臣

あふ事も今はなきさにほす網のかはくをみて袖そかなしき

此番又同前。

百七番

左勝

頼氏朝臣

思ふともいかゝ頼まむたれとなく引手あまたの網のうけなは

右

中宮但馬

續後拾

をく網のしけき人めに事よせて又こと浦にひく心かな

左宜之由人々申されて。爲勝。

百八番

左持

知宗

よしさらは恨もはてよひく網のめならふ人に心をくとして

右

下野

いせの海思はぬかたにひくあみの我には人の心をくらむ

心をく詞。同不可有勝劣之由中。

百九番

左持

知宗

みし人を忍ふの浦にひく網の苦しやかくはまなくぬらさん

右

兼康

うきめかるあまのしわさに引網の誰うけひくと恨初けん

猶可爲持之由同前。

百十番

左持

中宮少將

たえず引網のうけなはうきてのみよるへ苦しき身の契かな

右

正三位知家

をく網のひくてあまたに袖ぬれてきても恨みぬ浪のまそなき

猶不能勝負。

左右方人各被申之詞不幾之上。七句之老耄病腸惘然。

百番之優劣已迷惑(惑)難決。窮蹶之筋力雖待披講之

終。以當座猶忘興味。後日彌迷是非。不能載子

細。定可招其嘲一歟。

勝負

九條大納言 勝二持五負三

春宮權大夫 勝四持四負二

民部卿典侍

權中納言定家

右衛門督

勝五持二負三

信實朝臣

前宮内卿

勝三持三負四

忠俊

兵部卿

勝三持三負四

隆祐

資季朝臣

勝三持四負三

源家清

家長朝臣

勝三持三負四

行能朝臣

賴氏朝臣

勝三負七

中宮但馬

親季朝臣

勝二持五負三

下野

知宗

勝二持五負三

兼康

中宮少將

勝二持四負四

正三位知家

歌合貞永元年八月十五夜

題

名所月

作者

左方

女房後堀河院

前宮内卿家隆

信實朝臣

有家朝臣

隆祐

三位侍從母俊成女

右方

民部卿典侍後堀河院官女
爲家院女

實持朝臣

家長朝臣

下野後鳥羽院官女
日吉院官女仲女

光俊朝臣

右衛門督爲家

判者 權中納言定家

以上一本無之

一番 名所月

左勝

女房

みかさ山ふりさけみれは榊葉のいやとしのはに月はすむらしんい

右

民部卿典侍

立田山そめてうつるふこそよりしくれぬ色に出る月影

左榊葉のいやとしのは。姿詞非ニ凡俗之所及の由。各一同申。右上に染てうつるふ梢と置て。下に時雨ぬといへる。ことほりかなはすや侍らん。今出る月の色をよめるよし。右方陳申。其難侍らすとも。左非ニ同日論。爲勝。

二番

左持

權中納言

神風やみもすそ河のきよければ空行月の光そへけり

右

高倉

見ても又誰にかたらん秋のよの浦風さゆる住の江の月

みもすそ河の月の光そへけるよし。歌合にかたん爲によめる疑ひ侍しを。河の名をよまん。ことに勝へきにも侍らす。歌のさまめつらしからす侍らむ。住のえの月をめて、誰にかたらむと侍るも。景氣おもひやられて。可爲持よし申。

三番

左持

前宮内卿

ひかりそふ木のまの月におとろけに秋もなかはのさよの中山

右

實持朝臣

夕なきのあかしの渡よりみわたせはやまとしまね出る月影

さよの中山。たひに出て木間の月の光そへたるに。秋の半もおとろける心詞。めつらしく興あるのよし各申。明石のとよりやまとしまみゆといへる古歌の心にて。新月のいつるにむかへる姿詞。けたかくきこえ侍れは。又

持とす。

四番

左

行能朝臣

明石潟こよひは月もみつしほのひるにかはれは哀なりけり

右勝

資季朝臣

天の原雲井にちかきふしのねは月すめとてや雪もきえ劔

左に。こよひは月もみつしほといへる風情。尤宜のよし
申侍き。右方申云。誠有_レ心歌とは聞え侍れと。あはれな

りけりといひはてたる詞。くちおしくや侍らむ。近き世
の歌に。けしきの森の下風にたちそふものはあはれな

りけりといへる。ことにおかしく聞え侍るよし申出し
侍りしかと。此歌。猶ゆるされ侍らさりしかは。雲井に

近き富士の根。歌のさまをよひかたけに侍れは。可_レ勝
の由被_レ定。

五番

左

信實朝臣

夜半の月なたかの浦の浪の上に秋はなかはといかにすむ覽

右勝

家長朝臣

いづくにもふりさけいまや三笠山もろこしかけていつる月影

名たかの浦の秋。風情おかしく侍れと。ふりさけ今や三
笠山唐かけてといへる。漢家本朝をかけて。月影至らぬ
所なくつかふまつる由。満座褒美。爲_レ勝。

六番

左

頼氏朝臣

曇なきあかしの浦のならひにも秋の今宵の月はみてけり

右勝

中宮少將

結後撰

訪人もあらしと思ふを三輪の山いかにすむらん秋のよの月

くもりなき明石の浦も。猶秋のなかはの月ことなるよ

し。殊によりしく聞え侍るを。三輪の山いかにすむらん

といへる。あらぬさまに艶にゆへ有て聞ゆるよし各申。

左歌。ならひにもさいへる詞。いかうと申人侍て。右

勝に被_レ定。

七番

左

有家朝臣

おとこ山秋のなかはの法のに月はこよひの光のみかは

右勝

下野

曇なき月は三笠の山端に秋のなかはの影そさしそふ

放生會今夜の儀。嚴重に聞え侍るを。くもりなき月をみ

かしの秋のなかはの影をさし添ける心も。其ゆへ侍る

へし。歌のさまも宜き由各申て。勝とす。

八番

左勝

親季朝臣

みかさ山ちよの光をさしそへて雲井をてらす秋のよの月

右

兼康

いく秋の空行月をやとすらんしほくむあまの袖の浦なみ

しほくむ海人の袖の浦浪。殊によりしく聞え侍れと。三

笠の山のちよの光。雲井をてらす月。不_レ及_ニ是非。爲_レ勝。

九番

左

隆祐

お花咲まのゝ入江のたよりにもてる月なみに今夜をそしる

右勝

光俊朝臣

雲をくるむこ山おろし吹にけりゐなの湊にはるゝ月影

十番

左持

知家

尾花さく。非尋常句一歟之由申。以_レ右爲_レ勝。

右

源家清

櫻とも雪とも今はみよし野の山の秋風はらふ夜の月

立田山月のかつらの下露にあきの半そ色に出ゆく
はらふ夜の月。さえて聞ゆ。月の桂の下露。秋の半の色。
いうに聞え侍るを。似る歌ありと申人侍て。被_レ處_レ持不_レ及_二見思_一。忘ぬる事は相互の事に侍るへし。

十一番

左持

三位侍從母

萬代もみもすそ川のしきなみにすめる雲井の秋の月影

右

右衛門督

續後撰

五十鈴河神代のかゝみかけとめて猶くもりなき秋夜の月
みもすそ河すめる雲井。五十鈴川神代の鏡。尤可_レ爲_レ持。

十二番

左持

女房

數みゆる鷹の羽たれの霜の上に月さえわたるあまの橋立

右

民部卿典侍

續拾

清見潟月の空にはせきもぬすいたつらに立秋の白浪
數見ゆる鷹の羽たれ。月さえわたるあまの橋たて。風情
景氣殊勝無双。清見潟の月。詞姿難_レ捨なと申人々侍り
しにや。持のよし仰らる。

十三番

左持

權中納言

世をてらすみかさの山の秋の月たかき昔の跡もをよはし

右

高倉

水の面にてる月浪の幾かへりこよひにあひぬうち。の橋姫

左歌偏に勝負の事を思ひてよめるによりて。照月なみ
になれて年ふる宇治の橋姫。心くるしく聞え侍き。但今
よりのち。今夜の勝負によみならひて詠_二社名_一假_二神威_一
事。殊可_二停止_一之由被_レ仰。

十四番

左持

前宮内卿

宮城野の眞菰かうへの白露を玉にしきてもやとる月かな

右

實持朝臣

したくゝる浪もあらはに大る河井せきもかくる月のしからみ
月のしからみ。めつらしくおかしきよし侍しかとも。み

やき野の月。心姿可_レ勝よし被_レ定。

十五番

左

行能朝臣

みかの原山より月のいつみ川わたりをとをみしく氷かな

右持

資季朝臣

秋の月やとる光し清ければおほろの清水名をもたのまし

わたりをとをみ。きら／＼しく聞え侍るよし申出し侍
りき。月のいつみ河。さしにも聞ゆるよし申人有て。右
歌しのひやかに。いうなりとて。爲_レ勝。

十六番

左持

信實朝臣

をしほ山尾上の松の秋風に神代もふりてすめる月かけ

右

家長朝臣

たつ名にはおふの浦なし月さえて秋の半になりもならずも

依ニ今年之潤月ニ秋半相違之由。思へる所侍れと。をしほ山の月。歌のさまもよろしきによりて。爲レ勝。

十七番

左勝

頼氏朝臣

久方の月の桂の秋風に雲もかゝらぬあまのかく山

右

中宮少將

なちこちの空もひとつに月さえて野嶋かききは秋風そ吹

月の桂の秋風に雲もかゝらぬ景氣。歌のすかた相かな

ひて。秀逸と聞ゆるよし。各稱美申。右歌不レ及ニ優劣。爲ニ

左勝。

十八番

左

有家朝臣

さほ川に月の氷をしきしまのみちある御代を神や待らん

右勝

下野

初瀬山ゆつきかしたもしたはれて今宵の月のなこそかくれね

左無ニ其難。有レ道御代尤然るへし。右ゆつきか下もあら

はれて。月の名隠ぬ心。殊に宜き由各申。爲レ勝。

十九番

左持

親季朝臣

たち花の小嶋のくまの河風にむかしも聞すすめる月影

右

兼康

秋はきの花野の露の行すりにぬれてうつろふ袖の月かけ

たちはなの小嶋にすめる月。あき萩の花野にうつろふ

露。いつれとなくおかしく聞ゆ。爲レ持。

二十番

左

隆祐

明石かた名におふ浦にすむ月も猶のこりける影をみる哉

右勝

光俊朝臣

さらしなや娘捨山の月も猶こよひそ秋の影はそふらん

二十一番

左

知家

よしおとて露なからみむもさあら萩の上なる宮城の、月

右勝

源家清

かこつへき山こそみえぬゆらのとを夜わたる月の行末の空

左初五文字非ニ尋常ニ之上。右ゆらのとを夜わたる月。姿

詞尤よろし。仍爲レ勝。

二十二番

左

三位侍從母

花のえに露のやとかる宮城野の月にそ秋の色はみえける

右勝

右衛門督

かゝりける秋のこよひの月よりや浦を明石の名に定めけん

宮城野の月。殊によろしく聞え侍れと。右浦を明石の名

にさため劔。可レ勝之由被レ定。

二十三番

左勝

女房

すまの浦やあまとふ雲の跡はれて浪より出る秋夜の月

右

民部卿典侍

いくかへりすまのあま我ための秋とはなしに月をみる覽

右ことなる難は聞え侍らねと。常の月にや。あまとふ雲

の跡。たちならふへき物侍らぬよし申て。爲レ勝。

二十四番

左

權中納言

月影は秋のよなく住のえのいくちとせにかあひ生の松

右勝

高倉

里はあれて伏見の秋をきてとへは月こそやとれ浅ちふの露

住江月。又雖^レ募^ニ神社之威。伏見秋。乃殊入^ニ幽玄之境。仍爲^レ勝。

二十五番

左

前宮内卿

たつた河紅葉はまたき浪の上に水の秋しる月そきやけき

右勝

實持朝臣

月すまはあたに過行人もあらしこよひはたゆめすまの關守

紅葉はまたき水の秋しる。其詞姿雖^ニ拔群。こよひはたゆめすまの關守。猶可^レ然之由被^レ仰。

二十六番

左勝

行能朝臣

春日山峯の榊葉ときはなる御代の光も月にみえつゝ

右

資季朝臣

明石かたかたふく月にまかせてや浪間の影も浦つたふらん

峯の榊葉。御代の光。尤足^ニ稱美。かたふく月。浪間の影。もとより非^ニ各別事。歟。以^レ左爲^レ勝。

二十七番

左

信實朝臣

いとゝまた露をかさねてしらすけのまのゝ茅原月そ宿れる

右勝

家長朝臣

君か代はめてゝもめてむ秋の月つもれとたれもわかの浦人
左させるあやまり侍らねと。しらすけいかにやと申人

聞え侍りき。つもれとたれもわかの浦人。姿詞めつらし

く。いひしりて聞ゆるよし各申。爲^レ勝。

二十八番

左

賴氏朝臣

しら雲の鳥羽田の山の山風に空晴まさる秋夜の月

右勝

中宮少將

浪かゝるなにはの里のあし枕月見るとてやむすひそめ劔

左上句聞なれぬ事に侍れは。あし枕可^レ勝之由定申。

二十九番

左

有家朝臣

紅葉する月の桂のかは浪に光は花とちりまかひつゝ

右勝

下野

もしほ焼心あるあまの夕煙月にはたてす松か浦しま

左下句便なく侍り。右夕烟たてぬ心宜きよし申て勝。

三十番

左

親季朝臣

難波えやしほみちくらし久かたの月ふきよする沖つ秋風

右勝

兼康

いくめくり秋のこよひを契るらんみかさの山を出る月影

右歌尤宜。爲^レ勝。

三十一番

左持

隆祐

ななき夜の限もみえす武藏野や山なき空にすめる月影

右

光俊朝臣

すみわたる光もきよし白妙のはまな橋の秋夜の月
新勅
しるたへの濱名のはし。景色殊にきこえ侍にや。武藏野

の山なき心は。近年おほく聞え侍れと。ことなる難は侍らねは。爲_レ持。

三十二番

左

知家朝臣

あまのとのひとつにみゆる浪の上に月まつしまの秋の舟人

右勝

源家清

たえず行秋の宮河いくちよも清きなかれにすめる月影

左歌詞優に侍るを。當時月にむかはぬにや。秋の宮川尤可_レ然。爲_レ勝。

三十三番

左勝

三位侍從母

ふりにけるあはれも月に住の江の松に夜ふかき秋の沙風

右

右衛門督

いせしまや遠きひかたのしほかれに光みちたる秋の夜の月

とをきひかたに月の光みちたるよし。心は侍れと。住の江の松に夜ふかき月。景氣殊に思ひやらるゝよし申て。

爲_レ勝。

以下一本無之

女房

勝二持一

民部卿典侍

定家卿

勝一持一負一

高倉

家隆卿

勝一持一負一

實持朝臣

行能朝臣

勝一負二

資季朝臣

信實朝臣

勝一負二

家長朝臣

頼氏朝臣

勝一負二

中宮少將

有家朝臣

負三

下野

親季朝臣

勝一持一負一

兼康

隆祐

持一負二

光俊朝臣

知家朝臣

持一負二

源家清

三位侍從母

勝一持一負一

爲家朝臣

群書類從卷第百九十九

和歌部五十四歌合廿

遠嶋御歌合嘉禎二年七月

題

朝霞 山櫻 郭公 萩露 夜鹿
時雨 忍戀 久戀 羈旅 山家

作者

左方

右方

女房後鳥羽院 從二位家隆
前内大臣家良公 小宰相
權大納言基家 正三位信成
沙彌道珍入道大納言忠信繼 如願法師
侍從隆祐 下野
少輔家隆卿女 散位長綱
散位親成信成卿息 散位家清家長朝臣息
藤原友茂入道左衛門督能茂子 善眞法師

判

女房

一番 朝霞

左持

女房

右

從二位家隆

しほかまの浦のひかたの明ほのに霞に残るうきしまの松
春のよのおほる月夜のなこりとやいつる朝日も猶霞らん
凡歌を判する事は。道に執してゆるされたる物を撰ひ
て。難波のよしあしをわかち。わたつ海のふかきあさき
を定しむ。しかるを花の宮この昔。わつかに三十一字の
詞をつらぬといへとも。桑の門の今。三輩九品のつとめ
ひまなければ。富のを川のなかれなくむ事なく。わか
うら波きしをへたてゝ。十年あまり六年の春ををくれ
り。今更にこの道をもてあそふにはあらねとも。從二位
家隆は。和歌所のふるき衆。新古今の撰者なり。八十餘
の命の露。いまたあたし野の風にきえはてぬ程に。かれ
をめしくして。今一度思ひの詞をあらそひ。しなし
なのすかたをたくらへんとおもふ。これによりて。鴈の
玉章の便に付て。うとからぬ輩に。十題の歌をめしあつ
めて。書つかへり。人の數ひろきにをよはされは。きの
ふけふはしめて六義の趣を學ぶ輩も入て。忍ふの森の
ことの葉は。風にちらむこと。旁はゝかりおほけれとも。

且は執心の障をのそかんかため。人のそしりをかへり
みす。此歌愚詠をもて家隆にあへる事。道にそむけれ
は。しかるへきにもあらねとも。いそのかみふりにしと
しを伴ひて。ことさらに是をつかへり。抑八代集の歌
は。昔時々見侍しかは。佛もありながら。猶あきらかな
らす。いはんやちかき世の人々の歌の中にも。十餘年の
間のは。一首もきゝをよはされは。たとひ同歌をよめら
んなも。見とかめかたく侍る。しかのみならず。六十の
よはひ。老耄もことはり過にたれば。只うはへに見ゆる
すかたはかりを。おろ／＼注し侍るへし。一番の左は。
おほくは勝事にて侍れとも。これはいとめおとろくも
のにはあらず。右歌おほる月夜の後朝。まことに朝かす
みにたより有て。こと葉つゝきすかた殊におかしく侍
る。しかれとも一番の左にことを寄て。こと更勝劣を決
せざるなり。

二番

左持

前内大臣

おほはらやをしほの里の朝霞ゆきゝになれし春そ忘れぬ

右

小宰相

うら人の鹽やく里の朝かすみ春の物とやわかつて見るらん
左をしほのさとの朝霞。往來になれしと讀る。おもふ所
ありて見ゆるうへに。姿詞よろしく聞え侍るを。右の歌
春のものとやわかつて見るらんといへる業平か歌に。春
の物とてなかくらしつとよめるも思ひいたされて。
やさしく見ゆれば。ともに分ちかたく侍り。持と申へし。

三番

左勝

權大納言基家

春のよのあくる霞の立田山これや神代の衣なるらむ

右

正三位信成

あき霞雲ををかけて見渡せはいたりいたらぬ山のはもなし
左右ともに。わかちかたくは見ゆれとも。左神代の衣。
たちまさるへくや侍らむ。

四番

左勝

沙彌道珍

明ぬるか霞の衣たちかへり猶君か代の春をまつかな

右

如願法師

あまの戸の明ゆく空はうれしきを猶はれやらすたつ霞哉

左の歌祝の心はあなかに賞翫すへきにはあらねと。

右うれしきをとくへる。庶幾せられす。仍以左爲勝。

五番

左勝

侍從隆祐

朝日影またいてやらぬあしひきの山は霞の色そうつろふ

右

下野

山ひめの霞の袖も紅にひかりそへたるあき日影かな

左歌させる難なし。右歌かすみの袖も紅に光そへたる

朝日影。あまりはなやかに聞ゆるにや。左うるはしく見

ゆれば。勝とすへし。

六番

左持

少輔

やまのはに有明の月の残らすは霞に明る空を見ましや

右

散位長綱

朝戸あけてなかなれたる明ほのに霞はかりに春をしる哉

左霞に明る空を見ましやといへる。あしからす見ゆるを。上句に有明と置て。下句に霞にあくるといへる。すこしおほつかなくや侍るへからむ。右歌いつれもことなる事見えす。准て爲持。

七番

左持

散位親成

今朝はまたそれとも見えす淡路嶋霞の下に浦風そ吹

右

散位家清

春霞なひく朝けの鹽風にあらぬ煙や空にたつらん
左右ともにあしくも見えす。爲持。

八番

左勝

藤原友茂

朝またきたたつや霞の浪まより昨日はみえしあはち嶋山

右

善眞法師

さえかへる雪けの春の朝くもり霞むなのみや空にたつらん
左歌きのふは見えしあはち嶋山よろしく聞ゆ。右歌かすむ名のみや空にたつらんといへる。あしからす聞ゆれとも。題の心におもへは。名はかりの霞は。なをいささかをとるへくや。以左爲勝。

九番

左持

女房

人こゝろうつりばてぬる花の色に昔なからの山の名もうし

右

家隆

なそもかく思ひそめけん櫻花山としたかくなりはつるまで
右歌なけきこるやまとしたかくといへる歌の詞。おかしく見え侍る。左歌人心といへることをよむへからす

と。定めらるゝよし聞侍れとも。世にましらふへき歌にてもなければ。暫持と申へし。

十番

左勝

前内大臣

數ならぬみ山かくれを尋ねてそ心の末の花も見るへき

右

小宰相

まかひこし雲をはよそに吹なして峯の櫻に匂ふ春かせ
左右ともに。優に聞え侍れとも。こゝろの末の花。猶いろふかく見ゆ。以左爲勝。

十一番

左

權大納言

しら雲のあさ立山のから錦えたに一むら春風そふく

右勝

信成

かつらきや峯の櫻のさきしより心の空にかゝるしら雲
左歌あきたつ山のからにしき枝に一むらといへる。春風と末の句にはあれとも。猶本歌の倣忘す。紅葉のこちして侍る。しかもさくらとも花ともみえす。聊難とも申つへし。右の歌。あしくも見えされは。させる難なきをもて。勝とすへし。

十二番

左

道珍

うつりゆく花の下道跡もなしなかもしろき春の山風

右勝

如願法師

身にかへておもふもくるし櫻花さかぬみ山の宿りもとめん
左歌あしからすきこゆるに。なかもしろきといへる。

むかし俊成入道。しきりになかめといふものゝ別にあ
るやうによむことは。うけすと申侍りき。右歌は上下句
よろしく聞ゆ。勝とすへし。

十三番

左勝

さくら花空にあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

右

隆祐
下野

櫻さくなからの山の永き日も昔を戀ぬ時のまそなき

左歌させる難なし。右歌是はやすらかに見ゆ。懷舊のこ
ころさしあはれなれとも。歌から。左聊勝へきにや。

十四番

左勝

ちりちらす花より外の色そなきかさなる山の峯の春風

右

少輔
長綱

かつらきやたかまの山は埋れて空にたなひく花のしら雲

左歌よろしく見ゆ。右歌たかまのやまは埋れてと。こ
としく聞えなから。させる事なし。以左爲勝。

十五番

左勝

山たかみたれて匂ふ花櫻人もすさめぬ春やへぬらん

右

親成
家清

行末の山のかひより昨日見し雲はさなから櫻なりけり

右歌やまのかひより見ゆるしら雲といへる貫之歌の心
よろしく聞ゆ。旅の歌によるしくみゆるや。せんなかる

へき。左の歌。山たかみ人もすさめぬさくら花といへる
本歌の心よろし。尤勝とすへし。

十六番

左

友茂

さくら咲よしのの山の山風に麓をこめて花匂ふらん

右勝

善眞法師

花の色はあまりにけりな筑波根のこのもかのもにかゝる白雲

左歌させる難もなく。又あなかちにめつらしきやうに
もあらず。右歌つくはね。おほやうは山におもひならは

したれともあなかちにやまにはかきらす。只木おほかる
所を申なといふ輩も有にや。しかれとも。山のこのゝろに

もいひなれたれば。歌からよろしきに付て。以右爲勝。

十七番

左持

女房

さのみやはつれなかるへき子規ねさめの空に一聲も哉

右

家隆

やはきやまむかひの里の時鳥忍ひしかたの聲もかはらす

左ほとゝきすの題に。いまたきかざる心は。ほいなくや
侍らん。そのうへ。歌からも無下に見ゆる也。右歌これ

もいたくすくれたるものにあらず。持と申へし。

十八番

左持

前内大臣

神さふる歎きの森の子規ひくしめなはもなく／＼やこし

右

小宰相

さとわかすなけや五月の子規忍ひし比は恨みやはせし

左歌ねきことをさのみき／＼けん社こそはてはなけきの
もりとなるらめといふ歌をとれる。よろしく聞ゆ。右の
歌。忍ひし比はうらみやはせしさいへる。やさしきやう

に侍る。爲_レ持_レ。

十九番

左持

權大納言

なれをしそあはれとは思ふ子規あかす過にし年のへぬれは

右

信成

我ならて何をうしとか時鳥ことしも雲のよそに鳴らん

左右ともに。あしくも聞えず。又持とすへし。

廿番

左持

道珍

明ほのはなみたやもろき子規なくねにおつる森の下露

右

如願法師

いまも猶むかしや戀る橋のはなちるさにと鳴ほとゝきす

左右ともに。おなしほととなれとも。右歌の末の句。いかにそ聞ゆ。仍以_レ左爲_レ勝。

廿一番

左持

隆祐

しからきの外山の末の郭公たかさとちかきはつねなるらん

右

下野

たちはなの匂ひを空に尋きて山ほとゝきす聞ぬ日そなき

左たかさとちかきはつね。あしくも聞えず。右歌もさして難もなく見ゆれとも。左は猶すこし勝へき也。

廿二番

左持

少輔

さみたれにやすらふ暮の時鳥そなたの雲に聲なへたてそ

右

長綱

過にけりさやは契りて郭公鳴音はかりはこそにかはらて

長綱

左歌あしくも見えず。右の歌なくねはかりは去年にかはらてといへる。すこし心えられす。何事のこそにかはれるそや。ほとゝきすは。こそそのふる聲なといふ事なれば。かはらさらむも。ことはりにこそ侍れ。左すこし勝るへきにや。

廿三番

左持

親成

ほとゝきす山よりをちの里人はまたてやよはの初音聞らん

右

家清

うちしめり花たちはなの五月雨に軒もる夜半の郭公哉

右歌軒もるよはの子規。なきつる心は聞ゆれとも。なを

おほつかなきやう也。左歌あしひきの山のあなたに住

人はまたてや秋の月を見るらんといへるこゝろを取な

せるにや。ともにさせる難もなし。持と申へし。

廿四番

左持

友茂

おほつかな誰きけとてか時鳥さよ更かたの空になくらん

右

善眞法師

待かねし夜半はむかしにかはらねと今年もつらしやま郭公

左右ともに。おなしほとに聞ゆ。猶持と申へし。

廿五番

左持

女房

した葉には色なる玉やくたくらん風の吹しく萩の上の露

右持

家隆

又や見むまたやみさらんしら露の玉置しける秋萩の花

左歌殊なるやうにも見えず。右歌またや見む又や見さ

らむしら露のといへる。殊におかしくも。あはれにも侍
り。尤勝とすへし。

廿六番

左

前内大臣

あき萩の露のよすかのさかりはも風吹たつる色そみにしむ

右勝

小宰相

定めなき風を待まもうつろひぬ本あらの萩に結ふ白露

左歌つゆのよすかのさかり葉風吹たつらん。めつらし

き様なから。すへてさかりは。古今にも侍れとも。い

たくえんには聞えず。右の歌すこしの難もなく。うるは

しく見ゆれは。勝とすへし。

廿七番

左持

權大納言

高圓の末野のま萩露ふかし峯の秋風吹すもあら南

右

信成

久かたの天とふ鷹の涙さへ落てみたるゝ萩のうへの露

左右ともに。ことによりしく見ゆ。仍爲レ持。

廿八番

左

道珍

ふるさとの萩の下葉も色つきぬ露のみ深き秋のうらみに

右勝

如願法師

しら露の玉をきみたる萩かえに泪かすそふ秋の夕くれ

左右ともに。やさしきやうなれとも。右はいますこした

けも有て艶にも聞ゆ。仍勝とす。

廿九番

左勝

隆祐

宮城野の木の下風や過ぬらん露におらるゝ秋萩の花

右

下野

ものおもふ宿の物とてなかわれは露におれふす庭の萩はら

左歌露におらるゝ秋萩の花よろしく見ゆ。右歌も難は

三十番

左持

少輔

玉をぬくまの糸萩かたよりにをのれ亂るゝあきの夕暮

右

長綱

待わたる時やきぬらんしら露の玉しく庭の秋萩の花

左右。ことなりといへとも。姿おなしかるへし。

卅一番

左

親成

露すかる庭の萩原いろつきぬいかなる人の思ひそむらん

右勝

家清

をく露は秋のならひの萩かえにあまるや鷹のなみたなる覽

左歌萩の人の思ひをそむらん事。いかなるへしとも覺

えず。右歌ことに宜く見ゆ。尤可レ爲レ勝。

卅二番

左持

友茂

上葉ふくあしたの原の秋風にをのれうつるふ萩の下つゆ

右

善眞法師

いまよりのたか泪とかなりぬらん下葉色つく秋萩のつゆ

左右ともに同鉢の物也。右の歌に。たかなみたとかなり

ぬらんといへる。人のなみたの草の露となる事は。おほ

く聞ゆ。草の露を人のなみたに用る事は。すこしおほつ

かなけれども。あなち難まてはあらず。持とすへし。

卅三番 夜鹿

左 女 房

久かたのかつらの影になく鹿の光をかけて聲もさやけき

右勝 家 隆

天河秋の一夜の契りたに片野に鹿の音をや鳴らん

右歌 あきのひとよのちきりたにといひて。かた野に鹿

のとつゝきたる。殊にやさしくきこゆ。惟高のみこ。片

野に狩して。たなはたつめにやとかりしむかしまで。お

もひよそへられて。おかしく侍り。左の歌すへてはいた

くあしくもなきを。あらはに夜といふ事みえすなとい

ふ難や侍らんすらむ。何様にも。右歌は秀逸と見ゆれ

は。尋常の歌ならふへきにあらず。尤勝とすへし。

卅四番

左 前内大臣

ものゝふもあはれと思へ梓弓ひくてもよはの小男鹿の聲

右勝 小宰相

つれもなき妻をや頼む秋風の身に寒き夜は鹿も鳴也

左の歌させるなんなくみゆるを。右歌つれもなき人を

そたのむ暮る夜ことといへる歌をおもひてよめる。

殊によりしく聞ゆれは。勝とすへし。

卅五番

左持 權大納言

をのかすむ峯の木枯寒き夜は鹿も紅葉の衣きぬらし

右 信 成

すみのほる月にうらむる聲す也ねられぬ鹿や夜寒成らん

左歌 鹿もみちの衣きぬらしといへる。おかしく聞ゆるを。右歌ねられぬ鹿や夜寒なるらんとよめる。又やさしく見ゆ。仍爲レ持。

卅六番

左 道 珍

秋おもふ泪やもろき夕月夜木の葉かくれに鹿ぞ鳴なる

右勝 如願法師

をやま田に風の吹しくいな蕨よるなく鹿のふしと成けり

左歌さしたる難はなけれども。右歌猶よろしく侍る。勝

とすへし。

卅七番

左持 隆 祐

むは玉の夜や更ぬらんを鹿の聲すみのほるをのゝ草ふし

右 下 野

秋のよはつまとふ鹿のみ山出ていまた旅なるをのゝ草ふし

左右の小野の草ふし。いくほと勝負なし。宜可レ爲レ持。

卅八番

左 少 輔

いま更にふしも定めぬ鹿のねに木葉の数の積る夜ことに

右勝 長 綱

木の葉ちる夜半の嵐の月影に心すみてや鹿も鳴らん

左歌 木葉の数のつもる夜ことに。珍らしきやうには見

ゆれとも。右歌はうるはしきやうに聞ゆれは。勝とすへし。

卅九番

左持 親 成

さをしかのふしとを浅み吹風に夜半に鳴ねそふかく成ゆく
右 家 清

さらてたにれさめ悲しき秋風によるしもとか鹿の鳴らん
左歌よはになく音そふくなりゆくといへることは。
艶にも聞えず。右歌よるしもなとか鹿のなくらんとよ
める。夜はかり鳴やうに聞ゆらん。鹿は秋になりぬれ
は。いつもなくものなり。すかる鳴秋の萩はら朝たちて
なと。古今にもよめり。左右歌すへて。勝負なく見ゆ。持
とすへし。

四十番

左勝

友 茂

やま本の森のしめ縄ななき夜を秋のをしかの鳴あかすらん

右

善眞法師

なよ竹の夜ななき秋の山風にいくたひ鹿のねさめしつらん
左歌山本の杜のしめなは長き夜をといへる。よろしく
聞ゆ。右歌よななき秋のやまかせ。かちまけなく見ゆれ
とも。猶左まさるへくや。

四十一番

時雨

左持

女 房

物おもへはしらぬ山路に入ねともうき身にそふは時雨也鳥

右

實 隆

かく計定めなき世に年ふりて身さへ時雨る神無月かな
右歌ふりみふらすみさためなきといへる。しくれの歌
のことはを。さためなき世にいひなせる。ことに優にみ
え侍る。左歌も。こゝろおなしやうに聞ゆ。暫持とすへ
し。

四十二番

左持

前内大臣

へたてこし昔の人めかれはてゝ時雨にもろき秋の古郷

右

小宰相

神無月木の葉時雨ぬ頃ならはさのみねぬよの数はつもらし
左右ともに。やさしきやうに見ゆ。左はむかしの人めか
れはてゝと云。右はさのみねぬよの数はつもらしとよ
める。とりくによりしく聞ゆ。持と申へし。

四十三番

左勝

權大納言

風むせふ檜原の時雨かきくらしあなしの嶽にかゝる村雲

右

信 成

もの思へは雲のはたてを限にて時雨もいたく降みたるかな
右歌しくれもいたくふりみたる。やさしきやうなるを。
左歌穴師の嶽にかゝる村雲。たけ有て見ゆれは。勝とす
へし。

四十四番

左

道 珍

秋の色も時雨にもろき深山路の苔の緑の露そうつろふ

右勝

如願法師

しからきのとやまの紅葉散はてゝさひしき峯にふる時雨哉
左歌あしくもみえ侍らぬを。さまてくるしかるへきに
はあらねとも。此作者の歌に。もろきといふ事あまたよ
める。少しとけなくや見ゆらん。右歌やすらかにて。歌
からもあしからず。左もろきの難は。此歌にかきるへき
にはあらねとも。猶以レ右爲勝。

四十五番

左

隆 祐

かみな月くらぬかたの空までも風に亂れてふるしくれ哉

右

下 野

忘れぬ昔は遠くなりては今年も冬の時雨きにける

左歌 曇らぬかたの空までも風にみたれてとよめる。よろしく見ゆるを。右歌 ことしも冬の時雨きにけるといへる。おかしく聞ゆ。勝劣分かつく侍れとも。猶むかしは遠くとをける心。あはれに侍れは。勝と申へし。

四十六番

左

少 輔

しくれゆく日かすも今はつもるらん浦の苫屋に色は見えねと

右

長 綱

高砂の尾上の松のはつ時雨ふるにかひなき世をやしるらん

左浦のとま屋に色はみえねといへる。あしくは見えねとも。右たかさこの松の時雨にそまぬを。ふるにかひなきとよそへたる。おもふ所ありて。よろしく見ゆ。勝とすへし。

四十七番

左

親 成

神無月時雨はかりそ櫛の屋に昔なからの音もかはらぬ

右

家 清

偽の色にやみえむ神無月つれなき松にしくれふりなは

左歌 させる事はなれとも。かはらぬ事は時雨の音はかりとよめる。あはれなるやう也。右偽のなといへる。こひねかふへきやうにもあらず。聊以左爲勝。

四十八番

左

友 茂

神無月みやまかくれの夕時雨たかたもとにか色を見すらん

右

善眞法師

時雨つゝ風きたまらすなるまゝにむら雲まよふ遠近の山

左たかたもとにか色を見すらんといへる。あしくも聞えず。村雲まよふ遠近の山。又よろしきやうなるを。冬の初とて。風定まらすとよめる事。常にはきこえず。しかれとも。歌からあしくも見えねは。持とすへし。

四十九番

左

女 房

手をたゆみをさふる袖も色に出ぬまれなる夢の契はかりに

右

家 隆

忍ひても聲たてぬへし枕より跡より戀のせめてうき頃

左させる事なく見ゆ。右歌 本歌はいかひの中に侍れとも。あとより戀のせめてうきころとよめる。おかしく見ゆ。しかあれとも。左もことなる難なくは。持と申へし。

五十番

左

前内大臣

つゝめとも心の空にたつ雲のきえぬ物からしる人はなし

右

小宰相

思ふともこふ共しらし山城のときはの森の色に出すは

左歌 下旬。さえぬものからよるかたもなしといへる。本歌に少似て侍り。七文字をとる事は。定れる事なるを。又の七文字の内。三文字をとれるに。文字のをき所もお

なしゆへにや。耳に立て聞ゆるを。右歌思ふとも戀とも
しらしといへる。やさしく聞ゆ。勝とすへし。

五十一番

左勝

權大納言

なみた川袖の玉もの下亂れ人やはしらんせくかたもなし

右

信成

我戀は深山かくれのしらま営したゆく水に結ほほれつゝ

左右ともに。なたらかに見ゆれとも。袖の玉藻のしたみ
たれ。なをやさしく聞ゆ。仍以左爲勝。

五十二番

左

道珍

難波江やみしかき芹のよとともに落る泪をしる人やなき

右勝

如願法師

芹の屋に霧たちまよふ夕烟したの思ひもみちや絶なん

左右ともに。あしくも見えぬを。右歌したの思ひのみち
やたえなんといへる。猶おかしく聞ゆ。可爲勝。

五十三番

左持

隆祐

おもふ事岩ねの苔に浪かけてかはらぬ色にぬるゝ袖かな

右

下野

いかにせん又しる人もなきなかつ泪をたれにつけの小枕

左戀につねによむ風情也。右歌又しる人もなきなかつ
すといへるつゝき。いたくえんにも聞えず。なきなかつ

涕にそへて絶ぬれば花田の帯のこゝちこそすれといへ
る。此歌のこと葉をとれるにや。しかれとも。こひねか
ふへきすかたにもあらず。左もいたくめなれたれば。持

とすへし。

五十四番

左勝

少輔

もらさしと岩こす浪をせきかへし袖にくたくるせゝの白玉

右

長綱

いかにせん苔の下行水たにも人にしられぬ道はしりけり

左歌 忍戀におほく聞ゆるふる事なれとも。いたくあし
くは見えず。右歌こけのしたゆく水といへる。いと聞よ

くもなし。左は聊勝へし。

五十五番

左勝

親成

したにのみ忍ふ泪やかよふらん君かあたりの草の上の露

右

家清

かすゝに人やとかめむ中々につゝめはもろき袖の涕を

左右ともに。下句はあしくも見えざるを。左したにのみ
忍ふなみたやといへる。平懷にきこゆれとも。忠峯か歌

に。君かあたりの草にきえなんとよめるこゝろを取れ
り。右ははしめの五文字に。かすゝにとをけるより。

いたく重點かちにきこゆらん。左の下句。聊まされり。
仍勝とすへし。

五十六番

左持

友茂

我戀は忍ふの衣しのふともしらてみたるゝ袖の月かけ

右

善眞法師

あしひきの山のゆきあひの埋水ふかき淺きもしる人そなき
左歌いと珍しくはあらねとも。さして難は見えず。右歌

山のゆきあひの埋水など。ふるまひたるやうなれとも。
さしてめにたつ事なし。持とすへし。

五十七番 久戀

左持

女房

夜とともに亂れてそ思ふ山鳥のをろの長おの永きつらさに

右

家隆

戀瀬川つれなき中にゆく水は年もせかれぬ涙なりけり

右歌としもせかれぬ泪なりけりといへる。よろしく見
ゆ。左歌めなれたるふることに侍れとも。いたくあしき
ものにあらすは。持とすへし。

五十八番

左持

前内大臣

いかにせん命もしらぬ松山のうへこす浪にくちぬおもひな

右

小宰相

年をへてつらき思ひの限をも見はてゝよはる玉の緒もかな

左松山のうへこすなみといへる。殊やさしく聞ゆ。右歌
見はてゝよはる玉の緒もかなと。是もえんに見ゆれば。
宜爲レ持。

五十九番

左勝

權大納言

山城のみつのまこもかりそめにみよしの山を戀渡る哉

右

信成

泣なみた淵となりても年ばへぬいつまで袖の下によとまん

左歌うへには久しき心かすかなれとも。本歌なとに付
てよみ侍るにや。右歌淵となりてもとしはへぬと詠る。
久心もつよく見ゆるに。下句に。いつまで袖の下によと

まんといへる。忍ふ心にかたとれるやよしなかるへき。
しかれば。以レ左爲レ勝。

六十番

左

道珍

いもせ川かさなる年のかひそなき泪はかりはうき沈めとも

右勝

如願法師

しらさきき音に聞えし三輪川の流れて人を戀ん物とは

左歌なみた計はうきしつめともとよめる。いさゝかお
ほかなく聞ゆ。なみたにうきしつむといへることは
おほかれとも。浮しつむらんもおなし事なるへきか。右
歌さして難なく見ゆれば。勝とすへし。

六十一番

左勝

隆祐

徒に年はへにけり玉の緒のなからへはとも契やはせし

右

下野

年をへてひけとよはらぬ梓弓さてやゆつるのかけはなれけん

左歌させる事なく見ゆ。右歌からはことくしけにて。
いやしきさまには見えざるを。上句に梓弓といひて。下
句にゆつるとよめるは。もしおなし事にや。しかれば左
聊可レ爲レ勝。

六十二番

左勝

少輔

契りしも俤まつやたえぬらんみとせを待し人の心は

右

長綱

いたつらに只ことの葉を積りゆくことしもおなし秋の木枯

左歌みとせを待し人の心。やさしきさまなり。右歌こと

しもおなし秋のこからし。これもあしからす見ゆれと。
左は猶勝たるへし。

六十三番

左

親成

年へてもとはれん物か三輪の山いかになりゆく契りなり共

右勝

家清

あはてのみ苦しき物と思ひしる長きうらみのあまの釣縄

左歌いかにまち見む年ふともといへる伊勢か歌のこゝ
ろとは見えなから。下句。さたかにこゝろえぬさまな
り。右歌あしくも見えず。可_レ爲_レ勝。

六十四番

左持

友茂

霜まよふ千木のかたそきあはてのみ幾夜か袖に消かへる覽

右

善眞法師

よそにのみ浅まの嵩を見しほとに我おもひさへ年はへにけり
左右ともに。させる難なく見ゆれは。可_レ爲_レ持。

六十五番

左

女房

數ならぬみしまかくれに年をへて鹽たれわふとはゝ答へよ

右勝

家隆

おりしかんひまこそなけれおきつ風夕立浪のあらきはま萩

左歌聞なれたるやうに侍れとも。さしたる難はなきに
やと見ゆるを。右歌おりしかんひまこそなけれおきつ
かせといひて。夕立なみのあらき濱萩とつゝけたる。こ
とに珍しくおかしき様。尤右爲_レ勝。

六十六番

左勝

前内大臣

日數さへしのゝをふゝき立かさねあふみち遠きゆく末の空

右

小宰相

古郷のたよりもしらぬあら磯の泪はかりそ袖にかゝれる
左歌しのゝをふゝきたちかさねといひて。あふみち遠
きとつゝけたる。おかしく聞ゆ。右歌よろしくはみゆれ
とも。猶左勝とすへし。

六十七番

左持

權大納言

吹とむるおきつしほひの夕なきに遠山うかふあきのうら浪

右

信成

またしらぬ山路の露にやとりきて月もならはぬ旅や悲しき
左歌は。海に山のうかへる。旅泊の心引て聞ゆ。然はお
ほく羈旅にも。近比はよみあへり。堀河院百首の旅の歌
に泊のこゝろをよまさる也。むかし和歌所にて。人々申
侍しは。羈旅と泊とは。詩などには同事に作れとも。中
中やまとこととはには。すこしかはるへきにやとさたし
あへりし。右歌羈旅の心は。たしかなれとも。左に勝る
へき物にはあらず。可_レ爲_レ持。

六十八番

左持

道珍

しるへせよ旅ねの夢のさめやすくつらき枕に残る月影

右

如願法師

和田の原やそしまかけてしるへせよ遙かにかよふ沖の釣舟
左右ともに。しるへの心。おなし様よろしくは見ゆ。左
つらき枕にのこる月影と云。右やそしまかけてしるへ

せよといへる。いづれも分かつければ。持とすへし。

六十九番

左持

隆 祐

けふは又明石のとよりこき出てつらき枕に残る月影

右

下 野

あしひきの山分衣うちしめり袖にあまきる峯の秋霧

左 長あるやうにはみえなから。えんなるさまには聞え

す。右はすこしやさしき様に聞ゆれとも。勝まではなかるへし。

七十番

左勝

少 輔

かへり見し古郷とをくへたつ也過にしかたにかゝるしら雲

右

長 綱

かへりみる我古郷は霧こめていやとをさかるおほよとの浦

左歌過にしかたにかゝるしら雲。よろしく見ゆ。右歌別にことなる事なし。左猶爲勝。

七十一番

左

親 成

たひの空しらぬ山路に行暮て渡りもなれぬ谷の梯

右勝

家 清

物おもふ旅ねの草の枕より色つきそむる野への秋風

左歌未練なるやうに見ゆ。右をもて爲勝。

七十二番

左

友 茂

あすは又かさなる山とかへりみんけふこえうつる峯の白雲

右勝

善眞法師

思ひ出る片野の草のかり枕あらぬ秋にや袖そ露けき

左歌 蜀旅のこゝろさしは慥なから。五文字のいかにや

らむ。すへおほせてもみえさる也。右歌からは。心も有

てよろしく見ゆるに。旅のこゝろや。ふそくなるらむ。

思ひいつるかたのゝ草のかり枕は旅なれとも。あらぬ

秋のいまはに。旅ならすとも思ひ出ぬへし。然れとも。

歌のすかたやさしく見ゆれば。以て右爲勝。

七十三番

左勝

女 房

軒はあれて誰かみなせの宿の月過にしまゝの色やさひしき

右

家 隆

さひしさはまた見ぬ嶋の山里を思ひやるにも住こゝちして

左右ともに。おもひやりたる山の家に侍るを。いまた見

ぬを思ひやらむよりは。とし久しく見ておもひ出んは。

今すこし心さしもふかゝるへければ。相搦。一番は左の

勝と申へし。

七十四番

左勝

前内大臣

しらかしのしらぬ山路になりぬともをくれしと思ふ峯の松風

右

小 宰相

住わふる深山のおくにしられけり我身をさらぬ浮世成とは

左歌もろこしのよしのの山といへる古歌の心。優に侍

る。右わか身をさらぬうき世。よろしく見ゆれとも。な

を左をもて勝とすへし。

七十五番

左持

權大納言

世のうきは人つてなから身にそひて猶此山も住かひそなき

右 信成

住かへてうきをなくさむ時や有とこれより奥の山のはも哉
左右ともに。心同事なる上に。歌からも勝劣なければ。

持とすへし。

七十六番

左 道珍

岡のへの里の草葉もうら枯て時雨をもれる松の下露

右勝 如願法師

何ゆへにふかき山とも契りけん心の外にすむ庵もなし

左歌あしくは見えざるを。時雨を傍題にや侍らん。右歌

ことはりふかくみゆれば。聊まされり。仍爲勝。

七十七番

左持 隆祐

宮古とて人にしられし我身とも忍はてなるゝ山のおくかな

右 下野

かり庵さすしはし計のさひしさと思ひしまゝにつもる年哉

左右ともに。無異事。爲持。

七十八番

左持 少輔

とはれてもまちかきほとり山陰深き三輪の芦垣

右 長綱

今は又世のうき時のなくさめにいふかひもなき山のおく哉

左右ともに。無指難。可爲持。

七十九番

左持 親成

山さとの庭の岩橋跡ふりて嵐そわたるとふ人もなし

右 家清

さひしきは庭の眞柴にふく風のそよ音信て人は問來す
左ことなることなし。右庭のましはといへる。打まかせ

ては。いかなるやまさとも。庭に柴の生る事は見え

す。そのうへ。そよをとつれてとよめるつき。家長か

好みよみしすかたにて。あはれに見ゆれとも。歌からさ

八十番

左 友茂

あしひきの山の庵に住人も猶高ねにや月を待らん

右勝 善眞法師

雲かゝる峯の松垣あれにけり世をのかれにし年やへぬらん

左右ともに。させる難はなけれとも。右聊やさしきやう

なれは。可爲勝。

女房 勝一負三 持六

前内大臣 勝三負三 持四

基家 勝四負一 持五

沙彌道珍 勝二負七 持一

隆祐 勝五負一 持四

少輔 勝五負二 持三

親成 勝三負二 持五

友茂 勝二負三 持五

右遠嶋御歌合以類布印本按合

家隆 小宰相 信成 如願法師 下野 長綱 家清 善眞法師

河合社歌合寛元元年十一月十七日

題

冬月

千鳥

不逢戀

歌人

左

前權大納言藤原朝臣爲家

左近衛權中將藤原朝臣光成

日吉禰仁祝部宿禰成茂

藻壁門院少將

安嘉門院甲斐

右

沙彌運性

少將弟

前丹後守藤原永光

沙彌圓空

散位藤原朝臣爲綱

判者 藤原朝臣爲家

散位藤原朝臣信實

左近衛權少將藤原朝臣爲教

鷹司院兵衛督

春宮辨

能遇法師

沙彌眞觀

正親町院左京大夫

左近衛權中將藤原朝臣爲氏

散位藤原朝臣行家

中務大輔藤原朝臣爲繼

一番 冬月

左

よそなから豊の明のこの比とおもひ出たる月そかなしき

右勝

沙彌運性

神代より霜降りをける眞櫛のいやとしのはにすめる月影

左歌題の歌とは聞えずして。そのことゝなきやうにみ

二番

左

さえあかす森の嵐に空晴て月は木のまの冬かれもなし

右勝

沙彌眞觀

おきいて、又社みつれ冬の夜に澄かへりたる山の端の月

左杜の月嵐にばれ。冬かれなき木のまのおもかけ。あら

はに侍を。さえあかすと侍るや。させるようなく侍ら

ん。右又こそみつれとをきて。澄かへりたる山の端の月。

まことにおほるけならす見え侍れは。猶右勝と申へし。

三番

左持

冬かれのたゝすの森のこの間よりみたらし川にやとる月影

右

少將弟

冬くれは月のかつらも木枯にまはらなれはや影のさひしき

右歌詞つゝきやすらかにいひくたしてよろしく侍るを。

左社頭月おもかけ侍れは。をとると申かたし。爲レ持。

四番

左持

夜を寒み氷るをさゝの霜の上に影さやかなる冬の月哉

右

左京大夫

袖さえてねなくに明ぬ冬の夜をいかにさひしく月も澄らん

左下句はよろしく見え侍るを。氷るをさゝと侍る。つゝ

きても聞えずや。右歌月もすむらんと侍る。おもひやりたるやうにて。本意侍らねと。また同じほとゝ申へくや。

左勝

日吉禰宜祝部宿禰成茂

天の川もゝちの橋はとたえして氷をわたす冬のよの月

右

前丹後守藤原永光

さえわたる冬は氷のことはりをみつなき空にすめる月影
右氷のことはりを氷なき空にすめるといへる。少いか
かと。心得かぬるやうに聞え侍るにや。左銀河。やすく
いひくたして侍れは。氷をわたす冬の月影。なをさえま
さると申へし。

六番

左持

兵衛督

常盤なる木のはかくれはかはらねと月は冬社寒まさりけれ

右

左近衛權中將藤原朝臣爲氏

敷妙の衣手さむし冬の夜に雪けさえたる山のはの月
月は冬こそといへるふること。ときばなるとては。誠
にこの葉かくれ心もこもりて。めつらしくみえ侍るへ
し。雪けさえたる山のはの月。さしたるとかなく見え侍
れは。暫爲持。

七番

左持

少將

くるゝより夜もすからふく木枯に涙こほりて月をみる哉

右

沙彌圓空

をしなへてあまてる月のかつらにも冬は淋しき影やそふらん
左涙氷りて月をみる哉。まことに夜もすからふく木枯

のさえて聞え侍を。右天てる月の桂にも。冬はさひしき
影やそふらんと侍る。殊に歌からよろしく侍めれは。猶
勝負いつれと申かたくこそ侍れ。

八番

左持

辨

木枯の吹もたゆまぬ夕暮に山のはさむく出る月かけ

右

散位藤原朝臣行家

冬川のそこまで月のかけさえて下行水も猶氷りつゝ
左は暮山に嵐さむく。右は冬川に氷さえたる景氣。姿詞
いつれもとりまさと申かたし。猶爲持。

九番

左

甲斐

霜雪の色もひとつにさゆれとも跡社みえね庭の月影
右勝

散位藤原朝臣爲綱

そのかみを思ひそ出る山あみの袖にもなれし冬のよの月
霜雪の色もひとつにとをきて。跡こそみえねといへる。
心あるさまに侍るを。そのかみをおもひそ出ると侍る。
同じ月のひかりも。懷舊の心あはれに見え侍れは。山あ
みの袖たちまさり侍るへし。

十番

左

能退法師

みるまゝに光そさむき冬のよの月の桂に嵐吹らし

右勝

中務大輔藤原朝臣爲繼

一むらのたゝすのもりの木枯にあたり限なき月の比哉
左歌あまりにやすく聞え侍らん。右歌下の句をすこし
いひおほせぬさまに侍れと。上の句。此歌合には。捨か

たく侍れは。可_レ爲_レ勝。

十一番 千鳥

左

爲家卿

河あひや身をうき波にたつ千鳥またはためしも鳴々そふる

右

蓮性

行かへるかも河原のとも千鳥しはしな下に祈る心は

左歌ためしなき身をうれへたるはかりにて。ようある

ことゝはみえ侍らす。右行歸るかも河原。かくこそつ

つくへく侍りけれ。しらしな下に祈る心はと侍るも。そ

十二番

左持

信實

霜さゆるつゝみのうへの川むかひ遠かたきけは千鳥鳴也

右

眞觀

神さふるたゝすの森の夕千鳥川瀬をかけて鳴わたる也

つゝみのうへ。たゝすの森。川むかひ。夕千鳥。をちかた

きけは。河瀬をかけて。おかしく見え侍れは。よろしき

持と申へくや。

十三番

左持

光成

吹まよふ川風さゆる冬の夜の曉ふかく千鳥鳴なり

右

少將弟

聲たてゝ霜夜を寒みなく千鳥かけみたらしや先氷るらん

右かけみたらしやと侍。あなちにようなく侍るにや。

左またさせる事なく侍れは。勝負なくて侍れかし。

十四番

左持

爲教

冬きては風やさむけき川千鳥ななき霜夜に今そ鳴なる

右

左京大夫

冬川の汀の水寒からし友よふちとり倦つゝそなく

兩首無_二得失。一決不_二分明。

十五番

左持

成茂

誰ためのおふせを夜半に尋ぬらん川なみ千鳥立居鳴也

右

永光

わかまたぬとしまか波に鳴千鳥更ぬる聲そ身にしられる

左下句ちからあるさまに侍るを。上句すこしおほつか

なきやうにや侍らん。右更ぬる聲そ身にしられると

いへる。さしあひたるやうに侍るうへ。としまかなみと

侍るも。みゝに立侍れは。なすらへて可_レ爲_レ持。

十六番

左勝

兵衛督

置まよふ霜夜の千鳥をちかへりなく音も寒きかもの川風

右

爲氏

くれ行は夕なみ千鳥聲たてゝ河風寒み今そ鳴なる

左右の千鳥。させるとかなく侍れと。おなし河風も。社

頭あらはれて侍らんは。勝侍るへし。

十七番

左勝

少將

冬されは加茂の川風吹過て霜夜の千鳥はるかにそ鳴

右

圓空

夜を寒みはかひの霜やかさぬらん拂もあへす千鳥鳴也

左は景氣幽にて宜しく聞え侍り。右は心詞こまかにて捨かたく侍れとも。先の番に。すてに加茂の川風まさるへしとさためつれは。是もさこそ侍らめ。

十八番

左

辨

河風に千鳥なく也むは玉のよるの氷のうへやかなしき

右勝

行家

おきつ風あら磯なみのいやましにたつことやすきさよ千鳥哉
よるの氷のうへやとさされたるそ。いかゝと見え侍る。
たつことやすきつねのことも。あら磯波の千鳥にては。
めつらしく聞え侍れは。川風よりは奥津風つよくや侍
へき。

十九番

左勝

甲斐

夜を寒み氷る汀のむら千鳥をのれや波に立かはるらん

右

爲綱

風わたる河邊や寒き小夜千鳥更行波に聲そ恨むる
氷る汀といひて。をのれや浪に立かはるらん。よろしく
こそ侍めれ。川邊やさむき聲そ恨るといへるほと。すこ
しをとり侍るへきにこそ。

廿番

左

能退

神さふるみたらし川に住千鳥なれもうれへのねをやなくらん

右勝

爲繼

音さゆるかもの河風夕かけてななき霜よに千鳥鳴也
みたらし川に住千鳥。なれもうれへと侍る。をしこめて

いかゝと聞え侍る。述懐のうたは身をうらむへくや
なとをとふらはれやうにや聞え侍るへき。かもの川風
ゆふかけて。させるとかなく侍れは。以_レ右爲_レ勝。

廿一番

不逢戀

左

爲家

君たにもねてとたのめはもろこしの虎臥のへに百夜なり共

右勝

蓮性

風あらし浦の管屋に立煙こゝろやすくはなひきやはする
左とらふす野邊。いかさまにも物とをく聞え侍るうへ
に。右心やすくはなひきやはする。ことにやさしく見え
侍れは。浦の煙たかく立まさり侍へし。

廿二番

左

信實

徒に戀をしこふるわかためし岩にも松のたねをやはみん

右勝

眞觀

身は捨つ今は此よに逢事をなにゝかへてかこひわたるらん
右初の五文字を讀あげ侍るより。作者にとりては。こと
はりもかなひ。こゝろこと葉もゆうに侍るな。詠吟し侍
るほとに。左の岩にも松のふるきためしも。徒に申おと
し侍ぬるにや。

廿三番

左持

光成

年ふれとあふみの海は名のみしてみるめよせこぬしかの浦波

右

少將弟

有明をつれなしとたにならはねは別をしらぬ曉そうき
左は詞つよくて。ちからあるさまに侍るにや。右は心か

廿四番 左 左勝
すかにて。ゆふに侍れは。れいの持とさため申へし。

爲 教
左京大夫
逢事はかたゝのおきにこく舟のみるめもしらて世を渡る哉

我戀は名高のうらのなひきもの心はよれと逢よしもなし
左はかたののおきにこく船のみるめもしらぬといへる
こと葉めつらしからす侍にや。右は名高のうらのなひ
きもの心はよれと侍る。すかたやさしく侍れは。可
爲 勝。

廿五番

左 成 茂
人しれぬ袖の雫やみちのくのいはて忍ふの山かはのみつ
右勝 永 光

富士のねになひくを人の心ともならぬおもひに立煙哉
左いはて忍ふの山川も。こゝろのおくしられて。ふかく
みえ侍るを。右なひくを人の心ともならぬおもひにと
いへる。ふしの烟めつらしく。めにたち侍れは。又以 右
爲 勝。

廿六番

左勝 兵衛 督
かりにたによる舟もなし波高きうらのみるめの下のこかれは
右 爲 氏

おもひ侘つらさのまゝに戀しなは此世はさても後を悲しき
左は詞つよく。心たしかに。右はたいかすかに。すかた
よはく侍れは。作者をとりかへはやとそ見え侍る。女房

の歌よはきこそ。ゆるさるゝ事に侍れは。尤以 左 爲 勝。

廿七番 左持 少 將
逢まてと戀に命のなからへはうきを限の世をやつくさん
右 圓 空

天の原とよはた雲の立まよひ空にみたるゝ戀もする哉
左歌心詞えんに侍を。うきをかきりと侍そ。をのつから
逢事ありとも。うかるへきかと。きこゆへきかた侍るへ
き。右歌とよはた雲の立まよひ空にみたるゝ戀もする
かなと侍る。たけあるさまにて。さのみまうへき姿に侍
らぬに。あはぬ戀の心おほつかなくやと見え侍れとも。
かやうの戀のうた。みなあはぬかほには。さしてきこゆ
る事侍らねは。ともによろしき持にて侍かし。

廿八番

左持 辨
こひしなん命をいつの爲とてか逢にかへすは残しとゝめん
右 行 家

ほし侘ぬ我心なる涙たにたかゆかりとてつれなかるらん
左右ともに。やさしく見え侍れは。又可 爲 持 歟。

廿九番

左勝 甲 斐
思ひねの夜なゝ通ふ夢ならてなとかうつゝのみちなかる覽
右 爲 綱

長らふる身を厭ひても玉のをのあふにかふへき頼たになし
よなゝかよふ夢ならてうつゝのみちなきこゝろ。え
んに侍めり。なからふる身をいとひても。あふにかふへ

きたのみなき心。すこしことはりかなはすや聞え侍ら
ん。尤以_レ左爲_レ勝。

三十番

左

能 遅

思ひねの夢をこの世のあふことに頼むさへ社かなはさりけれ

右

爲 繼

なにせんに身を長らへてうき人の心つよさのはてを見る覽

左下句すこしうちとけてや侍らん。右心つよさのはて

を。なにせんになからへてみるらんと侍心。いかにみる

にか侍らんと。思ひわきまへかたく侍れは。左勝侍れ

かし。

そむる色のふかき涙もわかぬ身に

いかゝたゝすの森のことの葉

爲 家

右河合社歌合以百花庵宗固本校合畢

群書類從卷第二百

和歌部五十五歌合廿一

院御歌合寶治二年

題

早春霞 山花 五月郭公 初秋風 海邊月
野外雪 忍久戀 逢不會戀 旅宿嵐 社頭祝

作者

左

女房

權大納言源朝臣通忠

權大納言藤原朝臣公基

右衛門督源朝臣通成

右近權中將藤原朝臣師繼

左近權中將藤原朝臣爲氏

嘉陽門院越前

右

承明門院小宰相

權大納言藤原朝臣實雄

左近少將藤原朝臣爲敦

散位藤原朝臣雅光

太政大臣

權大納言藤原朝臣定雅

中納言藤原朝臣爲經

兵部卿源朝臣有敦

沙彌蓮性

左京權大夫藤原朝臣經朝

俊成卿女

權大納言藤原朝臣公相

散位藤原朝臣信實

辨內侍

右近權中將源朝臣雅忠

少將內侍

前權大納言藤原朝臣爲家

下野

沙彌禪信

講師

判者

前權大納言藤原朝臣爲家

一番 早春霞

左勝

女房

いつくより春はきぬらん天の戸の明るをまたすたつ霞哉

右

承明門院小宰相

春きても猶氷しく衣川霞もいく重立わたるらん

左歌首尾相叶て。心詞花麗の姿にこそ侍るめれ。右歌衣

川氷しくはかりにて。かけても用なく見え侍るうへに。

猶氷れる程ならば。霞幾重とは事たかひて侍らん。いか

さまにも。以て左爲勝。

二番

左持

太政大臣

皇の御代さかふへき春なれば霞をこめて立や出まし

右 俊成卿女

君かため猶萬代の春の色に霞そめたる明ほのゝ空
左の御代榮ふへき春。世皆可希事に侍るうへに。下旬。
そのいはれ聞えて。おかしく侍るにや。右君かため猶萬
代といへる。又捨かたく侍れは。兩方の祝は。なすらへ
て持とす。

三番

左 權大納言源朝臣通忠

かすか野の草のはつかに雪消て緑も寒く霞む比かな

右勝

權大納言藤原朝臣實雄

梓弓をして春こそきにけらし野山をこめて霞たなひく
左のかすか野。めつらしき所は見え侍らぬうへに。みと
りも寒くかすむ比かなと侍るや。少し心ゆかぬやうに
侍らん。右の野山のかすみをこめて。歌からいさゝか立
増ると申へくや。

四番

左持

權大納言藤原朝臣定雅

梓弓春のみ空にいつなれてやかて霞の立かさぬらん

右

權大納言藤原朝臣公相

浅みとり春の日數もしられけりまた色薄き山の霞に
左かすみ。春のみ空にいつなれてと侍るや。いかにそ
見え侍らん。春に霞はたちそへるものにこそ申ならひ
て侍れは。あつき弓も春はかりにて。又引よせられたる
事は侍らぬにや。右また。色うすき霞にて。早春をしれ
る心。さもやと見え侍るを。ふかき迄の難には侍らぬ
と。傍題の山や。花よりさきに出て侍らん。かれこれ

をなすらへて。持にて侍るへきにこそ。

五番

左勝

今も猶雪は降つゝ朝霞たてるやいつこはるはきにけり

右

左近少將藤原朝臣爲教

天の戸の明ゆく空は霞つゝ又あら玉の春は來にけり
左雪は降つゝ朝霞たてるやいつこと侍る。殊によろし
く侍るにや。右天の戸明暮みなれて侍れは。尤以左爲
勝。

六番

左勝

中納言藤原朝臣爲經

春たては天つ岩戸の明るより神代も先や霞初けん

右

散位藤原朝臣信實

朝霞風も吾せぬあら玉の春は先こそのとけさをみれ
左はすかたよろしく。詞優に侍るめり。右霞も心こもり
て。ちからあるさまに侍るを。あら玉の春とつゝけた
る。少しおほつかなく侍る。あら玉の夏冬なと申侍るへ
きにや。しはらく以左爲勝。

七番

左勝

右衛門督源朝臣通成

天の戸の明るやをそき立春の霞て見ゆる横雲の空

右

右近權中將源朝臣雅光

まきもくのあなしの檜原猶さえて都の空はうす霞つゝ
左天の戸。させる難なく侍るにや。右あなしの檜原猶さ
えてと見えては。都の空のうす霞はるかにへたてゝ。知
かたくや侍るへき。よこ雲の空心見えわかれ侍れは。左

なを勝侍るへし。

八番

左

きのふまで雪氣に曇る天津空曙かけてはや霞ぬる

右勝

兵部卿源朝臣有敦
辨内侍

天の原雪氣の空のかすますは立ける春もえやはわかまし
兩方雪氣の空。いつれきたかに見えわかれ侍らぬを。右
の霞は。春たしかに顯れて。立まさり侍るにや。

九番

左勝

君か代の始の春ののときさを空もしりてや霞立らん

右

右近權中將藤原朝臣師繼
右近權中將源朝臣雅忠

此ほとは嵐も雪も猶さえて霞そ薄き四方の山の端
左御代の始の春の長閑き心。捨かたく侍るうへに。右此
ほととはいひ出たるほと。こひねかふへき姿に侍らね
は。是もかちは左に侍るへきにや。

十番

左

春は今と渡りくらし天の原雲ぬはるかに今朝は霞める

右勝

沙彌蓮性
下野

さほ姫の霞の衣袖さえてたつとはみれと春そすくなき
左と渡りくらし天の原雲井はるかになと。たけあるさ
まに侍るを。しつかに今見侍れは。春は今といひて。今
朝はかすめると侍ける。今の字の心にやかよひ侍らん。
右霞の衣は猶そすくなきとよみはてたる歌。近き頃お
ほくなりて。めにたち侍らねとも。覺束なき事侍らね

は。右勝に侍らん。

十一番

左持

あら玉の年を隔てゝ朝霞いつしか春もたちけるかな

右

左近權中將藤原朝臣爲氏
少將内侍

久堅の天つみ空の朝霞立こそわたれ春やきぬ覽
兩方の朝霞。あら玉のとしをへたて。久かたのそらにた
てるほと。いく程の淺深見えわき侍らし。

十二番

左

横雲の霞にまかふ山かつら曉かけて春は來にけり

右勝

左京權大夫藤原朝臣經朝
沙彌禪信

春來ぬと思ひもあへず久堅の天つみ空に立かすみかな
左歌は。年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけり
とて。近き世に見侍しにや。かすみにまかふとては。い
よいよみ所なく侍るにやと。右の歌。殊なるとかなく侍
れは。尤勝侍るへし。

十三番

左勝

明渡る峯の霞を出る日の影も曇らぬ千世の初春

右

嘉陽門院越前
前權大納言藤原朝臣爲家

いつのまに霞の衣打きらし雪降空も春はたつらん
左かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春。祝言ことに
よるしく侍れは。かすみの衣。かけてもならひかたくこ
そ見え侍れ。おほよそ立春早春は。いさゝかおもひわく
へきにやと見え侍れと。立春の題に。早春のこゝろよめ

らんよりは。ことたかひ侍らしとみゆるし侍るに。是さへ霞の衣にひかれて。たつとをきて侍る。尤負侍るへし。

左勝

山花

女房

みても猶おくそ床しきあし垣の吉野の山のはなの盛は

右

小宰相

雲の上の山も木高き櫻花御代のさかりの春にあふらし左歌おくそゆかしきあしかきのと侍るほと。梅の立枝に見ふるしたるものに侍る。よし野の花にてあらぬ。ことに凡俗の思ひよるへきさまにも侍らす。花實あひかぬとは。これらにこそ侍るらめと。有かたくこそ見え侍れ。右山も木高きさくら花。うちまかせたる歌に。ならひ侍らましかは。たけあるさまに見え侍りなまし。猶左かち侍るへし。

十五番

左

太政大臣

思ひ出よ我もむかしは立田山たかねの花も袖にかけてき

右勝

俊成卿女

春は又花の都と成にけり櫻に匂ふみよし野のやま左我もむかしは立田山。さためてゆへなからす侍らんとみえ侍り。右櫻に匂ふみよしの山。花の都に心もなりかへりて。うつり侍りぬるにこそ。

十六番

左持

權大納言通忠

みよしの山たかきの山の櫻花雲より空に匂ふ色かな

右

權大納言實雄

山かせは心してふけ高砂の尾上の櫻いまさかり也

左高木の山のさくら花。歌たけもみえ侍るを。雲より空こそ。いまたみをよはぬ事にて侍りけれ。雲より猶うへさまにほへる色にて侍らめとも。あまりにあたらしくや侍らん。右姿詞よろしく侍り。かやうの事おもかけあるやうにて。覺つかなく侍れは。左上下句。終の字おなしく侍るも。なきにはおとりて侍れは。持と申へきにや。

十七番

左

權大納言定雅

櫻花遠の里までなかむ覽あたにおらすな春の山守

右勝

權大納言公相

葛城やいつくを花と尋まし梢につくみねの白雲左おもひやりふかくは侍れと。花の遠のさとまで。なかもやりたるさまにや聞なされ侍らん。あたにおらすな春のやまもりと侍るも。上陽春管領の花。處々さためて侍らめとも。いかにそや聞え侍るにや。右かつらきの雲梢につくきて。花ひとつなるおもかけたちて侍れは。右勝侍るへし。

十八番

左持

權大納言公基

よしの山峯にたな引白雲のほふは花の盛なりけり

右

爲敦朝臣

今朝よりは雲こそ匂へ吉野山高根の櫻今や咲らん左右共に。白雲の匂ふによりて花を分るよしの山。高下をさため申侍らん。中々に侍れは。可_レ爲_レ持。

十九番

左

白波の立重なれる瀧の上の三舟の山は花さかりかも

右勝

中納言爲經
信實朝臣

けふしはや花待つくる老らくのみ山かくれに春を知らん

左歌白波のなと。こと／＼しきすかたにおもひよりて侍り。三舟の山といへるまで。さしてその難なく見え侍るを。右歌述懐には侍れと。心詞いひしりて。すかたおかしく。かやうのましらひにも。花待つくる心ちし侍らん。さて花の心みすてかたきにつきて。いはれなく勝の字をつけぬ。

二十番

左持

左衛門督通成

わくかたもなくて詠めん櫻花たちなまかひそ山の端の雲

右

左近中將雅光

櫻花さくと見しより松山の梢に波のかけぬまもなし

わくかたなくてなかもんといへる。あまりにたゝ事にてや侍らん。さくら花さくとみしより。又めつらしきやうにも侍らねは。おなし程のことにや侍るへき。

廿一番

左

兵部卿有教

尋いる花より花に日數へて山ちのすゑに幾夜とまりぬ

右勝

辨内侍

心のみ行歸りつゝ山高みおられぬ花そうつろひぬへき

花より花に日數へて。すかた詞こひねかふへきやうには侍らぬうへに。山路のすゑも覺束なくこそ侍れ。こゝろの行てといへる。おかしくとりなされて侍れは。おら

廿二番

左持

右近中將師繼

れぬ花に心うつろひ侍りぬ。又以右爲勝。

右

雅忠朝臣

泊せ山咲そふ花の色みえてことしはふかきみねのしら雲

左の吉野山は。ふもとのさとの春をへてひと日もめかれせぬといひ。右泊せ山は。咲そふ花の色みえてことしはふかしと思へり。知かたく侍れは。此番勝負不辨侍るへし。

廿三番

左

沙彌蓮性

尋きて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初櫻花

右勝

下野

みよしのゝおくまで花に誘はれぬ歸らん道の枝折たにせて

左今そしめゆふ玉たまたすきなといへる。ふるき詞をかけて。いひ知て侍れと。右山とあらはれざるに侍れと。枝折といへるに聞えて侍れは。今たつねくるより。歸らん路の枝折たにせてといへるは。花にまかへる心。猶ふかくやそめまして侍るへき。以右爲勝。

廿四番

左勝

爲氏朝臣

みよしのゝ花は昔の春なからなと故郷の山となりけん

右

少將内侍

心をは染さらましを櫻花山のかひなくうつろはんをや

左上句春なからといへるまで。珍らしき所侍らぬにや。

下句もあまりにたしかに侍るか。右そめさらましをなといひて。うつろはんとや侍る。少心覺束なく。ことたらぬやうに聞え侍れは。さりとては。左勝侍るへし。

廿五番

左

經朝朝臣

吉野山櫻にまかふ色そなき峯の白雲名にはたてとも

右勝

沙彌禪信

さくら花かはらぬ色を分かねて雲さへおしき春の山風左歌人丸か目にはといへるいにしへの跡を捨て。今の世にをよはぬこゝろなもて。更にまかふ色なく思ひさため侍らん事こそ。なかれをくみて源をわすれん心。くちおしく侍れ。右春の山風はかりにては。題の心いかゝと見え侍れ共。雲さへおしきといへる。花を思ふ心ありて幽に侍れは。尤以^レ右爲^レ勝。

廿六番

左勝

越前

みよしのゝ花の盛に成ぬれば四方の草木も匂ふ春かせ

右

前權大納言爲家

老の身にくるしき山のさかこえて何とよそなる花を待覽左山の心おほつかなくや。右くるしき山の坂こえて。凡卑のすかた。たとへは妻木をへる山人の。なをしも花の陰をさりて。よそにみえたるおもかけ。はなはた見くるしく侍るにこそ。尤可^レ負。

廿七番

左勝

女房

里なれて今ぞ鳴なる時鳥五月を人はまつへかりけり

右

小宰相

をのか妻いかに契れる郭公五月の空を分てとふらん左歌里なれて今そなくなるとて。五月を人はまつへかりけりと侍る。心姿ことに珍しく。ほとゝきすの古聲もかく侍りけるものを。まことの秀逸にこそ侍らめ。右歌さしたる難には侍らねと。をのか妻あつまやから衣なとはなくて。五月の空をわきてとふらんといへる。ことにより所なく聞え侍れは。猶々以^レ左爲^レ勝。

廿八番

左勝

太政大臣

我のみとなくや五月の時鳥たれもね覺はよそにやは聞

右

俊成卿女

かたらひし宿の軒はの橋にさ月こととふほとゝきすかな我のみとなくや五月とて。誰もね覺はよそにやはきくと侍るこそ。老の後はことに夏の夜もわかぬね覺。ことによろしく聞なされ侍れ。かたらひしといひて。さ月こととふと侍るも。おなし心にて。聞ふるされにたれ。

廿九番

左

權大納言通忠

立花のにほふさ月の時鳥いかに忍ふるむかし成らん

右勝

權大納言實雄

折はへてなけや雲ちの時鳥いまはたをのかき月きにけり左右。ほとゝきす。いつかたと聞わかれ侍らねと。いかにしのふるといへるよりは。今はたをのかといへるは。みゝにとまり侍るへくや。

卅番

左持

つれもなき月をまつとて時鳥なくか涙のにイ五月雨の空

右

權大納言定雅
權大納言公相

今よりはまたてやきかん時鳥鳴ふるしつるたい五月雨の比

つれもなき月を。有明の空にみならひて侍るにや。五月雨のゆふにまたるゝ月は。すくさすやとそ見え侍る。下句も。例のさしてそれとはおほえ侍らぬか。見たる心ちし侍れとも。かやうの事は。さのみこそ侍れ。今よりはうたかふへくも侍らぬにや。いづれもおほつかなき所侍れは。しはらく可レ爲レ持歟。

卅一番

左持

權大納言公基

人しれすまたれし物を五月雨の空にふりぬる時鳥哉

右

爲教朝臣

きかぬまの心つくしの時鳥さ月の空はまたれさりけり

左優に侍るめり。右またれさりけりといへる。おもひ所なく侍れは。尤可レ負。

卅二番

左

中納言爲經

立歸り今もなかなん時鳥をのかさ月の去年の古聲

右持

信實朝臣

郭公かたまつよりもまたれけりのかと思ふさ月きぬれは

左立かへりといへるより。ふる聲まで。珍しき事は聞え侍らぬにや。右ことなる事は侍らぬ共。我心よりよみ出したる歌と見え侍れは。右勝と申へし。

卅三番

左持

右衛門督通成

時鳥わきていつとはおもはぬにをのかさ月と今はなく也

右

左近中將雅光

さ月山月まつよひの村雨にふり出てなくほとゝきす哉
右歌またしとおもへはむらさめの空といへる近き世の歌より。ほとゝきすには。かならず村雨そふへき事に侍りにたり。五月雨すへき比さへ。むら雨いかゝと覺え侍るを。左歌わきていつとはおもはぬにといへるも。ほとゝきすに心いらぬやうに聞えて。ほいなくや侍らん。持にて侍るへきにや。

卅四番

左持

兵部卿有教

さみたれの空にそあかぬ時鳥卯月の比にまち習ひつゝ

右

辨内侍

まてといふになかすもあらは時鳥なにをさ月と思ひわかまし

左右。詞おほく聞えて。よろしきすかたには侍るを。その心たしかにおもひわきかたく侍るを。左題五月本意なく侍るにや。又可レ爲レ持。

卅五番

左持

右近中將師繼

徒に初音程ふる時鳥まつとせしまに五月きにけり

右

雅忠朝臣

時鳥忍ひし程の一聲を今はさ月になきやふるさん

左右共に。心詞させる無得失侍れは。爲レ持。
卅六番

左

沙彌蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてなかるゝねをも玉にぬかまし

右勝

下野

五月雨のふりにし友とかたらへはなれもこととふ時鳥かな
左〔歌〕さまよろしく侍るを。下句を讀上侍らぬほと。い
かに侍るへきにかと。聞ゆる所にや侍らん。右ふりにし
友とかたらへはなれもこととふといへる。心かよへる
ところさるかたも侍りなんとて。さのみはいかゝとお
もふ給へなから。又勝の字をつけ侍りぬ。

卅七番

左勝

爲氏朝臣

あやにくに初音またれし時鳥さ月はをのか時となくなり

右

少將内侍

なけやなけ初音おしみし時鳥今こそ夏は五月なりけれ
兩首いつれとわきかたく侍るを。立歸りよく見侍れは。
なけやなけといへるよりは。をのか時となくほとゝき
すは。聞所侍るへきにや。題の心はかりに。かちと申侍
るなり。

卅八番

左

經朝朝臣

たか爲に里はあまたの時鳥をのかさ月と猶忍ふらん

右勝

沙彌禪信

名にしおふやみはあやなし時鳥をのか五月は聲もかくれす
左の里はあまたこそ。何のよせとも聞え侍らね。右梅の
花色見えぬ事をおもひ出て。五月やみによせて。名にし
おふといへる。思ふ所なきにあらされは。右少まさり侍

らむ。

卅九番

左勝

越前

庭にちる花橋の五月雨に聲はしほれぬほとゝきす哉
右
身を歎く涙は時もわかれぬに五月ときなく時鳥かな
聲はしほれぬといへる心。聞ふるしたることに侍れ共。
さ月ときなくほとゝきす。題のこゝろをもつて。下句に
取あつめて。いふかひなく侍るうへに。身をなけくとい
へる。まつうけられす侍れは。左かちとこそ申侍らめ。

四十番

左勝

女房

秋といへはあへす色つく木葉かなけき社風の音は身にしめ

右

小宰相

萩のはにこゑたてね共吹風の身にしむ色に秋を知るゝ
左あへす色つく木葉かなとをきて。今朝こそ風のをと
は身にしめと侍る。ことわりかなひて。すかた詞よろし
くみえ侍るに。右吹風の身にしむ色に秋をしらるゝと
いひて。萩の葉に聲たてね共と侍るこそ。萩の葉秋風
しらぬものになり侍らん。くちおしく侍れ。猶以左爲

左勝。

四十一番

左

太政大臣

袖のうへに老の涙のかゝれるを秋きにけりと風や知らん
右勝
秋としもなと萩の葉の結ひけん夕の風に露の契りを

俊成卿女

うちまかせては。秋きにけりとかせを聞てこそ。老の涙もこほれぬへく侍るを。なみたのかゝれるを見て。風の秋をしれる心。珍しく侍るにや。右秋としもなと萩の葉とて。夕の風に露の契りをむすひけんといへるも。女の歌と覺て。優に侍れは。勝をゆるさるゝなり。

四十二番

左

權大納言通忠

をか野へやいともわかぬ松風の身にしむ程に秋はきに鬼

右勝

權大納言實雄

君かへん千年の秋の始めとしてしらする風も松にふく也左右おなし松風の秋のすかたは。いつれと色わきかたく侍るを。右祝言をおもへるうへに。下句よろしく侍るにや。又以右爲勝。

四十三番

左

權大納言定雅

今ははや東のおくにかよふらん秋のしるしの西のやまかせ

右勝

權大納言公相

けふも又夕をわきて久かたの空よりすくる秋のはつ風左西の山かせ。近き世に。月吹かへせとて。はしめて聞え侍るにや。此今ははやと侍る心。秋の日數にとりて。いくほとに事にや侍らん。金風は。誠にみちのく山にたより侍らめと。幽玄のすかたには。聞なされす侍るにや。右夕をわきてといへるほど。優艶なるさまに侍るを。空より過ると侍そ。少し荒涼なる所見え侍れ共。東のおくにかよふ西の山かせよりは。秋のはつかせむかしより名譽侍れは。猶右可勝にこそ。

四十四番

左勝

權大納言公基

いとゝ又身にしむ風の吹なへにはやしられぬる秋の空哉

右

爲教朝臣

うたゝねの心も涼し吹風のめには見えすて秋やきぬらん

左吹なへに身にしられぬるなど。たけあるさまに侍るにこそ。右ふく風のめにみえずといへる事。ことに不

庶幾之由おしへを。今思ひ出して侍れは。以左爲勝。

四十五番

左勝

中納言爲經

吹風も涼しく成ぬ久かたの天津み空に秋やきぬらん

右

信實朝臣

身に寒き秋そきぬらし萩原やさらては風のさしもやはふく

秋のはしめの心。身に寒きといへる。あまりにや侍るへき。涼風至るなとこそ申侍るめれ。下句なとは。ことに

したりかほに聞え侍るにや。天津み空に秋やきぬらん。させる事なく侍れと。かちとまてはいかゝと見え侍れは。爲勝。

四十六番

左勝

右衛門督通成

萩の葉の末ふくいこそ風の音よりそほのかに秋を聞はしめつる

右

右近中將雅光

袖のうへに露は亂て結へとも猶色みえぬ秋のはつ風

左めつらしき所なく。させる難も侍らす。右袖の露みたれてむすへとも猶色見えぬと侍る。秋風いつより風の

色にみゆへきにかと聞え侍れと。左も聞はしめつると

いひはてゝも。際かたく侍るへきにや。爲_レ持。

四十七番

左

兵部卿有教

覺束な秋を告よと誰植てけきは身にしむ萩のうはかせ

右勝

辨内侍

くる秋も只わか爲とおもひつゝきけはや風の身にはしむ覽

左は誰秋を告よとうへけんとおほつかなく。右はたゝ

わかためとおもひて聞わたる心。いづれも身にしむと

は見え侍れと。萩のうは風は聞ふりたるかた侍れは。妖

艶のすかたに付て。以_レ右爲_レ勝。

四十八番

左

左近中將師繼

をしなへて身にしむのみか吹風の音もさやかに秋はきに鳧

右勝

雅忠朝臣

吹風は昨日もけふもかはらねと身にしむをとに秋そしらるゝ

左右おなしやうのすかたに侍れと。身にしむのみかと

侍るよりは。身にしむをと増り侍るへし。

四十九番

左勝

沙彌蓮性

天の川かは風涼しとを妻のいつかと待し秋や來ぬらん

右

下野

いつもふく目に見ぬ風の秋といへは身にしむ色のいかそふ覽

左は歌からことによろしく侍るにや。いつもふくめに

みぬ風。負侍るへし。

五十番

左勝

爲氏朝臣

打つけに先そ身にしむ秋きぬといふ計なる萩のうは風
右 少將内侍

いかにして身にしむ色を染つらん昔こそあらめ秋の初かせ

左いふはかりなる萩のうは風。右をとこそあらめ秋の

はつかせ。此等の勝負は。いく程のこと侍らぬを。そめ

つらんと云る。あまりにたしかにや侍る。又左勝侍るへ

きにや。

五十一番

左勝

經朝朝臣

白妙の水かけ草やなひく覽天の河原の秋のはつ風

右

沙彌禪信

尋いる秋のしるしもしられけり風吹かはる三輪の杉むら

左下句今まで誰も讀殘すへしとも聞え侍らぬうへに。

水かけ草なひくをみれば時はきにけりなとは。み習ひ

て侍るを。白妙とてこそ。水の色にや草の色にやと。お

ほつかなく侍れ。右三輪の杉むら。秋のしるしなとは。

さもやと〔聞え〕侍るを。尋ねいと侍るこそ。秋のきた

るにや。人の至るにや。短慮まとひて辨へかたく侍れ。吹

かはる風のをとも。あまた聞なれて侍れは。可_レ爲_レ持。

五十二番

左勝

越前

風わたる秋の夕の萩の葉にをけはかつちる露のしら玉

右

前權大納言爲家

吹風も朝氣涼しく成にけりねぬる夜のまに秋やきぬらん

左はしめの秋の心。覺つかなく侍るにや。右ねぬる夜の

まにもとめ出したる事に侍れは。勝負例の事にてこそ

侍らめ。

五十三番 海邊月

左勝

女房

鹽かまの浦の煙も絶にけり月みんとてのあまのしわさに

小宰相

和歌の浦やおなしみなとの君か代に又立出て月をみるかな

左此鹽竈の浦こそ。業平朝臣。わかみかと六十餘國の中

に似たる所なしと。申をき侍るにも猶過て。珍しくあり

かたき海士のしわさとみ給へれば。今の世まで。いかて

よみ残し侍るにか。世くたれりとは。おもふへくも侍ら

さりけり。もろくのみちもかく侍らめと。たのもしく

も侍るかな。右の歌。おほるけにては。此かたはらにた

五十四番

左

太政大臣

芦そよく難波の浪の數々に身にしめてすむ月の影哉

右勝

俊成卿女

しほるなよ月をは袖の秋の夜にもしほたれてもすまの浦人

難波の浪のかすく身にしめてすむといへる景氣。

さこそとすてかたく侍に。しほるなよ月をは袖のとて。

もしほたれても須磨の浦人といへる心詞。妖艶のすか

た。ことによるしく侍るにや。とふ人あらはといへる本

五十五番

左勝

權大納言通忠

難波かた海士のたくなはなかし共思ひもはてぬ秋の夜の月

右

權大納言實雄

昔よりきくやあかしの浦の波空にしらるゝ秋の夜の月

左あふ人からの秋の夜。あまのたくなはに引なされて。

よろしく侍るに。右あかしのうらの名。このほとおほく

五十六番

左

權大納言定雅

和田の原空もひとつにみ渡せは移らぬ月に浪そかゝれる

右勝

權大納言公相

をし照や難波の浦の夕なきに芦の末葉を出る月かけ

左下句をろかなる心まよひて辨へ侍らす。海より出て浪

に入。よひのま曉かたなどの事に侍るにや。さならては

うつらぬ月にかゝる浪。思ひよるへき事ともおもひ侍ら

五十七番

左

權大納言公基

秋の夜は月にそみかく玉くしけふたみの浦によする白波

右勝

爲教朝臣

ます鏡みぬめの浦は名のみしておなし影なる秋の夜の月

月にそみかく玉くしけふたみの浦。その故侍るに。ます

鏡みぬめの浦は名のみしておなし影なるとおもひより

侍るは。いさゝか珍しく侍るにや。たまくしけよりも見

五十八番

左

中納言爲經

大かたに曇りなき夜の月なれはさこそ明石の浦もさやけき
右勝 信實朝臣

いさこよひなたのあまのこしるへせよ汐ちの月を漕出てみん
左くもりなき世の月。その心すてかたく侍るに。さきに
申侍りつるあかしの浦。殊に繁昌し侍るにや。右いさこ
よひなたのあまの子なと。いひ知てさる姿と見え侍れ
は。かち侍るへし。

五十九番

左勝

左衛門督通成

名にしおふ長井の浦の秋の夜にゆくともみえてすめる月哉

右

右近中將雅光

見渡せは野嶋か崎の波間より山の端ならて出る月影
野嶋か崎ふたつなき物とおもひしを。水底にといへる
古今の歌。下句たかふ所なく見え侍る上に。長井の浦。夜
雲〔収〕盡涕まで思ひやらるゝかた侍れは。以_レ左爲_レ勝。
六十番

左

兵部卿有教

和田の原八重の汐ちに雲消て月澄のほる須磨の浦かせ

右勝

辨内侍

もしほ汲夜はのさ衣袂にそあまのしわさは月やとしける
左景氣思ひやられて。みたる心地侍るへし。右さきに有
かたく見え侍りつる海士のしわさ。おなしこと優美に
して。これまでかたひき侍りぬる。偏頗にや侍らん。

六十一番

左持

左近中將師繼

漕出し松浦の海を詠めつゝ月になれぬる秋のさよ姫
沖イ

右

雅忠朝臣

白妙の袖しの浦による波の數さへみえて月そさやけき
秋のさよ姫珍しく。數さへ見えては。めなれて侍れと。
左はちからをいれ。右はやすくいひなして。やうかはり
たる跡。持と見え侍るにや。

六十二番

左勝

沙彌蓮性

海原やなこの鹽干の眞砂ちに清き月夜のさもさやけき

右

下野

更ゆけは浦こく舟のをとまてもさすみ渡る夜半の月かな
影イ

こく舟のをとまてすみ増る心。聞なれて侍るにや。なこ
の鹽干の眞砂地。誠にきよけに見え侍れは。以_レ左爲_レ勝。

六十三番

左

爲氏朝臣

なかしとも月に覺えぬ秋の夜をなとか更井の浦といふ覽

右勝

少將内侍

秋をへて世わたるあまの捨衣鹽なれにける袖の月影
左なとか更井のなといへる程。おもふ所有けに見え侍
るを。月に覺めなといへるや。たゝ詞に侍らん。世をわ
たる海士の捨衣なれにける袖の月は。見所侍るへきに
や。右勝侍るへし。

六十四番

左勝

經朝朝臣

和歌のうらや昔にかへる波の上に光あまねき秋の夜の月

右

沙彌禪信

里の海士の汐たれ衣ほしやらてさなからやとす秋の夜の月

右上下かなひてよろしく侍るに。左和歌の浦むかしにかへるとをき。ひかりあまねき秋の夜の月といへる。尤是賞翫。可_レ爲_レ勝。

六十五番

左勝

越前

あかしかた鹽やくあまの煙たに今こそなけれ月のすむ夜は

右

前權大納言爲家

秋の夜の名高のうらの鹽風に影さしのほる月のさやけさ左月のすむ夜といへるほと。こひねかふへきすかたにはあらす侍るを。右おなし文字あまりにおほく侍るにや。歌合には。とかめたる事に侍れは。右負侍るへし。

六十六番

左勝

女房

いとゝ又限りも見えずむさし野やあまきる雪の曙の空

右

小宰相

水無瀬山近き御狩の面影やかた野の雪に猶残るらん

左歌むさし野の遠望。申ならひたる事に侍るを。あまきる雪の明ほのとは。限みえぬ所今一きはおもひやられ侍るへし。右みなせ山近き御狩。よみふるさぬさまに侍るうへ。おなし雪も。おもかけ残るとては。いかはかりかとは。心わきまへかたくこそ。右は心あさく。左は雪ふかく侍れは。むさし野はるか(に)殊勝にこそ。

六十七番

左勝

太政大臣

雪おもる身に習ひても思ふ哉野なる草木のいかにさゆらん

右

俊成卿女

狩にこし跡たにもなく埋もれて雪ふか草の野への古里左身にをもち雪にならひて野なる草木をおもへる心。その故ふかく見え侍るにや。右かりにこし跡たゆるふか草のさとは。雪にしもかきらす。ふりはてたるなれは。又以_レ左爲_レ勝。

六十八番

左

權大納言通忠

かち人の分ゆく末もしら菅のま野の古道雪つもりつゝ白雪のふる枝の小萩けさみれはあらぬ花咲宮城野の原分ゆくかたもしらすけのまのゝふる道。ことに雪も降侍りぬらん。古枝の小萩も。あたらしくは侍らぬを。白雪のとて。あらぬ花は。はしめて見侍れは。めもとまり侍るにや。仍以_レ右爲_レ勝。

六十九番

左

權大納言定雅

春日野を分ゆく人の袖さえて道もさりあへす雪は降つゝけぬかうへに又跡つけよ玉鉦の道ある御代の野へのしら雪左雪上の句。少し打とけて見え侍るにや。右野外雪。只一句に限りて無念なるかたは侍れとも。有道の世尤賞翫すべくこそ侍れは。又以_レ右爲_レ勝。

七十番

左勝

權大納言公基

霜枯の小野の淺茅生跡もなく心のまゝにつもる白雪

右

爲教朝臣

かきくらし雪は降つゝ梓弓すゑの原野はいる人もなし
左雪いみしくつもりて侍るうへに。雪につけてもあつ
さ弓末の原野は。とかりの人もいる事さためて侍らん
ものを。霜枯の浅茅生。猶よろしく侍れは。以_レ左かちと
申すへし。

七十一番

左持

中納言爲經

石上ふる野のみ雪ふみ分て今そむかしの跡もみゆへき

右

信實朝臣

をのつからみてものそみは及ふやと雪の朝の野へに出ぬる
思ひかねたる雪のあした。眺望あはれに見なされ侍り。
ふる野のみ雪。歌さまよろしく見え侍るを。題の心やあ
さく聞え侍らん。今そむかしの跡も見えるへきといへる。
捨かたく侍れは。持にて侍るへきにや。

七十二番

左勝

右衛門督通成

梓弓いる野の道も跡たえて鹿もかよはすふれる白雪

右

右近中將雅光

篠竹の野への古みちまよふ共雪ふみならしとふ人もかな
さをしかの入野のすゝきをとりて。あつさゆみに引な
をせるに。しかも又かよはすといへる。思ふ所なきにあ
らす侍るにや。さゝ竹の野へ。珍しく見え侍るに。ひと
ふしよせあることも侍らぬにや。いつくの野にても侍
りぬへかりけると見え侍る。仍左勝侍るへし。

七十三番

左

兵部卿有教

うつもるゝ枯野の薄ふみ分て猶ゆく末も雪のふる道
右勝 辨内侍

木かしはもとより埋む雪の上にふるからを野の道や絶なん
うつもるゝ枯野ふみ分て。猶ゆくすゑも。いかなる所侍
るへきなど。ゆかしく侍るを。雪のふるみち。たゝおな
し事にや侍りける。無念にや侍るへき。もとかしはもと
よりうつむとて。白雪のふるからを野と侍るは。上下あ
ひかなひて。もとの心見え捨かたく侍るにこそ。右かつ
へし。

七十四番

左持

右近中將師繼

いそのかみふる野の野守ふみ分て雪にも御代の道は有けり

右

雅忠朝臣

終に又もみちぬ色や是ならん野中にたてる松の白雪
君の有道の跡。臣の勸節の貞。左右各存_三旨趣。彼此難
申_三勝負。尤可_レ爲_レ持。

七十五番

左勝

沙彌蓮性

下折の井なのふし原いやしきにまなくし雪の猶積るらん

右

下野

木の下の露にや増る宮城野のみかさ取あへぬ雪の深さは
みかさ取あへぬ雪。木の下露にまさるへき事。すてに詞
に顯はれて。疑ひなくや侍らん。井なのふし原いや敷
に。まなくもつもれる雪。見所殊に侍れは。尤以_レ左爲_レ勝。

七十六番

左勝

左勝

爲氏朝臣

今朝のまも跡こそ見えね白雪のふるからをのゝ本の通ち

右

少將内侍

おもふよりいとゝいく野の道絶てまたふみもみす積る白雪
左ふるからをのゝもとのかよひち。かしはなくては跡
はみえぬ雪に。もとの心もわかれぬへく侍るにや。右い
く野の道またふみもみす。おかしくおもひ出され侍る
に。おもふよりといへる五文字。少し覺束なく侍りけ
る。左けさのまもとといへる心。いさゝか侍るへきにや。
かち侍るへし。

七十七番

左持

經朝朝臣

降雪に野中の松も埋れて今はあらしのころたにもなし

右

沙彌禪信

ふみ分て行へき道も白雪のしらぬ野中の末そゆかしき
聲たにもなし。末そゆかしき。いく程の勝負なし。

七十八番

左勝

越前

かすか野や秋の名残も見えわかす皆白妙の雪の下草

右

前權大納言爲家

淺茅原枯生の小野の草の上にまじる色なく積る白雪
皆白妙。まじる色なく。おなし心に見え侍るを。枯生の
小野。そことも見えず。かすか野にをよひ侍らし。

七十九番

忍久戀

左持

女房

つれなきもいはねはこそと思はすは年月いかて長らへもせん

右

小宰相

人しれぬ心にふるす年月の命となれる程そつれなき
左題の心おかしく取なされて。下句殊よろしくこそ侍
れ。右人しれぬこゝろにふるすとし月といへる。題皆上
句にきはまりて侍れと。歌から優に侍るを。ほとそつれ
なきと侍るそ。いかゝと聞え侍る。只はかなきなとやう
によみ。よはゝしきさまに侍らは。今少し艶にも侍る
へくや。然れ共。これ程のつかひけるほと思出侍らね
は。はしめて持の字をゆるさるへきにや侍らん。

八十番

左勝

太政大臣

さのみやは絶ぬ思ひもかくれぬの下ゆく水のくるしかるへき

右

俊成卿女

秋をへて時雨るゝ色を忍ふ山露をもらすな道のはてまで
左かくれぬの下ゆく水そ。いかにと見え侍れと。詞やす
らかにいひ知て。殊によろしく侍るめり。右ことなる難
には侍らねと。忍ふ山は。みちのおくと申し習ひ。みち
のはてなるとは。ひたち帯にいひつけて侍るへかりけ
る。負侍れかし。

八十一番

左持

權大納言通忠

年をふる涙なり共をのつからもらさは袖の隙もあらまし

右

權大納言實雄

下にのみ忍ふの山の岩小菅いはて思ひの年そへにける
左としをふる涙なりともなと。上句艶に侍るを。右又い
はて思ひのとしそへにける。よろしく侍れは。是をは持

とこそは申侍らめ。

八十二番

左

權大納言定雅

逢事をまつに涙の夕時雨としはふるとも色に出めや

右勝

權大納言公相

名取川思ひくちても年はへぬまた顯はれぬせゝの埋木

左まつに涙の夕時雨。つゝきもいかゝと聞え侍に。色に

出めやなといひ果たるなど。可レ然すかたならすや侍ら

ん。右名取川。下句よろしく侍れは。右尤かち侍るへし。

八十三番

左

權大納言公基

逢事を命にかへておもふ身の何と忍ひて年のへぬらん

右勝

爲教朝臣

水底になひく玉藻の年を経て思ひ亂ると人はしらしな

左下句少し無念ともや申へく侍らん。右玉藻なといへ

る。歌さまいさゝかまさるにや。

八十四番

左

中納言爲經

しりかたき人の心のやすらひにいはておもひの年そへにける

右勝

信實朝臣

月故と人にはいひて誰をかもめてゝも戀の老となるらん

左上句題覺東なく侍るうへに。休らひも少し心ゆかす

侍るにや。右月故と人にはいひて誰をかもめてゝも戀

の老と成らん。心たくみに。すかたおかしく侍れは。増

り侍らん。

八十五番

左

右衛門督通成

忍ふるもくるしき物を夏引の手引の糸の年をへぬれは

右勝

右近中將雅光

思ひつゝ幾年なみに朽ぬらん忍ふの浦のあまのたくなは

左

左手引の糸の年をへぬれはと。終の句にいひはてたる。

糸のほとよりは。こゝろつよく聞え侍るにや。右あまの

たくなは。歌のすかた増りて優に侍らん。例のかんかへ

いたし侍らんほと。勝と申侍るへし。

八十六番

左持

兵部卿有教

我ならぬ忍ふの山の松の葉もとしへて色に出る物かは

右

辨内侍

おもふこといかて心のうちにのみつもる月日を知人のなき

左我ならぬといひはしむるより。出るものかはとはて

たるまで。いつくこそとみゆる所なく。詞つよくよみ出

して侍るめり。右あやにくにちからなく。優なるすかた

とりくに侍れは。よき持とこそ見え侍れ。

八十七番

左勝

右近中將師繼

人しれすおもひしほれて朽ねとや袖に年ふる我涙かな

右

雅忠朝臣

徒に年をふる野の小篠原露たに秋の色に出めや

右小篠原ことなるふしもみえ侍らぬにや。秋と侍るに

もさせる要なくや。左朽ねとやと侍るそ。心ゆかぬやう

に侍れと。袖に年ふるわかなみたかなといへるは。よろ

しく侍れは。いさゝか勝とや申侍るへき。

八十八番

左

すかのねの忍ひに結ふ下紐のとけすや戀んとしはへぬとも

右勝

沙彌蓮性

下野

戀をのみ賤か庵のかや蒔しき忍ふまにとしそへにける

左下紐忍ひに結ふほと。おもひいれて侍るにや。右俊頼

朝臣歌おもひ出され侍れとも。ことのつゝき。是もよろ

しく侍れは。右かちにや。

八十九番

左

いはて思ふつらきまゝなる年月を誰みよ何にかゝる命そ

右勝

爲氏朝臣

少將内侍

おさふへき袖は昔に朽果ぬわか黒髪よ涙もらすな

誰みよなにゝといへる。艶に見え侍るを。袖はむかしに

朽果ぬわか黒髪よなみたもらすな。題のこゝろふかく。

面影哀れに。いたはしくも見え侍れは。左負侍ぬるにや。

九十番

左

經朝朝臣

山川の下行水の下にのみをとこそたてね年はふれとも

右勝

沙彌禪信

秋をへてふるき軒はの忍草しのふに露の幾世へぬらん

左山川の下ゆく水とはいかに侍るにか。山高みなと聞

なれて侍る。河の水下ゆくは。理も叶はずや。又音こそ

たてねといへるも。山川のをとにのみきく百敷をなと

こそ。ふるくも申習ひて侍れ。かたゝおほつかなくや。

右力あるやうには侍らねと。難なきにつけて爲勝。

九十一番

左勝

ふるさとの忍ふの露も色に出ぬいつ我袖よ人の問まで

右

越前

いはておもふ枕の下の涙ともしらしな人に積るとし月

左しのふ心すくなくや侍らん。右つもととし月。術つき

たるにこそ侍るめれ。例の負侍るへし。

九十二番

左勝

女房

あかしかねまたるゝ物と成に鳧さしもいとひし鳥の八聲を

右

小宰相

下の帶のあたに結ひし中なれはめぐり逢へき限たになし

左さしもいとひし鳥の八聲。またるゝ物となれる心。き

き所多く侍る。ふかくおもひ入られて。優美のすかた。

幽玄の心。殊によりしくこそ侍れ。右下の帶のあたにむ

すひしなとは。さもやと見え侍るに。下句限りたになし

とて。戀のこゝろ今は思ひすてたるやうに見え侍る。題

の本意(に)侍らねは。尤爲負。

九十三番

左

太政大臣

みを浦の海士のもしほ木こりすまに立や煙のよそに消つゝ

右勝

俊成卿女

分し夜の契もきえてかなしきはとへと答へぬ道芝の露

左のさま。よろしきすかたにば侍るを。こりすまにとは

かりにても。あひにける心は侍ぬへけれども。右わけし

夜のと云るより。題の心。今少しあらはに侍るにや。い

かゝ。

九十四番

左

かきりとも思はてしもやむすひ置し其儘にひぬ袖の白露

右勝

權大納言通忠

思ひ侘我心にもわすれぬをなけにいひてもねはなかれつゝ

左歌下句少し心ゆかぬやうに侍るうへに。右歌の心。さる事も侍りなんと。めつらしく侍れは。勝侍るへきにこそ。

九十五番

左勝

權大納言定雅

徒に明ぬ暮ぬと玉くしけ二たひあはぬ身こそつらけれ

右

權大納言公相

忘れぬも我身の咎と知にけり有しにかはる曉もかな

右ありしにかはる曉もかなと。優なるやうには聞え侍るに。心いかにと侍るにか。短慮まとひて。思ひわき侍らぬほと。左詞はかくれなく侍れは。勝へし。

九十六番

左

權大納言公基

今こんといひし契やあた人の只僞りの情なるらん

右勝

爲教朝臣

思ひきやかゝるつらさを契にて有し其よを限るへしとは

左右共に。おなし程に見え侍るに。今こんといひしはかりにても。逢心には。かなひ侍らめと。有しその夜は。慥に侍れは。歌合の習ひ。勝と申侍るへきにや。

九十七番

左勝

つれなくそいきてつらさを歎ける逢にかへてし命ならずや

右

中納言爲經
信實朝臣

いとほるゝつらさある世の逢事を何そは又とたのめ置けん

何そは又とたのめをきけんといへる心。おかしくおもひ入てよろしく侍るを。いきてつらさを歎ける。逢にかへてし命ならずやと侍るこそ。殊に艶に侍れ。右捨かたく侍れとも。左猶勝侍るへきにや。

九十八番

左

右衛門督通成

今はたゝかさねし袖のうつり香も心のうちに残るはかなさ

右勝

右近中將雅光

うしとても恨みは果しかた糸のなからへは又逢よありやと

左袖のうつり香。さもと覺え侍るな。床の枕ねやの筵なとをきて。心のうちにしも残るかと覺束なく侍り。右きたいとの存命は又逢よありやと侍る。させるとかむへきふしも見え侍らねは。爲勝。

九十九番

左勝

兵部卿有教

頼めをきし我身やあらぬと計を今一たひといかてとはまし

右

辨内侍

またれしを替るつらさと思ふまにやかてこぬ夜の積りはてぬる

左は道雅卿思ひ絶なんの心。優に侍れとも。思ひかたく侍るにや。右やかてもちりのといへる事かよひて。共に心詞ふかきをかすおなしほとにて。爲持。

百番

左 右近中將師繼

わすらるゝ思ひに消ぬ命こそをのか物から恨られけれ

右勝 雅忠朝臣

はかなしやたか心よりと絶してみる夜もしらぬ夢のうきはし

左心おかしく侍るに。下句そ我身をはうらみぬ事にい

ひきためたるやうに侍る。右夢のうきはし。心もうかれ

たるさまに侍れと。こと葉つゝき優なるすかた侍れは。

まさると申へきにこそ。

百一番

左勝 沙彌蓮性

頼めてもこぬ偽に更し夜をなかくや人の別はてぬる

右 下野

驚るかす人しなけれは今はたゝ見しは夢かと誰にとはまし

左こぬいつはりにふけし夜を。殊によるしく侍るめり。

右もみしは夢かと誰にとはましなと。優に侍れとも今

はたゝといへるほと。おとり侍るへし。

百二番

左勝 爲氏朝臣

有し夜を戀る現はかひなきに夢になきはや又もみゆやと

右 少將内侍

夢にたに今はみゆとは見えし只忘れし人にそはぬ身なれは

同夢。左めつらしくみなし侍るにや。爲勝。

百三番

左 經朝朝臣

曉はつらき習ひの鳥のねを二たひきかぬ契なりけり

右勝 沙彌禪信

思ひきや手枕ふれし朝寢髪みたれても又戀ん物とは

左上句よろしく侍るを。八聲の鳥のね二たひきかぬと

いへる心。おほつかなくや。ふた夜といへるこゝろなる

へきにや。逢事ひと夜あひたるによりて。題の心ふかゝ

るへきにあらざるや。右〔た〕まくらふれしあさね髪。作

者のおもかけ。いかゝとは覺え侍れと。勝侍るへし。

百四番

左勝 越前

宵のまの更ゆくかねの恨たにおもひ絶てもとしへぬる身を

右 前權大納言爲家

我はかり心なかさをかゝる共みしは夢とや思ひあはせん

左歌今の世まで思ひつゝけられ侍らん。戀しきことに

物わすれせず。さもおかしくこそ侍れ。右の夢語。うけ

られす侍れは。又負侍るへし。

百五番 旅宿嵐

左勝 女房

松かねの枕さためん方そなきいかにけしき夜はのあらしそ

右 小宰相

幾かへり馴ぬ嵐もしくるらん都をしのふよはのまくらに

右の歌題の外の時雨るらん。何の用共聞え侍らぬ。夜半

の枕になれぬあらしも。又こひぬかふへき詞つゝきな

らすや侍らん。左上下あひかなひて。旅宿の心景氣。お

もかけあらはに侍るに。いかにねし夜か夢にみえけん。

それとはなく思ひ出され侍るに。よろしくこそ。左尤勝

侍るへし。

百六番

左持

太政大臣

あらしとて夜な／＼聞し音よりも旅ねの庵ははけしかり鳧

右

俊成卿女

露けきを契りやをきし草枕嵐吹そふ秋のたひねにあらしとて夜な／＼聞しと侍るほさは。すこしおほつ
かなく侍るに。旅ねの庵ははけしかりけりとこそ。故郷の事も聞なされて。よろしく侍れ。露けき草枕あらし吹そふ秋の旅ねなといへる。歌のすかた優艶に侍れは。持と申すへきにや。

百七番

左

權大納言通忠

夜を寒き衣かせ山秋更てかたしく霜をとふ嵐かな

右勝

權大納言實雄

いく夜われかたしき侘ぬ旅衣重なる山の峯の嵐に左させる難には侍らねと。歌合には。ふるくも旅の心。都のとをきをおもふへきやうに申をき侍るにや。かせやま秋更てかたしく霜をとふあらしなと侍る。殊にねかふへき風舩にも侍らぬうへに。旅衣かさなる山は。珍らしき事に侍らねと。題の中に見え侍れは。爲勝。

百八番

左

權大納言定雅

草枕夢のかよひち吹とちて夜半の嵐のをとのさやけさ

右勝

權大納言公相

嵐ふく峯のさゝやの草枕かりねの夢はむすふともなし此左の歌も。夢のかよひち吹とちてといへるほと。乙女の姿をおもへる雲のかよひちよりは。誠にすくなく侍

るにや。嵐吹峯のさゝや。おほつかなきふしも侍られは。右勝侍るへし。

百九番

左

權大納言公基

吹まよふ嵐の風の寒き夜にかりねさひしきさやの中山

右勝

爲教朝臣

かり枕夢もむすはすさゝのやのふしうき程の夜半の嵐に左やすらかにて。させる難侍らぬにや。右さゝの屋のふしうき夜半なと。結構し出して侍る心。更に優に侍るへきにや。

百十番

左勝

中納言爲經

篠枕またふしなれぬうたゝねに峯の嵐も心してふけ

右

信實朝臣

こよひ又爰に旅ねの松の陰むへ山嵐音のさひしき右歌すかた詞は。いひ知ておかしく聞え侍るを。むへ山あらしと思ひあはせん心。少し覺束なく侍るへし。左歌夏衣またひとへなる秋風の峯のあらしに吹なせるは。をと増りてこそきこえ侍らめ。爲勝。

百十一番

左勝

右衛門督通成

あし引の山の嵐をかたしきてならはぬ岩の枕をそする

右

右近少將雅光

いかはかり都の遠く成ぬらん夢ちもよそに吹嵐かな左あらしをかたしくといひ。右ふく嵐かなと果たる。共に好み詠すへきすかた詞には侍らねと。左ことはりつ

よく侍るにや。右旅の習ひ。みやこ近き程は見え。遠さ
かれは。みぬにや侍らん。もろこしも夢に見しかはな
と。申習ひて侍るにや。左には劣り侍るへきにこそ。

百十二番

左勝

兵部卿有教

片敷ていく夜になりぬ旅衣袖に馴ぬる峯の嵐を

右

辨内侍

岩のうへの嵐の風はいと寒し旅ねの衣かす人もかな
右ふるき歌詞は同句にならひて。珍しき心聞えずや侍
らん。左たひ衣袖をはまきをきて。かたしくものに峯の
あらしをせられて侍る。ことはりたかひてや侍らん。但
此番。左思ひ出すくなく侍れば。是はかりは。こゝろの
負に申なすへくや侍らむ。

百十三番

左勝

右近中将師繼

さゆる夜の嵐に夢もむすひけり身はならはしの草の枕に

右

雅忠朝臣

草枕旅ねの床の淋しさもことはり過て吹嵐かな
左さゆるといひて。させる用なくや見え侍らん。あらし
にならひて草の枕ゆめむすふ心。さも侍らん。右あまり
にやすくて。照燭の歌なと申へくや侍らん。爲負。

百十四番

左勝

沙彌蓮性

岩かねの枕の嵐さらてたにいねかてなるを心してふけ

右

下野

行暮てひと夜宿かる松かねに何と嵐の床はらふらん

左歌上下句はしめの同文字。みとかむる折も侍れとも。
いねかてなるを心してふけ。ことによろしく。おなしあ
らしも聞え侍るにや。右なにとあらしのといへる。心に
いれぬさまに侍れば。尤以左爲勝。

百十五番

左勝

爲氏朝臣

打とけてねられやはする草枕むすふ山路の峯の嵐に

右

少將内侍

みやこ人何しか夢に見えつらんかりねかなしき峯の嵐に
左の草枕は。むすふ山路にうちとけてねられぬをかこ
ち。右のかりねは。都人何しか夢に見えつらんと思へる
はと。をのく心なきにあらされは。峯のあらし。かた
かたいつれと聞わかれ侍らす。爲持。

百十六番

左勝

經朝朝臣

古郷にかよふ夢ちの關守は旅ねおとろく嵐なりけり

右

沙彌禪信

嵐ふく山ちかさなる草枕むすふ旅ねの夢そすくなき
左旅寝おとろかすところ。ありたく聞え侍れとも。右むす
ふ旅ねの夢そすくなき。又見なれて侍るうへに。あらし
吹やまちかさなるとは。いひくたされぬやうに侍るに
や。關守ちからありけに侍れば。勝侍るへきにや。

百十七番

左勝

越前

花薄かりねの野へに片敷て月も嵐も都戀しき
右 前權大納言爲家

草木ふくむへ山かせと聞しかと猶そ旅ねの袖はしほるゝ
左あらし。あらはに聞え侍れは。爲_レ勝。

百十八番 社頭祝

左勝

女房

わか末の絶すすまなん五十鈴河底にふかめて清き心を
右

小宰相

石清水なかれて清きわか國を君か心に千代も任せよ
みしかき詞をろかなる心をもちて。かやうの事申侍り
ぬる。きはめておそるゝ所多く侍れとも。心にたゝ思ひ
侍る事。むねにくたし侍るへきならねは。はゝかりをわ
すれ侍るへし。おほよそやまとうたは。いにしへも今も。
人の心より出て。世のことはりをあらはし。神のをしへ
に隨ひて。君のまつりことをたすくるにも。此みちい
しるかるへきをや。この故に神代のはしめより。今に絶
さるなるへし。然るを。今の左の歌は。たゝに人の思ひ
より。たはふれに誰もいひつらぬへき心詞に侍らす。是
ひとへに。天照おほん神。すてに我君のふかきおほんま
ことにこたへて。この歌をあらはし給へり。我君又あま
てるおほん神のひろき御めくみをかたしけなくして。
このねかひをみて給ふへき時也。是によりて。位に付給
ふ君は。はるかに百王にいたり。文をまもる代は。久し
く萬歳を期せんものをや。右歌不_レ及_二是非之沙汰_一。爲_レ
負。

百十九番

左持

太政大臣

八幡山さかゆく峯も越果て君をそ祈る身のうれしさに

右

俊成卿女

神ち山すむ月影も君かため曇らぬ空に光をそます
左我もむかしはおとこ山と侍ること。おかしく侍るを。
君をそいのる身を思ふとてといへる近き歌侍るにや。
但身のうれしきとては。いよく心ふかくこそ侍らめ。
右神ち山すむ月をと。かけたかく侍れば。よろしき爲_レ
持。

百廿番

左勝

權大納言通忠

君か代のためしにすめる石清水流久しき影は見ゆらん
右

右

權大納言實雄

あめの下治れる代は三笠山さすや朝日の影ものつけし
左歌すかたうるはしく。殊によりしく見え侍るにや。右
三かさ山。天の下によせて讀るいはひ歌多く侍れは。石
清水のひさしき影。澄まさり侍らん。以_レ左爲_レ勝。

百廿一番

左

權大納言定雅

神垣の葛の下風長閑にてきこそうらみのなき世なるらめ
右勝

右勝

權大納言公相

君か代を祈る心のしるしあらは久しく契れ加茂の瑞籬
左歌恨なき世は。誠に祝言に侍るを。社頭の題に。まさ
かき。ゆふかつらなとををきて。秋にはあへすといへる。
葛の下風しももとめ出され侍らん。やすきを指をきて。
わりなき心をめくらせる事は。是のみに限らず。こひね
かふへからすやとそ。うけ給はり侍りし。右の歌。上句
殊に心引侍れは。勝とさため申へし。

百廿二番

左持

權大納言公基

治れる御代そしらるゝ住吉の松吹風の音ののとけさ

右

爲教朝臣

さして出る三笠の山の朝日影曇りなき世そ久しかるへき

左右兩篇。勝負難一決。可爲持殿。

百廿三番

左持

中納言爲經

立そめし五十鈴の川の宮柱うこかぬ御代のかため也けり

右

信實朝臣

あらたまる五十鈴の河の宮柱百度千度君そきためん

左下句殊たのもしく侍るを。右五十鈴川の宮造りにあ

たりて。百度千度といへるも。思ふ所ことに侍れは。兩

方の心。共に神慮にかなひ侍らん。尤可爲持。

百廿四番

左持

右衛門督通成

君のみや汲て知らん石清水たえぬ流れの千世の行末

右

右近中將雅光

石清水清きなかれを結びても萬代いのる神の乙女子

千代の行末。神の未通女子。同科にこそ。

百廿五番

左

左部卿有教

住吉の岸の松か枝君か代にいく度花の咲かはるらん

右持

辨内侍

我みても君そかそへん住吉の松はまことに千代もへぬへし

左ことはり〔たしか〕に侍るを。此こゝる玉椿にて。おも

かけ侍るにや。右歌からよろしく侍れは。爲勝。

百廿六番

左持

右近中將師繼

神風や五十鈴の川のいその宮さこよの波の聲そのとけき

右

雅忠朝臣

千早振五十鈴の川の十寸鏡曇らぬ御代を照すとそきく

右照すより聞といへる。みるよりへたゝりて侍るうへ

に。左いそのみや。今はしめて見出て侍る。まことに日

本紀まで。さくりもとめられたるちから。物にまくへき

に侍らねは。とこよの波の聲長閑にて。よろしく侍るに

や。

百廿七番

左持

沙彌蓮性

動きなき山松か根の石清水すむへき千代の陰そ久しき

右

下野

千年へんなかめしるし石清水濁りなき世の末もあらはに

左右おなし石清水。松かねといひ出たる。珍しく侍るう

へに。心猶大切に侍るにや。以左爲勝。

百廿八番

左

爲氏朝臣

色かへぬ君か常盤の陰そへて猶久しかれ住よしの松

右持

少將内侍

神風や五十鈴の川の絶すして君につかへん御代そ久しき

左只思へる事をつくるはす申出し侍るにや。右關の藤

川なと思ひ出されて侍るに。つかへん君か御代そ久し

きとそ。有たく侍りける。いかさまにも。五十鈴の川ふ

るまひて侍れは。社の次第に及はへらし。

百廿九番

左

經朝朝臣

住よしの神は知らん君か代をいく度松のおひかはるらん

右持

沙彌禪信

君すまんなかれ絶せぬ石清水いはねとしるき千世のかけ哉

左人ならはとはましものをといへる下句。いくほとのかはりめ侍らし。かはるらんといへるも。よろしからす

や。右ことなるとかなく侍れは。爲勝。

百三十番

左持

越前

えたかはす神ちの山の松のはに君か千年の數そ見えける

右

前權大納言爲家

五十鈴川まもる流れの清けれは千代も八千代も君そすむへき

左歌千年の數こまかに見えて。難なく侍るめり。右歌千代に八千代といへるたとへは。源順申をき侍る。老の心に覺え侍るまゝに。おなし事のせられ侍りけるとこそ。

いかさまにも兩方の思へるころは。神路の山五十鈴川。共に神の納受はうたかひ侍らし。此番はかり神感を

もて可爲持之由。申うけ給ふへし。

抑二代撰者の跡といふを持て。一旦判者の名をけかし侍る事。かたくなかれ申せは。そのおそれまことにふかく。なましるにしろし付侍れは。この道かへりて淺くおほえ侍るに。殊にへつらへる所なく。しきりにたしき心をあらはに申へきよし。今もおほせのくたれるにつけて。見及思ひ出せる

事を。たゞ筆にまかせて書付侍るつたなき詞も。をのつから心に及ひて。いきとをりかたふくたくひ侍らは。をしへをうくるみちをうしなへる耻は。更にのかるへきにあらす侍れは。をろかなるをもちて。流る世の爲のをそれは。かねていかにかかへりみす侍るへき。かた／＼すゝみ退くもきはまり。いよ／＼よしあしまよばれ侍れとも。只時にあたれる勅をまもれるをもちて。後の日の嘲りを知侍らさるへし。ひとへに是のみちをまなへるともから。もし又その心をわきまふ人侍らは。難波津のなみは。むかしのたしきかたに歸り。淺か山のみちは。いにしへのうるはしきあとをたつぬへきよしを。わづかに身におもへるところを。をのつから人にもしらしめんと也。

右後嵯峨院歌合以古寫一本按正

群書類從卷第二百一

和歌部五十六歌合二十二

影供歌合建長三年九月十三夜

題

初秋露 山家秋風 朝草花 暮山鹿 霧間鷹
名所月 田家月 行路紅葉 寄煙忍戀 寄月恨戀

作者

左

女房

大納言藤原朝臣隆親

權大納言藤原朝臣公基

左衛門督源朝臣通成

兵部卿源朝臣有教

參議藤原朝臣爲氏

俊成卿女

中務大輔藤原朝臣爲繼

左京權大夫藤原朝臣經朝

散位藤原朝臣隆祐

沙彌寂西

右

前太政大臣

左近衛大將藤原朝臣定雅

權大納言藤原朝臣實雄

正二位藤原朝臣忠定

正三位藤原朝臣成實

沙彌蓮性

鷹司院按察

左近衛權中將藤原朝臣爲教

右近衛權中將藤原朝臣經平

右近衛權少將源雅言

前內大臣基

中納言藤原朝臣資季

按察使藤原朝臣良教

右衛門督

右兵衛督藤原朝臣教定

治部卿藤原朝臣行家

前內大臣家

沙彌禪信

沙彌寂緣

日吉禰宜祝部宿禰成茂

沙彌眞觀

講師

講師

判者

一番 初秋露

左露

女房

ぬれてほす野原の草の露のまに千年の秋のいつかきらん

右

前内大臣基

秋きぬと野なる草木もしりぬらんあまねくひろき露の恵に
左右歌講之。各可申_三所存_二之由被_レ仰。

右方申云。左歌。野露。山路の菊。野原の草にあらたまり
て。ちとせの秋のいつかきぬらんと侍る。置ところもめ
つらしく。ことに秀逸之由申_レ之。

左方申云。右歌。あまねくひろきといへるほど。千年の
秋にならふへきすかたにあらず。右の歌人無_三陳申之旨。
尤以_レ左可_レ爲_レ勝之由皆悉申_レ之。

二番

左持

前太政大臣

白露の玉しきをのゝ浅茅原風よりさきに秋はきにけり

右

民部卿藤原朝臣爲家

玉しきの露のうてなも時にあひて千代の初めの秋そきにける
右方申。風よりさきに秋はきにけり。よろしくきこゆる
よし申。

左方申。露臺尤可_レ被_レ賞。非_レ可_レ負。仍付_三持字_二。

三番

左持

白露の玉をみかける竹の葉にあらはれてくる千代の初秋

右

中納言藤原朝臣資季

しら露のをきにし日より故里のみかきか原も秋そきにける
竹の葉の露玉をみかきて。あらはれてくる千代の初秋。
祝言よろしきよし各申侍りき。みかきかはらも秋そき
にける。又させる難なし。歌からよろしく侍るよし申て
爲_レ持。

四番

左持

うつろはぬ千代の初秋あらはれて松の上葉にかゝるしら露

右

辨内侍

をく露は草葉のうへと思ひしに袖さへぬれて秋はきにけり
右歌ことによりしきよし人々申侍りしを。さきの竹。今
の松。いづれも祝言。色かばるへきにあらすと申て。又
爲_レ持。

五番

左持

露むすふ衣手涼しねぬる夜の身にしられてそ秋はきにける

右

按察使藤原朝臣良教

今朝とてもおもへはおなし白露のいかてか秋の色をみす覽
左歌ことなる得失なし。
右歌おもへはおなし白露。句ことにくたけて聞え侍る
にやとて。負侍りにき。

六番

左持

秋きぬと人こそつけねうたゝねの袖の露にそおとろかれぬる

右

少将内侍

白妙の露や身にしむ色ならん秋くるよひの袖のかはかぬ
人こそつけねとて。おとろかれぬるといひはてたる。心
ゆかぬやうにやと中人侍りしかとも。袖のかはかぬと
侍も。しるて勝劣あるへからすやと申て。爲_レ持。
七番
左持
左衛門督源朝臣通成

いつのまに秋はきぬ覽白露のあまりてむすふ庭のあさちふ

右

右衛門督

置をむる露にてしりぬさやかにみえぬと聞し秋のはしめを
左歌いなるさまにいひくたして。よろしく聞え侍り
しうへに。右歌すこしつよきよし。寂西申て左勝ときた
められ侍りしを。淺茅露あまるといふ事。ちかき世にみ
えはへりしよし。右方に申出す人はへりて。持ときため
られ侍りき。

八番

左勝

正二位藤原朝臣忠定

野へことに色にいつへき秋きぬとしらせそめてや露の置らん

右

下野

千年へんあさのゆふしてとりもあへす昨日に變る野への白露
左右歌人ともに。きのふにかはる山おろしのかせ。かは
らす聞ゆとて。以左爲勝。此間。講師不レ可レ讀ニ左右字。
暗聞ニ二首所存。一同可レ申之旨被レ定。

九番

左

兵部卿源朝臣有教

このねぬる夜のまの秋をしる物は野への草ばに置ける白露

右勝

兵衛督藤原朝臣教定

草の葉は秋くるよひのいかならん我衣手は露そをきそふ
兩首ともに申。このねぬる夜のま。めなれて侍るうへ
に。しるものはいへる。よろしからず。させる難なき
につきて。秋くるよひ可レ勝之由定申。

十番

左持

正三位藤原朝臣成實

夕くれは袖より露の置そめて秋のけしきそ身にしらねる

右

從三位藤原朝臣顯氏

きのふまたならず扇に置そへていつしか露の秋をしるらん
ならすあふき。おほくみえ侍るに。秋のけしきそみにし
られける。又勝へきすかたに侍らすとて。持ときたため
れ侍りき。

十一番

左

參議藤原朝臣爲氏

草の原野もせの露も夜の程に置てしらるゝ秋はきにけり

右勝

治部卿藤原朝臣行家

露結ふ下草みれは櫻あさのあふのかりふに秋は來にけり
おふのかりふ。ちからあるさまなりとて勝侍りき。おふ
のかりふとて。露むすふはかりの草。下れくまでありか
たくやとそみえ侍りける。

十二番

左

沙彌蓮性

今やこれ秋置露のにる結ひ時はきにけり袂すゝしも

右勝

承明門院小宰相

草の原またきに露は結びけりいくかもあらぬ秋の口かすに
今やこれとうちいてたるより。にゐむすひときはきに
けりたもとすゝしもなど。けとをく。いうならぬさま
に。めつらしからんとつくりたてゝ。おなし露も所をく
へきにやとうけ給ひしを。さきのおほきおほいまうちき
み。かやうの歌このころおほくいてき侍るにや。後鳥羽
院御時は。つやゝみすきかす侍りし事也。おなし萬
葉集の歌をとるも。あらはに聞えず。いうなるさまにと

りなすへきよし。うけ給はり侍りき。左右も作者もしり侍らねと。かやうの歌にめをみせられたち侍なは。歌の道はうせぬへきよし。申いたされはへりき。今みたまふれは。作者も承伏し侍りしかとよ。猶みゝになつことも侍しかとも。こまかにおほえ侍らねは。しるしおとすことおほく侍らん。何ともあれ。にゐむすひ負侍へきよし被定申侍りき。

十三番

左持

俊成卿女

秋やくる夢よりぬらす明方の枕のうへに露そ置そふ

右

前内大臣家

打なひき秋きたりとや草むしろ野もせの露の玉をしくらん夢よりぬらす。きゝよからす侍るを。草むしろ又よろしからぬにやとて。持とさためらる。

十四番

左勝

鷹司院按察

大かたの秋たつところに成ぬとは袖の外なる露にこそしれ

右

右近衛大將藤原朝臣公相

更ぬるか夜半のみそきの麻のはにやかて置そふ秋の白露秋たつころもおほつかなきに。露にこそしれと。少しつよく聞え侍りしを。更ぬるか夜半のみそきとては。夏のをはりにや。秋のはしめとは。もちゐかたくやとおほせ出されて。まことにそのゆへ侍りけりとて。おほかたの秋勝侍りにき。

十五番

左勝

中務大輔藤原朝臣爲繼

白露もをきあへぬまでむは玉の夜のまの秋は今そきにける

右

沙彌禪信

しら露もけふ置そめて吳竹の千代のはしめの秋を知哉白露も置あへぬとては。題の心すくなくやとて。祝言かつへしとさた侍りしを。置そめて千代のはしめ。又おなしこゝろなるへきよし申て。猶夜のまの勝に成侍りき。

十六番

左

左近衛權中將藤原朝臣爲教

白露のあまりてをける我宿の淺茅か庭に秋は來にけり

右勝

權中納言藤原朝臣師繼

野へみればをくしら露の色よりそ秋しりそむるはしめ也ける

判官

十七番

左持

左京權大夫藤原朝臣經朝

こよひ猶常よりしけき白露に草葉も今は秋をしるらん

右

沙彌寂縁

今更に我袖おもし夏衣またひとへなる秋のしら露つねよりしけき。わか袖おもし。勝負不分明之由各申之。爲持。

十八番

左持

右近衛權中將藤原朝臣經平

いつくより露のはしめて結ふらん秋を人のこゝろこそしれ

右

鷹司院帥

誰とこに秋くるよひといひ置いてかくは露けき習ひなるらむなかとこにといひいてたる。よろしからず。心こそしれ。あまりにしたりかほなりとて。持とつけられ侍りき。

十九番

左持

散位藤原朝臣隆祐

秋のくる夕のあはれしりそめて何の草木も露やをくらん

右

日吉禰宜祝部宿禰成茂

思ひあへすけふも扇は手になれて露こそ秋と置はしめけれ
ゆふへのあはれ。けふのあふき。又おなしほとゝさため
らる。

二十番

左勝

右近衛權少將源雅言

置露の白玉椿けふよりや八千代の秋のはしめなるらん

右

左近衛將監源家棟

秋そとは思ひもわかぬ曉に枕の露をおきてしりぬる

松竹の祝言のち。をく露のしら玉椿八千代の秋。尤賞

へきうへに。あか月におきてしりぬるといへる。よろし
からさるよし申て。爲_レ負。

二十一番

左勝

沙彌寂西

置まさる草葉の上の露のまにさひしき秋のいつかきぬらん

右

沙彌眞觀

なをさりにさゝ分し野の白露もひまこを見えね秋やきぬらん

さゝわけしあさよりは。野はをとりにて聞え侍るに。なを
さりもおほつかなしとて。草葉のうへの露。をきまさり
侍りき。

二十二番

山家秋風

左勝

女房

山ふかみすまゐるからにや身にしむと都の秋の風をととははや

右

前内大臣基

つまきこる谷のゆきゝの道すから人にしらるゝ秋の山風

都の秋の風をととははや。まことに山中景氣思ひやられ
て。入_二幽玄之境_一之由各申。人にしらるゝたにかせ。

さる事にて侍れと。つまきこるゆきゝの道すから。おも
かけくちおしと申人侍て。いよゝゝみやこの秋まさり
はへるよし。一同申て。爲_レ勝。

二十三番

左勝

前太政大臣

たへすくす嶺のしはやの風の音も更に悲しき秋の空哉

右

民部卿爲家

人とはぬ山のかきほの葛かつらかつらみつゝ秋風そふく

山のかきほのくすかつら。返々よはくしく。當座の歌
の鉢みくるしきよし申侍き。みねのしはや首尾相叶て。

詞姿優美に。ことによろしとて。勝と被_レ定。

二十四番

左持

大納言隆親

つかふとてまれにのみ見る山里の庭の淺茅に秋風そふく

右

中納言資季

淋しとも誰にかたらん山里の軒端の松の夜半の秋風

つかふとてまれにのみみるといへる。わたくしをかへ
りみぬほともきこえて。めつらしくはへるを。軒端の松
のよはの秋かせも。きゝ所なきにあらずとて。持と定申。

二十五番

左勝

左大將定雅

吹風もとふにつらさのまさるかななくさめかぬる秋の山里

右

辨内侍

山里の夜半のね覺はさならてもうきをはしるや峰の秋風
山里いつれも。景氣おもひやられて。いうに侍るを。さ
ならてもといへるや。すこし心ゆかぬやうにはへるへ
きと申いたす人侍て。まけ侍りにき。

二十六番

左勝

權大納言公基

さらてたに心うかるゝ山里の夕くれことに秋かせそふく

右

按察使良教

山里の秋をはいかになくさめんとふさへつらき峯の松風
とふさへつらきといへるは。をとるへしとて。爲_レ負。

二十七番

左

權大納言實雄

今さらにかきほのつゝらくりかへし悲しきものそ秋の山風

右勝

少將内侍

かきほなる山のしたしは打なひき人はをとせて秋風そ吹
かきほのつゝらくりかへし悲しきものはと思ひ。山の
したしはうちなひき人は音せてさうちむる秋のかせ。

こゝろいつれも身にしてみて。よろしくはへるを。人は音
せて秋風そふく。ことにえんに聞え侍れは。可_レ勝之由
被_レ定。

二十八番

左勝

左衛門督通成

たれきてか秋ともつけん山里に松吹風の音なかりせは

右

右衛門督

淋しさはたくひもあらし山里の草のとほそにすくる秋風

草のとほそ。させる事なし。松吹風。なをきく心地する
よし。各申て。爲_レ勝。

二十九番

左

正二位忠定

山深き秋の哀を身にそへて猶うきものは軒の秋かせ

右勝

下野

風の音にたへてもいかゝすみはてん山の奥まで秋は來に鳧
風のをとにたへてもいかゝ。こゝろありて聞ゆるうへ
に。秋のあはれを身にそへてといへる。をとるへきよし
各申て。負侍き。

三十番

左持

兵部卿有教

かねてしるすまゐなれとも秋は猶さひしまさる峯のまつ風

右

教定朝臣

軒端なる木のはの色はをそけれと秋やと山の風を身にしむ

木の葉の色はをそけれと秋やとやまといへる。ゆへあ
るさまに侍るを。さひしまさる峯の松風も。きゝすて
かたしとて。持とさためられ侍りき。

三十一番

左持

正三位成實

我庵の草のとさしのあたなれは明ぬくれぬと秋風そ吹

右

從三位顯氏

ふしなれぬ程をはゆるせ竹のとに風も夜さむの時はきぬとも
草のとさしのあけくれ。あたなるを思。竹のとの夜さむ
をゆるせといへる。歌のことは。ことなりといへとも。
風情おなしかるへきよし各申て。爲_レ持。

三十二番

左勝

參議爲氏

身にしみて物そかなしき秋風の吹たつころの山かけの庵

右

行家朝臣

今よりや虫のねさそふ山風の音羽の里は夜さむなるらん
山かけのいほ。建仁のころ多く聞ゆるよし。中人侍しか
とも。名所月題ををきて。音羽の里要なきうへ。題の山
家思ひやりたるもいかゝと申て。山陰の庵に勝とつけ
られ侍し。ふきたつころもゆるされかたくや。

三十三番

左勝

沙彌蓮性

老てすむ山へはさそな風の音も秋にはあへすさひしかる覽

右

小宰相

吹かはる風のけしきになるまゝに猶すみわふる秋の山里
風のけしきになるといへる。きゝにくし。老てすむなと
いへるは。心あるへしとて。爲_レ勝。

三十四番

左勝

俊成卿女

むくらはふ眞柴の庵に音つれて萩の葉するよはの秋風

右

前内大臣家

山ふかみをちかた人はこととはて音信たえぬ松の秋かせ
むくら。ましは。萩。ことおほくきこゆるよし。寂西申侍
しかとも。山里のおもかけ。まさしく見る心地し侍れ
は。難には侍らし。みやこの人ををさへて。をちかた人
といばんも。心はかはり侍らねとも。いかゝとて。持と
被_レ定。

三十五番

左

按 察

かくはかりみし人みえぬ山里に情しらるゝ秋の風かな

右勝

右近大將公相

やへしけるむくらの宿の柴の戸もあらはにすくる嶺の秋風
かくはかりといへるのち。またよろしからす。あらはに
すくる嶺の秋風。ふきまさり侍らんとて。爲_レ勝。

三十六番

左勝

爲_レ繼朝臣

身にしむも秋のならひの山風をすむ宿からとなに思ふらん

右

沙彌禪信

とふ人もあらしのかせのいたつらにふくはかりなる秋の山里
あらしのかせふくはかりなるといへる。をとるへきよ
し各定申。

三十七番

左勝

爲_レ教朝臣

淋しきはさらてもつらき山里に身にしむ秋の風の音哉

右

權中納言師繼

山里はいつとしわかぬ松かせのふくに付けても秋を悲しき
いつとしわかぬといへる。さまての難にても侍らきり
しかとも。きゝにくしとて。さらてもつらき山里勝と被_レ定。

三十八番

左勝

經朝朝臣

なれなはと思ひし軒の山風に秋はいかなる音をそふらん
右 沙彌寂縁

いかにせん我世へぬへき山かけの軒はの松に秋風そふく
兩首同科之由きためらる。

三十九番

左勝

經平朝臣

都人ふみもならさぬ庭の面にかよふ跡なきみねの秋風

右

帥

ならはれはふしそかねたる山里のさゝかきうすき夜半の秋風
さゝかきうすき。いうならすとてまけ侍りき。ふみなら
さぬかよふあとなき。おなしことにやとそみえ侍ける。

四十番

左

隆祐朝臣

都よりかよふともなき風の音はきけともつらき秋の山里

右勝

成茂

ふしわひぬすゝのしのやの假ひさしやゝ夜さむなる秋の山風
かよふともなき。心おほつかなきうへに。すゝのしのや
は。いさゝか心侍るにやとて。爲勝。

四十一番

左勝

雅言

すみわひぬ都の秋の淋しさもさらに吹そふまつの下風

右

家棟

さらてたにほさぬ袂をかたしきのとこにな吹そ秋の山かせ
とこにな吹そ。よろしからず。をとるへきよし定申。

四十二番

左勝

沙彌寂西

深山へに柴のかこひのあはらさも吹くる秋の風そしらす
右 沙彌眞觀

山ふかく住はうき身と思ふよりいかにせよとか秋風のふく
いかにせよとか。ことによりしくきこえ侍りしを。本歌
三句さなからつゝきてそはへりけるとて。しはのかこ
ひ。あはらなから。勝と定申。

四十三番

左勝

女房

朝草花

わすれすよ朝きよめするとのもりの袖にうつりし秋萩の花
右 前内大臣基

いかはかり露こぼるらん女郎花おはなかもとのあくる別に
あさきよめ。よみあけ侍しより満座咏吟。今ひとつの歌。
中々よみ申すへからず。さたあるまじきよし申うけ侍
し。いま見侍れは。なへての歌にならひ侍らは。よろし
くもや侍らまし。

四十四番

左持

前太政大臣

朝戸いてにあかもすそひく乙女子か手折てかさす秋萩の花
右 民部卿爲家

花すゝきたか手枕をとめかねてあくるなけきの人まねくらん
とめかねてといへる。述過たることはにや。あかもすそ
ひく。いましめ申同類なりと左方申て。持字をつけられ
侍き。

四十五番

左勝

大納言隆親

朝戸あけてみれともあかす秋萩のうつろひまさる花の盛は
右 中納言資季

野へのにしき。秋萩。おなしことにやと申て。爲_レ負。
四十六番

左持

左大將定雅

見渡せは秋の野原の朝日影ち草の花の色そうつろふ

右

辨内侍

朝ねかみこほれていとみたるも小萩か露は折てかさゝん

野原の朝日影。きら／＼しく見え侍しを。朝日かけこほ

れてとつゝけたる。いかゝと申人侍しかとも。ことにこ

ほれかゝると申ならへれば。おもかけすてかたしと各

申て。爲_レ持。

四十七番

左

權大納言公基

見てもまた日數はひさしあさな／＼これはかつ咲野への萩原

右持

按察使良教

旅人のあさたつ野への花薄たか白妙の袖とみゆらん

あさたつ野へ。めつらしき所侍らねと。歌からよろしき

よし各定申。

四十八番

左持

權大納言實雄

女郎花たかきぬ／＼の名残とて朝をく露にかつしほらん

右

少將内侍

花すゝきまねく袂にかけてけりあさたつ人の袖のしら露

たもと袖。はゝかるへきにやとさた侍しかとも。草のた

もとか花すゝきとよめるうへは。させる難に侍らし。か

けてけりといへるほとそ心ゆかす聞え侍。左はまさる

へくやとて。爲_レ勝。

四十九番

左持

左衛門督通成

旅衣あさたつ袖も色見えてたえ／＼まねく花薄哉

右

右衛門督

よるとても心のしめはたゆまぬをけさみたれたる秋はきの花

さきによみあけ侍歌。たえ／＼。ようなきよし申人侍し

かとも。心のしめはたゆまぬをといへる。ゆるしかたし

と申て。爲_レ持。

五十番

左持

正二位忠定

朝戸あけのたよりにつけてみつる哉人こそとはね庭の秋萩

右

下野

旅人の朝たつ野へのをみなへしゆくてはかりの袖に匂ふな

みつるかな人こそとはねといへる。よろしからす。そて

に匂ふな。又勝へきにあらすとて。爲_レ持。

五十一番

左持

兵部卿有教

よな／＼や花は咲らんあさことに色まさりゆく野への秋萩

右

教定朝臣

朝な／＼うつろふ露はあたなれと萩のふるえの花は忘れす

よな／＼や。朝ことにも。いひおほせすや。うつろふ露

はあたなれと。心わきかたしとて。持のよしさためらる。

五十二番

左持

正三位成實

あつさ弓ひくまの野邊のあさ日影にほふ眞萩の色そうつろふ

右

從三位顯氏

下葉までそめつくすへき朝露のをき所なきもとあらの萩
あつき弓引まの野へは。名所又をしていてきたりとさ
た侍き。もとあらのはきは。いたつらに葉のことはおほ
くて。むなく花の心すくなし。名所勝侍き。野へより
山に入鹿も。はなはなきにやとおほせいたされ侍し。ま
ことにさまでの事には侍らしかし。

五十三番

左持

参議爲氏

朝な／＼をく白露もうつろひぬ咲そふ秋の花の千草に

右

行家朝臣

哀けさとふ人あれな秋萩の花のうへなる露もひぬまに

左右ことかはりたる持と被_レ定。

五十四番

左

沙彌蓮性

いとゝまたちらまくもおしかり人の朝ふむ野へにさける秋萩

右勝

小宰相

露なから見せはや人にあさな／＼うつろふ庭の秋萩の花

あさふむ野へ。すこしけとをく聞え侍うへに。露なから

見せはや人にといいる。いうなりとて。勝侍にき。

五十五番

左

俊成卿女

さゝわけてぬれゆく袖の雫さへこほれてうつろ萩か花すり

右勝

前内大臣家

すかのねのなか月のよのあけたては露けさまさる秋萩の花

さゝ分るはかりにて朝いかゝとて。すかのね勝侍き。長

月の萩そ。少おそく咲て侍ける。

五十六番

左

按察

朝ことにたかかたみとて秋萩の花を哀とおもひそめけん

右勝

右近大將公相

朝またき野原しのはら分きつる我衣手の萩か花すり

朝またき秋萩の花をかたみと思ひそめけん。故有こと

にやと聞え侍しを。野はらしのはら。催馬樂のこととは

りなされたるすかた。有_レ興の由各定申て。爲_レ勝。

五十七番

左

爲繼朝臣

しのゝめはほのかに空のあくよりまねくをみする花薄哉

右勝

沙彌禪信

このねぬる夜のまに花の咲そへてけさは色こき庭の萩原

しのゝめはほのかにそらの。ことはつゝき心ゆかすと

て。よのまの花。けさは色まさと被_レ定。

五十八番

左勝

爲敦朝臣

けさみればわかいねかてもあらはれて下葉うつろふ秋萩の花

右

權中納言師繼

旅人のあさたつをのゝすきかてに亂れてまねく花すゝき哉

いねかて。このころおほく侍よし申侍しかとも。猶勝に

けり。

五十九番

左持

經朝朝臣

野へにたつお花のなみの白妙に山のはつゝくあさまたき哉

右

沙彌寂縁

折にあへは野もりか秋の朝戸いてもうらやむ程の花の色哉

おりにあへは野守か秋も。うらやむ程のことはの色にはあらずときた侍しを。まのゝ入江なとなくて。おはなかなみも。より所なしとて。可_レ爲_レ持の由被_レ定。

六十番

左

白露の枕の野のをみなへし誰とかはせるけさの名残そ

右勝

帥

明て行たかかへるさもとゝまらしはかなくまなく花すゝき哉

白露のたまくらものゝ。めつらしくもとめ出されて侍れと。名所又ようなきうへに。たかかへるさもとゝまらしこいへる。あやまちなく。いうに侍れは。勝と被_レ定。

六十一番

左

やとりする妻とたのめと女郎花けさこなひく色は見えけれ

右勝

成

茂

立かへり昔をかけて朝露のふるえの小萩かさしにそさす

けさこそなひくといへる心。おほつかなし。たちかへりむかしをかけてといへるは。心も侍らんとて。勝と定侍き。

六十二番

左勝

花すゝきたかきぬゝの名残とて草の袂のけさは露けき

右

家

棟

秋の野のかりねの庵の朝戸出に心そとまる萩か花すり

たかきぬゝ。たちまさるへきよし人々申て。爲_レ勝。

六十三番

左勝

曉の露より後におきていまをそくそみける秋萩のはな

右

沙彌真觀

たかゆるす花の盛そ朝かほのあしたわひしき宿と見ながら

曉の露よりのち。あしたの事こもりて。ひるにてもやとさた侍しを。たかゆるす心もおほつかなく。下句も凡卑なりとて。をとるへきよし各定申。

六十四番

左勝

女房

暮行とはやましけ山さはりおほみあはてやしかの妻をこふ覽

右

前内大臣基

たえすたつ夕への雲の高ねにもすめはすみけるさを鹿の聲

葉山しけ山しけゝれといへる歌を。さはりおほみあはてやしかのと侍こそ。ふかく思ひいれて侍けれと一同申_レ之。たえすたつ雲。此題にはことへたゝりて。かても要なくやとて。葉山勝の由。満座申_レ之。

六十五番

左

前太政大臣

夕されは妻こひすらし高砂の尾上にひゝくさをしかの聲

右勝

民部卿爲家

夕暮はをのかすみかの山にても猶うき時と鹿そなくなる尾のへにひゝく鹿のこゑ。たかく聞ゆる由。申侍しかとも。のちの歌に勝字をつけられ侍き。

六十六番

左勝

大納言隆親

夕暮はわきてあはれやしらるらん妻待山のさをしかの聲

右

中納言資季

深山への秋の夕を哀ともなきてや鹿の人につくらん
兩方鹿のこゑ。人につくらんよりは。つままつ山たちの
ほるへきよし申て。爲勝。

六十七番

左

左近大將定雅

秋されは山の尾上に聲たてゝ鹿も夕の物や悲しき

右勝

辨内侍

秋はいとゝさひしき山の夕にもすめはすむとや鹿の鳴らん
兩首。いづれもよろしく聞え侍しを。しかもゆうへのもの
やといへるや。すこし心ゆかぬやうに侍と申人侍て。
負侍き。

六十八番

左勝

權大納言公基

妻こひの夕となれはおく山にめにみぬ鹿の音をのみそ鳴

右

按察使良教

夕暮のまかきの山はこれならんつまをへたてゝ鹿ぞ鳴なる
めにみぬ鹿のれ。さはやかに聞えす侍しを。まかきの山
ふかく見え侍よし。さたいてきて。さきの歌猶可勝の
由被定。

六十九番

左持

權大納言實雄

み山への秋にはあへすなく鹿もゆふへそ人の袖ぬらしける

右

少將内侍

鳴鹿の涙も袖におちそひぬしけきみ山の秋の夕暮

兩首ともによろしき持ときためられ侍き。

七十番

左勝

左衛門督通成

山ふかき秋の夕を哀とも鳴てしらするさをしかの聲

右

右衛門督

夕暮はあやしかりけりをしなくみやまはいつさわかぬ哀も
秋の夕はあやしかりけりといへるは。きゝにくゝやと
て。させるとかなきにつきて。山ふかき秋に勝とつけら
れ侍き。

七十一番

左

正二位忠定

色まさる涙やふかき夕つくひわけ入山のさをしかの聲

右勝

下野

暮かゝる秋のけしきにたへかねておのへの鹿も妻をこふらし
しかのなみたなれとも。夕つくひ分入山とては。をき所
いかゝとさた侍て。秋のけしきまさるへしと定申。可
爲勝。

七十二番

左

兵部卿有教

かきりなき秋のあはれは白雲のゆふゐる山のさをしかの聲

右勝

教定朝臣

夕暮の山のたかれに鳴鹿もあまつ空にや妻をこふらし
おなし鹿の音も。しらくものゆふゐるよりは。あまつ空
にやといへる。思ひあかりて聞ゆとて。爲勝。

七十三番

左

正二位成實

立ならず葉山しけ山なく鹿の聲もきはらぬ夕ま暮かな

右勝

從三位顯氏

淋しさも秋はならひの夕くれにたえず尾上の鹿そ鳴なる

葉山しけ山たゝいまつゝきて。ことのほかにいやしき

よしをのゝ中て。たえずおのへといへる。よろしきま
さりとて。勝侍き。

七十四番

左勝

參議爲氏

夕暮は妻まつ時としりかほにはやまの鹿もねをそたつなる

右

行家朝臣

忍はれぬ山への秋の夕暮はをしはからるゝさをしかの聲
をしはからるゝ。つねの事にあらすと人々申て負侍。

七十五番

左

沙彌蓮性

秋深き山のしつくのゆふこりに鳴やをしかのいかゝしつけき

右勝

小宰相

さを鹿の鳴音もいろはまさりけり夕日かゝれる秋の山もと

鹿鳴山に夕日かゝれる。秋景氣思ひやられ侍うへに。山
のしつくのゆふこり。いかゝしつけきとては。いかさま

にもかつへからすと。とかめ申人侍りて。爲負。

七十六番

左

俊成卿女

鳴鹿もこゑのかきりやつくすらん小倉の山の秋も夕と

右勝

前内大臣家

夕つくひ暮ゆくまゝに鳴まさる秋の小鹿の妻こひの山
聲のかきりやといへる。物語の歌思いたさるゝに。秋も

ゆふへといひはてたるも聞にくしとて。負侍き。秋のを
しかのつまこひの山。名所にてもなにくても。勝まては
いかゝとそ見給へ侍る。

七十七番

左持

按 察

さても猶夕やつらき秋山にともはあれとも鹿のなくなる

右

右近大將公相

暮かゝるみ山おろしにたくひきて秋の袖とふさをしかの聲

ともはあれともといへる。あまりに見わきてたしかな
るに。秋のそてとふもかけりすきてやと。寂西申て。持
に被定。

七十八番

左勝

爲繼朝臣

きけは猶淋しかりけりさほ鹿の鳴山かけの秋のゆふくれ

右

沙彌禪信

つまきとる名をなつかしみ山人のかへる跡より鹿そ鳴なる
爪木とる名をなつかしみ。山人のあとしたへる鹿の音。
きゝにくしとて。なく山かけ爲勝。

七十九番

左

爲教朝臣

から衣日も夕暮につまこめてと山の奥に鹿そなくなる

右勝

權中納言師繼

あはれまたためしもあらしきをしかの妻とふ山の秋の夕暮

つまとふ山の秋の夕暮。いうにきこえ侍うへに。から衣
日も夕暮。めなれたるふることに。つまこめてといへる
下句。衣のことかけてもそのよせ侍らす。をとるへきよ

し申て。負侍き。

八十番

左持

經朝朝臣

山ふかみ暮行空にをのれのみ秋の哀は鹿そ鳴なる

右

沙彌禪信

小倉山妻とふ鹿もわきて猶たへすやふかき秋の夕暮

くれゆくそらにをのれのみ。ことはのつゝきよろしか
らさるよし。各申侍しを。たへすやふかき。又心ゆかす
とて。同科に被_レ定。

八十一番

左持

經平朝臣

妻こひに鹿はなくなりから衣すそろの山の秋のゆふ暮

右

帥

いつの秋たのめをきけんきをしかの妻待山の夕暮のそら

すそろの山。れいのめつらしき名所にやと。さた侍しか
とも。わきまへ申人も侍らさりき。いつの秋もいかゝと
て。爲_レ侍。

八十二番

左

隆祐朝臣

日くるれはゆく人見えぬしからきのと山に出るさをしかの聲

右勝

成茂

きをしかのは山しけ山ふみ分て鳴夕くれも妻やつれなき

ゆく人見えぬしからき。名所要なきよしさた侍しを。葉
山しけ山なをあやうくやと申侍しかとも。勝とさたま
り侍けるにや。

八十三番

左勝

雅言

夕暮は妻待山の風寒み尾上の鹿そ音にたてゝ鳴

右

家棟

夕日さす松の木陰にたつ鹿のいつともわかす妻やこふらん

まつの木かけ山なきよしさた侍き。まことによくもと
めは岡なとまてやと申て。つま待山。たしかに勝侍き。

八十四番

左勝

沙彌寂西

尾上なる松の木のまの夕つくよさしもはなとか鹿の鳴らん

右

沙彌眞觀

またけふもむなく暮ぬ高砂の尾上の鹿の音のみなかれて

又けふもむなくくれぬといへる。いうに聞え侍るを。
鹿のねなきとられてきこゆと申人侍て。夕つくよ。させ
る難なしとて。爲_レ勝。

八十五番

左勝

霧間鷹

女房

久方のあまきる霧のたえゝにそれかとみえて鷹はきにけり

右

前内大臣基

立まよふ霧にとたえやまさるらんをのれ敷そふ秋のかりかね

久方のあまきる霧。題はあらはに心はこもりて。ことに
よろしきよし皆悉申。とたえやまさるらんをのれかす
そふ。いかにと見わきかたきよし申て。あまきる霧は。
はるかにたちまさるへきよし。各定申。

八十六番

左

前太政大臣

天の原たえゝみゆるうす霧の雲井に遠き秋の鷹金

右勝

民部卿爲家

立わたる峯の秋霧ひとめてうすすみしるき鷹の玉つき
雲井にとをき秋のかりかね。ことによろしく。おもかけ
見るやうに侍るを。ひとめてうすすみしるき玉つき。
かきやつして見所なく侍しかとも。勝字の侍ける。猶し
かるへからすや侍らん。

八十七番

左

大納言隆親

たえく山とひこゆる鷹金のはかせもしるき峯の秋霧

右勝

中納言資季

夕霧の立もらしける山のはにかすさへみえて鷹はきにけり
はかせもしるきよりは。かすさへ見えては。たしかなる
にやと人々申て。爲勝。

八十八番

左

左近大將定雅

久方のあまつみ空に立のほる霧分わひて鷹ぞ鳴なる

右勝

辨内侍

立わたるうす霧かくれみえわかくれとも遠き秋の鷹金
霧わけわひては。次第にいひつゝけたるやうにて。心も
詞も。いかゝと見え侍にや。くれとも遠きは。めつらし
きさまなりとて。爲勝。

八十九番

左勝

權大納言公基

天津空へたつる霧のたえまよりあらはれわたる初鷹の聲

右

按察使良教

秋をしもをのか時とやあさ霧にたちをくれしと鷹もなく也

あらはれわたる。さも侍なん。たちをくれしといへる。
をとるへきにやと人々申て。負けき。

九十番

左

權大納言實雄

鳴てくるかたもきこゆる鷹金の數こそみえね峯の秋霧

右勝

少將内侍

玉つきはかけてもみえし秋霧のはれぬ雲井に鷹はきにけり
かたもきこゆる秋霧は。みゝにたつやうに侍れは。かけ
てもみえぬたまつき。心にくしとて。爲勝。

九十一番

左勝

左衛門督通成

晴やらぬ霧のたえまのうすすみにかきつらねたる鷹の玉章

右

右衛門督

たえく立秋霧の空にのみ鳴わたりつゝまよふ鷹金
かきつらねたる玉つき。見るやうなるうへに。なきわた
りつゝまよふかりかねは。をとりに聞ゆとて。爲負。

九十二番

左勝

正二位忠定

ゆく鷹はつゝまてみする玉章をよそにかきけつ峯の秋霧

右

下野

朝霧のたなひく峯を行鷹のはらふ羽風に數もわかれす
よそにかきけつ。見にくきやうに侍れとも。はらふはか
せにかすもわかれす。勝へきことはつゝきにあらすと
て。持になされ侍き。

九十三番

左勝

兵部卿有教

あまつ空たつ朝霧のたえ／＼にはれゆくみれは鷹はきに梟

右 教定朝臣

秋霧のやへにかさなる山のはを聲もへたてす鷹はきにけり
晴行みれは。間もすきて見え侍るにや。八重にかさな
る。歌からよろしとて。なすらへて持と定らる。

九十四番

左持 正三位成實

鷹金のはかせに霧や晴ぬらんをのれまよはぬ秋の空哉

右 從三位顯氏

とふ鷹の數見えぬへきうす霧に鳴ねはいと／＼かくれやはする
をのれまよはぬ。鳴ねはいと／＼。同科の由定申。

九十五番

左持 參議爲氏

鷹のくると山のこすゑみえそめてよそにわかる／＼秋の朝霧

右 行家朝臣

秋霧の音もせてのみふる物をいかてかけこし鷹の玉章
と山のこすゑ見えそめて。霧間山と申つへくやと申し
たし侍しかども。をともせてのみ。勝へきにあらすと
て。可_レ爲_レ持之由被_レ定。

九十六番

左 沙彌蓮性

鷹かねのは風はなにそみちのへの霧吹はらへ人のためかは

右勝 小宰相

しるらめや霧たつ空に鳴鷹もはれぬ思ひのたくひある身を
みちのへのといへるより。地につきたるやうにて。それ
のことともきこえずや。はれぬおもひのきり。述懐の心

思ひこめて。勝をゆるされ侍りき。

九十七番

左持 俊成卿女

立まよふ峯の夕霧ふかき秋の雲井を分て鷹そ鳴なる
右 前内大臣家

初鷹の鳴音もさむく日は暮てたなひきやらぬうす霧の空
なくねもさむく日はくれて。させるようなしときた侍
しを。ふかき秋の事なくやと申て。爲_レ持。

九十八番

左 按察

またれつる雲井の鷹の玉章をみせすはつらし秋の夕霧

右勝 右大將公相

はれそむるたえまそみゆる鷹金のまたとをさかる山の秋霧
みせすはつらし。やかてかこちたるやうに侍にや。又遠
さかるけいき思ひやられて宜しとて。爲_レ勝。

九十九番

左 爲繼朝臣

秋霧はたちかさねたる空なれと初鷹かねの聲そへたてぬ
右勝 沙彌禪信

しはしとてみるほとそなき秋きりのたえまを過る鷹の玉章
おなしほととの歌。間字おもへらんは。いさ／＼かまざるへ
きにこそと申て。たえまを過るを爲_レ勝。

百番

左持 爲教朝臣

かけてくるたか玉章そ朝霧のたえまにみゆる秋の鷹金
右 權中納言師繼

鳴わたる鴈のはかせははらへともまた立まよふ峯の朝霧
玉つさ。よみふるしてめつらしからず見へ侍しを。持に
て侍ける。

百一番

左

經朝朝臣

さきたつもとまるもみえぬ夕霧に幾つらとてか鴈のゆくらん

右勝

沙彌寂縁

いくつらと見ても何せん鳴鴈のこゑきく空の秋の朝霧
見てもなにせんとまていひたてすとも。心はきこえ侍
なんかし。いくつらとてか鴈のゆくらん。春の歌ににた
るうへに。上句よろしからぬさまなりとて。爲勝。

百二番

左持

經平朝臣

久方のあまの朝霧たえ／＼にかすあらはるゝ初鴈の聲

右

帥

たちわたる霧のたえまのほともなくみえては見えぬ初鴈の聲
あまの秋きり。れいのえんならぬさまにや。見えてもみ
えぬ風情。さも侍なんとて猶持に被定。

百三番

左

隆祐朝臣

へたてなきとしの契にくるかりは霧のうへにも聲を近つく

右勝

成茂

鴈金のたか玉章を忍ふらんそれともみえぬ峯の秋霧

へたてなきとしの契り。やすらかならず。たかたまつき
させる難なしとて。爲勝。

百四番

左勝

雅言

立まよふ峯の秋霧たえ／＼にへたてもはてぬ鴈の一聲

右

家棟

明わたる峯の朝けのほのかなる霧のまよひに鴈はきにけり

明わたる峯のあさけ。いかゝとて。爲勝。

百五番

左

沙彌寂西

くる鴈のは風にちかき程見えてはるゝかほなる秋のあさ霧

右勝

沙彌眞觀

くる鴈のうきて思ひはしらねともたつ河霧の空に鳴なり
羽風にちかき間はみえ侍れとも。たつかはきりの空に
なくなり。心詞いうなるよし人々申て。爲勝。

百六番

左勝

女房

月もなをなからにくちし橋柱ありとやこゝにすみわたる覽

右

前内大臣基

ことしこそけに數そひて長月の月もあかしのこゝち也けれ

此長柄橋。たゝ名所月。心も詞も。殊勝とはかり思給ほ
とに。いまの文臺の事さ侍にこそ。はしめて思いたし
侍れ。後鳥羽院御時。宇治に御幸ありて。歌講せられ侍
けるに。此文臺のやうをうけ給はりて。或人やそうち河
の月影をなからのほしのうへに見るかなと侍けるを。

ありかたきためしに。うけ給はりわたり侍を。なからに
くちし橋柱ありとやこゝにすみわたるらんと侍こそ。

むかしにこえて。いまはまさり侍らめ。あかしのうら。
月くはゝれるよしなと侍れと。秀逸あたりにちかつく

へきもの侍らし。返々長柄橋。勝ても勝侍へし。

百七番

左持

前太政大臣

神路山こそ此世をてらすめくもらぬ空にすめる月影

右

民部卿爲家

いつくにも思ひそ出ん松嶋やをしまかいその秋のよの月
うちつゝきて神路山にて。ゆくすゑはるかに世をてら
すへきひかり。十三夜の月にあらはれて。上下満座の詠
歌にはこやの山も。けに萬歳の聲を奏する心ちし侍し
か。無_二是非_一勝字をつけられ侍き。いま一の歌も。かれ
にひかれてきたにをよはす侍し。ひとつの冥かところ。
よるこひ思給らめ。

百八番

左持

大納言隆親

年をへて見しも昔に成にけりさとはみなせの秋の夜の月

右

中納言資季

清見かた雲をはとめぬ浦風に月をそやとすなみの關守
浪の關もり。題のこゝろあきらかによりしく聞え侍し
を。見しもむかしにといへる。なにとなくいうなるすか
たなりとて。持にきためられ侍しかとよ。

百九番

左持

左近大將定雅

いにしへのふるき都を三笠山おもひいてつゝ月やすむらん

右

辨内侍

またもあることしの秋のなか月は月もふたみの浦にこそ見ぬ
あけぬふたみのうらも。おぼつかなき所なく。さらぬみ

かさの山も。思ゆへあるすかたに侍れは。持のよし定申。

百十番

左持

權大納言公基

右持

按察使良敦

すへらきの三笠の山の月影やくもりなきよをさしてしるらん
このみかさの山。かけまくもいかゝときた侍しかとも。
かくつゝきたる證歌侍よし。中人侍しうへに。いかさま
にも。くもりなき世をさしてしるらん。いかてかをろか
に侍らんと申て。爲_レ勝。

百十一番

左持

權大納言實雄

沖つ風吹上の濱の白妙になをすみのほる秋のよの月

右

少將内侍

とへかしな芹屋の里のはるゝ夜に我すむかたの月はいかにと
ふきあけのはま。みところおほく。おもかけおもしろ
く。あしやの里はるゝ夜。わかすむかたまで。あらはに
見たるやうにおほえ侍れは。ことによりしき持と申定
侍き。

百十二番

左持

左衛門督通成

秋の夜は須磨の關守すみかへて月やゆききの人とゝむらん

右

右衛門督

神代よりあまてる月もかけなれてのとかにそすむ住吉の浦
すまのせきもりにすみかへて。ゆききの人をとゝむる
月は。ことによりしきよし申侍しを。住吉のうらあまて

る景。長閑なるこゝろも。すてかたしとて。可爲持之
由被_レ定。

百十三番

左勝

正二位忠定

よそに見し雲たにもなし葛城やあらし吹夜の山のはの月

右

下野

秋の月こよひあかしのうら浪ものとかにみゆる世のけしき哉
明石の浦の浪。春にかすめるおもかけたつとて。かつら
き山の嵐。夜半にふけるこゝろまさると。をのく申
て。爲勝。

百十四番

左持

兵部卿有教

五十鈴川ひとたひすめる色そへて光をやとす萬代の月

右

教定朝臣

時しらぬ雪に光やさえぬらんふしの高根の秋のよの月
ゆきにさえたるふしのたかねの月。歌からたけたかく。
きよけに見え侍しを。いす川神威にをそれて。持にな
され侍き。

百十五番

左持

正三位成實

ほのくとかあかしの浦をなかもけん昔のかけをうつす月影

右

從三位顯氏

立よりてたれもなかもつ鏡山くもらぬ秋の夜半の月影
ほのくとは。眞影事おほくて。かしこく月の出て侍
けると。さた侍き。かみ山。たちよりて見るは。ことは
りに侍へきに。なかもつや。ことたかふきとて。爲持。

百十六番

左勝

參議爲氏

秋ことに慰めかたき月そとはなれてもしるやをばすての山

右

行家朝臣

長月のきくのたかはま月影にうつろふなみを花かとそ見る
きくのたかはま。よろしきよし申人侍しを。月よりも題
になききくの事。おほくや侍らん。又長月とて。句へた
て、月影も。歌人々にはなきにをとるへくやときとお
ほえ侍しはかりに申出して侍しを。月次ははくからす
と申人侍き。證歌とてちかき世のいてきて侍しかとも。
猶しはらくいかとて。めつらしけなき。をはすて山勝
侍し。いかなるへき事にか。かやうの事議によるへくや。

百十七番

左勝

沙彌蓮性

かたしきに夜やふけぬらん東路のいそねのはしに月渡るみゆ

右

小宰相

長月の月にそへてやあかしが秋のなかの影のこしけん
八月十五夜月。九月十三夜のためとて。かけのこしけん
ことも。そらにしりかたくやとて。いそねのはしとかや。
れいのすかたなから。勝侍にけり。

百十八番

左持

俊成卿女

よにしらぬ光も色も秋の月みやきか原にすめるよの影

右

前内大臣家

たれしも見て忍ふらんかるもかくふす井の嶋の秋の月影
みやきかはら光かけ。ふるき難にや。又ふくる夜のか

け。きゝよからすと。さた侍し程に。やかていまひとつの歌に勝の字をつけ侍し。かるもかくふす井のしまのおもかけ。まことにたれみてしのふへしともおほえ侍らさりしに。持にて侍ければ。いかゝはし侍らん。

百十九番

左

按 察

こよひこそ忍ふの里にすむ人のいとふはかりも月はみえけれ

右勝

右近大將公相

年をへて光さしそへ春日なる山はみかさの秋のよの月のふのさと。ひとへに月をいとふににたり。本意にあらずとさた侍しを。橘爲仲朝臣このこゝろをよめるにやと申人侍しかとも。光さしそはん三笠の山の月。はるかにまさり侍へしと申て。爲勝。

百二十番

左勝

爲繼朝臣

聞をきしほとゝもいはしさらしなゝ更にそ秋の月ばさやけき

右

沙彌禪信

久方の月に夜舟も出やらて浪吹よするすまの浦かせ

夜舟月にいてやらぬにや。風にふきよせらるゝにや。おほつかなしとて。さらにさやけきさらしな勝侍き。

百二十一番

左勝

爲教朝臣

なに高きほとそしらるゝさらしなゝ月すむ秋のをはすての山

右

權中納言師繼

あきらけきちかひも月にあらはれて末すみよしと人はいふ也すゑすみよしとては。きゝにくしとて。をはすてまさり

侍き。

百二十二番

左持

經朝朝臣

ふた見かたよるもやひろふたまゆらも曇らてあくる月の光に

右

沙彌寂縁

時しもあれ千里に月はあしかたよを長月の有明の比

兩月。さきの百十六番におなし。そのうへにいま見給ふれは。ときしもあれありあけの比と侍けり。ふた見かたよるもやひろふたまゆら。かつへき歌にあらずとて侍に侍し。猶いかゝ侍らん。

百二十三番

左勝

經平朝臣

さらしなの山のすそゆくみなの川さこそはすまめ秋の月影

右

帥

かけさりし浪にや影のやとるらんたかしの濱の秋の夜の月

つくはねの嶺よりおつる河の。さらしなの山のすなかれ侍ける。めつらしき事にをのゝ申侍き。かけさりしといひいたしたる。なみのよせ所いかゝとて。まけ侍にけり。いづれもおほつかなく侍めり。

百二十四番

左

隆祐朝臣

難波かた鹽ひや遠く成ぬらんやとらてすめる秋のよの月

右勝

成 茂

神もみよくもりなき世の鏡山いのるかひある月そさやけきやとらてすめる。結構之躰にきこえ侍しを。かゝみ山の月さやけきかけ。いかさまにも可有賞翫之由各申

て。爲_レ勝。

百二十五番

左勝

雅言

白妙になみのよせくる玉つ嶋月にそみかくおきつ 沙風

右

家棟

あかしとは月にもしるし長月のとよにあまれるみよの行末

あかしとはといへるはかりにては。よみなさむにした

かは。名所もいかゝと上さまにもきた侍き。月にそみ

かくたまつしま。なみのよせある事として。勝と定申。

百二十六番

左勝

沙彌寂西

わか身きてふるの山へのこかくれを月のしるへに出にける哉

右

沙彌眞觀

くまもなきいくたのうらの秋の空月は今宵のさかこそ見れ

ふるの山邊。今夜はしめていてつかふまつる人の歌は。

さかこそみれ。其興をとるへしと各定申。

百二十七番

田家月

左勝

女房

月よし世よしとそみるわか門のわき田をしなみほに出る比

右

前内大臣

秋の田のひたの庵をもる露に我袖ぬれてやとる 月影

月よし夜よしとそと侍。民ゆたかに國とめるほとも。

月にあらはれて。華實共相兼。ことによるしきよし各申。

ひたのいほりをもる露にやとる月は。いくほとか見所

侍らん。返々よしと申て侍き。

百二十八番

左勝

前太政大臣

門田もるかりほの庵のさよ衣月ゆへとてもぬれぬ袖かは

右

民部卿爲家

秋の田のかりほの露はをきながら月にそしほるよはの衣手

月にそしほる。まことすくなくて。田家かすかに侍うへ

に。月ゆへとてもぬれぬ袖かはと侍こそ。おなしことの

まことには侍れ。尤可_レ爲_レ勝よし定申侍き。

百二十九番

左勝

大納言隆親

君かすむとは田のおものいねかてに年ある御代の月をみる哉

右

中納言資季

里とをき山田の庵に夜もすからたれ獨のみ月をみるらん

鳥羽田のおも。初五字より何となくおほろけの歌。なら

ひにくゝや侍へきと申て。爲_レ勝。

百三十番

左

左近大將定雅

秋の田にまはらにさせる賤か庵もりくる月の影にまかせて

右勝

辨内侍

秋の田の庵もるよはのあくるまはいかに露けき月とかはしる

賤かいほまはらなるよりは。あくるまひさしき月は。ふ

るきおもかけもすてかたくやとて。勝侍き。

百三十一番

左勝

權大納言公基

もりあかす門田の庵のあれまくも猶おしまるゝ山端の月

右

按察使良敦

秋の田のいねてふこともわすられて庵もりあかす月の比哉

門田のいほのあれまくも。させるとかなく。秋の田のい
ねてふも。ふるきことはをかれり。仍持と定申。

百三十二番

左勝

權大納言實雄

もりあかす月影さむし我門のおくてのいなはほに出る比

右

少將内侍

秋の田の庵もる人のいねかても月ゆへとてや袖ぬらすらん

いねかて。秋の田によせて。いと、おほくめなれて。お

くてのいなはほにいつるころ月影さむしといへるは。

まさるへきよし申て。爲勝。

百三十三番

左持

左衛門督通成

わき田もるかりほの庵のいなむしろ露にかたしく秋のよの月

右

右衛門督

秋の夜は山田の庵のひたすらにおとろく計月そさやけき

かりほのいほのいなむしろ。山田のいほのひたすら。お

なしほとに聞ゆるよし人々申て。爲持。

百三十四番

左

正二位忠定

秋ふかき田つらの庵のいたつらに人こそすまね月ほもり梟

右勝

下野

秋の田の露しくとこのいなむしろ月の宿とももる庵かな

人こそすまね月ほもる心。おほく侍うへに。月のやとと

もといへる。よろしとて。勝侍き。

百三十五番

左

兵部卿有教

秋の夜は門田のいなは吹風に千とせをかねてすめる月影

右勝

教定朝臣

露結ふ門田のをしねひたすらに月もるよははねられやはする

ちとせをかねてといへることは。此田家むしろ田にや

と聞え侍しを。人々もおなしていに申て。露むすふ門田

の勝ときたまり侍き。作者ちさとをかきあやまてるに

やと申侍けるに。又ちかき歌にたかはすと。きた侍ける

とかや。

百三十六番

左持

正三位成實

今よりはをしね色つく秋風の身にしむ庵に月をみるかな

右

從三位顯氏

ほに出る門田のいねのいねかても月みる比のならひなり梟

身にしむ庵。月見るころ。おなしほとのこととて。しる

て不_レ及_二勝負之沙汰_一。

百三十七番

左勝

參議爲氏

いなほもるねさめの庵にさよ更て田のもはるかにすめる月影

右

行家朝臣

獨たにやすくふされぬを山田の程なき庵にすめる月影

やすくふされぬ。挾少心詞いかゝとて。負侍き。

百三十八番

左勝

沙彌蓮性

庵さす田のもはるかにさよ更てねぬわれ獨月を見るらん

右

小宰相

敷ならて庵もるしつも月やみるあふたのみある秋の契りに

ねぬわれひとりといへるそ。人はみな睡眠歟と申人侍
しかとも。秋のちきりの歌。るの字あまたさしあひて。
きゝにくしとて。負侍き。

百三十九番

左

俊成卿女

さ夜すから月そ山田の庵はもる風になるこはひく人もなし

右

前内大臣家

いほむすふ山田のそひの月影にいなおほせ鳥も夜寒にそなく
さ夜すから。いかゝと申侍しかとも。いなおほせとり夜
さむになくまでも不分明の上。山田のそひといへるも。
なきにをとるへきにや。なるこは。ひく人おほくて。勝
侍にき。

百四十番

左

按察

夜を重ねいねてふことも忘れぬ庵もる月をみるとせしまに

右

右近大將公相

夜もすから庵もる露のおきみつゝとは田の面に月をみる哉
見るとせしまにといへるそ。いかゝと聞え侍しかとも。
夜をかさね。夜もすから。同科にさためられ侍けるにや。

百四十一番

左

爲繼朝臣

をしねほす小田の庵のかりにたに幾夜か秋の月をみつらん

右

沙彌禪信

かりてほすいねてふことも忘れられて山田の庵に月をみる哉
かりにたにいくよといへる。いさゝか事たかひてや。山
田のいほは。月もさしまさり侍よし。定申侍き。

百四十二番

左

爲教朝臣

露むすふ山田の庵の筈をあらみねぬ夜かさねて月をみる哉

右

權中納言師繼

夜さむなる門田の庵の月影にわかいねかてをとふ人もなし

露むすふ山田の庵。夜さむなる門田の庵。不_レ可_レ有_二勝

劣_一。持と定申。

百四十三番

左

經朝朝臣

門田よりほなみの雲に月すみてたみゆたかなる御代の秋哉

右

沙彌寂縁

なこそあれきてしも月の隈そなき門田のいなは雲をなしつゝ

ほなみの雲。いなはの雲。民ゆたかなる名こそあれ。い

つれと見えわかれ侍らねは。おなし門田。さして無_二勝

負_一之由被_レ定。

百四十四番

左

經平朝臣

いなはもる門田の面の月影も夜さむなれはねられさるらん

右

帥

秋の田を守る假庵にいくよへてならしかほには月をみるらん

ねられさるらん。ならしかほには。又おなしほととて。

爲_レ持。

百四十五番

左

隆祐朝臣

幾千代もおなしよし田のいなむしろ玉しく露に月やみるへき
成茂

ひきうへしひとしろ小田に庵しめてほに出る秋の月をみる哉
おなし吉田のいなむしろ。ゆへ侍らめとも。みとしろを
たのほにいつる月は。作者さためて見る様侍にやとて。
勝とさためられ侍りき。

百四十六番

左持

雅言

秋田もるかりほのとこのさむしろに幾夜重ねて月をみるらん

右

家棟

みるまゝに門田の庵の隙をあらみ幾夜か月のもりあかすらん

兩首同科之由定申。

百四十七番

左

沙彌寂西

またからぬわさ田をもると霜のよの岡のやかたに月をみる哉

右勝

沙彌眞觀

かりてける門田の稻のなそもかくほされぬ袖に月をみるらん

門田のいねほされぬにやと申人侍しかとも。わさ田を

もる月を見るいかゝと申て。ほされぬ袖爲レ勝。

百四十八番

行路紅葉

左持

女房

ちらぬよりもみちや道をうつむらん見て過ゆかん方も忘れて

右

前内大臣基

そめはてゝ時雨は山を過ぬれと人をはやらぬ峯のもみちは

ちらぬより道をうつむもみち。風情めつらしく。殊勝之

由申侍しかとも。そめはてゝもたしかに。人をはやらぬ

もいかゝと聞え侍しをさへて。持の字をつけられ侍し。

いまに心え侍らすや。

百四十九番

左持

前太政大臣

かへるさのいつ踏わけん龍田山梢にみゆるよものもみち葉

右

民部卿爲家

立よれば袖も色つくもみち葉のかけゆく道を人やとかめん

この番。又風情おもしろく。心あるさまにみえ侍しな。

おなしく持とつけられ侍き。

百五十番

左勝

大納言隆親

時雨つゝさきたつ雲やそめつらん越ゆく山の秋のもみち葉

右

中納言資季

過やられてしはしそみつる露霜に木の葉色つく杜の下道

この葉色つくといへるよりは。時雨のさきたつ山のも

みちは。色ふかくやと申て。爲レ勝。

百五十一番

左

左近大將定雅

をのつからをちこち人の立とまる關とそみゆる秋のもみち葉

右勝

辨内侍

かへるさに色やまさと時雨つる杜の紅葉はまたすきてみん

又すきて見むといへる。心あるさまに侍うへに。關と見

ゆるまで人ととまるほとならは。をのつからやことた

かひ侍らんとて。かへるさのもみち色まさり侍き。

百五十二番

左勝

權大納言公基

旅衣ほさてしくるゝみ山路にしゐてそみつる峯のもみち葉

右

按察使良教

玉鉾の道ふみかへてけふは又ゆくてのほかの紅葉をぞみる
ゆくてのほかのみち。めにたち侍しを。西行法師こそ
のしほりの道かへてといふ歌。おもひいたさると申人
侍りて。旅衣まさり侍りき。

百五十三番

左勝

權大納言實雄

玉鉾の道ゆき人の袖の色もうつるはかりにそむるもみち葉

右

少將内侍

みち人の時雨をすくすほととも紅葉の蔭をよそにやはみる
うつるはかりのもみち色ふかく侍うへに。時雨をすく
すほととも。よそにやはみると侍は。いささか紅葉の
事をろかにきゝなされ侍るにやと申て。爲勝。

百五十四番

左

左衛門督通成

くれぬとも猶みてゆかんもみち葉の下照道はよるも迷はし

右勝

右衛門督

心さへ峯のもみちにうつるひて秋の山路はすきそわつらふ
したてるみち。ふるき歌にはかよふよし申人侍りて。秋
の山ちは。もみちにうつるふ心の色もふかしとて。勝と
定申。

百五十五番

左持

正二位忠定

さそひきてしくるゝ雲は過ぬともしはし紅葉の蔭やとらん

右

下野

時雨とも猶やすらはん紅葉ははぬれての後そ色まさりける
すきぬとも。くるとも。かけにやとらん。猶やすらはん。

各勝負不分明の出申て。爲持。

百五十六番

左

兵部卿有教

過やらぬ山路の秋の關守は人の心をとむるもみち葉

右勝

教定朝臣

玉鉾のゆききの岡のはつ時雨紅葉のかけをえやはすくへき
玉ほこのゆききのをかは。歌からよろしく侍うへに。人
の心をとむるもみち葉。西行法師白河關にやこゝろか
よひ侍らんとて。負侍へきにやと定申。

百五十七番

左持

正三位成實

駒なめてすきもやられすかた岡の杜の木の葉は紅葉しに鳥

右

從三位顯氏

過かてにけふやくれなんもみち葉も眺すつへき梢ならねは
駒なめすとも侍れかしと申人侍しかとも。なかめすつ
へきも又いかゝとて。持之由被定。

百五十八番

左勝

參議爲氏

もみち葉も袖の色にそうつり行木の下かけの秋の山道

右

行家朝臣

今そむる紅葉の色やみきらまし時雨の山をこえこさりせは
目きらまし。こえこさりせは。おなし事にやときた侍
て。左勝とつけられ侍き。

百五十九番

左持

沙彌蓮性

こしかたはそむる時雨も梨原のむまやあきてふ山のもみち葉

右

小宰相

かへるさにおりてもゆかん村時雨そめな残し木々の紅葉は
おりてもゆかん。よろしきよし申侍しかとも。梨原驛家
持にて侍し。のちに見給も。當時はもみちおほつかなく
こそ侍めれ。

百六十番

左勝

俊成卿女

時雨行秋の山路は紅葉はのうつろふ色やしるへなるらん

右

前内大臣家

見ぬ人の爲とやおらん玉ほこのみちのくまをの初紅葉はを
みちのくまをなとなく人とをに聞え侍るうへ。うつろ
ふ色やと侍。ことによりしく侍れは。勝と定申。

百六十一番

左

按察

行末のみちは千里もあらしとや紅葉にくらす秋の旅人

右勝

右大將公相

てりまさる秋の山への紅葉はによるさへかよふいはのかけ道
もみちにくらす上句いかゝとて。てりまさるもみち。こ
とに色ふかく見え侍よし申て。爲勝。

百六十二番

左

爲繼朝臣

行末はまた遠けれと旅人の紅葉おりはへ日をくらすかな

右勝

沙彌禪信

しくれ行山路も遠きぬれ衣きつゝもみちの色をみるかな
日をくらすかなと侍よりは。きつゝもみちのと云るは
よろしとて。爲勝。

百六十三番

左勝

爲教朝臣

ぬれぬともゆくてにおらん村時雨をむる山路の秋のみち葉
右
秋はまた紅葉やみちの關ならん行もかへるも心とゝめて
もみちやみちのせきならん。ことはりつよく聞え侍し
を。なにさして左勝侍にけるにか。

百六十四番

左

經朝朝臣

みちすから時雨るゝ色はこくうすく梢をわきて紅葉しに鬼
右勝
ゆきやらて日數へにけり龍田山紅葉にあかぬ秋の旅人
みちすからこくうすくといへるよりは。ゆきやらぬた
ひ人は。紅葉を思ふ心もふかくやとて。勝侍き。

百六十五番

左

經平朝臣

相坂のゆききにえせぬ旅人の心をそむる關のみち葉
右勝
猶もまた山路の末のしくるはこれよりふかき紅葉をやみん
おなし行路も。關のみみちはとてはいかゝと申人侍て。
山路のすゑのしくれは。ことによりしとて。勝侍き。

百六十六番

左勝

隆祐朝臣

ぬれつゝもとまる情はこえぬ覽さのみ紅葉のかけな時雨そ
右
なゝそちのおいの坂行山こえてまた色ふかき紅葉をそみる
成茂

とまるなさけよりは。山越てといへるは。もみちの色も
ゆへふかく侍らめは。なゝそちにゆるされ侍るへきに
や。

百六十七番

左勝

雅言

行すゑもしくるとみえし山のははけふ過かての紅葉也けり

右

家棟

かつみつゝ色まさりゆく紅葉かな時雨も過る山のした道

ゆくすゑおもひあはする心。さもやとて。左勝と定侍り
き。

百六十八番

左

沙彌寂西

もみち葉の色まさりゆく道のへは時雨と共に過そやられぬ

右勝

沙彌眞觀

思ひことみちゆきかねて此秋も我身時雨に木のはそめつゝ

兩方のしくれ。きゝわかれす侍しを。しくれはすきやす
きものにやと申人侍りて。このはそめつゝ勝之由被_レ定。

百六十九番

寄煙忍戀

左勝

女房

忍ふともうはの空にやしられまし戀に煙のたつよなりせは

右

前内大臣基

うら風にたくもの煙なひくともしらるな人に心よはさを
戀にけふりのたつよなりせは。中々事かはりて。いかに

いままでよみのこし侍けるにかと。各褒美詠吟ののち。
いまひとつの歌よみあけ侍し。うけ給て。いよゝ心よ

はく。まけのよしを申上侍き。

百七十番

左勝

前太政大臣

煙たにそれとは見えしあちきなく心にこかすしたの思ひは

右

民部卿爲家

名にたゝむ後そ悲しき富士の根の同じ煙に身をまかへても

心にこかす侍。詞たくみに心あまりて。ことによるし

く侍うへに。ふしのけふりめつらしけなく侍れは。さた
のかきりにあらずさて。まけ侍にき。

百七十一番

左

大納言隆親

下もえの思ひをそれとしらすなふしの煙はいつもたてとも

右勝

中納言資季

富士のねのけたぬ煙もたゝはたて身の思ひたに人ししらすは

ふしのけふり。いづれもめにたち侍を。いつもたてとも

と侍や。心ゆかぬやうに侍へきとて。けたぬ煙は。こゝ
ろもふかくやとて。勝侍き。

百七十二番

左勝

左近大將定雅

戀わひてきえなむ後の煙たに思ひありきと人にしらすな

右

辨内侍

あちきなくなとしたもえと成にけんふしの煙。空にこそたて

おもひありきと人にしらすなと侍。しのふ心ふかく。い
うに侍を。なとしたもえとなりけむといへる。すてか

たしとて。ことに宜き持と被_レ定。

百七十三番

左勝

權大納言公基

しられしななくもの煙下にのみむせふ習ひのそめてうき身は

右

按察使良教

たちのほる煙をよそにいひなして思ひありとも人にしらせし

兩方いつれも。題心ふかく。歌すかたよろしとて。猶持と被_レ定。

百七十四番

左

權大納言實雄

富士のねにたえぬ煙も心せよわか下もえの思ひあるよに

右

少將内侍

せめて猶下にはなひけ夕煙もえてわか名の空にたゝすは
わかしもおもひあるよに。よろしくきこえ侍る
を。心せよとはいかにと申人侍しかとも。せめてなをし
たにはなひけ。いうには侍れと。心おほつかなくやと申
て。ふしのけふり立まさるよしきためられし。

百七十五番

左

左衛門督通成

きえねたゝむろの八嶋の夕煙思ひありとも人にしらすな

右

右衛門督

下もえにむせひわふともうつみ火の煙よ立と人にしらすな
兩首の人にしらすな。何れも各なすらへて可_レ爲_レ持之
由申_レ之。

百七十六番

左

正二位忠定

いつまてと蛋のすくもひあちきなくたゝぬ煙の下にくゆ覽

右

下野

いかにせんあまの鹽やにまかへても戀の煙は立やまさらん

たちやまさらんとては。忍心いかゝとて。負侍き。

百七十七番

左

兵部卿有教

富士のねの煙はさそなしふとも下の思ひを人にしらすな

右

教定朝臣

人しれぬ忍ふの浦のなにしおはゝ煙なたてそあまの鹽火
兩首共。無_レ指得失。一決強不_レ及_二沙汰_一。爲_レ持。

百七十八番

左

正三位成實

我戀は忍ふの浦のしのへとももしほの煙たゝぬまもなし

右

從三位顯氏

大方のむなし煙といひなしてもゆるなけきの程をしらせし
しのへともたゝぬまもなきけふりは。忍ふこゝろなし。
むなしけふりは。勝ともいひなしつへしと定。

百七十九番

左

參議爲氏

きえねたゝ下の思ひの夕けふり心のほかの名にもこそたて

右

行家朝臣

煙をいつかはたつる磯かくれたきあらはさぬ蛋のしのひは
きえねたゝしのふの山の峯の雲。面影たつよし申人侍
き。あまのしのふ戀の心。おほつかなくやと申侍しゆへ
にや。持にて侍ける。いかゝ。

百八十番

左

沙彌蓮性

よしやまたたつとも浦の鹽煙わかやくとたに人のしらすは

右

小宰相

人しれすむせふ思ひに戀しなはむなしけふりや跡に残らん
わかやくとたに人のしらすは。よろしとて。人しれすむ
せふおもひのすゑさま。をとなくてまけ侍にき。ことは
りにや。

百八十一番

左持

俊成卿女

煙まてこひとはたつな跡もなくきえゆく空の雲にまかへて

右

前内大臣家

煙たつ海士のもしほはやきもせよ下の思ひは人もとかめす
あまのもしほはやきもせよ。下の思ひは人もとかめす。
こゝろいとさたかならず侍を。こひとはたつな。勝侍へ
きにあらすとして。爲レ持。

百八十二番

左勝

按 察

かくまては誰かはしらんよと共に煙もみせぬ下のおもひを

右

右近大將公相

空に猶たつなもらすな里のあまのもしほの煙下むせふとも
もしほのけふり。めなれてや侍らむ。みせぬけふり。心
ありけなりとて。勝と定申。

百八十三番

左持

爲繼朝臣

戀すてふなにはたてしと思ふ身にむねの煙の何こかるらん

右

沙彌禪信

我思ひ煙とならはさのみやはたつなをよそに忍ひはつへき

兩首ともに。忍心おほつかなしとて。爲レ持。

百八十四番

左勝

爲教朝臣

蜚のたく磯の鹽やの夕けふりおもひきゆとも人にしらすな
權中納言師繼

右

よしやたゝ思ひもきえね長らへは身より餘れる煙もそたつ
なからへはけふりもそたつといへる心。たえなはたえ
ねおもひいたさるとて。まけ侍にや。

百八十五番

左

經朝朝臣

しのふるも心にあまる思ひかな身よりや今は煙たつらん

右勝

沙彌寂縁

ふしの山うはの空なる夕けふりわか下もえにこゝろ返せよ
心かへ。忍ふこゝろありとて。爲レ勝。

百八十六番

左

經平朝臣

さてもよし難波入江に蜚のたくもくつの煙それもしらねは

右勝

帥

難波なる芹のしのやの下むせひたてしや煙ゆくかたもなし
もくつのけふり。すくも。あしよりは。めつらしからん
とにや。たてしやけふりといへる。えんによろしく侍し
かは。猶勝侍にこそ。

百八十七番

左持

隆祐朝臣

人とはゝよその思ひといふはかり空に成行けふりともかな

右

成 茂

もしほ火のよその煙はたゝはたてわか下もえを人にしらすな
よその思ひ。よそのけふり。いつれまさとわきかたし

とて持之由被_レ定。

百八十八番

左勝

雅言

つゝむ共たちもそのほるかはらやのしたたく煙思きえなて

右

家棟

かはらやのしたたく煙下にのみ思ひむせふと人にしられし

かはらやのしたたくけふり。おなしさまにわきかた

侍を。のちの歌は。猶ふるくやと申人侍て。爲_レ負。

百八十九番

左勝

沙彌寂西

人とはゝ里のしるへといひなして戀の煙を猶やたてまし

右

沙彌眞觀

靡くかと思えなは人に如何せんたくもの煙けつかたもかな

たくものけふり。心見えわきかたし。戀のけふりは。題

心あらはに。いひたてゝみえ侍れは。勝と被_レ定。

百九十番

寄月恨戀

左勝

女房

こぬ人によそへて待しゆふへより月てふ物は恨そめてき

右

前内大臣基

うき人はよそに成つゝよもすから月ばかり社身にはそひけれ

夢てふものはたのみそめてきは。たれも見るふる事に

侍けるを。月てふものはうらみそめてき。まことにあり

かたくも侍るかな。のちの歌月はかりこそといへるま

て。句ことにおなし事かよひなからをとりて。身にはそ

ひけれと結句に侍。凡卑のすかたに侍れは。いかさまに

もさきのうた。とにかくに勝侍へきよし。満座定申侍き。

百九十一番

左勝

前太政大臣

海士のすむ里はととはゝ濱千鳥月に鳴夜の袖としらせよ

右

民部卿爲家

うき人に涙の衣ひきかへしやとすとかたれ袖の月かけ

あまのすむさとのたまちとり。たくみにいてきて侍か

な。袖ひきかへしたる月。いくほとうらみ所侍らしと

て。負侍にき。

百九十二番

左勝

大納言隆親

わすらるゝ我身を秋のつらさとて月さへかはる影をかなしき

右

中納言資季

いかにせんうかりし人の面影の月にたちそふあかつきの空

わか身の秋。月さへかはるうらみ。うきおもかけ月にた

ちそふとなけくこゝろ。いつれと定申かたきよし人々

申て。爲_レ持。

百九十三番

左勝

左近大將定雅

また宵となくさめて社またれつれ更行月にうさそまされる

右勝

辨内侍

秋の夜の月にも袖はぬるれ共つらき人にそねはなかれける

ふけゆく月にうさそまされると侍よりは。つらき人に

そねはなかれけるは。いうにやと申て。爲_レ勝。

百九十四番

左勝

權大納言公基

月やとす袖にもしるやうき人の面影そへてうらみわふとは

右

按察使良教

身にしれはさこそは月もしほるめ眞葛か原の秋のよな
うらみの題のまぐすはらは。秋風そふくと云るおなし
心なるへし。月やとす袖にもとて。おもかけそへてと
侍。いうに聞ゆるよし各申。爲勝。

百九十五番

左

權大納言實雄

そのまゝに忘れんと思ふうき人のかたみもつらし有明の月

右

少將内侍

恨てもなきても何をかこたましみの月のつらさならては
かたみもつらしといへる。よろしきうへに。うらみても
なきてもいはんといふ事。ちかく聞えて侍きと 申人侍
りて。有明の月爲勝。

百九十六番

左

左衛門督通成

つれもなき忘れかたみのつらさかな浮ものとみし有明の月

右

右衛門督

うかりける人の心の秋の月かはらぬかけもいつまでか見ん
わすれかたみも。えむに聞え侍しを。かはらぬかけをよ
ろしとて爲勝。

百九十七番

左

正二位忠定

今はたゝ涙なみえそ袖の月うつれはかはるかけもうらめし

右

下野

もろ共にみし有明の月もせすうきにつけても詠めてそふる
月の題。つきもせすとは。いかゝと申人侍しかとも。

みし有明とつゝけては。まして寄たる題には。難侍らし
かし。見し。なかくてそとおなし心なるへきと申侍し
を。なみたなみせそ。いひおほせすとは。持の由被定。

百九十八番

左

兵部卿有教

めぐりあへはみしよの月もつらさかな空たのめうき人の心に

右

教定朝臣

待えても人の契そうかりけるおなし恨の山のはの月
めぐりあへはといひいてたるより。句ことにつよくよ
みすへて侍にや。おなしうらみの山のはの月。いうには
侍れと。心おほつかなしと申人侍て。爲侍。

百九十九番

左

正三位成實

獨ねのわひしきよるをかさねつゝ袖をいたく月になれぬれ

右

從三位顯氏

蜚のすむ里をうき身の契にてたのめし夜の月そ更ゆく
ひとりね。人わろきけに聞ゆるよし各申。あまのすむさ
とをうき身といへる。歌からよろしとて。勝侍き。

二百番

左

參議爲氏

面影は忘れかたみになからへて我ためつらきよはの月かな

右

行家朝臣

このまもる月とやいはん影をたみるはすくなき心つくしを
心つくしはかりにて。うらみの心おほつかなしとて。お
もかけたちまさり侍き。

二百一番

左持

沙彌蓮性

哀又人のあきこそうかりけれ時雨かちなる月をみるにも

右

小宰相

よひく月に月を哀となかめても猶うき人のまたれさりせは

兩首ともに。歌からよろしきよし申て。爲_レ持。

二百二番

左

俊成卿女

うきなからさすかにものゝ月影を忘れはてし有明の空

右持

前内大臣家

つらし猶今宵もさのみふけはてはまたゝはまたん山のはの月

さすかにものゝ月かけ。いひさしたるやうに侍れは。山のはの月。たちのほるへきよし各定申。

二百三番

左持

按察

かつみてもまつ歎かれぬむは玉のそのよの月の昔かたりに

右

右近大將公相

有明の月をいはいしつれなきのためしは人の心にそみる

そのよの月。ためしは人。ともによろしとて。持のよし

被_レ定。

二百四番

左

爲繼朝臣

さのみまた月にも袖のしほるゝは人をうらみのあまり成鳧

右持

沙彌禪信

ねても又夢にそみつるさ夜衣かへす恨の袖の月かけ

人をうらみのあまり。いひおほせぬさまなりとて。ねて

も又夢にそみつる。勝侍にき。今見侍れは。夢にそみつ

るは。戀しき人を見て侍にや。月をみて侍にや。かへす
うらみも又見る心にやかよひ侍らん。かたくおほつ
かなく侍りけり。

二百五番

左

爲教朝臣

今更にみてうき事のまさるかな月やつらさのしるへなる覽

右持

權中納言師繼

思ひ侘うきおも影やなくさむとみれは悲しき有明の月

見てうき事。月やつらさ。おなし事にやとさた侍し。尤

其謂侍りけり。みれはかなしき。いうに侍れは。勝侍に

き。

二百六番

左持

經朝朝臣

夜もすから袖にそやとるいつまてか月みるとても人を待けん

右

沙彌寂縁

めぐりあはて空行月もかたふきぬ山のあなたと契やはせし

兩首。恨心おほつかなくて。たゝ逢不遇戀にてもや侍ら

ん。可_レ爲_二同科_一之由定申。

二百七番

左持

經平朝臣

こぬ人のつらさもつらき秋の夜になと更ぬらん山のはの月

右

帥

やすらはて出にし人の名残とてなかくみすは有明の月

こぬ人のつらさ。いてにし人のなこり。山のは。有明。い

つれもわきかたしとて。又爲_レ持。

二百八番

左

隆祐朝臣

またれつる月は出ぬとなかめても残る恨みのある身なり鳧

右勝

成茂

いかにせん月のかとは思はねとうき面影におつる涙を

ある身なりけり。よろしからすや。おつるなみた。めお
とろかぬことに侍れと。勝へきよし各申定。

二百九番

左勝

雅言

面影はみしよの月にしたはれてうきにも人の忘れぬかな

右

家棟

もろともにみし有明は變らねとうき身ひとつにくもる月影

うき身ひとつにくもる月影。ふるきうたにやと申人侍
て。見しよの月にしたはれて。勝侍にき。

二百十番

左持

沙彌寂西

我中のよしなき袖にやとりきて恨にまじる月の影かな

右

沙彌真觀

うき人はさそともいはし夜半の月たのむになれは落る涙を
うらみにまじる。たのむになれは。勝劣難辨之由各申

之。爲持。

嘉曆三年八月十日。以或人之本不慮令書寫畢。

法眼仲顯

右影供歌合依無類本不能歌合

群書類從卷第二百二

和歌部五十七歌合廿三

十五夜歌合文永二年八月

題

初昇月

停午月

漸傾月

未出月
欲入月

作者

左方

女房

前關白左大臣(良寬)

關白左大臣(實經)

右大臣(基平)

前內大臣(基家)

兵部卿藤原朝臣隆親

大納言藤原朝臣良教

權大納言源朝臣通成

中宮大夫源朝臣雅忠

中納言藤原朝臣爲氏

左兵衛督藤原朝臣高定

參議源朝臣資平

右近衛權中將藤原朝臣經平

侍從藤原朝臣行家

左大辨源朝臣雅言

右近衛權中將源朝臣具氏

右方

融覺

前太政大臣(公相)

式乾門院御匣

中納言

小宰相

前權大納言藤原朝臣資季

左近衛權中將藤原朝臣公雄

右近衛大將藤原朝臣通雅

權中納言藤原朝臣長雅

寂西

右兵衛督藤原朝臣爲教

法印實伊

鷹司院そち

眞觀

左近衛權中將藤原朝臣忠繼
右近衛權少將藤原朝臣隆博

講師

讀師

判者 衆議

一番 未出月

左勝

大空の雲をのこさすふきなして風も月待けしきなる哉

右

女房 融覺

しろたへに光そにほふかねてより月をまつちの山端の雲

左右歌よみ申て後。兩方とも存知申へきよし仰あり。右

方申云。左歌。題の心詞のおもむき。神也妙也。無難無

咎之由申之。左方申云。雲無要歟。まことに萬葉のふ

るきこと葉。わつかにおもへるはかりにて。更に見所持

らぬよし申て。尤以左爲勝之由一同定申。

二番

左勝

前關白左大臣

むら雲にうつろふかけはみえそめて峯に待るゝ秋の夜の月

右

前太政大臣

暮ぬとてまたるゝ空の山端に光そをそき秋のよの月

右方。左無指難之由申之。左方申旨なし。空の山のは

やたしかに侍らんと申出侍き。仍猶左勝へきよし被定

仰。

三番

左

關白左大臣

よしさらはよひのまつらき袖の露出て拂へと月にかこたむ

右勝

式乾門院御匣

待ほととの空に心をつくせとやなを出やらぬ秋のよの月

左歌をけらん露は。いてゝはらはんといへる心。さもや

と各申侍しを。右歌下句艶によろしきよしおほせ出さ

れて。以右爲勝。

四番

左持

右大臣

まつ人の心つくせと足曳の山のあなたに月そやすらふ

右

中納言

月はまた影かくしたる夕暮にほとよりすめる秋の夜の空

左ことによろしきよし。右方より申侍しかとも。右かけ

かくしたる。女房の歌にやとて。優せられて持の字をつ

けられ侍き。

五番

左

前内大臣

こよひとて雲はおさまる天の下によもふりまさる月を待哉

右勝

小宰相

暮るより雲吹はらふ風の音に心すみても月をまつかな

左歌はしめおはりの句のほと。心えわきたる人侍らさ

りしやらむ。右歌に可付勝字の由。各被定申。

六番

左持

兵部卿藤原朝臣隆親

かねてより影やとれとやむすふらん月待よひの袖のしら露

右

資季卿

久かたの空にひかりはみえなから高根の月を猶またれける
右歌させるとかなくきこえ侍しかとも。左の歌優なる
よし申人々侍て。爲_レ持。下句に月まぢくらす袖のしら
露。おなし題にちかき歌に侍ける。

七番

左持

大納言藤原朝臣良教

思ひやる山のあなたの月かけを待としらせて秋かせそふく

右

左近衛權中將藤原朝臣公雄

さと人のおしむ心のしらねとも山のあなたの月そまたるゝ

兩首の山のあなた。みわかれぬよし。左右ともに申て。
又爲_レ持。右歌本歌の心詞そいくほとかはらす侍ける。

八番

左勝

權大納言源朝臣通成

出やらぬ月まつほととのよひのまはかねてもつらき山のはの雲

右

右近衛大將藤原朝臣通雅

待ほとも心つくしの秋の月このまもりくるひかりのみかは

右心つくしの秋の月。下句すてにいてゝみゆるにより
て。左可_レ爲_レ勝也申。各定申。

九番

左持

中宮大夫源朝臣雅忠

出やらぬ山のあなたの月影をさそひかほなる峯の松かせ

右

權中納言藤原朝臣長雅

待いてはいかにおもふゆふへよりかねて心の月もすみぬる

左さそひかほなる松風。いかにそやきこゆるを。右いか
にと思ふ夕より月にすみぬる。まさりてもみえぬよし。

みな申によりて。爲_レ持。

十番

左持

中納言藤原朝臣爲氏

出かてのかけをはよそにききたてゝ山本をそき秋夜の月

右

寂西

たゝに過る夕間暮とは思ふなよ侍るゝものを山端の月

左の歌。かけをみやこにききたてゝ。新古今の時雨の歌

ときこゆとて。負侍しを。右歌たゝにすくる夕まくれ。

又勝へきにあらすと仰いたされて。又持の字をつけら
れ侍き。

十一番

左持

左兵衛督藤原朝臣高定

夕くれの空すみわたる秋風にいとゝまたるゝ山のはの月

右

右兵衛督藤原朝臣爲教

ほのかなる面影はかりみえなから待ほとをそき山のはの月

いとゝまたるゝ。待ほとをそき。左右の山端の月。いく

ほととの勝負侍らしとて。猶持とさためらる。

十二番

左持

參議源朝臣資平

山端にかねてうつろふ影みえて心つくしの月そまたるゝ

右

法印實伊

かねてより秋はこよひとまたれて猶そやすらふ山のはの月

兩方。さして申むねなし。仍爲_レ持。

十三番

左

右近衛權中將藤原朝臣經平

かねてより光はそれとみえなから峯にやすらふ月そつれなき

右勝

鷹司院帥

いかにして誰ゆへならぬ眺めとも山のあなかつ月にしられん
左もさせるとかなく侍れと。右妖艶の躰なりとて。勝と
被_レ定侍き。

十四番

左持

侍從藤原朝臣行家
さこそ又山のあなたにおしむとも待心しれ秋の夜の月

右

眞 觀

夕日さす雲のはたてにみゆる哉出てすむへき月のひかりは
左山のあなたの秋の月。右雲のはたての夕日。をのゝ
本歌をおもへる心尤宜とて。持と被_レ定。

十五番

左持

左大辨源朝臣雅言
暮るまは山のあなたの月影もおもひやられてはるゝ空かな

右

左近衛權中將藤原朝臣忠經

山のはをかちやせまし秋の夜の月の爲なるへたてならねと
左させるとかなし。右へたてならねと。勝へきにあらす
とて。爲_レ持。今みたまふれは。くるゝはるゝとそ侍ける。

十六番

左持

左近衛權中將源朝臣具氏
みるまゝに月影ちかき夕とやかねても空のすみわたるらん

右

左近衛權少將藤原朝臣隆博

をちかたの雲ゐになかくかけみえて山端つらき秋の夜の月
これ又。兩方無_ニ申旨。仍同前。

左持

具氏朝臣

山のはになをむら雲は残れともよそに成行月そさやけき

右 隆 博
見れは今我こゝろさへさそはれてそらに成ゆく山端の月
左右。よそになりゆく空に成行。またおなしかるへきよ
し。右申て。猶爲_レ持。

十八番

左持

雅言朝臣
末とをくすむへきほとそしられるはるゝ雲ぬに出る月影

右

忠繼朝臣

さしのほる影そのとききよひの月曇りなきよを空にしれとや
左右の祝言。勝負無_ニ沙汰。仍爲_レ持。

十九番

左

行家卿

かけしけき松の木のまもみえそめて人にしらるゝ山のはの月

右持

眞 觀

麓にはまたきうつらぬひかりにて山端はかり月そさやけき
左人にしらるゝほといかゝとて。以_レ右爲_レ勝。

二十番

左持

經平卿

雲はらふ嵐のかひもありかほに山たちはなれすめる月影

右

帥

出ぬれと山のは高くみえぬまはたかいつはりを月に待らん
左右ともに。指無_ニ得失。被_レ定_レ持。

廿一番

左持

資平卿

足引のおのへに残るうき雲をたちはなれゆく月そさやけき
右 實 伊

たかりも今やみるらんあし引の山たちはなれ出る月かけ
右歌里のみえわたるやうにやと。左方より申之。仍以
左爲勝。

廿二番

左持

高定卿

誰ゆへにしのひかれてか足引の山たちいて、月のゆくらん

右

爲教卿

さしのほる光をそへて山のはに秋のもなかつつる月かけ

左歌月の行粧。凡卑にやと申侍しかとも。右のほかひか

りいつる影。めにたつよし左方より申て。爲持。

廿三番

左勝

爲氏卿

すみのほる影もさやけし秋風に雲のあとなき山のはの月

右

寂西

山も今秋のなかはのかひなれは出てさやけき月の影かな

右山も今。いかゝとて。左に勝の字をつけらる。

廿四番

左

雅忠卿

たえくゝに木間もりくる月影やみ山を出るはしめなるらん

右勝

具雅卿

行すゑの空にはかけのみえぬれとまた山ちかき秋のよの月

左歌郭公の面かけみえにたつとて。右歌勝侍き。

廿五番

左勝

通成卿

よろつ代の行末とをく三笠山かけさしのほる秋のよの月

右

通雅卿

久かたの雲ぬをさしててらす也今かけみゆる山のはの月
右よろしく侍るを。左三笠山さしてかたひき申さるゝ
人侍て。左を勝とさためらる。

廿六番

左

良教卿

さしのほる月もさやかに三笠山ゆく末かけてさそくもりなき

右勝

公雄卿

立のほるすゑもはるけし君かすむはこやの山の峯の月かけ

さしのほる三笠の山も。君かすむはこやの山の峯には。

をよひかたきよし右申て。爲勝。下句やもし。ちかきこ

とに侍らむ。

廿七番

左勝

隆親卿

しるきかなひさしかるへき雲ゐとは今さし昇る月の影にも

右

資季卿

いつしかといたらぬくまもなかり鳧山たちはなれ出る月影

右いたらぬくまもなき。ことはつゝき。めなれたりと申

人侍て。左いまさしのほる雲井の月。尤可賞翫之由一

同に申て。爲勝。

廿八番

左

前内大臣

松たかき木のまにみえて梢にはなをなりやらぬ山端の月

右勝

小宰相

山のはに今さしのほる光より名におふよはの月はみえけり

左とすゑには猶なりやらぬ程。松の事とおほえす。お

ほつかなしとて。右勝と被定。

廿九番

左勝

風わたる高根の松の梢より今みえそむる月のさやけさ

右

中納言

おほかたの空たにあるを山のはにかけみえそむる秋のよの月

右上句も心こもりたるやうにみえ侍しを。左やすらかに

よろしきよし。人々定申て。爲勝。

三十番

左勝

關白

峯に吹松のあらしを聞すてゝうはの空にも月を成ゆく

右

御匣

かつらきや高天の峯の雲まよりよそけに出る秋の月かけ

左松のあらしを聞すてゝとは。月のことにやと申人侍

しかと。右よそけに出る月めつらしきを。かつらきの雲

おもかけたちなれたりとて。負侍りにき。

三十一番

左勝

前關白

出るより光そしるき秋の月くもらぬ御代の行末の空

右

前太政大臣

あし曳の山のたかねもあらはれて松の葉分を出る月かけ

右まつの葉分を出る月もみすてかたく侍しを。左ゆく

末くもらぬ御代の月は。尤可_レ庶幾_レ之事也と満座申_レ之。

爲勝。

三十二番

左勝

女房

雲のみか山のはちかき夕暮は月もよこきる光なりけり

右

融覺

いつるより月にそしるきみかき山光さしそふ秋のなかはは

左の山のはちかき夕暮は月もよこきる。めつらしくも。

おもしろくも。ひかりをはなちて。めをよるこはしめ侍

しうへに。右の月にそしるき三笠山。あまりにさして事

にて。すてられ侍き。

三十三番

左持

女房

久かたの空にや月もやすらはん秋の半にこゝろとゝめて

右

融覺

すみのほる空には影もかたふかて秋のものなかの月そ久しき

秋の半に心とゝめて月のやすらふほと。たとふへき物

なく有かたきすかたなりさ。左右ともに申侍しかとも。

右祝言に優すへきよし仰下されて。持にさためられ侍

き。

三十四番

左持

前關白

久かたの空の半に影とめて秋もこよひと月そのとけき

右

前太政大臣

すみのほる半の空にかけとめて秋もこよひと月そさやけき

左右歌。はしめの五文字の外は。みわくへきすかた。お

もひわくへき心ならずとて。尤有_レ興。持と被_レ定。

三十五番

左持

關白

ます鏡みかくと見えしえにしあれや限なき月を晝にまかへて

右

御匣

天津空半の月の光にもくもりなきよの秋そみえける
左歌江の心波の上。午なる時を思て。月かけにみかきな
されたる鏡。心うつりて面白くも侍しうへに。右の半の
月。いさゝか申出むね侍しにも。くもりなき世の秋よろ
しきによりて。持とつゝけられ侍き。

三十六番

左持

右大臣

あひにあふ秋やこよひと知ぬらん半の空にすめる月かけ

右

中納言

空晴て出つる山のかせはやみなかそらにすむ月そさやけき

左ことに宜くきこえ侍しを。右又優なりとて。爲_レ持。

三十七番

左持

前内大臣

秋もとき名高のうらのもちしほに夜半も最中と月をさしける

右

小宰相

月かけはゆくともみえず半天に人のこゝろやせきと成らん

この番。ことに各申旨なし。老耄くはしくもおほえ侍ら

す。左歌秋もとき夜半も最中の望。鹽に月のさして。事

おほく。右の歌。人の心の關も。本歌いかにと申人侍し

かとも。とてもかくても持と被_レ定。

三十八番

左

隆親卿

待もかねおしみもあへぬ山端のおなしとをさにすめる月哉

右持

資季卿

さよ中とふけぬる空に雲晴てゆくともみえずすめる月かけ

左おなしとをさ。まことに空にしりかたく侍れと。題の

心はかなふへしと申人侍しかとも。右夜雲收盡月行遅
心めつらしからねと。可_レ爲_レ勝_レ之の由。人々多く定申
侍き。

三十九番

左

良教卿

かそふれはこよひそ秋の中空にやすらふ月の影ものときき

右持

公雄卿

雲晴てゆくともみえず久かたの空もなかはの秋のよの月

右又同_レ前よろしとて。爲_レ勝。

四十番

左持

通成卿

名にしおふ秋の半の中空に月もさやけき影やとすらん

右

通雅卿

何事もみちたる御代の月かけを今宵の空の半にそ見る

右祝言。賞せらるへきよし申侍しかとも。はしめつかた

餘にやと仰いたされて。左の歌よろしきによりて。持と

被_レ定侍にき。

四十一番

左持

雅忠卿

名にしおふ秋もこよひと半天に影をとめてすめる月哉

右

長雅卿

雲はれて出つる山もいりかたもはるかにみゆる秋夜の月

是又。左右いつれもおもふ所ゆへ侍れは。同爲_レ持。

四十二番

左

爲氏卿

久かたの空のの中に影とめて行衛いそかすすめる月かな

右勝

寂 西

曇らぬものとけき御代の秋の空まほにあふきて月を社みれ
右まほにあふきて月みる心。めつらしとて。勝之由被

決定。

四十三番

左

高定卿

秋もさそ空も半をわきてこそ猶すみまされ夜半の月かけ

右勝

爲教卿

名にしおふこよひは秋の中空に影かたふかすすめる月かな

これ又。右勝とさためられ侍き。

四十四番

左勝

資平卿

久かたの空の最中にすむ月の秋はこよひとかせそのとけき

右

實 伊

秋風に小夜ふけにけるかりかねの鳴行かたは月そさやけき

左させる難なきうへに。右鷹かねの鳴ゆくかた。荒涼なりとて。負侍き。

四十五番

左

經平卿

一とせに月の名たかきこよひと更てなかはの光にそしる

右勝

帥

水の面にかそへし秋の月みれは空にも今そ半なりける

備古

右順かふることなれと。水の面の月めつらしきよし。人

人申て。勝と被決定。

四十六番

左持

行家卿

今こそは板井の水の底までも残るくまなく月はすみけれ

右

眞 觀

世をてらすかけにそしるき久かたの空にたゞしき月の行ふは

右歌すかたまことにうるはしくかたふかす。本文つよ

きよし人々申侍しかとも。左のうた。板井の底まですめ

る月かけ。いつもめつらしくみ侍らんと申うけて。爲

持。

四十七番

左持

雅言朝臣

やすらひにしはしなふけそ秋の月さよも半の空としらせて

右

忠繼朝臣

名にしおふ今宵はしるき秋とてや月もも中の空にすむらん

此番。又兩方無申旨。仍爲持。

四十八番

左勝

具氏朝臣

月は今ちとせの秋の中空にすむも久しき影そみえける

右

隆 博

中空にかけすみまざる秋のよの月こそ月のさかり成けれ

右月こそ月めつらしなから。おもかけあることにやな

と申人侍て。左させるとかなしとて。勝侍き。

四十九番

左

具氏朝臣

鷹かねのこゑも聞えず空澄て更ぬる後の月そ久しき

右勝

隆 博

惜めともまさ木のつなをかけてたにとゝめ難くそ月は更ゆく

空すみて月そ久しきよりは。まさ木のつな可勝之由被

レ定。これも本歌のこゝろ詞さきにそ侍ける。

五十番

左持

雅言朝臣

木間もる月は西にそ成にける心つくしのなかめせしまに

右

忠繼朝臣

更行はいづらならひのありかほに月吹かへす風を待かな

右歌月吹かへす風も。ありつきてきこえぬうへに。ふけ
ゆけはいづらならひもつゝかす侍り。左云。木のまもる
なかめせしまに。おなしことなれはとて。持とさためら
る。

五十一番

左持

行家卿

月ははやふけにけらしなあつまやのほとなき軒も影そみえ行

右

眞觀

老らくの身の行末を思ふにはまたかけとをし秋のよの月

あつまやの程なきかけによりて。ふけにけるをしり。老
らくの身の行末にくらへて。またとをしとおもへる。左
右の月。各見所有とて。持と定申。

五十二番

左勝

經平卿

紅葉する月のかつらも分て猶にしこそ秋とすみまさりつゝ

右

帥

秋のよにあかても影の更行はおもふ中とや月のみゆらん

右あかてこそ思はむ中はいへるこゝろ。いうに侍し
を。秋はなをもみちすれはやとおもへる月は。てりまさ
るへしと仰下されて。勝字を被レ付。

五十三番

左持

資平卿

綱古

わきて猶更行かけのさやけきはにしこそ秋と月やすむらん

右

實伊

月は猶ふけにけらしな大かたの秋そこよひ半なれとも

右歌よろしきよし。各申侍しを。下句。先年知家卿詠す
るよし。三位侍従申いたして。爲レ持。

五十四番

左勝

高定卿

いつのまに更ぬるかけそはるゝよの月は行ともみえぬ物から

右

爲教卿

みるまゝにき夜更ぬらし久かたの月も半の影そたけ行

右させる難なくきこえ侍しかとも。左はよろしきよし
人々申て。爲レ勝。

五十五番

左勝

爲氏卿

見るまゝにまやの軒端をもる月のふくれは影のうつり行哉

右

寂西

さよ中やあまつみ空にすきぬ覽かたふきそむる月の影哉

右歌上句おほせいたさるゝむねありて。左勝侍き。

五十六番

左持

雅忠卿

行末はなをとをけれと秋のよの月は西にも成にけるかな

右

長雅卿

みるまゝにおしむ心はふかき夜の空にもしらて月や行らん
左右おなしほととの事にやとて。爲レ持。

五十七番

左勝

通成卿

ふけぬるかおなし雲ゐを詠むればゆく方ちかき夜半の月哉

右

通雅卿

山かせは心してふけ秋のよのなかはたけゆく月やかへると

右心してふけとて月やかへるといひはてたるも。すこ

し心ゆかすや。左やすきにつけて。勝と被_レ定。

五十八番

左

良教卿

ふけぬとて西へかたふく光よりてる月なみも半過らし

右勝

公雄卿

山のははまた遠けれと秋の月半たけゆく影いそくらし

左上句いかゝとて。以_レ右爲_レ勝。

五十九番

左勝

隆親卿

この秋もおいの心にあくかれてねぬよの月そ西にかたふく

右

資季卿

今宵さへ人もとひこすあつまやの軒はのにしに月めくる迄

右も。させるとかなく侍しかとも。左老にゆうせられて。

爲_レ勝。

六十番

左持

前内大臣

月までも秋のあはれのさひしさなあかつきかたの空にみす覧

右

小宰相

詠めあかてやゝ入方になるまゝにあはれそ月に猶残りける

題の心はいつれも分明ならず候よし。左右各申て。爲

六十一番

左

右大臣

なかもつるそなたの空もかはるまでねぬよの月の影を更ぬる

右勝

中納言

いとかゝる月とみねはや休らはてねなまし物と人のいひけん

左歌後京極攝政この題の歌に。いくほとかはらさるよ

し三位侍從申て。右勝。

六十二番

左勝

關白

鳴そむる鳥のねならて更る夜を又しらせつる月の影哉

右

御匣

ふけにけり山のはもなきむさし野のお花か末にかゝる月かけ

右歌また同躰のちかき歌おほしとて。爲_レ負。

六十三番

左

前關白

みるまゝに更行よはのあまの河雲のみおとや月さそふらん

右勝

前太政大臣

ななき夜はいつの人まに更ぬらんめかれぬ月そにしに成行

左歌ことなる難なく侍しかとも。右歌ことによるしき

よし。一同に申て。勝とさためられ侍き。

六十四番

左勝

女房

月は今軒端の松のかけにこそかたふきそむる程はみえけれ

右

融覺

露をおもみもとくたち行萩かえのおなしかけにも宿る月哉

右露の萩にをけるすかた。ちからよばく。ことはかさりて侍うへに。左の月松をてらす。先たけ高くたくみにして。尤可賞可翫。

六十五番 欲入月

左勝

女房

有明のそらにそにたる山端に入かりたる月のおもかけ

右

融覺

さりとては山のは近き老か身のよそへてはみし秋のよの月

左題のこゝろめつらしく。歌のすかた有興のよし。満

座申之。右老後の述懐。よみあくるにをよはすとて。又

以左爲勝。

六十六番

左持

前關白

いと、又名殘に色そまさりける秋もそなたの山のはの月

右

前太政大臣

難波かた浪まを分て入月の猶かけのこる淡路しま山

左下句よろしきよし各申之。右又。そのところおもひ

やられて興あり。仍爲持へき之由被定。

六十七番

左勝

關白

世をうしとおもふ人なき此頃はひとりや月の山に入らむ

右

御匣

長き夜も明方ちかき鐘の音にしはしやすらへ山端の月

左治世之徳化可賞翫之上。右相似近歌之由。自左

方申之。爲負。

六十八番

左

右大臣

夜もすからあかてなれぬ名殘とて暫しはとまれ山のはの月

右勝

中納言

ゆく月の心もしらて入かたの山のはつらくに思ふらん

左させるとかなく聞え侍しを。右無左右勝ときため

られ侍き。今見給に。ものかたりうたのことはましはれ

る。いふなることゝは受給はりしかとも。本歌も。こと

によるへくやとそおほえ侍る。

六十九番

左持

前内大臣

惜みつる君にしたかふ世としらは峯ちかくとも月はいそかし

右

小宰相

入かゝる光もつらくゆく月をたれわか山と今はみるらん

左右の初五文字。をのゝ一同可爲持之よし申之。

七十番

左持

隆親卿

秋の月なこりをいかにしのへとて山のはいそく影をみす覽

右

資季卿

老か身を思ひよそへて山端にかたふく月もあはれとそみる

左よろしけれと。右又是も老の心すてかたしとて。爲

持。

七十一番

左勝

良教卿

大かたに秋行月を山のはのつらきになして猶いとふかな

右

公雄卿

なを殘る光そみゆるよはの月かたふく山のふもとならねと

右 上句心おほつかなきうへ。左よろしとて。勝と被_レ定。
七十二番 左

山のはにつれなきかけを殘してそ猶入やらぬ有明の月
右勝 通成卿

なかめつゝふくるもしらぬ月影の山のはに夜は成にける哉
左 有明の月。不_レ叶_二題心_一之由各申_レ之。負侍りにき。右
下句もいかゝとそみえ侍る。
七十三番 左持 雅忠卿

いかにしてしはしとゝめん山端にかたふく月の有明の空
右 長雅卿

おもかけを忘れやすると入かたの月に心をいつちやらまし
これ又有明の月。さきのことく申侍しかとも。右下句勝
と難_レ定之由をのゝ申て。爲_レ持。
七十四番 左 爲氏卿

をくら山ふもとはかけに成にけり松にかゝれる明かたの月
右勝 寂西

入までも猶のこりある夜半の月しめても老のともとみる哉
左かゝれる月。いひおほせぬさまに各申侍しうへに。右
老の心一かときこゆるよし申出して。右勝と申され侍
き。
七十五番 左勝 高定卿

いひしらぬ名殘をみせて山端に今はとかゝる月のかけかな

右 爲教卿
あかなくにうはのそらをやかこたまし梢にかゝる秋の月影
右空のこす荒涼なりと。左いひしらぬなこり。勝と被_レ定。
七十六番 左 資平卿

すまの浦や遠きしほちの浪の上に明かたちかくやとる月影
右勝 實伊

明るまも久しき物を山のはにしはしはのこれ夜半の月かけ
すまのうらとをきしほち。はるゝもとめたるやうに
きこゆるよし仰ありて。以_レ右爲_レ勝。
七十七番 左持 經平卿

いく里のねぬよのそらにしたはれて山端ちかく月殘るらん
右 帥

とゝまらぬ月は猶こそうかりけれつれなくみえし影は物かは
兩首又よろし。不_レ可_レ有_二勝負_一。仍爲_レ持。
七十八番 左 行家卿

あかすみのおもひをいとによられねと心細くや月のいる覽
右勝 眞觀

夜なゝにみるへき月の影なれとあかぬ餘りは山のはもうし
左いとによる本歌の事。融覺申す旨侍て。右勝と被_レ定。
七十九番 左勝 雅言朝臣

秋のよのなをのこりある程たにも心になふ月のかけかは

右

忠繼朝臣

あはれ又山のあなたに宿もかな入なんのちも月をみるやと
右山のあなたにやともかな。ふるき歌にかはらす。つゝ
きたるうへに。いりたるにや。しからは。題の心そむく
へしとて。左をかちと被_レ定。

八十番

左持

具氏朝臣

いくかへり西こそ秋はうき物とそなたの峯に月のみゆらん

右

隆 博

山のはに猶入やらぬかけをこそさすかに月の情とはみれ
兩方より。しゐて不可_レ有_二勝劣_一之よし申て。爲_レ持。

龜山殿五首御歌合文永二年九月十三夜

題

河月

野鹿

山紅葉

不逢戀

絶戀

作者

左

女房

前關白良實公並光國入道前關白左大臣

右大臣基平公深心院關白前左大臣

兵部卿藤原朝臣隆親

權大納言源朝臣通成

權中納言藤原朝臣長雅

參議源朝臣資平

右近權中將藤原朝臣具氏

眞觀

中納言

右

關白實經公後一條入道前關白左大臣

前太政大臣

前左大臣實雄公山階入道前左大臣

前大納言藤原朝臣資季

中宮大夫源朝臣雅忠

融覺

中納言藤原朝臣爲氏

侍從藤原朝臣行家

右兵衛督藤原朝臣爲教

左近中將藤原朝臣公雄

講師

左 右近衛權中將源朝臣具氏

右 侍從藤原朝臣行家

讀者

左 右大臣

右 前太政大臣

判者

衆議判

一番 河月

左持

行すゑのなかれも遠く大井河水の秋さや月のすむらん

右

爲氏卿

かけうつす君か千とせも大の河水の秋とや月のすむらん
左方 左歌。講師讀_レ申之。任_二承曆例_一。方人先可_二詠吟_一之由被_レ仰。仍發聲詠_レ之。次右歌。講師讀_レ申之。右方人詠吟之

後。各可_レ申_二是非_一之由有_二御氣色_一。右方申。左歌。下句同_二右歌_一。又上之_二二句非_レ珍_一。左方申。誠右歌同舛也。勸_二先規_一。一番兩首同品之時。優_レ左爲_レ勝。右歌秀逸之時。爲_レ持云云。右歌無_二指事_一歟。尤任_二先例_一可_レ爲_二左勝_一歟。右又申。

かけうつす君かちとせ。爲_二祝言_一之上。初句得_二河月之題_一。有_二便宜_一之詞也。右勝非_レ無_レ例。爭可_レ負哉。左方重難云。かけうつすは。爲_二君之影_一。非_二月之光_一。遠背_二題之本意_一歟。然而祝言猶難_二默止_一之由。右方頻依_二支申_一。猶

被_レ定_レ持。

後鳥羽院御時歌合。俊成卿判云。おほかたは歌合の例として。一番歌は左勝とし。右すこしつよき時。持とはしるすよし載_レ之。右方令_二申請_一之趣。被_レ背_二彼判_一云_二歟_一。

左右講師讀_レ申畢。各詠吟之後。可_レ申_二存知_一之由被_二仰下_一。右方申。兩首初第二句之外同歌歟。不_レ可_二勝劣_一之由申_レ之。左方一番左歌必可_レ爲_レ勝之由被_二仰下_一。右君か千とせの大の河難_レ定_レ負歟。左右共可_レ爲_レ持之由定申。

二番

左

前關白

萬代につかへてそみむ月も猶かけをとむるせきの藤河

右

關白

瀬を早み磯まにたきつ山河のたえすそ千世の月はすむへき
右方。左歌。心詞優美之由申_レ之歟。右歌。萬葉集に。磯のまゆたきつ山河たえすあらはといふ歌の。三句つゝきてや侍らんと被_二仰出_一。いとさもきこえす候歟と侍從三位申_レ之。ゆの字をとめて。磯間にたきつといふより。たえすといへるまでは。三句にわたるにこそ。但萬葉集歌。古來取過非_二巨難_一歟之由。有_二勅定_一。大閤被_レ申云。今見_二左歌_一。忠臣之趣。定無_二右方作者之難_一歟。申請可_レ付_二勝字_一候哉。關白被_レ申云。於_二歌優劣_一者。暫不_レ可_レ論_レ之。仕_レ君之勤節。誠非_レ可_レ申_二子細_一。早以_レ左可_レ爲_レ勝云々。

左方より。磯間にたきつ山河。雖_レ存_二古歌_一。關の藤川尤宜歟之由被_レ仰。右方申。左歌。誠無_二指難_一。似_レ有_二餘情_一。仍以_レ左爲_レ勝。

三番

左勝

通成卿

龜のおの瀧つかは浪玉散て千世の數みる秋の夜の月

右

前太政大臣

大の河ぬせきの水に影さえて月もみなきる瀨々の岩波

右方無_ニ申旨_一之間。左方申云。月もみなきる。いとその心えずや侍らん。千世の數みる秋のよの月。あきらかにこそ侍れとて。同可_レ勝之由申_レ之。左方おほの河ぬせきの水。めつらしからず。きくなれたる事歟。右方月もみなきる瀨々の岩浪。秋水の面かけ。よろしきよし申すといへとも。左。かめのおのたきつ河なみ。たちまさりてきこゆる上に。千世の數見所ありとて。左右ともに。以_レ左可_レ爲_レ勝之由。さため申。

四番

左

資平卿

くもりなき今宵は秋の名取河月にやみえむ瀨々のむもれ木

右勝

雅忠卿

大井河岩こす波のしら波に千よの數みる秋のよの月

左歌は。西園寺入道前太政大臣家月十首に。名所河風情ありしにやと。侍從三位申_レ之。其歌は。分明には申侍らさりしにや。左方申云。右歌。先の番の左歌におなし。めつらしからずや。左歌。下句優にこそ侍れ。彼月十首。させる公宴にあらず。さのみはさりあへかたくや。たゝしそれをゆるし侍りなは。可_レ爲_ニ道之陵夷_一歟之由有_ニ沙汰_一。以_レ右爲_レ勝。

右方。今夜は秋の名取河。近年之由申_レ之。千世の數みる。

五番

左持

長雅卿

竹河のふちのみとりも白妙に夜をへて月のすみやわたらん

右

資季卿

大井川ぬせきにやとる月かけはこほれと浪の音そのこれる左歌。淵のみとりもしろたへといへるわたり。つゝかすやと右方申侍しかと。本歌も色かはるとこそ侍れは。月の光さやかにこそ見えわたれなと。あらそひ侍き。右歌。建仁之比歌合に。河月似_レ氷といふ題にて。今歌のすかた侍ると。左方申侍しかと。その歌をさらは申へしと。右方せめ侍しほさに。竹河の歌は姿まさりてなと沙汰侍しかと。只持とさためられにき。建仁元年八月十五夜撰歌合。河月似_レ氷。俊成卿女。

大井河ぬせきにまよふなみのをとこほらてこほる月のかけかな。其夜不_ニ覺悟_一侍し歌は。これに侍ける。

新勅。光明峯寺入道前攝政。をきまよふしのの葉草の霜のうへによをへて月のさえわたるかな。左にも。かゝる下句侍けり。右方不_ニ申出_一侍しかと。古歌に隨_ニ見及_一可_ニ注申_一之由。後日被_ニ仰下_一之間。載_レ之者也。右方申。左の末句すこしおほつかなし。左方申。上句三番右のおなし舛也。下句又めつらしからず。可_レ爲_レ持之由兩方申_レ之。

六番

左勝

女房

おほ空の月はひとつを飛鳥河七瀨の淀にいかてすむらん

右

公雄卿

〔舊本九行題〕

たる子細こそ侍けれ。

右方申。わたるとなしにみなれそめけんといへるうたをおもひて。誠に優美之由申之。右歌左方より。うけたもつといひ出したる歌の初の五字は。童子のかふしとこそいひならはしたるに。誠見にくきうへに。世々年ともいかゝとおほせくださる。まことに陳申へき事に侍らす。年代は山峯おなしさまに。或はとかめ。あるひはなためて侍やらん。この外。年號につきても。さま／＼ことおほくうけ給しかと。老耄わすれ侍るを。いまみ給ふれば。持の字つけられ侍にけり。

八番

左時

沙彌眞觀

初瀬河ゐてこす浪の音よりもさやかにすめる秋夜の月

右

爲教卿

萬代もたゆる時なき光とやあきつの河も月のすむらん

右方申。波のをとよりさやかにすめる月はいかなるへ

きそやと侍しを。萬葉にをとのさやけさといへるには。

清といふ字を書いてさやけさとは讀侍れは。とかなくや

など。陳し侍りしかは。入道民部卿もさやうにやと申さ

れし。若ひかことにや。右歌たゆる時なき光も。ことあ

たらしくやとおほせ出されて。左勝侍にき。

左方申。はつせ河ゐてこす浪のをと。本歌のことは。月

もさやかにみえてよろしきよしを申。右方あきつの河。祝歌といへとも。させることなしとて。負はへりにき。

九番

左

具氏朝臣

おち瀧つ吉野の河のきよきせにみれともあかぬ秋夜の月

右時

前左大臣

久かたのあまてる月の桂河秋のこよひの名になかれつゝ

右方。左下句優ならず。連歌なとをうけたまはる様にこそ侍れと申侍を。本歌に。みれとあかぬよしのゝ河と侍れは。月の爲かた／＼おもふ所侍にやとあらそひて。

右歌。又常のことにや。月のかつらは。ちかき歌に侍るよし申あひ侍しかと。例のその歌。覺悟の人なくて。芳

野之清瀬をしりそけて。桂川の佳名をすゝめられ侍にき。野宮の前裁合。嵯峨野ををきて。遠くたつねんもあ

ちきなしとはいひをけれど。このたひの題。野も山も。いつくにてても賞翫すへき様におほせ出され侍しかとも。

右あまてる月のかつら河。まちかき程も十三夜も名になかれて侍る。よろしとて。兩方ともに申て。爲勝。

十番

左時

隆親卿

風わたるきさの小河の水すみていよ／＼きよき月のかけ哉

右

行家卿

大井河末はかつらのかけそへてふけゆく月やすみさる覽

右申。左歌いよ／＼きよき月かけ。誠にきら／＼しくや。

右歌上句ふるくやときたありて。左いよ／＼勝侍にき。

左歌この河も。すこしもの遠くやと。右より申出し侍しかとも。大井河しもはかつら。珍しからすとて。きさの

をかは彌勝と定めらる。

十一番

野鹿

左持

右

通成卿
爲氏卿

おほかたの野風を寒み誰秋にあらぬものから鹿や鳴らん
色かはる野原のこはき誰秋にあらぬものゆへ鹿のなくらむ
爾首歌。おなしすかたには侍れと。おほかたの野風荒涼
にやと。右方申せは。大方の野風こそ。たか秋といへ
るにかなひて侍めれと陳して。不_レ可_レ有_二勝劣_一之由申
之。仍以爲_レ持。左右。おなしさまにて勝劣なしとて。持
にきためられ侍りき。おほかたののかせは。すこし荒涼
にそ侍ける。

十二番

左勝

女房

ねられすや妻を戀らんしめのゆき紫野ゆき鹿そ鳴なる

右

融覺

老てすむ嵯峨のの草のかり庵にいく秋なれぬきをしかの聲

右申。標野行紫野行。心難_レ及詞難_レ及之由。滿坐申_レ之。

右歌。老てすむ嵯峨野。作者誰人哉。殊心幽玄之由きたあ
りて。左右ともに詠吟し侍し程に。春日山杜の下草ふみ
わけていくたひなれぬきをしかのこゑといふ歌は。後
京極攝政詠。新勅撰歌歟之由。被_二仰出_一しかは。とかく
の陳方なくて。左はやく勝侍へしとそ。右方申侍し。右。
老耄の下句古歌之上。左蒲生野遊獵の面影しかとたち
そひて。似_レ無_二比類_一。仍尤以_レ左爲_レ勝。

十三番

左

眞觀

岩倉のをのあきつにゐる雲のはれすも鹿の妻を戀らん

右勝

關白

夜寒なるほやの薄の秋かせにそよそ鹿も妻をこふらん
左歌下句。續後撰歌歟。

枯はてむ後をはしらて秋草にふかくや鹿の妻を戀ら
ん。此歌におなしきよし。侍從中納言申_レ之。眞觀申云。
鹿の妻を戀なといへることは。上句をあらぬさまに。と
りなして侍には。同し歌とも聞えずや侍らん。大方は下
句同類侍らすとも。石藏の小野優ならす侍にや。これ
は。萬葉第七卷譬喻歌にて。挽歌などにもあらず侍れ
は。風情述盡て。本歌にもちひて侍けるにこそ。右歌野
ありや。ほやのすゝき。古來の難儀也とて。一々に被_二仰
出_一て。入道民部卿。いか様に存知するそやと御尋あり
しかは。都不_レ存之由申_レ之。至極秘事之故歟。野之有無
不_レ被_レ決して。歌の勝負難_レ被_レ定やときた侍しかと。侍
從三位。信濃國之野名也。能因歌枕にみえたるよし申之
間。一説につきて。以_レ右可_レ爲_レ勝之由。被_レ定畢。
左より。ほやのすゝき。野の有無御尋によりて。右方に
陳申さるゝむね侍しやらん。かやうのことゝも。不覺の
老の心をよひかたく侍き。左歌。はしめの句。これも童
子のかふしいたく優にみえ侍らさりし上は。萬葉集秋
津野の雲。其時もみゝにたち侍りし。いまもすかるへく
もおほえ侍らす。いかさまにも右勝侍にけり。

十四番

左勝

前關白

春日野やあとあるかたの末なれは今もまよはぬ棹鹿の聲
右
爲教卿

野へはみな曉露のふかき夜にわれ立ぬれて鹿や鳴らん

左歌よみあけて。右歌未_ニ讀申_一之間。永承歌合に。春日山とよめらむ歌は。いかてか負侍らんと。二條關白申されければ。宇治入道關白。まことにしかなりとこそ侍けれ。右方の作者も。氏長者藤原卿等也歟不_レ申_ニ子細_一歟。押可_レ付_ニ勝字_一於左_ニ歟。由。大関被_レ申_レ之。右歌。さすかよみあく。曉露のふかき夜。理不_レ可_レ然。下句ぬれてや獨鹿の鳴らん。同じことにやなと。人々申あひて。曉露の詞。春日の光には。いと_レけたれ侍にき。左方。野邊はみなあかつき露とて。ふかき夜いか_レとおほせ出され侍し上。春日野のあとある道。いかにもたちならふへきにあらすとして。以_レ左爲_レ勝。

十五番

左

中納言

秋の_ニお花_一かもとの露わけておもひありとや鹿の鳴らん

右歌

行家卿

秋の野の草葉ならねは棹鹿の心はかれす妻やこふらん
左歌。下句有_ニ同類_一歟之由。右方申_レ之。右歌。本歌もめつらし。心詞優なり。殊よろしとて。勝にきためらる。

右方申。左歌。かやうのこと近く聞たるさまに侍にやとて。右勝侍き。其座に當りて申出さぬこと。後日に申て詮なく侍れと。衣笠内大臣百首に。思ひそふとや鹿の鳴覽と讀て侍りけり。

十六番

左勝

具氏朝臣

をのか妻みまくほしさに鳴鹿のいくたひ野へを行かへる覽

右

前左大臣

あらはれてをのかいるの_ニ花薄_一ほにこそ鹿の妻をこふなれ
右方申。をのか妻みまくほしさに。優ならすと難し侍しを。本歌おかしくこそ。とりなして侍れと。被_ニ仰出_一しにや。右歌は。方の人類に艶なるよし申侍しかと。下句御製也とて。左勝になされにき。左歌をのかつまみまくほしさになく鹿の。あまりにたしかにやきこえ侍らんと申いたし侍しかとも。左勝侍にき。

十七番

左持

右大臣

忍ひかね妻や戀らむ棹鹿の涙もあまるをの_ニ篠原_一

右

資季卿

や_ニ寒き_一をの_ニ淺茅_一の秋風にいつより鹿の鳴はしめけむ
左歌。初五字不_レ宜。第四句非_レ珍など。入道民部卿申_レ之。をの_ニ篠原_一しのふれとあまりてなとか人の戀しきと。ふることをいみしくこそとりなして侍めれと。勅定あり。右歌又姿優美にして。たけあるさま。ことによろし。持ときためらる。右方より。なみたもあまるをの_ニ篠原_一。優なるよし申_レ之。左方。又右歌も宜由申て。爲_レ持。

十八番

左

隆親卿

これも又老の友とや成ぬらん聞てふるの_ニさを_一しかのこゑ

右勝

前太政大臣

をみなへしなひく野原の露分てわか妻とてや鹿の鳴らむ
左歌哀なるさまにて。心詞優にこそ侍るを。これもまたといへる五字。なにの爲ともきこえず。右方難し侍しか

は。鹿の聲ならぬともしありぬへきことなれは。これも又さよめるは。とかなくこそ。これも又といふ句は。なにかき別になりやせんと。知家卿よみて。新古今にいれり。行家は。いかゝ此句をは難せむと被_レ仰下_レれはかしこまりて申旨なかりき。右歌本歌さることにて。うるはしき姿也とて。勝になされにき。左方より。可_レ被_レ優老_一由申され侍しかとも。右かた宜とて。勝と被_レ定て侍りき。

十九番

左持

さひしとも誰か聞らん高圓の秋のうへのさをしかの聲

右

長雅卿
雅忠卿

朝な_レねに鳴しかの妻こめにやへたち渡る野邊の秋霧

右歌妻こめといひて。八重立わたる秋霧。八雲の跡までも思ひやられて。いとおかし。朝な_レとよめるや。鹿はかならずあしたはかりに鳴やうに聞え侍らんと。左方これを難し侍し程に。左歌誰かきくらむまては思ひやりたる。しかの聲は本意なかるへしと。前太政大臣難_レ申之。秋のうへは。猶よろしくこそきこえ侍れと。みそもしあまりひともしの濫觴に優して。持と定められぬ。兩首隨_レ申旨。可_レ爲_レ持之由被_レ定。

二十番

左持

をのか妻つれなきのへの秋風にたへていくよか鹿の鳴らむ

右

資平卿
公雄卿

たか秋にあらぬ野風を身にしめてわか妻戀に鹿の鳴らむ

右方申云。左歌無_レ指得失_一歟。右歌たか秋にあらぬのかせ。いとその心をえす侍れと。左歌にをとるへからすとて。又持になさる。

右歌にたか秋にあらぬといへる。本歌すてに三首候。兼日歌合。本歌一にかきは。非_レ本意_一歟之由。被_レ仰出_一。右無_レ所_レ于_レ被_レ陳_一之由申_レ之。仍左勝之由承侍しに。持にて侍けり。

廿一番

左持

紅葉はもいかに染てかをしほ山神代もきかぬ色とみゆらん

右

右大臣
關白

あきらけき君かあたりも小倉山染る錦はえこそとかめね
右歌子細有けなり。本文か何事哉之由。有_レ勅問_一。明王好_レ儉不_レ能_レ禁_一。紅紫蘭將錦繡林。この詩の心のよし關白被_レ申。先々も被_レ仰_一ことになむ侍れと。本文古集なとを歌によむことは。不_レ明不_レ暗_一臘々月なとを。千里か詠したる事は。作例なきにあらされさ。これは非_レ歌之本意_一歟。古今序にも。立田河の紅葉はみかとの御目に錦と御覽し。吉野山の櫻は人丸かめに雲かとそおほえけるなとこそ。對句にもかきて侍れ。いつか漢家のこさを書て侍と仰らる。誠に歌合は。ことに詞をえらひて。花をさきとし實を後にすへきよし。先達も申侍れと。かの探_レ詩之になすらへて。この詠歌之道を思に。求_レ兵諡諷刺之言_一。輔_レ治國撫民之政_一侍らんことは。この道の要樞といひつへし。君臣の情もこれによりて見え。賢愚之性もこゝにわかるへきものなれはなり。しかあれば。今和_一

明王好儉之文。被_レ述_二我后施德之仁_一。しつかに思ふたまふれは。まけかたくも侍かな。左歌。常のことにやと。右方申侍しを。神代のことをおもひて。神代もきかぬなととりなせる。ことに優にこそ侍れと。左方申侍し上に。をしほ山春日野同事に侍へし。争か負侍へきと。大閤被_レ申につきて。右方。さらは持とそ申うけられし。

左歌。義理相叶。花實共存。尤宜之由。右方申_レ之。右歌。明王好儉。本文尤雖_レ可_レ然。猶非_二和歌之本意_一。且者其後殊存_二此趣_一。歟之由被_二仰出_一。右方有_レ被_二陳_一之旨歟。仍可_レ爲_レ持之よし被_レ定。

廿二番

左持

前關白

老か世は人なとかめそ立田山もみちのにしきなをもきてみむ

右

行家卿

山姫の衣たつたのからにしき秋はしくれに袖をまかせて
右方あなかに申旨侍らさりき。右歌は山ひめはかりにては。山のたしかならむには。をとりにてや聞ゆへきと。左方難し侍しかは。衣立田とよめり。山姫又山をはなるへきにあらすと。右方陳申侍し。さる方も侍りとしてありしを。衣錦袖。あまりに事おほくきこえ侍にやと。申出し侍しを。これはあまりのことなりと。勅定有しかは。侍從三位。ことの外にちからを得たるけしきにてそ侍し。今度左にも右にも。老の歌勝侍らす。この左歌をは勝にやなさるへきと。大閤被_レ申しかとも。歌にこそよらめと勅定あり。それにつきて。歌もまさり。老をも賞せらるへしと。左方いきとをりふかく侍しかと。時刻

をしうつりしによりて。猶持にそきためられにし。
左右龍田山の錦。尤可_レ爲_レ持之由各定申。

廿三番

左勝

中納言

山姫の心をみゆる時雨ては

右

〔名關〕

左歌本歌おかしくとりなして。すかた優なりと。侍從三位申出侍しかは。のこりの人々も。さやうに申されしにや。右歌をは。同方より何とやらん難なくはへ侍りき。おほよそ。左歌をはほめ。右歌をはそしる。左方ちからをもいれすして。右方の申にまかせて。左勝侍にき。左山に峯の寛平勅判者雖_レ可_レ憚_レ之。後多不_レ難_レ之歟。隨又右方無_二申旨_一。勝事爲_レ謝_二後難_一。載_二此子細_一者也。左歌すかたことは幽玄之由各申。爲_レ勝。

廿四番

左勝

女房

外よりは時雨もいかゝそめさらむ我うへてみる山のもみち葉

右

爲氏卿

君かすむあたりの山のかひありて外に染ます秋の紅葉々
右方申。外よりは時雨もいかゝ染さらんさて。我うへてみる山のもみち葉。誠に秀逸たるよし各これを申。左右一同詠吟數返。尤以珍愛也。右歌おなしさまなる外字さへいかゝなど。右方人も申侍しやらん。慥にはおほえ侍らす。左にたくふへきにあらすとて。左雲泥の勝と定らる。左歌講師讀あけ侍しより。満座諒吟不_レ及_二右歌之沙

汰。爲_レ勝。

廿五番

左

隆親卿

嵯峨の山千世の古道立かへりいかに時雨も木の葉染らむ

右

前左大臣

あらし山おなし時雨はめくれとも色の千草に染る紅葉々

左歌上二句。定家卿の歌之由。入道民部卿申_レ之。右歌色のちくさ。まことに染まざるよしきたありて。勝侍にき。

左初二句。新古今定家卿歌之由。申出し侍りき。右あらし山おなし時雨の紅葉は。ちくさの色もそめまざるへしとて。爲_レ勝。

廿六番

左

長雅卿

うちつけに色こそまされ初時雨ふれは山への秋のもみち葉

右

前太政大臣

小倉山日かけうつろふ色そへて雲にみゆる秋の紅葉々

左歌初句うちつけにとある。相撲をみるこゝちすと。右方申_レ之。うちつけにものそかなしきなとこそ。ふるくもよみて侍れ。ふれは山へ。宜由御氣色も侍しかと。右

歌雲井にみゆる秋の紅葉々。殊にけたかく侍とて。右勝はへりき。右雲井に見ゆる秋のもみち葉。色ことに侍るうへに。左ふれは山へ。本歌のことはなれとも。優ならずとて。以_レ右爲_レ勝。

廿七番

左

眞觀

右

公雄卿

をくら山今一たひも時雨なはみゆき待まの色やまさらむ

散ぬへき秋のあらしの山のなにかねてもおしき木々の紅葉々
左歌右方とかく申旨侍らす。右方殊宜之由沙汰ありて。持とさためられし。おほつかなきことになん侍り。

左の小倉山。今一たひの本歌の心思はへたるにては侍れと。右秋のあらしの山の名にかねてもおしき木々のもみち葉。

〔此間二十四行間以下は二十九番の判詞の内也〕

末句のとかめなくて。持にそ被_レ定たる。かくのことくのみ侍れは。今の作者も。先規にまかせて詠_レ之歟。言者無_レ罪。但不_レ可_レ依_レ以前例。猶可_レ爲_レ向後之識一歟。

左歌すゑさまいさゝか用意あるへかりけるにやと。申出侍しほとに。右歌老耄の愚歌にて侍けり。返々勝字しかるへからすと侍ける。

三十番

左

資平卿

はつ時雨山の木間をもりそめて心つくしの下紅葉かな

右

資季卿

色々に染かへてけりしら露のをくらの山の木々の紅葉々

右申。左歌紅葉不足歟。よそにては紅葉みえすや侍らんと。入道民部卿中侍しかは。紅葉をかならずおほくよむへきにもあらず。題をそむかさらん上は。右方難あたらさるよし御氣色侍りき。本歌も。月すくなくてこそは。古今の秋の部にも入て侍れ。木のまをもりそめて心つくしの下紅葉。すかた優にして。こゝろめつらしきさま

なりと。左方よりは類に申侍りき。右歌これこそ紅葉にあけるさま。誠に題の本意とみえて。歌躰又よろしと沙汰侍り。抑今度の御歌合は。左右方をのく。かたの歌を評定して出へきよし。定仰下されにき。然るを。露のをくら山。只おなし躰なる歌いたせり。しかのみならず。鹿歌には。たか秋にあらぬものゆへといふ本歌を。あまたよみて侍にやと仰出さるれば。右方理にふして。陳方なくこそ聞え侍しかとも。歌躰尋常なりさて持とは被_レ定にき。

左歌山にも紅葉みえぬ様に侍と。右方申侍しかとも。右歌色々にそめかへてけるも。めつらしかるへきにあらすして。持と被_レ定。

三十一番 不逢戀

左勝

眞 觀

命を我やためしと思ふにもはかなきものゝねをのみそなく

右

行家卿

いける目のつらさにかへて逢事をまたぬ命と戀やしなまし

左歌非_レ戀歌之由。入道民部卿申_レ之。われやためしにあはぬしにせんといへる。古歌を思てよめる歌は。いかてか戀歌にあらざらんと。勅定ありしかは。其後は。申旨もきこえさりしにや。右歌いけるひのとうちいたしたる初句。耳に立さまにや。ためこそ人はみまくほしけれといへるにも。第三句にそ聞なれて侍る。下句は。優にきこゆれと。左猶可_レ勝之由有_レ勅。右方申。左は戀の歌ときこえすや。

左方より。初句もいけるひのといへるもいか。我やた

めしにといへる。本歌の戀の心。優なりとて。左勝と被_レ定。

三十二番

左勝

通成卿

なか／＼に扱も心の色みえはあふにはかへて身をや捨まし

右

爲氏卿

戀倦る身のためつらき命にて契もしらぬ同し世そうき

左歌すかた艶にして。心めつらしと。右方申_レ之。侍從中納言。見にけ_レ本ノマシのよし申侍しうへに。右歌末句さなくともや侍へきと各申て。以_レ左爲_レ勝。

左歌心あまりて。ことは優に聞ゆとて。爲_レ勝。

三十三番

左

右大臣

いとせめてつれなき中のなそもかく思ひつきせぬ契なる覽

右勝

融 覺

をのつからあふを限の命とてとし月ふるもなみた也けり

左歌いとせめて。なそもなく。優の詞にあらずと。入道民部卿。侍從中納言ことさらに是を難申。左方には。この兩句は皆古今詞也。何強可_レ爲_レ難哉。おもひつきせぬ契は。ことに優美にこそ侍れと申侍しかは。叡慮もさやうにこそ侍りしか。右歌殊宜之由沙汰ありて。涙なりけり。勝字をつけられにき。

左よりしく聞え侍しを。右の下句すてかたしとて。勝侍にける。いかゝとそみ給ふる。

三十四番

左勝

前關白

さりともと思ふはかりの慰めにいきてつれなき身を歎く哉
右 前左大臣

淵となる涙の河に身をなけてかこちやせまし後の逢せを
右歌は。古歌のよし。被_レ仰出_レしを。撰集の歌には侍ら
ざるよし。右方人申侍しかと。戀わたる涙の河に身をな
けむこの世ならてもあふせありやと。まさしくかゝる
歌はありとも重勅定侍しかと。右方猶不_レ承伏_レ申侍し
にや。左歌ことさら戀歌と聞えて。やさしく侍りとて。

勝に被_レ定にき。件古歌。後日被_レ引勘_レ之處に。千載集宗
兼歌にてありけりとそ。御氣色侍し。

左心詞艶に聞え侍しうへに。右撰集歌に加はらずと。左
より沙汰侍りて。爲_レ負。

三十五番

左持

具氏卿

右

白

けふまては行末しらぬつらさにていつを限の思ひなるらん
くちはてむ袖のゆくゑもしらぬまであふを限とせく涙かな
左のゆく末しらぬいつをかきり。右の袖の行ゑ逢をか
きり。おなし本歌にて。いつれもおかしくよみなして侍
かなとて。よき持なるへしと。左右ともに申_レ之。
右歌ことよろしく聞え侍しかとも。おなし本歌なり
とて。持と被_レ定。

三十六番

左持

女房

右

雅忠卿

徒らにめくりもあはす戀草のなゝくるまゝて年はつめとも

中々にその名もつらし相坂の山はわか身の關路なりけり

右方申云。左の七車。まことに凡慮及かたきさまなりと。
面々に申あひ侍しかと。不_レ甘心_レ人もや侍けんかし。此
本歌は。新勅撰に定家卿撰入て侍れは。さためて秀逸に
こそ。ちから車と侍るよりも。なゝ車まで年はつめとも
と侍には。ことにたくみにこそきこえて。上科の歌とそ
みえ侍ると申上侍き。右歌下句殊有_レ興など。沙汰あり
しを。山はわかみの關路。七車よりもおひたゝしくこそ
聞侍しかさ。只可_レ爲_レ持_レ之由さためらる。左歌戀草の七
車めくりあはぬまでもちから入て。ことはたくみにう
け給はり侍しかとも。あふ坂山の關。めつらしからすな
から持とつけられ侍し。いかゝ。

三十七番

左持

中納言

右

前太政大臣

有明の月のかたみもまたしらすつれなきはうき人の心に
右方歌人は。左歌を妖艶なりと申。左方歌人は。右歌を
優美なりと申て。兩方一同に宜持と定申侍き。
これも。左は。幽玄ことよろしきよし。右方よりも申
侍しを。右月のかたみもまたしらすめつらしとて。持と
さためらる。

三十八番

左

長雅卿

右

資季卿

山鳥の屋上のへたて徒らに身にしられてもなく／＼そふる

逢坂や人のゆきゝはいかならむ我身にかたき夜半のせき守

右方申。おのへのへたてえんなからすやと難侍しかと。

山鳥のけをふくにや侍らん。身にしられてもなくゝ

そふる。幽玄にこそ侍れと。執論し侍しに。右歌人のゆ

きゝはとよめる心いとおかし。これは嫉妬したるに

やと仰下されしかは。右方漸入興之氣侍しにや。鹿紅葉

もおなし風情歌。無念のよし沙汰侍ることく。此戀歌に

は。あふ坂なことゝせり。山はわか身の關。わか身にか

たき關。大旨同事歟。然る歌猶よろしとて。勝になさる。

山鳥のおのへのへたて負のよし。おほせいたされて。以

三十九番

左勝

逢事のいつをかきりとたのまねはわか涙さへ果そしられぬ

右

公雄卿

しらせはやあふにしかへむとはかりの誰ゆへならぬ命長さを

左歌右方更無難申旨。右歌とはかりの五字。述盡て聞

ゆるにやと。左方申侍しかは。右方も。誠にしかりとそ

雌伏し侍し。仍左の勝と定られにき。左方歌に。いつを

限といふ句兩首侍りけり。これは。右のあふをかきりの

兩首にあへにけるとや。

右ゆうなる跡に聞侍しを。左心詞かなひて。ことによる

四十番

左勝

資平卿

めくりあはむ末をはしらす常陸帶のかことたになき戀もする哉

右

爲教卿

なからへてあらはと頼む命たにかひなくたえむはて悲しき

左歌その難なきよし申。誠に歌合の歌とみえたるにや。

和歌髓腦に。戀意爲宗と申て侍るは。かやうのすかた

にこそ侍らめ。右歌さることゝ見えて侍るを。右方すゝ

み申て。左を勝と被定にき。

右之心はかりは。さもと聞え侍しかとも。左のひたち帶

かことたになき戀は。風情もめくらされて。勝とさため

四十一番 絶戀

左持

資平卿

いつまてか待たりけんたのめしも昔かたりの夢のうき橋

右

關白

はかなしや我のみかよふ思ひねの夢路はかりの絶ぬ契りは

昔かたりの夢のうきはし。思ひ寐の夢路ばかり。とりと

りに優美なりとて。兩方ともにこゝろかよはして。よき

持とそきため申侍し。

左右ともに優なるよし各申て。爲持。

四十二番

左持

隆親卿

うき名をもよそになしてやなくさめん我をふるせる秋の夕暮

右

前左大臣

待わたるたえ間を何と歎きけむみしは昔の夢の浮はし

右歌又夢のうきはし。ことに優なりと沙汰侍りしに。左

のわれをふるせる。本歌のあひしらひ。猶すてかたしと

て。是も宜持とさためられぬ。

右歌ことに心詞幽玄に聞え侍しかとも。左我をふるせる秋の夕くれ。すてかたしとて。持ときためられ侍りき。みしはむかしの夢のうきはし。今見給ふるにも艶にこそ侍けれ。

四十三番

左

前關白

こぬまでもさすかまたれし櫛の戸にやすらふ程の慰みもなし

右勝

資季卿

有明にわかれしまゝの年へてもつれなく残るわか命かな
右方申云。左歌さすかまたれし櫛の戸に。いひしれるさまにや。右歌有明にわかれしまゝの年へてもといひて。つれなく残る我命かなとよめる。殊宜之由有_二沙汰_一て。左方より勝字をつくへきよし被_二仰下_一。此上は可_レ顯_二作者_一之由。被_レ仰_二右方_一之處。前大納言藤原朝臣名謁喜悦の色にあらはれ。左右感をうこかし侍き。

左さすかまたれしまきの戸。詞もたくみに心もこもりて。おもひ入たる躰に侍しかとも。右有明にわかれしまといひて。つれなく残る心ことに宜出。左方よりおほせくたされて勝侍りにき。右方面目作者の榮花とこそみ給へ侍りしか。

四十四番

左勝

右大臣

きぬ_レの曉はかりうき物といひしも今はむかし也けり
右
爲教卿

たのめをく契はたれかなさけとてありしうつゝの夢に成覽
左歌心詞優にして。義理あひかなへり。ことに宜歌とこ

そみえ侍るを。右方かたふけ申旨侍しやらむ。いとうけたまはりわかす侍しかと。右歌ありしうつゝの夢になる風情。懷舊歌にも常に侍へし。左歌常篇にたへたるゆへに。眞觀申請て。付_二勝字_一乎。

四十五番

左勝

中納言

今も又たのめは人のつらかりし名残にさへや袖のぬるらん

右

爲氏卿

さりともと侍したのみの夕暮。いつよりよそに思ひたえけん
左右之詠。優美乃由。各申_レ之。仍以爲_レ持。續後撰順德院御製。

おもひ侘さてもまたれし夕暮のよそなる物になりけるかな。右歌。似_二此御製_一乃由。後日有_二勅定_一。仍注_二載_一之。左上句まことに優にそ聞え侍しかとも。右も又宜とて爲_レ持。

四十六番

左勝

長雅卿

かさねけむ袖のうつりか昔にて身にしむ物や思ひ成らん
右
行家卿

たのめしは人の昔に成はてゝ我身に残る夕くれの空
右の歌。わか身に残る夕暮の空。今度の撰集に。しらきりきたのめしなかはあとだえて夕暮はかり身にとまれとはといへる入道相國歌に。いとかはらすやと被_二仰出_一。このうへは子細にをよはすと。前太政大臣申されき。しかるを。左方の初句よろしからず。勝歌とはいか

かと。右方にさゝへ申人侍しかは。かさねけむあなかに難あるへき詞にあらず。下句又優にこそ侍れ。いかか。左歌に持にもなされまして。負にもなさるへきかと。左方申侍しかと。このことはりをは申のへすして。たゝ持にて侍へしと。右方申請侍しにや。

右歌心詞艶にきこえ侍しかとも。左歌下句すこし心ゆかすなから。持と被_レ定侍りにき。

四十七番

左

通成卿

年ふれと戀しきことに袖ぬれて物忘れせぬわか涙かな

右勝

前太政大臣

哀なと今はかけみぬむもれ水なかれて猶も袖ぬらすらむ
右方申。左歌下句。もの忘れせぬ袖のうは露といへる歌におなしと申侍しを。いつかは似て侍る。袖の上露とあるを。涙にこそと申なさば。あたらしき歌いてきかたくなと。左方申侍しかとも。右歌猶殊なる難なしとて。勝になさる。

左もの忘れせぬ涙。めなれては侍れと。優にとりなされたる心地し侍しを。右いまはかけみぬむもれ水。よろしくて。勝と被_レ定。

四十八番

左勝

眞觀

うきなからしはしはみえし面影もいつの月日か限成けむ

右

雅忠卿

まどろまで人のつらさを歎くまに夢さへたえて幾よへぬ覽
右歌ことなるさた侍らさりしにや。左歌題心存知たる

にこそと。右方申されしかは。勝はへりけるにや。右歌源氏物語歌のことはつかひ。いと優にこそ侍りけるを。當座に申出人侍らすして。負と成にけり。

左歌面かけのみえすなりけむ月日そ。まことにおほつなく侍しかとも。右させることなしとて。以_レ左爲_レ勝。

四十九番

左持

女房

いもとわれ花田の帯のなかなれや色かはりぬとみれば絶ぬる

右

融覺

今こむといひしなからの橋柱又もかよはぬ名のみふりつゝ
はなたの帯のなかなれや色かはりぬとみればたえぬる。まことありかた。心めつらしく。詞つかひおかしくなと。右方人々もうちとけて。左をほめ申侍しかは。右歌をも。素性かおもかけはしゝらに立そひにけりなと。口々に申侍て。持にそきためられしかと。花田の帯の持になりぬるは。左方猶いきとほりむすほゝれてそ侍りけむかし。

花田の帯の中絶にける。戀の心をよひかたうけ給りしを。なからののはしのふること。なにとして持字をつけられ侍しやらむ。

五十番

左勝

具氏朝臣

年月をへたてゝうときさ夜衣中にありしを何うらみけむ

右

公雄卿

今はたゝ戀わたれともかひそなき契し夜半のくめの岩橋
右のいははしよりは。左のさよ衣よろしとて。勝侍りに

き。

右のいははし。めつらしからずして。左中にありしを。勝とさためらる。

右歌合。幼年之時書寫之本。歸洛之後從ニ或所ニ求得レ之。而有ニ子細。以ニ此本ニ進ニ獻梶非宮ニ者也。仍錄ニ事之由ニ耳矣。

慶長第九甲辰孟秋中七日

也足軒素然

右歌合別得古寫一本授合了

群書類從卷第二百三

和歌部五十八 歌合廿四

攝政家月十首歌合 建治元年九月十三日

一番 十三夜晴

左勝

女房

いつもなをくもらぬ秋のならひさへわきて今宵の長月の空
右 安嘉門院右衛門佐

こよひしも名におふ秋の長月と月もしりてや曇さるらん
左歌。匪_ニ賞_ニ此夜之清光。誠是美_ニ明時之德化。加_レ之
涉_ニ風雅之義。飭_ニ露詞於五句。者歟。神也妙也。不_レ可
不_レ感。右歌。雖_レ無_ニ殊難。こよひしも名におふ秋の長月
と侍に。秋の字やはさまりて聞え侍らん。承暦二年内裏
歌合に。降雪のひかすへぬれはしからきの杉の青葉も
見えすなり行。判のこと葉に。杉の葉とよむへきに。文
字のたらねは。あをはと讀るほと。よはけなりと難せら
れたるにや。この秋の長月は。彼杉の青葉にことならず
もや侍るへからん。左不_レ同_レ右。右不_レ及_レ左。勝負可_レ謂_ニ
去隔_ニ者歟。

二番

左勝

三位中將

長月の名高きよはも顯れて影すみまさる月を社みれ
すむ月も名に顯れて長月の今宵は雲もあらし吹なり
右 則任

右歌こよひはくもゝあらし吹。十躰の其一には侍らめ
とも。強にもとめられたる風情にこそ。左歌ことなるふ
しは侍らねと。宜きさまにやとて。猶爲_レ勝。

三番

左持

法印道雲

十日あまりけふみか月の影清み空もさこそは時をしるらめ
右 則雅

長月のつきの名高き今宵とはなきたる秋の空に社しれ
左の。十日あまりとうちいたされたるこそ。歌のやうに
も聞えずや侍らん。壬生二位歌に。長月の十日あまりの
みかの原なとつゝけて侍こそ。たくみにもおかしくもき
こゆることにてははへれ。今の初句は無下にうちとけ
てそ侍らむかし。右の歌は。なきたる朝のわれなれやと
申ふことにすかりて。晴たる風情はおかしとも申侍
ぬへけれとも。なきたる空は。朝にかきるへきことには
侍らねと。かやうの事は。たゞふるくより申ならひたる

まゝにて。なきたるあきとてそ本とはしたう(本ノマ)侍
る。但猶朝之有暮なと申本文にゆつりて。なためもや申
へからん。しかれとも。上下句のはしめ。同文字こそ侍
れ。天徳内裏歌合にさた侍るより此かた。公私の歌合
に。或は難し或は不難。用意在判者之心歟。左もすゝ
みかた。右もしりそきやすくや。仍以爲持。

四番

左勝

隆博朝臣

みか月のまたほのかにてみし影の十夜を重ねる空そさやけき

右

親長

いさゝ又光をそへて長月の中なる三夜の空そくもらぬ

左歌各句々一字として題の心を離れず。尤珍也。尤優なり。和歌の本意只これにあるへきをや。右うた。なかなか三夜。たとひよろしといふとも。左にはをよふへきにもあらざる歌にこそ。

五番

左持

教顯

長月のけふ名にしおふ月そとは空すみまさる光にそみる

右

顯綱

なか月のおなし雲ぬもいかなれは今宵は月の照まさるらん

すみまさる。照まさる。不レ可レ有ニ勝負ニ歟。

六番

左

重經

長月の中にみちたる三日の夜の月の桂も色そことなる

右勝

左衛門督

なかつきの半の空にさきたちて月は今宵そすみまさりける

左長月の中にみちたるとては。十五夜にこそとみ給ふ
るほとに。みかの夜と侍りけり。いかゝこゝろえ侍るへ
き。心はやき人に。とひてそしらまほしきなど。おほえ
こそはへれ。古歌のなかに。わつらはしき三日の夜をし
〔本ノマ〕
たも本とせられたりける。よしなくこそ見えはへれ。右
もなかほのそらとさゝれてはへれは。又おほつかなき
さまなれと。いつれの月々にも。望ははへるへき事なれ
は。月の圓明ならんすかたに先たちて。今宵の月は。左
よりもはるかにすみまさりて見給ふれは。爲勝。

七番

左勝

邦長

長月や月影きよし十日あまりくもらぬみよの秋のしるしに

右

行實

照まさる今宵さかりか長月の月の桂の秋のもみち葉

左十日あまりの句。春より腰にさかりては。さてもやは
へるへからめとも。第二句をき所もかなはすして。續後
撰後鳥羽院御製ををさせるにや。しかは侍れと。下句新
勅撰歌也。入道前大納言詠歟。其とか左はかるし。右
はをもくやとて。負侍るへきにこそ。

八番

左勝

三位中將

吹はらふ峯の嵐の音すみて松より晴る月の影かな

右

顯綱

詠れはおのへの松のこの間より山のはいつる夜半の月影
右歌おのへと山の端とは。いかゝはへるへからん。寛平
の勅判には。山と峯とまたけたりとて。らんといふこそ

葉ふたつよめる歌と。持に定められたり。いはむや。おのへと山とは。おなしこゝろの病のかるへからすや。左は朗詠の秋夕詩に。望_レ山幽月猶藏_レ影とつゝれるを本として。峯のあらしふきはらひて。やまの月松よりはるるは。いつる心ふかく題をめぐらされて。うたのさま。たけありかし。可_レ爲_レ勝。

九番

左〔持歌〕

法印道雲

松に吹みねの嵐に空晴てこのまもしるく出る月影

右

左衛門督

木まもる心つくしの影みえて松にやすらふ山のはの月
左歌新古今。後久我太相國。たつた山夜半にあらしのまつ吹は雲にはうときみねの月影。第四句外。こゝろこと葉おなし候歟。右歌千五百番歌合に。京極中納言。まぢわひぬ心つくしのはる霞花にいさよふ山の端の月。改_ニ花之詞_一用_ニ松之題_一計歟。まつにやすらふも。待と聞え侍にや。仍爲_レ勝〔持歌〕。

十番

左〔持歌〕

隆博朝臣

なみたてて松のこのまの山のはにやすらふ月の光成ける

右

行實

峯におふるまつと知てや出ぬらん秋のいなほの山の端の月
左歌松の木の間月のひかりとならむこと。おほつかなくや。右歌みねにおふると侍れは。松にこそとは見え侍れさ。待としりてやいてぬらんと侍るには。題をかくされたるやうにやきこえ侍るらん。後京極殿六百番歌

合に。殘菊。うつろふかまた咲はなもなき花ときくにもそめつ深きこゝろを。右歌こゝろあるやうには侍るを。花は重疊し。菊はかくし題なるやうなり。うちまかせすや聞ゆらんとて。まけはへりにけり。今思_ニ暮松之詞_一。不_レ異_ニ殘菊之難_一歟。仍以_レ左爲_レ勝。

十一番

左〔持歌〕

教顯

山のはにしけき小松のたえまよりはやくも出る月の影哉

右

則任

えたしけき松のこの間に影みえてたえく登る山の端の月
左はやくいづれともすゝます。右たえくのほれとも。ひとしくや侍らん。

十二番

左

重經

山の端をはつかにいつる影みえて松の下てる秋の夜の月

右〔持歌〕

則雅

暮ぬとて山のはいそく月影のしはしやすらふ松の村立
左よろしくやと見給ふるほとに。山のはを出やらぬ間の影見えてまつとしたてるいさよひの月。これは石間集。前大納言良歌にて侍けり。誠是希有異舛之愚撰にこそは侍れと。法皇御時忝備_ニ觀覽_一。被_レ召_ニ進仙洞_一了。已爲_ニ公物_一之上者。諸好士任_ニ雅意_一。不_レ可_ニ破却_一者歟。右歌雖_レ非_レ宜可_レ爲_レ勝歟。

十三番

左〔持歌〕

邦長

詠やる尾上のまつひまなくは月を梢に猶そ待まし

右

安嘉門院右衛門佐

兼てより雲もかゝらて高砂の松の上こす月そさやけき
左松のひまなくは月を猶そ待ましと侍るこそ。雲なと
のひきおほひたるやうに。光もれす侍らんことは。いか
なるしけき松原なりとも。有かたくや侍らん。和歌の利
口はさることにて。枕のしたに海はあれとなとやうに
はよむことなれと。これは其類ひにもあらず。なか／＼
なる事とこそ見え侍れ。詠やるもふるき姿とはみえず。
右まつのうへこす月そさやけき。こと葉つかひいひし
りて。すかたをよひかたくこそ見給れ。たゞし續後撰歌
に。今宵とやかねてあらしのはらふらむ空にくまなき
山のはの月。此こゝろにやかayo侍らん。かやうなるこ
とは。先をとり後をすつる習ひにて侍れは。しかもかね
てより。雲もかゝらての。ての字もみゝにたち侍らんか
し。六百番歌合にも。五條三位入道判に。つれなさも戀
る憂身も年をへて心なかさはかはらさりけり。兩所
のさの字いかにそ聞ゆと難して侍り。左右ともに。同じ文
字あまた侍れは。たゞ持なと申へきにや。

十四番

左勝

女房

みね高き松のひゝきも空すみて嵐の上に月そなり行
右

親長

山の端の雲をははらふ松風のおなし梢にさはる月影
左歌嶺頭之松響交ニ擲金之聲。嵐上之桂影添ニ寒玉之光。
誠是爲ニ秀逸。誰不ニ賞翫。右歌近代雖レ無ニ其沙汰。はの
字有レ四歌。已彼侵ニ鶴膝。爭令ニ雌伏一乎。

十五番

月照籬菊

左持

法印道雲

吳竹の籬のきくに月さえておなし千年の露や見ゆらん
右

則任

もろともに千代をかねてや白菊の咲る籬に月の澄らん
おなしちとせは。吳竹のよせもおかしこそ侍れと。題
の四字や。露の上句につくされて侍らむ。籬にすむ月。
ところわくへきにはあらぬことなれと。海のほとりの
水のうへよりは。みとこるせはくやとて。爲レ持。

十六番

左勝

隆博朝臣

わきかねつ色も光もしら菊のおなし籬に月をやとして
右

則雅

自妙の色もひとつに月さえて籬の菊よえこそ分れね
左おなし文字あまた侍れとも。右下句。歌合歌共見え侍
らねは。以レ左爲レ勝。

十七番

左持

教顯

咲初る籬のきくの花の色にまかひてすめる秋の夜の月
右

行實

さく菊も時こそ有けれ月影のやとる籬に色のまされは
左歌文字滿ニ遍身。剩侵ニ鶴膝。右歌下句有ニ厭黒子。又
痛ニ蜂腰。云レ是云レ彼。不レ可レ不レ難歟。仍以爲レ持。

十八番

左

重經

うつり行籬のきくの霜のうへにかさねてさゆるよはの月影

右 親 長

えそわかぬ花かあらぬか白菊の籬にうつる夜半の月影
左偏忘_三月照之秋。似_レ賞_三霜_一冴之冬_一歟。右花かあらぬか
白菊のといへるわたり。菊をうたかひたるとや申へか
らむ。かのふきあけにたてるしら菊とて。花かあらぬと
は。波のよするにまかへてこそ。めてたくは聞ゆること
になん侍ける。古も。本歌あしくとりなして。難ぜられ
たる事おほかるへし。いはゆる寛治八年高陽院歌合。匡
房卿あさくら山の詠。建久四年六百番歌合。寂蓮風のや
とりの歌。これら其難判詞にみえたり。此外公私歌合。
此難_レ不可_レ勝_レ計_レことなく侍れは。さのみはしるし申さ
るものなり。今の御歌合。思_三兩度_一之例。爲_三詠歌_一者難_三
環瑾_一。爲_三宴會_一者可_レ爲_三珍重_一者歟。
十九番

左 邦 長

白菊の籬にかきる秋の色に光を花と月そともなふ
右勝 顯 綱
さえわたる月にうつるふ色見えて露のまかきに匂ふ白菊
左光を花といふ句は。古今集の歌なれは。人ことによみ
あへる事なれと。弘長三年九月十三夜内裏御會に。あひ
にあひて秋の籬にてる月の光をはなと咲るしら菊と申
歌侍り。今歌。棄_レ本逐_レ末とや見え侍らん。本歌なれは
とて。かやうにとり侍らんことは。さきのうたのため
よしなし。後の歌の爲も益あるへからず。新撰隨牒に
も。人のよめる詞をふしとしたるはわろし。ひとふしも
めつらしき詞をよみ出んとおもふへしとそ侍るめる。

廿番

右はとかく申へき事も侍らぬやらんとて。勝とさため
まうすものなり。

左 女 房

今よりは千年やすまむ月影も籬の菊の露にちきりて
右 左衛門督
是のみやおいせぬ月の影ならん籬のきくに秋を契りて
左歌。兎影契_三千秋_一之露。右歌。女花約_三不老_一之月。共以難
_レ宜。右同字有_レ五。歌合之席多詠_レ之爲_レ負。合點之時不
_レ憚_レ之付_レ墨者歟。

廿一番

左 三位中將

さえまさる霜を重ねて白菊の籬をみかくよはの月影
右 安嘉門院右衛門佐
色まかふ月もひとつにわきかねて籬をたとる霜の白菊
まへのまかきは月にみかゝれて顯れ。うしろの籬は霜
にうつもれてかくれにけり。おほつかなき所侍らねは。
以_レ左爲_レ勝。此番如_レ此加_三添判_一之處迎_レ期。右歌清書之
誤也。籬をたとると云々。有_レ例者可_レ直之由被_レ仰。就
_レ之粗勘_三先規_一。天徳四年内裏歌合。むはたまのよるの夢
たにまさしくは。我おもふことをひとにみせはや。判詞
云。右歌むはたまとかけり。よるといふことは。ぬはた
まとを書かし。歌はおなしやうなれと。かきあやまりた
るなめれは。そのよしを奏申せは。あやまりあらんはい
かてと仰あれは。以_レ左爲_レ勝。千五百番歌合。きえなく
にまたや都をうつむらんわかな摘野もあはゆきそ降。

粟田口入道大納言判に。すかたよるしきを。又や都をうつむらんといへる。野よりもみやこには。雪のふかゝるへきやうにきこゆるにや。持たるへし。これは。またやみやまとよめる。まの字書誤なり。同歌合。あいなくもしくれのおとのつらき哉まつ人の來ぬよはの寢覺に。顯昭判に。初句のあひなくもと侍。おほつかなく侍り。つねにはあやなくもとこそよみはへれ。もしひかゝきにや侍らん。右のうたさせる難はへらす。されと左のかきたかへをうけ給りて。勝負は申へく侍り。僻書をさゝへてまくへしとうたへ申ことは。左右ゐわかれて勝負をあらそふ時の事に侍り。此外京極御息所歌合已下。古今之例雖多。悉不載之。凡清書之誤。先例不_レ過二字。合今度如_レ改一句。然而爭以_二執筆之差_一不_レ直詠歌之四字。哉。籬顯露被_レ用_二顯昭之判_一。菊花霜彌叶_二花麗之_一。跡_二者歟_一。

廿二番 庭月聞虫

左勝

隆博朝臣

君を見む千世まつ虫のねにたてゝ秋をかきらぬ宿の月影

右

左衛門督

松虫のこゑも淋しき古里の艸にやつるゝ庭のつきかけ

左 松虫のねの秋をかきらぬさまにそ聞なされ侍れと。

それしもちとせの宿の久しかるへきことはりかなひてこそ侍れ。右新古今草にやつるゝ古里の月にことならすやとて。しりそけ侍へくや。

廿三番

左

教顯

哀にもたれまつ虫か故郷の淋しき月にねを盡すらん
右勝 安嘉門院右衛門佐
暮るよは浅茅かにはの月なれて又松虫よたれたのむらん
左歌は。ふるさとをのみおもひやりて。月のみす虫も聞ぬさまなるにや。右は。ひとをそたのむ暮る夜ことにと申歌。近年殊繁昌したる本歌にて。是をへつらはれたるにやとそ。みたまふれと。庭もたしかに侍れは。まさり侍へくや。

廿四番

左勝

重經

月を猶つゆのよすかも尋ねける蓬か庭のまつ虫のこゑ

右

行實

浅茅ふの庭の月かけいたつらにたのめぬ人をまつ虫を鳴

新古今。しめ置いていまやとおもふ秋山の蓬かもとに松むしのなく。新勅撰。かれはてゝ後はなにせん浅茅ふに秋こそ人をまつ虫の聲。たゝこれらにこそ侍れは。左右とかく非_レ可_レ申歟。

廿五番

左勝

邦長

露深きにはの草葉のむしの音を尋かほなる月の影哉

右

親長

月も又すみけるものを浅茅ふのやとのあるしと虫の鳴らん

いづれもこゝろあるさまにやとて。爲_レ持。

廿六番

左勝

女房

人はこす月はかりすむ蓬生のもとのかゝるにまつ虫の聲

右 則 任

あと絶るよもきか庭の月影につれなく誰をまつ虫の聲
左右の松虫。こなたかなたの蓬生。もとのこゝろふかく
こそ侍れと。つれなく誰をといへるわたりも。我こそと
はめとわけかたく侍れは。暫持と申侍らん。

左持 三位中將

露さむき庭のあさちの月影に稍よりはり行松虫のこゑ

右 則 雅

月影はあさちの霜と見えなから鳴音よはらぬ庭の松虫
此まつ虫のねこそ。よはらねはとてもまさらず。よはれ
とてもおとらすや聞え侍らん。

左勝 法印道雲

虫の音のをりみたりたる聲のあやきてそみるへき古里の月
右 顯 綱

庭の面にたれまつ虫のねをたてよすから月に鳴あかすらん
左ゆゝしくふるまはられたるこゝちにこそ侍らめ。た
たし。こゑのあやをきてそみるへきとは。いまた故郷
にもかへらざるにや。このあやに繡を重ねきても。夜行
こそ。月を見むためなりとも。かひなくや侍らん。ち
からあるさまなれは。題のこゝろをも忘れて。かち侍へ
きやらん。

左勝 教 顯

廿九番 旅雁叫月
なにことのつらさしれとて初雁の月にはいたくねのみ鳴らん

右 則 雅

さらしなの山とひこゆる鴈かねも慰めかねて月に鳴らし
さらしなのなくさめかたき。例の事とみえて。めつらし
からすや。はてには。鴈さへなくさめかたく月に鳴侍に
こそ。いきとしいけるものゝ心け。みなひとつなるゆへ
にやと。あはれにこそ侍れ。左はなにとなくいうなるさ
まにいひくたされて。勝り侍へし。

左勝 重 經

あくかるゝ心を月にたくへてやうはの空なる初鴈のこゑ
右 安嘉門院右衛門佐

旅の空月寒き夜のあきかせに浮立雲の衣かりかね
右歌月の寒きに雲の衣かりかねおかしさに。月の曇ら
んこともおほえさりけるにやとおかしく。歌の風情つ
つましかりけるかなとみえ侍にや。但弘長三年内裏十
首に。月前鴈。前大納言爲天の原とわたる夜半の月影に
秋かせさむし衣かりかね。此歌にや。雲の外はたかはす
侍らん。左歌は。うはの空なるはつ鴈。聞なれたるさま
にて。同類もやおほつかなくはれとも。昨日のこと。
けふはわすれ侍る老の心によろしくやとて。しはらく
勝と申へし。

左勝 邦 長

廿一番 月影はおなし雲井のなか空に越路へたてゝ鴈は鳴也
右 則 任
今宵とてなれもねられぬ月影にこそはれぬとや鴈の鳴らん

右歌なれとは誰ことにか侍らん。おほつかなくこそ侍れ。しかも。寝られぬさそはれぬの。れぬく。いうにも聞え侍らぬにや。左よろしきにはあらねとも。勝侍へくや。

卅二番

左持

女房

萩原やをく露みかく月影に涙あらはす初かりのこゑ

右

行實

忘れすもおもひこしちの空にみし月とや今も鴈の鳴らん

右歌越路にこそとはみたまふれと。おもひこしちとそへられては。空に見しのしの字重りて聞ゆるにや。左下

句はおかしとも申侍ぬへけれと。叫月心や。とわからんとて。爲持。

卅三番

左持

三位中將

秋の夜の更ゆく空に初鴈のなくねもすみて月そさやけき

右

左衛門督

初鴈のなきて過行天の戸にあけかたちかくすめる月影

明かた近き詞は。ちかき世の歌に數多見え侍る事なれと。更ゆく空。すきゆく。たゝおなしほとのことになや。

卅四番

左持

法印道雲

月影も淋しき秋の宿からや物うかるねに鴈もなくなり

右

親長

秋といへは雲井の鴈やさそふらん都わすれぬ初鴈のこゑ

右歌に。雲井の鴈。またはつかりのとはへるにや。朗詠の

詩に。兩三行鴈點レ雲秋。後撰歌には。行かへりこゝもかしこもたひなれや来る秋ことにかりくとなく。和漢の才をもとゝして。詠吟の興をますものにや。新撰髓腦にも。ことさらとりかへしてよみ。所々におほくよめるは。さるやうなりとしるせり。作者の存知。これらにこそ侍らめと。みなおしはかられ侍れさも。月の見え侍れはにや。そのころもいとくらくまよはれてはへりける。しかも下の句は。後京極殿御詠にて侍るなり。左歌は。さひしなからも月秋はへるうへに。春鶯言をそへて秋鴈ちからをいれたりと聞えはへれは。まさるへくや。

三十五番

左持

隆博朝臣

何と又鳴てはつくる鴈金を秋とは月の影も見ゆるを

右

顯綱

鴈かねのおのかはかせに雲はれて月すみのほるよはの空哉

左歌は。かりこそなきて秋とつらなれと申ふることを。かやうにとりなされては。めつらしくやきこえ侍らん。

右歌は。續後撰に。雲もとふかりの羽風に月さえてとはたのさにと衣うつなりと申。後鳥羽院御製之上句となりて見え侍れは。つくるみゆるのの字なきにはおとり侍れと。左なをまさり侍へし。

卅六番

左持

月下掃衣

重經

ななき夜の夢路ゆるさぬ月影に誰いねかての衣うつらん

右

則任

里わかすはや夜さむなるつきかけにたれ寝かての衣うつ覽
兩首下句おなしく侍る。しゐて可_レ勝負あるへからす
や。

廿七番

左持

邦 長

月影のはるかにすめる遠方のはにふのこやに衣うつなり

右

則 任

かくはかりくまなき月に誰か又心ははれす衣うつらん
右くまなき月を見て。誰か心はれす衣うつらんと思ひ
やり侍らんこと。かならずさるへきゆへの侍らさらん
にはよしなきをしはかりことにやはへらん。左上句に
はるかにすめるとて。遠かたとあるや。文字はかはりて
侍れと。おなし心のやまひと申たるに。かやうなるに
や。元永元年法性寺殿歌合に。露霜のあかつきをきの朝
ことにといふ歌をは。基俊判に。二重言なりとなむして
侍にこそ。曉と朝とは。時分さすかへたゝりて侍るす
ら。かく難せり。はるかにすめるをちかたはは見渡れ
て。おなし心かくれもなくやとて。爲_レ持。

廿八番

左

女 房

今こんと契りし秋の月影に思ひいてゝや衣うつらん

右

顯 綱

里ことに夜寒の衣うつほとは月見よとてや驚かすらん
左歌は。いひしはかりに長月の面影おもひいてられて。
いとよろしく優なるへし。右は新古今に。なかめよとて
のすきひかなあさのき衣月にうつこそある。心こと

此間調

葉ひとしくこそ。ひかことにあらすとも。左には

右

左衛門督

賤のめか麻のき衣よをかさねねられぬ床の月にうつなり

右續後撰。ねさめのとこに衣うつらんと侍れは。おなし
ことにやとて。左勝侍へし。

四十三番

寄月忍戀

左

邦 長

ちらすなよまたしる人もなきわふる涙こととふ袖の月かけ

右勝

左衛門督

何と又なみたをつゝむ袖のうへにわきては月の影やとす覽

左はしのゝはくきをきゝ侍らん。さるこゝちし侍れは。
わきては月の影は。袖にやとしても見まほしかるへし。

四十四番

左勝

女 房

しのふれと猶せきかぬる涙かな物やおもふと月やとるまで

右

親 長

涙しる袖の月影こととはゝなきなそとたにえやはこたへん

右歌の上下。初の句おなしく侍るは。天徳歌合にもきた
あり。千五百番歌合。俊成卿判。上下句のはしめの字お
なしく侍り。これは例として深き難にはあらねと。すこ
しの勝劣をもとむる時は。咎にやとて負侍りけりと。左
に此難はへらねは。爲_レ勝。

四十五番

左勝

三位中將

袖のうへの涙にやとす影そとも人こそしらね秋の夜の月

右

行 實

月影はくもらぬよはも忍てふ心のくまに人をこふらん
右歌は。古今誹諧うたに。おもふてふ人のこゝろのくま

ことにたかくれつゝみるよしもかなとあるをおもひ
て。忍てふとりなされたるは。さることとみえ侍れ
と。いうなる歌を本として讀へきことにや。大かた心の
くまと申歌は。ものにも多くは見え侍らぬにや。後撰に
人はかる心のくまばきたなくてとあるも。撰集歌に。
(本ノマヽ) 人なればとてかすくゝに秀逸なることは。昔も
いまもなき事なり。本歌をは。よくくゝおもひはからひ
てとるへき事となん。先達も申をきてはへる。左は人こ
そしらね秋の夜の月。いうなる風情。はるかにまさりて
見え侍なり。

四十六番

左勝

法印道雲

ひとしれす忍ふ心のしつく山わくる袂に月そうつろふ

右

安嘉門院右衛門佐

もりやせん雲間はるかに見し月の面影つゝむ袖の涙も
左歌人しれすしのふと。さては題の心あらはにはへり。
その殘そ山路月なと申さん題にや。よろしき歌にても
侍へからん。公任卿のかきたるものにも。はしめにおも
ふことを顯したるは。わろき事になんすると見えたる。
今のうた。初の八字より外には。題をえたりともみ
えぬにや。右の面影つゝむ。又いかにと心うへきにか。

おもかけと申ものは。心にうかひて身をさらす。いかな
る人の中にて。あやめらるへきことにはあらぬもの
なり。もりやせんと侍る初句より。いうなることは。あ
りかたきや。袖の涙のふかき心しのはれて。しらぬこと
になん侍れは。猶上歌の忍戀。さりとは勝へくや。

四十七番

左

隆博朝臣

月はよも人にかたみし今宵たゝゆるしやせまし袖の涙を

右勝

則 任

顯れはいかにせよとて袖のうへ涙に月の影やとすらん
左はおかしきさまには聞え侍れと。月はやも。今宵たゝ
なと申こと葉は。うるはしきかたちにはあらすもや。右
は艶なるすかた勝り侍らんかし。

四十八番

左持

教 顯

顯れん涙もつらし我そてにくもらぬ月に何やとるらん

右

顯 綱

忍へともかひこそなけれ袖のうへの涙あらはに宿る月影
左右ことなる事は見え侍らねと。くもらぬ月にのよの
字すへかねてきこえ侍らん。さても持にて侍らん。うら
みなかるへし。

四十九番

左

重 經

せきかへす涙たつぬる袖のうへの月の行ゑを知る人もなし
右勝

則 雅

よなくゝにやとかる月も心せよひとにはつゝむ袖の涙そ

左涙たつぬるとは侍れと。露をたつぬる 面影し侍にや。

五十番 寄月忘戀

左勝

女 房

うき人のこゝろの色のたくひかな涙にかはる夜半の月影

右

左衛門督

たえはつる契そつらきうき人の面影とめし月を見るにも

兩方厭人。在_レ左則左重。在_レ右側右重。但尙思_ニ留_レ影之

句。不_レ及_ニ替_レ涙之詞。仍以爲_レ勝。

五十一番

左持

三位中將

待なれし契はかはるよな_〱の月のみおなし影をみる哉

右

則 任

更ゆくも契し夜はのならひとやよそなる月を猶したふらん

左右共以宜。優劣不_レ可_レ論歟。

五十二番

左勝

法印道雲

忘れし人のつらさも今更におもかけさらぬ秋の夜の月

右

則 任

わすられは忘れなましをうき人の面影のこる月ぞ悲しき

右歌 君わすれすは我も忘れしと申歌を。おかしうこそ

引なをされたれ。左歌上下の句すくらかに聞え侍れと。

わか人をわすれたらんも。ちからなきことには侍れと。

うちまかせぬやうにやとて。馬内侍かむかしもおもひ

いてられて。尤可_レ爲_レ勝。

五十三番

左持

隆博朝臣

いつまてか待夜かはらぬ契とて心も通ふ月をみつらん

右

親 長

あかさりし有明の月の形見さへそをたに後と云かひもなし

左歌上下の句におなし心やかよひ侍らん。右歌文藻之

趣岸樹之病やおかせる。歌さまともによろしく見え侍

れは。爲_レ持。

五十四番

左持

教 顯

今はた_〱契しよはの月のみや面影かよふかたみ成らん

右

行 實

うたてけに人こそうとくなりにけれ見し夜の月の影は替らて

兩方初句。こゝろにくきすかたにはあらねと。末さまあ

しからす侍れは。爲_レ持。

五十五番

左勝

重 經

今もなを忘れぬ月の影そとふ馴しは袖のむかしなれ共

右

顯 綱

うき人の契はよそになりぬとも今宵はおなし月やみるらん

右歌。續後撰洞院攝政殿御歌に。心こそ契しまゝにかは

るともおなし空なる月やみるらんと侍るにことならず

や。左腰つきにほひなくやと見え侍れと。勝こそし侍ら

め。

五十六番

左勝

邦 長

馴し夜のおなし涙の月みてもあらぬかとのみ身をたとる哉

右

安嘉門院右衛門佐

かたみとてうつろふ月もたのまれす忘る草ののきの下草
左歌存ニ題心ニ得ニ歌躰ニ雖思ニ小町之古風ニ而非ニ無ニ氣
力ニ者ニ歟。右歌わするニ草ののきの下草。こはしのふに
やあらんとたのまれぬへくは侍れと。なをおほつかな
く。あらぬかとのみたとられて。左勝る。

五十七番 月前感恩

左勝

三位中將

秋の夜の月よいかなる契にてさのみもあかぬ影をそふらん

右

行 實

自から身のうきことも忘られてあかす幾夜か月をみるらん
右上句つねに見なれたるこゝちし侍り。左さのみもあ
かぬかけは。いく夜の月にや勝り侍らん。

五十八番

左勝

法印道雲

老ぬれは月みるまでもうき物と思ひしらする 我涙かな
則 任

みるまゝにいとゝ心もすむ月の更ゆくかけや哀そふらん

右歌千歳集に。あかていらん名残をいとゝ思へはやか
たふくまゝにすめる月かなにことならずや。まゝいと
との詞さへあらはに聞えて。更ゆくは。かたふくおなし
ことにこそ侍めれ。本歌は。とをきをとより長きをのそく
へきとそうけ給る。左老ぬれはとあるより心ひかれて。
思ひしらるゝなみたにそ。勝の字をつけまほしく侍る。

五十九番

左持

隆博朝臣

あかす見る心はかりにさよふけて浮世忘るゝ月の影哉

右

安嘉門院右衛門佐

みるほとは世をうき雲もあたたえて月を隔てすすむ心かな
左は世をわするゝ月の影さやかに。右はよをうき雲の
あたたえて。かれはこと葉すなをに。これはこゝろふか
し。宜爲侍持。

六十番

左

教 顯

心さへすみこそまされ秋の夜の月を哀とひとりなかくめて

右勝

左衛門督

うきこともなくさむ月の影にたになとかきくらす涙なる覽
左歌光明峯寺入道殿下御詠に。なかくつゝ月をあはれ
といみかねてひとりおきゐる床のさむしろ。かくなん
侍れは。月を哀と申詞。後撰拾遺よりいてたる事なれ
は。いくたひもとちる侍らんも咎なし。ひとりなか
めつゝなとにかよひ侍なんは。彼御詠をおかせるなる
へし。右なとかきくらす泪。なにとなくえんなるさまに
聞侍れは。爲勝。

六十一番

左持

重 經

秋のよのなかきおもひに夢たえて涙もよほす月の影哉
右 顯 綱

いかなれはをのか物から涙たに月みるたひに袖ぬらすらん
なみたもよほす秋の夜の月といふ當世の歌の侍れさ。
右の袖ぬらすらんも。されはとて。まさらんことかたく
や。

六十二番

左持

邦 長

さそはるゝ心は四方にあくかれぬ空すむ月の影にまかせて

右

親 長

終夜くまなき月になかめして身のことほりも思ひ残さす

いつれと申かたく侍り。

六十三番

左

女 房

詠めつゝ月にそしのふいにしへのよゝの秋迄思ひつゝけて

右勝

則 雅

徒に月をあはれとなかめ來てみそちの秋そ身に積ぬる

左歌に。重點のみところまで侍にや。これは難としたる

たひもみえ侍ることなれば。右歌いたつらにみそちを

をくられにけれと。無病なるにつきて可_レ爲_レ勝歟。

六十四番

月前祝言

左持

法印道雲

三笠山君かさかゆく秋そとは月の光そさしてみえぬる

右

顯 綱

いく千代も君か世てらせさしのほる三笠の山の秋の夜の月

左歌に秋そとて光そと侍る。その字は難にや侍らん。嘉

應二年住吉社歌合に。難波かた芹のまろやのたひねに

はしくれは軒のしづくにそしる。俊成卿判に。たひねに

はとなきて。又しくれはといへる。はの字や二なれば。

耳にとまりて聞ゆらんと難して侍れは。今のその字こ

れにあたり。右歌さしのほるみかさの山の月。まこと

にきよけに。光あまねく世をてらせるさま。をよひかた

かるへしといへとも。いく千代といひて君か代とある

わたり。おほつかなくて。古き歌合ともをひき見侍れ

は。建仁元年石清水歌合に。すむ月に神もひかりをやは

らけていくよかとともに世をてらすらむ。土御門内大臣

判に。いくよの世。世をてらす。おなしこゝろにや。千五

百番歌合。君か代をなか井の浦にゐる鶴のよろつ代ま

てと聲きこゆなり。師光入道判に。よろしくは侍れと。

君か代萬代いかゝ侍へからん。建保二年内裏歌合。千代

のかけ久しかれとそ松か枝になを吹むすへみよの秋か

せ。定家卿判に。千代のかけ。みよの秋風。いはひの歌に

は。世の字あまたよめるためしは侍れとも。猶その難な

き右の歌。勝侍へし。これらの難につきては。右上の句。

いかゝ侍へからん。左歌その字又ゆるされかたくや。な

すらへて爲_レ持。

六十五番

左勝

隆博朝臣

つもるとも老とはならて君か代に絶すそ秋の月は見るへき

右

行 實

くもりなき御代とはしるし久堅のよるひるわかぬ月の光に

右歌おほきなる不審とも侍かな。まつ久かたのよるとつ

つけられて侍る。定てゆへ社は侍らめとも。八十八物異

名にも。久かたをば月と申たり。又空も申たる事も侍れ

と。いまたよるとかきたる物をこそ見及ばへらぬは。つ

つのあなのせはきかゆへなるへし。せめての事に。範永

朝臣か。みしよりもあれそしにける石上秋はしくれの

降まさりつゝと詠たるは。いそのかみふるといはんとて

の中に。秋はしくれとこめたるは。なとや作者の存知侍らん。まことにあらぬにはあらねとも。今の歌。月をいはんために。よるひるをこめて詠侍らんことは。時雨にはかなはずや侍へき。日不^レ知^レ夜月不^レ知^レ晝とこそ。本文にも侍なれ。晝夜をわかたさらんも。かへりてよしなくや。長元八年宇治殿歌合には。君か代はしら雲かゝるつくはねの峯のつゝきの海となるまでとある歌をば。輔親卿判に。海は山になり山も海にならばあしかりなん。海はうみ山は山にてあらんこそよからめ。いま〜しとて。其歌まけるかことく。此月よるひるわかさらんも。いかゝとおもひ給ふる。左は順徳院御製。今宵そ秋の月を見るへきと申下句十四字の中。十一字をおかされたるやいかゝと見給れと。右にまさるへきてうは。うたかふへからすこそ侍らめ。

六十六番

左持

教顯

みかさ山さやかにすめる月影に君かちとせを猶いのる哉

右

親長

かすか山むかしのあとにすむ月は今ゆく末の影もかはらし千年をいのりて。すゑもかはらさんことはおなしかるへければ。持とす。

六十七番

左

重經

ゆくすゑを兼てや月もてらすらんはこやの山の萬代のかけ

右勝

則任

三笠山ふりさけ見れば明らけき御代そしらるゝ秋の夜の月

左歌は寶治元年仙洞五首に。月契千秋。故入道太相國。萬代と雲井をかけてちきるらしはこやの山の秋の夜の月。よるつ世のかけも秋のよの月にこそ侍らめ。右歌みかさ山ふりさけ見ればも。いまは目なれたるにや。新撰髓腦には。こはくいやしき詞は。よくはからひて讀へしと。をきておかれたるにや。此歌。四條大納言遺誠をまもられず見え侍れと。勝侍へし。

六十八番

左持

邦長

春日山君のひかりをさしそへて曇らぬ月そ千代もすむへき

右

則雅

くもりなき春日の山の月にこそ榮行みよの光をもしれ春日山の月の光。いつれもくもりなくみえ侍れは。可^レ爲^レ持。

六十九番

左勝

女房

君か代にわかひかりそふ秋なれば思ふも久し月の行末

右

安嘉門院右衛門佐

みかさ山のとけき月はいく秋とさしてかきらぬ萬代のかけ左歌君か世に我ひかりそふと侍より。姿雖凡俗詞入^ニ幽玄。作者不^レ被^レ住^ニ注^ニ覺^ニ者不^レ知^ニ誰人之所詠。若類^ニ能^ニ因^ニ黑髮之古詞^ニ者。可^レ爲^ニ老身丹心之僻案^ニ者歟。右みかさ山のさして。例の事ときこゆ。勝負可^レ謂^ニ雲泥^ニ者歟。

七十番

左

三位中將

曇りなく影すみわたる月をみてあきらけきそ空にしらるゝ

〔世力〕

右勝

左衛門督

今も又みちある御代の月なればよもの海にも影そのときき
 右歌。見ニ有道之月影一知ニ四海之清靜。雅頌之躰感歎可
 足。左くもりなきかけ。あきらけき世。重ニ得偶言一招ニ
 (本ノマ)舊難ニ者歟。仍以レ右爲レ勝。

抑みかさ山のあらしの聲。よろつ世をつたふ。八十字治
 川のなみの色。千とせにすめり。今わかすへらきのみこ
 とのりにかはりて。國をおさめ政をしく事わさ。よろつ
 にしけしといへとも。いにしへをもわすれし。今もみそ
 なはせ給はむとて。歌合のことあり。これは。狂言綺語
 の戯たるのみにあらず。彼長保大治の跡を尋ねて。透
 (雲)逸を七そちの番に結び。評判を七そちの老にせよ
 となり。身にのそめては面目たり。世にかけては嘲哢
 なるへし。すへからくわかつかきりにあらされは。のか
 れ申へしといへとも。道にふけるおもひ。老の今にたえ
 すして。なましゐにかきつくものなり。あまさへしかま
 のかちまけを定め侍るうへに。難波のあしよしをわかち
 て。點をあふへきよし聞え侍れは。いなみ野のいなみか
 たき許に。須磨の浦のすまひたてまつらす。珠玉之篇を
 むなしくせは。鴻鶴の飛さるにひとしからん。磧礫之詞
 をよろしとせは。駢龍のわたかまるところをしらぬう
 らみふかゝるへし。作者あらはされ侍らねは。すゝめん
 とてもほめす。しりそけんとてもそしらす。たゝ故をた
 つねて新にならふれは。をのつからとして。筆をくたす
 にわたくしなき所は顯れ侍らん。此事をうけ給はりて。
 徒につもれるひかすをかそふれは。二の六にそなりに

ける。はやくせんとすれとも老はねふりをあいし。いそ
 かとすれとも身は病にまとはり。巧にしてほそきに
 もあらず。拙してすみやかなるにもあらされは。おこた
 るところ。いよくおそるゝにのかれかたき物をや。

〔眞 觀〕

右建治元年攝政家月十首歌合 以或家藏秘本按合書寫了雖
 有誤字依無類本暫隨原本

正應二年卅番歌合

一番 月前露

左持

女 房伏見院

袖をうすみ露置とをす心ちして月も身にしむ曉の床

右

中 將

竹の葉に露白きよの月の色に物寒くなる秋そ悲しき

左の御歌は。道信朝臣の。秋はつる小夜更かたの月見れは袖も残らず露を置そふとよめる景氣を取て。露置透すと讀せ給ふ事。打聞より身にしむはかり侍るを。右歌も竹の葉の露しろき夜の月の色に。いと、秋のかなしさも。あはれさもたゝならず。烟葉清冷月華凝と順か作れる詩の心も。何となくおもひ出られて。えならぬ御作意。ふかく聞え侍れは。いつれをそれと申わけん事もかたくて。持と定め侍らんか。

二番

左

本ノマ、
藤原大納言典侍

庭もせの露のみ月にしらみあひて千種の色はいづれ共なし

右勝

從三位親子

風にもろき萩の上葉の露深み月敷庭の秋そ淋しき
左歌露のみ月にとひて。千種の色はいづれともなしとよめるや。あなかにち題をのみせんとしたるやうなれとも。さして其興もなく聞え侍る。定家卿の歌に。今いく日秋もあらしの横雲にいつれかしらむ山の端の月と讀ること葉を。しらみあひなといひかへられたるにや。右の歌は上下よく打あひて。月しく庭なともおかし

三番

左持

延政門院新大納言

雨の後軒端の月の影さして露をつらぬく蛛の糸すち

右

從一位藤原朝臣敦良女

光そふ艸葉の露に月をみてひとり心のゆかぬ夜そなき
左の歌古今集の。秋の野にをくしら露はたまなれやつらぬきかくる蛛の糸筋とある詞をとりて。月華綱在_ニ蛛糸上_一と侍る沈庸齋か秋の詞の心まで。よくおもひとられて侍る。右の歌も。艸葉の露に月の光をそへて。秋のよな／＼こゝろゆくかきり打詠むる意を。下の句によくいひおほせられて侍れは。軒端の月。艸葉の露。折にふれ時にしたかひ。その興さま／＼なるへければ。ましょとりをわけかねて侍るまゝ。持と申し。

四番

左持

永福門院内侍

さえ白き竹のよふかき露の上に月も身にしむ色そ寒けき

右

左近衛中將藤原朝臣家親

影やとす露はそれとも見えわかつて月の色なる艸の上かな
左の歌は。式子内親王の。小庭に夜半の衣手さえ／＼て初雪しろし岡のへのまつと侍るをおもひ出られ。竹の葉に映せる月の寒けさもさこそ侍らめと。五文字のさえ白き。少し荒涼の詞と耳にたつまて侍る。右の歌月の色なる草とは。露のあはれをいひたてむとて。のあまりに露なきにや。仍爲_レ持。

五番

左勝

宵のまに見えぬ草葉も顯れて露さやかなる庭の月影

右

從二位藤原朝臣兼行
九條左大臣女

なく露の月の光にみかゝれて玉敷わたす淺茅生の庭
左の歌みえぬ草葉も月に顯れて。露さやかなるとよめる。前の番の歌にかはりて。是そ意こと葉題に能かなひ侍る。右の歌。月の光にみかゝれて玉敷わたすなど。露の光一曲あるやうに侍れ共。歌合の例として。詞なたらかに心ふかさ(き散)をとる所なれば。左のかちたるへきか。

六番

左

淺茅生の露のやとりも靜にて更たる色にすめる月影

右勝

左近衛中將藤原朝臣俊兼
新宰相

露はらふ風は淺茅に音つれて月のみ空に雲そ行かふ
左のうた。心のまゝに置あまる淺茅か宿の白露に。物しつかなる夕暮。月も澄のほりたる躰。誠は(に)鬱幽玄に侍れとも。更たるといふ腰の句。いかにそやきゝつかす侍るを。右歌つゆはらふ秋かせのそよ／＼と音つれわたるより。うちあふき見れは。月のみ空は。雲の行來もはやく晴曇る躰。かの漢武帝の秋風辭に。秋風起白雲飛と侍るけはひに。秋天の氣象おもひ入ふかく侍れは。右の勝にこそはならめとこそ。

七番

左持

暮天鴈
俊兼朝臣

色薄き夕日のきはに飛鴈の翹さひしき遠方の空

右

新宰相

霧籠ていとゞゆふへの色深み行鴈かねはかつ消ぬなり
左の歌夕日の際。飛かりの翹淋しきなど侍るは。彼清少納言か枕草子に。夕日はなやかにさして。山きはいとちかくなりたるに。鴈などのつらねたるか。いとちいさく見えて飛ゆくなと。いとおかしとなん。唐の于草か兩三箇鴈夕陽邊なといふ心をとられたるにや。右の歌霧引空の色ふかき夕。行鴈の翹もやかて消行ものから。雲外殘聲言外にあはれと聞え侍れは。右のうた。又負へきにも侍らす。引合て持となるへし。

八番

左持

羽かはす夕の雲はかつ消て風に残れる鴈のひとつら

右

兼行卿
九條左大臣女

夕暮の雲は晴ぬる半天にまかふかたなく鴈そ過行
左の歌しら雲に羽うちかはし飛鴈のと云古今集のうたに。本つかれたりとみえなから。上句のつゝき如何。判者のならひ是を難す。しかれとも。下の句に鴈のひとつらと侍るうへ。さしておちとなるへきにもあらず。かゝる風躰もまた一の格法なれと。風に残れる鴈。あまりいりほかにや。右の歌さして難なく侍れとも。あまり平懷躰にして。おかしきふしも侍らねは。なすらへて是も持なるへき歌ともなり。

九番

左勝

内侍

はる／＼と雲井に遠く鳴鴈の聲きく夕ひとり悲しき
右 家親朝臣

聞からに哀もまさる夕暮をおもひはしるや過る鴈かね
右の歌は。人はこて秋の氣色もふけぬるに哀にかりの
音つれて行と。西上人のよめる類にや。愁を鴈にかこつ
舄。尤あはれなれと。左の歌は。彼猿丸大夫か。奥山に紅
葉ふみ分なく鹿の聲きく時そ秋はかなしきと侍る舄を。
よく取なされて侍る。奥山の鹿の音に。今の雲井の鴈の
聲も。おとるましき歌のさまなれは。尤左の勝になん。

十番

左

新大納言

いかにせよとしくるゝ雲の夕暮に猶色そへて過るかりかね

右勝

從一位藤原朝臣女

夕附日うつるふ雲に鴈鳴て心うきたつ秋かせの暮
左の歌さなきたに。雲打しくるゝ夕暮の空は。いと物わ
ひしきに。いかにせよとて過るかりかねそと。打歎き侍
るよしにや。されと。第四句の五文字何の色とも聞つか
す侍る。右の歌夕附日の移ふ雲は色ふかく侍るに。まし
て秋風くれて鳴わたる鴈のこゑに。心もうきたつとに
や。されは源氏物語にも。大和詞には秋の哀をとりたて
て思へるとかけり。尤女は秋に心をよするものなれは。
猶以右の歌は。作者にゆへつきて侍る上。爲勝。

十一番

左持

藤原大納言典侍

夕日はれ雲のひとむら靜にて空飛鴈の行衛をそみる
右 從三位親子

いつくよりうかれか來つる鴈かねよ雲も時雨る暮の詠に

右の歌いつくよりうかれて來つる鴈かねそ。雲も時雨る
比。鴈も秋の哀にたへかねてやなと。おほとかに難もな
き歌のさまなり。左は高岫留殘照歸鴻背落霞といふ
詩の意か。又雲收行鴈顯なといふ類にもかよひて。吟詠
よろし。右の雲もしくるゝなと。人丸の歌に秋されは鴈
の羽風に霜ふりて寒きよなゝ時雨さへふると侍るに。
時節たかはす。彼も是も捨かたくて。持に申理り侍る。

十二番

左持

女房

越路より雲のいくへを分過て都はくれぬ天津鴈かね

右

中將

此ゆふへ花ちる萩に風寒し雲井のかりは鳴うかれつゝ
左の御歌。千五百番の歌合に。初鴈は越路の雲をわけ過
てみやこの霧に今そ鳴なると。三宮のよみ給ひし面影
あり。是は。越路の遠きによりて。暮に來たるとのこゝ
ろにや。腰の末句如何にそや聞おほせず。右の歌難なく
侍れとも。蜂腰の舄なれは。勝と申へきほととの歌にも侍
らず。持とするより外の事なくや。

十三番

左勝

女房

野邊みれはちかくいぬへき秋なれや千艸の末も色さめぬらん

右

中將

なきからす虫のこゑのみ稀にして野へ靜なる秋の暮かた
左の御歌。ちかくいぬへき秋なと。ふるきこと葉をとり
て。暮秋の心顯れ侍る。末の句も。凡人のよみつゝくへ

きことに侍らす。拾遺集に。逢見てもなを慰ぬ心かない
く夜を寝てかこひのさむへきと侍るより此かた。夢の
ことならてさむるといふこと葉はよみならはしたりと。
先輩の歌仙申をかれしなり。それは戀のさむへきを。是
は秋色さむるとにや。いとなひらかなる歌の躰なり。右
又なきからすとは。寂連法師か歌にも。秋深き野への艸
葉の色よりもなきからしたる虫の聲かなとよみ侍る。
されと。是はこゑのみといひて。又まれにしてと侍る。
詞のつゝきよろしくも侍らす。されは。左の御うたにな
らひては。花のかたはらのみ山木ともいふへきにや。

十四番

左持

とまらしと野原の色もかれそ行我身うき世に秋の暮方

右

藤原大納言典侍
從三位親子

野邊遠き尾花に風は吹みちて寒き夕日に秋そ暮行
左の歌秋をはうしと。野原の艸の述懷にや。右のうた。
尾花に風の吹みちて寒き躰。させるふしもなし。めつら
しからんとすれはこちたく。すなをならんとすれはお
かしきふしなし。仍爲持。

十五番

左

新大納言

咲分し花の名はなをしられけり秋の末野の霜かれの比

右持

從一位藤原朝臣女

夕日影なひく尾花も末さひて野へのけしきに秋そ少なき
左の歌 咲わけし花の名はなをしられけりと侍る。如何。
聞おほせ侍らす。但古今集に。みとりなるひとつ艸とそ

春はみし秋はいろ／＼の花にそ有けるといふ歌より。
よまれたると見えたり。猶といふ字は。うつろひちり
て。かれしほむより。其草々もわきてしらるとにや。さ
れと狭衣と申物語にも。霜かれはそこともみえず草の
はら誰にとはまし道芝の露なとこそはへれ。霜かれの
に草々の花。いかゞ。時節相違侍らんか。右の歌は。新古
今集に。入日さす麓の尾はなうちなひき。なといふにか
よひやすく。すなをにして打聞よく侍れは。右の勝に定
め侍る。

十六番

左持

内侍

かれて行野への千草の色みれは秋もすくなき哀をそ思ふ

右

家親朝臣

冬枯のくき木のけしきまでしかなまた長月に野への淋しき
右の歌冬かれの草木の氣色。まちもしてかな。またしき
に。なと野へのさひしきとかこつ躰にや。左の歌は。色
かはる露をは袖に置まよひうらかれて行野への秋哉と
いふ歌ほとこそなからめ。心はおさ／＼おとるましけ
れは。左のうたに。哀をふかくおもひそへ侍るまゝ。い
よいよ勝の字を付侍る。

十七番

左持

兼行卿

野へ遠き尾花かすへの夕日影さひたる色に秋そ暮ぬる

右

九條左大臣女

秋の色は有明の月に残り霜かれになる野への草村
左の歌。夕附日向の岡のうすもみちまたきさひしき秋

の色哉と。定家卿のよまれたるを。是は暮秋の題なれは。さひたる色に秋そくれぬと。おしつけていへる所尤にや。右の歌も。新古今に。長月もいく有明になりぬらん。浅茅か霜のいとゝさえゆくともゆるたくひ成へし。されと夕日影のさひたる野への色には。尙をされ侍らん。仍左の勝とす。

十八番

左勝

俊兼朝臣

霜結ふ野へより秋やかへるらん。淋しくかはる艸の色かな

右

新宰相

枯て行野へを哀となく虫よをのれも。秋に残しもせし右のうた。かれゆく野邊のいろをあはれふ虫。をのれはた終には残らしと侍るも。其心しか侍らん。寔に教悔の歌なり。左歌千五百番歌合に。起あかす秋の別の袖の露しもこそむすへ。冬や來ぬらんと俊成卿もよめり。然るに霜むすふ野へより秋やかへるらんとおかしく。露の霜に時をゆつりて。ゆく光陰のうつりかはるまで。哀深くおもひやられ侍るまゝ。又勝の字を。左に付申事になりぬ。

十九番

寄淚待戀

左

俊兼朝臣

待わふる涙のうちに詠なれていつも夕の空そかなしき

右勝

新宰相

今宵さへ來すなりぬよと思ひつゝけ。泪ににほふ灯の色左の歌待わふる夕のけしき。いつもさこそ侍らん。右のうた。さりととも頼むこゝろの今宵さへといふ。さへの

字に顯れ侍るは殊勝の事也。匂ふといふこと葉。古き歌にも。枕言葉にも。多くみえ侍るめる。萬葉集には。朝日影にほへる山にてる月のなともよめる。しかるを泪に匂ふ灯の色と。古詞を用ひて。心をあたらしくする事。尤和歌の名譽たるへきよし。京極の黃門申をかれ侍る。とにかくに。右のうたはまさり侍るへければ。勝と定め侍りぬ。

廿番

左

兼行卿

身になるゝ泪はかりをかことにて幾夕暮を待うれふらん

右勝

九條左大臣女

待とたに人にはいはて更る夜に泪あやしきかたしきの袖左の歌は。袖に落くる泪はかりをいつもかたしきにて。幾夕くれを待過すとなん。いとあはれなるを。右の歌又めてたく幽玄に侍るめり。心にのみこめて人目をはゝかり。せきとむるなみたの心にあまりて。あやしきふり出る袖をひとりかたしく床のうへ。さこそひちまさり侍らん。仍勝なるへし。

廿一番

左勝

内侍

さはらんゆへをたにいへ一筋につらき泪やさらは留ると

右

家親朝臣

待夜さへ猶なくさまて疑のこゝろにたえぬ泪落けり左の歌待につらきうたであり。せめてさはり有事のえさらぬよしをいへと。歎く心も哀に聞え侍る。右はうたかひのこゝろにたえぬせんかたなきに。泪のおつるよ

しをいへり。いづれも心をちゝにくたきて打侘たる中に。左はすなをにして。しかもやさしく理りにも侍れは。尤勝たるへし。

廿二番

左將

新大納言

待うかれ鐘のひゝきも更ぬるに泪の數を盡してそ聞

右

從一位藤原朝臣女

さりともと程も過ぬと思ふよりよはに泪そこほれ立ぬる左鐘の響に數をつくしてなと。よくいひくさりたる歌なり。右又。待よりはりたる泪のほとも。今はの時にこほれたちぬるや。寔にせきとめ難く侍らん。左は詞のよせうるはしく。右は時を感じて泪をそゝく心いたりてふかし。なすらへて持とすへし。

廿三番

左將

藤原大納言典侍

待かほに人には見えしとはかりに泪の床にしほれてそぬる

右

從三位親子

さこそ又むなしからめと歎かれて更ぬ先より泪こほれぬ右の歌あたに待明さんと。かねてなけかるゝなみたもろさ。あまりめゝしきにや。左は待とたに人にしられしと忍ふは戀の本意にて。おさふる泪の床に打しほれてぬる跡。さこそとおしはかられて。哀まさはるまゝ爲勝。

廿四番

左將

女房

頼(む)下の心やよはるまつほともやゝ過ぬかに泪そほふる

右

中將

誰かきくや人をむなしく待なして泪に明る曉のかね左の御歌。下待こゝろの頼さへよりはりゆくにや。おほえす泪のせきとめ難きよし。いとせちなる心なり。そほふるといふ詞は。伊勢物語に出たるを。よくとり結はせ給ふ事。凡慮の外に侍る。萬葉集にも。いやひこののをれ神さひあまひこのたな引目すら霰そほふると侍る。何れもふりまさる心にや。右のかたも。誰かきくやと疑ひて。人を空しく待なしては。泪にあくる曉の鐘を我のみこそと。身ひとつにおもふ戀路のわりなさも。いかて淺くは侍らん。仍持とこそなし侍らめ。

廿五番

寄夢絕戀

左

女房

をのつから思はぬ夢に入くとも面影絶てたとりもやすらん

右將

中將

絶て我見ぬ人かなしおもひ寢の夢は心のけにゆかはこそ左の御歌。我をおもふ人こそ面影にたつものなれ。自絶て我をおもはぬ人は。夢に入きてもその面影さたかなるましく。それかあらぬかたとたると計ならんと。うらみわひたる御作意にや。在五中將の。我を戀らし面影に見ゆ。又思ひあまり出にし玉のあるならんたとよめり。式子内親王の歌も。夢にても見ゆらん物を歎つゝうちぬる宵の袖のけしきはとはへり。右の歌。夢は心のけにゆかはこそみめ。今はたえたる中なれは。夢にさへ見ぬ事を歎くにや。されはくしの詞に。夢にたも周公をみすと有。又文集の詩に。平生所厚者昨夜夢見之といへり。

いつれにつきても。夢は志氣のよる所よりみる事なりと。古人さたしをき侍る。しかるに。是は絶てから夢にも見ぬ中となるは悲しいへるにや。女の才には。かしこくもきとくにも侍れは。勝に申なしける。

廿六番

左持

藤原大納言典侍

おもへともはかなやされは見しまゝの夢や契の限なりける

右

從三位親子

はかなしと思ふ夢にそ残りける絶ぬる後のひとのかたみは左の歌みしや夢のこと。其まゝはかなき契にたえはてたる事を歎き。右又。絶ぬる人の形見に。ありし夜の夢をなそらふ。兩首ともに可もなく不可もなしと持となし侍らん。

廿七番

左勝

新大納言

それさへようつゝの情たえしより我思ひ寝の夢をたに見ぬ

右

從一位藤原朝臣女

夢こそは哀成上もあはれなれ又見るましき人のみゆれは右の歌又みるましき人の夢なれはこそみゆるよと。はかなき筋にいひくさり侍れと。あまりうちひらめたる歌なり。左のうたは。うつゝの情たえぬれは夢のそれさへ見えぬよし。すなをにして難もなく侍れは。勝に定む。

廿八番

左持

内侍

今さへにいそく關こそ哀なれ夢にきとも見はやと思へは

右

家親朝臣

かはりぬる契なれとも思ひねの夢はみし夜の同じ面影

兩首ことなるふしもなく。又難もなければ。持となし侍らん。

廿九番

左持

兼行卿

又も見ぬ硯の夢をそのまゝに思ひさまさぬ我そ悲しき

右

九條左大臣女

うつゝには思ひ出へき契かは夢にも見えておとろかきはや右は絶たる中を。夢になりとも見えて。おとろかさんのこゝろにや。左は煩惱執着のふかき身を歎くなるへし。寔にあふさきるさに思ひみたれて。判者も定かね侍るまゝ。持になすへし。

卅番

左

俊兼朝臣

馴しよけはかなく過て思ひねの夢ちはかりに情をそみる

右勝

新宰相

戀しさも憂も初にかへりけりよしなき夢の覺る朝は左の歌は。むかしのうつゝはたえて後はかなき夢の情はかりをみると。なけきたるはかりにや。右のうたは。こひしさもうさも初にかへりけりと。第一第二の句いとめつらかに侍るに。下の句又よろしくいひおほせて。楚の襄王の哀までおもひ出られ侍り。□に有心舛ともいふへき姿なれは。右は勝のうへの勝たるへきとや。右此判詞をもつて。いみしき御歌ともをけかし侍らんは。いと畏きことなから。大和歌の道は。貴からずして高位にましはるならひなれは。其おそれをもかへり見すなん。

右正應二年三十番歌合以百花庵宗岡本按合

群書類從卷第二百四

和歌部五十九歌合廿五

十五夜歌合永仁五年八月十五日

題

寄月秋

寄月戀

寄月雜

作者

左

右近衛權中將藤原朝臣賴成

兵部卿藤原朝臣兼行

左近衛權中將藤原朝臣家親

中將

譽子内親王家大納言

中宮宣旨

中宮内侍

譽子内親王家少兵衛督

右

中宮大納言

春宮少納言

中納言典侍

藤大納言典侍

權中納言藤原朝臣俊光

春宮左衛門督

新宰相

左馬頭藤原朝臣定成

講師

講師

判者 衆議

一番 寄月秋

左勝

すみそめし月の心や秋なりしあきには月の影もかなしき

右

吹すさふ風もの寒く身にしみてむら雲しけみ月薄き空

左歌題心ふかくして。ことはたくみに。及かたきさまに

侍にこそ。右名を得たる明月くもれるよし。むねんに聞

るにや。尤以左可爲勝。

二番

左勝

秋の來てそへし光のうへに又今宵と照す月のさやけさ

兵部卿藤原朝臣兼行

右

春宮少納言

此秋はあらぬあはれの又そひて月にも物のことになしき
左歌その時にのそみては。思ふ所なきにあらすや。右歌
も。心あるさまには侍れと。勝負可_レ爲_二同前_一。

三番

左勝

左近衛權中將藤原朝臣家親
風に聞あはれもあれと夜な_一の月にそたへぬ秋の情は

右

中納言典侍

秋の色のよもにみちぬとみゆる哉こよひの月の光あまねく
左歌風に聞あはれよりも。月にもよほす情すくめる心
さじ聞えて侍へし。右ことはたらぬさまに侍るにや。左
猶まさると申へし。

四番

左

中將

秋ふかみ身にしむ風のよはをへて月もうれふる色そそひ行
右勝

藤大納言典侍

月の前のなさけの友もかはらざりしみとせの秋を更に戀しき
左歌から優にしていとよろしく侍るを。かよふの事は
あまりなるやうにそ侍る。第三句の夜はのは字。少しい
かにそや聞え侍にや。右感_二一夜之月色_一戀_二三廻_一之秋
友。心情あはれもふかく。優に聞侍るにこそ。

五番

左

譽子内親王家大納言

夜すからの浅茅か庭の虫のねも月にはたへぬうれへ成らし
右勝

樵中納言藤原朝臣俊光

吹すさふ風すさましく身にしてみてよ寒に歸る月ぞ淋しき

六番

左持

中宮宣旨

左こと成事なくは侍を。右こゝろありてよろしく侍は。
まさると申へし。

右

春宮左衛門督

つく_一となかむるまゝに悲しきは夜寒の秋の月のよすから
きり_一す聲々鳴てはた寒き月夜の秋そ物はかなしき
左右ともにおなし程に侍にや。

七番

左勝

中宮内侍

露よりも月にそいたくしほれぬる詠て明すよともの袖
右月を思ふ心さしもあらはれて侍と。いたくのことば
は。しみていひいれまほしくは聞すや侍らむ。左ゆうに
みえ侍れは。可_レ爲_レ勝。

右

新宰相

八番

左持

譽子内親王家少兵衛督

秋風よしはしなふきそ月やとる籬の草の露も社ちれ
右

左馬頭藤原朝臣定成

むしのうらみ千種の色もなさけあれと月にまさらぬ秋の庭哉
右虫のうらみ千くさのなさけ。月のよの氣色も思ひや
られ侍るを。まさらぬこと葉おもはまほしくや見え侍
らん。左又勝劣分明ならず。しはらく可_レ爲_レ持賦。

九番

左勝

頼成朝臣

寄月戀

頼成朝臣

又なかも又かきくらしい度かうれへの色に月もしむらん

右 大納言

かきくらす我泪にはかはるらむおなし月をそ君もみるとも
右も心おかしく。上下かなひてはきこえ侍と。左隔凡俗之堺(本ノマ)心ふかく。ゆふにおかしく侍る。尤可_レ爲_レ勝。

十番

左持 兼行卿

いかにもろき涙とかしるうき人を心にもちて月を見る頃

右 少納言

わかために曇らぬ夜はそなかりける向へは月に泪うかひて
兩首おなし程にや侍らん。

十一番

左持 家親朝臣

有し夜にかはらぬ月の名残さへ今いく程の秋にかは見ん

右 中納言典侍

こひ忘れ思ひしのはむと思へとも更にかなはぬ月のよすから
右こゝろありてはみえ侍るを。かやうの風情同類侍るにや。もし見をよはぬ作者にもや侍らむ。そのうへ。はしめのことは。すこしおさまらす侍るにこそ。
左までも(本ノマ)かつまで侍らすやと。爲_レ持。

十二番

左持 中將

あはれとめし其夜の空を忘れかねてつきせぬ戀になるゝ月影

右 藤大納言典侍

うきになしかたみに思ひとにかくに月を泪の外にやはみる

左上下あひかなひて。心ふかく詞いとよろしく侍へし。

右上句にかたみとて。末句に又みるといてたること。よのつねははゝかるへき病にて侍るうへ。歌合のならひ。ことに憚る習ひにて侍るを。古歌のすかた。かならず判者も思ふ所ありて。とかとせざる事。例あることにて侍れと。つねはとかめ可_レ申や。旁左勝へし。

十三番

左持 大納言

昔ならはまたましよはの月影を戀しとのみそ詠めうれふる

右 俊光卿

思ひ出る人のゆかりに月をなしてかこち憂ふる程そはかなき
左聞え侍り。右ゆかりの詞不_二肝心_一也。をとると申へし。

十四番

左持 宣旨

めくりあひてみる我のみそつれなきやあらぬ契に残る月影

右 左衛門督

うきにたへてさのみ詠むと見るらむと月の心も更にはつかし
月の心も更にはつかしなと。心ありてみえ侍るを。二三句さしあひて聞え侍うへ。みる我のみそつれなきやなと。よろしく聞え侍れは。爲_レ勝。

十五番

左持 内侍

とはれむのたのみたになき詠哉またはやせて月のよすから

右 新宰相

こひなかも涙にくるゝ我そとも月たに人にかたれと思ふ
またはやせて。月のよすから。よろしくえんに聞え侍

るを。月たに人にかたれと思ふと侍る。まことにおもひわひなん心には。さこそあはれにも侍れは。宜持と申へし。

十六番

左

少兵衛督

詠め憂へ今宵の月に戀つきていさやあす迄たへしわか身か

右勝

定成

もろともにみしおも影の月そとて詠なくさむ我そはかなき
左心さしをしこめて。そのすちとわりなくきこえ侍に。
こひつきていさやわか身哉と。猶いひおさめぬ所侍る
にこそ。右たゝしくきこえ侍れは。勝と申へし。

十七番

左勝

頼成朝臣

むかしへのかゝみをのこす月なれば今の名残もゆく末の月

右

大納言

つくくくと月に詠て思ひつくすよものあはれも誰に語らん
左往昔のことほりをもて。將來のことをかゝみる。もと
もたくみに侍かな。右おもひかたく侍へし。

十八番

左持

兼行卿

こゝのへにすむらん月を思ひやりて獨みる夜の宿を淋しき

右

少納言

人すまぬ古き御かきの庭の池にひとりや月の影もさひしき
兩首。心さしあひにてともによろしく侍れは。勝負さた
め申かたし。

十九番

左持

家親朝臣

歸りゆかは是をも忍ふ折やあらむ今宵は月にみやこ戀つゝ

右

中納言典侍

ふくるまでしつかに月を詠れは千里もうかふ秋のおもかけ
左猶風情有様に侍と。右もおもふ所なきにあらすやと
て。又不レ及ニ勝負。

廿番

左持

中將

むかしよりいく情をかうつしみるいつもの空にいつも澄月

右

藤大納言典侍

いく度か此世ならても馴みけむ我こそしらね月はしるらん
いく情をかうつしみる。いつものそらにいつもすむ月。
心おかしくも。ことはめつらしく侍を。我こそしらね月
はしるらんと侍る。心ことはことによろしくみ侍は。勝
負いつれと申かたし。

廿一番

左持

大納言

思ひく心々になかむるを月もさまゝいかにみるらん

右

俊光卿

月きよく風おさまれる此秋や光ますへきしきしまの道
右風情あるさまに見え侍るを。祝言のことはも。ともに
賞翫すへきさまに侍は。勝負可レ爲ニ同前。

廿二番

左持

宣旨

山ふかみ獨詠るよはの月みやこのかけもかくやかなしき

右

左衛門督

あれはてゝよもき葎のしけき宿にさはらぬ月の影そさし入
閑居の月にむかへる心。いづれもわきかたく侍るへし。

廿三番

左持

内侍

入かたを都のそらとなかめつゝなみたををくるよその月影

右

新宰相

詠めをかむ世になき身とも成もせば月たに我を思ひいつやと

左上句心あるさまに見え侍るを。泪ををくると侍や。お

ちるぬさまに侍らん。右思所有にやと哀に侍を。公宴に

はかやうの風情思慮あるへきことにこそ侍めれ。なす

らへて可_レ爲_レ持。

廿四番

左

少兵衛督

はるくくと都の空をなかめへたてたひとしりて月も悲しき

右勝

定成朝臣

あすは又いかなるさとの月かみむ今夜は波のうへになかめつ

なかめへたてたひとしりてやと侍るつゝき。すこしお

ほつかなくやとて。右を勝と申へし。

右永仁五年八月十五夜歌合以百花庵宗固本按合

歌合永仁五年當座

題

作者

講師

讀師

判者_{署名}前權中納言藤原朝臣爲兼當座判之

一番

左持

春日

女房

暮かたき春日をなかみつくとよもの山邊の霞をそみる

右

秋日

中將

秋の日の影も淋しきよの色に日くらし鳴てくるゝ山本

くれかたき春の霞も秋の日のひさしき色も情をそみる

二番

左持

春月

新宰相

こゝろ社あくかれはつれ夜もすから花の陰もる月に詠て

右

秋月

中將

さもあらぬうれへもおほく色そひぬ月みる秋の物悲しさに

花の影にあくかれまさる心より秋なる月も一つにやみむ

三番

左

春風

前大納言教良女

影うすき月は軒はにみえそめて花のかさそふ春の夕かせ

右勝

秋風

前大納言典侍

ときは秋と心はかゝる山かけのあらしを松に聞そわひぬる

四番 かけ薄き軒はの月も情あれと猶山かけのまつ秋風

左持 春雲

永福門院内侍

あし引の山邊の櫻咲ぬらし霞のそこにはほふしら雲

右 秋雲

女房

うきて渡る夕の秋のむら雲につはさをかはす天津かり金

足引の山の櫻もむらくもにつはさもまかふ天つかり金

五番

左 春雨

新宰相

何となくねられぬよはに聞ふけぬ長閑にすめる春雨の音

右勝 秋雨

女房

吹さはく萩の上葉のかせませにまはらにおつる秋のむら雨

のとか成春のよよりも風ませにまはらにきかむ秋の村雨

六番

左勝 春烟

爲相朝臣

立かくす遠の霞の一むらにけふりあまらぬ里の朝あけ

右 秋煙

少兵衛督

難波濁けふりは霧に立そひて曇らぬ月も影くもりつゝ

なにはかた月くもるよの霧よりもおなし烟も里の一むら

七番

左持 春曉

少兵衛督

みえわかすそれかあらぬか歸る鴈明行かねに聲もまかひて

右 秋曉

新宰相

軒ちかき萩のうははに音つれて風はた寒き明かたの月

かねの聲風はた寒き月影もおなし程なる明方の空

八番

左持 春朝

中 將

夜の雨の名残露けき花の色の常より増るけきのあき明

右 秋朝

前大納言典侍

色々に千草このはそみたれける野分あれける庭の朝あけ

夜の雨の名残の花も色々の千草の庭もめかれやはする

九番

左持 春夕

中 將

飛鳥のつはさのとかに見わたせは夕暮ふかくかすむ山端

右 秋夕

敦良卿女

吹したふ夕かせ寒きうき雲に鳴てそわたる鴈の一つら

のとか成鳥のつはさは見ふりしを夕の雲も立やまかはむ

十番

左持 春夜

藤大納言典侍

あけはみむ花に心はいそかれてみしかき夜はも久しと思ふ

右 秋夜

内 侍

きり／すや／鳴そめて月の色のまたき身にしむ初秋の空

花故に明るを急き月の色の身にしむよはもわきそかねぬる

十一番

左勝 夏山

内 侍

雨はるゝ外山のみねの雲間より聲ほのか成ほとゝきすかな

右 冬山

敦良卿女

み山邊やとひくる人の跡もなしいく日の雪に道やとちぬる

跡もなきいくかの雪のみちよりも山時鳥猶やまたまし

十二番

左持 夏川

敦良卿女

月清みなつも忘れてあかす哉川せすゝしき波のよるゝ

右 冬川

内 侍

ふゆ寒み氷にけらし谷川の岩間にむせふ音も聞えず
月きよみ涼しきよはも冬寒み氷るもおなしせゝの川波
十三番

左持 夏野

新宰相

のへ遠き草のしけみに露見えて秋をむかへぬ暮もすゝしき

右 冬野

内 侍

かれわたるのほらはおなし色にして薄雪さむし浅ちふの上
野へ遠き露の夕もうす雪のかれのほらも心ありけり
十四番

左勝 夏岡

女 房

なつの日にすゝみすらしも旅人のあまた立よる岡の松かけ
右 冬岡

中 將

をかのへや松はの雪はうすけれと見やはしるき遠近の山
をちこちの薄雪よりも旅人のあまた立よるをかの松影
十五番

左勝 夏杜

女 房

夕立のはれ行雲の追風にまた雨おつるもりの下かけ
右 冬杜

少兵衛督

霜雪もはらはぬまゝに打はへてかはく時なきもりの下露
しも雪の露よりも猶追風にまた雨おつるもりの下かけ
十六番

左 夏浦

少兵衛督

すまの浦や磯邊の松もしほれつゝ波よせまざる五月雨の頃
右勝 冬浦

爲相朝臣

吹きゆる音のみ冬のうら風に時雨も雪もみえぬ波かな

十七番

左勝 夏江

藤大納言典侍

夏そしらぬみなそこすみて月影のみかく玉江の波のよるゝゝ

右 冬江

新宰相

難波江や波にたまらず消る雪に苜のかれはもかくれさり鳧
月みかく玉江の波に心よせて枯葉の苜はみる人やなき
十八番

左 夏里

教良卿女

山里の松の木かけの夕すゝみ夏はかくても暮しぬへきを
右勝 冬里

女 房

昨日けふ外山の雪け風あれて寒く時雨るゝしからきの里
風あるゝ外山の雪けしくるらむ景色そこに見る心ちする
十九番

左勝 夏池

中 將

しけりあふ汀の木立ものふりてみとり涼しき庭の池水
右 冬池

教良卿女

へたてゝも猶戀しきは九重のいけのみきはの雪のおもかけ
とりゝに面影浮ふ池水に木たちふりぬる影や涼しき
二十番

左 夏庭

爲相朝臣

いけ水のにこらぬ色を猶そめて庭なる木々もしける頃かな
右勝 冬庭

藤大納言典侍

夕かせにかれたつ薄うちなひき霰ふりすさふ庭の淋しさ
池水をみとりにそむる木々よりもすゝきなひきて霰降庭
二十一番

左 戀鐘

爲相朝臣

つらくなる入相の聲も哀也聞て嬉しき時もありしを

右勝 雜鐘

女 房

大かたの夕にこもる世の色の哀ににほふいりあひのかね

廿二番

左 戀玉

藤大納言典侍

たきつせの岩に玉なす波よりも我心社なをくたくらめ

右勝 雜玉

爲相朝臣

もくつにも光やそはん和歌の浦やかひ有けふの玉にましりて

廿三番

左持 戀衣

中 將

あはぬよをかきねてしほる衣手はひる時もなしほす人もなし

右 雜衣

藤大納言典侍

諸人の衣の色にしられけりとき折ふしのかはるすかたは

廿四番

左持 戀枕

爲相朝臣

いかにねて夢をもまたん馴しよのおもかけ遠き床の枕に

右 雜枕

藤大納言典侍

苔の上草の枕にあかずよを風そ音つれ月そともなふ

廿五番

左 戀筵

少兵衛督

打ふして今宵やもしときむしろに淋しく明すよはそ積れる

右勝 雜筵

内 侍

これも又ゆへ社あらめよな／＼に我ふしなるゝ床の小筵

打ふすと猶さりけなることはよりなるゝを思ふ床のさ筵

廿六番

左持 戀鏡

新宰相

朝夕にみなれし物をますかゝみ誰に心をうつしはつらむ

右 雜鏡

少兵衛督

みすしらぬ昔をうつせまますかゝみ變りのみ行よのゆかしきに

見なれしも昔忍ふもますかゝみうつす心はひとつ成覽

廿七番

左勝 戀燈

中 將

明ぬるか又こよひもと思ふより泪にうかふともし火のかけ

右 雜燈

教良卿女

かすかなる鐘のひゞきもきこゆ也ひとりよふくる燈火の本

思ひやる哀もふかくうかふ覽泪のうちのともし火の影

廿八番

左 戀書

少兵衛督

玉札をみるしもうかふ涙かな有しにもにぬ人のことのは

右勝 雜書

權大納言典侍

あとはかりけにもちとせのかたみ哉ぬしは昔になれる玉章

ありてよにかはらむよりも哀也昔の跡としのふ玉つき

廿九番

左持 戀船

女 房

浦かくれ入江にすつるわれふれのわふそくたけて人は戀しき

右 雜舟

内 侍

身を海の海士の小ふねのいつとなく哀うきても世を渡る哉

三十番 江にすつるわれたる船も身を海にうきて渡るも哀とみる

左 戀車

内 侍

戀しやのやるかたそなき小車のうしつらしとは思ひとれ共

右 雜車

新 宰相

をくるまの行かふ音のしけき哉たか何ゆへにこそく成らん

音繁く聞らんよりも小車のやるかたなきは猶深からし

右三十番歌合以犬山候取(所懸)藏後伏見院震翰按

新名所繪歌合 正安三年

題

櫻木里 春

泉水森 夏

岩波里 秋

打越濱 冬

藤波里 春

河邊里 夏

岡本里 秋

關河 冬

三津湊 戀

大沼橋 雜秋

歌人

左

神祇權大副大中臣朝臣定忠

太神宮禰宜荒木田神主成言

權少僧都行寶

權禰宜荒木田神主成宗

權禰宜荒木田神主氏行

權禰宜荒木田神主經顯

權禰宜荒木田神主定顯

大法師尊親

右

太神宮一禰宜荒木田神主尙良

權禰宜荒木田神主延行

法眼能圓

權禰宜荒木田神主長興

大法師良玄

大法師圓親

大法師良譽

大法師良惠

講師

讀師 判者

前權大納言爲世卿

一番 櫻木里寮

左持

めにかけてちかつくまゝにしら雲の花になり行櫻木のさと

右

太神宮一禰宜荒木田神主尙良

あさくまや神代より咲花をみて心そとまるさくら木のさと

左歌しら雲をめてかけて花と見なす心。つねの風情に

や侍らむ。右歌神代よりさく花をみてなといへる。力あるさまに侍れとも。一番左に優して。暫可爲持。

二番

左勝

尾上よりふもとをかけて櫻木の名にあふさと、匂ふ春かせ

右

權禰宜荒木田神主延行

さくら木を梢にみせて咲にけり花もや里の名をはしるらむ

右さくら木を梢にみせて咲に梟といへる。事あたらしきやうにや侍らん。左名におふさと。難なし。爲勝。

三番

左

權少僧都行實

春と言は月の光も花の香もおほろににほふ櫻木のさと

右勝

法眼能圓

はるか成雲のよそまで匂ひきて花の名しるさくら木の里

左第三句。花のかにと侍らは。今少理りかなひてやきこえ侍らん。右花の名しるき櫻木のさと。いひしりて侍

り。尤爲勝。

四番

左

權禰宜荒木田神主成宗

櫻木の名にあふオイさとのほる風におらぬ袂も花の香そする

右勝

權禰宜荒木田神主長興

花の色をかすみこめてもさくらきの里とはしるし匂ふ春風

左下句あまりにきふふるしたる心地し侍れとも。只今

たしかにおほえ侍らす。右さしたる「とかなきにつきて又爲勝」。

五番

左勝

權禰宜荒木田神主氏行

さと人もたのめし春とさくら木の花さく頃やわれを侍らむ

右

大法師良玄

咲つゝく花より外はさくら木の里には雲もかゝらさりけり

左我を侍らんといへる。あまりに心やりてきこえ侍れ

とも。右下句よはしくはへるや。左いさゝかまさると申へし。

六番

左勝

權禰宜荒木田神主經顯

をのつから交る梢も埋れてさなから花のさくら木のさと

右

大法師圓親

さけはかつまかはぬ花の梢より名にあらはるゝ櫻きの里

右咲はかつまかはぬといへる。つゝきよろしからすや侍らん。左の歌いひしれり。尤可勝。

七番

左

權禰宜荒木田神主定顯

春と言はよそにもしるく櫻木の花社里の名にたてりけれ

右持

大法師良譽

尋ね行みちはまよはすさく花の盛りにみゆるさくら木の里
左終句不ニ庶幾一駄にや。右も上句なとはこゝろゆかす
侍れとも。名にたてりといへるよりは。すこし勝るへく
や。

八番

左持

大法師尊親

櫻木の里になかるゝあさくまの河せも花のかゝみとそみる

右

大法師良惠

さとの名を秋まで花にさくら木とあたにたのむの鴈や行蘭
兩首ともに。心詞不レ宜哉。

九番

左

定忠

泉水杜夏

手に結ふしみつのもりに夏なしとおもひもはてぬ郭公哉

右持

尙良

五十鈴川なかれ涼しく成にけり清水のもりにかよふ秋かせ
左歌つゝき聞よからすや侍らむ。右歌指難なし。爲レ勝。

十番

左持

成言

影きよきしみつのもりのしたはれて鳴ねすゝしき時鳥哉

右

延行

影をたにむすひもとめぬほとゝきす清水の杜に鳴過ぬ也
兩方のほとゝきす。いつれもよろしからす聞ゆ。

十一番

左持

行實

名にめてゝすゝみにきつるかひあれや清水の杜の松の下風

右

能圓

ほとゝきすしみつの杜のすきかてに鳴や梢もすゝしかる覽
左初五文字。遍昭かをみなへしの歌にはをとりて。無ニ
其詮一歟。右なくや梢もよろしからす。猶爲レ持。

十二番

左

成宗

風かよふ清水の杜の松かけに聲もすゝしきほとゝきす哉

右持

長興

待人の心くみてや時鳥しみつのもりにはつねなくらむ
左歌こすえはるかになと社申ならひて侍れ。松かけの
ほとゝきす。あまりにさかりてや侍らん。右第二句不ニ
庶幾一侍れとも。松かけのほとゝきすよりは可レ爲レ勝。

十三番

左持

氏行

初音鳴しみつの杜のほとゝきすぬれてもきかんむら雨の空

右

良玄

夏山のしけみを出てほとゝきす清水の杜に聲もらす也
ぬれてもきかんむら雨の空。しみつのもりにこゑもら
すなり。同等歟。

十四番

左

經顯

手に結ふ清水の杜のほとゝきすあかねはをのか鳴音のみかは

右持

圓親

ほとゝきすあかすも過る初音かなむすふ清水のもりの下陰
兩首の清水。しづくにこるといへる本歌を思へるに
とりて。右はよろしく侍り。尤可レ爲レ勝。

十五番

左持

定顯

夕涼み清水の杜の郭公かけを手にもむすひなれけり

良譽

神もきけしみつのもりのほととぎす鳴夕暮のこゑそ涼しき

左子規かけを手にむすひなれむ事いか。右神まで引
かけ奉らすとも侍りなん。なすらへて爲持。

十六番

左

尊親

かたらふも猶こそあかれほととぎす結ぶ清水のもりの下影

右勝

良惠

山の井の清水の杜のほととぎすあかぬ手向と神も聞らし
左上の匂いひおほせすや。右時鳥神に手向て。可爲勝。

十七番

左勝

定忠

秋風も川をとたかくふくる夜に月かけさゆるいばなみの里

右

尙良

ぬれて社ひかりもまされ行あきの月に宿かせいはなみの里
右ぬれてこそといひ出たる。聞よからす。左岩なみ尤立
まさり侍るへし。

十八番

左勝

成言

なかめつゝねぬよの月の影ふけて川をとたかしは波の里

右

延行

いく秋の月やとりきて岩波の立よるさとに名をもとむらん
左歌きゝなれては侍れとも。歌からよろしく侍へし。右

第二句きゝよからすや。

十九番

左持

行實

風わたる秋の夕の柳かけみたれてなひくいばなみの里

右

能圓

さと人も哀しるらむ秋かせやいは波たかく音にたつ也
左清水なかるゝ柳かけなとは。よみ侍れとも。秋の夕の
柳かけさて。みたれてなひくなど侍れは。ひとすちには
るの氣色にやとおほえ侍り。右歌さと人とをきて。いは
波たかくとは侍れとも。猶題の名所かすかにや侍らむ。
仍爲持。

廿番

左

成宗

月すめはうちぬる程のよはもなし川音たかきいはなみの里

右勝

長興

月も猶すみ社まされ宮川や清きなかれの岩波のさと
おなしいは波の里。きよきなかれは。月もすみまさりて
侍るにや。

廿一番

左持

氏行

松にふく秋の川かせ音さえて月すみわたる岩なみのさと

右

良玄

松風に川音たつる岩波のさともしやかにすめる月かな
左右まつかせ。いつれも吹まさらす侍るへし。

廿二番

左持

經顯

左歌きゝなれては侍れとも。歌からよろしく侍へし。右

影やとる月も夜寒の秋ふけて河をとさひし岩波のさと

右

圓 親

里人も月にねぬ夜や更ぬらん川音すめる瀬々のいは波

右題のよみやう十九番の右におなし。左又。あき更てと

いへる詞。このみよむへからさるよし。たしか成庭訓侍
るへき。なすらへて爲_レ持。

廿三番

左勝

定 顯

いねかねてに月みよとてや秋風に聲うちそふる岩なみの里

右

良 譽

秋もはや更ゆく月のかけすみて河かせさむしいは波のさと

右無_二指難_一歟。右秋ふけて同前。左勝侍るへし。

廿四番

左持

尊 親

すむ月の光もきよし宮川のなかれにつくい波のさと

右

良 惠

すむ月の影より水の秋たちて河音すしいはなみのさと

左右無_二勝劣_一歟。

廿五番

左勝

定 忠

おきつ波あらいそかけてうちこしのはまかせとぞ千鳥鳴也

右

尙 良

あまのすむ友とやはみる波あらきうちこしの濱の冬のよの月

右なみあらきうちこしのあまの友とみるらん冬の月。

すさましくや侍らん。左とかなくいひくたして侍り。爲_レ勝。

廿六番

左

成 言

ときつ風しほひをとをみ月さえて波も音せぬうちこしの濱

右勝

延 行

いせしまや波のうちこしに月さえて汐風あらき冬の濱おき

左の歌。いひおほせすや侍るうへに。秋の歌にや。右な
みのうちこし。耳にたち侍れとも。冬の歌。よて爲_レ勝。

廿七番

左持

行 寶

うちこしの濱松かえの風をいたみ月にしほくむ冬のあま

右

能 圓

うちこしの濱松さえて行くもの遠き汐やもさそしくるらむ

左第一二句不_二庶幾_一歟。右第二句も。たはまかせなと
侍へきにや。爲_レ持。

廿八番

左

成 宗

打こしの波にしくはなくさよ千鳥はま風寒み友したふなり

右勝

長 興

うちこしの濱松かえは波かけて雪けにさゆるおきつしほ風

波にしくはなくといへるよりは。雪けにさゆるおきつし
ほかせ。吹まさると申へし。

廿九番

左持

氏 行

うちこしの濱風あれてよる波にやとりさためぬ冬のよの月

右

良 玄

氷る夜の汐かせさむみ打こしの濱の眞砂地月そさえ行

左右おなし科歟。

卅番

左持

經顯

霜きゆる汀のまさこきは見えて跡有なみのうちこしの濱

右

圓親

おきつ波松のしつえを打こしのあらきはまへも氷る沙かせ

左第三句。右終句。いかゝと覺え侍る。又爲持。

卅一番

左持

定顯

風はやみ波うちこしの濱あれてしはなく千鳥かたも定めす

右

良譽

入海の沙やくあまもさむからし松かせ氷る打こしのはま

此番猶難決。

卅二番

左勝

尊親

月影も沙かせなからさゆる夜にこほらぬ波のうちこしの濱

右

良惠

あともかつ波うちこしの濱千鳥聲さへよそに浦つたふなり

右初五文字こゝろゆかさるにや侍らん。左さゆる夜に

とて。こほらぬとつゝきて侍れは。ことたかひて聞ゆ。

さゆるよもとて。氷らぬと侍らは。沙海のこほらぬ理り

きこえ侍るへし。然れとも歌から。左可勝歟。

卅三番

左持

定忠

行春をとめかねては萬代を松にそちきる藤なみの里

右

尙良

契りをく春はきて見ん松かえのちとせにかゝるふち波の里

左歌行春をとめて社。萬代もちきはやとも侍るへ

きに。とめかねて萬代をちきるといへる。かなひても

きこえずや。右ちとせにかゝるといへる。心もゆかす。

爲持。

卅四番

左

成言

春深きみまきのをのゝ浅ちふに松はらこめてかゝるふち波

右勝

延行

此里に幾ちよかけて藤波のはななく松もはるをへぬらん

左あさちふにとて。松はらこめてかゝる藤なみと侍る。

いかゝと聞ゆ。里もたしかならずや侍らん。右も題の名

所れいのかすかに侍れとも。さとなきよりは勝侍るへ

し。

卅五番

左

行寶

宮川のあたりははるの色なれと松にはへたるふちなみの里

右勝

能圓

宮河やはる行水のしからみを岩にかけたるふちなみの里

左松にはへたるといへる詞。近代好よむ言はにや。不

庶幾侍り。右岩にかけたる藤波のさと。さもやときこ

え侍るを。かけたるのたるの字こそ。いさゝか所存侍り

けれ。かゝれるなと侍らは。優にも侍りなまし。いかさ

まにも。右勝侍るへし。

卅六番

左持

成宗

里人やちとせをかけてちきるらむ松に花さく池の藤なみ
右 長 興

いく千代を松に契りて藤波のさとのあるしも春をへぬらむ
此兩首。左は池ようなく。右はさとのあるし荒涼なり。
可爲持。

廿七番 左持 氏 行

此さとのあるしや折てかさす覽ちとせのはるをまつの藤波
右 良 玄

みとり成松にかゝれる藤なみのさともさかりに見ゆる春哉
左さとのあるし同前。右歌をさなく聞ゆ。猶爲持。

廿八番 左 經 顯

咲かゝる木々の梢もをしなへておなし名にたつふち波の里
右勝 圓 親

春ことに色そふ松の世々かけてさかりも久し藤なみのさと
おなし名にたつといへるよりは。さかりもひさしとい

へる可勝歟。
廿九番

左持 定 顯

末なく松にむかひのさとまでも咲かゝりたるきしの藤波
右 良 譽

みとりなる松はかはらぬ色みえて夏にそかゝるふち波の里
右歌夏のうたにや侍らむ。左もかつへきすかたにあら

す。爲持。
四十番

左持 尊 親

行末の春も久しきさとの名を咲てしらす松のふちなみ
右 良 惠

立歸りおりにあひたるさとの名も花にしらるゝ春の藤なみ
左右のさとの名。よろしき爲持。

四十一番 河邊里夏 左 〔定 忠〕

波をやく川への螢ゆふやみのふくれはいづる月にけたれぬ
右勝 尙 良

すむ人やくるれば窓にあつむらむ河邊の里に飛螢かな
左初五文字より終まで。麥詞不庶幾也。右社勝侍らめ。

四十二番 左 成 言

湊入の川邊のまこもこす波に里かたかけてとふはたるかな
右勝 延 行

浦ちかき河邊のさとのなひきもに入しほみせて飛ふ螢哉
左のまこもよりも。右のなひきも心ひかれ侍れは。爲

勝。
四十三番

左持 行 實

昔し思ふ川邊の里のみしか夜に花たちはなの木の間もる月
右 能 圓

五月雨に河邊のあしのうへこゆる波をかさねて沙やさす覽
左下句庶幾せられぬさまを侍る。右又里なきか。なすら

へて爲持。
四十四番

左勝

成 宗

右

長 興

さみたれにけたぬ思ひも程みえて川邊のさともゆる夏虫
水まさる川邊のさとの五月雨に入江もちかくよするふな人
右入江もちかくといへる。ちかくの詞いかとおほえ
侍る。左幾度も螢とそ有かたく侍れとも。いさゝか勝侍
れかし。

四十五番

左勝

氏 行

右

良 玄

さひしさも誰かとふへき水まさる河邊のさとの五月雨の比
雨そゝく河邊のさとの夕やみにをのれまかはすとふ螢かな
右をのれまかはすといへる。何にまかはすともきこえ
侍らぬにや。左難なきにつきて爲勝。

四十六番

左

經 顯

夕されは川邊をかけてこすしほに里も涼しく松かせそ吹
五月雨のみかさをそへてさすしほに川邊の里は船よはふ也
左松かせよりは。右のふねさしまさりて侍るへし。

右勝

圓 親

四十七番

左持

定 顯

水まさる川邊のさとの五月雨にからぬ眞菰は波そしきける
螢とふ河邊のさとの夕やみに色社みえねかほるたちはな
左のまこも。右の橋。おなしほととの事にや。

右

良 譽

四十八番

左持

尊 親

雨そゝく川邊のさとの夕やみにかけも淋しくとふ螢かな
右
かりこものしける下葉の五月雨にかはへの里は波やこゆ覽
兩方同等歟。

四十九番

左持

定 忠

染あかぬもみちや残るうき雲の時雨てかゝる岡本のさと
右
またうちもねぬ岡本のさと

右第二三句のつき。いひおほせぬさま也。左も上の句

心ゆかす。又爲持。

五十番

左持

成 言

たき波の山こしにきくしかのねにねさめ淋しきをか本の里
右
をか本のすそ田に秋のかり鳴てよふかきさとに衣うつなり
左瀧なみ耳にたち侍り。右かりの聲ころもの音。うちそ
へてようなくや。さりとては猶爲持。

五十一番

左持

行 實

もみちする秋の夕はをかものとさとの時雨にをしかなく也
右
衣うつきぬたの音も秋風のよはれはたゆむをか本の里

右

能 圓

此番また無勝劣。

五十二番

左 露

成 宗

をかもとのさとは外山の近ければ聞なれにけるさを鹿の聲

右

長 興

岡本の里をへたつる秋きりにつまをこめてやしかのなく覽

右さとの霧に妻をこむらん鹿。あまりに人ちかくや侍

らむ。左外山のしか。きゝなれて。爲_レ勝。

五十三番

左 露

氏 行

時雨つゝもみちかつちる岡本のさとも淋しくうつころも哉

右

良 玄

木の葉をは色のちくさに染かへてしくれてわたる岡本の里

さともさひしく。時雨てわたる。同じ程の事にや。

五十四番

左 持

經 顯

をか本のさともよさむに時雨つゝもみちかさねの衣うつ成

右

圓 親

秋霧のまかきのかこひひまみえてにはものらなる岡本の里

左もみちかさね。右にはものらなる。又おなし科か。

五十五番

左

定 顯

風よはるそものならに音そへて時雨ふる也をかもとの里

右 露

良 譽

夜や寒きはつ霜はらふ秋風に竹のはそよくをかもとのさと

左風よはるといへる。よろしからさるうへに。あきのし

くれとはきこえ侍らす。右はつしもはらふあき風。可

五十六番

爲_レ勝。

左

尊 親

しくれつゝ木のは色つく岡本のさたとひ過るあきのかりかね

右 露

良 惠

衣うつ音も身にしむ秋風にならのはさむきをかもとのさと

此番猶以_レ右爲_レ勝。

此間關河冬八番欠。以_二類本_一勸_レ之不知。

六十五番

左 露

定 忠

たのむへき波のたよりもかひそなきみつの湊のよその浦風

右

尙 良

夢なれやみつのみなとのうき枕なみのうつゝにとふ人もなし

右波のうつゝ聞なれすや。左みつのみなとのよそのう

ら風。心とまりてよろしく侍るへし。

六十六番

左

成 言

わか袖をみつの湊をいるふねのよするはかりに波はかけける

右 露

延 行

暮ねたゝおなし湊のかたし貝みつといひてもあはぬ名そうき

左ふね。さしたる事も侍らねは。右かたし。勝侍る

へし。

六十七番

左

行 實

長らへはみつの湊の見つとたに人はいはんあはぬ名もうし

右 露

能 圓

かひなしやみつの湊のみをつくしあた波かけて立つ名はかりは
左人にはいはいしと侍らは。さも侍りなん。いはんとて
は。事たかひて聞ゆ。左歌こゝろあるさまなり。猶可_レ爲
勝。

六十八番

左

成 宗

よそにのみ人をはみつの湊ふねうきてこかるゝ戀そくるしき

右勝

長 興

いつかさてみつの湊の萎れ芦のねになきぬらす袖ほすへき

左人をはみつのみなとふねといへるよりも。ねになき
ぬらす袖。優に侍り。爲勝。

六十九番

左持

氏 行

ほのかなるみつの湊のいさりふねいく世こかれて戀渡る覽

右

良 玄

よそにのみ人をはみつの湊江に茂れる芦のねこそなかるれ

兩首おなし科敷。

七十番

左勝

經 顯

またいつかみつの湊のうき枕夢にもむすふ契なるへき

右

圓 親

うきふしをみつの湊のあら波にみたるゝ芦のね社なかるれ

右あらなみ。おそろしくや。左うき枕。かち侍れかし。

七十一番

左持

定 顯

ほのかにも人をはみつの湊江におきふし芦のねこそなかるれ

あた人をみつのみなとによる舟の思ひこかれて行かたもなし
左右勝劣不_二分明_一。
七十二番

左勝

尊 親

しらせはやうき身にしめて思ふともみつの湊の松のゆふ風

右

良 惠

たのめしはあた波こゆる湊江にみつとはかりも名にや立南

みつのみなとの松かせ身にしむ心。勝侍るへき敷。

七十三番

大沼橋雜秋

左

定 忠

たちこむる大ぬのはしはほのみえて霧に暮行秋のをやま田

右勝

尙 良

わたらひやおほぬの橋もとたえせす秋田かりあけ治れる代は

兩首大沼橋。祝言につきて。以_レ右爲勝。

七十四番

左持

成 言

あけぬとて庵守賤やかへる覽おほぬのはしをわたるさと人

右

延 行

明わたる霧のはれまにとたえて大ぬの橋をふるす秋かせ

右ふるす秋かせ。不_二庶幾_一。左しつと里人病にや。何様に

も。此番可_レ爲勝持。

七十五番

左

行 寶

たゝわたれ春もかすみにさへられす大ぬの橋は霧深くとも

右勝

能 圓

山本はたえ間まれ成秋きりに大ぬのはしも埋れにけり
左初五文字。下知おひたしく聞ゆ。さへられすと侍る
も。ことをこのみよめるにや。若近代の歌のすかたをな
らへるにや。かた／＼不甘心歟。右たえままれなる秋
きり。たちまさりて。爲勝。

七十六番

左勝

成宗

立渡る大ぬの橋のあさきりにゆき／＼の人やみちまよふらん
右 長興

朝霧のたつや大ぬのうきはしのうきて思ひもはる／＼まそなき
兩首橋。左は猶やすらかにき／＼わたされて。勝へくや。

七十七番

左勝

氏行

うきことは大ぬの橋にたつ霧のはれぬ思ひに世をわたる哉

右

良玄

思ふこと大ぬの橋にかきつけて世を秋きりとたちわたる哉
右かきつくとはいへる。むつかしくや侍らん。左遺懷の
こゝろ有之。尤可爲勝歟。

七十八番

左勝

經顯

うき事はおほぬのはしの朝霧に猶立まよふ世をやわたらむ
右 圓親

立渡るさかひもみえず霧ふかき大ぬのはしのあきの夕くれ
左右のきり。いつれと申かたし。

七十九番

左持

定顯

きりふかき大ぬの橋のあさほらけ風こそ人はわたしそめけれ
右 良譽

八十番

左持

尊親

霧の間にくちて残れるむれ木や大ぬの橋のはしめ成けん
右 良惠

思ひさへうきて大ぬのはし／＼ら立朝霧のはる／＼まもなし
左埋木。由緒などの侍るにや。いかさまにもき／＼よから
すや。右又可勝さまにあらず。爲持。

左

右

定忠	勝二	負三	持四	尙良	勝三	負二	持四
成言	勝二	負四	持二	延行	勝四	負二	持二
行實		負四	持六	能圓	勝四		持六
成宗	勝三	角五	持一	長興	勝五	負三	持一
氏行	勝四		持五	良玄		負三	持六
經顯	勝二	負三	持四	圓親	勝三	負二	持四
定顯	勝一	負二	持六	良譽	勝二	負一	持六
尊親	勝二	負二	持五	良惠	勝二	負二	持五

右伊勢新名所繪歌合以流布印本校合

歌合 正安四年六月十一日當座

一番 夢中見戀

左持

御 製

戀しさのねてや忘るゝと思へとも又名残そふ夢のおもかけ

右

爲藤朝臣

をのつから夢としりても如何せぬ只うたゝねにみつる名残は

二番

左

權大納言局

はかなしやつれなき人もうちとけてみゆとはしらぬ夢の通ち

右勝

一條局

袖にせく涙なからの手枕におもかけかよふうたゝねのゆめ

三番

左勝

宮御方

あたにみて覺ぬる夢の面かけをうつゝの後もなをのこさはや

右

大納言局

をのつからぬるか中なる倅もみるとしもなき夢そはかなき

四番

左持

爲景朝臣

倅もしらてや戀むぬるかうちにみるを夢とて頼まさりせは

右

親教朝臣

あふとみし夢のたよりにならひてもまともむ程を猶頼まん

五番

左勝

大納言局

いさや猶契をくともたのまれすゆく末までの人のかものは

右

親教朝臣

人しれす其かねことの忘れぬやあらは逢よのたのみ成らん
六番

左

御 製

忘れしよけふやあすやとしらね共いきて命のあらむ限りは

右

權大納言局

かはり行心ならはと頼む哉つらきなからのよゝのかねこと

七番

左

宮御方

ありへはとたのむ計に契りても消なはあたの露のかものは

右

爲藤朝臣

うき身世にあらは逢よと契らすは長らへても頼まさらまし

八番

左

一條局

さためなき命のうちの契りたに猶ゆく末はしりかたのよや

右勝

爲景朝臣

さためなき命のうちはたのまれすいつはりならぬ契り成共

九番

左持

爲藤朝臣

ありし名のたつたにおしき我中をさて絶ぬとは人にしられし

右

爲景朝臣

忘らるゝうき名はそへし人しれぬ情のこして絶なましかは

十番

左持

宮御方

今は又思ひたえぬる道なれやあらはれにけるよそのせき守

右

親教朝臣

絶はつる人の契のつらきにそれしうき名は猶もかなしき

十一番

左持

大納言局

そのまゝに又もかよはぬ契にそ今はなき名と人はしるらん

右

御製

今しはし忍ひもはてぬくやしさもみしかかりける契にそしる十二番

左勝

權大納言局

今は又かけてもとはすうき名よにもらさむまでの契なり梟

右

一條局

うき名をは歎かさらまし人しれす忍ひし程にたえもはてなは

右正安四年六月十一日當座歌合以一本校合

仙洞五十番歌合乾元二年四月廿九日

題

春風

夏雨

秋露

冬雲

戀夕

作者

左

女房伏見院也

前中納言平朝臣經親

從二位藤原朝臣兼行

散位藤原朝臣爲相

右近衛權中將藤原朝臣俊兼

從一位藤原朝臣敦良女

藤大納言典侍

延政門院新大納言

永福門院小兵衛督

永福門院中將

右

前中納言藤原朝臣爲兼

左近衛權中將藤原朝臣家親

永福門院內侍

右近衛權中將藤原朝臣範春

新宰相

前權大納言藤原朝臣家雅

入道前大政大臣

從三位源親子

前權中納言藤原朝臣俊光

九條左大臣女

講師

讀者

判者衆議隱作者各被判之
前中納言爲兼卿後日書判詞

五十番歌合

一番 春風

左勝

あすやいかにけふの詠めもあらぬよの夕の花に風たちぬ也

右

女房
前中納言爲兼

さそひ來る梅や櫻の色香にて風なつかしき正月ささき

左右歌講畢。各可申其難之由被仰。雖有ニ感氣未

レ發歌。于時自ニ末座可申所存之由有ニ其沙汰。一

番左可被賞之由兩方共申之。誠猶心深姿詞難及。尤

可爲勝之由定申侍云々。

二番

左勝

かけろふのもゆる春日は長くして霞める空に風そのとき

右

前權中納言經親
家親朝臣

心とはちらぬになして吹きそふ嵐の花のなさけ添ける

左歌たけあるさまにや侍らん。右も思ふ所なきにあら

す。なそらへて可爲持のよし。定られ侍き。

三番

左勝

從二位藤原朝臣兼行

薄曇霞て匂ふ花の上をちらさぬ程に過る春風

右

永福門院内侍

散しける庭の櫻を吹たてゝ木のした曇る春の夕風

爲相朝臣申云。右歌。先年爲兼卿三嶋社十首に。梢の雪

を吹たひに一曇する松の下かけとよみて侍し歌に似侍

りて。實に倅かよへるよし。兩方共に申侍て。以左爲

勝。

四番

左

散位藤原朝臣爲相

咲ぬへき山の櫻の枝ををもみ長閑にわたる二月の風

右勝

右近衛權中將藤原朝臣範春

あけ渡る霞のをちはほのかにて軒の櫻に風かほるなり

右歌尤よろし。花葉なき枝おもき。心ことはり不叶歟

之由。爲相朝臣申之。さきぬへき山の櫻とおけるうへ

は。殊不可有難歟。風情たくみなるよし申侍て。以

右爲勝。

五番

左勝

右近衛權中將藤原朝臣俊兼

かすむ空花の梢に吹なれて風ものときき春をしるらし

右

新宰相

いとすよさそひははてぬ春風の花に吹よる夕くれの色

春の空に吹なれて花の梢に風ものとききよしはむと

にやとみえ侍れと。心さしよりは。いひおほせす聞ゆる

にや。右も心あるさまに見えなから。下句是もあまれる

言葉に聞え侍れは。持と定られ侍にき。

六番

左

暮わたる霞の空は長閑にて柳によはる春のゆふ風

右勝

前權大納言家雅

ふくとなき霞の下の春風に花の香深き宿のゆふくれ

左歌暮わたるとて。末句に夕風とはてたる。歌合には可

憚歟のよし。爲相朝臣申之。依以右爲勝。

七番

左勝

藤大納言典侍

木末よりよこきる花を先たてゝ山もとわたる春の夕風

右

入道前大政大臣

匂ひをはこなたかなたにかはす共花をちらさぬ春風もかな

左歌尤有其興之由各申之。右も心有てよろしく侍る

よし。申人も侍しかとも。よこきる花を吹たてゝやまも

とわたる。猶おかしきよし申侍て。可勝勝由さためられ

侍りにき。

八番

左勝

延政門院新大納言

なをさりの風のつてにも梅かかの待とる袖に深くしむらん

右

從三位源親子

花に吹柳になひきさまの春の情は風そみせける

右歌心あるさまに聞ゆるよし。申侍しかとも。さまの

のといへるつゝき。聞よからすやと沙汰ありて。左勝侍

にき。

九番

左持

永福門院小兵衛督

緑あさき庭の柳に雨そゝき春風なひく暮そのとけき

右

さそひ来る花の匂ひも長閑にて霞にゆるき春の夕風

兩首よろしきさまなりとて。爲持。

十番

左持

永福門院中將

四方山は霞わたたりて遠方の柳にすさふ春の朝風

右

九條左大臣女

なへて世に吹共しらぬ春風を柳の糸のなひくにそしる

左右柳の心詞優なるよし申て。爲持。

十一番

左勝

女房

緑そふ庭の梢の色清み夕くれ涼し池の上の雨

右

爲兼卿

秋近き野原の草の夕かけに村雨降て風そ涼しき

庭の梢の色清み。殊に有かたくや侍らん。すへて始末の

句難及様なるよし各申て。爲勝。

十二番

左勝

經親卿

あふちる梢に雨はやゝはれて軒のあやめに残る玉水

右

家親朝臣

急雨の音は軒端にのこれ共をのれ過ぬる郭公かな

軒端にのこる。同しさまに聞え侍れと。左上句。猶たけ

あるよし各申て。勝侍にき。

十三番

左持

兼行卿

時鳥間ちかき雲に聲過て軒端に落る明方の雨

右

内侍

片岡のならの木陰に立よりて夕立過す遠の旅人
あけ方の雨とは。間ちかき雲さたかに見えかたくや
と。各申侍き。夕立すくすをちの旅人も勝かたきと申て。
持とさためられ侍き。

十四番

左

爲相朝臣

晴やらぬ日數はかねてふる雨のあすやさつきを曇りうつ覽

右勝

範春朝臣

夏草のみとりの若葉雨をうけてなひく姿はみるもすゝしき
左たくみに聞え侍を。右ここさによろしくして。秀逸の舁
也。猶可爲勝之由。各申侍にき。

十五番

左勝

俊兼朝臣

露おもき若葉の梢ひとつにて雨に木くらき夕くれの庭

右

新宰相

村雨にしはしなひける若竹の涼しき暮は秋おほえけり
若葉の竹を見て秋を思ひ出る。ことはり不叶や侍るへ
きと各申侍て。以左爲勝。

十六番

左勝

敦良卿女

涼しさをしはしそとむる夕立の名残の露の庭の草村

右

家雅卿

山のはは雲のそにて一村の梢かすめる五月雨の遠
梢かすめる五月雨のをち。おほつかなきよし各申侍し
うへ。左よろしきよしたため侍りて。勝侍にき。

十七番

左

藤大納言典侍

打なひく萩の若葉に露清み雨の朝けの庭そすゝしき
右勝

片岡の楨の村立雨過て縁もうすき夏山の色

左右共によろしくして。詞たくみなるよし各申侍き。楨
の村立雨過てみとりもうすき夏山の色。見る心地して。
猶まさるへくやと申て。爲勝。

十八番

左

新大納言

卯月添日數の程にふり初てはや五月雨と雲そかさなる

右勝

從三位親子

枝よはき若葉の竹は庭にふして雨こまかなる夏の夕くれ

左卯月添日數といひ。はや五月雨のなと侍。この程の景
氣おもへる所なきにあらねとも。右時興うか(かよイ)ひて
おし(おかしく)聞ゆ。可勝由さためられ侍き。

十九番

左勝

小兵衛督

ひとしきり早く過ぬる夕立の名残の雲に稻妻のかけ

右

俊光卿

ひとしめり雨は降つゝ夏草のみとりすゝしき夕暮の庭
名残の雲にいなつまのかけ。おかしく聞ゆるよし各申
て。かち侍りき。

廿番

左勝

中將

雲たゆる夕の雨のはれかたにかほりすゝしき軒のたち花

右

九條左大臣女

みとりこきをちの山の端晴初て雲立のほる五月雨の空
雲たちのほる五月雨。民部卿入道歌にあひにるよし。前
民部卿藤原朝臣申之侍うへ。雲たゆる夕の雨の晴方。
のきの立花にほはんほとに。優におかしきこゆると
て。勝侍にき。

廿一番 秋露

左持

女房

我もかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くたく頃

右

爲兼卿

末なひく千種の花の色を染姿をなすも秋の白露
左心詞たくみにして。隔凡俗之堺。右歌。更に及かたき
よし再三申侍しを。仰によりて持の字をつけられ侍に
き。

廿二番

左持

經親卿

ならの葉に下露つたふ音すなり岡邊のきりの深き夕暮

右

家親朝臣

色々の花ともいはし朝あけの露になかむる秋の草むら
ならの葉の露の音。きりふかき夕の景氣。よろしくきこ
ゆるを。岡邊のとは。露の音きこえん事おほつかなき
よし申人々侍にき。朝あけの露になかむるといへるも
心有さまなりとて。持と定まり侍き。

廿三番

左

兼行卿

しはしみん花も夜のまの姿にてまた風たゝぬ萩の朝露

右勝

内侍

きり渡る朝けのまかき打しめり千種にあまる露の色かな
しはしみん花もよのまのなと。いひしりて聞え侍を。下
句御製に似侍よし。各申侍て。以右爲勝。

廿四番

左持

爲相朝臣

秋はたゝ幾夜の露も袖にをけ月のやとりを外にうつさて

右

範春朝臣

霧うすきあしたの原の草の上に置渡す露の色そ清けき
左詞いひしり。心いとおかしく侍を。右姿詞たくみにし
て。殊にありかたきさまなり。ともに秀逸のよし各申て
爲持。

廿五番

左

俊兼朝臣

色染る夜寒の露の行衛より秋を草木にうつしてそみる

右勝

新宰相

置渡す露の光も月の色も長閑に更る浅茅生の庭
行衛よりといへる詞。すこしをちぬさまなるよし各
申。のとかにふくる浅茅生の庭。勝へきよし申侍き。

廿六番

左勝

從一位藤原朝臣女

夜すからの野分の跡はしほれはてゝ草の葉白き露の朝あけ

右

家雅卿

花ばまた咲も初ぬを萩か枝に露のみ秋と置まざるらん
左右共に無難申事之由各申て。草の葉白き露の
朝あけ。猶宜しき由申て。勝侍き。

廿七番

左持

藤大納言典侍

おれかへり千種吹しほる風の前に置あえぬ露の亂れてそ散

右

入道相國

秋は猶草はにからぬ袖の露を我泪にそむすひそめぬる

先イ

兩首共に無難のよし。各爲三宜歌之由一同申之爲持。

廿八番

左持

新大納言

村雨の跡吹拂ふ秋風に草葉みたれて露そあらそふ

右

從三位親子

秋風もまた吹たゝぬ朝あけの草葉しつけき露の上かな

草葉しつけき露。同類侍よし各申て。露そあらそふも。

なみた時雨などのたくひもなくては。何に争ふへきそ

と申て。持とさためられ侍き。

廿九番

左

小兵衛督

光すむ月にみかける草の露よるさへ玉をかさる庭かな

右勝

俊光卿

物思ふといはぬ計そ露かゝる草木も秋の夕くれの色

左いひおほせすきこゆるよしきた侍るうへ。右心ある

さまに侍れは。勝へきよしきたためられ侍き。

卅番

左持

中將

うすきりのはるゝ朝氣の庭みれは草にあまれる秋の白露

右

九條左大臣女

しほれふす枝吹返す秋風にとまらす落る萩の上露

うすきりのはるゝあさけ。草にあまれる露見る心地しておかしく侍を。枝吹返す秋風にとまらぬ露も亦捨かたしとて。持とさためられ侍き。

卅一番

左勝

女房

山嵐のすきの葉拂ふ曙に村々なひく雪のしら雲

右

爲兼卿

みねの雪を村々雲に吹交て渡る嵐はかたもさためす

左歌上下相叶心詞尤稱美可謂秀逸之由一同申之。

雪の白雲。猶題の心おほつかなきにや。右歌難負之由。

雖有御氣色。雪の白雲ことに難有の由各申て。右歌

難及之由申上畢。

卅二番

左持

經親卿

あけしらむそなたをみれは山の端の横雲計時雨てそ行

右

家親朝臣

しくるゝか遠の梢の夕暮にしはしかゝれる浮雲の色

左右同科之由。兩方共に申。仍爲持。

卅三番

左持

兼行卿

さえかへる空には風の音もせてしつかにこほる雲の色かな

右

内侍

けふも亦外山の嵐さえくれて雲の雪氣の日數ふる頃

兩首寒雲。いつれとわきかたきよし。各申之。

卅四番

左持

爲相朝臣

霰ちり風にあれつる空の色の雪に成ては雲そしつまる

右 範春朝臣

竹はらふ嵐の音はけしくて雪けにむかふ雲そこほれる
左右、亦いづれも思ひ入たる風情。とりくにおかしく
侍よし各申て。爲持。

廿五番

左持 俊兼朝臣

吹まよふ嵐のつてにうかれ來てあらくしくるゝ雲の一村

右 新宰相

遠方にかきなる雲の色迄もさむくあれたるけふの空かな
兩首共に無殊事。可爲持之由。一同申之。

廿六番

左持 教良卿〔女〕

一村の時雨の雲は浮過て日影そみゆる遠の山もと

右 〔家雅卿〕

浮て行雲のたえく影みえてしくるゝ山に夕日さすなり
いづれもおなしさまにして。猶可爲持之由侍き。

廿七番

左 藤大納言典侍

ふりやらぬ雪氣の空のさえかへりこほれる雲の下に匂へる

右持 入道前大政大臣

玉葉 夕日さす峯の時雨の一むらにみきりを過る雲のかけかな

雪氣の雲の下にほへる。心おかしきよし。各申侍しか
と。みきりを過る雲のかけ。なをめつらしきよし申て勝
侍にき。

廿八番

左 新大納言

雪あられいづれか先にさそはれん雲さへわたる夕ぐれの色

右持 從三位親子

星の影雲にはつれてさゆる夜の梢の風の音そはけしき
雲にはつれてさゆる夜のなと。いひしりてよろしく聞
ゆとて。勝へきよしきためられ侍りき。

廿九番

左持 小兵衛督

雪さそふ外山の嵐はけしくて村雲さむき暮にも有かな

右 俊光卿

時雨には晴やすかりし村雲の行方なきや雪け成らん
左猶かたひく人々侍て。勝侍にき。

四十番

左持 中將

玉葉 風の音のはけしくわたる梢より村雲寒き三日月の影

右 九條左大臣女

風ふかぬ雪けの空はさえとちて雪閑なる冬の夕暮

左心詞優にして。尤よろしきよし満座褒美。右もよろし
くは侍れと。左猶可勝之由。各きためられ侍き。

四十一番 戀夕

左持 女房

たえずならん身をさへかけて悲しきはつらさを限る今の夕暮

右 爲兼朝臣

暮ことに思ひそまさる侍し頃うさ哀さにかはるいまゝて
左優艶にして尤秀歌之由。一同に申之。右も捨かたき
よし少々申人々侍しかとも。難及之由申畢。

四十二番

左

經親卿

さすかもし思ひいつやと此暮の雲の氣色を泪にそみる

右勝

家親朝臣

つくく」と詠て思ふ夕ぐれの空たにせめて哀をはしれ

左雖無其難。右猶まさるへくやと各申て。爲勝。

四十三番

左

兼行卿

今も見るゆふへはおなしゆふへにて待し頼みそ昔なりける

右勝

内侍

まちしより今はのはての思ひ迄難面むかふ夕ぐれの空

左御製にかゝる事侍よし。少々申之うへ。右亦優によろしとて。勝さ被定侍き。

四十四番

左

爲相朝臣

あはれわかまちし心はあらぬ世に倅計残る夕ぐれ

右勝

範春朝臣

待なれし契はよその夕ぐれにひとりかなしき入あひのかれ

左もいとよろしく侍れと。右猶優艶にして。まさるへきよし各申侍りて。爲勝。

四十五番

左

俊兼朝臣

戀くらしゆふへにむかふ心地よりあらぬ聲そ入逢のかね

右勝

新宰相

思ひいつるつらさも今は心よはしたゝ倅の夕ぐれの空
左心あるさまに侍を。心よりと侍る。すこしをきおほせ

四十六番

左勝

從一位藤原朝臣女

いく夕またぬ哀になかめたへてつれなの身やと更にしそ思

右

家雅卿

あらぬ身と今は思によしくもみし世をさそふ同し夕かせ

左戀の心深くして優におかしきよし。各申侍き。右もよろしく聞え侍れと。なを左まさるへきよしきためられ侍き。

四十七番

左勝

藤大納言典侍

わかかゝる思ひの内の幾ゆふへさもそつれなく詠たへぬる

右

入道前大政大臣

ひとかたに待もやせまし偽の憂にならはぬ夕成せは

右歌よろしくきこえ侍を。下旬なと面影ありぬへくやなど。少々申あへりしうへ。左尤優におかしく侍とて。勝に定られ侍き。

四十八番

左勝

新大納言

いかにせん雲の行方風の音まちなれしよに似たる夕を

右

從三位親子

思ひとゝむきはをみるへき此暮よくれたにはつな心よはきに

雲の行方風の音待なれしよになと。優におかしく侍を。くれたにはつな心よはきにと侍る。えんに心くるしく侍り。勝負難決よし各申侍き。

四十九番

左勝

小兵衛督

ひと方にはすもなれや思絶んさのみ空しき暮はなめし

右

俊光卿

今更に何歎くらむ偽はもとよりなれし夕ぐれの空

左よろしく聞ゆるよし申侍しうへ。右の戀心。無念に聞

ゆるよし各申て。尤左勝へきよしさため侍き。

五十番

左勝

中將

うれしとも一方にやはなめらるゝ待夜にむかふ夕暮の空

右

九條左大臣女

いさやけさ別つるまの情かと暮行空を待そやすらふ

右も風情おかしくして。いとよろしく侍れと。左猶心め

つらしく。うにきこゆとて。勝へきよし一同に申侍

き。

以ニ爲秀卿筆跡之本ニ寫レ之則按合。但端本落帳多歟。重而可レ考レ之。

亦云。乾元貳年歟。

此本令ニ書寫ニ而十ヶ年之後。以ニ類本ニ按ニ合之。於ニ落帳ニ五六書ニ入之。并相違在之所々腋加レ筆畢。

延寶貳卯月朔日

亦同六年水無月八日書寫畢。

右仙洞五十番歌合以百花庵宗固本按合

歌合乾元二年五月四日

題

夏夜

絶戀

庭松

作者

左

女房 諱源仁伏見院

右中將範春 諱胤仁後伏見院

前大納言家雅 花山院庶流右大將兵親大進朝雲子

前中納言俊光

左中將家親

右中將俊兼

九條左大臣女

前大納言教良女

少兵衛督

中將

右

藤大納言典侍 從三位爲子大納言爲世女

前中納言爲兼

前民部卿兼行

永福門院內侍

新宰相

前中納言經親

前右兵衛督爲相

延政門院新大納言

春宮權亮清雅

從三位親子

講師

講師

判者

衆議 爲作者各判之爲相朝臣後書詞

一番

夏夜

左勝

女房

ふけぬるかくらき砌の水のをとに枕涼しきうたゝれの床

右

藤大納言典侍

まかひつる螢も星も影きえてくまなき月のさしのほる空
左歌委さはやかに詞めつらしく。古集の心も通ひて難
レ及之由。満座一同申レ之。右歌も。景氣見る心地して。艶
に侍とも。左にはをよふへからさるよし。各定申畢。

二番

左勝

範春朝臣

草深き籬の露に月をみて秋の心そかねておほゆる

右

前中納言爲兼

月影はまた更ぬともみえなくにみしかき夜半は鳥鳴ぬ也
右歌躰もふるめかしう。題の心もことに宜しくきこえ
侍るを。左歌籬の露に月をみて。すゑの秋も面影うかひ
侍る程は。猶無ニ比類。由定め申侍き。

三番

左勝

前大納言家雅

風の音はくらき木すゑに聞えつゝ雲深き夜の五月雨の空

右

前民部卿兼行

かけ清き月をしやとすふけかたの夜の袂は夏としもなし
左歌雲深くふりしつまり侍らむ雨に。風の音はきこえ
かたくやと人々申侍しかとも。風雨たよりあることに
侍れは。深き難にはあらず。右歌月をしやとすと侍。や
すらかならぬ上に。第三句もいひおほせぬよし被ニ仰出
之。猶以レ左爲レ勝。

四番

左持

前中納言俊光

はしちかみ涼みかてらのうたゝねにまとりみあへす明る東雲

右

永福門院内侍

郭公今もやなくと雲くらきあま夜の空を猶詠めつゝ
左歌。無ニ殊難。右又有其心。可レ爲レ持之由被レ定。

五番

左

家親朝臣

折しもある簷のたち花うちかほりくらき枕に村雨の聲

右勝

新宰相

晴そむる月にそみゆる五月雨の名残の軒に落る玉水
左歌。有ニ同類。上。うちかほり不レ宜歟。右歌。不ニ停滯。
仍被レ付ニ勝字。畢。

六番

左

俊兼朝臣

月清み所々にすゝみしてしつまりやらぬ夜半の里人

右勝

前中納言經親

明かたのとこを涼しみ月もはや光りも薄く空に残れる
左歌御製中にかゝる事侍にこそ。第三句も不レ宜由各申
之。右歌すゝしみのこと葉不ニ落居。よし侍しかとも。左
は猶依レ有ニ難。以レ右爲レ勝。

七番

左

九條左大臣女

風になひく軒のあやめのかけるひて袖に涼しき宵のまの月
〔本ノマ〕
右勝 爲相朝臣

ふけうつる氣色涼しき風立て袖からくなるうたゝねの床
左は初句并三句共爲ニ西行詞。可レ爲レ難歟之由各申レ之。
仍無ニ左右。右勝之由被レ定。其躰輕忽非レ可レ勝哉。

八番

左勝

前大納言教良女

草村の露の光りもきよくみえてうたゝね涼し夏の夜の月

右

延政門院新大納言

さ月やみ月なき比はみしか夜の更行ほともしられさりけり

右もことなる事なく侍れと。左草村の露はまことに光

あるさまに侍れは。可レ勝よし定申畢。

九番

左持

少兵衛督

すきかてのなきけにやとふ郭公ひとりなむる夜半の心を

右

清雅朝臣

またれつる月は軒端に影さして水鶏をとする宿そさひしき

左右之間。優秀難レ定之由各申レ之。

十番

左勝

中 將

月もなきあま夜の空の明かたに螢のかけそ簷にほのめく

右

從三位親子

みしかさようたゝねなからみる月のよひと思ふに鐘の聞ゆる

左歌心詞優美にして初終とゝこほり侍らす。秀逸の由

満座申レ之。右又いひ知て興あるさまに侍れとも。左猶

艶に侍は。可レ爲レ勝之由定侍き。

十一番

左勝

中 將

思ひ絶し人の行衛よ今更にあはれになりて戀増る頃

右

從三位親子

うきやそふ思ひやすさむ人心おなし我身をあらすなしぬる

右歌めつらしき牀にて侍を。聊おほつかなき所や侍覽。

左は心ふかくてありかたきよし各申て爲レ勝。

十二番

左持

少兵衛督

今更に誰にいひてかなくさまむかひなきはての人の心を

右

清雅朝臣

たえてみるわか命をそ恨へきかはるはよゝの契と思へは

兩首雖「實一決」相同之由一同申レ之。

十三番

左勝

教良卿女

契たえみし世はあらすなるはてに残る我身をいかにいとはん

右

新大納言

うかりきな契り空しくふけしよゝ思ひ出るも思ひてそなき

右も巧なるやうには侍と。左は残るわか身をいかにい

とはんといへる心。めつらしく侍とて。以レ左爲レ勝。

十四番

左

九條左大臣(女)

定なき世のことはりにいつまでといひし契よけにそ絶ぬる

右勝

爲相朝臣

わすられし後は我さへいとふ身のたか爲ならぬ同し世そうき

左歌世のことはりまでおもひ入たる姿に侍るを。いか

に侍にか。右歌勝字を付られ侍にき。

十五番

左勝

俊兼朝臣

よしさらはわか哀をも殘さしと思ひなりしも悲しさそそふ

右

經親卿

おもかけの心にそはぬ時そなきみしは昔に人のなれとも
右歌人のなれともといひはてたる程。いかにそやきこ
ゆるよし各申_レ之。左歌はなにとなく心ふかきやうに侍
れは。可_レ勝のよし侍しにや。

十六番

左

家親朝臣

我恨み人のつらさはなきになりて哀れみなれし世に返らはや

右勝

新宰相

其まゝになを戀やまぬ心をはつれなしとこそきは思はめ
第三句なきになして。末句はかへきはやとそあらまほ
しきよし。御氣色有しうへは。以_レ右爲_レ勝なり。

十七番

左持

俊光卿

盡もせぬ歎きはかりやありしよの人の契の名残成覽

右

内侍

思ひはて忘れもすへき年月のあはれな今に捨そ兼ぬる
左右共に思所有て聞ゆるよし沙汰侍しにや。

十八番

左持

家雅卿

なにかそのむかしの名殘心なき雲風にたにうき色そたつ

右

兼行卿

ともすれはもとの哀にかへる哉忘れしきはのうさは忘れて
是又いつれもいひしれるさまにて。勝劣なきよし各申
て。爲_レ持。

十九番

左持

範春朝臣

折々のわかわひはてし心をは人もやさすか思ひ出らん
右 爲兼卿

兩舌も頼む名殘のありしよしたえはてぬれはこれも戀しき
左歌 心めつらしく。姿とゝのほりてありかたうきこえ
侍るを。右殊によろしきよし。仰出されて。勝の字をつ
けられ侍しを。前大納言藤原朝臣。頻左勝よし申請るに
よりて。持と被_レ定。

廿番

左持

女房

憂にたえてあれ共人の許し顔にこひてきかれん身さへ耻し
右 藤大納言典侍

せめてさらは今一たひの契ありていはゝやつもる戀も恨も
左歌 古來秀歌なと多_レくきこゆるたくひも。かやうに
及かたき所はありかたくや侍らんと。心肝に銘て。是非
を申におよはす侍し程に。右歌妖艶殊勝のよし。有_二御
氣色。持に成侍しにこそ。

廿一番

左持

女房

夕昏の松に吹立山風に軒端くもらぬ村雨の聲
右 藤大納言典侍

風たにも軒端の松に聲やみてゆふへのときき山陰の庭
のきはくもらぬ村雨の聲。時興もよほして景氣おもし
ろう侍を。右又すてかたきよし被_二仰出_一て。持になされ
侍き。

廿二番

左持

範春朝臣

雨の中にしほれてたてる庭の面の松の姿をみればさひしも

右

爲兼卿

年經てもかはらぬ色そなつかしき君住宿の簷の松か枝

左は古き姿をやすらかにいひくたされて。うるはしき歌の跡にやと。あらまほしうきこえ侍るを。右歌祝言によそへて。思所も侍るにこそとさたありて。又持に定らる。

廿三番

左持

家雅卿

暮かゝるゆふへの庭に吹そめて入相つく松かせのこゑ

右

兼行卿

軒近く折々わたる風の音をふらぬ時雨と松に聞かな左歌宜を入相つく(ひく歟)と侍らは。猶心たしかにきよくや侍らんと申侍しかとも。ふかき難にあらず。右又心あるうへは。よろしき持にて侍へきよし定申畢。

廿四番

左

俊光卿

雨はれぬ木すゑの空は雲とちて夕暮淋し庭の松風

右持

内侍

吹ひく山の嵐のすゑうけて軒端にさはく夕暮の松左歌。無殊事。但閑てといふ詞近日満耳之。不庶幾之由有_ニ其沙汰。右歌も何を請てといふ詞。又當時常出來之旨雖_レ申_レ之。可_レ爲_レ勝被_レ定。

廿五番

左持

家親朝臣

君すめは猶も幾世の宿の庭に木たちふりぬる松の一本

右

新宰相

聞侘ぬゆふへ淋しき山里の軒端にひく松風のをと左歌又御製中に此下句有_ニ同類之由有_ニ沙汰。復祝言被_レ爲_レ持畢。

廿六番

左持

俊兼朝臣

さひしきの心の友と成にけりなる、軒端の松の一もと

右

經親卿

庭遠み池水きよくすむやとの軒にこたかき松そふりぬる心の友と侍心。強無_ニ其要之由各申_レ之。右歌初句前中納言所詠也。難_レ犯之由申_レ之。又無_ニ勝負。

廿七番

左持

九條左大臣女

庭の面の一木の松を吹風にいく村雨の聲をきく覽

右

爲相朝臣

ふりぬれと猶も千とせを頼めとや軒になよはぬ宿の松か枝左歌いく村雨の聲をきくらん。めつらしきよし申侍しを。右歌例祝言とて持になり侍き。近俗之跡後見見苦侍り。

廿八番

左持

教良卿女

庭の面の松の下陰暮過て梢はけしき山下風のかせ

右

新大納言

ほかはなを入日の名殘見えなから松陰くらき庭の夕くれ共によろしきよし衆議ありて。爲_レ持。

廿九番

左

少兵衛督

山ふかみ庭の日影は洩もこすこのした繁き軒の松か枝

右騎

清雅朝臣

軒近き松にあらしは吹暮て入相ひく宿そさひしき

木のしたしけきとて。また軒の松か枝と侍ほと。こと木

の下は松のことか。聊か不愍分明之由有沙汰。右歌勝

卅番

左持

中將

わけきても幾世の昔とひかねぬ松ふりしける故郷の庭

右

從三位親子

きくわひぬ軒端の松を吹しほる嵐にこもる入相のかね

左歌はあはれ幾世の宿ならんと侍ふるき歌の面影もちそひて。おもしろく幽玄に聞え侍を。あらしにこもる

入相の聲。ことに又きくすてかたきよし各申て。證判

不分明侍き。

右一掬畢。

後日以他本又一掬。

右乾元二年五月四日歌合以古寫一本校合

知念武雄
小林正直
校

昭和五年一月二十日印刷
昭和五年一月二十五日發行



發行者

東京府西巢鴨町大字巢鴨貳千五百七拾番地
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

印刷者

東京市芝區西久保明舟町九番地

松岡松三

印刷所

東京市芝區西久保明舟町九番地

太洋社第五工場

發行所

東京府西巢鴨町大字巢鴨貳千五百七拾番地

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七番電話大塚〇七一八番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7781